
仮面ライダーディカオス

マキサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディカオス

【Nコード】

N0645L

【作者名】

マキサ

【あらすじ】

この世界は、仮面ライダーが誕生していない世界であり、仮面ライダーが特撮でテレビで放送されている世界でもあった。だが、その世界が滅ぼされてしまう。…怪人達によって。

家族を殺され…友達に裏切られ…すべてに絶望しながら死んでいく少年が見たものは、少女。そして…ディケイドライダーに似た黒いドライバーと見たことのない形をしたドライバー。

今ここに誕生する新たなライダー。その名は、ディカオス。全てを滅ぼし、世界を救え…。

プロローグ

この世界は、仮面ライダーが誕生していない世界であり…仮面ライダーが特撮でテレビで放送されている世界でもあった。だが、その世界が滅ぼされてしまう。怪人達によって…。

家族も殺され、友達に裏切られ、すべてを失い、死んでいく少年が見たものは、…少女。そして…ディケイドライダーに似た黒いドライバーと見たことのない形をしたドライバー。

今ここに誕生する新たなライダー…。その名は、ディカオス。全てを滅ぼし、世界を救え…。

プロローグ（後書き）

どうもこんにちわ。初めての小説なので緊張してきます。どうぞ暇があつたら読んでください。

主人公「どうぞよろしくお願いします。…ってか、何で俺の名前書かないの？」

少女「それは、お楽しみという事じゃないかな？」

まあ、そんな感じ。今名前教えちゃ、楽しみが減るじゃない。

主人公「ふん。まあいいか。」

第1話（前書き）

さあ、第1話の始まりだ！

主人公「とうとう、俺の名前が出てくるんだなあ。」

まあ、楽しみにしていなさい。それでは第1話、スタートです。

第1話

ここはいたって普通の中学校。その中学校に通ってる1人の中学生、名前は「木利野 雅紀」。

どこからどう見ても普通の中学生だ。だが彼は、オタクでもある。あるアニメの、それは…

「ふっふふっん、ふっふふっん っと、できた！」

「おまえ、また描いてんのか？ 仮面ライダーの絵」

そう…彼は仮面ライダーのオタクなのだ。

そして、もう1人の少年の名は「暁 龍斗」。雅紀と同じ生徒でクラスメイトだ。

「まあね。それで、何か俺に用でもあるのか？」

「ああ。弁当でもどうだ？ いっしょにさあ？」

「えっ、もう昼飯の時間なのか！？」

「おまえ、昼飯の時間だって事忘れてずっとそれ描いてたのかよ…。つうかどれだけ仮面ライダーが好きなんだよおまえ？」

「別に良いじゃないか、仮面ライダーが好きで何が悪いって言うんだ？」

「いや、別に悪いって訳じゃないんだが…ってこんな話している内

に食べる時間減っちゃまうぞ！早く弁当持って屋上に行くぞ！」

「お…おいつ、待てよ龍斗！！」

そう言っつて、雅紀は龍斗を追いかけ、屋上へ行った。

屋上

「おまえっつてさあ、何でそんなに仮面ライダーが好きなんだ？」

弁当を食べている最中、龍斗が聞いてきた。

「うん、なんていうかカッコイイからかな。龍斗も見ればいいの
に。今年はWっていう仮面ライダーがやっているんだぞ？」

「いや、俺は遠慮する。仮面ライダーを見るなんて小学生の頃にやめているし。あのさあ、おまえ恥ずかしくないのか？その歳で仮面ライダーを見ている事を。」

「別に。おれは恥ずかしくないぜ？何で恥ずかしがらなきゃならぬんだ？」

「ああ・・・そうだな。学校でも仮面ライダーの絵描いているしなあ・・・。質問した俺がバカだったぜえ。」

雅紀の返事を聞いた龍斗は頭を抱えた。

「もう早く食べようぜ？食べる時間減るって言ったのおまえだよ？」

「っと、そうだな。早く食わねえと！」

龍斗が弁当を食っている間、雅紀は・・・

「（はあ来週のWはどんな話なんだろうなあ・・・。）」

そう思っていた。どんだけ仮面ライダーが好きなんだよ・・・、っと言いたい。その時だった。

「っ！！ま・・・雅紀あれ見ろよっ！！！！」

「うっん何だっ……………っ！！！！」

上空に灰色のオーロラがあったのだ……。しかもそのオーロラが何なのかを、雅紀は知っていた。

「（アレって、仮面ライダーディケイドの話に出てくるオーロラじゃないか！！？何でそんなのが現実にあるんだよっ！！）」

そう、この灰色のオーロラは仮面ライダーディケイドにたびたび出てくるオーロラなのだ…。

「おっ、おい、あのオーロラから何か出てくるぞ！？」

「（まさか…あの大量の人影は…っ！）」

そう思った瞬間、叫び声と共にそのオーロラから一斉になにかが飛び出してきた。それは…

「う…ウソだろ…っ！」

仮面ライダーの物語に出てくる怪人達だった…。

第1話（後書き）

でてきたぞお怪人。

雅紀「おいおい、どうすんだよっ！？俺達殺されるぞー！？」

まあなあ。次回でおまえ殺されるかもしれないぞ？怪人達に…たぶん。

雅紀「たぶんってなんだよっ！たぶんってっ！！」

それでは〜。

雅紀「逃げんなー！！！！！！！！！！」

少女「…いつになったら私の出番がくるのかなあ…」

第2話（前書き）

平和な世界に突如あらわれた怪人達…。雅紀達の運命は…！？

雅紀「仮面ライダーディカオス、始まります。」

第2話

「うそだろ…っ!？」

雅紀は、謎のオーロラからあらわれた怪人達を擬視していた。その沈黙を破ったのが…、

「なっ…なあ雅紀…。あつあの化け物の内の何体かは俺、知ってるぞ…。あ、アレって…」

龍斗だった。それを聞いた雅紀は…

「ああ…。アレは『仮面ライダークウガ』にでてくる怪人、『グロンギ』だ…。」

そう、あの怪人達の内、何体かは、2000年に放送された『仮面ライダークウガ』にでてくる怪人「グロンギ」だったのだ。

「他にも何かいるぞ…。あれが何なのかわかるか、雅紀？」

ああ…。他の奴らは、オルフェノクにイマジン、それとアンデッドだ…。」

グロンギだけではなく、『仮面ライダー555』にでてくる怪人、『オルフェノク』に、『仮面ライダー電王』にでてくる怪人、『イマジン』、さらには、『仮面ライダーブレイド』にでてくる怪人、『アンデッド』までいたのだ。

「何で仮面ライダーにでてくる怪人がいるんだよっ!!アレは空想

の産物だろっ！！？」

「俺だつて知るかよっ！何でこんな…」

話をしている内に怪人達は次々に建物などを破壊していく。そして雅紀達がいる学校にまで破壊しようとして近づいて来ていた。

「おっ、おいアイツ達、学校も壊すつもりだぞっ！」

「ともかく、龍斗は先生達にこの事を報告だっ！！俺は学校にいる生徒達を避難させるからっ！！」

「あ、ああ。わかった！」

そう言つて、二人は別れる。雅紀はこういう時には役に立つ。

「うるさいよ！つて、こんな事言っている場合じゃない！！いそいで皆をっ！！」

雅紀がそうこつ言っている内に他の生徒はパニックを起こして逃げ回っていた。

「おい皆っ！バラバラになって逃げるなっ！！全員いっしょに逃げるんだっ！！！」

だが、雅紀がどんなに言つても皆は聞く耳を持たなかった。何人かは……

「おまえ邪魔だよっ！！どけっ！！！」

「おまえの方こそ、邪魔だよっ！」

「邪魔なんだよおまえっ、どっか他のところに行けよっ！」

「おまえこそっ！！！」

などと言う始末だ……。

「皆、聞いてくれよ…っ！」

「おーい、雅紀ー！！！」

そんな時だ。龍斗が慌ただしく、その場に来た。

「龍斗、どうしたんだ？先生達に報告に言ったんじゃないあ…！」

「それが、いないんだよ！先生達がさあ！！！」

その一言に、雅紀は驚愕する。

「はあっ！？何でいないんだよっ！！職員室とかは…！」

「職員室にも行ったけど、誰もいなかったんだよ。学校に置いてあった車もなかった…！」

「まさか…。」

「ああ。俺達は、置いていかれたんだ…！」

「そっ、そんなあ…！」

そうしていると、怪人達が現れたのだ。

「きつ、来たぞっ！どうすんだよ雅紀！！」

「一先ず逃げるぞ！もう他の奴らは遠くに行って…」

そう言った時だった。

「ぎゃーーーーー！！！！」

「助けてくれーーーー！！」

様々な悲鳴が辺りに響き渡ってきた。

「あっ、あっちから声が…ってうおっ！？」

「あっちからもかよ…。」

2人は挟み撃ちにされてしまった。

「くっそお！ここまでかよっ！！」

諦めかけた、その時だった。

「…いや、まだあるぞ。ここから飛び降りるんだ！」

2人の後ろには窓があった。外に出て飛び降りれば助かると雅紀は考えているのだ。ちなみにここは2階だ。ソレを聞いた龍斗は驚愕の表情を浮かべる。

「はああ！？おまえ何言ってるんだよ！！？」

雅紀「飛び降りないと奴らに殺されるだけだ！それでいいのか！？」

雅紀にそう言われ、龍斗は黙る。もうすぐ後ろには怪人達が迫っていた。

「わ、わかったよ！飛び降りてやるよ！！」

2人は外に出て…

「いくぞ・・・せーのっ！！」

飛び降りた。

「うわあああああ！！！！」

「うおおおおお！！！！」

第2話（後書き）

さーてこの後どうなるのかなあ。それにしても酷い教師達だなあ、生徒を見捨てるなんてさ。

雅紀「いや、おまえが描いてんだろう、そついう風に…。」

まあね。次回は謎の少女が雅紀の前に現れる…はず。

少女「はずってなんなの、はずって。まあ、次回をお楽しみに」

第3話（前書き）

3話目更新だ〜！！

雅紀「うれしそうだなあ。」

嬉しくてたまらん！

雅紀「あ、そう。仮面ライダーディカオス、始まります。」

第3話

学校の2階から飛び降りた雅紀と龍斗は…

「うわあああああ!!」

「うおおおおお!!」

絶賛落下中である。

「うおおお・・・っ!!」

雅紀は着地に成功。龍斗は…

「うわごはあああっ!!!!」

見事に着地に失敗。

「だ、大丈夫か龍斗？」

「これのどこが大丈夫か、だよ。ケツ痛つて~~~~！」

「運動不足だぞ、龍斗。」

「おまえが凄いだよ。何でそんな運動神経しているのにも絵
ばっかり描いてんだ？」

「まあ、何て言ったらいいのか。て、そんな事言っている場合じゃない、はやくにげるぞ！」

「あ、ああ。痛てて…！」

雅紀と龍斗は学校から逃げだせた。

「あのさあ、これからどうすんだ？」

「一先ず俺の家に行くぞ。此処からだとそう遠くない。」

「わかったぜ。」

木利野家

そして、2人は雅紀の家にたどり着いた。そこで見たものは…

「オイオイ、ウソだろ…」

影も形もなく、無残に破壊された雅紀の家だった。

「そ、そんな…!」

雅紀は瓦礫の山と化した自分の家を見回して叫んだ。

「父さー！ーん！！母さー！ーん！！いたら返事してくれー！
ー！ー！ー！ー！」

だが、いくら呼んでも返事は返ってこなかった。すると…

「オイッ！雅紀ー！ー！」

龍斗が呼んできた。雅紀は龍斗の声が聞こえた方向に行くと…

「どっしっ…っ！ー！ー！」

そこにあったのは、体を上半身と下半身に分けられた父親の姿と、

「ま、雅紀、何してんだっ！はやく逃げるぞっ！！」

「こいつらが…父さんと…母さんをおおっ！！！！」

雅紀の拳から血がでてきた。目に涙を溜め、怒りの表情でグロンギ達を睨んだ。

「雅紀！今は逃げるのが先だ！そうだろ？」

「…くっ！！」

2人はその場から逃げだした。だが…

『グルアアアアアッ！！！！』

グロンギ達は一斉に2人に向かって攻撃した。

ドゴオオオオオ！！！！

「ぐわああ！！！！」

2人は衝撃波により数メートル吹き飛ばされた。

「ぐぐぐう！！」

龍斗は体起こした。雅紀は…

「ぐあっぐうううっ！！！！」

右足を抑えていた。見ると、右足が血で赤く染まっていた。どうやら怪我をしたようだ。

「雅紀…っ!!」

『グギユルルル…!!』

グロンギが近づいて来た。龍斗はグロンギ達を見て、恐怖と絶望を感じた。

「ぐうう、り、龍斗…!!」

雅紀は龍斗に手を伸ばそうとすると…

「う、うわああああ!!」

龍斗は雅紀を無視して逃げて行ってしまった。

「龍斗お————!!」

『グルアアアアア!!』

グロンギ達は一斉に怪我をしている雅紀に襲い掛かった。

「ぐっ!くそおおおっ!!」

雅紀はキズついた足で立ち上がり、逃げようとした瞬間…

ズブシユウウウツ!

「ぐあああああああつ！！！！！！！」

一体のグロンギに背中をやられた。背中から今までに味わった事のない強烈な痛みが全身に駆け巡る。

ザシュッ！！

「うああああああつ！！！！！！」

さらに、もう一体のグロンギに右腕をやられ、追い打ちをかけるかのように腹を刺された。傷口から血が噴水のように飛び散った。

「ぐぐぐ・・・げぼっ！！」

雅紀は口から血を吐き地面に倒れた。そんな中、雨が降り始めてきた。地面は雅紀の傷口からでた血で、赤く染まっていく。

「（ハ…ハハ。俺…このまま死ぬんだ…。家族を殺されて…龍斗に裏切られて…短い人生だったなあ…）」

雅紀は涙を溜め、諦めた。その時だ。

『アタックライド・スラッシュッ！』

という音声が鳴った瞬間…

ズバアアッ！

『グオオオオオオッ！！！！？』

ドゴオオオオオッ！！

雅紀の周りにいた Grongi が一斉に爆発したのだ。

「（なっ、何…が…）」

虚ろな目で先ほどの音声が鳴った方を見ると、そこにいたのは…、

「（お、女の子……？）」

少女が立っていた。しかも右手に持っていたのは、鎌の形をした武器だった。

「（あの鎌は？それにさっきの音声が…）」

そう考えていると少女が雅紀に近寄り、頬を撫でて、こう言った。

「かわいいそうな子、家族を殺されて、お友達に見捨てられるなんて…。大丈夫。私が、助けてあげるから…。」

少女が言った瞬間、雅紀の意識は堕ちていった。

第3話（後書き）

きちちゃったよ〜謎の少女〜。

龍斗「っというか、俺の出演」で終わり!?!?」

少女「次回をお楽しみに」

第4話（前書き）

さて、雅紀は一体どうなるのだろうか？そしてついに謎の少女の名前が明かされるぞ！

少女「それではスタート」

第4話

謎の少女に助けられ、意識を失った雅紀は…

「う、う、ここは…?」

そこは荒れた大地だった。そこに雅紀は立っていた。すると…

『うおおおおおっ!!』

っという声が出た。

「!?!」

雅紀が声が出た方に顔を向けると、そこにいたのは…

「…仮面ライダー…?」

そう仮面ライダー達だったのだ。すると背後ろからミサイルが飛んできて、ライダー達に直撃した。雅紀は、この光景に疑問を思った。

「この場面で、光夏美が夢で見たライダー大戦……。じゃあ後ろには……」

雅紀は後ろを振り返るとそこにいたのは……

「……ディケイド……。」

世界の破壊者、『仮面ライダーディケイド』だった。

「確かこの結末は、ライダー達はディケイドにやられるんだよな。」

そう雅紀はこの戦いの結末を知っていたのだ。すると……

「な、なんだ!？」

周りの風景が変わっていったのだ。そして……

「どこだよ……ここは?」

自分以外誰もいない殺風景な場所になった。すると後ろから……

ザッ、ザッ、ザッ、

という足音がし、雅紀が後ろを向いた。そして、そこにいたのは……

「仮面ライダー……?」

仮面ライダーがいた。そのライダーの姿に雅紀は……

「なんだこのライダーは?」

なんと、仮面ライダーオタクである雅紀が知らないライダーだったのだ。

「体のアーマーからして、ディケイドやディエンドに似ているなあ。映画だけにでてるライダーなのか？でも今年の映画に出てくるライダーはG電王やディエンドのコンプリートフォームだけだったはず…」

雅紀がブツブツと言っている時に、そのライダーは…

『ハカイ…ハカイ…』

そう言いながら手に持っていた武器で雅紀を斬ろうとした。

「うおっ！？」

だが、剣は雅紀をすり抜けて代わりに地面に叩きつけられた。

「ふう〜、あぶね〜」

すると、いつの間にか、あちこちに人が逃げ回っていたのだ。

「いつのまに…」

するとそれを見たライダーは、人々に襲い掛かった。

「おいおい、グロすぎるのもほどがあるだろ…っ！？」

雅紀は逃げ回っている人達を見ると、そこには…

「父さん…？母さん…？」

そう雅紀の両親がいた。

「な、なんで…？」

すると雅紀の母親が転び雅紀の父親は自分の妻の名を叫んだ。雅紀の母親は後ろを振り向くと、仮面ライダーが近付いていたのだ。体のアーマーは返り血で赤く染まり、より不気味さが増す。雅紀の母親は足がすくんだのか動こうとしなかった。そして、ライダーは手を振り上げると…

ザシュツ！

雅紀の母親を斬った。

「！？」

ザシュツ！ザシュツ！ザシュツ！

そしてまた斬った。何度も、何度も、斬り続けた。

「やめろっ！やめてくれっ！！！」

雅紀が何度叫ぼうと、ライダーは止まってくれなかった。もう、母親は原型を保ってもいない。肉の塊となっていた。

「やめろっっていつてんだろっ！！！！！」

雅紀はライダーを殴ろうとした瞬間、雅紀の拳はライダーをすりぬけた。

「うおっ！なんでだよっ！なんで!?!」

雅紀はパニックを起こして、自分が夢を見ている事を忘れていたのだ。すると、ライダーに小石が当たった。ライダーが小石を投げたきた方を向くと、雅紀の父親が小石を投げていた。ライダーはグルルウと声を上げていた。声色からして怒っている。そしてライダーは1枚のカードを、ベルトに入れた。

『アタックライド・プラスト』

トーンの低い音声が鳴り、そして剣だった武器が銃に変形した。その銃口からエネルギー弾が発射され、雅紀の父親に直撃した。

「父さん!?!」

ぐわああああっ!?!と叫びながら、雅紀の父親は跡形もなく消し飛んだ。

「う、うわあああああああっ!?!」

悲鳴を上げた後、雅紀の意識は失った。

「うわああああっ!!」

雅紀は声を上げながら起きた。体中から大量の汗が流れてた。

「ハア…ハア…こ…此処は？」

雅紀は息を切らしながら辺りを見ると、どこかの部屋のような。ふと、雅紀は自信の体を見ると…

「…傷が……ない…!?」

先ほどグロンギにやられた傷がまるで最初からなかったようになくなっていったのだ。

「…あのライダー…」

ふと、雅紀は先ほど見た夢を思い出した。人々を平然と殺し、家族を殺した仮面ライダーを。

「…くっ!!」

雅紀はそのライダーの事を思い出した瞬間、怒りが込み上げてきた。同時に悲しみも込み上げてきた。夢なのだが、家族を殺された事を。雅紀が悔いていると…

？「あつ、よかった。気がついたんだね。」

という声がした。雅紀は顔をあげると、そこにいたのは…

「君は…あの時の…」

先ほど雅紀を助けた少女がいた。

「あ、すごい汗だね。ちょっと待っててね、タオル持ってくるから。」

そう言い残し、少女は部屋を後にした。

「（）どうやら此処、あの子の家なのか…。」

雅紀がそう思っている内に、少女がタオルを持ってきた。

「タオル、持ってきたよ。」

「あ、ああ、ありがとう…ってうおっ!？」

「きゃっ!？」

雅紀はバランスを崩して倒れた。少女も雅紀が倒れてきたのに驚き、体制が崩れて一緒に倒れた。すると…

ポヨン…

といつような音がした。

「むぐぐう……っ！？／／／」

「えっ…！？／／／」

見ると、なんと雅紀の顔が少女の胸の谷間にスポツと入っていたのだ。

「ぶはっ…ぐぐぐ、ごめんっ！！／／／」

「う、ううん私は平気だよ…／／／」

雅紀は顔を真っ赤にしながら謝る。少女も顔を真っ赤にしていた。

「たぶん、力が入らなかったんだよね？手、貸すよ？」

「う、うん…。」

少女の手助けでなんとかベッドに入った。少女は雅紀の後に来て、背中を拭く。

「その、さっきは本当にゴメン…／／／」

少女に体を拭かれながら雅紀は謝る。

「もう気にしてないよ…／／／」

「あつ…／／／」

雅紀も少女もさっきの事を思い出してまた顔を赤くしていく。

「そつえば、自己紹介がまだだったね？私はアリス。苗字はないから、アリスって読んでもらえると嬉しいかな。」

「あ、ああ。お、俺の名は雅紀。木利野 雅紀だ。よろしくな…アリス…／／／」

雅紀は先ほどのアリスの笑顔を見て、ドキツとした。アリスの容姿は腰まで届く長い黒髪で瞳の色は青、さらには、胸が大きい。どこからどう見ても美少女だ。雅紀は今…

「（か、かわいい…／／／）」

なんて思っちゃったりする。つまり、一目惚れだ。

「フフ、早速呼んでもらえた。嬉しいよ／／／」

アリスは頬を若干赤く染めてにつこりと笑った。それを見た雅紀は…

「（な、何だろう、凄いドキドキしてきた…。）」

自分の胸の中の鼓動が激しくなるのを感じていた。

「さっき、なんかうなされてたけどどうしたの？」

「っ！」

アリスの一言で雅紀はさっきの夢を思い出した。とたん、雅紀の表情が暗くなった。

「う、ゴメンね？無理して言わなくてもいいよ？」

「いや、言うよ。正直、信じてもらえるか、わからないけど。」

雅紀は先ほどの夢の事をアリスに話した。ライダー大戦の場面、見たこともないライダーが自分の両親を殺す場面、全て話した。

「これで全部だ……。」

ソレを聞いたアリスは暗い表情をしていた。雅紀もまた暗い表情になった。正直、悲しかった。自分の両親が殺された場面を夢と現実とで2回も見た。さらには一番の親友に裏切られた。今の雅紀の心は閉ざされかかっていた。そんな時だ。

「……雅紀、泣いてるよ？」

「！？」

そう、雅紀は自分が泣いているのに気付かなかった。

「な、コレは……その……何でもないから」

雅紀は頬に濡れた涙を拭くがいくら拭いても眼から涙がでてる。

「ウソ……、何でもないよ……。」

「だから、何でもない……っ！？」

アリスが雅紀を抱きしめた。やさしく、雅紀を抱きしめた。

「泣いて…いいんだよ……?」

「!」

アリスが雅紀に優しくそう言った。

「辛かったんだよね……? 悲しかったんだよね……?」

「う、ああ……」

アリスの言う言葉が、雅紀の心に響いてきた。

「でも、大丈夫…。私が、傍にいるから…。受け止めてあげるから…。泣いていいんだよ……?」

「……う、う、うあああああああっ!!」

その言葉が引き金となったのか、雅紀は泣いた。溜めにためたのか、涙が滝のように溢れ出た。そんな雅紀の頭を、アリスは優しく撫でた。その姿はまさしく、母親のようだった。

「(可哀そすぎるよ…。何で…彼にこんな仕打ちをするの?こんな純粹で優しい彼に、何で酷い事をするの…?世界は…世界は、あまりにも残酷で酷すぎるよ……)」

そう思いながら、アリスは雅紀の頭を撫で続けた。するとアリスは、先ほど雅紀が話した自信の見た夢を思い出した。

「(そういえば、雅紀の夢の中で出てきたライダー…まさか…」ア

レ」が雅紀を選んだの？だとしたら…雅紀が「アレ」の使用者なの
…？」

アリスはそう思った。

第4話（後書き）

さあ、なんだか気になることが多くあるねえ…。

雅紀「本当だ。というか恥ずかしい／＼／」

そうだねえ、かわいい女の子の胸に顔を、あれはさすがにおまえの印象がガタ落ちだな。

雅紀「そう書いてんのはおまえだろう…！／＼／」

アリス「…／＼／」

まあいいや。さて次回は雅紀の夢に現れたライダーの正体が発覚されます。

雅紀「俺の夢に出てきた、あのライダーの正体？気になるな。」

気になる方は次回をお楽しみに。

第5話（前書き）

ついに雅紀の夢にでてきたライダーの正体が発覚される…。

雅紀「そのライダーは一体何者なのか…。」

アリス「それでは本編をどうぞ」

第5話

アリスに抱かれながら泣いた雅紀は、泣きやんだが……

「うう、その、ごめん……。」

アリスの服は雅紀の涙で濡れてしまっていた。

「別に大丈夫だよ。気にしないで。」

「でも……。」

「でもじゃない。それに、雅紀も少しは泣いてスッキリしたんじゃないかな？」

「ま、まあ。でも、いくら泣いたって俺の家族は戻ってこない……。」

また雅紀は暗い表情をした。それを見たアリスは……

「なら、家族の分まで、生きるの……。」

「え？」

「家族の分まで生きて幸せになるの……。天国でみてる雅紀の家族もそう願っているかも知らないよ？」

「生きる…かあ。俺は…生きて、幸せになっていいのかな？」

「雅紀は幸せになっていいの。だって雅紀は優しい人だもの。」

アリスにそう言われ、雅紀は頬を若干赤く染めた。

「なんか、女の子にそう面と向かって言われると、ちょっと恥ずかしいなあ」

「別に恥ずかしい事じゃないよ。雅紀は、純粹で、優しい、良い人だもの。」

「うう…／＼／」

雅紀は褒められる事にはあまり慣れていない。だから、アリスに褒められた事はすごく嬉しい。嬉しくて、頬が緩んでしまいそうだ。

「そう…かな…。ありがとう。アリスに言われたら…なんか元気が出てきたよ。」

「ふふ、元気出してくれてよかった。」

「俺は、家族の分まで生きる…！家族の分まで幸せになる…！」

「そう、その生きだよ。」

「本当にありがとう。お詫びに何か絵を描くよ？」

「そつだねえ、それじゃあ…」

…仮面ライダーの絵を描いて。」

「えっ？」

これを聞いた雅紀は驚いた。

「本当に良いのか？仮面ライダーの絵なんかで？」

「うん、良いよ。私は、雅紀が、いつも描いている仮面ライダーの絵が好きだから。」

「!？」

これもまた驚いた。雅紀はいつも学校の休み時間に絵を描いている。それを、アリスが知っていたのだから

「アリスは俺と同じ学校に通っていたの？」

「いや違うわ。だけど見たのよ。あなたが仮面ライダーの絵をいつも描いている所を…。」

「…そうか。よし、じゃあ早速描こう…っと思ったんだけど…」

「思ったんだけど？」

アリスが首を傾げた時だった。

グウ~~~~~…

という音がした…。

「お、お腹がすいて…／＼／＼」

その音は雅紀の腹から鳴っているようだ。雅紀はお腹がすいていたようだ。それを聞いたアリスは苦笑いしながら口にする。

「あらら、じゃあ何か作ってくるから、待っててね？」

「う、うん、わかった。」

アリスが部屋を出てしばらくすると、おいしそうな香りがしてきた。雅紀の腹はさっきより多く鳴った。待ち遠しいのだろうか、腹の虫が治まらない。するとアリスがご飯を持ってやってきた。それを見た雅紀は…

「…これ全部、アリスが作ったの…？」

「そうだよ。凄いでしょ？」

見るとハンバーグやらスープやら、豪華な感じの料理が眼の前にあった。これを全部、アリスが作ったと知った雅紀は…

「凄すぎて…何をどう言ったらいいか思いつかない…。」

「フッフ じゃあ食べよう？」

「ああ。」

雅紀はアリスが作った料理を食べた。何から何までとても美味しい。

「どうかな？味の方は？」

「凄く美味しいよ…！こんなにうまいの食べたことない！」

「良かった。それに嬉しいなあ。そう言ってもらえると作ったかいがあるよ。」

「（うう、ドキドキが治まらないよお…／／／）」

アリスの笑顔に雅紀はまたドキドキした。そして…

「ごちそうさまでしたー！」

「ごちそうさま。というか、凄いねえ。4杯くらいおかわりしなかつた？」

「それぐらい、アリスの料理が美味しくて…。」

「そうかな？ありがとう、そう言ってくれて。」

「あはは…よしっ！じゃあ早速描きますかつー！」

「フフフ」

雅紀は通常の倍のスピードで絵を描いた。そして…

「はい…平成11人仮面ライダーだよ…その裏には、その11人ライダーの最強形態だ！」

見ると紙に描かれていたのは、クウガ、アギト、龍騎、555、ブレイド、響鬼、カブト、電王、キバ、ディケイド、Wの11人ライダー、どれも決めポーズをして描かれている。その裏には、そのライダーの究極ともいえる最強形態が描かれていた。それを見たアリスは…

「うん、ありがとう。大切にするね／＼／」

その絵が描かれている紙を嬉しそうに抱きしめながら、礼を言う。それを見た雅紀は…

「（可愛過ぎる…／＼／）」

なんて思っていたりする。ふと雅紀はアリスに…

「ねえ、アリス。アリスは俺の夢にでてきたライダーを知っているかな？」

「えっ？な、何でそんなこと聞くの…！？」

「いや、さっき、そのライダーの事を言ったら…アリス、なんか驚いた顔していたし。何か知ってんじゃないかなあって思ってたさ。」

「……………」

それを聞いたアリスは黙り込んだ。

「ああ、知らないんなら別にいい…」

「わかった。教えるよ…。」

アリスはそう言ったが声のトーンが少し低かった。そしてアリスは言う。

「雅紀が夢に出てきたライダーの名前は『ディカオス』。そのライダーは、ディケイドよりも恐ろしい、破壊者で…呪われ、滅びた…最強最悪の仮面ライダーよ。」

今、この瞬間、仮面ライダーディカオスの存在を…雅紀は知っていたのだ。

第5話（後書き）

ついに謎のライダーの名前が明らかになった！！

雅紀「ディカオス…、そのライダーが一体何者でなぜ滅びたか…」

アリス「それはまた別の話に。」

それでは次回をお楽しみに〜

第6話（前書き）

ついに仮面ライダーディカオスの事が明らかに……！

雅紀「つつか、ディカオスって今どこで何をしているんだ？」

それは…わからん

雅紀「おいつ！」

第6話

アリスからデイカオスの存在を聞いた雅紀は……

「…デイカオス…」

雅紀はデイカオスの名前を口にする。

「そのライダー…新しく、テレビでやるのか？それとも映画？」

「ううん、デイカオスは、現実に存在している。いや、存在していたという方が合っているね。」

「存在していた？」

アリスの言葉に疑問を感じた雅紀。

「…デイカオスは…死んだのよ。」

「えっ？死んだっ!？」

その一言に、雅紀は驚いた。アリスは頷きながら話す。

「うん。デイカオスは、本来ならテレビでのディケイドの物語にでるはずだったの。最悪の敵としてね…。だけど…デイカオスは死んだ。」

「何で…?」

「ディカオスは変身者に強大極まる力を与える代わりに、その変身者を暴走させるの…。そして最後は力を使い果たし死ぬ。まるで呪われたようにね。」

「…暴走…。」

雅紀は自分の夢にでてきたディカオスを思い出した。あれは恐らく、暴走した状態だったんだろうと…

「でも、その話だと…死んだのは変身者じゃあ…。」

「確かに、死んだのは変身者だよ。でも、最後の変身者がディカオスに変身できる『ディカオスドライバー』を無理やり外したのよ。そのせいで変身者は爆死。さらにはディカオスドライバーもその爆発の衝撃で壊れて、使い物にならなくなったの。」

「……。」

ソレを聞き、雅紀は黙ってしまふ。

「ただど他のライダーはディカオスが滅びてくれて良かったらしいの。」

「え?」

「ディカオスは、ディケイドよりも恐ろしいライダー…。パワーもスピードも、ディケイドより上をいく。そのディケイドより恐ろし

「ライダーがいなくなったから、世界の脅威が減ったから…ライダー達は良かったらしいのよ。」

「…なんだか、可愛いそうな話だな…。」

「何でそう思うの?。」

「いやさあ、いくら恐ろしいライダーだからって理由で、ライダー達に嫌われたんじゃないかわいそうだなあと思ってさあ…。」

「(やっぱり、優しい子だね…雅紀は…)」

何気にアリスフラグを立てている雅紀だった。

「でもさあ、なんで変身者達はディカオスになったんだ?知らないで変身したのかなあ?。」

「変身者達はどれも仮面ライダーが実在する世界の人間だったの。手にした時点で最悪な力だって事はわかっていたのに、その力に溺れてしまったの…。」

「そうか…。悲しい末路だな…。」

「そうだね…。」

その場は沈黙の空気になった。ふと雅紀はあることを思い出した。

「そういえば、怪人達は?まだたくさんいるはず…他の人たちが危ない!助けなきゃっ!」

雅紀は怪人達の事を思い出し、慌てて部屋を出ようとした。だが…

「だめっ！」

アリスが雅紀の行く手を阻む。

「どいてくれアリス！なんで邪魔するんだ！？」

「あなたが行っても、何も変わらない…。死に行くようなものだよっ！」

「っ！そ、それでも…」

「それでも何！？」

「それでも、俺は行く！！！」

「っ！！な、なんでそんな…」

雅紀の言葉を疑問に思うアリス。

「だって、俺が住んでいる世界だもの…。その世界が危機にあつてんの黙って滅びるのを待っているのは…ごめんだ！」

「……………」

「…………ごめんアリス…心配してくれて…。でも俺は…」

「…わかったよ。止めない…。でも、私も行く…！」

「えっ！だ、だめだっ！！アリスを危険な目にあわせたくない！！」

「大丈夫だよ。だって私は…」

アリスはそう言って、いつの間にか手にあつた物を雅紀に見せた。それは…

「その武器は…あの時の…」

そうアリスが手にしていたものは雅紀をグロンギから助けた際に持っていた鎌の形をした武器だった。その反対の手には…

「そのカードは…」

カードが握つてあつた。そのカードを鎌の形をした武器の中に入れた。その瞬間…

『カメンライド』

という音がした。そしてアリスが…

「変身っ！」

そう叫んだ瞬間…

『デイダークツ！』

という音声が鳴り終わった瞬間、アリスの周りに残像が出てきてアリスの体を包み込んだ。瞬間、アリスの体は変わっており、眼の前

に幾つものカードが現れ、変身したアリスの顔に半ば吸いこまれていった。途端アリスの体のアーマーの色が紫色に変わったのだ。

「あ、アリス…？」

アリスが変身した姿は、紫色のボディをしていて肩には、悪魔のよ
うな翼が付いており、顔はまるで悪魔を連想しているかのような感
じだった。よく見ると、なんか小悪魔みたい可愛いナイスバデ
イになっていた。

『そう。私は、仮面ライダー『ディダーク』だよ』

「……………」

雅紀はボくつとその場で立ち尽くす。

『どう、驚いた？』

「う、うん驚いた…。」

『フッフ、そうでしょう。じゃあ行くっ…！』

そうアリスが言うつと後ろにオーロラが現れた。

『私の手を握って、離さないようにね。』

「あ、ああ。」

雅紀は、アリスの手を握った。

『よし、行くよ……!』

そう言い、雅紀とアリスはオーロラの中に入って行った。

第6話（後書き）

ウソーーーー!?アリスが変身したーーーー!!!?」

雅紀「うるさいぞっ!」

アリス「近所迷惑だよ?」

雅紀「しかもこれ描いてんのはおまえだろ作者っ!」

あ、ああ。だがしかしこれで女ライダーも増えたぜえ……ふふふふふふ……。

雅紀「うわ、なんか変な笑みをしているぞ……。」

うるさい。さっていよいよ次回はディカオスが現れるぞっ!!!

雅紀「まじかつ!?!でも今回の内容でディカオスドライバーってのが壊れたんじゃないやあ……。」

まあ気になる方は次回!

アリス「それでは、またね!」

第7話（前書き）

やべえ、1日遅れた…。

雅紀「何やってんだよ…。」

仕方がないだろう！という内容にするか考えていたらいつの間にか1日立ってたんだからさあ。

アリス「まあ、しょうがないよ。雅紀も愚痴を言わないで。」

雅紀「…アリスがそういうなら仕方がない…。」

何だろう、こいつらの周りになんか甘い空間が…

第7話

アリスと一緒にオーロラに入って行った雅紀は…

「うおおおっ！ディケイドにでてくるオーロラの中に入れるなんて感激っ！！！」

仮面ライダーオタクの本能バリバリだして興奮していた。

『嬉しそうだね、雅紀。』

「そりゃあ嬉しいさ！あははっ！！！」

『（まるで小さい子供みたい…。でも、そうしている雅紀が…何か可愛い。）…あっ、もう着くよ。準備はいい？』

「ああ！」

2人がオーロラから出てくると、そこは建物が瓦礫の山と化して辺りに散らばり、その周りには血を流して倒れている人や、砂となつて衣服だけ残っている者、体が透明にまでいた。

『酷いね。数十人…いえ、数百人は死んでいる…!』

「……………」

目の前にある悲劇を、雅紀は目を開かせながら、茫然としながら見ていた。

『（…雅紀の世界をこんな風にした怪人達を許せなくなってきた…。それに雅紀の事が余計に可哀そうになつてきたよ…）』

茫然と立ち尽くす雅紀を見つめ、デイダークは悲しくなってくる。

「…行こう、アリス…！生き残っている人達を、助けなきゃ…!』

『雅紀……。うん、行こう…!』

2人が歩いていると…イマジンとオルフェノクとアンデッドが数体待ち構えていたかのように、その場に現れた。

『雅紀は下がってて。』

「アリスはどうするんだ？」

『私は仮面ライダーだよ。大丈夫。雅紀はまだ生きている人がいたら安全な所へ避難してあげて。』

「…わかった。アリス…」

『何？』

『その…死なないで…な。』

『……うん。』

雅紀はそう言って走って行った。すると目の前にアンデッドが現れ雅紀に攻撃しようとした。

「なっ!？」

雅紀は驚いて避けようとするが、もつ目の前に攻撃がきているので避けられそうになかった。すると…

ガギンッ!

という音が辺りに響いた。雅紀は目を開けると…そこには…

「アリス！」

ディダークが怪人から雅紀を守っていた。

『…雅紀には指一本触れさせないよ！』

ベルトの脇についてあるカードホルダーから1枚のカードだし鎌状の武器『ディダークドライバー』にカードを挿入する。

『アタックライド・スラッシュ！』

その音声が鳴った直後に怪人達を次々に斬り倒した。だが別の方からまた怪人達が現れた。

『雅紀、早く行ってッ！』

「あ、ああ！」

雅紀は走るのを再開した。ディダークは一度、雅紀を見た後、再び怪人達に顔を向ける。

『私1人じゃ無理だから…』

そう言いディダークはディダークドライバーにカードを挿入した。そして…

『カメンライド・ライオトルーパーズッ！』

音声が鳴りデイダークがデイダークドライバーを振った瞬間、目の前に仮面ライダー555に出てくる量産型ライダー『ライオトルーパー』を3体召喚した。

『人数はこれぐらいで十分ね。じゃあ、行ってきなさい。』

デイダークがそう言うと言とライオトルーパー達はコクリと首を振り怪人達に向かって言った。デイダークもまた怪人達に向かって行った。

一方雅紀は生きている人を探した。

「だれかーっ！いたら返事をしてくれー！！」

雅紀がそう言っていると泣き声が聞こえた。雅紀は泣き声がした方に行くとき小さい女の子がうずくまっていた。

「大丈夫か？さあ早く逃げよう！」

「ひっぐ・・・ママが・・・パパが・・・」

雅紀「お母さんとお父さんがいるのかい？どこにいるの？」

そう雅紀が言うと女の子は後ろの瓦礫を指差した。雅紀がその方向くとそこには瓦礫の中に血だらけの手があった。この子の親は...
もう...、そう思っていると...

『ギヤアアアッ！！！！』

背後から怪人達が現れた。

「逃げよう！！」

雅紀は女の子の手を握り、走った。

「ママァー！！パパァー！！」

女の子が泣き叫びながらそう言った。雅紀は苦い顔をしながら走っている。怪人が雅紀達に光線を放ってきた。

ドゴオオオオオツ！！

それが近くに当たり、爆発を起こし、二人は吹っ飛び、地面に何度も体をぶつける。

「くう、だ、大丈夫か……っ！！？」

雅紀は女の子の方を見ると、頭から血を流し倒れてた。急いで女の子を抱き上げて息をしているか確認するが…女の子は息をしていなかった。即死だった。

「そんな……そんなっ!!」

雅紀は涙を流しながらそう叫んだ。

『ガアアアアッ!!!』

そうしていると怪人が襲い掛かってきた

「う、うわあああああっ!!!」

雅紀は叫び声をあげた。

一方、召喚したライオトルーパー達と共に闘っていたディダークは…

「うわあああああっ!!!」

『ッ！！この声は、雅紀っ！？雅紀が危ないっ！！』

デイダークはそう言いながら雅紀の所へ行こうとすると、怪人達がデイダークの行く手を邪魔した。

『あなた達にかまっていられない！早くしないと雅紀が……雅紀が死んじゃうっ！！』

デイダークは怪人達にそう言いながらデイダークドライバーで斬っていった。

「うわあああああっ！！」

雅紀は叫びながらその場にいた。恐怖感で動けなかった。怪人が雅紀に襲い掛かろうとした。その瞬間、雅紀の前にオーロラが現れて怪人を弾き飛ばした。

「な、何で、オーロラが？」

雅紀は目の前のオーロラを見ると、そのオーロラが雅紀を包み込んでいった。雅紀のまわりは辺り一面が銀世界になっていた。すると……

ザッ！ザッ！ザッ！

遠くから何かが雅紀の方に歩いてきた。その姿を見た雅紀は、驚愕した。

「…デйкаオス…！」

なんと雅紀の前に現れたのは仮面ライダーデйкаオスだったのだ。雅紀はデйкаオスに警戒しながら、いう。

「お、俺に何か用かよ？」

それを聞いたデйкаオスは…

『…我ハ、貴様ニ「力」ヲ与エニ来タノダ。選バレシ者ヨ…。』

そう言ったのであった。

「「力」…？」

『ソウ、絶対的ナ「力」ダ。』

「何で俺なんか？それに『選ばれし者』ってなんだよっ！？」

『我ノ…ディカオスノカヲ使イコナセル、唯一ノ人間。ソレガ貴様
ダ。』

「…選ばれし者…。」

そう呟いた瞬間、雅紀の頭に怪人達に苦戦を強いられている、ディ
ダークの姿が浮かぶ。

「！アリス！！」

『ドウスル？我ノカヲ受け入れ絶対的ナカヲ手ニ入レルカ。怪人ニ
殺サレルカ、ドツチダ…？』

「…俺は…俺は…。」

雅紀は一度目を閉じ、しばらくして再び目を開け、ディカオスを見
てこう言った。

「俺は…その力を受け入れる…！」

それを聞いたディカオスは…

『怪人達ニ復讐スル為力…？』

その質問に、雅紀は首を振る。

「違う…！俺は、大切な人を守るためだっ…！」

『…ホウ…。』

「それにさ…復讐したって家族は戻ってこないし何も生まれない…だからその力を守るために使う…！」

『ククク…クハハハハハハハハハハハッ！！！！』

これを聞いたデイカオスは、大いに笑った。それを見た雅紀はデイカオスに怒鳴る。

「な、何がおかしいんだよっ！！！！」

『ククククツ、イヤ、コンナ人間ハ初メテダト思ツタダケサ…。ヨカロウ…、選バレシ者ヨ…。我ノ力…使ウガイイ。破壊ノカヲ！！』

デイカオスはそう言い、右手を雅紀の前に突き出した。

「破壊の力じゃない。今からは守るための力だッ！！」

雅紀はそう言い返し、デイカオスの手を握った。するとデイカオスは光となって消え、代わりに雅紀の手にはデイカオスドライバーがあった。

「これは…デイカオスドライバー…なのか？」

するとデイカオスの声が辺りに響いてきた。

『ソウダ、以前二変身シテ暴走シタ奴ガ壊シオッタガ、年月ヲカケテ…ヨウヤク修復シタノダ。』

「…待てよ…じゃあ俺も変身したら暴走して死ぬじゃん。」

『ソレハ心配スルナ…。選バレシ者デアル貴様ナラ暴走ハセン。』

「ならよかった・・・」

『ソレト…後コレヲ持ツテイクガイイ。』

そう言う上と上空から何か落ちてきた。雅紀はそれをキャッチして見ると…

「…何？このドライバー？」

ドライバーだった。形状からしてデイケイドのライドブッカーみただが、どことなく違う感じがしていた

『ソレハ『アドベントドライバー』ダ。以前ノ我ノ武器ヲ改造シ、パワーアップサセタ物ダ。ソレニカードヲ入レレバ、ライダーヲ召喚でき、FR、FFRなどが可能になる。』

デイカオスがそう言う上と雅紀はあの夢を思い出した。

「（夢にでてきたあの武器がこうなったのか）まあ、ありがとう。」

『…フンツ、人間ニ礼ヲ言ワレルトハ…我モ墮チタモノヨノオ…。』

「礼を言われたら普通嬉しがるんじゃない？」

『ウルサイ。サテ、元ノ世界ニ戻スゾ。』

「ああ。頼む！」

雅紀がそう言い終わると、辺りは光に包まれた。

そのころデイダークに変身していたアリスは怪人達に一方的にやられていた。ライオトルーパーズも怪人達にやられて消滅し、さらに攻撃を加えられたデイダークは変身を解除されてしまった。

「きゃっ！！！！」

アリスは倒れてしまうと、怪人達は一齐にアリスに向かい攻撃しようとした

「（このままじゃ殺される…。雅紀…守ってあげられなくてごめんね）」

アリスが涙を流してそう思っていた時だった。アリスの前のオーロラが現れて怪人達の行く手を塞いだ。そしてオーロラの中から人影が現れ、アリスの前に歩いてきた。その人物は…

「アリス、ごめん。心配かけさせちゃって。」

「…雅紀…」

雅紀だったのだ。

「でも大丈夫だ。俺が助けにきたから…」

「雅紀っ！！」

「ってうわっ！？」

アリスがいきなり抱きついてきたのだ。抱きつかれた雅紀はあたふたと混乱した。

「え、ちよっ、あ、アリス！？」

「よかった…。雅紀…無事で良かったよ。」

「アリス…。」

そう言っつて雅紀はアリスを抱きしめた。

「無事で良かったって言いたいの俺の方だよ。それに泣いているとかわいい顔が台無しだぞ？」

「あっ／＼／」

アリスはそう言われ涙を拭いた。

「アリスは休んで。ここは俺がやるから…」

「えっ！？き、危険だよっ！雅紀は仮面ライダーでもないのに…。」

「大丈夫・・・！」

雅紀はアリスを安心させようと微笑んだ。

「あ…／／／」

途端アリスの顔が赤くなった。

「俺は死なないし、それに…」

雅紀が後ろを振り向き、そう言いながらディカオスドライバーを腰に装着し、カードを前にかざす。

「俺も今日から…仮面ライダーだ！！変身ッ！！！！」

雅紀がそう言いカードをベルトに挿入するとベルトから…

『カメンライド』

音声が鳴り、ベルトのサイドレバーを押した。

『ディカオスッ！』

音声が鳴った瞬間幾つもの影が雅紀の周りに現れて雅紀を包み込んだ。すると前にカードが現れて雅紀の変わった姿の頭に半分入って

いった。そして黒だったボディが紺色に変わり血のように真っ赤な瞳が光りを放ち、ボロボロの黒いマントが風になびいた。

『俺の名は、仮面ライダー…仮面ライダーディカオスだっ！！！！』

今ここに呪われ、滅びた最強最悪のライダーが、正義のライダーとして蘇った。

第7話（後書き）

うつひよ〜！！！！雅紀がライダーに、しかもディカオスに〜！！

雅紀「めっちゃ興奮しているな・・・」

雅紀もライダーになってよかったな！！

雅紀「ああ。この力で大切な人を守る！」

アリスをねっ！

雅紀「ばっ、な、何を言っただよっ／／／！！？」

大切な人と言ったらアリスしかないじゃん

アリス「・・・／／／」

雅紀「・・・うう／／／」

まあ、こんな甘い感じなのはいいとして次回は！ディカオスに変身した雅紀の活躍が見られます！！

雅紀「みなさんぜひ見てください！」

アリス「それじゃあまたね〜」

第8話（前書き）

うん…。

雅紀「どうした？」

いやさあ、戦闘シーンがあんまり自信がなくなってきたさあ。

アリス「作者さん、自信持って（ニコツ）」

う、うおおおおおおっ！アリスの笑顔を見てなんか元気がわいてきた！！！！

雅紀「凄いな…アリスの笑顔…。」

よーしっ！がんばるぞー！！

雅紀「がんばれよ。それではスタート！」

第8話

仮面ライダーディカオスに変身した雅紀は…

『(す、すげえ。俺、仮面ライダーに変身したーっ！マジ嬉しいー
ー！！！)』

此処でも仮面ライダーオタクの本能丸出しで心中そう呟いていた。

「ほ、本当に…雅紀？」

ディカオスの後ろにいるアリスは茫然と立ち尽くしていた。

『あ、ああ。それよりアリスはこの場から離れてて。危ないから』

「私は大丈夫。もう一度ディダークに変身して雅紀と一緒に戦うか
ら…。」

アリスはそう言い立ち上がろうとしたが足元がふらついて倒れ
そうだ。それを見たディカオスは…

『アリスはフラフラじゃないか。この場は俺がやるから休んでて』
そう言いアリスを抱きかかえて近くに休ませた。

『それに、敵さん達も待つているしね。』

後ろを振り向くと怪人達がその場でうごめいていた。さらにはその数が増えていた。

『さ〜とと、行きますかっ!!!』

雅紀ことディカオスはそう言って怪人達に向かった。怪人達もまたディカオスに向かった。ディカオスは怪人達にパンチやキックをお見舞いしていく。同時に、ディカオスは自信の力に驚いていた。

『（凄い。息も上がらないし疲れないし、それに体から力が溢れ出てくるようだ!）』

ディカオスは一枚のカードを出しベルトに挿入。そして…

『アタックライド・スラッシュッ!』

ディカオスはベルトの脇に付いていたアドベントドライバーを手に持ち、剣状態にして怪人達に斬りかかる。アドベントドライバーの刃が紺色に怪しく光りビームセイバ と化して怪人達を難無く斬った。そしてまたカード一枚出してベルトに挿入。

『アタックライド・ブラストッ』

すると、剣状態だったアドベントドライバーが今度は銃形態になっ

た。その銃口を怪人達に向けてトリガーを引くと銃口から大量の紺色の弾丸が発射され怪人達に当たり、怪人達は爆発した。そして残りは数体だけとなった。

『とどめは、こいつにするか…!』

デйкаオスはさっきのと違う黄色いカードを出しベルトに挿入する。

『ファイナルアタックライド・デイ・デイ・デイ・デйкаオスッ!』

目の前に巨大な3D状のカードが幾つも現れた。デйкаオスはダツシユし少しジャンプして3D状のカードに向かいキックすると3D状のカードを破ってさらに加速し、足先にエネルギーを溜めながら怪人達に向かった。そして…

『ハアアアアッ…、デイメンションブレイカー…!』

そう言い放ち怪人達にキックした。怪人達は断末魔をあげて爆発。その爆発の中からデйкаオスが歩いてきた。先ほどの戦いを見たアリスは…

「（凄い…。これが、デйкаオスの力…!そして、雅紀が「選ばれし者」なんだ。」

そうアリスが思っているとデйкаオスがベルトのレバーを引いて変身を解除し元の雅紀の姿に戻った。

「終わったよ。アリス、立てる?」

「う、うん。」

そう雅紀に言っただけでアリスが立ったがまだダメージが残っているのか足元がまたふらついた。それを見た雅紀はアリスの手を握り立ち上がらせアリスの体を支えた。

「まだフラフラじゃなか。しばらくこうしてよう。」

「う、うん。」

「怪我…してないか？」

「それは大丈夫だよ。どこも怪我してないから」

「そうかあ、よかったあ…。」

「はっ／＼／＼」

雅紀の微笑みを見た瞬間、アリスは赤面した。すると…

ドクンッ…

「（…えっ？）」

ドクンッ…ドクンッ…

「（な、何？この胸の高鳴り？）」

「じゃあ戻るうか。」

「あ、うん。」

二人の目の前にオーロラが現れて、二人はその中に入っていった。

アリスの家に戻った二人は…

ドクンッ…ドクンッ…ドクンッ…

「（まだ…胸の高鳴りが止まらない…。それにどんどん激しくなっている気がする。）」

アリスは自信の体の変化に戸惑っていると、雅紀が近付いてきた。

「な、なあ、アリス」

「ふえっ？な、何？」

雅紀がアリスを呼んだ。アリスは突然、雅紀が声をかけてきたので可愛らしい声を上げた。

「じ、実はさあ、俺の家さ、怪人達に壊されて、ないんだ…。それで、頼みが、あるんだけど…」

「なに…？」

すると雅紀がいきなり土下座してきた。

「頼む！俺を此処に住まわせてくださいっ！」

「えっ？」

「その、いきなりで勝手かもしれないけど…そのお願いしますっ！」

雅紀は頭を下げてアリスにお願いした。それを聞いたアリスは…

「（雅紀、家がないんだ。雅紀…。）」

ドクンッ…

「（雅紀が泊ってくれたら嬉しいし、雅紀も嬉しい。）うん、良い

よ…。」

アリスがそう返事した。その後、雅紀は顔を上げた。

「あの、本当にいいのか…？」

雅紀は再度確かめる。アリスは笑いながら…

「うん、私も雅紀が泊ってくれたら…嬉しいし／＼／」

「あ、ありがとう…。」

雅紀は笑顔になりながらアリスに礼を言った。雅紀の笑顔を見たアリスは…

ドクンツドクンツドクンツ…

「（まただ。この高鳴りは一体？まさか私…雅紀を…いや違う。そんなわけではない…。でも、そうなたら…私は…）」

アリスは自信の変化に気づいた。だがそれを戸惑いながらを否定した。

第8話（後書き）

何やかんだで雅紀はアリスにフラグを立てていきました。

雅紀「あう／＼／／」

雅紀も嬉しいだろう？アリスに好意を寄せられてさあ。

雅紀「まあ、嬉しいんだけどさあ、俺なんかじゃあもつたいないよ
…。」

何を言うかあ全く。さて次回はアリスが暴走します。

雅紀「暴走っ！？なんで？」

さらにはエロイ話になるんで…お楽しみに〜（読みたい人は）

雅紀「おいエロイ話になってどういことだ！！？おいつ無視するなー
！！」

第9話（前書き）

さうて来ましたよ第9話。

雅紀「ほ、本当にやるのか？」

おうっ！もちろん！！

雅紀「マジでやめてっ！」

じゃあ始まります！

雅紀「話を聞け〜〜〜〜！！！！」

第9話

怪人達との戦いから数日、雅紀とアリスは平和な時を過ごしていた。そんなある日の事…

ドクンツドクンツドクンツドクンツ…

アリスは自信胸の高鳴りを聞いていた。

「（最近になって、鼓動が激しさを増しているような感じ…。）」
ふとアリスは雅紀の方を見ました。雅紀は相変わらず仮面ライダーの絵を描いている。そんな雅紀を見ていたアリスは…

ドクンツ！ドクンツ！ドクンツ！ドクンツ！

「（くっう、また、また鼓動が激しく…。）」

息を荒くし、顔が赤くなってきている。そんなアリスを見た雅紀は絵を描くのをやめてアリスに近寄った。

「アリス、どうしたんだ？顔が赤いぞ？それに息が荒いし…。」

「ハア…ハア…ま、雅紀…。」

「……ちよつとごめんよ？」

「えっ…！？」

雅紀は自分の左手をアリスの額に、右手を自分の額にやった。

「（ふぁ……／＼／＼）」

「うーん…熱がありそうだなあ。アリス、薬持ってくるから、ベッドで横になってて。」

そう言い雅紀は部屋を出た。アリスはふらついた足取りでベッドに入ってしまった。

ドクンッ！ドクンッ！ドクンッ！ドクンッ！

「（ハア…ハア…や、やっぱり私、雅紀を、欲しているんだ。雅紀の全てを…私は…）」

そう思うと、アリスは毛布を被ってベッドの中につずくまった。

「（だ、ダメッ！そんな事したら、私の「正体」がばれちゃう…！）」

ドクンッ！

「（…でも…欲しい…。）」

ドクンッ！

「（私は…）」

するとアリスの青い瞳がだんだん、赤くなってきたではないか。

ドクンッ！

「（雅紀が…）」

そうこう思っている内に雅紀がアリスの所に来た。

「アリス、薬持ってきたよ」

ドクンッ！

「（欲しいっ！！！）」

アリスの瞳が完全に赤い瞳になった。そして…

「アリス…ってうわあっ！？」

ガバアッ！とアリスは雅紀を自分の方へ引っ張った。

「アリス！？どうし…んっ！？／／／」

「…んっ！／／／」

アリスと雅紀の唇が重なった。

「んっ、んんっ、プハッ、あ、アリ…んんんっ！！？／／／」

「…んっ！！／／／」

唇が離れた途端、またアリスが唇を重ねてきた。しかも今度はディープキスの方だ。

「んっ！レロッ！チュピッ！コクッ！／／／」

「ん…ッ…レロ…ッ…チュピ…ッ！？／／／」

アリスは雅紀の舌を自分の舌で絡め、お互いの唾液を交換し、アリスは雅紀の唾液を飲み込んだ。雅紀はアリスを自分から離そうとするが、とても女の子では思えない力で抱きしめられ、離れることができない。やがて、雅紀はされるがままの状態になり、アリスとのディープキスを味わっていた。アリスはペースを上げてディープキスを味わう。室内にはいやらしい音が数十分続いた。やがて、アリスは唇を離れた。離れた後、名残惜しいかのように唾液の糸が垂れた。

「ハア…ハア…。あ、アリス、どうしたんだ？し、しかもその目は何？／／／」

「ハア…ハア…ハア…雅紀／／／」

「話を聞いてくれよ…！！」

雅紀はアリスにそう言うが、アリスは聞こえていないのか、雅紀の唇を奪い続ける。

「ん…んん…」

「んんっ!?!」

何度も、何度も、キスをし続ける事、数分間。アリスはようやく唇を離した。

「ふあ…あ、雅紀…ごめん…」

「アリス…いきなりどうして…」

「…話すよ。なぜ私がああなったのか…そして、私の…「正体」を…」

第9話（後書き）

はあ、すっかりしたあ。

雅紀「ううう、もうお婿に行けない……」

アリス「私も……」

まあまあ、良いじゃん。

雅紀「ふざけんなよお……。恥ずかしい／＼」

アリス「……／＼」

まあ悪かった。さて次回はアリスの正体が知られます！お楽しみに！

雅紀「もうこんなの嫌……」

第10話(前書き)

さーていよいよアリスの正体が知られるぞ！

アリス「…始まります…。」

第10話

アリスの暴走が治まり、アリスが自分の正体を教えると言いだした。

「アリスの正体？」

「…うん…。」

アリスは涙を拭いて雅紀に言った。「んで、どうしてあんなことをしたんだノノノ？」

雅紀はアリスに聞くと…アリスは表情を暗くさせ、重く口にし始める。

「まずは私の正体を話してからね…。」

「（そう言えばそう言ってたなあ。それにあのオーラが気になる。）」

雅紀がそう思っているとアリスが口を開いた。

「まずはつきり言っと、私、人間じゃないんだ…。」

「…は！？」

アリスの一言に雅紀は驚いた。

「え、ど、どういことだよ!？」

「話は最後まで聞いて…。」

「……はい…。」

雅紀は黙った。アリスは話の続きを言った。

「私はね、あの時の怪人達と同じ存在なんだ。」

「……。」

「でも、私は、あいつらとは違う…。」

「ど、どこが…?」

「まず、人を襲わない。」

「何で?」

「私は人間を食べるのはあまり好きじゃない。だから人間を食べないし、殺したりはしない。」

「……。」

「そして…私は、「裏切り者」だから…。」

「裏切り者?」

そう言い返し、アリスは頷いた。

「私は人間を食べるのが嫌いだから、同族に裏切り者として追放された。」

「……」

雅紀はその話を聞いて内心怒っていた。何が裏切り者だ、アリスがかわいそうじゃないか。顔には出さなかったが怒りが込み上げてきた。

「そして私は、さまざまな世界を旅して回った。そしてある日に私はライダーの力を手にしたの。」

「それが、デイダーク。」

「うん。そしてある世界に来た。そこはすでに滅びの現象にあったの。」

「……」

「そして、ある少年にあったの。その子は怪人達に傷つけられ、ほぼ瀕死の状態だった……」

「……！」

「そして、私は怪人達を倒した。けどその子はもう死ぬ間際だった……。そこで、私はその子に命を分け与えたのよ。私は怪人だし、人間より寿命があるから。」

「じゃあその子、助かったんだ。」

「うん。今は、ディカオスになって私を助けて、仮面ライダーの絵を描いている。」

「!?!」

雅紀は確信した。その少年が誰なのかを。

「そ、その子って、まさか…」

「うん。雅紀…貴方だよ。」

アリスは笑顔でそう言った。雅紀もこれで謎が解けた。自分は怪人達に傷つけられたのに、目が覚めたら、傷もなかった。自分の命を助けてくれたのはアリスだったのだ。

「アリス…。」

「何?」

「…ごめん…。」

「何で雅紀が謝るの?」

「だって、俺なんかのために、自分の命を分け与えたんだろ? アリスの命を削らせて、ごめんなさい。」

雅紀は深く頭を下げた。それを見たアリスは…

「別に、謝らなくていいよ。だってこうやって雅紀が元気でいられるだけで、私は満足だし。」

「でも…」

「でもない。私は、好きで雅紀を助けたし、命を分け与えたんだよ。だから、雅紀は謝らなくてもいいの。」

「…うん。」

雅紀は少し暗い表情を消した。

「さて、次は、さ、さっきの行動について／＼／＼」

「／＼／」

二人は先ほどの行為を思い出し顔を赤くさせた。

「あの行為はね、恋をした時に発せられる、一種の発情と暴走が交わったものなの。」

「発情と暴走？」

「うん、私の一族はね、異性に恋をした時に人間より凄い発情期があつてね。本能の赴くままその異性と交尾をしたがるの。それは誰にも止められない、ましてや自分自身でも…。その時には瞳が赤くなるのがサインよ。」

雅紀はあの時のアリスの行動を思い出した。確かに瞳が赤くなっていたし、異常なまでに自分を求めていた。

ん、待てよ…？

「となると…アリスってまさか、俺に恋しているの？」

「！…！」

「…まさかね…。だって俺、学校では告白されたことないし。」

「…うん、そうだよ。私は雅紀が好き…。」

「！」

「でも、雅紀は私の事が好きになれない」

「な、なんで？」

「最後に、私の真の姿を見せてあげる。」

そう言つてアリスは立ち上がると、その周囲に黒い霧が発生しアリスを包む。霧が晴れた次の瞬間、雅紀の目に映った物は、体が薄紫の色をして背中には悪魔のような翼に、腰には悪魔のしっぽを生やしていて悪魔のような腕や足を持ち犬歯を伸ばした…アリスの姿だった。

『どう？これが私の真の姿…。』

「……………」

雅紀は茫然としながら、アリスを見ていた。

『怖いよね…？そりゃそうだよ。人間じゃないし…。』

アリスは、嫌われたと思い、暗い表情をする。だが、予想外の言葉が雅紀から返ってきた。

「…綺麗だ…」

『えっ!?!?』

ソレを聞いたアリスは顔を上げ、驚愕の表情を浮かべる。

『そ、そんな事ない！私は…私は…化け物なんだよ…?』

「そんな事ない…！何て言ったらいいのか…綺麗だ…アリス。」

アリスはその一言に驚いたと同時に涙が溢れ出た。

『ほ、本当に…?』

再度聞いてみる。雅紀は真っ直ぐにアリスを見つめ…

「ああ、本当に綺麗だ。」

「『……………雅紀っ!?!』」

そう言ってアリスは雅紀に抱きついた。雅紀は最初こそ驚くも、優

しくアリスを抱き返す。

『嬉しい。雅紀に、そう言ってもらえるなんて…!!』

「アリス、自信持てよ。アリスは人間の姿も綺麗で可愛いし、悪魔の姿でも綺麗だよ。」

『雅紀い…。』

「それに、その姿をバカにした奴は俺が許さない。」

『…うう。』

「それに、アリスは俺の事を受け入れてくれたんだ。だから今度は、俺が、アリスの全てを受け入れる。」

『う、うええええええんっ!!』

アリスは涙を流した。雅紀はそんなアリスの頭を優しく撫でた。

『…雅紀…』

「ん?」

『…んっ／＼／』

『んっ!?!』

雅紀とアリスは何回目かのキスをした。そして唇を離し…

『雅紀、私は、雅紀の事が好き…愛してます。 / / /』

アリスはそう告白した。それを聞いた雅紀は…

「えと…こんな、俺なんかで良かったら… / / /」

そう言い返し、今度は雅紀からキスをした。その味は、熱く、甘い、恋の味。

第10話（後書き）

いや〜カップル成立だね〜。良かったじゃん。

雅紀「ああ。／／／」

アリス「うん。／／／」

全く羨ましいぜ。ちきしょう…

アリス「雅紀…／／／」

雅紀「アリス…／／／」

だ〜〜〜！！おまえら向こうでやれ〜！！！！！！

…さて次回は本編を休みにして能力について、後キャラクターの説明をします…。

雅紀「アリス／／／」

アリス「雅紀／／／」

…ダメだ、コイツら。何とかしないと…

キャラクターとライダーの説明

まず先に主人公から。

木利野 雅紀

年齢14歳の少年で本作の主人公。

趣味は仮面ライダーの絵を描いたり、見たりすること。ほぼ完璧なおタク。

ある日、空からディケイドに出てくるオーロラが出現し、そこから大量の怪人が襲来した。

親友である暁 龍斗と逃げている途中、怪人達に家族を殺される。その後には襲撃にあい、自分は怪我をしてしまう。

龍斗に見捨てられ、自分は怪人達に殺されかける、がその時にアリスに助けられ、一命を取り留める。

目を覚まし、しばらくして自分の世界の人を助けるためにアリスと共に自分の世界に向かう。

女の子を助けようとしたが怪人により殺されてしまいその後には怪人に襲われそうになったが、あるオーロラに包まれる。

そして自分の目の前にいたのは見たことのないライダー、で自分を「選ばれし者」だと言う。

そしてそのライダーの力を受け入れ仮面ライダーディカオスとして怪人達と闘う。

今は、アリスの家に居候していて、アリスの「正体」を知りながら

も、彼女と恋人同士の関係にある。

仮面ライダーディカオス

容姿は紺色のボディにボロボロのマフラーを付けていて、目は「仮面ライダーディケイド 激情体」のような形をしている血のように赤い目。ほぼ悪魔を連想させているような姿である。

今は雅紀が使用しているが、以前はディケイドより恐ろしい最強最悪のライダーとして世界に恐れられていた。変身者（雅紀以外）に強大な力を与える代わりに暴走させて最後には死なすという恐ろしい機能がある。

最後の変身者（雅紀より前の）が変身ベルト「ディカオスドライバー」を無理やり外したためにその変身者は爆死。その爆発の衝撃に、ディカオスドライバーが壊れてしまい、使用不可能とされていた。だが長い時を経て、ディカオスドライバーは修復され雅紀の手に渡る。

同時に、ディカオス専用の武器を「アドベントドライバー」にパワーアップさせた。

身長：198cm

体重：90kg

パンチ：6 t

キック：11 t

ジャンプ力：ひと跳び30 m

走力：100 mを5秒

必殺技は目の前に現れる3D状のカードを突き抜けながら高速で蹴りを放つ「デイメンションブレイカ」

他にも必殺技有り

全てのライダーのカードを持ちベルトに入れて変身したり、アドベントドライブに入れて召喚したりする。

さらに、クウガくWまでのライダーの最強形態に変身することができる「ファイナルカメンライド」というカードを所持している。

アリス

本作のヒロイン。

どこからどう見ても美少女の類にある容姿を持っていて、優しくて料理上手。

雅紀の命を助けた少女で、仮面ライダーデイダークに変身する。

だがその正体は悪魔のような姿（ほとんど人間の時と変わらない）をした怪人なのだ。

だがアリスは人間を殺したり、食べることを嫌っている。

そのことで一族に裏切られ、幾つもの世界を回っていた。

雅紀に恋をしており、その事を発覚した直後に、暴走した。

発情時は瞳の色が青から赤になるのが特徴。

今は雅紀に正体を教え、さらに告白をした後に二人は恋人同士になっている。

アリス 怪人形態

アリスの真の姿。

容姿は体の色が薄紫色で、背中には悪魔のような翼、腰には小悪魔のような尻尾を生やしている。

この姿をアリスは嫌っていたがこれを見た雅紀に綺麗と言われた事からこの姿を嫌いにはならなかった。

仮面ライダーディダーク

容姿は小悪魔を連想するかのような顔付きで、肩には悪魔の翼が装着されている。

アリスが旅の途中に手に入れたライダーの力。

鎌型の変身アイテム「ディダークドライバー」にカードを入れて変身する。

ほとんど近接格闘系に優れているが、遠距離の攻撃ができないのが弱点。

ディダークドライバーを使ってライダーを召喚する。

本編ではライオトルーパーを召喚したが、まだ他にもライダーのカードを所持している模様。

身長：189cm

体重：79kg

パンチ力：5t

キック力：9t

ジャンプ力：ひとつ跳び20m

走力：100mを6秒

以上でキャラクターとライダーの説明を終了。

キャラクターとライダーの説明（後書き）

はあ、終わった。

雅紀「がんばったなあ。」

アリス「御苦労さま、作者さん。」

おう、次回は本編を再開しますのでお楽しみに。

雅紀・アリス「それではっ！」

第11話(前書き)

さーて本編再開だ。

雅紀「よし頑張るぞ！」

がんばれよ。

第11話

アリスと恋人同士になって数日。

「う、うん……」

雅紀はベッドで半分寝ぼけ中。すると雅紀の腕に柔らかい感触がした。雅紀はベッドの中を見ると……

「あ、アリス！？／＼／」

そうアリスが雅紀のベッドに潜り込んでいた。しかも裸で。

「（な、何でアリスが俺のベッドで寝てるの？しかも裸……っ！？／＼／）」

雅紀が混乱していると、

「あ、あん、雅紀い、そこは、そこはダメえ／＼／」

寝言を言いながらアリスは雅紀の右腕を自分の胸に押しつける。

「（何言っちゃてんのーっ！?!?しかも胸押しつけないで!!
／／／）」

雅紀がさらに混乱して頭から湯気を出した。するとアリスが目を開けた。そして軽く背伸びをした。その時に胸が揺れた。

「ふはあく。あ、雅紀、おはよう。」

「あっあっあっ…／／／」

「雅紀?」

「きゅっ…／／／」

そう変な言葉を呟きながら気絶した。それを見たアリスは、

「もう。なら…、えいつ／／／」

雅紀にキスした。

「…うっ?!?／／／」

雅紀は目を覚まし自分がアリスにキスされてる事を知った。

「プハッ、ああ、アリス!?!?／／／」

「おはよう雅紀／／／」

アリスは笑顔でそう言った。

「おはようじゃなくて、なんで裸で俺のベッドに潜り込んでたんだ
よっ!?!? / / /」

雅紀は顔を赤くしながらそう言った。

「だって、私、雅紀と寝たかったし。温もりを感じたかったから /
 / /」

アリスは顔を赤くしてそう呟いた。

「い、一緒に寝たいからって、何も裸で寝ることはないだろうっ!?!?
 / / /」

「だってこうした方が雅紀の温もりを感じやすいし / / /」

「ううゝ / / /」

「もう朝御飯作らないとね / / /」

そう言いアリスは部屋を後にした。

「……最近アリスがなんか大胆になってきた… / / /」

雅紀はそう呟きながら服を着た。

そして二人は朝御飯を食べている。すると、アリスが話しかけてきた。

「雅紀、ほっぺにご飯粒が付いてるよ?」

「え、どいどい?」

アリスにそう言われ雅紀は頬に付いているご飯粒を探す。

「私が取ってあげるからじっとしてて」

「あ、ああ。」

雅紀はじっとし、アリスは雅紀の近くに行き顔を近づけて、

チュッ

とキスした。

「えっ、アリスっ!?!?!」

「ちゃんと取ってあげたからね。(ニコッ)(ノノノ)」

アリスは笑顔でそう言った。

「アリス、何もそんなことしなくても／＼」

「ふふふ、別にいいでしょ？ 私達恋人同士なんだよ？／＼」

「（アリスってキス魔か？）／＼」

「それに、今度は雅紀からしてほしいなあ。キ・ス／＼」

アリスは自分の唇を触りながらそう言った。妖艶すぎる目で雅紀を見た。それを見た雅紀は…

「いや、その、恥ずかしいんですけど…／＼」

「恥ずかしくないよ？」

「アリスはそうかもしれないけどね、俺は…女の子にキスされたのは、生まれて初めてだから…／＼」

「あ、そうか…。うん、しょうがない。」

アリスは一度、舌舐めずりをし、両手を雅紀の頬に添える。

「あ、アリス？／＼」

「慣れさせないとね」

「んっ！？／＼」

アリスがそう言った瞬間、唇が重なる。

「むっ！むううっ！！／／／」

「ん…ん…んふふ　／／／」

雅紀はジタバタ暴れるが、アリスは気にせず、キスを続行。

「ん…ん…ぷはあ…」

「あ、あ、アリス！？／／／」

やがて、唇を離れたアリスに、雅紀は顔を真っ赤にしながら指をさす。

「フフフ　やっぱり、雅紀の唇は気持ち良い…／／／」

アリスは瞳をトロンとさせながら、唇を触っていた。

「（やばい、直視できない！）／／／」

雅紀はアリスを直視できず、顔をそむける。

「フフフ　可愛い／／／」

「／／／」

「フフフ　雅紀、まだ慣れてないのがあるよ？」

「え？」

そう聞こえた瞬間、またしてもアリスが頬に両手を添えて雅紀の顔をこちらに向ける。

「それはね、コレ / / /」

「むううっ!?!」

再び唇が合わさると、何かが、唇を割って、雅紀の口内に侵入してきた。アリスの舌だった。

「んんんっ!?! / / /」

「んん…んん… / / /」

雅紀が驚いている中、アリスは丁寧に自身の舌で、雅紀の舌を絡め取り、刺激を与えていく。舌で刺激されている雅紀は体をビクッビクッと震わせながら、何もできずにいた。

「ん…レロ…んん…プハア… / / /」

「あああああ… / / /」

キスを続けて数分後、アリスは唇を離れた。すると、名残惜しいかのように、唾液の橋ができ、途中でプツンッと切れた。

「あ、アリス…!や、や、やり…! / / /」

雅紀はもう、壊れたロボットのように体を震わせる。それとは対照にアリスは口の周りについていた唾液を舐めとり、怪しい瞳で雅紀

を見つめる。

「フッフ　もう我慢できないや…／／／」

「え？」

「雅紀…今日は前よりも激しくいくからね／／／」

アリスの瞳は何もかも誘惑できそうな赤い瞳に変わる。それと同時に彼女から女性独特の香りがしてきた。

「あ、アリス…？」

「ウッフッフ　さあ、やるうか…？」

そう言った瞬間、アリスは雅紀に襲い掛かった。

「うああああああああつ！？／／／」

この日、雅紀はアリスに食べられたとな…。

第11話（後書き）

今日もエロイ話にしちゃった。テへ。

雅紀「テへ、じゃねーっ！！ディメンションブレイカーー
ーッ！！！」

あつぎゃああああああああああつ！！！！

雅紀「全く、アリスもこいつに怒れよ。」

アリス「…作者さん…。」

ヒイ、は、ハイイ！

アリス「…ありがとね／＼」

雅紀「いや、なぜにーっ！！！？」

ふいっよかつた。さうて次回は雅紀達があの世界に行きます！

雅紀「あの世界？」

気になる人は次回！！

アリス「またね。」

第12話（前書き）

うっ…

雅紀「どうした？」

台本形式が悪いつて書かれてた。

雅紀「まあ、仕方がない。初めての小説だし、間違えることは誰にでもある！」

雅紀…

雅紀「だから元気だせ。」

…わかった…

雅紀「はあ、まあ…その……始まります。」

第12話

「なあ、アリス。」

「ん？なに？」

洗い物をしていたアリスに、雅紀は声をかけた。

「……別の世界に行きたいんだけど……。」

「えっ？」

雅紀は、アリスにそう聞いてみた。

「いやさあ、俺、一回でいいから旅を試みたくて、それに……」

「それに？」

「俺の世界に、なぜ怪人が現れたのか……知りたいから……！」

雅紀がそう言うと、アリスは黙り込み、何か考えている。

「……良いよ。止めても行くこととするんだろうし」

「おおーっ！やったっ！！」

「けど、約束して」

「え？」

「無茶はしない。命に危険があったら、逃げる」

「…わかった」

雅紀は頷いた。

「じゃあ、行き先はどうする？」

「うん、アリスに任せるよ。」

「わかったよ。じゃあ出発っ！」

そう言うとアリスの家がオーロラに包みこまれた。

そして…

「此処が別の世界か？」

「ふふふ、雅紀、アレが何かわかる？」

「え？」

アリスが指差した方を向くとそこにあっただのは…

「あれって…「風都タワー」？」

そこにあっただのは「仮面ライダーW」に出てくる「風都タワー」だった。

「じゃあこの世界って…」

「そう。此処は「Wの世界」だよ。」

そう、この世界は仮面ライダーWが実際に存在する「Wの世界」なのだ。

「じゃあこの町は風都なんだ・・・」

そしてこの町は「仮面ライダーW」の舞台、「風都」なのだ。

「マジか〜！！いきなりWの世界に〜！！！！やばい、滅茶苦茶うれしい〜！！！！！！」

雅紀の興奮度はMAXに達していた。

「雅紀どうする、この後？」

「あ、ああ。やっぱりWの世界に来たとするとまずは…」

そしてとある事務所に来ていた。

アリス「鳴海探偵事務所」。雅紀は此処に来たかったの？」

雅紀「ああ。ここにはあの人たちがいる…」

そして二人はその事務所に入って行った。中に入っていくと…

「ようこそ鳴海探偵事務所へ」

女の人が現れた。

「私はこの探偵事務所の所長をやっている「鳴海 亜樹子」っていうの。よろしくね」

女の人、「鳴海 亜樹子」はそう自己紹介をした。

「おい、亜樹子！お客さんなんだぞ？もうちょっと失礼のないようにしろよな〜！」

そこに男の人が現れた。

「な〜によ、翔太郎君！いいじゃない、まだ子供なんだし。」

亜樹子は翔太郎と呼ばれている人物に言い返した。

「いや、よかね〜よっ!!っ!と失礼、挨拶が遅れた。俺の名はハードボイルド探偵の「左 翔太郎」だ。よろしく。」

かつこよく挨拶したのが仮面ライダーWに変身する一人で主人公の「左 翔太郎」。

「翔太郎、今どきの子供は、ハードボイルドと言っ言葉は知らないよ?」

そして奥からまた男がやってきた。手には本が握られている。

「うっせ〜よ!っ!とまた失礼。コイツは俺の相棒の「フィリップ」だ。」

「よろしくね。」

静かに挨拶をしたのが、この世界で翔太郎と一緒にWに変身する相棒の「フィリップ」。そしてこの3人を見た雅紀はというと…

「(本物の翔太郎とフィリップと亜樹子だ〜!!感激だ〜〜〜!!!!)」

顔には出さなかったが内心大喜びのようだ。

「さてと、君達のお名前は?」

と亜樹子が言ってきた。感動に浸っていた雅紀は現実を引き戻される。

「はい。俺の名前は木利野 雅紀です。」

「そして私はアリス、苗字はありませんのでアリスと呼んでください。」

二人は自己紹介をした。

「雅紀君に、アリスちゃんね。で、依頼で来たのかなあ？」

「いえ、俺達はただ、この町で有名なこの探偵事務所に来たかっただけで、依頼はありません。」

「ああ依頼はないんだ…はあ。」

それを聞いた亜樹子のはあとため息をした。

「オイオイ、そうがっかりすんなよ…。それに俺達はこの町で有名だそうだし、嬉しくはね〜のか〜？」

「まあ、そうだね。ていうかあたし達有名なんだ〜嬉しい」

亜樹子は一気に復活し嬉しがる。

「それに、「この町」って言ったねえ。君たちは風都の人間じゃないのかい？」

すると、フィリップが聞いてきた。

「はい。遠い所から来ました。」

「まあ、遠い所からわざわざ？ 凄いね。」

「俺達、これでも14歳なので。」

「はい。」

そう話していると…扉が開き、全身真っ赤の服を着た男性が現れた。

「左、事件の依頼だ。」

「おう、照井。事件の内容は…？」

「最近出没している通り魔の事件だ。しかもこれの被害にあった被害者に、共通して噛まれた跡があった。しかも同じ箇所だ。」

何やら翔太郎と話している。

「亜樹子さん。あの人は？」

アリスが聞いてくると、亜樹子は自慢げな顔をして話し始めた。

「あの人は「照井 竜」君で言つてこの風都の刑事さんなんだよ。」

今翔太郎と話している人物はこの世界のライダーの一人「アクセル」に変身する「照井 竜」。

「（照井 竜にも会えた…！マジ嬉しいっ！！）」

雅紀が思っている内に話が終わったのかこちらに近づいてくる。

「その子たちは依頼人か、所長？」

「ううん。この子たちはね遠くの町からきた子たちで、この事務所来たかったらしいの。」

「そうか。左、行くぞ。」

「ああ。亜樹子、俺行ってくるから、その子たちに何か菓子でもやっつけてくれ！」

そう言い残し二人は事務所を後にした。

「雅紀。」

雅紀「ああ。」

「何か菓子って言ってもなあ、外で食べに行こうか。二人はどうす……っ!?!?」

亜樹子が雅紀とアリスに聞いてみると、二人はそこにはいなかった。

「あつれ〜?何処に行ったのかなあ。もう帰っちゃったのかなあ?」

そう亜樹子が呟いている中、フィリップは…

「あの二人…どうも気になる…。」

雅紀とアリスの事が気になった。

第12話（後書き）

さうWの世界に来ました。

雅紀「ありがたいぜ、作者！！」

どういたしまして。さて次回は雅紀達が現場へ…。

雅紀「それじゃまた。」

第13話(前書き)

W世界編第2話だ〜〜!!

雅紀「おおっ！前は落ち込んでたのに、凄い回復だなあ。」

まあな！じゃ始まります！

第13話

事件の現場に来た翔太郎と照井は…

「ほとんど、首に噛まれた跡…そして犯行時刻が夜中…どれも共通点がある。」

「うっわあ、こりゃあ酷え…。」

二人は現場にあつた死体を見ていた。首に？み傷がある。

「それに、血を吸われた跡もある。」

「まるでドラキュラだなあ」

「そうですね、これは…。」

「酷い…。」

「ああ……つて！おまえらー！！」

振り向くとそこにいたのは、雅紀とアリスがいた。

「おいっ！！何でお前らが此処にいるんだよっ！？」

「ついてきました。」

「私も。」

「ついてきたって…俺らはバイクで来たんだぞ！？そんなに早く付いてこれるか普通！？」

「おいおまえら、ここは子供が来るような場所じゃない！早く帰れ！！」

翔太朗と照井は二人に怒鳴る。それを聞いていた雅紀とアリスは…

「まあまあ、それに…この犯行は、何やら謎めいています。」

「まるで本当にドラキュラに噛まれたかのような…。」

「…ドーパントだなあ。」

「ああ。恐らくはそうだろう。」

翔太朗は帽子を深く被り、照井は翔太朗に…

「左、フィリップに検索を頼むと言ってくれ。」

「ああ。」

「それと…いい加減あいつらをどうにかしてくれ…。」

「ああ……つてなにやっつてんだおまえらは……!!!!?」

翔太郎が見る先には雅紀とアリスが現場をウロチヨロしていた。そんな二人にだれか近づいてきた

「こらこら、此処は君ら子供がくる場所じゃないよ?」

「早く此処からでていきなさいっ!!」

「おお、刃さん。それとマー君じゃねえか」

そこにいたのは、風都署の刑事の「刃野 幹夫」と「真倉 俊」だった。

「おお、翔太郎じゃないか。」

「またおまえか!!つていつかマー君で誰だ……!!!!」

「まあまあ、落ち着け、真倉。翔太郎、この子達をどうにかしてくれ。」

「あ、はい。おいおまえら!早く来い!!」

「全く騒がしい……。」

雅紀とアリスは、翔太郎に近づき、翔太郎は……

「おいっ!おまえらふざけてんじゃねーぞ!早く家に帰れ!!親が心配しているぞー!」

「はい。行こう、アリス。」

「うん。」

そうやって二人は現場を後にした。

「全くあいつら…。」

「左。」

「あゝ、なんだ？」

「あの子達は…何か怪しい感じがしてならん。」

「そうか？俺にはそうは思わなねえが…。」

「…本当に得体がしれない」

そして雅紀達は…

「本当に帰っていいのかなあ…。」

「ああ。それに犯行は夜中らしいし。そのためにまず家に戻って夜中に備えて寝るのが良いよ。」

「ふうん（なんだろう…。雅紀が何時にも増してかっこよくみえる／＼／）」

そう雅紀は普段は優しそうな顔をしてるが、いざとなるとその顔はかっこいい顔立ちになる。まあいわゆるイケメンに近い顔立ちになる。すると…

ドクンッ

「あっ…（今は…）」

ドクンッ！

「（発情…しちゃう…／＼／）」

「アリス、どうした？」

ドクンッ！…

「（もう、らめえ…／＼／）」

アリスは雅紀に抱きついた。

「あ、アリスッ！？／＼／」

「雅紀い…今夜はあ、寝かせないよお…／＼／」

「アリス、まさかまた発情モードに…!?!」

「雅紀い…えへへ / / /」

「やめて!マジで!犯人探しが… / / /」

「そんなの関係ない / / /」

二人は家に帰って行った。

変わって此処は鳴海探偵事務所

「亜樹子!ちゃんと見てろよ!」

「しょうがないでしょ〜!いつの間にかいなくなっちゃったんだから!~!」

「しょうがねえ、フィリップ!検索頼む!~!」

「ああ。だがその前に翔太郎…」

「何だ？」

「実は先ほど、木利野 雅紀とアリスについて気になったから検索をしてみたんだが……」

「みたんだが……？」

「閲覧できなかった……」

「できなかった？」

「ああ。しかも木利野 雅紀なんて、この世にはいない人物なんだ、それにアリスもだ……」

「何だと！？じゃあ偽名でも使ってたっていうのかよ！！？」

「いや、偽名を使ったとしても本当の名前がでてくるはずだ……」

翔太郎「……あいつら……一体……」

第13話（後書き）

さてWのメンバーは雅紀とアリスを怪しがっています。

雅紀「まあ、そう言う行動してたしな」

まあ、さて、次回はディカオスに変身だ〜!!

雅紀「それでは〜。」

第14話(前書き)

よし今日も頑張るぞ!!

雅紀「おお……」

雅紀、どうした？

雅紀「あ……アリスが……」

アリス「雅紀……見つけたよ……」

雅紀「ヒィ!!」

アリス「さあ、私と一緒に気持ちいい事たくさんしようね / / / 。

」

雅紀「あ~~~~ね~~~~……」。

……がんば、雅紀……。

第14話

此処、鳴海探偵事務所では…

「首に噛み傷…夜中…血…」

今フィリップは自信の脳内に存在する「地球の本棚」で検索中。次から次へと、本が出たり入ったりの繰り返しをしている。

「うん…いまいち割り出せない。」

「そうか。まだキーワードが必要だなあ。」

「それに翔太郎、そろそろ夜中だ。犯人が現れる時刻になりそうだよ。」

「そうだなあ。よし、俺は行くから、おまえは待機してくれ、いつでも変身出来るようにな。」

「わかった。」

翔太郎は外に出て犯人を捜しに行った。

「…木利野 雅紀…」

フィリップは一人、雅紀の事を考えていた。

「彼は、一体何者なんだ…？」

そして、翔太郎は…

「ん？おお、照井じゃねえか。」

「左か。」

照井を発見した。

「おまえも犯人を？」

「ああ。犯行は夜中だからな、この時間帯に犯人はきつと来るはず

だ。」

「そうか。」

「それと左、検索の方はどうなっている？」

「ああ。まだキーワードが足りないんだ。」

「そうか……っ！？左、見つけたぞ……！」

照井の視線には羽を羽ばたかせた奇怪な怪人が姿を現した。

「あいつが犯人か……！」

「くるぞっ……！」

「キシヤアアアッ……！」

怪人の攻撃をかわした二人は、それぞれ構える。

「フィリップ！変身だっ……！」

「わかった」

翔太郎は変身アイテム「ダブルドライバー」を腰に付けた。同じくフィリップにも同様にダブルドライバーが腰に出現。そして翔太郎は一本の黒いメモリを取りだし、ボタンを押した。

「ジョーカー……！」

一方、探偵事務所にいるフィリップは緑のメモリを取りだし、ボタンを押した。

『サイクロンッ！』

そしてお互い左右非対称に構え…

「「変身っ！！」」

そう叫び、フィリップはメモリをダブルドライバーの右側に付けた。するとメモリは消え、フィリップはその場で倒れてしまった。

翔太郎のドライバーから、フィリップのメモリが出現しそれをちや

んとドライバーに差し込み、手に持っていたメモリをドライバーの左側に入れてドライバーをWの形にした。

『サイクロンツ！ジョーカーツ！！』

ベルトから音声が鳴り、同時に二つのメロディまで流れた。途端、翔太郎の体は緑と黒の光に包まれ、現れたのは・・・、右が緑で左が黒の左右非対称のボディを持った戦士がいた。

『さあ、お前の罪を数えろっ！』』

左手を怪人にさしながら、そう言い放つ。このライダーはWの世界の仮面ライダー「W」なのだ。

そして隣では、照井がハンドル型変身アイテム「アクセルドライバー」を腰に付け、そして橙色のメモリを取りだし、ボタンを押した。

『アクセルツ！』

「変…身！」

そう叫び、照井はメモリをドライバーの中央に入れ、右のハンドルを握る。

『アクセルツ！』

音声が響くと同時に、バイクのエンジン音のようなメロディが流れ、照井の体は橙色の光に包まれ、光から紅蓮のボディをした戦士が現れいつの間にか手に持っていた剣型アイテム「エンジンブレード」を振り上げた。

『さあ…振りきるぜッ!』

このライダーはWの仲間、「アクセル」だ。

『キシヤアアアアッ!』

怪人が襲ってきた。それを避けたWとアクセルは反撃しようと攻撃したが怪人を見失い、その攻撃は空を切った。怪人は四方から襲ってきて、その攻撃が全部、Wとアクセルに当たった。その後怪人は、暗闇で姿を消した。

『まずいよ翔太郎。あのドーパント、暗闇を利用して攻撃してくるから反撃ができない!』

『くそっ!どうすりゃあ…!』

『来るぞ!』

アクセルが言い放つと怪人が高速で襲い掛かった。その時だ。

『アタックライド・ブラストッ!』

音声が響き渡り、どこからともなく紺色の弾丸が怪人に直撃する。

『キシヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！』

怪人は奇声の声を上げて落下した。

『だ、誰だっ！？』

怪人が周りを見ながら言い放つと、コツーンツコツーンツと足音がした。Wとアクセル、そして怪人は足音がした方を見ると、そこにいたのは…

『ほう、まるでドラキュラのような姿をしているなあ』

？『なんか気持ち悪い』

二人組の何者かが現れた。

『な、なんだ？貴様らはっ！？』

怪人がそう言うと、その二人は、

『最強最悪のライダーだ・・・！』

『そして私はその彼女だよ』

姿を現したのは仮面ライダーディカオスとディダークだった。

第14話（後書き）

さあ、Wとディカオスが対面したぞっ！

雅紀「なんかカツコイイ登場だなあ」

アリス「そうだね」

だろう？さて次回はディカオスとディダークの活躍が見られます！

雅紀・アリス「お楽しみに〜！」

第15話(前書き)

さあ15話目だ！

雅紀「早いな」

おうよ！じゃ、始まりだー！！

第15話

Wとアクセル、さらに怪人の前に現れたディカオスとディダーク。

『ちょっと遅れちゃったね。』

『全く、もとはと言えばアリスが…』

回想

「はああああんっ…！雅紀…大好きだよお…／／／」

「やめ…て…は、早く行かない…と、は、犯人が…！」

「だーめえ…まだ雅紀と一つでいたいのお…／／／」

「もう、だ、だめら…よ…あああああっ…！」

「ああああんっ
」

回想終了

『だって発情したら止まらなくなっちゃうし。それに雅紀もいけな
いんだよ、あんなに私の中で暴れるんだから…逆にペースアップし
ちゃよお　／／／』

『何でさあ…てか、俺はアリスにやられていたんですけど…／／／』

二人が何やらエツちな事を言っている内に…

『貴様らあ…いい加減にしろ～～～～!!!!』

怪人が二人に襲い掛かった。それに気づいたディカオスとディダークは…

『よつと!』

『ハツ!!』

怪人にパンチとキックをかまし、怪人を吹っ飛ばした。

『ギイイイツ!!』

怪人が睨みつけているが、二人は平気そうにしている。

『左 翔太郎…それとフィリップ。』

『なっ!?!』

『何で僕らの名前を…!?!』

Wが驚いている中、ディカオスは一枚のカードを取りだした。

『あなた達に、良い物を見せましょう。』

そう言いカードをベルトに挿入した。

『カメンライド』

そして…

『変身！』

そう叫び、同時にベルトのレバーを押した。

『スカルツ！』

ベルトが発するとディカオスの周りに風が起き、さらには痺れるようなメロディが流れる。そしてディカオスの姿は別の物になっていた。その姿を見たWは驚愕した。

『あ、あれは…』

『仮面ライダー…スカル！！』

そう今ディカオスが変身した姿は、骸骨をモチーフにしたライダー「スカル」だった。Dスカルは左手に持っていた白い帽子を頭にかぶせ、右手を怪人に向けて…

『さあ、お前の罪を…数えろ…！』

決め台詞を呟いた。

『姿を変えたところでえ…！！』

怪人が突進を仕掛けてくるが、Dスカルは慌てず一枚のカードを出し、ベルトに挿入。

『アタックライド・スカルマグナム』

するとベルトから、黒い銃がでてきた。Dスカルはそれを持ち、銃口を怪人に向けた。

『そらよっ!』

スカルマグナムを連射し怪人に当てる。コレを食らった怪人はひとたまりもない。

『ギイイイイアアアッ!!!』

『どうした?ドラキュラさんよ...!』

Dスカルは容赦なくスカルマグナムを連射し、怪人はそれを避けたが、所々掠りダメージを負ってきたその光景を見ていたWは…

『うそだろ…なんで…』

『何で彼はスカルに変身を…メモリやドライバーを使わないでどうやって…!?!?』

『左!フィリップ!あのライダーに見覚えがあるのか!?!』

『あの姿は、翔太朗の師匠で亜樹ちゃんのお父さん、「鳴海 荘吉」変身していたライダーだ。』

そう今デイカオスが変身しているライダー、スカルは、かつて翔太朗の師匠で、Wが誕生した日、「ビギンズ・ナイト」の時にミュー

ジラムと呼ばれる組織の手下の銃撃に合い、命を落とした「鳴海莊吉」が、変身アイテム「ロストドライバー」と「スカルメモリ」と呼ばれるメモリを使用して変身した姿なのだ。

『そうだったのか。』

『それはともかく、あのライダーが一体何者なのかが問題だ…！』

Wとアクセルが言ってる中、Dスカルは怪人にトドメをさそうと一枚のカードをベルトに入れた。

『ファイナルアタックライド・ス・ス・ス・スカルツ！』

Dスカルは左手で頭の帽子を抑え、スカルマグナムの銃口を怪人に向けた。するとスカルマグナムの銃口が怪しく光だした。そして…

『スカルパニツシャーツ！』

Dスカルが叫ぶと同時にスカルマグナムから先ほどより、威力の高い光弾が発射され、怪人に向かって行った。怪人はそれを恐れてスピードを上げて一気に上昇し、大半は避けたが、右足に直撃し少しよろけたがなんとか持ちこたえ暗闇にまぎれ姿を消した。それを見たDスカルは元のデイカオスに戻った。

『逃げられたか…。』

『しょうがないよ。帰ろう。』

『ああ。そうし…』

『待てっ！！』

二人が帰ろうとすると、WⅡ翔太郎が叫んだ。二人がそちらを振り向く。

『てめえっ！！何者なんだ！？』

お決まりのセリフを吐くW。

『最初に言っただけです。俺は、最強最悪のライダー…だとね。』

『んだとっ！』

『それにどうやって君はスカルに変身した？メモリもなしにどうやって…？』

フィリップの質問にやれやれというようなポーズを取り…

『それは、企業秘密…みたいなもんですよ。じゃあね。』

そう言って、マシン「デイクイザー」に乗り二人はその場を去った。

第15話（後書き）

さうでドーパントに逃げられ、Wメンバーは疑問を持ち始めています。

雅紀「まあそりゃあスカルに変身したんだから怪しまれるだろう。」

そつだなあ、さてと次回はディカオスとWが戦うかもしれません。

雅紀「かもってなんだよ。それではまた。」

第16話

マシンデイクाइザーに乗り家に帰る最中の雅紀とアリス。だが雅紀は背中に違和感を感じている。それは…

ギュウッ…

「あ、アリス、もうちょっと力緩めてくれない？／＼／」

そう今アリスが雅紀の背中に抱きついていてるのだ。

「ふふふ、雅紀の背中…温かい…／＼／」

そうアリスは言いながらさらに抱きしめる力を強める。

「ちょ、アリス！力強すぎ！！それと胸が当たってる！緩めて！！」

雅紀は背中に痛みと柔らかい感触がして少し興奮している。

「雅紀は、私が抱きついていたら…いや？」

アリスは美少女にだけ存在する武器「涙目になりながら上目づかい」を雅紀にぶつけた。それを見た雅紀はドキツとし、顔を赤くしながら言う。

「い、いやじゃない…だから…その顔はやめて…／／／」

その返事にアリスは嬉しそうな顔になった。

「フッフ 嬉しいよ雅紀。じゃあ雅紀の為にもっと抱きつくっ！／／」

そう言いアリスはさらに抱きつく。今度は胸をぎゅっつと押しつけた。その感触に雅紀はさらに興奮した。

「あつっ…／／／」

こつという感じで雅紀アリスは家に帰って行った。

その頃、Wのメンバーはというと…

「……………」

翔太郎は一人、暗い表情で椅子に座っていた。

「ね、ねえフィリップ君、竜君…。翔太郎君どうしたのかな？」

「仕方がないよ…。翔太郎にとってあの時の光景は驚くしかない…。」

あの時とはディカオスがスカルに変身して怪人と闘っていた時の事だ。

「左は置いといてさっきのライダーだ」

照井は冷静でいる。フィリップも、気持ちを切り替える。

「ああ。恐らくあのライダーは幾つもの姿になれるタイプだろう。Wやアクセルにまでなれるのかもしれない。」

「しかも、あのライダー、力を出し惜しみしていた。そしてその仲間であるかもしれないライダーも、もしかしたら…。」

フィリップと照井はディカオスとディダークの事を分析した。

「それに、さっき検索をして見た。だがあのライダー達について全く閲覧できなかった。」

「正体不明のライダーが二人も…か。」

照井が呟くと辺りはしんと静まり返った。するとフィリップは、あ
ることに気がついた。

「木利野 雅紀…アリス…」

「何っ？」

「彼達がこの風都に来てからあのライダーが出現した…。それに同
じく彼らとあのライダー達は地球の本棚を使っても閲覧できなかつ
た…。はたしてこれらを偶然で済ませて良いのか…？」

フィリップは何やらブツブツと呟く。そして…

「もしかしたら…木利野 雅紀とアリスがあのライダー達なのかも
しれない！」

「何を言うか…さっきのライダー共はどう考えても成人の体系をし
ていた。それにあの子達とは体系が似ても似つかない…。」

「恐らく変身したらああいう風になるのかもしれない。」

フィリップはそう判断した。

「こうしていても仕方がない。明日彼らを探そう。遠くから来たの
だから、どこかの宿屋に泊っているのかもしれない。」

「俺も手伝おう…。左がこんな状態では一人で探すのは大変だから
な。」

フィリップと照井は狙いを雅紀とアリスにしぼった。

一方雅紀達はとうとうと…。

「ふあああああつ、もう寝ようか。」

雅紀は欠伸をしながらベッドに入ろうとすると…

「今日は私、雅紀と寝たい。／＼／」

「えっ？アリス、何言ってるの？」

「ダメ…かな…？」

アリスは上目づかいをして雅紀を見た。

「ちよっ！？ま、待ってくれ。流石に、その目で見つめるのは…／
／」

「もう、なら、強引に雅紀と寝ちゃう / / /」

アリスは、雅紀のベッドに潜り込み、雅紀の体に絡みつくように抱きついた。

「え、ちよつ！？アリス、どこ触って…はにゃあああああああああああつ！！！？ / / /」

こんな感じで、夜は過ぎ去った。

第16話(後書き)

さあどうなるだろうか…雅紀とアリス…!!!?

雅紀「まあその時は戦う。」

おお、そうか。さて次回はWファンングジョーカーVSディカオスだ
!!

アリス「それでは!」

第17話(前書き)

さあ夢の対決の日が来ました!!

雅紀「勝つてやるよ!」

アリス「がんばれ〜／＼／」

始まります!!

第17話

ここ、アリス宅の寝室

「う、うん…」

朝日を浴びて雅紀は眼を覚ます……。そしてアリスの方を見ると…

「…寝顔も可愛いな…//」

アリスは美少女だから寝顔も破壊力抜群！そんな雅紀は…

「（寝てるから…いいよね？というか、キスされてるから、たまには…）」

そう思いながら、自分の顔をアリスの顔に近づける。そして雅紀の唇がアリスの唇に触れかけた瞬間…

「ふゆう…？」

アリスが目覚め、顔を見合った。雅紀は急いで離れようとした瞬間…

「むがつ!? / / /」

「むう…ふづ… / / /」

アリスが雅紀を捕まえて、唇を合わせた。そして離さないようにギョツと抱きついた。

「むっ…ふづづ… / / /」

「んっ…んん…んふう…プハア… / / /」

そして唇を離れた。

「フフフ そんなコソコソしなくてもいいのに。雅紀ならいつでもOKなのに / / /」

「いやあその…えと… / / /」

もじもじしながら話していると、アリスは微笑みながら雅紀に抱きつく。

「フフフ ありがとう。もじもじしている雅紀も可愛いよ / / /」

「うづづ… / / /」

「さて、朝御飯の支度をしないとね。楽しみにしててね / / /」

アリスは雅紀に軽くキスをして部屋を出て行った。

「あづづづ… / / /」

一方そのころフィリップ・照井・亜樹子の三人はというと…

「ああ、此処にもいないよお…。」

三人は今ホテルにいて、雅紀とアリスを探していた。

「もう全てのホテルを見てきたがないなんてな。」

「そんなはずはないんだけど…だとすればどこに？」

フィリップは頭をフル回転させて考えた。すると…

「もうこれぐらいで良いかな。」

「そうだね。」

聞き覚えのある声ができて三人はそちらを振り向くと…

「ごめんね雅紀。材料がなくなっていたの忘れていたから、御飯食べると遅くなっちゃって…」

「別にいいよ。それにアリスの御飯楽しみだしね。」

「ふふ、じゃあ雅紀のために早く帰って作らないとね。」

二人の周りだけ桃色のオーラ、もとい、甘い恋の空間が発せられている。

「なんかあそこだけ桃色空間が広がっているよ…。」

「ああ。俺にも見える。」

「兎に角、見つけた。」

三人は二人に近づいた。二人は三人に気付き、振り返る。

「あ、こんにちわ。昨日は申し訳ありません。」

「亜樹子さん、黙って帰ってごめんなさい。」

軽く謝罪した。すると、フィリップが一步前にで…声をかける。

「君達に話がある。ちょっと付き合ってくれないかい？」

「」「？」

五人は人気のない場所に来た。

「で、話とは何ですか？」

雅紀が質問しフィリップが言った。一方のフィリップは顔を険しくしている。

「単刀直入に言わせてもらおうよ。君達が先日に見れた仮面ライダーかい？」

「え？何ですかそれ？」

「昨日の夜中、正体不明の仮面ライダーが二人現れてな。」

「それで検索を試みたら、その仮面ライダーの事が全くわからなかった。」

「はあ…。じゃそのライダーと俺達と、どういう関係なんですか？」

「君らが現れた日にそのライダーが現れ、さらには君らと同じく閲覧できなかった。君らはこの世に存在しない人物なんだ。」

「……」

「君らは、一体何者なんだ…?」

トーンの低い声でそう言った。照井も眼を鋭くさせて二人を見ている。

「全く、なんかもう訳わかんなくなります。」

「うん、突然そんなこと言われてもね…。」

困った顔で二人は言う。すると、亜樹子が四人の間に入ってきた。

「ほら…フィリップ君も竜君もなんか誤解してたんじゃないの?」

「亜樹ちゃん、油断しちゃダメだ…。」

「ああ。所長、こいつらは得体が知れない。」

それを見た二人は…

「そこまで疑われてるんじゃない、もう、隠す必要ないかな。」

「そう…だね…!」

二人は真剣な目でフィリップと照井を見た。特に、アリスの方は若干、殺気を混ぜている。

「（雰囲気が変わった…。）」

「それが本性なんだね？」

二人は警戒した。

「そうですね。で、どうします？ 穩便に済ませるわけにはいかないんでしょう？」

ディカオスドライバーを構えた。同じくアリスもディダークドライバーを構えた。

「そのつもりだ。お前達は、後で署で話を聞かせてもらう。」

照井はアクセルメモリとアクセルドライバーを取り出した。フィリップはスタッグフォンという携帯電話を取り出し、耳に向けた。

一方、翔太郎は、スタッグフォンが鳴り、耳向ける。

「もしもし…。」

声からしてまだ元気ではない。

『翔太郎、「ファング」に変身するよ…！』

「はあ？おまえ何言って…」

『良いから早く！』

「わ、わかった…。」

フィリップの声を聞き、何か大変な事が起きてると思った翔太郎は、通話を終えスタッグフォンをポケットにしまい、腰からダブルドライバーが出現した。

『ギャオオオオッ！』

するとどこからともなく薄い青色をした恐竜型の小型のメカが現れ、フィリップの手元に乗る。そしてフィリップはそのメカを変形させ、恐竜の顔にさせた。そのメカの先にメモリがあり、フィリップはそのメモリのスイッチを押した。

『フアングウッ！』

同じく探偵事務所でも翔太郎がジョーカーメモリのスイッチを押した。

『ジョーカーッ!!!』

翔太郎とフィリップは変身ポーズをし…

「変身っ!!」

そう叫び、翔太郎はジョーカーメモリをダブルドライバーにセットした。するとジョーカーメモリは粒子となって消え翔太郎は魂が抜けたように倒れた。

フィリップの方のドライバーにジョーカーメモリが出現しそれをちやんとセットし、フィリップはファンゲメモリをドライバーに差し込みドライバーをWの形にした後、ファンゲの本体をダブルドライバーに取り付けた。

『ファンゲウツ！ジョーカー！！』

フィリップの周りに風が起き恐竜の叫び声に似たメロディとジョーカーから発するメロディが流れ、フィリップの体はだんだん姿を変えた。その姿はWなのだが、腕や足、さらには顔に突起物が生えており、荒々しい姿となっていた。これがフィリップの体をベースにし変身する「仮面ライダーW ファンゲ・ジョーカー」なのである。

『おいおいこいつら昨日の…。フィリップなんで？』

『彼らが昨日僕らの前に現れたライダーだ・！』

W「フィリップは冷静にそう言った。翔太郎はその言葉に驚いた。

『なっ！？んなバカな…』

「それを証明します、翔太郎さん。いくよ、アリス。」

「うん…！」

雅紀はディカオスドライバーを腰に付け、カードを取りだした。アリスもカードを取り出し、

『カメンライド』』

と雅紀はデйкаオスドライバーに、アリスはディダークドライバーにカードを挿入する。

「変身ッ！！」

『デйкаオスッ！』

『ディダークッ！』

それぞれ音声が鳴り二人は仮面ライダーデйкаオスと仮面ライダーディダークに変身した。これに翔太郎は驚愕すると、同時に怒りを覚えた。

『おまえらっ！』

W 翔太郎は左の拳を強く握った。

『おまえら…行くぞ…！』

照井はいつの間にかアクセルに変身しエンジンブレードを構えた。

『いくよ翔太郎っ！』

『あ、ああ！』

『さあ、お前達の罪を数えろっ！』』

ファンゲジョーカー
WFJは二人に指をさしてそう言った。

『俺達には罪はないんだけど…。アリスはアクセルの方を頼むよ。』
『任せて…!』

二人も身構えた。そして、四人はその場を動かこうとしない。次の瞬間…

『ハアアアアッ!』

『フツ!』

同時に動いたディカオスとWFJは拳をぶつけ合った。

『ラアアアアアッ!』

『ハアッ!』

アクセルとディダークは互いの武器でぶつかり合った。

WFJは拳や蹴りなどを使った荒々しい戦法をしていたが、ディカオスは余裕な態度でそれらを全部かわした。これではらちが明かないとWFJはディカオスから距離を置きファングのタクティカルホーンを一回弾いた。

『アームファングッ!』

WFJの右腕から長い刃が現れた。

『ウアアアアアッ!』

叫びながら、WFJはディカオスに斬りかかった。

『（おおっ！生のアームファングだっ!! かけ〜っ!! つと〜っ!! つと〜っ!!）
と、そんなこと思ってる場合じゃない!』

心中そう思った。WFJはアームセイバ で斬りかかり、ディカオスはアドベントドライバーでそれを受け止めた。

『君らはどうやってライダーの力を手に入れた!? それにどうしてスカルの事を知っているんだ!!?』

WFJはフィリップは質問した。その問いにディカオスは…

『前にも言ったはず…それは企業秘密だっ!!』

そう叫びアームセイバ をはじき、WFJを斬って吹っ飛ばした。

『ガッ!!』

『なんて重い一撃だ…!!』

WFJはディカオスの一撃に驚いた。

『近距離の攻撃はダメだ!』

そう言っつて、タクティカルホーンを二回はじいた。

『シヨルダーファンゲツ!』

今度は右肩から鋭利な刃物が出現。それをWFJは掴み取りディカオスに投げた。すると、刃は不規則に動いて、ディカオスに向かって飛んでいく。

『近距離がダメなら遠距離か…』

ディカオスはカードを一枚ベルトに入れた。

『アタックライド・スラツシュツ!』

アドベントドライバーの刃先が紺色に輝いた。ディカオスは回転しながらその勢いでブーメランをはじめ気飛ばす。

『なっ!?!』

『シヨルダーセイバ を弾き飛ばした!?!』

WFJが驚愕している中、回転しながらディカオスはアドベントドライバーを銃形態にさせ、WFJに連射した。その攻撃に気付いたWFJは防御しようとしたが時すでに遅し。全弾命中してしまった。

『うおっ!?!』

『すごい戦闘力だ。攻撃や防御の仕方…反応速度も僕らより勝るなんて…』

WFJはディカオスが自分達よりも強いと知った。

『フィリップ！マキシマムで反撃だっ！！』

マキシマムとは、Wやアクセルのように、メモリを使ったライダーが使う必殺技のこと。本来の名は「マキシマムドライブ」。

『わかったっ！』

WFJはタクティカルホーンを素早く、三回弾いた。

『ファンゲウツ！マキシマムドライブッ！！』

するとWFJの右足から刃が出現し同時にエネルギーが込められる。そして…

『ハアアッ！！』

WFJはジャンプし…

『ファンゲストライザー！！！！』

右足を前に出し高速で回転する。同時にファンゲのオーラが現れ、デйкаオスに接近する。

『ファンゲストライザー…高速回転しながら強烈な蹴りを食らわす、ファンゲの必殺技。だけど…』

デйкаオスは構え一枚のカードをとりだした。

『それには弱点がある。それは…』

カードをベルトに挿入する。

『真っ直ぐにしかいけないことだっ!!!』

『アタックライド・ソニックッ!』

そう言った途端、ディカオスは、消えた。

『何っ!!?!?』

WFJは驚愕していると、ファングストライザーは地面にクレーターを残しただけでディカオスにダメージを与えられなかった。

『あいつ、消えただとっ!?!?』

『そんなことが可能なのか!?!?』

WFJは困惑していると…

『避けないと、危ないですよ?』

上空から声が聞こえ、WFJは上空を見た。そこには…

翔太郎『な、なんだありゃっ!?!?』

そこにはディカオスがいた。だが、そしてその前には巨大なエネルギーの塊があった。

『大きい…。なんて密度のエネルギーなんだ…!!』

そう言っている内にディカオスは…

『これで、終わりです…！受けてみるッ…！！』

アドベントドライバーの引き金を引いた。

『デイメンションレイザー…！！…！！…！！』

アドベントドライバーから極太のビームが放たれた。それを見たW
FJは…

『ウソだろおッ…！！？』

『ダメだ…！避けられない…！！』

ビームに飲み込まれた。

『ぐああああああああつ…！！…！！…！！』

『うわああああああああつ…！！…！！…！！』

断末魔をあげて敗退した。そして後に煙が立ち込めた。そこには巨大なクレーターが残りその中心にボロボロのフィリップが倒れていた。

「うっ、うっ、うっ…」

そこにディカオスがフィリップに近づいた。

『大丈夫ですか！？』

フィリップ「大丈夫って、君がやったんだろ…。」

『すいません！！わざとじゃないんです！！』

デйкаオスはその場で必死に土下座した。

「ぐ…それよりさっきはどうやって消えたんだい？」

ボロボロの体で立ち上がろうと、するが、フラフラとなっていたので、それをデйкаオスが支えた。

『あ、さっきのは「神速」を使っただんです。』

「神速？」

『ようは超高速を超えた高速移動をしたんです』

その説明でフィリップは驚いた。がすぐに笑顔になり…

「神速…実に興味深い…！」

『は、ははは…（そう言えば、フィリップさんて検索バカと言われるほど、地球の本棚で検索しまくっていたっけ…。）』

「今度は負けないよ…？」

『はい。えと、今度は「エクストリーム」で手合わせ、お願いします。』

「エクストリームまで知っているなんて…本当、君は何者なんだ？」
何だかんだで和解している二人。すると…

「いやあ、物凄い爆音がしたから来てみれば、凄い光景ですねえ…。」

そこに黒いスーツと帽子を着てステッキを持った男が現れた。

『あ、あの人は…！』

「井坂…深紅朗…！」

そう。そこにいたのは、去年の八月に照井竜の家族を殺した連続凍結事件の犯人、「井坂 深紅朗」だった。

「いやはや、仮面ライダー同士が対決していたとは…。しかもその内の二人は見たことのないタイプですねえ…。」

そう言いながら、ポケットから骨組み状の黒いガイアメモリを取り出し、ボタンを押した。

『ウエザーツ！』

そして、耳にある生体コネクタにガイアメモリを収入した。すると、井坂の周りに竜巻や雷などが発生し、姿を現したのは数々の気象を操る「ウエザードーパント」だった。

『さあ、その体、診察してあげましょう…！』

第17話（後書き）

とうとう現れたウェザードーパントこと井坂 深紅朗…！

雅紀「まあ、薄々そうだと思ったんだけどな…」

この調子だと園咲家が現れるだろうな。

雅紀「さて次回はどうなるか？」

デイカオスVSウェザードーパント！そして照井が暴走！？

アリス「お楽しみに！」

第18話(前書き)

さてウエザードーパントとの戦いが始まりますっ！

雅紀「負けられないっ！」

第18話

突如、現れた井坂 深紅朗ことウェザードーパント。その姿を見ていたディカオスこと雅紀は…

『（井坂からとんでもない威圧感を感じられる…！これほどなのかな…！？）』

内心で井坂から発する威圧感に驚愕していた。

『フフフ…さあてその力、じっくりと見させてもらいましょう…！』
右手を上に向けてそう言い放つと、ウェザードーパントの上に暗雲が集まりゴロゴロと鳴った。

『やばっ！…！』

身の危険を感じたディカオスはカードを取り出しベルトに挿入しよとした、その時、暗雲から落雷がディカオスとフィリップにめがけて発射された。

『アタックライド・ソニックッ！』

落雷が当たる直前にディカオスは神速を可能にする「ソニック」の

カードを使い避けた。その能力にウェザードーパントは驚きと同時に魅了された。

『素晴らしい…！まさかそんな能力があるとは…ますます君に興味を持ちましたよっ…！』

そう言いながらさらに落雷を放った。だが神速を使っているディカオスにほとんど避けられた。

『さすがはあらゆる気象を操るウェザードーパント…強敵だな…！』

「君は井坂 深紅朗の事まで知っているのかい…！？」

驚愕の表情を出しながらフィリップは言った。

『はいっ！連続凍結事件の犯人だという事も、竜さんの家族を殺した張本人だという事もっ…！』

そう言いながらディカオスは避け続けた。それに少々苛立ちを覚えたウェザードーパントは…

『すばしっこいですねえ…。ならこれはどうですかっ…！』

ウェザードーパントは目の前に竜巻を起こし、それをディカオスとフィリップに当てた。

『フィリップさんは後ろにいてください！』

フィリップを降ろし、アドベントドライバーを構えカードをベルトに入れた。

『アタックライド・スラッシュッ!』

『ハアアアアアアッ!!!』

ディカオスは「スラッシュ」のカードを使い攻撃力が増したアドベントドライバーで竜巻を一刀両断した。

『何っ!?!』

ウエザードーパントはこれに驚愕。

『ハアッ!』

さらにディカオスはウエザードーパントに向けてエネルギーの刃を放った。これがディカオスの持つアタックライドカード「スラッシュ」のもう一つの能力、相手に向けて飛ぶ斬撃を放つという能力なのだ。

『ぐあぁっ!』

エネルギー刃がウエザードーパントに直撃した。だが軽く傷を負わせただけでダメージはあまりなかった。

『フフフフフ…!面白い力をお持ちのようですね…。』

ウエザードーパントは不気味に笑っていた。ソレを見たディカオスは身の毛がよだつ感じを覚える。

『だが、この私の敵ではないっ!?!』

ウエザードーパントはディカオスの上空にだけ大量の雨を降らした。

『うおっ！？』

ディカオスは抜け出そうとしたが、周りに雨水が溜まり、やがてディカオスを包み込んでいき、ディカオスは身動きが取れなくなってしまった。

『さあ、そんな濡れた体に電気を通したらどうなりますかねえっ！』

ウエザードーパントはディカオスに向けて稲妻を発射した。ディカオスはそれを直撃してしまった。

『うわああああああっ！！！！』

ディカオスのボディから大量の火花が立ち、断末魔を上げた。そして、水溜まりははじけ飛び、中から煙を上げているディカオスの姿が見えた。

『かはっ…』

ディカオスは強制的に変身が解除され、雅紀の姿に戻った。雅紀の体は所々火傷を負い、服もボロボロになっていて、口からは血を吐きだしていた。

「木利野 雅紀っ！！」

フィリップは雅紀の体を抱き起こした。

「しっかりするんだっ!!」

「ふい…ファイ…リップ…さん…。」

かろうじて意識は保っているも、弱弱い声を出しながら雅紀は言った。

『ほう、これはまた驚きました。変身していたのは子供だったとは…』

そんなウエザードーパントに突撃してくる者がいた。

『井坂アアアアツ!!!!』

先ほどダイダークと闘っていたアクセルがウエザードーパントに斬りかかってきたのだ。

『ほう、復讐鬼くんのお出ましですか…。』

『井坂、貴様だけはアアアアツ!!!!』

とエンジンブレードにメモリを挿入する。

『エンジンッ!』

エンジンブレードのレバーを握ると…

『エレクトリックッ!』

エンジンブレードの刃先に稲妻が発生しアクセルはそれをウエザードーパントにぶつけた。

『全く君もしつこいですね……。』

だがウエザードーパントはそれを片手で持ち防いだのだ。

『何イツ！？』

『君では私に勝つことは…できませんっ！…！』

ウエザードーパントは高熱を持った拳でアクセルを吹っ飛ばした。

『がっ！』

アクセルは小さい悲鳴をあげて倒れたが、なんとか立ち上がり…

『エンジンッ！マキシマムドライブッ！…！』

アクセルはマキシマムを発動。エネルギーをエンジンブレードに込めた。

『ハアアアアッ！…！』

アクセルは目の前でAの文字を作り出しそれをウエザードーパントに向けて放った。アクセルの必殺技の一つ、「ダイナミックエース」だ。

『…！』

ウエザードーパントは無言でそれに直撃した。辺りに煙が上がる。

『どうだっ！！』

そう言い放つが束の間、ウエザードーパントは体から冷気を出しながら無傷の状態で立っていた。

『なっ！！？？』

『効きませんよ。学習能力がないねえ、君は…』

アクセルに対して、平然と言い放った。それを聞いたアクセルは怒りに震え…

『アクセルッ！マキシマムドライブッ！！』

もう一度をマキシマムを発動。体を燃え上がらせ勢いよくジャンプし…

『うらあああああっ！！！！』

雄たけびを上げながら蹴りを放つ。アクセルのもう一つの必殺技「アクセルグランツアー」だ。

『全く、本当に学習力のない小僧だっ！！』

叫びウエザードーパントは冷気を勢いよくアクセルに放った。

『なっ！！？？』

みるみる内にアクセルの体はだんだん凍り始めた。

『さらばだ…!』

ウエザードーパントは勢いよくアクセルに蹴りを放った。

『ぐわあああああッ!…!』

アクセルは体に火花を出しながら吹っ飛ばされ、変身が解除された。

「ぐ、がは…っ。」

『本当にバカだよ君は…』

そんな照井をウエザードーパントは皮肉を込めた目で見た。すると…

『許さない…』

『うっん?』

ウエザードーパントは振り向くと、そこにいたのは…

『よくも…よくも雅紀をつ!…!』

デイダークだった。しかも体から恐ろしいオーラが漂っている。

『そういえば、もう一人いましたねえ。貴女も私に力を見せてください。』

そう言った時だ。

『貴様~~~~~っ!!!』

アリスは変身を解除し…

「うああああああっ!!!」

怪人形態となった。その姿に誰もが驚く。

「えええええっ!? 私聞いてないっ!!!」

今頃登場の亜樹子がそう言った。

「まさか、アリスはガイアメモリもなしでドーパントになれるのかっ!?」

フィリップは言った。仮にフィリップはドーパント以外の怪人を見たことがないのでアリスが変身した姿をドーパントと間違える。

『これはとんだ隠し玉ですねえ!』

『ウアアアアアッ!!!』

アリスは雄たけびを上げ悪魔の翼を羽ばたかせてウエザードーパントに急接近した。

『うおっ!?!』

「早いつ!?!」

『ガアアアアアアアッ！！！！』

アリスは自信の爪でウェザードーパントを切り裂く。

『がっ！』

ウェザードーパントはたじろぐ。

『ウアアアアアアアッ！！！！』

アリスは休むことなくパンチやキックさらには切り裂くなどして攻撃した。

「凄いパワーだ……。スピードも申し分ない……。」

「これなら勝てるよっ！！！！」

歓声が広がった……が……

『ぐっ……：図に乗るな————っ！！！！』

ウェザードーパントは勢いよく冷気をアリスに放った。

『ウツ……ガアアッ！！！！』

アリスはそれをもろに受けてしまい、雅紀とフィリップの方に吹っ飛ばされた。そして元の人間の姿に戻ってしまいました。

「アリスっ！！しっかりするんだっ！！！！」

「うっっ…」

『ふざけおって…うぐっ！』

突然、ウエザードーパントは苦しみだした。

『くっっ…どっやっ…までのようですね…。さらばだっ！』

ウエザードーパントは冷気で霧を発生させ、消えた。

「くぐっ…」

「フィリップ君っ！雅紀君っ！アリスちゃんっ！大丈夫っ！？」

亜樹子がフィリップ達に駆け寄った。

「僕はまだ軽い方だよ、それより雅紀とアリスの手当てをしなければ…。急いで病院に行こうっ！！」

「うんっ！竜君も手伝ってよっ！」

亜樹子は照井の方を見ると、照井は怒りの表情をしていた。

「クソッ！また…またヤツを倒せなかった…。」

悔しい表情で、拳を強く、握っていた。

「竜君っ！早く！」

「…クッ…！」

Wメンバーは雅紀とアリスを運び病院まで行った。

第18話（後書き）

さあ、今回はウェザードーパントにやられてしまった。

フィリップ「悔しいよ……」

おお、フィリップさんではないですか？

フィリップ「雅紀とアリスの代わりに来たよ。」

そうですか……。さて次回は！

フィリップ「井坂 深紅朗によって重傷を負ってしまった雅紀とアリス。」

二人はどうなるのか！

フィリップ・作者「それではまたっ！」

第19話(前書き)

はあ、雅紀とアリスはどうなるのかなあ。

フィリップ「仮面ライダーディカオス、始まるよ。」

第19話

ウェザードーパントの攻撃で重傷を負ってしまった雅紀とアリスは…

病室

ピッ…ピッ…

今二人は病院に入院中でベッドで眠っている。

「先生からだと…二週間はこの状態が続くって…雅紀君の方は…。」

「そうか…」

「……」

二人の怪我は重傷クラスで雅紀は大火傷を、アリスは凍傷を負ってしまったのだ。

「おいっ！雅紀とアリスはっ！！？」

すると、そこへ翔太郎が現れた。息を切らしながら翔太郎は亜樹子達に聞く。

「雅紀君は火傷で、アリスちゃんは凍傷で…この状態が二週間は続くって…でも雅紀君はへたしたら死ぬかもしれないって。」

「な…んだと…」

亜樹子の言葉に、翔太郎は絶句した。

「おいっ！こいつらは変身してたんだぞ！そんな重傷には…」

「二人は井坂 深紅朗の攻撃をまともに受けてしまったんだ。雅紀の方は体中に電気が流されて…変身してなかったらその場で即死だったんだ。」

「そんな…」

翔太郎はその場でうなだれてしまった。

「井坂の奴め！こんな子供に重傷を負わせるとは…許さんっ！…！」

照井は拳を強く握り怒りを露にしていた。その時だ。

「う、うつつっ…！」

アリスが眼を覚ました。

「あ、アリスちゃんっ！！大丈夫っ！！？」

「はい、私は大丈夫です…：雅紀は！？雅紀はどこっ！！？」

アリスは隣で寝てる雅紀を見つけた。アリスは急いで雅紀に行こうとベッドから出た。

「雅紀…あつつ…！」

アリスは全身に痛みを感じてその場で倒れた。

「アリスちゃん！まだ体動かしちゃだめよ…！」

「…雅紀は…どうなっちゃうんですか…？」

アリスは恐る恐る聞いた。亜樹子が雅紀の容態がどうなっているかなどを話した。

「そ、そんな…」

アリスに衝撃が走った。

「そんな…雅紀が…死ぬ…!?!」

アリスは泣きだした…。

「いやっ!何で、雅紀が…雅紀が死ななきゃいけないのっ!?!?雅紀を生きてちゃだめなのっ!?!?」

そう泣き叫んだ…。

「アリスちゃん…。」

「こんな状況で悪いけど、君は…ドーパントなのかい?」

フィリップはアリスに訪ねた。

「……私、は…。」

アリスは仕方なく、話した。一族に追放された事、ライダーになった事、雅紀との出会いの事、雅紀の事その話に誰もが驚いた。

「アリスちゃんと雅紀君にそんな事が…。」

「怪人に家族を殺された。俺と同じ思いをこの子がな。」

「そういうことか…地球の本棚でも閲覧できなかった訳がそれが…。」

「それが…おまえと、雅紀の…ビギンズ・ナイト…てわけ…か。」

Wメンバーは雅紀とアリスの過去を知り、悲痛で心がいつぱいだ。

アリスはまだ眠っている雅紀を見た。

アリス「（雅紀、死んじゃ…嫌だよ…）」

その頃、ここは園咲と呼ばれる人たちのいる屋敷

「ほ…う…始めてみる、仮面ライダーが二人も現れたか。」

この者はこの園咲家の主でミュージアムのトップの「園咲 琉兵衛」。

「そいつらは一体何者なのですか、井坂先生？」

そう言ったのは園咲家の長女でガイアメモリを販売する「ディガル・コーポレーション」という会社の社長をしている、「園咲 冴子」。

「見たところ、ガイアメモリを使っていなかったですね。」

井坂はスパゲツティを頬張りながら、そう言う。彼の周りには大量の皿が山積みされていた。

「ガイアメモリを使わずに？本当に何者ですか、そいつら？」

こちらは、園咲家の次女でラジオ番組のパーソナリティを務めている「園咲 若菜」。

「ガイアメモリを使わずに…か。興味深いな。」

「全く、一体誰がそんなものを開発していたんでしょうか？」

「そう言えば、カードを使っていましたね。それが彼らの戦い方かもしれませんね。」

「今度はカードですか？ますますわかりませんわね。」

「まあいずれにしてもその仮面ライダーの二人に重傷を負わせましたから、しばらくは出てこないでしょう。」

「凄いなえ井坂君。だが…その仮面ライダー達に、少しは傷つけられたようだけどね。」

琉兵衛が言った。そう琉兵衛は井坂が傷を負ってきたことを見抜いていたのだ。

「まあ、多少は痛みますが、もう大丈夫です。それにしても私を傷

つける者がWの他にもいたとはねえ。」

そう井坂は前にも、Wのサイクロンジョーカーエクストリームと呼ばれる形態との戦いで傷を負った事があるのだ。

「しかし最近、世間を騒がせているドーパントも興味深いな。確か…「バンパイア」のメモリだったかな…。」

「そう言えばそうですね。ラジオ局でもその話題が持ちきりでしたわ。」

「でも活動時間は夜だけなのが、バンパイアの特徴…。」

「いえ…。もしかしたら…夜だけとは限りませんよ…?」

怪しい会話が続いた。

そして病院では…

ブウンッ…ブウンッ…

携帯が鳴った。それは照井のだった。

「刃野刑事か…何っ？例の通り魔が現れただど！？」

照井が言くとWのメンバーは驚いた。

「どうやら、夜の時間だけでは物足りなくなってきたみたいだね。」

「昼間だと人がたくさんいるっ！このままだと被害が増えるぞっ！」

「わかった。左、場所がわかった。今警察が現場で犯人と交戦中だぞうだ。行くぞ！」

「おうっ！フィリップと亜樹子は雅紀を見ていてくれっ！！」

「わかった！」

「任せてっ！」

左と照井はその場をから出て行った。

「アリスちゃん、大丈夫だよっ！雅紀君は死なないって！！」

「そうだね。まだ確実に死ぬ訳じゃないし…今は彼を信じよう。」

「はい…。（雅紀…）」

三人は話していた。そんな時…

フワァン…

音が鳴った。だが三人は気づいていない。音の発生源は…どうやら
ディカオスドライバーからのようだ。

フワァンツ…フワァンツ…

ディカオスドライバーは怪しく光り出していたのだ。この現象は…
何かの前兆なのか…。

第19話（後書き）

さて…雅紀はまだ目を覚まさないようだ。

アリス「雅紀…死なないで…」

全く、アリスを泣かせるとは…彼氏として失格だぞっ！雅紀め！！

フィリップ「仕方がないよ、作者。さて、今回は…」

バンパイアと呼ばれるドーパントに苦戦を強いられるW一行。その時、奇跡がっ！！

フィリップ「それでは、またね。」

第20話（前書き）

まず先に、更新遅れてすいませんっ！！

翔太郎「全く、何やってんだよ…。」

こっちはいろいろと事情があつたんだよ。

フィリップ「仕方がないよ、翔太郎」

照井「いつまでも愚痴るな。」

翔太郎「わかったよ。」

では気を取り直して…始まりますっ！！！！

第20話

マシンハードボイルダーで現場に急行する翔太郎と同じくマシンデ
ィアプロッサに乗る照井：

「もっすぐ着くぞっ！」

「おっっっ！」

二人はスピードを上げて現場に向かった。

一方、刃野と真倉がいる部隊がドーパントと闘っていたが、時間が
経つにつれてドーパントの噛みつき攻撃で警官の数が減っていった。

「くそっ、このままじゃ全滅だぞっ！」

「どっつするんですか！刃野さんっ！？」

と二人が話している内にドーパントが二人に攻撃しようと上空から急降下してきた。

「うあぁっ!!」

「ああぁっ!!」

その時…

ブウウウウウウウンッ!!ドゴオッ!!!!

『ギイイイイイツ!!!!?』

と二台のバイクがドーパントに突撃してきてドーパントは数メートル吹っ飛ばされた。

「間に合ったぜ。」

「そうだな。」

バイクに乗っていたのは翔太郎と照井だった。

「おおっ!!翔太郎!部長!!助けに来てくれたのか!!」

「こ、怖かった〜!!」

「二人はこの場から逃げろ。」

「は、はい!!」

「そうしますっ!!」

二人は急いで逃げた。ソレを確認した二人は怪人に向かい合う。

「さうとど、行くぜ、フィリップ、照井…。」

『了解だ。』

「ああっ!!」

『ジョーカアッ!!』

「サイクロンッ!!」

『アクセルッ!!』

三人はメモリを起動し…

「変身っ!!」

「変…身っ!!」

仮面ライダーWとアクセルに変身した。

『さあ…お前の罪を、数えろっ!!』

『さあ…振りきるぜ!!』

決め台詞を言いながら、二人はドーパントに向かった。

『今度の俺は強いぞ!!!』

そう言うと高速でWとアクセルに攻撃した。

『うあっ!!!こいつ、前より強くなってねえか!?!』

『恐らく、人の血を吸うことで体を強化したのだろう。』

『しかも少し、大きくなってないか...?』

そうドーパントは昨日よりも少しだが巨大化しているのだ。

『くはははははっ!!!このメモリの...「バンパイアの力の前では無力だっ!!!」』

『バンパイアっ!?!』

『やっぱり吸血鬼のメモリか...』

『それに、俺はこんなこともできるぞお!!!』

バンパイアは吸血した人たちにビームを放った。するとよろよろと死人みたいに立ち上がったではないか。

『なっ!?!』

『こいつらっ!死んだはず...!?!』

Wとアクセルは驚愕した。

『キイイイハハハハハハハハッ！！これがバンパイア的能力さっ
！！』

『くっ！厄介な能力を持っているな！』

『因みにこいつらはまだ死んでない！微量に血を吸っただけだ！！』
人々はWとアクセルに襲い掛かった。

『それに貴様らが人間には手を出さないというのは聞いているぞ！
！！』

『なら…貴様を倒すだけだ！！』

『エンジンッ！』

『ジェットッ！』

アクセルはエンジンメモリを差し込み、「ジェット」と呼ばれる光弾をバンパイアドーパントに飛ばした。

『俺も行くぜ！照井！！』

Wはジョーカーメモリを抜き、代わりに青いメモリを取り出した

『トリガーアッ！！』

機動させ、ドライバーの左側に差し込んだ。

『サイクロンッ！トリガーアッ！！』

サイクロンのメロディが流れるとさらに新たにトリガーから発せられるメロディが流れる。するとWの左半身が黒から青に変わって胸に銃のようなものが付いていた。これが高速の銃撃戦を可能とするW「サイクロン・トリガー」なのだ。

『食らいやがれっ!!!』

専用銃「トリガーマグナム」を連射する。銃口から風の弾丸が発射される。

『キハハハハハッ!!!!んな直線の弾丸なんか効くかよ!!!!』

バンパイアドーパントはスラリと全ての弾丸を避けた。

『このやるっ!!!』

『なら「ルナ」で対抗だ!!!』

今度はサイクロンメモリを抜き代わりに金色のメモリを取り出した。

『ルナアッ!!!』

起動させドライバの右の部分に差し込んだ。

『ルナアッ!!トリガーアッ!!!』

Wの右半身が緑から金色に変化していきメロディが流れる。これがトリッキーな光弾を発射させる事を可能とするW「ルナ・トリガー」だ。

『ハアッ！！』

トリガーマグナムを連射させる。銃口からは今度は金色と青色が混ざった光弾が発射され、不規則に移動してバンパイアドーパントに向かっていく。

『キキキキイイイツ！！！！』

バンパイアドーパントに命中…したはずだった。

『キキイイ・・・』

バンパイアドーパントは霧のように消えてしまった。

『消えやがったっ！？』

『塵気楼か！？』

『一体どこにいる！？』

『キキイイイ…此処だア！！！！！！』

いきなり霧がWとアクセルの周りに発生しバンパイアドーパントが姿を現し、攻撃をした。

『がっ！！！！』

『ぐあっ！！！！』

『うあっ！！』

Wとアクセルは倒れてしまった。

『残念ながら雇気楼ではないのさ。霧はこの俺様自信。だから俺には傷一つ付けられんだ！！』

『何て能力持ってやがるんだ…！』

『翔太郎！エクストリームだ！！』

『わかったぜっ！！』

するとどこからか機会の鳥が飛来してきた。「エクストリームメモリ」だ。

『ヴェンツ！！』

Wはそれを手にし、ドライバーを一度戻し、エクストリームを付けWの形にする。エクストリームの体が半分に分かれ、X状の紋章が現れた。

『エクストリームツ！！』

するとWの周りにデータ状のものが周りそれがなくなると、Wは姿を変えていた。その姿は右が緑、左が黒、そして真ん中はクリアな部分があり顔の目のあたりX状になっていた。これが究極形態、W「サイクロン・ジョーカー・エクストリーム」なのだ。

『『プリズムビツカーッ!』』

クリアボディの部分から盾の中に剣がある武器「プリズムビツカー」が出現した……。そしてWはそれを手に持ち、メモリを出した

『プリズムツ!』

起動させ、プリズムソードを持つ部分に差し込んだ。

『『ハアッ!』』

突撃し斬りかかった。

『そんなものが通じるものかつ!』』

バンパイアドーパントはまた霧になり避けた。

『プリズムツ!マキシマムドライブッ!』』

Wはマキシマムを発動、霧を斬った。

『うおっ!!--!』』

その霧はバンパイアドーパントに戻った。

『グウツ…な、なぜだ!なぜ斬られる!--!』』

『一気にトドメをさしてやる!--!』』

Wが攻撃しようとしたその時、赤い稲妻がWに降り注いだ。

『な、なんだっ!?!』

足音が聞こえWとアクセルはその方を向いた。

『いやあ、彼の力は素晴らしいものです。壊されては困りますよ。』

井坂ことウエザードーパントだった。

『井坂 深紅朗!』

『井坂っ!』

アクセルはウエザードーパントに斬りかかった。

『また君かい、復讐鬼くん?』

『ラアアアアアッ!』

『全く、しつこいよっ!』

ウエザードーパントは竜巻や稲妻などをアクセルにとばした。

『ぐあっ……があああっ!』

全て喰らいアクセルは吹き飛ばされ変身も解除される。

『照井っ!』

『照井 竜っ!』

『邪魔者は排除させました。さあ、今度はあなたの番です!!』

ウエザードーパントはWに攻撃を定め稲妻を放った。Wはそれをビツカーシールドで防ぐ、だが…

『後ろがから空きたぞっ!!』

バンパイアが攻撃してきた。

『ぐあっ!!』

『二体の攻撃は強力だ。早くマキシマムで反撃しようっ!!』

『おっっ!!』

『させませんよっ!!』

ウエザードーパントはWの足元に冷気を放ちWの足を凍らせた。

『な、なにっ!?!』

『油断は禁物だぞっ!!』

『『ぐあああああっ!!』』

一方その頃、病院では…

「…雅紀…」

アリスは一人落ち込んだ。

「（命を分け与えたいんだけど…今の状態じゃ危険だし、私も持たない、どうすれば）」

アリスは涙目になった…。

「アリスちゃん、泣かないの。雅紀くんが見たら泣いちゃうよ？」

「亜樹子さん…。」

「今は祈ろう。雅紀くんが目を覚ますように…ね？」

「はい…っ！…っ！？」

すると雅紀の体が発光し、消えた。

「ええええええっ！？消えちゃったよ~~~~っ！…！」

「雅紀!？」

アリスはふとテーブルに置いてあったディカオスドライバーの方を
見てみた。

「ディカオスドライバーが…ないっ!？」

ディカオスドライバーがなくなっていた。

そして……

『目覚メヨ……』

「……………」

『目覚メヨ…選バレシ者ヨ…マダ、貴様が死ヌ所デハナイゾ…?』

「……………!?!」

そしてWの方は…

『エクストリームも、大したことないですねえ。』

『キハハハハツッ!!あんた凄えよお!!!』

その場ではWは倒れてしまっていた。

『ぐっ……!!!』

『形成が逆転された!!!』

『フフフフフ……さらばだ!!!』

ウェザードーパントは上空に特大の稲妻を発生させた。

『くらええええええっ!!!!!!』

『『ぐっ!!!』』

二人が諦めかけたその時…

ブオオオオオオオオオオッ！！！！

『なにっ？ぐあっ！！』

『ギアッ！！』

何者かがウエザードーパントとバンパイアードーパントを弾き飛ばした。

『な、何者だっ！！！？』

そこにいたのはバイクに乗った者がいた。しかもそのバイクをWは知っていた。

『あ、あれは……』

『ま、まさか……』

『俺か？…俺は……』

男はヘルメットを取った。

「最強最悪の仮面ライダーだっ！！」

その男は雅紀だったのだ。

『『雅紀っ！？』』

Wは驚愕した。そしてウエザードーパントも同じく驚愕した。

『ばかなっ！あれほどの重傷を負ったはずなのに、もう怪我が回復しているだとお！！？』

「まあ、俺にもさっぱりだが…借りを返してやるぞっ！井坂っ！！」

と雅紀はディカオスドライバーを腰に装着させカードを出しベルトに入れた。

『カメンライド』

「変身ッ！！」

『ディカオスッ！』

雅紀はディカオスに変身した。そして目の前にカードが数枚現れ、ディカオスはそれを取った。するとカードに絵柄が戻ったのだ。

『このカードは…まあやってみるか…変身っ！』

『カメンライド・ダブルウ！』

ディカオスはWに変身した。

『さらにもう一回変身ッ！！』

そしてディカオスWは先ほどのカードをベルトに入れた。

『ファイナルカメンライド・ダ・ダ・ダ・ダブルウ！』

するとディカオスWはエクストリームに変身した。

『マジかよっ!?!?』

『Wに変身したうえにエクストリームにまでなれるなんて…。』

『これはなんと驚きな…!?!』

『このW…及び、敵の全てを閲覧した…!なんてね…。』

ディカオスWCJXはカードサイクロン・ジョーカー・エクストリームベルトに挿入。

『アタックライド・プリズムビツカー』

『プリズムビツカーッ!』

ディカオスドライバーからプリズムビツカーが出現した。

『お二人さん、まだ、やれますか?』

WCJXに聞いてみた…。

『当たり前だっ!?!』

『まだ僕らは、戦えるッ!?!』

ディカオスWCJXの隣に立った。

『この死に底ないめっ!?!?!』

ウエザードーパントは二人に稲妻を放った。

『ハアッ！！！』

二体のWはプリズムソードで稲妻を斬った。

『な、なにっ！？』

『テアアッ！！』

二体のWはウエザードーパントを斬った。

『ぐあああつ！！』

吹っ飛ばされた。流石に二つのプリズムソードの斬撃を受けたんじやたまったもんじゃない。

『二人でダメなら三人っ！』

『三人でダメなら四人っ！』

『四人でダメなら…』

ウエザードーパントに向かって…

雅紀・翔太郎・フィリップ『もっともっただあああああああ』

『！！！！』

一気に斬り倒した。

『ぐああああああああっ！！！！』

ウエザードーパントは遠くへ吹っ飛ばされた。

『残るは…！！』

『おまえだけだっ！！！！』

ディカオスWCJXとWCJXはバンパイアドーパントに顔を向けた。

『ギイイツ！！こうなったら…最終手段だっ！！！！！！』

バンパイアドーパントの体が巨大化していきコウモリに変わっていった。

『ギアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！』

叫び口から光弾を発射した。ディカオスWCJXとWCJXはそれを避けた。

『W、マキシマムでいこう、できますね？』

『ああ！！』

『もちろんだっ！！』

そう言いWCJXは四本のメモリを取り出し…

『サイクロンッ！マキシマムドライブッ！！』

『ヒートッ！マキシマムドライブッ！！』

『ルナアッ！マキシマムドライブッ！！』

『ジョーカーアッ！！マキシマムドライブッ！！』

とビッカーシールドにセットしマキシマムを発動。

『俺も行くぜっ！！』

『ファンルアタックライド・ダ・ダ・ダ・ダブルッ！』

発動し二人は身構え、大きくジャンプした。

『『『ビッカーツインチャージブレイクッ！！！！』』』

エネルギーが溜まったプリズムソードでX字のようにビッグバンパイアドーパントを斬り裂いた。

『ギイイイイイイアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！』

『！！！！』

ビッグバンパイアドーパントは断末魔を上げ上空で爆発した。近くに降りると砕かれたメモリが落ちていてその傍に老年の男性が倒れていた。

探偵事務所

翔太郎は今回の事件をタイプライターで打っていた。

「通り魔事件は無事、解決。犯人の証言では…世間を驚かせようと悪事を働いたらしい。全く迷惑な話だ。今回の事件は仮面ライダーの少年の力がなければ、解決できなかったし、Wとアクセルもやられていただろう。しかもそいつの過去は、俺がおやつさんを失ったのよりも、つらい過去だ。あの年で全てを失うのはとても辛いはずだ。…で、あいつは…」

回想

「そうか、もう別の世界へ行くのか。」

「はい。俺はこれからアリスを迎えに行かなきゃいけません。置いていってしまいましたし…。」

「そうかい。もうしばらくはこの世界には居られないのかい？」

「いえ、まあ居たいのですが、俺は旅人です。いずれこの世界からも離れなきゃなりません。それに、俺はもっと、世界を旅したい、知りたいんです。始めたばかりなので。」

「そうか…。なら、突き進めよ。自分の行く道を…。」

「はい…！」

そう言い雅紀はディカイザーに乗る。

「それではまた、ハーフボイルドの探偵さんとその相棒…！！」

そしてディカイザーを走らせその場を後にした。

「全く、その歳でバイク乗んなよな……てゆうかだれがハーフボイルドだコラアアツ！」

「14歳の子供に言われてしまったね、翔太郎…。」

回想終了

「全く、最後のあの言葉は気に食わねえ。にしても、今頃あいつらは、どうしているかなあ。」

雅紀とアリスはというと…

「やっと家に帰れた。」

「そうだね…。」

アリス宅に帰っていた。が、アリスの表情は暗いままだ。

「ど、どうしたの、アリス？」

「別に…どうもしないよ…。」

「そ、そう？」

二人は家の中に入って部屋に入った。すると…

バタンツ……ガチャツ！

アリスが部屋の扉に鍵をかけた。

「あ、アリス？どうしてカギなんか…」

雅紀は尋ねると、アリスが先ほどとは打って変わって物凄い笑顔だ。

「フッフフ、雅紀…私がどれだけ心配したと思っているの…?」

「え、いや、その、ごめん。」

「いや、許さない…」

「え〜…」

「今から…調教してあげる…」

「ちよ、調教!?!」

「逃げようとしたって無理だよ。大丈夫、いっぱい気持ち良くなるだけだからね。」

アリスが雅紀に近づいた。雅紀は今のアリスが恐ろしく感じた。

「あ、あの、アリス…」

「さあ、気持ちよくなるからね…。雅紀イ」

「い、いやあああああああああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

この後、雅紀は一日中アリスと一つにされて、何やら何まで絞り取られたそうなの…

第20話（後書き）

ふう〜無事、Wの世界編終了…！

雅紀「ってちよつと待てっ！最後は無事じゃなかったろっ！！」

ふんっ！おまえがアリスを悲しませた罰だよっ！

雅紀「お前ってやつはアアアアっ！！」

アリスも気持ちよかっただろう。

アリス「うん、ありがとう、作者さん。」

雅紀「アリスウウウツ！！！」

さて、今回は雅紀達が次に行く世界はライダーが存在してなくて代わりに魔法が存在している世界だ！お楽しみにっ！！

第21話(前書き)

はい、今回の世界は男性から女性まで好評のあのアニメのせかいですっ！

雅紀「俺は、できればライダーの世界がいいなあ…。」

第21話

此処、アリス宅。

「うううう…」

「雅紀、どうしたの？」

雅紀は現在、ベッドで寝込んでいる。

「どうしたもこうしたも…アリスのせいでしょ…」

「私？」

「アリスと一晩中一つにされて、なんもかも搾り取れたからだよ…」

そう、Wの世界を去る前にアリスに「調教」という名の激しいセックスをされて、雅紀は精魂尽き果てたのだ。

「あれはおしおきだよっ！私を心配させて…雅紀も気持ち良かったでしょ？」

「ううう、俺の口からは、とても言えません…で、でも、なんも一晩中やらなくても…／＼／」

「だって私、我慢できなくて、雅紀だって悪いんだからね？私の中…あ、あんなに暴れるんだから…責任、取ってよ…／＼／」

「もはや、18禁だな…この小説…てか、俺はアリスにやられたんですけど…？」

雅紀、もう随分前から18禁だぞ。まあ、ギリギリ15禁にしているが…。

「さてと、次の世界に着くよ。」

「うん…。でも、もうちょっと寝かせて…。」

「…わかった。流石に後々考えると、私だって悪いもんね。寝てていいよ。」

「う…ん。」

そうしている間に雅紀は眠った。アリスは起こさないよう、雅紀に近づいた。

「雅紀だって…十分可愛いよ。良い夢見てね？おやすみ／＼／」

そう言い、アリスは雅紀の頬にキスをした。

そして…

「ふあゝ、よく寝たあ。」

雅紀は欠伸をしながら起きた。

「おはよう雅紀。着いたよ、次の世界。」

「そうなんだ。じゃあ外に出よう。」

二人が外に出ると…

「ど、何処、此処・・・？」

そう雅紀の知らない場所だった。

「此処はね、ライダーが存在しない世界なんだ。」

「うそっ！ライダーが存在してないのっ！！？」

アリスの言葉に、雅紀は仰天。

「だけどその代わりに、此処は魔法が存在する世界なんだよ。」

「ま、マジで…!?!」

アリスの一言にまた仰天。

「(ま、まあ…ディケイドの物語で、シンケンジャーの世界って所に行ってたしな…)で、この世界は何?」

「ふふふ、此処はねえ…」

すると目の前の少女に車が迫ってきた。

「きゃあっ!?!?!」

「あっ、危ないっ!?!?!?!?!」

雅紀はダツシユした。しかも物凄いスピードだ!

「(なっ!?!俺こんなに早かったかっ!?!だけどどうしてはいられないっ!間に合ええええっ!?!)」

雅紀はそう考えながら、少女を抱っこし勢いよくジャンプした。車はそのまま通り過ぎて行き、雅紀は着地した。

「ふう、大丈夫か?」

「ふえっ、は、ハイッ、大丈夫!」

「怪我とかない?」

「はい。」

「そうかあ、良かったあ……」

「っ！！／＼／＼」

雅紀は安息の笑みを浮かべていると、少女は顔を赤くしていた。

「どうしたの？熱でもあるのか？」

「ふえっ！な、何でもないよっ！！（ふえ〜、顔が熱いよ〜。．．．／＼／＼）」

「そっ？ならいいんだが…。」

「あっ、自己紹介が遅れました、私、「高町　なのは」と言います。」

「

「俺は木利野　雅紀。よろしく。」

「ところで、雅紀くんは聖洋中の人？」

「聖洋中？」

「だって雅紀くん、聖洋の制服着てるから。」

「え……んなっ！？」

雅紀は自身の服を見てみると、なのはと着ているものと同じ柄の制服を着ていたのだ。

「(えええええつ!!どうなってんの!!?)」

雅紀はポケットを触ってみると、中から手帳みたいなのが入っており、見てみると…

「えと…聖洋中学校…三年一組…木利野 雅紀。」

そう書かれていたのだ。

「ふえつ!?!私と同じクラスだっつ!」

「そ、そうなんだ。」

「にははは、ごめんね、気がつかなくて…。」

「いや、謝らなくていいよ。第一俺は…。」

その時だ。

「なのは~~~~~っ!!」

「大丈夫~~~~っ!?!」

二人の女の子がこちらに走ってきた。

「あ、アリサちゃんっ!!すずかちゃんっ!」

「アンタ、怪我ない!?!」

「うんっ、大丈夫。この人が助けてくれたんだ！」

なのはが言うと二人は雅紀の方を向いた。

「なのはちゃん助けてくれてありがとう。」

「感謝するわ。」

「いや、俺は好きでやったまでだから。」

「紹介が遅れました、私は「月村 すすか」です。」

「あたしは「アリサ・バニングス」よ。よろしく」

「俺は、木利野 雅紀。よろしく、すすか、アリサ。」

「!!!/!/」

「!!!/!/」

雅紀は二人に微笑むと、二人は顔を赤くする。

「うん？どうした、二人とも熱があるのか？」

「い、いやっ!/!/」

「な、なんでもないわよっ!!!/!/」

「そっか？ならいいんだが、体調には気をつけるよ？」

「う、うん。(こ、この人の笑顔を見たら、急にドキッてしてきた… / / /。)」「

「え、ええ…(な、何よっ！い、いきなり笑顔になって…ドキドキしてきた / / /)」「

アリサとすずかは雅紀の笑顔でドキドキしていた。

「雅紀…っ！！」

すると、アリスが向かってきた。

「あ、アリス…ってうわっ / / / ! ! !」

いきなりアリスが雅紀に抱きついてきた。

「雅紀っ！よかったよお。怪我ないっ!？」

「だ、大丈夫だから…は、離れて… / / /」

「あ、うん…。」

雅紀にそう言われ、名残惜しそうにアリスは雅紀から離れた。

「雅紀くん、その子、誰?」

「あ、ああ。この子はアリス。苗字がないから皆、アリスって呼んでくれ。」

「よろしくね。」

「よろしくねアリスちゃん、私は高町 なのは。」

「わたしは月村 すずかだよ。」

「アリス・バニングスよ。よろしく。」

「雅紀、そういえばその格好なに？」

「ああ。なんだかさっぱりわからない。」

「たぶんこの世界の役目だよ。」

「うーん（確かに、閃矢 土も何かと世界へ行くと服装変わっていたな）」

「にゃ、にゃ~~~~~つ!!!??」

すると、なのはが突然、大声を上げた。

「ど、どうしたんだ、なのは!?!」

「もうちょっとで学校に遅れちゃう!?!」

「ちょ、急がないとやばいじゃない!?!」

「早く行こう!」

そう言って、三人は走って行った。

「がんばれよ」

すると、三人が戻ってきて…

「「「雅紀くも行くのよ（っ！！」「「「

「って、うわあっ！？」

雅紀の手を掴み全速力で走って行った。

「ちよっ、雅紀を連れてくなくくくっ！！」

アリスも急いで四人を追った。

此处、聖洋中学校の門前

「ハア…ハア…や…や…やっと着いたの…。」

「も、もう限界よっ!」

「ふう、疲れた。」

「な、なぜ俺も…?」

学校の門前で、四人は息を整えていた。すすかは疲れてなさそうだが。すると…

「なのは、アリサ、すずか、おはよう。」

「何や?朝からそんなに疲れてどうしたん?」

金髪の少女と関西弁を喋る少女が現れた。

「あ、フェイトちゃん、はやてちゃん。」

「な、なんで二人ともこんな時間に来てるのよっ!?!」

「えっ?まだ時間余裕だけど?」

フェイトと名乗る女の子が学校の時計を指差した。

「ふえっ!?!まだ7:40分!?!?」

「ど、どういっことよっ!なのはっ!?!?」

「そ、そんな、私の時計じゃ…。」

「時間、ズレとんのちゃうっ？」

「あっ……」

「なのはちゃん……。」

「あんだ、何やってんのよお。」

「ふえ〜〜〜……ごめんなさい。」

なのはがしょんぼりしていると・・・

「ま、まあ間違いは誰にもあるんだし、元気出せよ、なのは。」

「雅紀くん……。」

「なっ？」

雅紀は安心させるように笑うと、なのはの顔は赤くなった。

「ふえっ！？う、うん……（雅紀くん、いきなり笑顔なんて反則だよ
お／＼／＼）」

「気になっていたんだけど……誰なのかな？」

「そやなあ、なのはちゃんと仲良いようやし……誰なん？」

「あっ、挨拶が遅れた。俺は木利野 雅紀。よろしく。」

「私は、「フェイト・テストロッサ・ハラウン」です。よろしく
ね。」

「私は「八神 はやて」や、よろしゅうなあ。」

「フェイトに、はやてか…。うん、何か、良い名前だな。」

「えっ／＼／＼!?!?」

「ほ、ほんまっ／＼／＼!?!?」

「うん、良い名前だぞ、二人とも。」

「あ、ありがとう…。（は、初めて名前を褒められた…／＼／＼）」

「お、おおきになあ。（な、なんや?ドキドキしてきたあ…／＼／＼）

「

「?」

雅紀は、何気にフラグ体質のようだ。

「じゃ、じゃあ、もう行「っつよっ」!」

「そ、そうだね、なのは。」

「は、早く行かな。」

「っつん。」

「そうね。」

「やっぱり俺もなのか？」

こんな感じで六人は学校に入って行った。

一方、アリスはというと…

「雅紀く、どこ…?」

道に迷っていたとな。

第21話（後書き）

さてどうしよかな、このやるうを…

雅紀「ちょ、ちょっと待てっ！俺が何したんだ!？」

自分の心に聞けやアアアアアアアっ!!!!!!!

雅紀「あああああああああっ!!!!!!!」

全くこいつはあの五人にフラグをたておって!さて次回は、あの五人と甘酸っぱい感じの話になります。見てください!

第22話(前書き)

更新遅れてしまい申し訳ありません！

それではこれから、りりなのの世界編、第二話です！はじまります
！！

第22話

此処は、聖洋中学校、三年 一組の教室

「実はこのクラスに、新しい生徒が転入してきます。皆さん仲良くするようにな！」

先生が言うと周りはざわついた。

「ハイッ静かにな！それでは入ってきなさい。」

すると一人の男子が入ってきた。

「木利野 雅紀です、よろしくお願ひします。」

雅紀は笑顔で言った。その途端、周りは静まり返った。

「????？」

生徒の様子を見て、雅紀は何か、間違えたかなと困惑していると...

『か、カツコイイイイイイイイイッ！！！！／／／』

女子達が叫んだ。

「ハイツ！静かにしなさいっ！！それでは木利野君、高町さんの隣に座りなさい。」

「はい。」

雅紀はなのはの隣の席に座って行った。

「よろしくね、雅紀くん。」

「よろしくな、なのは。」

「うんっ！／／／」

「よろしくね、雅紀。」

「いちらこそ、よろしく。フヘイト。」

「う、うん／／／」

負達と話しているところ...

「それでは、一時間目の授業を自習にします。木利野君に質問などを聞いてもいいですよ。」

するとクラスのほとんど（主に女子）が集まった。

「ねえ何処から来たの？」

「スポーツとかしてんのか？」

「好きなことは何？」

などたくさん質問が来る。その質問の多さに雅紀はおろおろしている…

「ハイハイ、そこまでにしなさいっ！雅紀が困ってるじゃない！」

アリサが皆にそう言った。皆はしぶしぶ雅紀から離れて行った。

「全く困ったものね。」

「ありがとう、アリサ。助かった。」

「べ、別にツ／＼／」

アリサは赤面しながら離れていった。

休み時間

「さっきのは大変だったね、雅紀くん。」

「まあなあ。（それにしても、学校か。懐かしいな…）」

と雅紀は以前通っていた学校の事を思い出した。

「（でも…もう、俺には、何もない。家族も…友達も…）」

雅紀は一人の少年の事を思い出した。

「（龍斗…おまえは…無事なんだろうか…？）」

雅紀は少年、暁 龍斗の事を考え、遠く、悲しい瞳をした。

「雅紀くん？どうしたの？」

「いや、なんでもない。」

『?????』

五人は音のした方を向くと…

「…」

雅紀が顔を真っ赤にしてお腹を抑えていた。

「雅紀くん、どうしたの？」

「…（ぐぎゅるるる）」

雅紀はなのはに返事を返さず、代わりに腹の虫が鳴らした。

「ま、まさか弁当忘れてきたんじゃない？」

「…（コクッ）」

「ほ、ほんまにっ!？」

「…（ズーン）」

「雅紀君。」

「あ、あんたねえ、弁当ぐらいで凹むんじゃないのっ!」

「…」

雅紀が落ち込んでいると…

「雅紀くん、良かったら、なのはの弁当…半分食べない？／／／」

なのはが言ってきた。

「なのは…」

「ねっ？／／／」

なのはが笑って返していると…

「雅紀っ、よ、良かったら、私のも食べていいよ？／／／」

「友達が困ってるなら仕方あらへんなあ。雅紀君、よかったら私のも食べてええよ？／／／」

「雅紀くん、私のも食べていいよ？」

「しょ、しょうがないわねっ！雅紀っ、ちょっとただけだけど、私のも食べていいわっ！／／／」

残りの四人が頬を若干赤く染めてそう言ってきた。

「皆、良いのか？」

『良い（よ）（）に決まってるわっ！』『』

雅紀は五人に問うと、五人は同時にそう言ってきた。

「皆…ありがとう。」

雅紀は涙目になりながら笑顔で言う。それを見た五人は…

「（にゃ〜〜〜〜！？ま、雅紀くん、反則過ぎだよ…／／／）」

「（ま、雅紀っ！？…可愛い。／／／）」

「（雅紀君、涙目と笑顔って…なんてコンボ発動してるんや！？可愛過ぎるわ〜〜〜〜…／／／）」

「（雅紀君！？…お持ち帰りしたい。／／／）」

「（あ、アンタねえ…反則すぎよっ！…可愛いんだから…／／／）」
と五人のハートをキュンキュンさせていった。

「それじゃ、お言葉に甘えて、いただきます。」

雅紀はおかずを口に運んだ。

「あ…（それ、私のだ。）」

「…うん、なのはの、おいしい。」

「ふにゃっ！？／／／」

雅紀にそう言われ、なのはは赤面してしまっ。

「今度はコレ。」

「（次は、私のだ。）」

フェイトは自分の弁当のおかずを雅紀が食べるのを見て、口に合うかどうかという不安が頭によぎってきた。

「…うん。これもおいしい。」

「はわっ／＼／」

雅紀に言われ、フェイトも赤面。

「次は、コレ。」

「（あ、私のや…。）」

「…うん、これもなかなかうまい。」

「うっ！／＼／」

そう言われ、はやても赤面し胸を抑えた。

「っぎっは、コレ。」

「（私のだ…。）」

「うん、これも、美味しい味。」

「ふはっ／＼／」

そう言われ、すずかは顔を真っ赤にし、倒れそうになる。

「最後は、アリサの」

「（あたしのだって、わかってたんだ。）」

「…はあ、おいしい。」

「はうっ！／＼／」

アリサも赤面し、見られた銃ないと思ったのか、顔をそらした。

「ごちそうさまでした。皆の、温かみがあって、やさしい味だった。」

「（にやっ！ま、雅紀くん、だから反則だってば…／＼／）」

「（雅紀、可愛いな／＼／）」

「（温かみ…かあ。雅紀君もわかるんやなあ…。／＼／）」

「（雅紀君は、素直で可愛いなあ。／＼／）」

「（あ、アンタねえ、一体何回その笑顔見せれば気がすむの！？可愛いし、反則すぎよっ！！／＼／）」

ますます、五人のフラグを強化していく雅紀だった。すると…

「おまえっ！なんで聖洋五代美女と昼飯食ってんだ！！？」

男子達が現れた。

「聖洋五代美女？」

「聖洋五代美女とは、そこにいる、なのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんの五人のことだ〜」

と一人の男子が騒いだ。

「……………」

『…………… / / / 』

雅紀に見つめられ、五人は頬を赤くする。

「確かに…五人とも、美人で、可愛いな。」

『っ！！！！ / / / 』

雅紀に言われ五人の顔は真っ赤になる。

「（ふえ〜）…雅紀くん、そんな面と言われると恥ずかしいよお…
 / / /)」

「（雅紀、そんな風に言われると、恥ずかしいよ。 / / /)」

「（雅紀君、ほんまに何もかも反則過ぎやで。めっちゃ顔が熱いわ
) / / /)」

「（雅紀君、そんな、笑顔で言われたら…なんか恥ずかしいよ / /
 /)」

「（あ、アンタね、ほんといい加減にしなさいよ。恥ずかしいじゃないっ！！／＼／＼）」

またフラグを強化している雅紀。

「さっきの質問だ、なんで一緒に食ってたあっ！！!?」

「いや、なのは達に誘われたから…」

雅紀が正直に話した時だった。

『何イイイイイイイイツ！！！！！！！！』

男子達は怒りを爆発した。

「えっ、えーっ!?!」

雅紀は一人、混乱した。

「貴様あ…覚悟はできているのだろうかなあ!!」

「な、なにが…?」

『半殺しじゃああアアアアアアアアアっ！！！！！！！！！！』

「えっ、うわああああああっ！！！！」

雅紀が男子達に追いかけられている。今この時、雅紀は全ての男子達の敵となつたとか。

そして昼休み

「次は体育だよ。」

「なのはは体育苦手なんだっけ」

「あんだねえ、もう少し運動能力つけなさいよ。」

「それに今後の体育は前よりちょっと辛いかもしれないんだって。」

「ふえ〜〜〜…」

女子達が仲良く着替えている中に一人の男子がいた。

「あ、あのさあ、なんも俺まで此処で着替えることないんじゃないか…?」

雅紀は頬を赤くしてそう言う。

「あ、あんたが悪いんだからねっ！男子達の標的になったのが、悪いのよ！／／／」

そう、今は男子は雅紀以外にいないのだ。理由は…

「皆、おっかない…。」

鬼の形相で、雅紀を追いかけているからだ。今のところ、男子達には見つかってない。

「だからって、俺だけ別の方で着替えりゃいいじゃないかな？」

「私は、雅紀くんに着替えているとこ見られても…かまわないよ？／／／」

なのはが爆弾発言をしたのだ。

雅紀「なのはっ！？／／／」

「私も、雅紀に見られてもかまわないよ／／／」

「私も／／／」

フェイトとすずかも爆弾発言をする。

「フェイト！？すずか！！？／／／」

「私も、かまわへんよ…／／／」

「はやてまでっ！！？／／／」

「と、とにかくっ！あ、アンタはここで着替えてもらっただからねっ、絶対よっ！！」

アリスがトドメの一言を雅紀に言い放った。

「そ、そんな~~~~~：／／／」

雅紀は桃源郷のような所で着替えたとな…

そして体育では…

『貴様アアアアッ！！女子と一緒に着替えたとはどういうことだアアアアアッ！！！？』

先ほどからずっと雅紀を探していた男子達が一斉に雅紀に叫んだ。

「何で俺一人だけ狙われてんだアアアアアアアアッ！！！！？」

今はドッジボールをしていて、雅紀以外の男子達は皆相手チームにいるのだ。

『覗き見できなかった者の恨みを知れエエツ！！！！』

「いや、それ完全に己の願望言っただよねっ！！！！？」

雅紀がツツコミを入れてると…

「喰らえエエエエツ！！！」

ボールが勢いよく雅紀に向かってくる。

「当たるかよつと！！」

雅紀はボールを避けようとしたが…

「ふえっ！？」

なのはが雅紀の後ろにいたのだ。

「なのはっ！？くっ！！」

雅紀は後ろになのはがいる事に気づき、避けずにボールを受け止める。

「なのは、大丈夫かっ！？」

「ふえっ…ありがとう、雅紀くんっ！／／／」

なのはは雅紀に抱きついてきた。

「ちよっ、なのはっ！？／／／」

雅紀が赤面していると…

『貴様アアアアアアアアアッ！！！！！！！！』

男子達の怒りをさらに上げた。

「ぎゃああっ！！ますます怒りが爆発しおったアアアアアアッ！！！！」

雅紀はほとほと困ったそうなの。

「このやるオオオオオオッ！！！！」

勢いよく投げたがコントロールが悪く、フェイトに当たろうとした。

「はっ！？」

「フェイト！！」

雅紀は素早くフェイトの方へ行き、ボールをキャッチ。

「フェイト、大丈夫か？」

フェイト「あっ、う、うん。雅紀、ありがとう／＼」

フェイトは雅紀に寄り添ってきた。

「いや、なんも寄り添わなくても…／＼」

甘い感じが発せられてると…

男子達『貴様アアアア！！！羨ましいわアアアアアアアツ！
！！！！！！』

「ホントいい加減にしてくれっ！！！！」

雅紀はボールを投げて、数人の人に当てた。

「我らの同士をっ！よくもっ！！！！」

カツコイイセリフを言っている男子がボールを投げてきた。

「ふんっ！！！！」

ソレを雅紀がすんなりと取り…

「ハアっ！！！！」

数人の男子に当てた。

この後、男子達は完全な敗北をしたとか。

そして授業は終わり、皆は家に帰る。

「ふう…」

「あ、雅紀くん！一緒に帰らない？」

なのはが言ってきた。

「別にかまわないが…」

「やったっ！フェイトちゃん達が待つてるから行くっ！／／／」

そう言いながら、二人は校門前に来た。

「二人とも遅いわよっ！」

「ごめんねアリサちゃん。」

「ほな、帰るか。」

「そうだね。」

六人は、一緒に帰る。

「それにしてもアンタって強いのねえ。」

「うん、私もびっくりしちゃった。」

「まあ、ほとんど運動してないけどなんとか。」

「あれでかつ！？ほんま凄いよ！」

「（あの時の雅紀くん、すごくかつこよかったなあ／＼／＼）」

「（雅紀…まるで絵本に出てくる王子様な感じがした。／＼／＼）」

なのはとフェイトは先ほどの雅紀を思い出し、頬を赤く染めた。

「うん、ありがとう。それじゃ、俺はこっちだから、また明日。」

「あ、うんっ！また明日ねっ、雅紀くんっ！！／＼／＼」

雅紀は帰って行った。

「しかし、今日はほんま、珍しいものが見れたわ。」

「そうねえ。男子達ときたら、のぞき見る気満々だったみたいだったし……」

「困っちゃうよね。」

「でも、雅紀くんは他の男子とはなんかちがうよね。／／／」

「うん。なんか純粹で……／／／」

「優しいし／／／」

「可愛いしなあ。ほんま、あの時は理性が切れるところやった／／／」

「もうっ、はやてちゃんたら……」

「それに、あいつは……何気に強い／／／」

五人は今日一日を振り返った。その後に雅紀の笑顔を思い出した。

「明日が楽しみになってきちゃったの／／／」

「私も／／／」

「私もや／／／」

「私もだね／／／」

「そう……ね／／／」

五人は頬を赤くして嬉しそうに帰って行った。

そしてアリス宅では…

「あ、あの…アリス？」

「雅紀…：心配したんだよ？オマケになにか女の子の匂いがするね？」

アリスは声を低くして言った。

「警察犬か何かアリスは…？」

「これは、おしおきしないといけないね。」

「えっ！？」

雅紀はドキツとし顔を青ざめた。

「ちょうど私、発情しちゃったから／＼」

見るとアリスの瞳は赤くなっていて、発情モードを発動していたのだ。

「あ、あの、アリス…いや、アリスさん…?」

「さあ…この前よりも激しくいくからねえ…? 雅紀い／＼」

「あ…あああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

その後、雅紀は何もかも搾り取られたとな。

第22話（後書き）

さうして今回の内容をどうするか考え込んで。何日も更新を遅らしてしまつた作者ことマキサです！

雅紀「雅紀です…。」

アリス「アリスだよっ！」

さてと、雅紀は大丈夫か？

雅紀「…限界…」

アリス「因みに私は、元気ハツラツっ！！」

ま、まあ、あんなに激しくされたからな…。さて次回は、リリなの世界編三話ですっ！お楽しみにっ！！

第23話(前書き)

さて…今回は話が、ちと短いです…。!

雅紀「それではっ!」

アリス「始まりますっ!」

第23話

アリス宅

「いつもアリスの御飯は美味しい。」

「フッフ、ありがとう／／／」

現在、二人は食事中。

「ふう…そういうば、アリスは学校行かないのか？」

「私は役目が違うの。」

「役目？」

「……雅紀の恋人として、雅紀を支える。それが私の役目なの／／」

「／／／」

「雅紀が……好きだから／／／」

「…そ、それじゃあ、行ってきますっ！／／／」

雅紀は頬を赤く染めて玄関に急いで行った。

「いってらっしゃい。」

「う、うん／＼」

「フフフ　なんかこうしてると…私達、夫婦だね／＼」

「……じゃあ、家の事をよろしく。アリス／＼」

「うん。わかったよ、雅紀／＼」

まるで本当の夫婦のような朝から始まった。

「（あんなこと言われたら、恥ずかしいじゃんか…／＼／＼）」

雅紀は走りながらそう思うと…

「（うっ…や、やっぱり…昨日の疲れが…）」

そう雅紀は学校から帰るとアリスにおしおきされて、フラフラな体を無理に動かしてるのだ。

「（でも…しばらくすれば治ると思うしな。）」

そう雅紀は思っていると…

「あっ、雅紀くん、おはようっ！／＼／」

目の前になのがいた。

「あ、なのは、おはよう…。」

「ん？雅紀くん、どこか体の具合が悪いの？」

「な、なんで？」

「だって雅紀くん、顔色が悪いよ？」

なのはは雅紀の顔を見た。今の雅紀は疲れているような表情をしていた。

「いや、大丈夫だよ。昨日さ…夜更かししすぎて…」

「もうっ、夜更かししちゃダメだよっ！」

なのはがプンプンと怒った。その際にポニーテールが揺れる。

「わかった。なのはも夜更かしするなよ？肌が悪いし…美人が台無しになるから」

「ふえっ！？っ、うん…（雅紀くん、朝から反則だよ／＼／＼）」

「（なんとか誤魔化せた…。）」

雅紀は心中そう呟いていた。

「しかし…今日は一人なのか？」

「あ、うん。今日はアリサちゃんとすずかちゃんは急ぎの用事があ

るからはやく行ってくて。」

「そうなんだ。」

二人の会話がなくなった。しばらく沈黙が続く。

「（な、なんだ、この沈黙は…？）」

「（雅紀くん。）」

「そ、そういえばさ…」

「うん？」

「こうして二人で歩くのは、なんかさ…珍しいんじゃないか？」

「うん、そうだね…って、雅紀くんは昨日が初めて私たちと一緒に学校に行ったばかりじゃない。」

「あ、そうだな…あはは。」

先ほどの沈黙は何処へやら、二人は仲良く学校に行った。

「あ、なのは、おはよう。雅紀も／＼」

「なんや、二人でなんてなあ。アリサちゃんとすずかちゃんは？」

「何か急ぎの用事があるから早く行ってくて。もう学校にいるんじゃないかな。」

「そうなんだ。」

「で、雅紀君とは道端であった…ということか？」

「うん／＼／」

「なんや…羨ましい限りやなあ。」

「はやくちゃん！」

なのは顔を真っ赤にしながら言った。

「もう、なのはもはやくも…」

「ははは。ホント仲がいいなあ…。」

「雅紀は前の学校ではお友達はいたの？」

「……まあ、昔は…な。」

雅紀は龍斗の事をおもいだした。フェイトは雅紀の顔を見て、不安を感じた。

「（雅紀…なんか、悲しそう…。）」

「ま、そんなことより、もう中に入ろう。なのは、はやくも！」

「あ、うん！／＼／」

「ほな、行くごうっ！／＼／」

「…そうだね。」

四人は学校に入って行った。

そこで、現在は授業中です。

「また一気にとばしたなあ、おい…。」

さて何のことやら。

「雅紀くん、誰と話しているの？」

「いや、何でもない…。」

雅紀は黒板を見ていると……

グラァ…

一瞬だけ、めまいを感じた。

「（や、やばい…少しだが、めまいがしてきたし、眠気もあらわれた。）」

「雅紀くん、ホントに大丈夫…？」

雅紀はそう思っていると、なのはが聞いてきた。

「あ、ああ。大丈夫だ…」

雅紀はなのはに力ない笑顔を見せた。そしてチャイムが鳴り、授業は終了した。

休み時間

「雅紀くん、一回保健室に行った方がいいよ、具合悪そうだし…。」

なのはが言っていると、フェイトが近付いてきた。

「なのは、雅紀がどうしたの？」

「あ、フェイトちゃん……。実は雅紀くん、朝から具合悪そうで……。」

「えっ、そうなのっ、雅紀!？」

事業を聞いたフェイトも心配する。

「なのは、いちいち広げなくて良いから。俺は大丈夫、夜更かしの
しすぎでこんな感じになっているだけだから……」

「でもっ！こんなフラフラな状態で大丈夫そうに見えないよっ!!」

「いや、ホント……大丈夫……だか……ら……」

そう言った途端、雅紀はなのはに抱きつく感じで倒れた。

「ふえっ!？ま、雅紀くんっ!!？//」

「雅紀っ!？//」

なのは自分に抱きついてる雅紀を見てみた。フェイトも雅紀を見た。

「……ふゆう……すびい……」

可愛らしい寝息をたてながら寝ていた。

「な、なんだ……寝てるだけみたい。」

「そう…みたいだね…。」

なのはは雅紀を見た。

「（可愛い寝顔なの…／＼／＼）」

そう思いながら無意識に雅紀の背中に回していた手を強めて抱きしめた。

「兎も角、なのは、雅紀を連れて保健室に行こう。」

「はっ、そうだね。このままじゃ、私も大変だしね／＼／」

なのははフェイトの手を借りて雅紀を連れて保健室に向かった。

そして時間は流れて…

「う、うん…。」

雅紀は眼を開けた。

「あれ？俺…いつの間にか寝てたのか？」

雅紀は体を起こして辺りを見渡した。

「此処は…保健室か。」

雅紀が言っていると、扉が開く音がして、扉を見ると、そこには…

「あつ、雅紀くん、よかった…目が覚めたんだね。」

「なのは。」

なのはがいた。

「もう、いきなり倒れてから心配したよっ！でも寝てただけだから良かったの…。」

「……なのはが俺を保健室に？」

「うんっ。フェイトちゃんも手伝ってくれたんだよ。」

「そうか。フェイトも、後でお礼を言わなきゃ。兎も角、ありがとう、なのは。」

雅紀は笑顔で言った。

「だいぶ顔色が良くなったの。大丈夫なの？」

「ああ。もう気分もばっちり！やっぱ寝たからかな？」

「これからは夜更かししないことだよ。」

「…ごめんなさい。」

雅紀はなのはに注意され、謝罪した。

「フフ、許すよ。じゃあ、もう帰ろっか。皆待ってるよ？」

「帰る？なのは、今何時？」

「今は…3：30分だよ。」

「そっか…ずっと寝てたんだ。」

「兎も角、帰ろ……ってきやつ!？」

なのはは転んで倒れる。

「なのはっ!」

雅紀は急いでベッドから出てなのはを掴む。だが寝起きなのか力が

入らず、そのまま一緒に倒れてしまった。

「痛っ！…なのはっ、大丈夫かつ！？」

「……」

なのは返事なし。今の状態は、なのはが雅紀の事を押し倒している状態であった。

「あ、あの…なのは？」

雅紀はまたなのはに返事するもののまた返事なし。一方のなのはは、なにか頬を赤く染めて物欲しそうな瞳をしている。

「……雅紀…くん…／／／」

そう言うと、なのはは目をつむって顔を近づけた。

「えっ！？な、なのはっ！！？（おいっ！なんで目をつむってんのっ！？なんで顔を近づけてくんの！！？こ、こんな所、誰かに見られたらやばいじゃん！っていうか…誰か来るんじゃ…）」

雅紀は保健室の扉を見た。だが来る気配なし。

「（あっ、来ないや…っていうかこの状況をどうにかしないとっ！）」

雅紀はなのはの方を見て言った。

「おいっ、なのは！何で顔を近づけてくんの！？なのはってば！な

の……んっ！！？／／／」

「んっ／／／」

その時……なのはの唇が……雅紀の唇と……重なった。

第23話（後書き）

さて…この野郎っ！！なにキスなんかしてんだアアアっ！！？

雅紀「えっ！？っていうかこれ書いてんのはおまえだろ作者！！」

全く…羨ましいぞオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！！！！！！！！

雅紀「うるさいっ！！！！」

ぐふっ！！…す…すいません。さて次回は、なのはの突然のキスにより、意識してしまふ雅紀！さらには…あの人も雅紀にキスをつ！！

雅紀「…あ…お楽しみに。」

第24話(前書き)

さうて、もう24話か…。

雅紀「早いな…。」

まあな。でももしかしたらキャラが崩壊の可能性も…。では、スタートツ！

第24話

現在・・・なのはが雅紀に唇を重ねている。

雅紀はこの時、時間が止まったような感じがした。

「（ど、どうなってんだっ！？なのはが…なのはが…俺に…キ、キスっ！！？／／／）」

雅紀は混乱中。一方、なのはは…

「（雅紀くん…／／／）」

頬を赤くしてキスを続ける。そしてしばらくして唇を放した。

「プハッ！な、なのは…何で？／／／」

雅紀は問いませんが…

「…………／／／」

なのは自身の唇を触りながら、こちらを見つめているだけで返答はなし。その姿はどこか色っぽい感じがした

「……ごめん。いきなり……／＼／」

すると、なのはが謝ってきた。

「なのは…なんで俺にキスを…？／＼／」

「……ごめん。話せないの…／＼／」

「……ま、まあ良いけど、話さなくてさ。ていうかなぜ俺に…／＼／」

最後の辺りをボソツと言う雅紀。

「み、皆待ってると思うし、もう帰ろう、雅紀くん／＼／」

「あ、ああ…／＼／」

雅紀はなのはを立てさせて一緒に部屋を出た。その時、なのは・

「（何で私…雅紀くんにキスを…？／＼／）」

そう考えていた。

そして…

「あつ、なのはちゃん、遅いで〜。」

現在は校門。

「ごめんねはやてちゃん、それに皆も。」

「まあ、そんなに遅いって訳じゃなかったから。」

「謝ることないよ」

「というか、アンタ達なんか顔、赤くなってない？」

「えっ!?!」

雅紀となのはは互いを見合った。アリサの言う通り、二人の顔は若干だが赤くなっていた。

「くくくくく」

雅紀となのはは見つめ合ったらますます顔が赤くなってきたではないか。

「ちよつ、大丈夫なの？」

「う、うん…／＼／」

「だ、大丈夫です…／＼／」

「なんで雅紀、敬語なのよ？」

二人の様子を見て、はやてがなんか勘付いた。

「はっはくん。二人とも…保健室でなんかやらかしたなッ！」

「っっ！！／＼／」

はやての一言で二人はまた赤くなる。

「そっなの？なの？」

「ふえっ！？ち、ちがうよフェイトちゃん／＼／」

「ただ…な／＼／」

「ただな…ってなんやあ…雅紀君？」

「えっ！？いや、それは…／＼／」

「さあ…じっくり話してもらおうでえ、雅紀君。」

はやては光のない瞳で雅紀を見つめながら、ズンズンと雅紀に近づいた。

「あつ、いやその…」

そんなはやてに対し、雅紀はおろおろしていると…

「…はやてちゃん…」

なのはが普段にない声のトーンで、はやてに言った。

「うっ！わ、悪かったって…：…なのはちゃんっ！」

なのはの目を見たはやては怯えた。

「全く…アンタ達！早く帰るわよっ！」

「あ、待ってよっ！」

「置いてかないでっ！」

「ふう…：…（なのはがいきなりキスしてきたなんて言えない・・・／＼／＼）
／＼」

雅紀は前にいるなのを見た。

「（うう…：…何で、なのはの事を意識しちゃってんだ…：俺？／＼／＼）
頬を赤く染めながら、そう思った。

「じゃ、皆、また明日。」

「うん、また明日ね、雅紀。」

「体には気をつけてね。」

「今日は早めに寝なさいよっ!」

「体壊したらあかんよ〜。」

四人は言う。雅紀はなのはの方を見て…

「じゃ、じゃあな…。なのは…／＼／」

「う…ん／＼／」

互いに頬を赤くして言った。そんな二人を見ていた四人は…

「(二人とも…なんかあったのかな?)」

「(なのはちゃんも雅紀君も…なんか顔赤くしてるし)」

「(なんだろう…胸が締め付けられる…)」

「(なによっ、あの二人っ!なんか甘い空間が広がっていて…なんかむかついてくるじゃないっ!!)」

フェイト以外の三人は、何やら嫉妬しているご様子であった。

アリス宅

「ただいま。」

「あ、お帰り雅紀！」

雅紀が家に入ると、アリスが迎えてくれた。

「先にご飯にする？お風呂にする？それとも……」

「それとも……？」

「わ・た・し？／／／」

アリスが唇を触り、エプロンをやや緩めながら妖艶の笑みでそう言う。

「えっ！？で、できるわけないだろう！／＼／」

「そうだよねえ。ま、仕方ないか。また今度ね／＼／」

「今度って、何だよ、今度って…。まあいいや。着替えたら、来るよ。」

「うん じゃあ、雅紀の御飯作らないとっ！」

そう言って台所に向かった。雅紀は自分の部屋に向かった。

「ふう……」

雅紀は今、ベッドに横になっている。

「なのは……いきなりなんで、あんな……」

雅紀は保健室の出来事を思い出していた。あれは衝撃的だったためか、鮮明に覚えていた。

「ううう……／＼／」

所変わって、此处はなのはの家……

「はあ………」

なのはもまたベッドに横になりながら、保健室の出来事を思い出していた。

「なんで私、あんなことをしたのかな…？／／／」

なのははキスのことを思い出した。

「じゃああ…さっぱりわかんないのお…／／／。」

なのはは毛布を深く被った。

「雅紀くん…。」

なのはが雅紀の名を言つと…

ドクンッ！

胸が高鳴った。

「えっ！？」

なのはは自分の胸を触り、鼓動を感じた。

ドクンッ！ドクンッ！

「なんで？なんか雅紀くんの事を思っちゃうと、胸がドキドキするの…。(こんなの…昨日はなかったのに…)」

なのははある結論に達する。

「私、雅紀くん…恋…しちゃってるのかな？／／／」

キュンッ！

すると、胸が締め付けられる感じがした。

「そう…なのかも…私は、雅紀くんが…好きだから、あんなことしたんだ／／／」

なのはは天井を見た。

「雅紀くん…／／／」

なのはは雅紀の笑顔を思い出しながら、自身の唇を触った。

「また、キス、したいの…／／／」

そして此処はフェイトの家

「……………」

フェイトもまたベッドで横になっている。

「（なんか…胸がモヤモヤするな…）」

フェイトは考えていた。

「（それに、あの時の雅紀は…なんだか悲しそうだったな…。）」

フェイトはあの時の雅紀の顔を思い出した。

「（明日、聞いてみよう。）」

そう決心したのであった。

「はあ…。」

雅紀はため息しながら歩いていった。なのはとのキスを思い出してしまい、眠れずだったのだ。

「あつ、雅紀くん、おはよう／＼／」

すると、なのはが目の前にいた。

「あ、なのは／＼／」

互い、頬を赤くした。

「今日は、その、早いんだな／＼／」

「うん／＼／」

二人の会話はそこで止まった。しばらくしてなのはが話しかけてきた。

「雅紀くん…。／＼／」

「うん？」

「昨日は、ごめんね。／／／」

「あ、気にしてない…て言うのはウソになるけど…でも、なのは
せいじゃ、ないから…／／／」

「うん。ねえ雅紀くん…／／／」

「うん?」

すると、なのはが目の前で止まり…

「ちょっと、目を閉じてほしいの。／／／」

「なんで…?」

「お願い／／／」

「あ、ああ…。／／／」

雅紀は言われた通り目をつぶる。なのはは雅紀の頬を両手に添えて…

「ん…。／／／」

「んっ!?!／／／」

唇を重ねてきた。

「ん…んっ…／／／」

「んっ！んんっ！？／／／」

なのはは雅紀の唇の感触を味わっていた。雅紀は突然のなのはのキスに動揺。

「ふはあ…／／／」

「な、なのはっ！？／／／」

雅紀はいまだに動揺。

「フッフ 昨日のお詫びだよ／／／」

「えっ、ええっ！！？／／／」

「フッフ じゃ、私、先に行ってるよ！／／／」

なのはは走って行った。

「／／／」

雅紀は茫然と立ち尽くしすしかなかった。

「（なのは、なんで俺にキスを？しかも二回……。というか、俺にキスするのは勿体ないんじゃない？／＼）」

そう考え込んでいると……

「雅紀、ちょっと話があるんだ。」

「え？」

フエイトが声をかけてきた。雅紀は一旦、考えを中断し一緒に屋上へ向かった。

「あのさ、雅紀。」

「何？」

「昔、何かあった…？」

「えっ？」

フェイトが質問してきた。

「前に、雅紀にお友達がいるのって聞いたよね？その時、雅紀、悲しそうな表情してたから…。」

フェイトが言う。雅紀は…

「そうか。」

悲しい表情をして…言った。

「昔にな、ちょっとした事故が起きて…家族も…友達も…失ったんだ…。」

「っ…！」

雅紀の一言に、フェイトは驚いた。

「それ以来、しばらくの間さ…立ち直れなかったんだ…。」

「……………」

「だけど、ある一人の友達に…大切な人に言われたんだ。」

雅紀は、一呼吸して…

「『その人の分まで生きて…幸せになるの。』ってね。」

「幸せに…」

「まあ、最初はわかんなかった。だけど今じゃ、俺はその意味がわかる気がするんだ。たぶんだけど…」

「……………」

その場は静まり返った。

「はは…こんな事、言って悪かったな。なんか嫌だった…」

言おうとしたが、口を塞がれてしまった。

フェイトの…唇によって…

第24話（後書き）

さて、駄文になってしまった。

雅紀「あちゃあ……」

そんなことよりっ！フェイトが雅紀にキスッ！！？ありえないぞっ！！！！？

雅紀「俺だって、びっくりしたよ……。つか、恥ずかしい／＼／」

それになのはが自身は雅紀に恋愛感情を抱いてると知ってしまう。

雅紀「うう、なんか…俺には持たいたない気が……／＼／」

しかもおまえっ！アリスという子がいながら…！浮気をつ！！

雅紀「……ごめんなさい」

……まあ一応、ハーレムの設定にしてあるから良いけど。

雅紀「……」

うう。さて次回は、なのはに続いて今度はフェイトが雅紀にキスをっ！その時、雅紀は…お楽しみにっ！！！！

第25話

雅紀は自身の過去をフェイトに話した。話している最中に、フェイトが唇を重ねてきたのであった。

「（えっ、ええっ！？／＼／＼）」

「（……／＼／＼）」

やがてフェイトは唇を放した。

「フェイト……ト……？／＼／＼」

「ごめんね、いきなり。」

フェイトは外の景色を見つめた。その時、フェイトの髪が風になびいた。

「私もね、昔、母さんと姉さんを……亡くしたんだ。」

「……」

「それで、しばらくは心を閉ざしていた……。そんな私を、なのはが救ってくれたんだ。」

「なの何が？」

「うん。なの何が、必死に私に呼びかけてくれたから、今の自分がいる…。」

「…なんか、悪いな…。」

「なにも、悪くないよ。それに、雅紀が悲しんでいる事が…私には辛く感じる。」

「フェイト…。」

「私は、笑顔でいる雅紀が…好きだから／／／」

フェイトは頬を赤く染めて笑顔で言う。

「／／／」

「もう戻ろう。そろそろ授業が始まる頃だし。／／／」

「あ、ああ…。／／／」

二人はその場を後にした。その時、二人の距離が短くなった瞬間であった。

授業中

「（はあ……。今度はフェイトの唇を……。俺、悪いことしちゃったな……。／／／）」

そう雅紀は思う。一方、なのはの方は……

「（また、雅紀くんにキスしちゃった。ふふ、嬉しいの／／／）」
自身の唇を触りながら嬉しくそう思っていた。そしてフェイトの方は……

「（雅紀に、キスしちゃった……。／／／）」

フェイトはふと雅紀の方を見る。

「（うう……。なんか恥ずかしいなあ……。／／／）」

フェイトは顔を赤くしてそう思った。

そして一気に下校の時間

「また、一気にとばしたな。」

「雅紀君、誰と話してんの？」

「それに、三人とも、なんか顔が赤いよね。どうしたの？」

「……えっ？」「」

三人は顔を見合わせた。すずかの言う通り、三人とも、顔が赤かった。

「だ、大丈夫！」

「熱でも、風邪でもないからっ！」

「だから、大丈夫だよっ！」

三人は慌ててそう言う。

「そう？大丈夫ならいいけど……」

「なのはやフェイトは兎も角、雅紀は昨日、保健室に行ったんだから心配よ……。」

「……心配してくれたんだ。」

「当たり前じゃないっ！」

「ごめん、心配かけて…。」

「べ、別に謝らなくて良いわよっ！／＼／」

「ほな、三人とも、大丈夫なんやな？」

「」「うん…。」「」

三人は息ピッタリで頷いた。

「じゃ、もう帰ろっ！」

「なのは、早いわよっ！」

「待ってえなあ〜。」

「皆急がないで〜。」

四人は先に行った。残ったのは、雅紀とフェイトの二人。

「じゃあ、雅紀とこの辺りでさよならだよね。」

「ああ。」

「じゃあ、また明日ね…雅紀／＼／」

フェイトはそっとなで雅紀にキスしてきた。

「なっ！ふえ、フェイトっ！？／／／」

雅紀は動揺。その間にフェイトは四人の後を追って行った。

「な、何で…？／／／」

雅紀は動揺が治まらないまま帰って行ったとな。

アリス宅

「あ—————っ！———」

突然アリスが叫んだ。

「ど、どうしたんだ、アリス!？」

「雅紀にこの世界の事を言うのすっかり忘れてたっ!!」

「(そういえば確かに聞いてないな…。)」

「じゃ、まずはね、この世界は「魔法少女リリカルなのは世界」、略して「リリなのの世界」。」

「魔法少女の世界なのか？」

「うん、この世界は雅紀の世界じゃ、アニメで放送されているの。」

「へえ〜。」

「で、そのアニメは三期に分かれていてね。「無印」、「A's」、そして「Strikers」というの。」

「ほう。三期あるってことは、結構人気なんだな。」

「で、この世界の主人公の名前が…高町なのは。」

「っ!?!?!?!」

ソレを聞いた雅紀は驚愕の表情を浮かべる。

「先日、雅紀を連れてった三人の子の内の一人だよ。」

「う、うそ…だろ？」

雅紀はなのはの事を思った。どこからどう見ても、普通の少女だった。魔法なんて、見えそうに見えないし、何より、この世界の主人公にキスをされた。

「…キユウ…／／／」

ソレを頭の中で整理していると、雅紀は妙な声を上げてその場で倒れてしまった。

「雅紀？雅紀！大丈夫っ！？どうしたのっ！！？」

アリスが駆け寄ってきて雅紀を抱き起こし、呼びかけるのであった。

第25話（後書き）

うーん、最後の方はなんか微妙な感じだったな。

雅紀「全くだな。」

アリス「そうだね。」

さて、次回、なのはがこの世界の主人公だということを知った雅紀。そして、実際になのはが魔法を使っている所を目撃する。その時、なのはの目の前に怪人が。そして、ディカオスとなのはは対面する。

雅紀「お楽しみにっ！」

第26話(前書き)

今回は、エロイ部分が含まれます！そんなでもって長い話になります
んでっ！！

雅紀「始まります。」

第26話

現在、雅紀、気絶中。

「ハッ！」

雅紀はガバツと起きた。

「はぁ、寝てたのかぁ。」

雅紀は気絶したことを知る。すると、アリスがやってきた。

「あつ、雅紀、起きたんだ。」

「アリス…。」

「よかった、いきなり倒れたから心配したんだよ？」

「ごめん、心配掛けて…。」

「フッフ いいよ。それと…」

アリスが雅紀に近づき、耳元で口にする。

「雅紀の唇、何か甘い香りがするのはなぜ？」

「!?!」

アリスに言われ、雅紀は、なのはとフェイトにキスされた事を思い出してしまふ。

「まさか、他の女の子と、キス…しているんじゃないよね？」

「あつ、いや、その…」

「していたら…私に溺れるまで、私色に染まるまで…雅紀を犯してあげるんだから」

耳元でそう言われ、雅紀はゾクツとする。以前に雅紀は二回もアリスに犯されたのだから。

「でも、今はそんなの…どうでもいい。」

アリスは雅紀を押し倒して唇を重ねてきた。

「ん…ん…ふはぁ。今から雅紀と交わるんだから。」

「…なんか、アリスの性格が変わってる気が…」

「こうさせたのは、雅紀なんだよ？雅紀が私を小悪魔にさせたんだから。」

アリスは尻の辺りから、尻尾を出して、雅紀の腰に絡ませた。

「でも大丈夫。こういうこと以外は…いつもの私だから。」

アリスは再びキスをする。

「それに、私…我慢できなくなってきたの。最近、雅紀と交わる機会がないから…」

アリスがまたキスをする。

「だから、雅紀も、したいなら…我慢せずに…本能の赴くままに、私を犯してもいいんだよ？」

アリスは耳元でそう言う。吐息で雅紀はドキッとした。

「で、でもな…てか、俺はされて…」

「雅紀は、口ではそう言っているけど…下の方は、やりたがってるんだよ？」

アリスに言われ、雅紀は恐る恐る自身の体の下の方を見ると、立っていました。

「あ、あの、これは…／／／」

「もう、我慢しなくてもいいんだよ？家には私たち以外は誰もいないんだし。ねえ…、しよう…雅紀い？／／／」

「……」

「雅紀がそうしているのなら、私が、雅紀を犯してあげる。／／／」

「えっ！？ちよっ、アリス！なにすんの！？やめ……ふあああああ
あああっ！？／／／」

「可愛い声を上げると、ますますやめられなくなっちゃっよお。／
／／」

雅紀はアリスに残さず食べられました。

翌日

「ハア…アリスと結局交わられた。まあ、そりゃ嬉しいけど…恥ず
かしい／／／」

雅紀は頬を赤くしてそう思う。

「にしても、なのはがこの世界の主人公だったとは。普通の女の子

にしか見えなかった。」

ブツブツと言う。

「まあ、別にいいか…」

雅紀は考えることをやめ、学校に向かった。

学校

「えー、今日は、高町さん、ハラオウンさん、八神さんは都合により休むそうなので、欠席です。」

先生が言い終わると周りはざわついた。主に男子が。

「あいつらが休む…？しかも三人そろって？なんか気になる…。」

そう考えていると、目の前にオーロラが発生。

「うおっ!？」

オーロラは雅紀を包み込み、消えた。

とある場所

そこには、白い服を着た少女と黒い服に白いマントを付けた少女がいた。

「此処なんだね、「フェイト」ちゃん？」

白い少女が言う。なんと隣の黒い少女は、フェイトだったのだ。

「そっだよ、「なのは」。」

そして、白い少女は、なのはだった。

「此処に「違法魔導師」が…。」

「うん。それに、ほとんどが、AAAランクの持ち主だから、気を
つけないと。」

何やら、魔導師とかAAAランクとか、知らない単語を言う。する
と…

ビーン！ビーン！

警報が辺りに響いた。

「気づかれた…！？」

「っ！なのは、アレっ…！」

とフェイトが指差した方向に、異形の生物が大量に出てきたのだ。
そして別の方から人が現れた。

「やっぱり、此処は…魔法生物の実験施設…！」

「そつだね…！」

「貴様ら、管理局の人間か…？」

一人の男が言う。

「時空管理局所属、高町　なのはです！」

「同じく、時空管理局、執務官：フェイト・Ｔ・ハラオウン…！」

二人は、自身の武器を構えてそう言った。

「あ、あの「エース・オブ・エース」と執務官か…！」

周りがざわついた。すると一人の魔導師が…

「うるたえるな！相手は二人、しかも女だ…！これだけの数、対処しきれまい…！」

そう言い放つと、周りは武器を取り身構えた。

「行くよ、「レイジングハート」！」

なのはは自身の杖に呼びかける。すると…

『オーライ、マスター』

杖から女性の声が発してきた。

「行くよ…」「バルディッシュ」…！」

フェイトも自身の斧に呼びかける。

『イエス・サー』

斧からは男性の音が発してくる。そして二人は身構えた。

「殺れっ！」

途端、魔導師と異形が二人に襲い掛かった。二人は上空高くジャンプし…

「デイバイン…バスターーッ！！」

なのはのレイジングハートの先から桃色の光線が放たれ、異形をのみこむ。

「バルディツシュ、ソードフォーム！」

フェイトが叫ぶとバルディツシュの形態が、長い金色の刃を持った大剣に変わった。

「ハアアアアアアッ！！！！」

大振りにバルディツシュを振るい、異形を斬り倒した。

「こ、こいつら、強すぎだろっつ！！！！」

「ひ、怯むなっ！撃てッ！撃てええッ！！！！」

魔導師達は光の光弾を発射し、なのはとフェイトにぶつけるも…

「アクセルシューター…シュートツ!!」

なのはの周りに桃色の光弾が出現し先ほど放たれた光弾にぶつけ、防いだ。

「アークセイバーッ!」

フェイトが金色の斬撃波を放ち、魔導師の数人を落とす。

「ヒッ!に、逃げろ〜ツ!!!!」

数人の魔導師達は逃げていく。その時…

「待ちなさいっ!」

『ソニック・ムーブ』

フェイトが高速移動で魔導師達の行く手を阻んだ。

「あなた達を、逮捕しますっ!」

バルディッシュを前に突きつけ…

「武装を、解除しなさいっ!」

後ろから、なのはが追いかけてきた。

「く、クソッ!こ、こうなったら、コイツを使って…!」

そんな時、一人の魔導師がスイッチが付いた物を取り出した。

「お、おいつ！」「アレ」を出す気がっ！？我々もやられるぞっ！！
「？」

「これしか…方法はないのだアアアアっ！！！」

そう叫び、スイッチを押した。すると…

『ビーツ！ビーツ！直ちに避難してください。繰り返します。ただちに避難してください。』

辺りに警報が鳴り響いた。

「何をした…？」

フェイトは警戒しながら魔導師に問う。なのも同じく警戒した。

「フフフフ、時期にわかるさ。」

対して魔導師は不敵な笑みを出している…

ドゴーーーーンッ！！！！

壁を破壊して、そこから何かがでてくる。

「からなあ……!!」

魔導師は完全に吸収されていった。

「む、酷い……」

「……」

すると、化け物が二人を捕まえようと触手を伸ばした。

「はっ!」

「くっ!」

二人は施設から飛び出し、上空に待機した。

「き、危険なの……」

「うん。でも、ここで倒さないと……危ないっ!」

二人は身構えると、施設が溶けてなくなり、そこからアノ化け物がでてきた。

「行くよっ! フェイトちゃんっ!」

「うん!なのは……!」

なのはとフェイトは互いに頷き、化け物に突撃した。

「レイジングハート、カートリッジ・ロード!!」

『オーライツ！ロード・カートリッジ！』

レイジングハートについでマガジンから、弾丸が飛び出した。

「デイベイイン…バスター…！…！…！」

先ほどよりも威力の高い砲撃を放った。

「トライデント…スマツシャー…！…！…！」

今度はフェイトが金色の光線を放つ。

ゴオオオオオオ…！！！！

挟み撃ちで怪物を撃った。直撃し、煙が舞う。

「…やった…かな？」

「…っ！なのはっ、避けてっ…！」

フェイトが叫ぶと同時に触手が大量になのはに接近。

「えっ！？」

反応が遅れ、なのはが触手に捕まってしまった。

「きゃっ…！…！」

「なのはっ!」

「フフフフフフフフ……」

どこかから笑い声が聞こえる。

「ギャハハハハッ!!コイツは、コイツは良いぞお!!!!」

先ほどの怪物が姿を現す。だが、怪物の額に何かが張り付いてた。

「お前はっ!さっきの!!」

そう、額に張り付いているものは、先ほど怪物に吸収された魔導師だった。

「フフフフフフ、俺も運がいいなあ。この怪物と一体化し、力が増したのだから!」

そう叫ぶと、怪物もまた咆哮する。

「さて、我々の研究の邪魔をした、このエース・オブ・エースをどう料理しようか……!」

なのはを捕まえている触手が、手や足に絡みつき、ウネウネとなのはを触っている。

「ぐッ!」

「なのはっ!」

フェイトはなのはに近づく。すると…

「フフフフフ… 貴様もだ。 貴様も料理してやるうううっ!!!!」

勢いよく触手が襲ってきた。

「ハアアアッ!!」

フェイトはバルディッシュを振るい触手を斬っていると後ろからも触手がくる。

「しまっ…」

触手がフェイトを捕まえようとしたその時。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。 銀月の槍となりて、 撃ち貫け。 石化の槍、 ミストルティンツ！」

何処からか光の槍が降っていき、触手にぶつかると、触手が石化した。

「この攻撃は… 「はやて」っ!!」

フェイトの頭上に、黒き翼を生やした白と黒の服を着て、長い金の杖と茶色き本を持った少女、はやてがいた。

「助けに来たでっ!!」

「ググウ! 貴様も料理してやるっ!!!!」

今度はハヤテに向けて触手を放つ。

「はっ！」

はやては先ほどの槍をとばし、どんどん触手を石化していく。。。

「フェイトちゃんは、早くなのはちゃんをつ！」

「わかったっ！」

フェイトは急いでなのはのもとに向かう。

「させるかアアアアっ！！！」

怪物の口から光弾が発射され、フェイトに向かう。

「くっ！」

『ソニック・ムーブ』

フェイトはそれを避ける。だが光弾は軌道を変えフェイトに向かって突っ込んできた。

『プロテクションッ！』

フェイトの前に金色のオーラが現れ、攻撃を防いだ。

「グググッ！ならこれはどうだぁ！！？」

今度はオーラに包まれた触手をとばしてきた。

「（早い…っ！）バルディツシュ！」

『プロテクションツ！』

また防御するが、今度は違い、触手がだんだん防御壁を突き抜けていく。

「なっ！？」

「まだまだあ！！！」

オーラに包まれた触手を幾つもとばし、フェイトに向かい、防御壁を突けようとする。そして…

パリイイインツ！

防御壁はガラスのように割れた。そして無防備のフェイトを捕まえた。

「がっ！」

「フェイトちゃんっ！」

はやては急いでフェイトの方へ飛ぶが…

「貴様もだあ！！！」

「きゃっ！」

はやても魔法を使う暇がなく捕まってしまった。

「クハハハツハハハハツ！！！！さて…どう痛ぶろつかあ？」

邪悪な笑みでそう言い、なのはに眼を向けた。

「まずは、エース・オブ・エースから料理してやる…！」

触手を何本か伸ばし、なのはに近づける。そして…

スルスル…

なのはの服に入ってしまった…。

「ふえっ、あ、ああっ！！！」

「なのはっ！！！」

「なのはちゃんっ！！！」

「クフフフフフ、此処は…ふむ、胸のあたりだなあ。」

魔導師が言つと、触手なのはの胸のあたりで蠢く。

「く、くう…／＼／」

なのはは頬を赤くして耐えていた。

「フッフ、どれ、掴んでみようか…！」

触手がなのはの胸を掴んだ。

「ヒャアツ！？／／／」

「お、おお、すごい柔らかい感触だあ。ここもエース級だなあ…！」

そう言いながら、魔導師はなのはの胸を揉み続ける。

「ふう、あつ、ああん…／／／」

なのははエロイ声を上げていく。

「フッフ。なかなか良い声だあ。」

今度は残った触手で尻を触る。

「あ、あああんっ！／／／」

「くっ！なのはを離せっ…！」

「フッフッフ。なら執務官、貴様のはどうかな？」

そう言うと、今度はフェイトに触手が迫る。そして…

「っっ！」

フェイトの服に入った。

「おおぅ…これもなかなか…。ふむ、エース・オブ・エースより、大きい。」

そう言いながら、胸を揉んだ。

フェイト「くっ！あ、あっ！！」

「フェイトちゃ…ひゃわあっ！？」

そうしていると今度ははやての服に入ってしまった。

「おお、貧乳も…いや、二人より、小さいが、これはこれで大きいな…」

「くあっ！や、やめてえ…／／／」

「ククク、どれ…今度はこれはどうかな？」

すると、なのはの足に絡みついていた触手から、液がでてきて…なのはの靴を溶かした。

「ふえっ！？あ、ああんっ！！／／／」

すると、なのはの胸辺りから、液が漏れて服を溶かし始めた。そして、豊富な胸が見えた。

「あ、熱いようっ…」

「さあ、バリアジャケットが溶けて、裸になる恥ずかしさを知れっ
！」

「なのは…キャッ！／／／」

今度はフェイトの胸部分のバリアジャケットが溶けて、胸が見えた。

「フェイトちゃ…んっ！？／／／」

はやてのバリアジャケットも溶けてきた。

「ハハハハハッ！…さあ、美味しく頂いてやるう…！！」

「（くああ…助けて…）」

「（だ、誰…か…）」

「（ぐ、わ、私たちを…）」

三人はふと一人の少年を思い浮かべた。

「「「雅紀くんっ！…！！」」」

そして叫ぶ。大好きな、少年の名を…

「わかった…！」

すると、どこからか、声が聞こえ…

ザシュツッ!!

何かを斬る音が響いた。

「な、なにイイイイイイイイツ!!!!?」

見るとなのは達に絡みついていた触手が全て斬られていた。

「ひゃっ!」

「うわっ!」

「ひゃわっ!」

三人は落下する。すると…誰かに、掴まれた。

「もう、大丈夫だ…!」

そう言われた。三人は見てみると…

「あ、あなたは?」

なのはが問う。

「クウウウウツッ！！貴様っ！何者だああアツ！！？」

同じく魔導師も問う

「俺か？俺は…」

そいつは振り返り、言い放つ。

『最強最悪の仮面ライダー…仮面ライダーディカオスだっ！！！！！！』

ついにディカオス…推参！！

第27話

さかのぼること数十分前

ある場所にオーロラが発生し…

「うわっと!」

そのオーロラから、雅紀が現れた。

「いきなりなんだってんだ?…って此処は何処!？」

雅紀は辺りをキョロキョロしていた。

「仕方がない。ちょっと人がいないか探してみよう。」

そう言いながら雅紀は歩きはじめた。

歩いて、約十分。その時だ。

ドゴーンッ！

という爆音が辺りに響いた。

「何だ…？」

雅紀は爆音がした辺りに行った。そこには…

「え!？」

雅紀はその光景に驚愕した。

「なのは…フェイト…はやて!？」

雅紀の目の前には、なのは・フェイト・はやてが、謎の怪物と闘っている光景だった。

「なんで、こんな人気のないところで？しかも、本当に魔法を…！
いや、それより…」

雅紀は怪物を擬視した。

「あの化け物がなんなのかだ！あつ！三人とも、捕まった！」

雅紀が喋っている内に三人が捕まってしまった。

「くそっ！！」

雅紀は走る。だが遠いので時間が掛かる。

「ククク…どれ、今度はこれはどうかな？」

魔導師が言つとなのはの胸辺りの服が溶けてきた。

「ふえっ！？あ、ああんっ！！！！」

「な、なのはっ！？！！」

なのはの胸辺りの服は溶けてなくなり、胸が見えてしまう。

「さあ、バリアジャケットが溶けて、裸になる恥ずかしさを知れっ

！」

今度はフェイトの服も溶けてきた。

「フェイトちゃ…んんっ！？！！」

はやての服も溶けてきた。

「フェイト！はやて！／＼／」

雅紀は三人の胸を見てしまったので、顔を真っ赤にする。

「ハハハハハハッ！！さあ、美味しく頂いてやるう！！！」

魔導師が叫ぶ。雅紀は無言でディカオスドライバーを腰にセットした。

『カメンライド』

「変身…！」

『ディカオスッ！』

そしてディカオスに変身し…

「『『雅紀くっ！！！！！！』』」

三人は叫んだ。ディカオスはカードをベルトに入れ…

『アタックライド・ソニックッ！』

一気に三人のもとに行き…

『わかった…！』

そう返事をし、アドベントドライバーで触手を斬り裂いた。

「な、なにイイイイイイイッ！！！！？」

魔導師が叫んでいる最中に三人を抱える。

『もう、大丈夫だ。』

「あ、あなたは？」

なのはが言う。

「クウウウウツッ！！貴様っ！何者だああッ！！？」

同じく魔導師も言う。

『俺か？俺は…』

デйкаオスは振り返り…

『最強最悪の仮面ライダー…デйкаオスだっ！！！！』

そう名乗った。

そして、現在に至る。

「さ、最強最悪の……」

「仮面…ライダー…」

「デیکاオス…さん？」

茫然としながら、三人は言う。

『その前に…三人とも、服、服。』

「ふえっ……ってふえええっ！？／／／」

「はっ！？／／／」

「やばっ！私達、胸が見えてるわっ！！／／／」

三人は急いで露出した胸を隠した。

「

グウウウツッ！！仮面ライダーだかなんだか知らんが、俺様のごち
そうをよくもっ…！！」

『しるさいよ…』

デیکاオスはアドベントドライバーを構える。

『こんな、女の子を、酷い目にあわせて…』

デйкаオスはアドベントドライバーのグリップを強く握る。

『さらには「美味しく頂いてやる」……だと?』

デйкаオスはカードをベルトに入れる。

『ふざけるなよ……この変態がつ!!』

『アタックライド・ブラストツ!』

アドベントドライバーを連射する。

「ぐあつ!!!!」

『そんな奴に、俺の友達を…傷つけさせはしない…!!』

怒気の含んだ言葉を言う。

「ぐつ!この野郎つ、生意気なことを言うんじゃないねエエエツ!!」

「!」

魔導師は触手を再生させ、攻撃してくる。

『ぐつ!!』

デйкаオスは避けながら触手を撃つがすぐさま再生し、襲い掛かる。

「一人じゃ危険だつ!」

「私らも行かないとっ！」

「うんっ！」

三人は行こうとしたが…

『来るなッ！！！！』

デйкаオスは怒鳴り、三人を止めた。

『此処は俺一人でやる。お前らは手を出すな。』

「で、でも…」

『大丈夫。心配するな、なのは…。』

「（な、なんで、なのはの名前を…！！！？）」

『俺は、こいつにはちよいと、罪を償ってもらわないと。』

「罪って…」

『（とはいっても、俺一人ではまずいな。何か方法は…っ！）』

そう考えながら、ふとデйкаオスはアドベントドライバーを見つめた。

『そうだったな。コレには、こんな事が出来るんだっけ…！！』

ディカオスは二枚のカードを出し、アドベントドライバーに入れた。

『カメンライド』

そしてトリガーを引く。

『アークツ！』

目の前に幾つもの残像がでてきて、それが一つになる。そして、その姿は劇場版『仮面ライダーキバ 魔界城の王』に出てくる「仮面ライダーアーク」だった。

「うそ…」

「大きい…」

「まさか…召喚術!？」

三人は啞然。

『頼むよ…アーク!』

ディカオスが言うと、コクツと返事をし、すぐさま怪物と闘う。

「ぐうっ！何なのだ！こいつは…!…」

怪物はアークのと闘い、アークは怪物にパンチとキックを浴びせながら絡みつくこうとする触手をちぎる。

『今度は、このライダー達を…!』

デیکاオスは四枚のカードを出し、アドベントドライバーに入れる。

『カメンライド』

『それっ!』

『クウガッ!』

『アギトッ!』

『ファイズッ!』

『キバッ!』

今度は、「仮面ライダークウガ」に出てくる、主人公ライダー「クウガ」。「仮面ライダーアギト」に出てくる主人公ライダー「アギト」。「仮面ライダー555」に出てくる主人公ライダー「555」
。そして、「仮面ライダーキバ」に出てくる主人公ライダー「キバ」
だった。

「ふええっ!?!」

「また何かを召喚した!?!」

「しかも、四体もっ!?!」

これまた啞然。

『555、キバ、少し痛いが…我慢してくれ。』

今度は金色のカードを二枚出し、アドベントドライバーに入れる。

『ファイナルフォームライド』

『それっ！』

『ファ・ファ・ファ・ファイズッ！』

『キ・キ・キ・キバツ！』

デイカオスは555とキバに向けて放つ。

『ぐっ！』

『あっ！』

すると似たいの体が徐々に変形していき、武器となった。これが、
デイケイドのシリーズでやった、ライダーを武器や乗り物に変形さ
せる力「ファイナルフォームライド」なのだ。555は巨大な銃、
「ファイズブラスター」となり、キバは巨大な弓矢、「キバアロー」
となった。

『クウガ、アギト、それを持って構えてくれ。』

クウガはファイズブラスターを、アギトはキバアローを持ち構える。

『狙いはあの怪物。一斉に同時攻撃を放つよ…！』

デイカオスが言うと二人はコクツと頷いた。

『いくぞ…!!』

デイカオスは三枚の金色のカードを取り出し、一枚はベルトに、もう二枚はアドベントドライバーに入れる…。

『ファイナルアタックライド』

ベルトのレバーとアドベントドライバーのトリガーを同時に押す。

『ファ・ファ・ファ・ファイズッ!』

『キ・キ・キ・キバツ!』

『デイ・デイ・デイ・デイカオスッ!』

デイカオスの目の前にカードが並ばれる。クウガが持っているファイズブラスターから、ポインターが発射される。

『キバつてえ…いくぜエエッ…!!』

アギトの持っているキバアローの矢の鎖が外れ、エネルギーが溜まると同時にキバの相棒、「キバットバット三世」が叫ぶ。

『アーク! 離れろっ…!!』

そう言うとアークは怪物から離れる。良く見てみると、怪物は半ばポロポロの状態だった。

「ぐう…なにが…ってあれは一体!?!」

怪物は驚いた。そのすきに…

『撃てえエエエツ!!』

とディカオスはデイメンションレイザーを、クウガはディカオス
フォトンを、アギトはディカオスファングをそれぞれ同時に放った。

「なっ、何いイイイイイっ!!!!?」

三つの光弾は怪物に直撃する。

「ぐあああああああああああああああああっ!!!
!?!?!」

断末魔を上げ、怪物は爆死した。そして、ファイズブラスターとな
っていた555とキバアローになっていたキバはもとの姿に戻る。
そしてアークキバまで、五体のライダーがディカオスに近づく。

『皆お疲れ様。休んでていいよ。』

すると、五人のライダーは消滅した。

『俺は、どうしようか…』

「あ、あのっ!」

考え込んでいると、なのはが言ってきて、ディカオスは振り返る。

「助けていただき、ありがとうございましたっ!」

「私からも。」

「私もや。」

三人は頭を下げる。

『そんな、よしてくれ。頭を上げてくれ。』

ディカオスが慌ててそう言う。

『それよりも、怪我とかしてないか？』

「は、はい。」

「私も。」

「私もです。」

「そうか。ならよか…。」

良かった。そう言おうとした時だった。

「動くなッ！」

声がし、四人は声が出た方を向くと…

「時空管理局の、クロノ・ハラオウンだ！すまないが、君を拘束させてもらおう。」

リリなのを知っている人は知っている……ご存じKYと呼ばれる青年、
「クロノ・ハラオウン」が現れた。

第27話（後書き）

さて、とうとう、クロノが来ちゃったよ。

雅紀「ふうん…というかKYって、なんで？」

まあ、雅紀が知らないのも無理はない。クロノは空気を読まないからKYと呼ばれるのだっ！！

雅紀「は、はあ…」

さてと、今回は、ディカオスの存在を管理局は知る。戦いはないです。すいません。

雅紀「それではお楽しみにっ！」

第28話

怪物と闘い、なのは達と話していた所に、クロノ・ハラウンと呼ばれる青年が現れた。

『クロノ：ハラウン？（フェイトと同じ苗字…という事は、フェイトの家族…。）』

「君が彼女達を助けてくれたのは、礼を言う。しかし、君を野放しにしては、危険だ…！」

デйкаオスがそう思っていると、クロノは手に持つてあるデバイスを構えながら言い放つ。

「ちよ、待つてよクロノツ！なんでこの人を拘束するの？」

「そ、そうだよっ！デйкаオスさんは私達を助けてくれただけだよっ！」

「君らは彼の力を見ただろう。見た事もない召喚や砲撃を…。詳しい事は本部で聞かせてもらう。こちらの指示に従い、武装を解除しろ…！」

クロノはデバイスの先端をディカオスに向けながら言う。

『…悪いですが、その时空管理局の指示には従わない。そもそも、そんな組織、聞いたことがないです。』

「何っ！？管理局を知らないだっ！ウソをつくなっ！」

『ウソは付いていません。地球にそんな組織：存在しないはずですよ。』

「时空管理局は様々な世界を管理し、次元犯罪を取り仕切る組織だ。そもそも、この世界も、管理世界の一つだ。君が言う地球ではないっ！」

『え？（地球じゃ…ない？）』

「さて、話はここまでだ。指示に従わないのなら…手荒い方法で君を拘束させてもらうっ！」

すると、クロノの後ろから、十人ぐらいの魔導師が飛んできた。

「すまないが…悪く思わないでくれ。」

クロノと魔導師達は一齐にディカオスに光弾をぶつけた。

「デイ、ディカオスさんっ！」

「クロノッ！」

すると、デイカオスの目の前にオーロラが発生し、光弾を防いだ。

「なっ!?!」

『悪いですが俺は、このあたりで失礼します。』

デイカオスはオーロラに包まれ消えた。

「転移魔法かつ!?!エイミー!」

クロノは艦にいる、女性「エイミー・リミエッタ」に聞く。

「転移座標もわからない。反応は、ロストだよ…。」

「そうか…。」

すると、なのは達が来た。

「酷いよっ!クロノくんっ!!!」

「彼は、私達を救ってくれただけなんだよ。」

「なんも見知らぬ力を持つてるからって、拘束する必要ないやんっ

!!!」

「…すまないな。だが、これは本局に報告しなければならぬ。」

そう言つと、クロノはその場から去って行った。

「……………」

「行く。なのは…。」

「此処で立ち止まっていたら、なんもあらへん。帰ろ？」

「…うん。」

三人はその場を後にした。

その頃、ディカオスは…

学校の屋上。誰もいない所にオーロラが発生し、そこからディカオスがでてくる。

『誰もいないな。というか此処は学校か。』

ディカオスは変身を解除し雅紀に戻る。

「今何時だろ…っってもう二時間目が始まる時間じゃんっ！戻らないとっ！！！」

雅紀は急いで教室に戻って行った。

所変わって、此処は次元の中を走る、次元航行船「アースラ」、その内部では…

「エイミィ、モニターを出してくれ。」

「うん。」

クロノの指示でエイミィはパネルを操作し、目の前にモニターを出した。

「さて、話すのは、先ほどの謎の魔導師についてだ。」

モニターでは、ディカオスが怪物に捕まっているのは達を助けた場面が流れる。

「突如として、三人の目の前に現れ、触手を一瞬にして斬り裂いた。」

「その時の映像をスローモーションにして見てみたの。」

すると、モニターの映像はスローになって流れる。そしてそのモニターでは普通に走るディカオスが映っていた。

「スローで見てみた結果、彼は超高速でこの場に走って表れて、触手を斬り裂いた事になる。」

「スローでこの速さは、普通はあり得ない…！」

「私の「ソニックフォーム」より速い…。」

ソレを聞いたフェイトは驚いた。

「「そして、今度は彼が召喚した…何というか、人みたいなものだ。」

次の映像では、ディカオスがアークを召喚し、怪物と闘わせている所だ。

「魔法陣を出さずに、召喚していた。」

「しかもこの時、魔力反応がなかったんだよ。」

「ウソやるっ!?!」

「事実だ。そして、今度はその召喚した者の内の二体を武器に変形させる所だ。」

今度は、ディカオスが555とキバをFFRさせ、武器に変形させたところだ。

普通なら召喚した者を武器に変形させるなんて、ありえないよ。」

「次に奴が放った砲撃だ。」

と次に映ったのは…ディカオス達が一斉に怪物に砲撃を放つところだった…。

「この砲撃の内、二つはSSランクで、彼が放った砲撃は、オーバーSSSランク並のエネルギー密度だ。」

「私の「スターライトブレイカー」と同等、あるいはそれ以上の破壊力を持っていたしね。」

「ああ。しかも、これにも魔力反応がなかった。」

「コレを見た結果、彼は魔力とは違うエネルギーでコレを撃つたり召喚したって事になる。」

「本局では彼を危険視扱いだそうだ。」

「そんな…」

「あの人はなにも悪いことしてへんっ！私らを助けてくれた恩人なのに…！」

「君らの気持ちはわかる。だが、本局はそう判断した。」

「それに、彼のこの姿、バリアジャケットでもなさそうなの。魔力ではないし、ほとんど顔まで仮面が付いていて、誰なのかわからないし…。」

「…！」

「仮面」と言う言葉になのは、ハツとした。

「そう言えばあの時、デイカオスさんは自分の事を「仮面ライダー」って呼んでいたよ！」

「仮面ライダーだと？なんだそれは？聞いたことないぞ？」

「それに彼、時空管理局の事を知らないって言ってたし。」

「…恐らくかもしれないんだけど、彼は「次元漂流者」の可能性もあり得るんじゃないか？」

はやての一言にクロノはハツとする。

「確かにそれはあり得るな。しかも地球と言っていたし。恐らくなのは達と同じ世界から来たんだろう。だが問題は、そいつが誰なのかだ。顔がわからないのではしょうがないぞ…。」

「まあ、兎も角、なのはちゃん達は家に帰ってゆっくり体を休んだ

方がいいよ。後は私たちがやるからさ。」

「わかりました。」

「後はお願ひ、エイミィ。行こう、なのは？」

「うん…。」

三人はその場を後にする。そして廊下で…

「……」

「どうしたの、なのは？さっきから黙ってて…。」

「うん。なんでディカオスさん、なのはの事知っているのかなあ…
って思っちゃってて。」

「そう言えばそやなあ。なんでやる？」

「それに、なんか、初めて会ったって感じがしなかったの。前から
知っている感じで、温かい感じがしたの…。」

「なのはも？」

「フエイトちゃんも？」

「実はな、私もなんや。」

「はやてもか。」

「本当に、何者なのかなあ…ディカオスさんて。」

三人はディカオスの事を思いだす。

「今度会えたら…ちゃんとお話したいの！」

「私も…！」

「私もやっ！」

三人はそう決意した。

そして雅紀は…

「は、は、ハアアアクションッ！！」

盛大にくしゃみする。

「雅紀君、大丈夫？」

「あ、ああ。風邪かなあ。」

「アンタねえ、誰かに噂されてんじゃないの？」

「そうかなあ？誰が噂してんだ？」

平凡に時が流れていった。

第29話(前書き)

さて今回は…そしてアリサとすずかが誘拐されちゃっつ…!!??

雅紀「は、始まりますっ!!」

第29話

今日も平凡な日

屋上

「……」

なのは何か考えていた。

「はぁ……。ディカオスさん、どうしているかなあ。お話したいの

に。」

なんて考えていた。魔王式のお話が迫る…！

「魔王じゃないもんっ！」

聞こえていたのか、なのはが言ってくる。頼むから、スターライト
ブレイカーは撃たないで！本当にすいませんっ！

「ならよろしいっ！」

「なのは、誰としゃべってるの？」

「にやっ！ふえ、フェイトちゃん、いつの間につ！？」

「さっきからいたんだけど、聞こえていなかったから。」

「うう…ごめんね。」

「…ディカオスの事、考えていたの？」

「うん。」

「私も、考えていたんだ。」

「フェイトちゃんもなの？」

「うん。今、何処にいますのかなって考えてるんだ。」

「私も。」

「でも、身近にいるような感じがするんだ、私。」

「私も、そう感じるの。ディカオスさん、私たちの傍にいるような気がして。」

「うん、そうだね。なのは、もう行こう。チャイムが鳴るから。」

「うん。」

二人はその場を後にした。

その頃、雅紀は…

「は、ハアアアアアクションツ!!!」

今日もまた盛大なくしゃみを出していた。

「うううう…。やっぱり、誰か噂してんのかなあ。」

雅紀は鼻を触りながらそう言う。

「雅紀君、本当に大丈夫なの？この間もそんな感じだったし…。」

「あ、ああ。大丈夫、大丈夫。俺の体は頑丈だから…たぶん。」

「たぶんで何よ、たぶんで…。」

雅紀の曖昧な返事にアリサは呆れてる。

「基本的、俺は大丈夫だから。すずか、心配いらないよ、大丈夫。」

「…うん。」

「（にしても俺、この世界にしばらくいるけど、何も起きないな。

起きたとすれば…時空管理局って組織に俺の事…もといディカオスの存在を知られたって事。なのは達にもだ。もしかしたら俺の予想じゃ、時空管理局が絡むかもしれない事件になりそうだ。）

「あつ、もうチャイムが鳴るから、教室に戻ろう。」

「そうね。ほら、雅紀もボーツとしてないで教室に戻るわよっ!!!」

「ん？あ、ああ。」

こんな感じで三人は教室に戻って行った。

そして、帰り道

「また一気にとばしたなあ…。めんどうかいからっ、いやいや、文が長くなっちゃっからなあ。」

「あ、そう。」

「雅紀くんはときどき誰とお話しているの？」

「まあ……………天の声？」

「何やそれ？」

「アホらしい。」

「アリサちゃん。」

「にははは、雅紀くん天の声って普通はないよ？」

「でも、なのはもさつき雅紀と同じように誰かと会話していた気が……………」

「にゃっ！フエイトちゃんっ、それを言わないでっ！」

「ははは、なんだ、なのはもかあ。」

「うううう、恥ずかしいの…／＼／」

なのはは頬を赤くして恥ずかしがる。

「別に恥ずかしがる事はないと思うよ？独り言ってたまにあるからな。」

「そう言うアンタは毎度そうじゃない。」

「そうだなあ。」

仲良く帰る六人。

「じゃあ、あたしとすすか、今日は塾があるからこのへんでね。」

「皆、じゃあね。」

「うんつ。また明日ねえ〜！」

「二人とも塾通いかあ。」

「私もなんだよ？」

「なのはもっ!?!?!だからあんなに頭が良いんだあ。羨ましい。」

「雅紀くんも頭良い方だよ？」

「俺は基本、頭悪い方だから。授業の時は前の学校でそのあたりができたからってだけ。」

「そうなの。」

「だから、なのはやフェイトやはやて、皆に、何か、嫉妬しちゃってんのかなあ。とても羨ましく思う。」

「…じゃあ、今度、なのはの家に遊びに来て、その時、雅紀くんのわからない問題教えるから！」

「ありがとうな、なのは。」

「えへへ／＼／」

「なのはばかりずるいよ！私も、わからない問題があったら、教えるから！」

「私もやつ！」

「ありがとう、フェイト、はやて。」

「／／／」

「あはは／／／」

何気にどんどんフラグを強化していく雅紀。もはや、天然フラグメイカーの称号をやるほどだ。

「じゃあ、また明日な！」

「うんっ！」

「また明日ね。」

「またな〜。」

雅紀は三人と別れ、帰って行っていると…

「ん？あれって…アリサにすぎか？」

目の前の車の中に口をふさがれ、もかくアリサとすぎかが見えた。

「何かあったのか…っ！」

雅紀はそう思い走る。その直前、車も走って去って行く。

「逃がすかつ！」

雅紀は急いで車の後を追った。

「は…走ってたら、追いつかないだろ…！」

全速力で走って数分、体力切れになったのかフラフラになっていた。

「せ、せめて……ば、バイクがあれば…」

その時だ。

ブブウウッ！

何処からともなくマシンディカイザーが現れた。

「な、ナイスタイミングだよ…！」

雅紀はディカイザーに跨り、走らせた。

古びた倉庫

「よく誘拐してこれたなあ。しかも、良い金づるだ。」

「そうだろ、そうだろお！バニングス家と月村家のガキだあ。たんなり身代金をもらってやるっぜえ…ヒヒヒッ！」

「まあ、待て。まだ電話もしていないんだぜ？しばらくこのガキどもで遊ぼう。ガキだが…結構良いスタイルしてやがるからなあ…。」

怪しい発言をする一味。どうやら誘拐犯のようだ。

「アンタ達っ！こんな事して一体何になるわけっ！？」

そんな時、アリサが一味に聞いてきた。

「何って？そりゃあ、金持ちの家のガキを誘拐して身代金をもらって、そのあとは良い思いして暮らす…って所だ。」

「もつとも…その間は、お前から楽しい思いをして…もとい、気持ちいい思いをするんだよお！ヒヤハハハハッ！」

「…最低ねっ！」

「ヒビヒビっ！何度でも言ってなっ！お前らは現に折に入れられたちようちよなんだよっ！！」

「まあ、悪く思うなよ。金を貰うためだ。」

「それじゃ、俺は電話してくる。」

一人はその場を後にした。

「ヒビヒビッ！さあ…もう俺も我慢できねんだあ…とつとつやろっぜっ！！」

誘拐犯の一人は鼻息を荒らしながらすすかを引っ張る。

「きゅっ！！」

「すすかっ！！」

「悪いなあ。俺も我慢ならないんだよお。」

もう一人はアリサを引っ張る。

「ヒビヒビッ！さあ、たっぷり犯してやるぜえ！！」

「口が聞けないようになるまで黙らせるのも良いなあ。」

誘拐犯はケラケラと笑いながら、すすかの頬を舐め、もう一人はアリサの尻を触る。

「うう…」

「ヒビヒビヒッ！反応が良いぜえ…。もうたまんねえなあっ！！」

「胸も発育が良い。良い手触りだ。」

誘拐犯二人はアリサとすすかの服の中に手を入れ、胸を揉んでいた。

「ハア…俺のがもう入りたくてウズウズしてるぜえっ！！コイツら処女のようなだから、締め付けは結構いいじゃないかあ！？」

「だろうな。さて、もうこのへんにして、とつと服を脱がしてやるか。」

誘拐犯二人は、アリサとすすかの服に手を伸ばした。

「（や、やあ…誰か、助けてっ！）」

「（悔しいっ！こんな奴らにやられるなんてっ！）」

二人はそれぞれ思い、一人の少年が脳裏に浮かんだ。そして…

「助けてー！ー！ー！ツ！ー！ー！」

叫んだ。

「ヒビヒビ、叫んだ所で、誰も来るはずが…」

「それがあるんだよ…！」

「だ、誰だっ！」

振り返ると、倉庫入り口に一人の男がいた。

「俺は…その二人の友達だ…！」

「「雅紀（君）っ！」」

そいつは、雅紀だった。

「な、俺等の後をつけてきやがったのか…！」

「二人を返してもらおうぞっ！」

雅紀は地面を勢いよく蹴って二人のもとへ向かい、誘拐犯の一人を蹴る。

「ぐはあっ…！」

「じのっ!!」

誘拐犯は銃を持ち、撃つが…

「遅いつ!

雅紀は銃を持っていた方の腕を蹴って、銃を遠くへ投げ、誘拐犯を殴る。

「ぐっぴっ!!」

誘拐犯は倒れた。雅紀は二人の方へ行こうとしたその時…

ダーンッ!

雅紀の右肩から血がでてきた。どうやら撃たれたようだ。

「ぐっ!」

「雅紀君っ!」

「雅紀っ!」

二人は涙目になる。雅紀の後ろには、誘拐犯の一人がいた。

「此処を知られたんじゃ…生きて返しておけん…死ねッ!」

誘拐犯は銃を構える。次の瞬間!

バンッ！

と言う音が響くと同時に、誘拐犯の持っていた銃が爆発した。

「何イツ!!?!?」

誘拐犯は驚愕の表情を浮かべる。

「もう武器もない。諦めるんだ…!」

雅紀の右手には、アドベントドライバーが握られていた。

「く、くそおおおっ!!!」

誘拐犯は叫びながら、突っ込むが…

「くらえっ!!!」

雅紀が回し蹴りをかまして、その場に倒れる。

「ふう…。アリサ、すずか、大丈夫か？」

そう言いながら二人の縄を外す。そして…

「「雅紀（君）っ!」」

勢いよく雅紀に抱きついた。

「ふ、ひつく…怖かったあ…」

「あ、アンタね…く、来るのが遅いのよっ！バカアツ！！」

二人は泣いていた。そんな二人に雅紀は…

「怖かったな、大丈夫。もう、大丈夫だから。」

優しく言い、頭を撫でる。

そして数十分後、誘拐犯達は警察に連行された。

「送っていくぞ？もう暗いし。」

「大丈夫よ。車を迎えに来させたから。」

そう言っていると、いかにも高級そうな車が来た。

「高級自動車は初めて見たな……。」

ソレを見た雅紀は驚愕中。

「雅紀君も乗って。肩、怪我しているから。」

そう言われ、雅紀は肩を見てみると、少しは血は止まったが出血もまだしているため、服に血がにじんでいる。

「ああ。これは大丈夫だから、病院に行けば治療してもらおうし。」

「お願い。私たちが巻き込ませちゃったから……。」

すずかは上目遣いをしてくる。

「うっ！ちよ、それはやめてっ！アリサも何か言っつてよ……っ！？」

雅紀はアリサの方を見ると、アリサも同じく上目遣いをしていた。

「あたしからも……お願い。」

そう言ってくる。雅紀は……

「……………ワカリマシタ。」

片言で言うしかなかった。

すずかの家、月村家

「私の妹とお友達を救ってくれてありがとう！なんとお礼を言えばいいか…」

すずかと同じく紫髪の女性「月村 忍」が涙目で言ってきた。

「い、いえいえっ！俺は単に助けたかったからで、お礼なんか要りません！」

「じゃあ、雅紀君此処にいてね？ノエル、ファリン、この人の怪我を治療して。」

「かしこまりました。すずかお嬢様。」

すずかに言われ、丁寧に冷静に言う女性は「ノエル・K・エアリヒカイト」。

「じゃ、じつとしてくださいねえ。」

そうやって雅紀に近づいてくる女性はノエルの妹、「ファリン・K・エアリヒカイト」。

「は、はい。」

雅紀はじつとし、服を脱いでみると、肩の傷は少し切った感じだ。ファリンは消毒液を持ってきて、雅紀の肩に塗った。

「痛っ！」

雅紀は苦痛を覚えた。

「少しの間だから、我慢してください。」

ノエルは言いながら雅紀の肩の傷口に糸を縫う。

「くっっっ！」

雅紀が我慢していると、ノエルは肩の傷口を塞いだ。

「終わりです。もういいですよ。」

「はい、よく頑張りました。」

ノエルは冷静に、ファリンは笑顔で言った。

「あ、ありがとうございます。」

そう言い、雅紀は服を着た。

「アンタ、結構痛そうだったわね。」

「うん。結構痛かった…。」

「雅紀君ごめんね？私たちが誘拐されたばかりに…。」

「悪いのは、すずかとアリサじゃない。誘拐犯の方だ。」

「雅紀君、良いこと言うわねえ。」

「はい。こんな女の子を怖い思いさせて…！」

雅紀は先ほどじぶんで倒した誘拐犯達の事を思い出し怒っていた。

「ありがとね。雅紀君／＼／」

「いやいや。」

「あ、すずか、ちょっと。」

「ん？何？」

忍に呼ばれずかは忍の方に。忍はすずかの耳元に顔を近づけ…

「頑張りなさいよ？雅紀君の事、好きなんですよ？」

そう言ってきた。

「ひゃう！？お、お姉ちゃんっ！」

ソレを聞いたすすかは顔を赤くしてしまう。

「？」

雅紀はそんな光景に頭に？を浮かばせて見ていた。

アリス宅前

「ありがとう。送ってくれて。」

「うん。」

「別にお礼はいらないわよ。」

「じゃあ、またな、二人とも。」

雅紀は家に入ろうとした時…

「あ、雅紀君っ!」

「ちょっと、こっちに来なさいっ!」

二人に呼びとめられる。

「ん?何?」

雅紀は二人のところに行くと、二人は雅紀の頬に顔を近づけ…

チュッ

キスをした。

「あ、アリサっ!?!すずかっ!?!」

コレに雅紀は驚く。

「今日はホントにありがとうね　／＼／」

「こ、コレは、お、お礼なんだからねっ！好きだからやったんじゃ、ないんだからねっ！／＼／」

二人は頬を赤くしてそう言い車に乗って走り去って行った。

「……／＼／」

雅紀は茫然としながら家に入っていった。だがそこには…

「……」

アリスがいました。

「あ、あの、アリス」

「雅紀…こんな時間まで、どこに行ってたのかな…？（怒）」

「いや、その…」

「……ちゃんと話してね？」

「…話します。」

雅紀は事情を説明した。

「そうだったんだ。大丈夫だった…？」

「ああ。」

「そうか。でもね…」

「へ？」

「こんな時間まで、私を一人にさせて…心配させて、おしおきだよ？」

「あ、アリス？」

「うにゃああああああつ！！！」

アリスが雅紀に向かって飛びかかってきた。

「ああああああつ！！！！！！！」

その日、雅紀は残さず食べられてしまい、尽き果てたとな。

第29話（後書き）

いやあ、とうとうすずかとアリサもキスを…！しかも一度に、雅紀、罪な男になったな。」

雅紀「嬉しくなったんじゃないっ！」

はいはい、すねない。さて次回は、また別の世界に雅紀はとばされてしまい、そこで出会ったのは…青い髪の女の子。そしてなのは達とお話？

雅紀「お楽しみにっ！」

第30話(前書き)

さあ、いよいよあの子が登場しますっ！

雅紀「始まりますっ！」

第30話

誘拐事件から一日、今日は土曜日。

「痛てて…。」

雅紀は険しい表情で右肩を触っている。昨夜の怪我が痛むのだろう。

「雅紀、大丈夫？」

雅紀の肩を見ながら、アリスは心配な顔をして聞いてきた。

「大丈夫、大丈夫。少しヒリヒリするだけ…。」

「そう…。」

アリスは心配そうに朝食を食べた。雅紀は…

「痛っ！」

まともに御飯が食べれない様子。それを見たアリスは…

「雅紀、はい、あーん。」

雅紀のおかずを取り、食べさせようとした。

「あ、アリス？／＼／」

「最近の雅紀は、無茶ばかりだから。少しでいいから、私に甘えてもいいんだよ？」

「でも…」

「だめ…？」

アリスは得意の上目づかいをしてきた。ソレを見た雅紀は…

「…ダメデハアリマセン。オネガイシマス。」

片言で言い、ソレを聞いたアリスは上機嫌で雅紀に御飯を食べさせたとたな。

しほはくく…

「そう言えば、今日は学校お休みだよな。どこか出かけない？」

アリスが言ってきた。

「うーん、そうだなあ。何処にしようか？」

「私、まだ海鳴市の事把握してないから、辺りを回ろう。」

「それはいい。じゃあ、支度しよ……っ！？」

すると突然オーロラが発生した。

「おわっ！」

「雅紀！……ってわあっ！！」

二人はその場から消えた。

とある世界

突如、その場にオーロラが発生。そして次の瞬間…

「おわっ！」

「きゃっ！」

雅紀とアリスが現れ、その場に倒れた。

「痛てて…。こ、此処は？そして、なんか息苦しい…。」

「此処って…火災現場の中っ!？」

アリスの言う通り、辺りは火に包まれ燃えていた。

「いきなり何でこんな風になってんだあっ!?!？」

「雅紀っ!変身するよっ!二酸化炭素中毒になってしまっかもしれ

ないからっ!!」

「あ、ああ!!」

「変身ッ!!」

二人はディカオス、ディダークにそれぞれ変身した。

『とりあえず、出口を探そうっ!!』

『ああ。(なんか久々にアリスが変身するところ見た。)』

二人は歩いて、出口を探して行った。

数分後

二人は広い場所に着いた。

『広いところについたなあ。』

『……………』

『どうしたんだ？アリス？』

『なんか、この場所、どこかで見たか事があったような……………。』

そう、ディダークが考えていると…

「お父さーん…お姉ちゃーん…。」

という声が聞こえた。二人は声がした方に顔を向くと…

「何処なの？お父さん…お姉ちゃん…。」

一人の女の子が泣いていた。

『女の子が……』

『ん？あの子…どこかで……』

そう言っていると、少女の後ろの像が、倒れてきた。

「きゃああっ！…！」

その場で少女はうずくまってしまっ

『危ないっ!!』

『間に合えっ!』

ディカオスが一気に走り少女の所に向かい…

「ひゃっ!?!」

『ちよつとごめんよ?』

少女を抱きしめダッシュし、像が落ちてくる寸前で、避けた。

『もう大丈夫だぞ。』

「うええ…ヒック…怖かったあ…。」

少女はディカオスの腕の中で泣いていた。

『よしよし、もう怖くないからな?』

ディカオスは少女の頭を撫でていると…

『あーーーーーっ!』

いきなりディダークが叫んだ。

『おっ!?!?どうした、アリスっ!?!?』

『この子、「スバル・ナカジマ」だよっ!』

デイダークが少女を指差して言う。

「えっ?なんで、私の名前を知ってるの?」

ソレを聞いた少女、スバルは驚いた。

『知ってるのか?アリス?』

『知るも知らないも…この子、四年後のStrikersのお話で出てくる、機動六課のフォワードの一人だよっ!』

『ということは…重要キャラ?』

「そうだよ…!しかも、此処は空港火災の現場、しかもさっきは私達じゃなくて…なのはちゃんか助ける場面だったんだよ…!」

『そうだったのか?じゃあ、なのはは?』

するじ…

「そこにいる人たち!大丈夫ですかー!ーっ!」

声が聞こえ、その方角を見てみると…

「時空管理局の者ですっ!そこにいてくださー!ー!いつ!」

なのはが両足に桃色の羽をだしてこちらに飛んでくるのが見えた。

『噂をすれば…ってどこか？』

「怪我はありませんか…てディカオスさんっ！！？」

なのははディカオスを見て驚いた。

『よっ。なのは。』

「なんでこんなところにいるんですかっ！！？」

『ん…まあちょっとした偶然が重なって此処に…かな？』

「偶然がって…っ！！？」

そうしているとなのはは驚いた顔をした。目の前に怪人が現れたからだ。

『イメージに、ファンガイアか…！』

「な、何なんですかつ、アレっ！？」

『俺達の敵…ってところだ！』

「ディカオスさん、あれを知っているんですか？」

『まあな。なのは、この子、スバル・ナカジマを連れてこの場から逃げろっ！』

ディカオスはスバルをなのはのところに行かせる。

「えっ！？ディカオスさんはっ！？」

『こいつらを倒す…！』

「無茶ですよっ！一人であの数はっ！」

『一人じゃない。私もいるよ。』

「あなたは…？」

『私の名前はディダーク。この人と同じく仮面ライダーだよ。』

「ディダーク…さん。でもっ！」

『でもない。それにここは専門の俺たちがやる。その子、巻き添えを食らわしたくないからな。いけっ！なのは…！』

そう叫ぶと怪人達が襲い掛かってきた。

『うおおおおおっ…！』

『ハアアアアアアッ…！』

二人はそれぞれの武器で怪人達を圧倒し…

「凄い…！」

ソレを見たスバルは、二人の戦いに見惚れてた。

「…わかりました。この子を預け次第、すぐに戻ってきますっ！そして後でお話させてもらいますからっ！…！」

なのははスバルを抱いてその場から離れた。

『お話って言われてもな…。』

『魔王のお話が、雅紀の身に…！』

ディダークがそう呟くとどこかで「魔王じゃないもんっ！」と聞こえた気がした。そして怪人達をすべて倒した。

『ふう…。これで終わったな。』

『そうだね。雅紀、少しさ…物語を変えちゃったかも。私達。』

『もしかして、あの場ではなのはがスバルを助ける…という部分か？』

『うん…。でも、なのはちゃんが遅く来たとしたら、もしかしたらフエイトちゃんも遅くに…。雅紀っ！今すぐにスバルのお姉さん、「ギンガ」を助けに行こうっ！…！』

『わかった…っっていうかよくそんなに魔法少女リリカルなのは知ってたんだな。』

『…前にテレビで…』

『確かこのあたりでフェイトちゃんがギンガを助けたんだよ。』

『そうか…でその子は？』

二人は辺りを見渡していると…

「スバルーッ！スバル、何処にいるのーッ！？」

下から声が聞こえ、二人は下を見てみると…

「スバルーッ！お姉ちゃんがきたよっ！返事してーっ！！」

先ほどのスバルよりも濃い蒼色の長い髪の少女がいた。

『間違いないっ！あの子が「ギンガ・ナカジマ」だっ！』

『フェイトはこないかっ！』

すると…

「きゃっ！…！」

床が崩れて、ギンガは堕ちてゆく。

「キヤアアアアアアアアアアアッ！！！！！！」

『まずい！』

デйкаオスはジャンプし、ギンガの方へ落下していく。

『雅紀っ！！！！』

『うおおおおおおおっ！！！！！！』

デйкаオスはギンガを捕まえ…

「あっ！！」

『くっ！！変身ッ！！！！』

『フォームライド・ブレイドッ！！ジャックッ！！』

デйкаオスの真下にカードが出現しそれが通り抜けるとデйкаオスの体が仮面ライダーブレイド「ジャックフォーム」となった。

『それっ！！！！！！』

デйкаオスブレイド・ジャックフォーム

そしてDBJFは背中の翼を広げ空高く舞い上がった。
そしてデイダークの所に着地した。

『もう大丈夫だからな？』

「あ、あの…ありがとうございます。」

『いやいや。さて、君を安全なところにつれいてくからな?』

「待ってくださいっ!まだ、私の妹…スバルが!」

『それなら心配ない。君の妹は管理局に保護してもらったから。』

「そうですか…って、あなたは管理局の人じゃ…」

『俺は管理局ではない。たまたま此処に着いてな…さてと、いくぞ』

…』

「待ちなさいっ!」

そうしていると、女性の声が聞こえた。声がした方を見ると、フェイトがやってきた。

「局の魔導師ではありませんね。その子を解放しなさいっ!」

フェイトはバルディッシュを構える。

『ちよ、ちよつと待ってくださいっ!!フェイトっ!!』

DBJFは慌てながらディカオスに戻る。

「ディカオスッ!?なぜ貴方が此処にいるのッ!!?」

ソレを見たフェイトは驚愕した。

『何かいろいろとな…で、この子とこの子の妹を助けたってこと。妹の方はなのはに預けた。』

「そうだったんだ…。ご協力、感謝します。それと…さっきの無礼、すいません。」

フェイトはしよぼんとした。

『いや、大丈夫。そんなしょうんぼりするなよ。美人が台無しだぞ。？』

「はうつ！び、美人っ！？／／／」

『まあ、そんなことより…はやく出口を探そう。』

『そうだね。フェイトちゃん、出口を教えて？』

「は、はい…ていうか、あなたは？」

『デイダークだよ。よろしくね。』

フェイトとデイダークは紹介し合っているところ…

『フェイトちゃんっ！救助者はっ！？』

目の前にモニターが現れた。よく見ると、はやてでした。

「うん。これで全員だと思っ。あっ、今ディカオスといっしよなんだ。」

『ディカオスさんがっ!?!どうしてなんっ!?!?』

『あゝ、実はカクカクシカジカ…でな。』

『すごい、偶然やね…。ご協力、感謝します!』

『ああ。というか、はやくこの場から離れよう。危ないし。』

『そうだね。はやて、こっちが場を離れ次第、消火にっ!』

『こっちはいつでもスタンバイOKやっ!はよ、逃げてなっ!?!』

『わかった。行こうっ!ディカオス、デイダーク、そして…君は?』

『ギンガ・ナカジマですっ!』

『じゃあ、行きますかっ!』

全員はその場を後にした。

第30話（後書き）

さて、前回のあとがきの予告で青い髪の少女って書いたが二人も登場させることになろうとは…。

雅紀「しかも、お話がない。」

駄文だな…。はは…どうせ俺は才能がないバカなんだよ。

雅紀「あゝもう…。いちいちマイナス思考になるな。」

…

雅紀「はあ。次回はこの空港火災の後編ですっ！お楽しみにっ！」

…

雅紀「もう、いい加減にして…。」

第31話

「もうすぐ出口だよ！」

フェイトを先行にブレイド・ジャックフォームに変身するディカオスがディダークを抱えて飛ぶ。そして…

『やっと、外に出られたあ。』

『そうだねえ。』

「(はやて、こっちは外に出たよ。)」

ディカオス達がほつと溜息を吐いている頃、なにやらフェイトははやてにテレパシーのような方法で通信している。これは「念話」と呼ばれるものだ。

「(よしっ！フェイトちゃん達は、そこから離れてなっ！)」

「(了解っ！(皆、この場から離れようっ！)」

はやてから連絡がきたのを確認し、フェイトはギンガを抱えてその場から離れ、ディカオスブレイド・ジャックフォームDBJFも、ディダークを抱えて飛んだ。

その頃、はやては…

「フェイトちゃん達は離れたな…。」

モニターでフェイト達が離れた事を確認していた。

「さて、こつからは……私の仕事やッ！」

はやては左手に持っている本「夜天の書」を開き、右手で持っている杖型のデバイス「シユベルトクロイツ」を上空に掲げ、足元に三角形の魔法陣を展開する。この魔法陣を「ベルカ式」と呼ぶ。

「ほの白き雪の王、銀の翼^も似て、眼下の大地を白銀に染めよ。来^こよ、氷結の息吹 アーテム・デス・アイセスッ！！」

はやての真上の四角い物体は、空港に直撃し、燃え盛る空港を凍らせた。

「す…すっげえ…！」

「これが…オーバーSランク魔導師の力か…。」

そこに居合わせた局員は、はやての力に驚愕の表情を浮かべた。

「巻き添えごめんな〜っ！私一人やと、どうも調整が下手で…。」

そつはやてが言っていると…

？「遅くなつてすまないっ…！」

向こうの方から数十人の魔導師達が来た。

「現地の諸君と臨時協力のエース達に、感謝するっ！後はこちらに任せてくれっ…！」

「了解しましたっ！引き続き協力を続けますので、指示をお願いしますっ…！」

魔導師の一人に返事をしたはやてだが、どこか悲しい表情をしていた。

一方その頃、フェイト達は…

「あの子も無事保護出来たし、火災も治まった。ディカオス、ディーク、本当にありがとう。」

『いやいや、こっちもお礼があるんだ。フェイトがいなかったら、出口を探すの大変だったし。ありがとうな。』

「い、いえ、お礼なんて…。」

そうしていると…

「フェイトちゃん、ディカオスさんっ!!」

なのはがこっちに向かってやってきた。

『なのは、スバルは?』

「あの子なら医療スタッフに渡しました。」

『そうか。なら、こちらは帰るとするか。』

二人が帰ろうとした時だった。

「待つてくださいっ！！貴方の力の事…貴方が何処から来たのか、教えてくださいっ！」

なのはが言ってきたのだ。

『どつするんだ…？』

『どつするって言われても…どつしよっ…。』

ブツブツ言っている時だった。

『ゲギルルルルッ！！！』

どこからともなく怪人達がやってきた。

な「アレは、さっきのっ！」

「何でこんなのがっ！」

なのは、フェイトは構える。

『恐らく、何かの力で引き寄せられた可能性があるね。本来ならあいつらは、この世界には存在しないのに…！』

「奴らも、世界を移動してきたってわけかつ！」

ディカオス、ディダークはそう言いながら怪人達に突っ込む。

「ゲギユアアアアアッ！！！」

怪人たちもまた、四人に突っ込んで来た。

「フェイトちゃんっ！」

「うんっ！私たちも行こうっ！！！」

二人は互いのデバイスを握り、飛んだ。

「アタックライド」

「ブラストッ！」

「スラッシュッ！」

ディカオスは連射し、ディダークはオーラを纏った鎌で斬り倒し…

「ディバイイン…バスターーッ！！！」

なのははお得意の砲撃で怪人達を倒し…

「ハーケンセイバーッ！！！」

フェイトはバルディッシュを鎌状の形態にして斬り倒しながら、その魔力の刃を飛ばし、遠くの怪人を斬り裂いた。だが、倒しても、

またどこかから湧いて出てくる。

「倒しても、倒しても…ハア…きりが無いのっ！」

「ハア…ハア…何で？」

なのはとフェイトは息を乱しながら魔力を溜める事を忘れない。

『恐らく、何処かからこの世界に来ているんだよ！』

『そうだと思う！（にしてもこの数は、さすがに厳しいな。何か方法は…ってあっ！）』

するとデイカオスは何か思いついたように、カードを取り出した。

『（せっかくだ…このライダーの力を試してみようっ！）変身ッ！』

『カメンライド・アクセルッ！』

デイカオスは、仮面ライダーアクセルにKRした。

「ふえっっ！？姿が変わっちゃったのっ！？」

「ちっきのとは違う！？」

なのはとフェイトは驚いている中、Dアクセルは金色のカードを取り出す。

『全て…振りきるぜ…！』

『ファイナルカメンライド・ア・ア・ア・アクセルッ!』

すると、Dアクセルの体が赤から黄色に変わり、次の瞬間、体が蒼くなり、ボディも変わった。これが全てを振り切る速さを持った音速の戦士「仮面ライダーアクセル・トライアル」なのだ。

「ふえ〜っ!!?蒼くなっちゃったのっ!!!」

「さらに変身した!?!」

二人はまたも驚き気味の様子。

『ハッ!』

デイカオスアクセル・トライアル
DATは高速で怪人達にパンチとキックを浴びせる。

「は、早いつ!」

「私のソニックフォームと同等…いや、それ以上!?!」

『トライアルはスピードがある分、パワーが落ちるのか!』

『デイカオス!トライアルの特徴、「速さ」を生かしてっ!!!』

『速さ…そうかつ!!!』

言うと、金色のカードを取り出し、ベルトに挿入する。

『ファイナルアタックライド・ア・ア・ア・アクセルッ!』

DATは先ほどとは比べ物にならないくらいの速さで怪人達にキックを連続で浴びせる。それは残像を残すほどに。そしてDATは中央に止まり…

『9・6秒…。それが貴様らの絶望までのタイムだ…!!』

そう言い放つと、怪人達が一斉に爆発した。

「す、凄い…！」

「……………」

二人は驚愕していた。

『もうこれで全部だな……………っ!?!』

当然元の姿に戻ったディカオスは右肩を抑えて苦しみだした。

『雅紀っ!』

ディダークはディカオスの方に向かう。

『雅紀、どうしたのっ!?!大丈夫っ!?!?!』

「ディカオスさんっ！」

「一体どうしてっ!?!?!」

『まさか…肩の傷口が…!?!?!』

ディダークはディカオスを抱えると、何処かへ行こうとする。

「ディダークさんっ！何処に行くんですかっ!？」

「さっき救護班に連絡を入れましたっ！待ってくださいっ！」

二人は言うが…

『ごめんね。この人の正体を知られたくないの。貴方達には…。』

そう言い、目の前に現れたオーロラの中に消えて行った。

「ディカオスさんの…正体…?」

フェイト「私たちには…って…?」

二人はその場で佇んでいた。

アリス宅

茶の間にオーロラが発生し、そこからディカオスを抱え込んだディ
ダークがでてくる。そしてディカオスを寝かせる。

『とりあえず、変身を解かないと。』

ディダークはディカオスの変身を解除させ、服を脱がすと…

ア『っ！…これは、酷い…！』

右肩から大量に出血をだしていた。どうやら肩の傷口が開いてしま
ったようだ。

『…こっとなつたら…！』

ディダークは変身を解くと自身の右手を…

「くっ！」

爪で斬った。そして傷口から出た血をアリスは口に含み、雅紀の顔
に自身の顔を近づけ…

「ん…。」

唇を重ね、口に含んだ自身の血を雅紀の口に流し込んだ。いわゆる口移しだった。

「ふはあ……」

しばらくしてアリスは口を離し、血を飲んだか確認する。

「ちゃんと飲み込んだね。」

アリスは雅紀の顔を見ると……

「ふゆう……すう……」

先ほどの苦しい表情がなくなり、静かに眠っていた。

「数分経ったら傷は再生してくるから、その間は寝ててね。お休み。」

「

アリスは雅紀に膝枕をして、額にキスをし、頭を撫でていた。

第31話（後書き）

さあて、最後は雅紀がダウンしてしまいました。

アリス「雅紀の代わりに私ができました。」

最後にアリスは雅紀に血を飲ませたけど、アレは？

アリス「気になる方は次回を見てね？」

なんだそりゃっ！…さてとそれでは次回をお楽しみにっ！！

第32話

アリス宅

「う…う…ん…」

重い瞼を開け、眠りから覚ます雅紀。

「あ、雅紀。起きたんだね。肩、痛くない…？」

目の前にアリスの顔があつた。

「アリス…って、ん？何か、頭に柔らかい感触が……」

「あ、それは、私が膝枕してあげてるからだよ？／＼／」

「え…／＼／＼／＼／＼／＼／つ！！？／／／」

雅紀は真実を知り、顔を一気に真っ赤にする。

「あ、アリスが、俺に、膝枕？／＼／」

心臓をバクバクさせながら言う。

「ハハハ びっくりしちゃった？」

「ああ…。／＼／」

「しばらく、そうしててね？雅紀、無茶ばかりするんだから…。」

「…ごめん。」

「肩の傷、直しておいたから。」

「？」

雅紀は自身の右肩を見ると…

「肩の傷が…ない？」

そう。肩の傷が綺麗になくなっていたのだ。

「私が雅紀に血を飲ませて、再生能力を高めたのよ。」

「血？」

「うん。私の血。」

「…マジすか。（そういえば、初めてアリスと出会った時も、傷がなかったな）」

雅紀は思い出していた。

「ていうか、意識なかったんだけど、どうやって俺に血を？」
聞いてみたら、アリスは頬を染めて…

「…口移しで…／＼／」

そう言った。コレを聞いた雅紀は一瞬、思考を停止する…。

「え…？…もう一回言ってください…。」

「だから、口移しだよ…！／＼／」

さっきよりも頬を染めて言う。

「え……え……
！…！！」

近所迷惑にも等しい大声が辺りに轟いた。

「く、く、口移しっ！…？／＼／」

「…うんっ。／＼／」

アリスは眼をそらす。

「（じゃ、じゃあ…あの時、俺が気絶している間に…）」

雅紀は元の世界で死にかけた所にアリスに助けられる所を思い出す。

「（もう俺…アリスにファーストキスを奪われてたんだ…）
（っ！！！！／＼／＼）」

妄想し、さらに顔を赤くする。

「（雅紀とキス、何度もしたけど…あの時は、ファーストキスをや
っちゃったんだよね。／＼／＼）」

アリスもまた、妄想中。

「まあ、その…ありがとう。」

「うん。でも、今度もうまくいってよかったよ。」

「うまく？」

「私の血…私の一族の血は、再生能力あげる成分が含まれているん
だけど、他者に与えたら…どうなるか分からないの。」

「わからない？」

「細胞が全く違うから、有害なものになるかもしれないの。」

「つまりは…？」

「最悪、体がバラバラになったりして…死んでしまうことが…」

「っ！！！！」

雅紀はゾクツとした。もしあの時にうまく血が混ざりあったりしなかったら、自分はその世行きになっていたかもしれない。

「でも雅紀なら、大丈夫だよ。私の血とうまく結合しているから、死ぬ恐れはないよ」

「よ、よかった…。」

それを聞いて雅紀は安心する。

「だって、私といつも交わっているから…//」

唇を触りながら、雅紀を見つめる。

「交わっているからって…アレは襲われている方が正しい気がする…//」

雅紀は赤くする。

「それに、私は雅紀に命、半分与えているから。」

「そうか…ってそれも、口移しで…？//」

「うん。生命エネルギーを与えるの、口移しで分けた方が良いの。//」

「はづうう…//」

「フッフ ふあああ…。なんだか私も、眠くなってきたな。」

「
そう言い雅紀の隣に移動して寄り添うようにする。

「あ、アリスっ？／／／」

「雅紀も、一緒に寝よ？／／／」

そう言って、アリスは雅紀に抱きつく。

「（うっ！なんだか良い香りが…それにものすごく眠くなってえ…）」

「
そう思いながら雅紀は再び眠りに着いた。

「お休み。」

アリスも眠りに着いた。

一方なのはは…

なのはは一人、ホテルの屋上で景色を見ている。

「ディカオスさんの正体：かあ。」

なのははディダークの台詞を思い出す。

『ごめんね。この人の正体を、知られたくないの。貴方達には…』

「私達には…って、何でなんだろう？」

なのはは考えていると、ある少年の事を思い出す。

「雅紀くん、今頃どうしているかなあ？」

なのはは雅紀の事を思い出す。

「ハア…一日会ってないだけで、雅紀くんの事を思っただけなの。」

「

なのは唇を触る。

「なんだか、切ない感じになってきちゃったの…。」

一方、フェイトの方では…

フェイトは一人、モニターでディカオスのデータを見ていた。

「やっぱり、いろいろと情報が少ないな。」

そう呟いていると、フェイトは雅紀の事を思い出す。

「雅紀……。」

フェイトは雅紀の事を思い出している。

「フェイト、どうしたんだい？」

後ろから声が聞こえ、振り向くと、そこにはオレンジ頭で額に真珠のようなものが付いており…なんと、獣の耳としっぽを持った女の子が立っていた。

「アルフ。」

この子はフェイトの使い魔と呼ばれる者で、狼を素体として生み出された。元は20代前半の女性のスタイル抜群な姿をしていたが、フェイトに無理をかけたため、フェイトからあまり魔力を消費しない少女形態で普段は過ごしている。

「何見てるんだい？」

アルフはモニターを見てくる。

「ちよつとね…。」

「ああ…コイツって、前の任務でフェイト達が襲われている所を助けた奴だろう？」

「うん。」

「しかも、魔力とは違うエネルギーを持っているって、クロノやエイミィから聞いたよ。」

「うん。だから調べていたんだ。けど、情報が少なくて…。次に出てきたのが、昨夜の空港火災の現場。」

「じゃあ、コイツが原因で？」

「ううん、違うよ。危険な密輸物が原因だったから。」

「信用ならないねえ。」

「でも、悪い人って感じじゃなかったよ。女の子…確かゲンヤ・ナカジマ三佐のお子さん達を助けたから。」

「ふ〜ん…ってなんだいつ！コイツらっ！？」

アルフはモニターに映っている怪人に驚く。

「この異形達は、火災の現場近くで突如現れたの。なのはから聞いたんだけど空港の中にも現れたんだって…。」

「やばい奴らだねえ…！」

「で、その戦闘の時の映像。」

フェイトはモニターを切り替え、怪人達と闘う映像を出す。

「わあ…多いねえ。」

「うん。次にコレ。」

すると、モニターではディカオスがアクセルに変身、さらにはトリアルにまで変身して怪人達を倒す場面だ。

「変身魔法っ！？しかも二回連続で…！？」

「うん。戦法を変えてたしね。この蒼い姿は、ソニック並の速さだった…。」

DATが高速で怪人達に蹴りを食らわせて爆発させた映像が映る。

「うっわ…凄いいねえ。」

「わかったのは…姿を変えたり、召喚したりして、戦うってところかな。」

「フェイトも気をつけなよ？」

「うん、わかってるよ。」

そう返事した後、アルフは部屋を出た。

「ふう…少し、休もうかなあ。」

そして、はやては…

「なのはちゃんもフェイトちゃんも、部隊の設立に協力してくれつつっていつてたし、私もがんばらなあかなあ。」

はやては紅茶を飲む。

「ハア…それにしても、ディカオスさんがまた現れたなあ。一体彼は何者なんやろうか？」

はやてはまた紅茶を飲む。

「まっ、考えていても仕方あらへんっ！仕事や仕事っ！！」

そう言い、モニターを操作する。見てみると…

「…報告書が山のように溜まってる!?!もう、大変やわ~~~~~」
「~~~~~っ!?!」

辺りにはやての悲鳴が響いたとな。

とある研究室

「フフフフフ…この魔導師…いや、正確に言えば、戦士…と行ったところか。」

薄暗い部屋のなかでモニターを見て不気味に笑う男がいた。

「彼の力は絶大ななあ。並の魔導師では、歯が立たないくらいに。フッフ、素晴らしいっ！」

モニターでは、ディカオスが怪人と闘っている姿が映っていた。

「管理局に入っても何一つつまらなかったが、こんな映像を入手できるのだから…管理局を利用するにはちょうどいい…」

男は別のモニターを展開する。

「そして、この異形達だっ！こんなものいくら実験し、生み出そうが生み出せない…！まさに神が作り出したものだっ！！ハハハハッ！！！！」

男は狂ったかのように笑う。

「ふう…。だが、私の計画には、危険人物だな。早急に対処しなければ。」

ブツブツ呟きながら男は壁に近づく。すると壁に扉が出現。どうやら隠し部屋のようだ。男はその中に入る。

「まあ、彼女の方が興味がそそるがなあ。」

そう言いながら、部屋の中心にあるカプセルを見る。

「彼女が目覚めるのが、楽しみになってきたなあ。」

邪悪な笑みをして見つめる。

「さあ、はやく目覚めてくれえ。私だけのイブよ……！」

カプセルの中には銀髪的全裸の女性が眠っていた。

第32話（後書き）

さて、アリスにそんな能力が…！

雅紀「驚いたよ、あの時は…」

すげえなあ。アリスは…

雅紀「それに、最後はなんかやばい奴が登場したな。」

そうだなあ。さて次回は、とうとう、なのは達の世界に滅びの現象がっ！！？そして、謎の管理局員の陰謀とはっ！！！！

雅紀「それではっ！！！」

第33話

いつもの平凡な日常

聖洋中

「ウンでしょ…？何で肩の傷が綺麗になくなったのっ！！？」
アリサは驚愕の表情を浮かべる。理由は雅紀の肩を見たからだ。

「いやあ、俺って治りが早いんだよね。」

「治りが早いって言うても、これってありえないよ、三日で治るなんて…」

その場に一緒にいたさすがも驚いている。

「どうしたの、二人とも？」

「雅紀の肩を見て、どうしたの？」

その場になのはとフェイが現れた。

「あのね…前に誘拐されそうになってね、その時、雅紀君に助けってもらったんだけど…」

「肩を撃たれたのよ…。」

二人が誘拐された事を言い、それになのはフェイトは驚いた。

「ふえ〜〜〜つ!?だ、大丈夫なのっ!?!?雅紀くんっ!?!?!?」

「雅紀っ!今すぐ病院に〜〜〜っ!?!」

「ふ、二人ともっ、落ち着いてっ!」

慌てる二人をさすが落ち着かせる。

「…雅紀くん、大丈夫なの？痛くないの？」

なのはが心配そうな顔で言う。同じくフェイトもだ。

「大丈夫だ。もう治ったしさ。」

「はあ〜…そうなんだ〜……っってもう治ったってっ！？」

「あたし達も驚いてんのよ。三日で肩の傷がなくなったのよ？」

「み、三日でっ！？」

「うん。普通はそんなに早く治らないもんなんだよ…。」

話していると、フェイトが雅紀に聞いてきた。

「雅紀、その肩の傷って…右？左？」

「ん？ああ。右にあったぞ。それがどうかした？」

「ううん。どうもしないよ。(あの時、ディカオスが、戦い終わった後、いきなり右肩を抑えて苦しんでいた。しかも、雅紀もまた、三日前に右肩を怪我した。どれも同じ部分だ…)。」

フェイトは思った。そしてある結論が浮かぶ。

「(まさか…雅紀が……ディカオス?)」

フェイトはそう思い、雅紀の方へ顔を向ける。。

「（…そんなはず、ないよね…？）」

フェイトはこの仮説を否定し、雅紀を見つめていた。

一方、とある研究室では…

「ハア…まだ、彼女は目覚めないか。」

男はカプセルの中の女性を見る。

「早く目覚めて、その身に触れたいのになあ。「闇の書」の管制人格でなかったら、そんな悲しい思いを何度も味わう事はなかったろうに。」

男はそう呟きながら、カプセルを撫でた。

「フフフフ…心配するな。もうそんな苦しみを味あわせないようにしてやるからな…「リインフォース」。」

どうやらこの女性はリインフォースと呼ばれているようだ。

「そして…私の計画の切り札となってくれよ…。」

男は狂喜狂った笑い声を響かせる。

聖洋中

「先生、あの、急用ができましたので早退させてもらっていいですか…?」

授業中、なのは先生に言った。

「うん…良いわ。行ってきなさい。」

「ありがとうございますっ!」

先生にお礼を言い、なのはとフェイトとはやては教室を出た。

「一体どうしたんだ?」

その時だ。

「んなつ!?!」

突然、オーロラが発生した。

「またこれかよ~~~~~っ!?!」

雅紀は叫んだが、声はオーロラにより、響かなかった。

「先生、雅紀君がいません。」

「あら本当ねえ。どうしたのかしら?」

とある世界

「うおおっ!!」

オーロラが発生し、その中から雅紀が現れた。

「痛てえ…いつもこんな感じなんだよなあ。もう…ってか…此処は？」

辺りを見渡してしていると…

『グギョルルルルウウ!!』

振りかえるとそこにいたのは、「仮面ライダーカブト」に出てくる怪人「ワーム」だった。

「ワームかよ。しかも多いぞ、この数は…!」

雅紀は囲まれていたのだ。

「まあ、良いか。兎も角倒すのみだ…変身！」

『カメンライド・ディカオスッ!』

すかさずディカオスに変身し、ワーム達を倒していく。その時、何匹かワームが脱皮し、成虫になる。そして…

『がつ!』

ディカオスがあつという間に吹っ飛ばされていた。

『クソッ!クロックアップか…!』

そう、ディカオスが吹っ飛んだのは、成虫ワームが超高速移動「クロックアップ」を使ってきたからなのだ。

『だが、こっちにもそういうのがあるんだよっ!』

『アタックライド・ソニックッ!』

ARを発動し、ワームと同じく高速移動をする。

『同じ速さなら楽勝っ!そして一気にトドメだっ!』

『ファイナルアタックライド・ディ・ディ・ディ・ディカオスッ!』

『デイメンションブレイカー…!』

必殺技を発動し、ワームを撃破。そして、ARの効果が切れた。

『ふう……。終わった。』

ディカオスは背伸びをする。

『しかし、なぜこの世界にワームが？此処は「カブトの世界か」？でも此処は…何ていうか、科学が発展しているな。場所も違う感じだし……。』

ディカオスはある結論に達する。

『まさか……。滅びの現象？』

そう言った時、近くで爆発音がした。

『まさかっ！あの辺りでもっ！！』

ディカオスは急いで向かった。

「ダイバイイン・・・バスターーッ!!」

なのははワームに砲撃を浴びせる。

「なんとしても此処で倒すんやつ!一匹でも逃したらあかんよっ!
」!

はやては部隊の隊員達に言う。

「ハアアアアツ!!」

フェイトは鎌状にしたバルディッシュで斬り倒していく。

「もう、倒しても倒してもきりがなのっ!」

「この異形達は、空港の時の奴らの仲間?」

そう言いながらも二人は抜群のコンビネーションでワームを倒して
いく。すると...

「ぐあああつ!!」

一人の隊員がやられ、封鎖していた壁を壊していく。

「ハッ!」

「あかんっ!隊員達が...っ!!」

はやてがワーム達の方に飛んでいくと…

『アタックライド・ブラストツ！』

そう聞こえた瞬間、ワーム達は全滅した。

「な、何がっ!？」

『大丈夫か？』

はやてが驚いていると、ディカオスが現れた。

「ディカオスさんっ!？」

『おう、はやて。』

「ど、どうして此処にっ!？」

『また、なんか偶然でこの世界に来たみたい。』

そう話していると…

『この世界は、我々が頂くのだっ!！』

大将みたいなワームが現れて、その後ろに成虫ワームが付いてくる。

『このライダーがいない世界を我々のものにし、世界を滅ぼしてやるっ!！』

『あいつが親玉か…!！一気に行かせてもらっっ!！…!』

『アタックライド・ソニックッ!』

ARを発動し、ディカオスは成虫ワームを倒していく。

『な、何っ!?!この世界にもライダーがいたのっ!?!?』

『ああ、そっだ。ただし、最強最悪のな...!』

その場でワームとディカオスは睨みあう。

『フンッ!だが、この数、対処しきれまいッ!...!』

『そいつはどうかなっ!...!』

ワームとディカオスの激しいバトルが勃発した。ディカオスは拳と蹴りのラッシュをワームに浴びせた。

『グハッ!な、なんなんだコイツは...!強すぎるっ!...!』

『トドメだッ!...!』

『アタックライド・スラッシュッ!』

ディカオスはARを発動させ、連続斬りでワームをバラバラにして爆発させる。

『終わったな...!』

『ぎゃっ!...!』

「うわっ!」

「かはっ!」

『ッ!』

ディカオスが見てみると、ワーム達にやられているのは達が見えた。

『なのは、フェイト、はやてっ!』

叫んでいる最中にワーム達は一斉にクロックアップを発動し、なのは達に迫る。

「あっ!」

『させるかっ!』

『アタックライド・ソニックッ!』

ARを発動して一気になのは達の元に、そして…

『ぐああッ!』

ワーム達となのは達の間に入って、ワーム達の攻撃を喰らった。同時にARの効果も切れる。

「はっ!?!ディカオスさんっ!」

「デйкаオスっ!!」

「デйкаオスさんっ!!」

なのは達は悲鳴に似た声を上げる。

『ぐ…!!ハアッ!!』

デйкаオスはワーム達に連射、さらには連続斬りで倒す。だが何体かは逃げられた。

『くそ…!!逃がした…!!か…!!』

デйкаオスはバタリと倒れる。

「デйкаオスさんっ!!」

なのは達が近づくと、デйкаオスの変身が解除される。

「えっ!?!」

「うそ…!!」

「そ、そんな…!!」

「……雅紀(君)(くん)が…デйкаオス(さん)っ!?!」「……」

三人の声が辺りに響いた。

とある廃棄工場

『ゲギユアアアアッ！！』

先ほどのワーム達が消されていった。その中央には…

「フフフ…この異形達を蒐集することができた。幸運がいい。」

男が不気味に笑っていた。

「これで、リインフォースを復活する事に一歩進んだ。私の…「人類滅亡」計画には丁度いい能力だ…！ああああ…リインフォースよ、待っていてくれ。今すぐ目を覚ましてやるからな。私の、イブよお…！ハハハハハハハッ！！！！！！」

男の笑い声が響いた。

第33話（後書き）

さて、ついになのは達には正体がばれてしまった。

雅紀「どうなるんだ。この後？」

さらには謎の男の計画の名が明らかになった。

雅紀「人類滅亡、恐ろしいじゃないか：！」

ああ。さて次回は、ついになのは達には正体を知られてしまった雅紀。その時、謎の男の計画が作動する。そして、リインフォースが目覚めるっ！！？

雅紀「それではっ！！」

第34話(前書き)

うお~~~~っ!!やったぞ~~~~っ!!

雅紀「うおっ!?!どうしたんだ、作者っ!?!?」

し、知らぬ間にこの小説のPVが…

雅紀「PVが?」

なんとっ!合計で、107、768だーーーーっ!!

雅紀「ま、マジか…?」

マジだっ!で、見てくれてる人が、合計で8、917人だったっ!
!!!!

雅紀「おお…この作品を見てくれる人がそんなに…」

ああ。と言うことで、この小説を見てくれる方々…本当にありがとございますっ!!

雅紀「それでは、本文をお楽しみくださいっ!」

第34話

「ん…ん…あれ？」

雅紀が眼を覚ますと、どこかの一室のようだ。

「此処は？確か俺…なのは達を守って…」

そう言っていると…

「此処は聖王病院だよ…」

声がした方を見てみると、そこには…

「なのは…」

なのはがいた。

「雅紀くん…」

互い見つめ合い…何分かして…

「あ、なのは、俺は…」

「雅紀くん、ちょっと聞きたいことがあるんだけど…」

「え？」

「雅紀くんは…ディカオスさん…なんだよね？」

「……………」

「私やフェイトちゃん、はやてちゃんも見たんだよ？ディカオスさんが、雅紀くんになったの……」

「……………そうか」

「教えて。どうして雅紀くんが？」

「……………ちよつとな」

「ちゃんと、教えて」

「……………ある世界が滅び始めた。謎の怪物達が一斉に襲い掛かってきて、人々は殺されてしまった」

「っ！」

「それを……自分の世界を救おうと……仮面ライダーとなった奴がいた。彼は、戦い、勝利したが、その代償は大きかった。彼の心は、今でも、どこか穴があり、現在その少年は目の前にいる女の子に自らの過去を話していた……」

「……………」

しばらく沈黙が続く。

「……………悪いな。こんなとこだ。嫌な話だった……」

「雅紀くん」

話していると、なのはが抱きついてきた。

「な、なのは？／＼／」

「雅紀くん、何で…その事言ってくれなかったの？」

「え…？」

「雅紀くん、そんな悲しい過去を…何で一人で背負うとするの？」

「……」

「私は…背負うよ。雅紀くんの過去…一緒に背負うよ」

なのはは涙目でそう言う。

「なのは…」

雅紀はなのはの目にたまった涙を拭きとる。

「なのは、泣かないでくれ。可愛い顔が台無しになるぞ？」

「雅紀くん」

「なのはには…笑ってほしい…笑顔でいてほしい。泣いている顔なんて、似合わない。だから…泣かないでくれ」

「……」

「それに、何もなのはも一緒に、俺の過去を背負う事はないんだぞ？」

「なのはは、雅紀くんの事が…好き…だから。好きな人の過去を一緒に背負ったって…良いでしょ？」

なのはが頬を染めて言う。

「なのは…」

「雅紀くん…」

なのははゆっくりと雅紀の方に顔を近づける。そして唇が触れかけた瞬間…

「ちょっと待ったー！ー！ーっ！！！」

声が聞こえ、二人は硬直する。

「二人してズルいやんかっ！！！」

「なのは、抜け駆けはダメだよっ！！！」

入ってきたのは、はやとフェイトだった。

「ふえ、フェイト、はやて！？／／／」

「ぬ、盗み聞きしてたのっ！？／／／」

二人は頬を赤く染めて驚いた。

「私たちも聞いたで。雅紀くん、何も一人でそんな重みを背負うことないやんかつ！バカアツ！！」

「雅紀！」

二人は勢いよく雅紀に抱きつく。

「なっ！？ふえ、フェイトっ！？はやてっ！！？／／／」

「ひっく…ぐす…」

「う…うう…」

二人は泣いていた。

「……………」

雅紀は二人を優しく抱きしめた。

「フェイトもはやても、泣かないでほしい。それに、俺なんかのために泣くのは…」

「俺なんかのために…ふざけないでやっ！」

「雅紀は、何でもかんでも、心の中に仕舞い込みすぎだよ？何で泣かないの？」

「…俺はもう、泣きまくった。だけど、泣いていたって…家族は戻

つてこない。フェイト、前にも言ったよな？俺は…家族の分まで生きる。俺は、失った家族の生きる時間の分まで…生きるんだと、心に決めたんだ」

雅紀は真っ直ぐな瞳を見せながらそう言う。

「それに、俺はライダーの力を手に入れて…良かった気がするんだ。だって…こうして、なのは、フェイト、はやて、アリサ、すずか…いろんな人達に出会えたしな。」

優しい笑顔でそう言う。

「だから三人とも、泣かないで、笑っていてほしい。俺、笑っている三人が…好きだからさ」

「コノノノ」

これで完璧なフラグメイカーになったな、雅紀。すると、目の前にモニターが現れました。

「うおっ！？何だこれっ！？」

「あ、シャーリーからだ」

フェイトはモニターを操作すると、メガネをかけた女性が映りました。

『あ、フェイトさんっ！大変ですっ！！』

「どうしたの、シャーリー？」

『先ほど、フェイトさん達が倒した異形が現れましたっ!!』

「えっ!？」

『今、現場にいる魔導師が応戦しているのですが、次々とやられてしまっ…』

「わかった。すぐに向かうから」

『お願いしますっ!!』

そう言っつて、シャーリーと通信が切れた。

「なのは、はやて、協力してくれる？」

「言われずとも!」

「私たちはやるよっ!」

互い、待機状態のデバイスを持つ。

「俺も行くっ!」

雅紀はベッドから降りようとするが、三人に止められる。

「雅紀はゆっくり休んでて」

「いくら雅紀君、強くて、体を休まないかんよ?」

「私達でも、やれるから！」

「だ、だがなっ！奴らはクロックアップって能力をッ！」

「それなら…あの緑色になっている状態で倒せばいいだけだよ？」

「さっきの戦闘で分かったから」

「だがなあ…」

「あゝ、もうっ！雅紀君はここでじっとしててやっ！！コレは決定事項やッ！！」

痺れを切らしたはやては雅紀にそう言い放つ。

「雅紀くん、心配してくれるの嬉しいよ？でも、雅紀くん、自分の体も心配した方がいいよ。大丈夫、私たちは…大丈夫だから！」

ゆっくりそして強い意志の声で言う。

「…わかった」

雅紀はそう言うしかなかった。

「じゃ、行ってくるね！」

三人は部屋を後にした。

「…何か、嫌な予感がするな」

雅紀の心に不安がよぎった。

屋上

そこになのは、フェイト、はやてが来る。

「行くよっ！フェイトちゃん、はやてちゃんっ！..!」

「うんっ..!」

「おっしゃっ！いくでっ！..!」

互いのデバイスを天に振りかざし...

なのは・フェイト・はやて『セット！アーーーーーッ！..!』

辺りは桃色と金色と白色の光で包まれた。そして、光が消えた時、

三人はバリアジャケットを纏っていた。

「それっ!!」

「ハッ!」

「そりゃっ!!」

と三人はオーラを出しながら、現場まで猛スピードで飛んで行った。

現場ではすでに半分以上がワームにやられていて絶体絶命だった。ワーム達は残りの魔導師に攻撃しようとした時だ。

「デイベイイン…バスターーッ!!」

「トライデントオオ…スマッシュアアアアッ!!」

桃色の砲撃と金色の弾丸が飛んできて、ワーム達を殲滅した。

「皆、お待ちせつ！」

「此処からは、私たちがやりますっ!!！」

「残った部達は退避してくださいっ！」

なのは達は言いながら確実にワーム達の数を減らしていく。

「やっぱり、この緑色の異形はクロックアップっていうのはしないっ！」

「姿が変わる前に速攻で倒そう！」

「ミストラルティンツ！」

はやては光の槍をとばしワーム達を石化させていく。

「アクセルシューターアア…シュートツ！」

「プラズマランサアア…ファイアツ!!！」

魔力弾を浴びせ、ワーム達は全滅した。

「終わったね」

「そうだね」

「ホンマや」

そう話している時だった。

『さて、そいつはどうかかな？』

辺りに不気味な声が響いた。

「この声…」

「まさか…！」

『そのまさかだ』

突然なのは達は吹っ飛ばされ、何者かに捕まえられる。

「あ、あなたはっ！」

「さっきの異形！」

「なんで生きとるんやッ!？」

そう、そこには、先ほどディカオスが倒したはずのワームだった。

『さっき、あのライダーに倒されたのは、我に擬態した仲間だ。仲間をここまでやってくれた事を後悔してくれる貴様らの命を持ってなッ…!』

ワームが腕を振り上げ、三人に攻撃する。その時だ。

『まだ生きてたとはな…!』

そう声が聞こえた瞬間、三人を捕まえていたワームが爆発した。

『何っ！？』

『大丈夫か、なのは、フェイト、はやて？』

その声の主は…

「「「雅紀（君）ッ！？」「」」

デイカオスに変身した雅紀だった。

「ま、雅紀くん！何で此処につ！？」

「体を休めてって言ったよね！？」

「何で来たんッ！？」

三人は驚くしかない。

『大事な人達がやられてるのに、黙って寝てるわけないだろう』

デイカオスは三人にそう言った。

『ほう…貴様は先ほどのライダー…！貴様も此処で始末してくれろっ！』

『それはこっちの台詞だっ！！』

互い、激しいぶつかり合いをする。

『くそっ！さっきより手ごわいなッ！』

『当たり前だっ！貴様が倒したのは我に擬態した仲間…！力までは完全にコピーができていなかったのさ。喰らえっ！』

ワームはクロックアップを使用して、ディカオスに接近する。そして…

『ぐはっ！！』

ディカオスは吹っ飛ばされ、何度も地面に叩きつけられる。

「雅紀くんっ！」

「このっ…！」

と二人はアクセルシューターとプラズマランサーを放つが…

『遅いなッ！』

ワームはクロックアップで回避する。

『フンッ！貴様らの力など、我には通用しないっ！』

「そ、そんな…」

『貴様らウジ虫共は、消えろッ！』

ワームはそう言い、光線を放つ。そして、爆発が起きた。

『フンツ！…途中で割って入ってきたか！』

煙が晴れると、そこには…

『ぐ、ぐう…！』

ボデイの所々から火花が飛んでいるディカオスがいた。

「雅紀くんっ！」

「雅紀っ！」

「雅紀君！」

三人はディカオスに駆け寄った。

「雅紀君っ！また無茶を…！」

「何でここまでして私たちを！？」

二人は涙目でそう言う。

『俺は、仲間を…友達を守るんだ…！俺は、もう後悔したくない…！だから…』

そう言いながらディカオスは立ち上がる。

『だから俺は、守るんだっ！…！』

ソレを聞いたなのは達は少し頬を赤く染める。そして立ち上がる。

「雅紀くん、私達は雅紀くんが傷つく所は見たくないよ？だから、雅紀くんが私達を守ってくれるのなら…私達は雅紀くんを守るよ！！」

デйкаオスの隣に並ぶ。フェイトもはやてもだ。

『お前ら……っ！？』

目の前にカードが出現し、デйкаオスはそれを取る。

『このカード…やってみよう！』

デйкаオスはそのカードを入れる。

『アタックライド・ユニゾン・インツ！ナノハアツ！！』

音声が鳴ると、デйкаオスの変身が解除された。だが機能はまだ働いている。その時だ。

「きゃっ！？」

なのはが突然こちらに飛ばされる。

「なのはっ！？うおっ！！？」

なのはと雅紀がぶつかり合う直前で、二人の周りに桃色の光が包み込んだ。

「ど、どうなってんだ？」

「雅紀くんの心が…伝わってくる」

「…なのはの心が伝わってくる」

「私たちの心が…体が…一つになっていく」

「俺達は…」

「私達は…」

「…一つになるっ！！」「」

その時、辺りが光に包まれた。

桃色の光が消え、中から一人の少年が姿を現した。

「雅…紀？」

「雅紀…君？」

二人が眼にした物は、姿こそ雅紀だが、なのはと同じバリアジャケット（男風）を着ていて、髪の色は栗色で手にはレイジンググハートが握られていた。

「俺は今、なのはと一つになっている」

『互いの体は…心は一つになっている』

「俺たちは今、一つとなり、貴様を倒すっ！」

レイジンググハートを構えて叫んだ。

『やれるものなら、やってみるがいっつ！…！』

周りにワームが出現した。

「なのは、いくぞ…！」

『うん!』

レイジングハートに魔力を込める。

「『デイバイイン…バスター…』」

桃色の砲撃を放つ。所々に紺色の魔力光が混ざっている。それが真っ直ぐワーム達に迫り…

『グギユウウウツ!!!』

一気に全滅させた。

「す、凄い…!」

「カートリッジもなしで、あんな破壊力はないやろ…!」

二人は啞然とする。

『フ、フンツ!クズにはなかなかやるなっ!!!だがこいつらはどうだっ!…!』

今度は成虫ワームが襲い掛かる。そしてクロックアップで接近してきた。

「こんなの…」

『今の私たちには、通用しないっ!…!』

「『カートリッジ・ロードッ!』」

レイジングハートから弾丸が飛び、魔力が上昇する。

「『アクセルシュータアア…シューー…トッ!…!』」

音速の速さで一気に成虫ワームに命中。成虫ワームは爆発する。

「これで残ったのはお前だけだ…!」

『ぐ…!このクズ野郎がつ…!調子に乗るなッ…!』

ワームは怒り任せに雅紀に迫ってきた。

「クズは、おまえの方だ…!」

雅紀はアクセルシュータ を放つ。だが…

『効かぬわああ…!』

直撃しながら突進してくる。

「アイツ、逆上しているのか…!」

『チェーンバインドッ!』

雅紀の足元の魔法陣から鎖がでてきてワームを縛る。

『このっ…!…くそっ!なぜ千切れぬッ!?!』

「そのバインドは強力だから…」

『そう簡単には壊れないのっ!』

雅紀となのははそう言い放った。

「なのは、トドメ…行くぞ?」

『うんっ! 私たちの全力全開をお見舞いしようっ!』

雅紀は構え魔法陣を出し、カートリッジを三回、ロードした。

『全力…全開!』

「スターライトオオ…」

「『ブレイカー…!』」

桃と紺の混ざった砲撃が地面を削りながらワームに迫る。

『う、ウワアアアアアアッ!』

ワームは断末魔を上げて砲撃に吞まれた。

『おみごとっ!』

そう言いながら、レイジングハートは煙を吐き出した。そして、雅紀の周りに桃色の光が包むみ晴れるとそこには、なのはとディカオスがいいた。

「やったねっ！雅紀くんっ！」

なのははディカオスに抱きついてきた。

『ちょ……なのはっ！／／／』

「なのはちゃんばかりズルイでっ！！」

「私たちもっ！」

二人はそう言いながら、ディカオスに抱きつく。

『は、はやて…！フェイトまで…／／／』

三人の美女に抱きつかれ慌てていたディカオスなのであった。

とある廃工場

『グウ…！し、死ぬかと思った…』

そこには先ほどのワームの大将がいた。体中、ボロボロになっており、フラフラのようだ。

『運よくクロックアップで脱出ができた。クク…運がいいなあ、我は…！』

そう呟いている時だ。

「ああ、確かに運がいいよ。お前は」

聞いた事のない声が聞こえたのだ。

『だ、誰だっ!?!』

ワームは警戒すると奥からカプセルを乗せたマシンを連れた男が現れた。

「お前は、ホントに運が良いぞ」

『貴様っ!何者だっ!』

「おまえに答える義理はない。ましてや、これから死ぬ奴に言う言葉はない…!」

『な、何っ!?!』

「お前はこれから、彼女の一部となるのさ。目覚めさせるためにね」
『ふざけた事をぬかさなッ!!!』

ワームはクロックアップで接近する。

「全く、短気だなあ。…蒐集せよ」

男が呟いた途端、カプセルの前に黒い渦が現れる。

『な、なにっ!?!吸い寄せられて…うわあああああああああああ
ああっ!!!…!』

ワームは黒い渦にのまれた。

「さて、これで彼女は目覚めるはずだ」

そう言って、カプセルの方を見ると、カプセルが怪しく光りだした。

「ようやくその中から出られるんだ。感謝するんだよ？」

カプセルはパリーンッ！と音を立てながら割れた。

「んはあああああ……」

そして中にいた女性が倒れる。

「わ、私は一体？」

「おはよう、リインフォース」

女性：「リインフォース」は目覚めた。

第34話（後書き）

リインフォースが目覚めたっ！

雅紀「どうなるっ！この展開！！」

わからんっ！

雅紀「おいっ！」

ナイス乗りツツコミ ……それより、皆さまに報告があります。

雅紀「何？」

その…しばらくリリなのの世界が続きそうです。

雅紀「そうですか。ところでさ、俺となのはの合体、アレは一体…」

ん？アレか。あれは普通に「ユニゾン」て奴さ。所々、Wのエクストリーム初登場の部分があるけど。

雅紀「そうなんだ」

まあそれより、ついに男の計画が発動するっ！！

雅紀「それでは、次回をお楽しみにっ！！」

第35話

．．．．．廃工場．．．．．

リインフォース「なぜ．．．私を蘇らせた．．？」

とリインフォースは言う．．．。

？「理由は簡単さ．．．君を私のイブになってもらったため．．そして．．二人だけの世界を作るためさ．．．。」

リインフォース「なんだと．．．．？」

？「ああ．．．難しすぎたかな．．？用は君の力でこの世界．．「ミッドチルダ」に住んでいる人間たちを滅ぼして．．二人の世界に作り変えるんだよ．．？」

それを聞いたリインフォースは驚愕する．．．。

リインフォース「な、なんだとっ！？貴様．．．正気かつ！？」

？「ああ．．正気さ．．．この世界にもう飽きてきてね．．．。いっそ、君と二人だけで住もうと思ったんでね．．．。」

リインフォース「そんなこと・・・させないっ!!」

とリインフォースは目の前に血のように赤いダガーを召喚する・・・。

リインフォース「闇に染まれっ!ブラッディダガーッ!!」

と言い放つと、ダガーは男めがけて飛んでいく・・・。

?「ふう・・・そうくると思ったよ・・・。だが・・・」

と言いながら右手を前に出す・・・。すると向かってきたダガーは徐々に速度を落とし、やがて消えた・・・。

リインフォース「な、なにっ!!?どうしてっ!!?」

とリインフォースは驚いた・・・。

?「君を蘇らせたのは、この私なんだ・・・。君が私に攻撃をしてくることがぐらい、予想していたんだ・・・。」

リインフォース「くっ!!」

?「それに・・・現に言えば・・・今の君は・・・私の支配下なんだよ・・・?」

と言つと・・・手を怪しく光らせた・・・。

リインフォース「なんだと?どういつことだ・・・。ツ!」?

すると、リインフォースの体が怪しく光る・・・。

リインフォース「な、なんだっ、これは!?!?・・・体が・・・体が・・・体が・・・熱く・・・。」

と頬を若干赤く染めながらリインフォースは苦しむ・・・。

?「万が一を備えて・・・君に新しい人格・・・いや・・・新しいシステムと言ったほうがいいな・・・。その名は・・・「イブ・システム」・・・私に忠実に従うシステムだよ・・・。」

リインフォース「なにっ!?!?ハア・・・ハア・・・どうして・・・!!?!?」

?「フフフ・・・今の君は・・・すごくかわいいよお・・・。一人の男として・・・君を犯したくなる・・・。」

リインフォース「くっ!?!?」

?「ああ・・・。そういえば言うのを忘れてた・・・。君の今の人格は、シャットダウンされ・・・意識の奥底に眠るんだ・・・記憶も。イブ・システムの作動でね・・・。」

リインフォース「くあっ!?!?そんな・・・ああああああっ!?!?」

とリインフォースは叫ぶ・・・そして・・・顔を伏せた・・・。

?「フフフ・・・管理者・・・「ギルド・グライア」の命令だ・・・。さあ・・・目覚めるんだ・・・リインフォースよ・・・。」

と言うと・・・顔を伏せていたリインフォースは顔を上げる・・・その顔は・・・無表情だった・・・。

リインフォース「イエス・・・・・・・・マイマスター・・・・・・・・」

と静かに言う・・・・・・・・。

ギルド「フフフフフ・・・・・・・・さあ・・・・・・・・リインフォースよ・・・・・・・・おいで・・・・・・・・」

と男が両手を広げ言うと・・・・・・・・リインフォースは立ち上がり・・・・・・・・ギルドのもとに行く・・・・・・・・。

ギルド「ハハハ・・・・・・・・今日は最高の日だ・・・・・・・・行くぞ・・・・・・・・リインフォース・・・・・・・・」

リインフォース「はい・・・・・・・・」

と言いながら二人は廃工場を後にした・・・・・・・・。

その頃・・・管理局本局の、一室では・・・

はやて「えーと・・・つまり・・・雅紀君のその力・・・ディカオスの力は・・・カードを使って戦うってところかな・・・？」

今現在・・・雅紀は三人にディカオスの力について教えていた・・・。

雅紀「まあ・・・そんなところだ・・・。しかし・・・まだ未知数の力もあるのかもしれないから・・・わからない・・・。」

フェイト「確かに・・・さっきも・・・いきなりなのはと雅紀がユ

ニゾンしちゃったから・・・驚いたよ・・・」

はやて「確かにアレは驚きや・・・まさか、なのはちゃんをユニゾンデバイスのようにしちゃうなんて・・・」

なのは「えへへ・・・凄いでしょ・・・？」

雅紀「なのはが威張る・・・？」

はやて「・・・因みにや・・・雅紀君・・・あの時「今、俺となのはは一つになった・・・」とか言ってたなあ・・・。アレってどうなってんのや・・・？ユニゾンとなにか違うんか？」

雅紀「うん・・・まあ・・・あの時は・・・なのはの心と俺の心が・・・一つに・・・と言うか完全に一人の人間になった状態なんだ・・・。まあ・・・人格は別々だし・・・体は俺がベースだがな・・・。」

フェイト「仮にも・・・その時はどんな感じだったの・・・？」

とフェイトが聞いてくる・・・。

雅紀「うん・・・まあ・・・あの時は・・・なんだか・・・温かい感じで・・・。」

なのは「なんか・・・ホントに心も体が・・・溶けてって・・・一つになっっていく感じがしたの・・・。」

雅紀「まあ・・・ホントになったがな・・・。」

と恥ずかしそうに言う・・・。

はやて「ふうん．．．要するに．．．二人はあの空間で．．．一時的に肉体が溶けてってそれが一つの肉体になってった．．．てことやな．．．。」

雅紀「うん．．．まあ．．．そんなところ．．．（なのはを求めちゃったって言ったら．．．怒るだろうしな．．．）」

なのは「はやてちゃん凄いな．．．（雅紀くんを欲していたなんて言えないよ．．．／／／）」

と二人は内心でドキドキしていた．．．そんな時．．．

フェイト「いいなあ．．．。」

はやて「私も雅紀君と一つになりたい．．．。」

とフェイトとはやては嫉妬が混じった目でにらむ．．．

雅紀「あ．．．そんな眼で睨まないで下さる．．．？」

と雅紀は二人の目に怯える．．．。

なのは「あ、そう言えば．．．さっきの戦闘でできたカードの内．．．一つはなのなので．．．もう二つは．．．もしかして、フェイトちゃんとはやてちゃんの分じゃ．．．。」

となのはが思いついた事を言う．．．。雅紀はカードを取り出す．．．。

雅紀「うん．．．あ．．．ホントだ．．．。」

とそのカードには・・・フェイトの顔が書かれているカードと、はやての顔が書かれていた・・・。

フェイト「じゃ、じゃあ・・・いつの日か・・・私も雅紀と・・・えへへ・・・／＼／。」

はやて「ひ、一つに・・・あはは／＼／」

と二人は妄想の世界に入ってしまった・・・。

雅紀「おい、カムバツク・・・。」

なのは「雅紀くん、なんで英語・・・？」

とまあ・・・平凡的な感じだったとな・・・。

一方・・・ギルドの方は…………。

ギルド「フッフ・・・リインフォースも目覚めたことだし・・・計画を始めようか…………。」

とギルドは言う・・・

ギルド「さあ・・・リインフォースよ・・・出番だ・・・存分にその力を解き放ってくるがよい…………。」

と後ろにいるリインフォースに言う

リインフォース「イエス・・・マイマスター…………。」

とリインフォースの周りを黒い光が包む…………。空間内では…………。リインフォースの裸体を漆黒バリアジャケットが包む…………。そして、

堕天使のような翼を生やす……。

ギルド「さあ……言って来なさい……。」

と命じると、リインフォースは翼を羽ばたかせ大空を飛翔した……。

雅紀達は……

雅紀「ん？またモニターが……」

と突然目の前にモニターが発生……。

なのは「あ……シャーリーからだ……。」

となのはが言う……フェイトは通信を開いた……。

シャーリー『大変ですっ！フェイトさんっ！！』

フェイト「どうしたのシャーリー？また異形が現れたの……？」

シャーリー『ち、違うんですっ！兎も角コレを見てくださいっ！！』

と言うと、もう一つモニターが現れる……。そして映像が映し出される……。

なのは「えっ！？」

フェイト「うそっ！？」

雅紀「どうしたんだ……ッ!?」

その映像に誰もが驚きを隠せない……その中で……はやてが一番驚いている……

はやて「なんで……?」

はやてはモニターを見て体を震えさせる……

はやて「何でそこにいるんやっ!!」「リインフォース」ツツツ!!
「!」

と叫ぶ……。その映像は……リインフォースが……町を破壊している映像だった……。

第35話（後書き）

さて・・・とんでもない展開になってきました・・・。

雅紀「まさか・・・リインフォースが洗脳されるとは・・・。」

ああ・・・しかも、ギルドと言う科学者・・・恐ろしい奴だ・・・。

雅紀「この後の展開はどうなるんだ!？」

今回は・・・デイカオス達VSリインフォースだ!!

雅紀「お楽しみにっ！」

第36話(前書き)

さて・・・今回はリインフォースとのバトルです・・・。

雅紀「リインフォース・・・正気に戻ってくれればいいのだが・・・」

では始まります・・・。

第36話

モニターを見ていた三人は動揺を隠せないでいた……。特にはやては……

はやて「そんな……なんで……？なんであの子がこんな……」

とはやては涙目で呟いた……。

雅紀「なのは……フェイト……あの人の事……知ってるのか……？」

と雅紀はなのはとフェイトに言う……。

なのは「うん……あの人は……はやてちゃんの……家族の一人だった人……リインフォースさんだよ……。」

雅紀「だった……？」

フェイト「五年前にね……なのはとはやてのいる世界で……「闇の書事件」て言うのがあって……。」

雅紀「闇の書事件？」

なのは「ロストログアと認定されていた……魔導書……それが原因で起きた事件なの……。で……その闇の書の主だったのが……はやてちゃんなの……。」

雅紀「なんだって……!？」

雅紀は驚いた……。

フェイト「その当時……はやては、原因不明の足の麻痺にあつててね……。その麻痺を引き起こしていたのが……闇の書だったの……」

なのは「生まれてずっと、はやてちゃんの傍にあつたから、はやてちゃんは大事に保管していたの。」

フェイト「そして……五年前の冬の季節に……その闇の書が起動したの……」

なのは「そして……その中から……ヴォルケンリッターって呼ばれた……人たちがでてきたの……」

雅紀「その闇の書から……？封印でもされていたのか……？」

フェイト「ヴォルケンリッター達は……生きたプログラムなの……ほとんどが……生身の人間の体をしていてね……」

なのは「その人たちは……闇の書に魔力を蒐集させて……はやてちゃんに絶大な力を与えようとしたのだけど……はやてちゃんはそれをダメって言ってね……しばらくは……静かに暮らしていたの……」

フェイト「だけど……はやての足の麻痺が……だんだんと体全体に広がり始めたの……」

なのは「やむ追えず、ヴォルケンリッターの人たちは……はやて

ちゃんの約束を破り……蒐集を始めたの……。」

雅紀「……そのあとは……？」

なのは「その時……私の前にね……ヴォルケンリッターの一人……「ヴィータ」ちゃんっていう子に……襲われて……力負けしちゃったの……。」

フェイト「当時は……私もなのはも……まだデバイスに、カートリッジ・システムを搭載してなくてね……。駆け付けた時には……なのはは少しだけど……ボロボロになっててね……。加勢はしたんだけど……途中で「シグナム」っていう人が現れて……私は敗れたの……。」

なのは「私はその時……体を回復させていたんだけど……「シャル」さんという人に……魔力を蒐集されちゃって……。気絶……レイジングハートも……フェイトちゃんのバルディッシュも……ボロボロになっちゃってね……。」

フェイト「私たちは……しばらくの間は……戦えなくなったの……。」

なのは「その間にも……闇の書のページは半分までいってね……もう完成に近かったの……。」

フェイト「それを阻止しようと……私となのははカートリッジ・システムを搭載させて……挑んだの……。」

なのは「そして……幾度もぶつかりあった……そして……入院していたはやてちゃんの周りにその人たちがいて……はやてちゃんが、

闇の書の主だつて言われたの……。」

フェイト「私たちは止めようと……話し合いをしようと思つかり合つただけど……その時、幾度か私たちの前に現れた、仮面の男たちが現れた……。そして私たちは結界に閉じ込められ……彼女たちが……闇の書に蒐集されるところを見るしかなかった……。」

なのは「その途中にはやてちゃんを召喚させて……大事な家族を消される所を目撃させ……。暴走させた……。」

フェイト「そしてはやての意識は奥底に閉じ込められ……。闇の書の管理制人格のリインフォースが現れた……。そして……世界を破壊させようとした。」

なのは「私たちは止めようと……私達は戦つた……。そして……はやてちゃんが目覚めて……闇の書の……。防衛プログラムを切り離そうとした……。」

フェイト「最終的に防衛プログラムは倒したのだけれど……。リインフォースが……。防衛プログラムがまた暴走するからといって……。消えちゃったんだ……。」

雅紀「つまり……。死んだ……。ということか……。」

なのは「うん……。」

雅紀「……。」

雅紀ははやてを見る……。まだ……。涙を流していた……。

雅紀「はやて……」

と言い後ろから抱きついた……。

はやて「え……雅紀……君……？」

雅紀「はやて……気持ちはわかる……。俺も……家族……いなくなったから……。だが……今、自分の家族が世界を壊そうとしている……。お前はどうするんだ……？」

はやて「え……？」

雅紀「お前は……リインフォースをこのまま野放しにするのか……？……大切な家族が……世界を壊そうとしているんだ……お前が……決める……。止めるか……。止めないか……。」

はやて「……。」

はやては黙り込む……。そして……

はやて「私は……。止めたい……。リインフォースをつ！もう一度……話したいっ！なんで……。なんであの子がこんなことしているのか……。聞きたいっ！！」

とはやては雅紀に抱きつき涙目で見る……

はやて「雅紀君……。我儘かもしれへんけど……。協力してくれへんか……？」

と言った……。その答えに雅紀は……

雅紀「俺達は・・・友達だろ・・・？友達が困ってんなら・・・助けてやんなきゃ・・・いけない・・・。」

と意志の強き瞳で言う・・・。

はやて「ありがとな・・・雅紀君・・・。」

とはやては涙を拭き笑顔を作る・・・。なんか甘いムードになっていると・・・。

なのは「はやてちゃんっ！ずるいのっ！！」

フェイト「私達も雅紀に抱きつくっ！」

と言ってきて・・・二人は雅紀に抱きつく・・・。

雅紀「二人とも・・・見事に空気をぶち壊したな・・・。」

と雅紀は呆れながら言う・・・。

その頃町では……

ドゴオオオツッ!!

リインフォースが町を破壊して回る……。その光景をある小型マシ
ンが見ていた……。

ギルド『フッフフさすがだ……。リインフォースさあ……。辺り
一面を焼け野原にするんだあ!』

と監視しているギルドが言い放つと、リインフォースは手を上にあ
げる……。すると、上に巨大なエネルギーの塊が現れた……。

リインフォース「闇に……。染まれ……。デアボリック・
エミツシヨン……。」

とエネルギーボールを投げようとしたその時……

「ダイバイイン……。バスターーッ!」

と桃色の砲撃がそれを防いだ……。リインフォースはその方向を見る……。

なのは「リインフォースさんっ!」

となのはを先頭にフェイト、はやて、ディカオスブレイド・ジャックフォームDBJが飛んできて……。その場に止まる

リインフォース「……………」

そしてはやてが前に出る……。

はやて「リインフォースっ!なんでこんなことするんやっ!!それに……死んだんじゃないんかっ!!?」

とはやては言う……。しかし……

リインフォース「敵対勢力……確認……。直ちに排除する……。」

とリインフォースは身構える……。

はやて「リインフォースっ!私の声が聞こえないんかっ!!私やっ!はやてだよっ!!お前のマスターやっ!!」

とはやては叫ぶ……。が……

リインフォース「私のマスターは……。ギルド様だけ……。貴様など……。知らない……。」

と拒絶の言葉だけが返ってきた……。

はやて「そ、そんな……リインフォース……。」

とはやては悲しんだ……。そんなD B Jはリインフォースの言葉にある疑問を思った……。

雅紀『お前……今……「マスターはギルド様だけ」って言ったな……。そいつがお前を蘇らせたというのか……?』

と言ったその時……

ギルド『ご名答だよ……。謎の戦士君……。』

と男の声が響いた……。そしてあの小型マシンが近付いてきてモーターを出す……。

雅紀『お前か……。今回の事件を起こしている犯人は……。』

ギルド『その通りだよ……。私の名はギルド・グライア……。どうかな……。八神はやて、君の大事な子がそこにいるんだよ……。感動しただろう……。?』

はやて「感動なんかしてへんわっ!!!リインフォースになにしたんやっ!!!?」

とはやては怒鳴る……

ギルド『ちよつと、彼女をいじつてね……。そう怒鳴らないでくれたまえ……。ある意味……。彼女を生き返らせたのは私なのだ……。礼を言いたまえ……。』

とギルドは余裕を崩さない・・・。

はやて「誰が礼なんて言うかつ！リインフォースを元に戻せっ！！」

ギルド『・・・・・・・・それは無理な相談だ・・・・・・・・もう彼女は元には戻らない・・・・・・・・。イブシステムが作動した限り・・・・・・・・永遠にね・・・・・・・・』

はやて「そんな・・・・・・・・。」

ギルド『フッフフ・・・・・・・・リインフォースよ・・・・・・・・その女を殺すがいい・・・・・・・・。我々にとって邪魔な存在だ・・・・・・・・。』

と命令する・・・。

リインフォース「イエス・・・・・・・・マイマスター・・・・・・・・。」

とリインフォースははやてに攻撃を仕掛ける・・・。

はやて「しま・・・・・・・・。」

はやては顔を伏せていたので反応が遅れる・・・・・・・・リインフォースは腕に魔力を込めて撃つ・・・。

ゴッ！！！！

と音がした・・・・・・・・。はやては前を見た・・・・・・・・。

雅紀『・・・・・・・・・・・・・・・・』

DBJがリインフォースの攻撃を止めた……。

はやて「雅紀君……？」

雅紀「ふざけんな……。」

はやての言葉を聞かず……DBJは言う……それで周囲の空気が冷たく……重く感じた……。

雅紀「ふざけんなよ……くそが……！」

DBJはリインフォースの腕を強く握る……

リインフォース「！」

雅紀「はやてが……今、どんなに悲しんでいるのか……わかってんのか……？家族を助けたいから……必死に呼びかけているのに……。貴様は……リインフォースを洗脳して……暴れさせて……。はやてを殺そうとした……。」

DBJは体を震えさせて言う……

雅紀「ギルド……てめえだけは……絶対に許さんぞっ
！……！」

とDBJはリインフォースを遠くに飛ばす……。

ギルド「フン……ならば……君も消えたまえ……リインフォースの力で……な……。」

とギルドが言う・・・リインフォースは突っ込んだ・・・。

雅紀『上等だっ！！俺は今・・・無性に腹が立ってんだっ！！！！リインフォースを返してもらっっ！！！！！！』

とDBJも突撃して・・・リインフォースと激しくぶつかり合う・・・

ドゴオッ！！！！

拳がぶつかり合うことに大気が震える・・・。そんな時・・・

リインフォース「・・・クロックアップ・・・。」

と呟く・・・。そして一気にDBJを吹っ飛ばした・・・。

雅紀『ぐ・・・あ・・・今は・・・まさかつ！』

と言うとギルドが笑った・・・。

ギルド『クハハハハッ！そうさ・・・君達が倒したあの異形の能力さ・・・。』

雅紀『なぜ・・・！！？』

ギルド『君が倒している間・・・私はその異形の数匹を蒐集したのさ・・・おかげでリインフォースに高速移動能力が備わった・・・。』

』

雅紀『ぐっ!!』

とSBJは苦戦を強いられた。。。そんな時・・・

なのは「デイベイイイン・・・バスターーーーーッ!!!」

となのはデイベインバスターを放ち、リインフォースの動きを止める・・・。

なのは「雅紀くんっ!ユニゾン行くよっ!!!」

雅紀「なのは・・・ああ!!!」

とDBJはデイカオスに戻りカードを出す・・・

『アタックライド・ユニゾン・インッ!ナノハアッ!!!』

となのはとデイカオスの周りに桃色の空間が広がり、中からなのはと融合した雅紀が現れた・・・。

雅紀「最初っから全力だっ!行くぞなのはっ!!!」

なのは『うんっ!』

雅紀・なのは「『デイベイイイン・・・バスターーーーーッ!!!』

」

とデイベインバスターを一度に五つも発射した・・・。

ギルド』ほづ・・・これはまたすごいな・・・君の能力は・・・。だ

が……！」

とリインフォースは避けたりパンチで防いだ……。

ギルド『今のリインフォースには……そのような攻撃は……通用しないっ！！』

とギルドは笑う……。そして……

リインフォース「闇に染まれ……。」

と黒い砲撃を放った……。

雅紀「クツ！プロテクションッ！最大出力っ！！！」

と雅紀は目の前に障壁を出し……魔力で強化させ防いだ……が……砲撃の威力は落ちず……障壁にヒビが入ってきた……。

なのは『くう……。レイジングハートも限界なのっ！』

となのはは苦しそうに言う……。

雅紀「くっ！頑張れっ！なのはっ！！レイジングハートッ！！！」

と言うが……。

パライインッ！！

障壁は……砕けた……。そして……砲撃が向かってくる……。

雅紀「しまっ……」

そして……雅紀を飲み込んだ……

フェイト「雅紀っ！」

はやて「雅紀君っ！」

と二人は叫んだ……。煙が晴れると……。そこにはボロボロになったデイカオスとなのはがいた……。

雅紀「ぐう……。なのは……。大丈夫か……？」

なのは「私よりも……。雅紀くんがっ！」

とよく見ると、デイカオスの体から火花がでていて危険な状態だった……。

リインフォース「トドメだ……。」

とその場に一気に来たリインフォースがとどめを刺そうとした……。

雅紀「くっっ！」

なのは「うっ！」

二人は眼をつむった……。すると……

はやて「やめてえええっ!!!!」

とはやてが割って入ってきた……。

雅紀『は、はやてっ!?!?』

なのは「はやてちゃん、危ないのっ!?!?!」

と叫ぶが……はやてはその場から離れない……

はやて「もうやめてっ! リンフォースッ!?!」

とはやてはリンフォースに呼びかける……が……

リンフォース「……」

リンフォースははやてごと葬ろうとした……。

はやて「リンフォース……」

リンフォース「!?!?!?!」

とはやては叫んだ……。途端……リンフォースの拳がはやての顔の前で止まった……。

はやて「……リンフォース……?」

リンフォース「……あ……主……」

と弱弱しく返事をする……。

はやて「リインフォースッ！正気に戻ったのっ！！？」

とはやては嬉しそうに言う……。が……

リインフォース「……主……私を……私を……殺して
ください……。」

とリインフォースはとんでもないことを言う……。

はやて「ちょ……何を言うてんねんっ！！リインフォース！！？」

リインフォース「わ、私は……もう……主や……主の仲間
を……殺したくない……。だから……主……私を……
殺してください……。」

とリインフォースは涙目で言う……。

はやて「そんな……リインフォースッ！！」

とはやても泣く……その時……

ギルド「おやおや……。眠らせた人格が蘇ってしまったか……
・仕方ない……。君には悪いが……。此処からは……。私が
殺るよ……。」

と言いきルドルはモニターを操作……すると……

リインフォース「ぐあっ！！グウウウ！！」

と突然、リインフォースが苦しみ始めた……。

はやて「リインフォースッ!?どないしたんやっ!?!?」

とはやては驚く・・・

リインフォース「あ・・・主・・・早く・・・早く私を殺して・・・」

と言いかけた・・・その時・・・

リインフォース「グアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!!!」

とリインフォースが雄たけびを上げる・・・すると、リインフォースの体が禍々しく光りはじめた・・・そして・・・黒き巨大な空間を発生させる・・・。

はやて「あ、リインフォースッ!!」

と叫ぶ・・・そして・・・空間が壊れる・・・その中から・・・リインフォースとは別の何かの姿を見せた・・・。

雅紀「おい・・・何なんだよ・・・コイツは・・・!?」

なのは「そんな・・・。」

フェイト「コイツは・・・。」

誰もが驚く・・・それは・・・

はやて「闇の書の……防衛プログラム……ッ!?!?」

……五年前……

……はやて達が倒した……

……闇の書の……

……防衛プログラムだった……。

第36話（後書き）

さて・・・リンフォースが正気に戻ったのはいいが・・・やばい奴が姿を現したっ！！

雅紀「闇の書の防衛プログラム・・・恐ろしい姿だ・・・。」

ああ・・・さて次回はっ！闇の書の防衛プログラムの中に閉じ込められたリンフォースを救うため・・・ディカオス達は戦う・・・がその途中・・・ディカオスが・・・ッ！！！！

雅紀「気になる方は次回をお楽しみにっ！！！！」

第37話

はやての呼び声で目覚めたリインフォース……。しかし、ギルドにより……。闇の書の防衛プログラムと化してしまった……。

現在……。防衛プログラムは雄たけびを上げる……。それだけで周囲の気が揺れるようだった……。

雅紀『これが……。闇の書の……。防衛プログラム……。』

ディカオスは初めて見る防衛プログラムに驚愕していた……。

なのは「……。以前より大きい……。』

フェイト「しかも……。魔力も……。五年前とは比べ物にならない……。』

と誰もがその姿に驚愕した……。

はやて「……リイン……フォース……。」

とはやては悲しい顔をする……。そんなはやてを見たデイカオスは……。

雅紀『はやて……悲しむなッ！他にまだ……リインフォースを助ける方法があるっ！！』

はやて「！……雅紀君……。」

なのは「そっだよっ！はやてちゃんっ！！」

フェイト「まだ……リインフォースが死んだとは限らない……。」

はやて「なのはちゃん……フェイトちゃん……うんっ！」

はやては皆の言葉で勇気がわいた……。

雅紀『だが……どうすれば、リインフォースを助けられるんだ……？』

と知っている内に防衛プログラムが砲撃をしてきた……。

雅紀『やばっ！』

とデイカオス達は回避しようとしたが間に合わない……やられ

る………と思ったその時……

?「紫電一閃ッ!!」

?「ラケーテンッ!ハンマーッ!!」

と二つの閃光が見えた途端……砲撃が消えた……。そして目の前に剣を持った女の人とハンマーを持った少女が現れた……。

?「大丈夫ですか?主はやってっ!」

?「遅くなって悪いな!」

とはやてに言う……。はやて達はこの二人を知っていた……。

はやて「シグナムッ!ヴィータッ!!」

とはやては呼ぶ……

雅紀『(シグナム……ヴィータって……まさかこの二人が……ヴォルケンリッター……!?)』

と二人を見たディカオスは思った……。そして……二人と目があつた……。

ヴィータ「てめえは誰だっ!!?」

シグナム「主、お下がりくださいっ!斬りますっ!!」

と敵意むき出しで言う……。それをはやてが止める……。

はやて「し、シグナム、ヴィータっ！この人は敵じゃないっ！私達の友達やッ！！」

それを聞いた二人は驚いた・

シグナム「友達ですか・！？」

ヴィータ「こんな顔を隠した奴・・・・信用できねえっ！」

雅紀「あはは・・・・信用してもらえないのか・・・・」

とデイカオスは呟いた・・・・。

シグナム「シャーリーから聞きました・・・・あの中に、リインフォースがいるのですね・・・・？」

はやて「うん・・・・。」

ヴィータ「くそっ！なんでこんな事になってんだよっ！！あいつは・・・・死んだんじゃ・・・・なかったのかよ・・・・。」

とシグナムとヴィータは悲しむ・・・・。

雅紀「兎も角・・・・リインフォースを助けに行かないと・・・・。」

なのは「で、でも・・・・どうやって・・・・？」

フェイト「そうだよ・・・・どこにリインフォースがいるのか分からないのに・・・・。」

雅紀『……恐らくだが……リインフォースは防衛プログラムの
中……中心部にいるはずだ……防衛プログラムからリイン
フォースを取り出せば……防衛プログラムは消える……はずだ・
』

なのは「はずつて……。」

フェイト「でも一理あるかも……。」

はやて「リインフォースを助けなきゃ……元もこうもないっ！シ
グナム、ヴィータ、力を貸してなっ！」

シグナム「無論です……主はやて……。」

ヴィータ「早くあの中からリインフォースを助けなきゃなっ！」

と全員は身構える……。

雅紀『言いか……ダメージを負わせながら……リインフォース
を探すぞっ！』

五人『了解っ！』

ヴィータ「……ていうかお前が仕切るなっ！」

と言い……六人は防衛プログラムに接近する……。

ギルド『何をしようが無駄なのにね……。殺れ……。』

とギルドが言い放つと……防衛プログラムは攻撃をしてきた……。

なのは「デイバイイン……バスターッ!!」

フェイト「トライデントオ……スマツシャー……ッ!!」

となのはとフェイトの砲撃で攻撃を止め……抜き打ちで防衛プログラムに当てた……。

シグナム「紫電……一閃っ!!」

とシグナムのデバイス「レヴァンティン」の刃先を炎で纏い……防衛プログラムの腕を数本斬る……。

ヴィータ「ギガントハンマー……ッ!!!!」

とヴィータは雄たけびを上げ、自身のデバイス「グラーフアイゼン」を巨大ハンマーにし……防衛プログラムの頭めがけて叩く……。

『ゴオオオオオオオツ!!!!』

と防衛プログラムが咆哮すると、目の前に障壁が現れ、ハンマーを防ぐ……。

ヴィータ「ぶちぬけエエエエエエエエツ!!!!」

とヴィータはカートリッジを使って威力を増させる……。そして……

パライイイイインッ!!

と障壁は壊れ、防衛プログラムの頭に直撃させる……。

『グゴオオオオオオツ!!!』

雅紀『デイメンションレイザーッ!!』

と近くのビルでディカオスはデイメンションレイザーを防衛プログラムめがけて撃つ……。油断をしていた防衛プログラムは反応が遅れまともに喰らう……。が……

『ゴオオオオオオオツ!!!』

凄まじいいきおいで防衛プログラムの傷が治る……。

雅紀『なっ!?!』

なのは「なんて回復力なのっ!?!」

ヴィータ「くそっ!このままいくら叩き潰しても回復してきやがるじゃねえかつ!?!」

シグナム「……だが……いくら回復力が凄いとしても……そう早く回復はしない……。」

フェイト「攻撃してた時は回復はしなかったから……。」

雅紀『つまり……回復させないように攻撃を連発で食らわせ……て事か……。』

ヴィータ「上等だっ！！この鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラー
ファイゼンに壊せねえ物なんざねえっ！！！！」

なのは「一気に全力で行くよっ！！」

フェイト「うんっ！！」

はやて「なら先に動きを封じるわっ！！」

とはやては詠唱する……。そして……

はやて「ミストラルティンツ！！」

と光の槍を発射させ、防衛プログラムの動きを封じる……。が……

『グオオオオオオオツ！！』

と防衛プログラムは触手を伸ばし、砲撃を撃とうとする……

シグナム「させるかっ！！レヴァンティンツ！！！！」

レヴァンティン『シランゲフォームツ！！』

とレヴァンティンを一度裾に収め、弾丸が飛び出し勢いよく抜くと、
レヴァンティンの刃先が連結刃になり、紫色の炎をまとう……

シグナム「飛龍……一閃っ！！」

とレヴァンティンを勢いよく振り連結刃で触手を斬り伏せる……

なのは「デイバイインツ・・・バスターーツ!!!」

となのはもまたカートリッジで威力を増させたデイバインバスターで防衛プログラムを撃つ・・・。

フェイト「アークセイバー……ツ!!!」

とフェイトはバルディッシュの刃先を伸ばし、一振りです防衛プログラムを肩部分を斬る・・・。

雅紀「俺も行くぜっ!!!」

とディカオスはカードを出しベルトに入れる・・・

「ファイナルアタックライド・デイ・デイ・ディカオスツ!!!」

そして目の前に3Dのカードが出現する・・・

雅紀「ディメンションストラッシュ!!!」

と勢いよくアドバンスドライバーを振るとエネルギーの斬激波をとばし、防衛プログラムにダメージを与える・・・。

「グガアアアアアアアアアツツ!!!」

なのは「よしっ効いているのっ!!」

フェイト「これなら勝てるっ!!」

と二人は言う……。

ギルド『ふーむ……なかなかの力だね……その力……是非欲しいっ！特に戦士君っ！君の力がねっ！！さあ防衛プログラムよおっ！！！！』

とギルドは叫ぶ……。そして触手を伸ばしてなのは達を捕まえようとする……。

なのは「きゃっ！」

雅紀『なのはっ！！！！』

とデйкаオスなのはの方に向かい、触手を斬る……が……

ギルド『引つかかったねえ……！！』

と触手は回復し……デйкаオスを捕まえる……

雅紀『なっ！！しまったっ！！！！』

とデйкаオスがもがく……。

ギルド『ククク……最初から君を捕まえるためさ……。さあ……やるがいつ！！！！！！』

とギルドが言い放つと……触手が光る……。

雅紀『なに……ぐあああぁっ！！！！』

と今度はディカオスが光りはじめた……。

なのは「雅紀くんっ!!」

なのはが近付こうとしたら障壁が張られ行く道をふさぐ……。

雅紀『ぐ……あ……力が……抜けていく……』

どんどんディカオスの体が消え始める……。

なのは「雅紀くんっ!!」

となのはは叫ぶ……。

雅紀『な……なの……は……』

そしてディカオスは完全に消えた……。

なのは「そんな……雅紀くん……」

となのはは絶望したかのような顔でディカオスがいた所を見る……。

フェイト「ウソ……」

はやて「雅紀君が……」

シグナム「くっ!!」

ヴィータ「あの野郎っ!何て事をしやがるんだっ!!」

とフェイトとはやては悲しい顔をする・・・シグナムとヴィータは
ギルドの方を見て怒りの目で睨む・・・

ギルド『クククク・・・くはははははっ！！！！これで彼の力は私の
ものだっ！！！！クハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！！！！！！！』

とギルドの笑い声が響いた・・・。

第37話（後書き）

さて・・・ディカオス・・・雅紀が蒐集されちまったっ！！！！ど
うなるんだっ！！さて・・・次回は、防衛プログラムに蒐集され
てしまった雅紀・・・目が覚めたらそこは・・・懐かしい所だった・・・
。。。

それでは次回をお楽しみにっ！！！！

第38話

防衛プログラムにより蒐集された雅紀……一体どうなっているのか……。

雅紀「う……うん……あれ？」

と雅紀は起き上る……そこは……

雅紀「此处は……俺の部屋……？」

。雅紀の部屋だった……。しかもベッドの上で眠ってたらしい……。

雅紀「一体どうして……それに俺の家は……壊されたはず……。」

と雅紀は崩壊された家を思い出す……。そんな時……

？「雅紀く、いつまで寝てるの？もう起きなさい。」

と声が聞こえた……。

雅紀「この声……まさかっ!？」

と雅紀は勢いよく部屋から出る……。そしてドアを開ける……。

？「あゝ、やっと起きたのね。おはよう、雅紀……。」

そこには女性がいた……。しかもこの女性を雅紀は知っていた……。

雅紀「……母さん……。」

そう雅紀のお母さんだったのだ……。すると……

？「雅紀にしては珍しいなあ……こんな時間まで寝てるなんてなあ……。」

とテーブルの方を見ると、そこには新聞紙を読んでいる男がいた……。

雅紀「父さん……。」

雅紀のお父さんだった……。

雅紀「なんで……二人は……あの時……。」

と二人の遺体を見た時の事を思い出した……。

父「それより雅紀、もう行く時間じゃないのか・・・今日は龍斗君と出かけるんだろう・・・？」

雅紀「りゅ・・・龍斗が・・・!？」

父「なんだそんなに驚いて・・・忘れてたのか・・・？」

母「急がないと、龍斗君、怒ってるわよ・・・？」

雅紀「・・・わかった・・・。」

と雅紀は着替えを済まして家を出た・・・。辺りは・・・平凡でいて平和だった・・・。

雅紀「此処は・・・俺の世界なのか？俺は・・・防衛プログラムの闘っていたのに・・・どうして・・・？」

と考えていると・・・

？「おっ！やっと来たか、遅そいぞ！！雅紀！」

と目の前で起こった素ぶりを見せる少年がいた・・・。

雅紀「・・・龍斗・・・。」

雅紀の友達・・・暁 龍斗だった・・・。

龍斗「全くよ、おまえはこういう時に限って遅れるんだなあ・・・ほれ、いくぞっ！今日は新しくできた公園に行かなきゃなっ！！！」

と龍斗は走った……。雅紀は無言でそのあとを追う……。

一方なのは達は……

なのは「雅紀くん……………」

なのははまだ、雅紀がいたところを見る……………」

ギルド『クハハハッ！これで、防衛プログラムはまた……………強くな
った……………』

なのは「くっ！」

となのははディバインバスターを放つ……………」

『グルルルッ！！』

と障壁に防がれた……………」

なのは「返してよ……………雅紀くんを……………返してよっ！！！」

となのははディバインバスターを連発する……………」がこれも障壁により
防がれる……………」

ギルド『フム……………それは不可能だね……………一度蒐集されたも
の……………私や防衛プログラムでも取り出せないのさ……………』

なのは「そんな……………」

なのはは涙があふれる……。

ギルド『ま、仮にも……出られる方法は一つ……彼が自分で抜け出すことだ……。といってもそれも不可能なのさ……。』

なのは「なんで……?」

ギルド『一度蒐集された者が見るものは何だか……わかるかい……? フェイト執務官や八神一佐が経験しているものだよ……。』

その一言に、フェイトとはやてはハツとする……。

フェイト「まさか……あの中でも……夢をツ!?!」

ギルド『ご名答! その通りさ……彼も人間……なにか失ったものがあるはずだ……。きっと彼はその夢を見ているだろう……。』

はやて「そんなのって……ッ!?!」

フェイト「……雅紀は……家族や友達を失っている……。』

ギルド『ほう……そうだったのか……。なら彼はその自分の家族と友達にあっていることだ……。夢の中でね……。夢の中なら……。彼は親と友達を失わないで……。一緒に過ごせられるだろう……。』

フェイト「そんな……。私も……。はやても抜け出せたんだっ!」

はやて「きつと雅紀君も抜け出せるはずやッ!?!」

と二人は言う・・・

ギルド『そうかな・・・？フェイト執務官は一人の母を・・・
神一佐は家族を・・・だが・・・彼の場合は家族と友達をな
だよ・・・？君らの心の傷よりも深い傷を負っているはずだ・・・。
君らは・・・支えてくれる人がいたが・・・彼にはいないじゃな
いかっ！つまり、彼は永遠に夢の中なのさっ！！ハハハハハハッ
！！！！！！』

フェイト「・・・・・・・・」

はやて「・・・・・・・・雅紀君・・・。」

一方雅紀は・・・・・・・・

龍斗「ひゃっほ~~~~っ!!」

と龍斗は公園を満喫している……。

龍斗「た〜のしい~~~~っ!!……てうん？」

と龍斗は雅紀の方を見る……雅紀はベンチに座り込んでいるだけで……公園の乗り物や龍斗と遊んでいないのだ……。

龍斗「雅紀っ!!」

と龍斗は雅紀の方に行く……

雅紀「……」

龍斗「どうしたんだよあ？そんな暗い顔をしてよあ……。ほら遊ぼうぜっ!!」

と龍斗は誘うが雅紀はベンチから離れない……。

龍斗「おい雅紀……」

雅紀「……なあ……龍斗……」

龍斗「あん……？なんだ……？」

雅紀「……これは……夢なんだろう……？」

龍斗「……」

雅紀「さっきまで俺は……闇の書の防衛プログラムと闘っていた……その時奴に捕まり意識を手放した……。これは……防衛プログラムが見せている夢なんだろう……？」

と雅紀は龍斗を見る……。龍斗はプツと笑った……。

龍斗「クク……。ああ……。そうさ……。これは、防衛プログラムが見せた夢だ……」

と龍斗は言う……。

雅紀「やっぱりな……」

龍斗「だけどよあ……。良いじゃねえか！此処にいれば……。家族と一緒にいれるし……。俺とも遊べるんだぜっ！？」

と龍斗は言った……。雅紀は……。

雅紀「いや……。俺は現実の世界で生きるよ……。悪いな……」

「
と言った・・・その一言に龍斗は驚いた・・・

龍斗「おいおい・・・どうしてだよ・・・？俺と一緒に嫌だっつてのかわつ！？」

雅紀「そうは言っていないだろ・・・。俺はあっちでさ・・・大切な人たちがいるんだ・・・。それに・・・あいつらの世界が今・・・滅びようとしているんだ・・・黙って此処にいることはできない・・・。」

龍斗「・・・。」

雅紀「悪いな龍斗・・・だが行かなきゃならないんだ・・・」

龍斗「フフフ・・・フハハハハハッ！！やっぱお前はそう言う奴なんだよなあ！ははっ！わかったよ、行きな・・・。」

と目の前に空間が生じる・・・

龍斗「この先に行けば・・・夢から出られるぜ・・・。」

雅紀「ああ・・・。」

龍斗「それよりよお・・・。」

雅紀「???？」

龍斗「なんでお前っ！そんなにモテモテなんだよっ！ハーレムにな

ってんじゃんかつ!!しかもあの有名なリリなののはちゃんと
フェイトちゃんにチューなんてされて・・・羨ましすぎるにもほど
があるだろっ!!!!」

と龍斗は血の涙を流さんばかり悔しい目で見ると・・・。

雅紀「いや待って待って・・・なんでお前リリなのをやってんだっ!?!」

龍斗「毎日欠かさず見てんだよっ!!!」

と龍斗は自慢げに言う・・・。

雅紀「・・・・・・・・ちよつと引いたわ・・・・・・・・。」

と目を細めて言う・・・・・・・・。

龍斗「ちよ・・・・・・・・そんな目で見ないでくれますっ!?!」

雅紀「・・・・・・・・まあいいや・・ありがとな・・・・・・・・。」

龍斗「おっと、ちよつと待って・・・忘れもんだぜっ!」

と龍斗はあるものを投げた・・・・・・・・それをキャッチした雅紀は見て
みると・・・

雅紀「デйкаオスドライバー・・・・・・・・!?!」

龍斗「それがなきや、変身も戦つこともできねえだろ・・・・・・・・。」

雅紀「・・・・・・・・ああ・・変身ッ!」

『カメンライド・デイカオスッ!』

と雅紀はデイカオスに変身する……その余波で辺りの景色が消えていく……。

龍斗「じゃあな……雅紀」

と龍斗は消えていった……。

雅紀「……会えて嬉しかったぜ……龍斗……。」

と景色が完全に消え……辺りは暗闇に包まれる……。そこへ……遠くに一人の女性がいた……。

雅紀「リインフォース……。」

リインフォースだった……。

リインフォース「お前は……主の仲間か……。なぜ……なぜおまえは現実を生きようとするんだ……。? 夢の中なら家族や友とも永遠にいれたはずだ……。」

とリインフォースは涙目で言う……。

雅紀「リインフォース……おまえ……俺の過去を……知ったのか……?」

リインフォース「お前が蒐集された時……頭の中にお前の過去が見えた……。あんなに悲しい思いをして……。なぜ……。」

雅紀『簡単な話だ……。夢は逃げるための場所ではない……。そんなことをしたら……。逃げたも同然だ……。それに……。』

リインフォース「それに……。？」

雅紀『なにより……。俺は……。お前を救う……。はやてが笑顔でいてくれるためにも……。そして……。お前をこんな生きた監獄から……。出してやるためにもなっ！』

とデイカオスはリインフォースに近づくと……

バチィッ！

雅紀『うぐっ！』

見えない障壁で近づけない……

リインフォース「諦めてくれ……。私は……。助からないのだ……。……」

雅紀『そんなこと言うんじゃないやねええええっ！！』

リインフォース「！！」

デイカオスの怒鳴りにリインフォースはビクツとする……

雅紀『リインフォース！諦めんなッ！！いちいち自分は助からないなんていうなッ！俺が……。俺が……。絶対救ってやるっ！！！！』

とディカオスは障壁を破ろうとする……。その行動にリインフォースは涙を流す……。

リインフォース「おまえは……。なぜ……。そこまでして……」

雅紀「言っただろうっ!! はやてが笑顔でいてほしいのと……。此処から出して、救うためだっとなッ!! それに……。もう……。二度と自分は助からない何て言うんじゃないかねぞっ!! もしそんなこと言ったらゆるさねえからなっ!!!!」

リインフォース「……。お前は……」

リインフォースは感極まって溜めた涙を流す……。

雅紀「絶対え……。絶対え助けてやるっ!!!! うおおおおおとおおおっ!!!!」

とディカオスが必至で障壁を破っているその時……

雅紀「これは……!?!」

カードが出現する……。それを見たディカオスは……

雅紀「コレにかけるしかねっ!! 行くぞっ!!!!」

とカードをベルトに入れる……

「アタックライド……」

と音声が鳴り瞬間・・・黒い空間が二人を包む・・・。

なのはの方は・・・

『グッ！グウウウウウッ！！！！』

突然防衛プログラムが苦しみ出す……

ギルド『ムッ！どうしたのだ……！防衛プログラムよっ！？』

とギルドはこの事態を予想してなかったようで、驚いた……途端、
防衛プログラムの背中にひびが入ってきた……。

なのは「一体……何が始まるのっ！？」

フェイト「また……進化するんじゃない」

はやて「そうになったら最悪や……。」

シグナム「今のままでも手ごわいというのに……。」

ヴィータ「どうするんだよっ！！」

と言っている内に防衛プログラムの背中が割れ……中から何かが飛
び出してくる……

なのは「にゃっ！？あ、アレは……！？」

はやて「……あの……騎士甲府……まさか……！？」

と言いつつ……その姿は……

．．．．．漆黒の翼とバリアジャケットを身にまとった．．．

．．．．．少年だった．．．．．

第38話（後書き）

さて……いよいよ防衛プログラムとの戦い……クライマックスですっ！！

龍斗「久々の登場……龍斗だっ！！」

誰！？

龍斗「酷くないっ！？」

冗談だ……それにしてもホントに久しぶりだなあ……。

龍斗「まあな……。」

ふむ……さて……次回は……防衛プログラムとの最終決戦だっ！！

龍斗「楽しみにしてろよっ！！」

第39話

防衛プログラムから一人の少年が現れた……。その少年は……

雅紀「ふう……なんとか抜け出せたなあ……。」

他でもない雅紀だった……。

リインフォース『ど、どうなっているのだ……？普通のユニゾンとは……なにかが違う……。ホントに一つになっているような感じで……温かい……。』

その雅紀の中から声が聞こえる……リインフォースだ……。

リインフォース『．．．それにしても．．．お前のあの方法には．
・驚いたぞ．．．?』

とリインフォースが言う．．．あの方法とは．．．

空間内．．．

雅紀『コレにかけるしかねっ!行くぞっ!!--!』

とディカオスはカードをベルトに入れる・・・。

『アタックライド・ユニゾン・インツ！リインフォースウツ！！』

と黒い空間が二人を包む……。その時にリインフォースを縛っていた障壁が壊れていった……。そしてディカオスとリインフォースはユニゾンし、上を破壊して出た……。

雅紀『まあ……あれはいわゆる駆けだつたがな……。強制的にユニゾンすれば……。障壁も壊れるんじゃないかと思つたんで……。そんなことより……。』

と雅紀は防衛プログラムの方を見る……。

雅紀「奴を倒してからだな……。」

と言っていると……

ギルド『おのれっ！よくも私のリインフォースをつ……こうなれば……。』

と小型マシンの上に魔法陣が出現……。そこからギルドがでくる……

ギルド「防衛プログラムよっ！私を蒐集しろっ！……！！！」

と両手を広げてギルドは防衛プログラムに言う……。防衛プログラムは触手を伸ばし、ギルドを捕まえ……。蒐集をする……

ギルド「ぐあああああっ……！！！」

とギルドは蒐集される……。と……。防衛プログラムに体が徐々に変形していき……。それは人へと変わっていく……。そして……。防衛プログラムの顔がギルドの顔に変わった……。

ギルド「リインフォースは私のもだっ……！よこせエエエエエエエエエエエエツ……！！！」

と咆哮する・・・。

雅紀「もはや人をやめやがったか・・・。」

リインフォース「哀れだな・・・。」

と雅紀は身構える・・・そして・・・

ギルド「リインフォースウウウウウツ!!!!!!!!!!」

とギルドは接近する・・・。

雅紀「ハアツ!!」

ギルド「ガアアアアアツ!!!!!!!!!!」

互い激しいぶつかり合いをする・・・。

ギルド「グオオオオオオツ!!!!!!!!!!クラエエエエエエツ!!!!!!!!!!」

とギルドは魔力弾を放つ・・・。

雅紀「リインフォース!!」

リインフォース「わかったっ!闇に染まれっ!」

雅紀・リインフォース「ブラッディダガーッ!!!!!!!!!!」

と雅紀はリインフォースの力でブラッディダガーを放つ・・・それは以前よりも数倍の数だ・・・。

ギルド「なにっ！？ガアアアアアアッ！！！！」

ブラッディダガーはギルドが放った魔力弾を破壊し・・・ギルドに浴びせる・・・。

ギルド「こうなれば・・・クロックアップだアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

とギルドはクロックアップをして雅紀に接近し打撃を与える・・・。

雅紀「くっ！どうすれば・・・」

リインフォース「クロックアップっ！！」

とリインフォースがクロックアップを発動する・・・これで同じ速さとなる・・・。

雅紀「リインフォース！？おまえ・・・何でこんなことが・・・」

リインフォース「ギルドは・・・あのワームと呼ばれる異形達を蒐集した・・・だから私もクロックアップをができるのだ・・・」

雅紀「そういえば・・・」

と雅紀はリインフォースと話しながら・・・全力のパンチやキックをギルドに浴びせる・・・。

ギルド「グウウウウウツッ！！！！こうなったら……。」

とギルドは上空高く飛ぶ……。

ギルド「これでも喰らえエエツッ！！ダークネス・バスターー
ーッ！！！！！！」

と黒い砲撃を放つ……。

雅紀「リインフォースっ！あれもできるなっ！」

リインフォース「あぁっ！！」

と雅紀は右手に魔力を集中させる……。

雅紀・リインフォース「ダークネス・バスターー……ッ！！
！！！！」

とギルドより大きいダークネス・バスターを放つ……。そしてギル
ドが放ったダークネス・バスターを破壊する……。

ギルド「なっ！！！！グアアアア！！！！」

とギルドはダークネス・バスターにのまれ……。ボロボロになる……。

ギルド「グウウウウウツッ！！！！なぜだっ！！私は防衛プログ
ラムの力を使っているのっ！！」

雅紀「簡単なことだ……。」

リンフォース「信じあう心・・・それが、貴様が唯一持っているものだ・・・。」

と二人は言う・・・その言葉にギルドは激怒した・・・。

ギルド「ふざけるなっ！そんなもので勝てないだとおツ！ふざけるなあアアアアアアアアツ！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

とギルドは魔力を解放して・・・巨大な魔力弾を作り上げる・・・。

ギルド「私は最強・・・！無敵の存在なのだっ！！必ず・・・リンフォースを再びこの手にイイイイイイイイイツ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

と逆上している・・・。

雅紀「見せてやるよ・・・。信じあう心が・・・どれほどすごいのか・・・。」

リンフォース「その無敵の存在よりも凄いのかをっ！！！！」

と雅紀は右手を上にあげ・・・魔力を込める・・・。

雅紀「貴様の魂・・・。」

リンフォース「これにて終焉だ・・・。」

と呟く・・・。

ギルド「私はっ！！無敵なんだああああああアツ！！！！！！！！！！」

とギルドは特大の砲撃を放つ・・・。

雅紀「響けっ！」

リインフォース『終焉の笛っ！！』

雅紀・リインフォース「『ラグナロクッ！！』」

と目の前に黒い魔法陣がでてくる・・・そして・・・

雅紀・リインフォース「『ブレイカーーーーーーッ！！！！』」

と魔法陣から特大の砲撃が放たれる・・・。そして・・・

ゴオオオオオオオオ！！！！

とギルドが放つ砲撃とぶつかり合い・・・周囲が衝撃波で吹き飛んでいく・・・。そして・・・

ドオオオオオオオンッ！！！！

とギルドの砲撃を打ち負かし、ギルドめがけて突き進む・・・

リインフォース『これで・・・』

雅紀「終わりだああああああアツ！！！！！！！！！！」

と叫ぶ・・・そして・・・

ギルド「ぎゃあああああああああああああああああああああ
あつ!!!!!!!!!!!!!!」

ギルドは断末魔を上げながら・・・消えていく・・・

ギルド「私は・・・無敵の・・・存在・・・なんだあ
・・・」

とギルドは完全に消えた・・・

雅紀「この世に無敵なんてないんだよ・・・」

リインフォース「いつかは・・・それを超えるものが現れる・・・」

と二人は呟き・・・五人のもとに向かう・・・

なのは「雅紀くん・・・」

フェイト「雅紀・・・」

はやて「雅紀君・・・」

と三人は涙を流し抱きつこうとする・・・

雅紀「ちょ、ちょっと待てっ!!はやて・・・ちゃんと・・・
救ったぞ・・・」

と雅紀はユニゾンを解き……リインフォースを目の前に立たせる……

リインフォース「主……。」

はやて「リインフォース……！」

と二人は見合い……そして抱き合う……

はやて「リインフォースっ……！」

リインフォース「主……。」

と二人は泣きあい……再開を喜んだ……。

第39話（後書き）

さて……とうとうリインフォースとはやては再会できたな……。

雅紀「ああ……。」

さて……次回は……すいませんが……考え中です……
。しかしっ！しばらくりりなのの世界にいるつもりです……

雅紀「それではっ……！」

第40話

現在……此処は管理局……

？「うん……体には異常はないわ。」

と一人の女性がリインフォースを診察していた……

リインフォース「すまない……「シャル」……」

とリインフォースは言う……実はこの女性……ヴォルケンリッ
ターの一人、湖の騎士シャルなのだ……。

シャル「本当に……生きていたのね……リインフォース……」

とシャマルは涙目になる……。

リインフォース「まあ……正確的に言えば……蘇生された……
と言う方がいいのだろう……。」

シャマル「フフフフ……こうしてリインフォースに会えたから……
今日はパーティーでもやりましょうか……。」

リインフォース「別にそんなことはしなくても……。」

シャマル「それにしても……不思議な能力を持っているのね……
あの子……。」

リインフォース「ああ……。リンカ コアもないというのに、私と
ユニゾンをしただけでなく……。私の中にあつた防衛プログラ
ムのバグを完全に浄化した……。全く持つて不思議でならない
……。」

シャマル「でも……。その子のおかげで生きられるのね……。」

リインフォース「ああ……。あいつには、後に礼を言わねばな……
……。」

とリインフォースは穏やかな笑顔で言った……。

なのは「雅紀く〜ん／／」。

その頃・・・雅紀は・・・

フェイト「雅紀〱〱〱」

はやて「雅紀君〱〱〱」

三人に抱きつかれ中です……………。

雅紀「あのさ……………いい加減抱きつくのはもう……………かれこれ数十分はこの状態だぞ……………」

と雅紀は呆れながら言う……………。

なのは「だめなのっ!」

フェイト「雅紀、さんざん私達を心配させたんだから……………」

はやて「それに、あの時止められたんやから、今抱きつかない!」

とさらに力を入れて抱きつく……………。

雅紀「……………痛い……………」

と呟いていると……………

雅紀「!!!」

目の前にオーロラが発生……………

なのは「にゃっ!?!なにっ!?!」

フェイト「敵!？」

はやて「一体なんやつ!？」

と三人は警戒する……。その時オーロラから・勢いよく何かが飛び出してきた……。

?「雅紀~~~~っ!!」

とそれは雅紀に勢いよく抱きつく……。

雅紀「うわっ!……ってこの声は……アリスっ!!!？」

と雅紀はその抱きついている者を見ると……アリスだった……。

アリス「雅紀……心配したんだよ……先生から電話があつて……雅紀が行方不明になつたつて聞いたから……」

と涙目で言ってくる……。

雅紀「あ……ごめんね……俺も何やらもうわからずこの世界に来てしまったんだ……」

アリス「もう……!……こうなつたら……おしおきだね……。(ボソ)」

とアリスが何やら呟く……と……

ゾクゾクッ!!

雅紀「な、なんだ．．．いきなり寒気が．．．それに殺気を感じ
るんだが．．．。」

と雅紀は後ろを振り返ると．．．三人の修羅．．．もとい魔
導師がいた．．．。

なのは「雅紀くん．．．その子．．．誰．．．？」

フェイト「雅紀．．．その子とは．．．どついつ関係．．．？」

はやて「ちよつと．．．お話しよか．．．？」

と光のない瞳をしながら．．．物凄い殺気で言う．．．。

雅紀「えっ!? あ、あの〜それは．．．。」

と戸惑っていると．．．

アリス「私の名前はアリス! 雅紀の彼女だよっ!」

とアリスが自慢げに言った．．．。その一言に．．．三人は硬直す
る．．．。そして．．．

なのは「フェイト・はやて」「か、彼女〜〜つ! ! ! ! ! ?
??」「」

と驚き叫ぶ．．．。

なのは「雅紀くんっ! 彼女がいたのっ! ! ?」

フェイト「雅紀っ！どうして言わなかったのっ！！？」

はやて「雅紀君っ！彼女おったんかつ！！？」

と詰め寄る・・・

アリス「えへへへ・・・で・・・雅紀・・・私がオーロラから出る前にこの子達に抱きつかれていたのは・・・なぜ・・・？」

と笑顔から・・・光のない瞳をして無表情で言うてくる・・・。

雅紀「えっ！？い、いや・・・その・・・」

と雅紀はアリスの目におびえる・・・。

なのは「私は、雅紀くんの事が好きだから抱きついていたのっ！！」

フェイト「そうだよっ！！」

はやて「同じくやっ！！」

と三人は言う・・・。

アリス「ふん・・・でも・・・これは・・・してないよねっ！！」

とアリスは両手を雅紀の頬に添えそして・・・

アリス「んっ……／／／」

雅紀「んんっ!?!?!／／／」

と唇を重ねた……。その光景に三人は硬直する……。

アリス「ん……んん……ぷはぁ……。フッフ、どうかな……?
私達はこういう仲なんだよ……?」

と唇を離して言う……。硬直していたなのはとフェイトは怒った。
……。

なのは「そんなの……。なのはだってしたもんっ!」

となのはは雅紀をアリスから引きはがし……。そして……

なのは「んっ!／／／」

雅紀「んんんっ!?!?!?!／／／」

キスをした……。

アリス「えっ!?!」

これにアリスは驚く……。

なのは「……ふはぁ……。フッフフ……。気持ちいい……。
／／／」

となのはは満面の笑みで言う……。

フェイト「なのはだけじゃないっ！私もしたんだよっ！！！」

と今度はフェイトが唇を重ねてきた・・・。

フェイト「んん・・・んふう・・・／／／」

雅紀「んんんんんっ！！！！？／／／」

アリス「んなっ！！！！？」

とコレにもアリスは驚く・・・

フェイト「・・・ふゆう・・・ごめんね雅紀・・・／／／」

雅紀「あああああああうううううう・・・／／／」

はやて「なのはちゃんもフェイトちゃんもやったんかっ！？私だけしてないっ！！！」

と復活したはやては悔しがる・・・。

アリス「・・・雅紀い・・・何時の間にこんな仲になったの
おっ！！！！？」

とアリスの怒りは爆発寸前だった・・・。

雅紀「きゅ～～～～～～～～・・・／／／」

雅紀は三人の美少女にキスされたのが原因で頭から煙を出していた・

。。。

アリス「……………雅紀い……………」

なのは「どうなのっ！私達はこれぐらい雅紀くんの事が好きなんだよっ！！／／／」

フェイト「うんっ！／／／」

はやて「私もそれぐらい好きやつ！！／／／」

と三人は言う……………。それを聞いたアリスは怒った……………。

アリス「ムウウウウウウウウっ！！！！じゃあ勝負しよっ！！どっちが雅紀の傍にいるにふさわしいかどうかっ！！！！」

とアリスはデイタークドライバーを出して叫ぶ……………。

なのは「その勝負っ！乗ったっ！！」

フェイト「私もッ！！」

はやて「こうなったら何が何でも勝つわっ！！」

と三人もデバイスを出す……………。その時……………

リインフォース「あ、主……………。此処にいました……………ってどうしたんですかっ！？？デバイスを起動してっ！？？」

とリインフォースが現れ……………。リインフォースは今の現状に驚く……………

はやて「リインフォースっ！丁度よかったわっ！！ユニゾンするよっ！！」

リインフォース「っていきなり何を言い出すのですかっ！！？」

とはやてのいきなりの言葉に驚く……。

はやて「さあはよいくでっ！！」

リインフォース「い、いやっ！だから……いきなりどうしてそんなことにつ！！？」

はやて「管理者権限……発動や……はよう……ユニゾンしてえな……。」

リインフォース「ヒッ！わ、わかりましたっ！！なんだかわかりませんが……行きますっ！！」

とはやての周囲の温度を低くさせるほどの言葉にリインフォースは怖がる……。

はやて・リインフォース「ユニゾン・インッ！！」

とはやてとリインフォースはユニゾンし……はやての髪は薄い黄色のような色に瞳は青空のような瞳に変わった……。

アリス「準備はできたね……？いくよ……。」

なのは「うんっ!」

フェイト「此处じゃ無理だから、トレーニングルームに行くよっ!」

はやて「そこなら派手に暴れるし、本気も出せるよ...!」

アリス「行くよ...っ!」

と四人は部屋を後にした...

雅紀「きゅ~~~~」

部屋には顔を真っ赤にして気絶していた雅紀がいたのだった...

第40話（後書き）

さて・・・なんだか波乱の予感だっ!!!

雅紀「女の子の怒りは怖い・・・。」

元の原因はお前にあるんだ・・・頑張れっ!

雅紀「うわあああああああああつ!!!!」

さて・・・あちらで騒いでいるバカはほっといて・・・次回は・・・アリスVSなのは・フェイト・はやて・・・そしてコレに巻き込まれたリインフォースとのバトルだあッ!!お楽しみにつ!!!!

雅紀「もういやあああああああああああつ!!!!!!!!!!」

第41話（前書き）

さてと・・・今回の話は、雅紀争奪戦です。

雅紀「なぜだ・・・なぜこんなことに・・・？」

お前が原因・・・アリスがいるってのに五人の女の子にフラグを立てたんだからな・・・。

雅紀「勘弁してくれ～～～～・・・」

では始まります・・・。

第41話

此処……トレーニングルームは……今……

なのは「……………」

フェイト「……………」

はやて「……………」

アリス「……………」

四人の少女のせいで修羅場と化していた……。

アリス「雅紀は……絶対に渡さないよ……。」

なのは「それはごっちの台詞なのっ!」

フェイト「雅紀は、私達のものだ……。」

はやて「いくら彼女さんでも……!」

と物凄い殺気を出しながら言う……。

アリス「少しはハンデを与えてあげる……。三人で掛かってきなさい……。」

とアリスは余裕の笑みをする……

なのは「いいのかな……?」

フェイト「私達、それなりに強いよ……?」

はやて「私達を甘く見たら、火傷するで……?」

とデバイスを機動し……バリアジャケットを装着する……。

アリス「火傷ね……。でも、貴方達も火傷をしないようにね……?」

とカードをディダークドライバーにセットする……

『カメンライド・ディダークツ!』

ディダークに変身する……。

なのは「アリスちゃんだったんだ……。ディダークさんて……。」

アリス『驚いたかしら?でも、もっと、もっと驚かせてあげるから

ね・・・？
』

とデイダークは余裕を崩さない・・・。

フェイト「じゃあ・・・。」

はやて「試合開始やつ！！！」

となのはとフェイトは接近する・・・。

なのは「アクセルシューターアア・・・シューッ！！！」

となのははデイダークの足元にアクセルシューターを放ち土煙を立ち込めらす・・・。その時・・・

フェイト「ハアアアアアアッ！！！！！」

とバルディッシュを大剣に変えたフェイトが突っ込んでくる・・・。

アリス「フッ！」

とデイダークドライバーで防ぐ・・・。

アリス「なかなかのパワーだね・・・でも近接格闘に優れている私には・・・。」

デイダークは力を入れる・・・そして・・・

アリス「勝てないよっ！！！」

と言い放ち押し返す……。

フェイト「きゃっ!?!」

コレに驚いたフェイトは吹っ飛ばされた……

なのは「フェイトちゃん?!?!」

となのははフェイトの方に向かう……。

フェイト「私は大丈夫……それよりあの子、近接格闘が得意だから……」

なのは「遠距離で攻撃すればいい……てことだね……」

と互い頷き、距離を置く……そして……

なのは「デイバイイン……バスター……!」

フェイト「トライデントオオ……スマッシュ……!」

と桃と金の砲撃が向かってきた……。

アリス「近接では勝てないから遠距離で……か……。でもね……」

とカードをデイダークドライバーに入れる……。

『アタックライド・スラッシュ!』

アリス『遠距離でも私には勝てないよっ!!』

とエネルギーがたまったデイダークドライバーで砲撃を斬り裂いた。
。。。

なのは「えっ!?!」

フェイト「ウソっ!?!」

とこれもまた驚く二人。。。。

アリス『フフフフ。。。。驚いたあ。。。。?少しはダメージを与えてみなよ。。。。?』

とデイダークは余裕の態度を取る。。。。その時。。。。

はやて「二人とも下がってっ!」

と詠唱を完了させたはやてが言い、二人は下がる。。。。

はやて「ミストラルティンツ!!」

と槍を放つ。。。。

アリス『危ない技を放つね。。。。ここは。。。。コレなんかどうかな?』

とカードを出し、ドライバーに入れる。。。。

『アタックライド・バリアアッ!』

と目の前に障壁が発生し、ミストラルティンを防いだ……。

はやて「なっ!? あんな技まで持ってんのっ!?」

とはやてもまた驚く……。

アリス『あははっ! 差は歴然……あきらめなよお……?』

と言った……コレに三人はカチンッ! ときた……。

なのは「いくら強くてもッ! 諦めないのっ!!」

フェイト「私達は……雅紀が好きなんだっ!」

はやて「愛の力はすごいでっ!!」

と三人は魔力を高める……。

なのは「エクシードッ! ドライブッ!!」

フェイト「オーバードライブッ! 真・ソニックフォームッ!!」

となのははエクセリオンモードを……フェイトは真・ソニックフォームを発動する……。

はやて「いくでっ! リンフォースっ!! 本気の見せようっ!!」

リンフォース『はいっ! 主!!』

と言う……。

アリス『へえ……エクシードに真・ソニックフォームか……。本気の見せてくれるんだね……。』

と呟いていると……

なのは「エクセリオオオン……バスター……ッ!!」

となのはは砲撃を放つ……

アリス『よっよっ!!』

とディダークは避ける……が……

フェイト「遅いよっ!!」

と一気に背後に回りこんだフェイトが言う……。

アリス『なっ!!?何時の間につ!!!?!?』

と驚いていると……

フェイト「はあああああっ!!!」

アリス『ぐあっ!!!』

とフェイトに一撃を食らわされ……地面にたたき落とされる……

はやて「リインフォース、行くよっ！」

リインフォース「はい……！」

はやて・リインフォース「貫けっ！闇の一撃っ！！ダークネス・バスターーッ！！！」

とはやては砲撃を放ちダイダークに直撃させる……。

アリス「がああああっ！！！」

ダイダークの周囲は煙で包まれる……

なのは「やった……かな……？」

フェイト「でも、彼女はこれぐらいじゃやられないと思う……。」

はやて「私もフェイトちゃんと同じくや……。」

リインフォース「反応はロストとしていません……。」

と話し合っていると……。

アリス「あゝあ……痛いなあ……。」

とその場にダイダークが現れる……。体には所々火花が走っている……。

なのは「あの攻撃で……ダメージは大きいのに……。」

フェイト「なんて頑丈なの・・・？」

と驚く・・・。

アリス『さて・・・今からそっちに向かうからねえ・・・。』

と言ってきた・・・。

なのは「向かうって・・・。」

はやて「空を飛べる武装はなさそうだし・・・。」

リインフォース『ですが主・・・油断をなさらずに・・・。』

と言っていると・・・。

『アタックライド・ウイングッ！』

と音声が響く・・・すると、ディダークの肩のアーモアの翼が展開し・・・飛ぶ・・・。

アリス『フッフ・・・行くよおっ！！』

と叫ぶと高速で移動する・・・

フェイト「速いっ!?!？」

とフェイトは驚きながらも立ち向かう・・・そして・・・激しいぶつかり合いを繰り返す・・・。

アリス「その姿・・・貴方の切り札ね・・・そこまでして雅紀を手に入れたいの・・・？」

フェイト「・・・私は・・・笑顔で居る雅紀が・・・好きになってきた・・・。雅紀の過去を知って・・・私はどんなことになっても支えるって決めただっ！」

とフェイト叫びさらに速度を上げる・・・

フェイト「私は・・・雅紀が・・・大好きなんだっ！！」

そして思いのこもった一撃を放つ・・・。がそれはダイダークに受け止められる・・・

アリス「そう・・・。私もそうだよ・・・。私は・・・雅紀と一緒にいて・・・次第に好きになってきた・・・。いつも一緒にいると・・・心が安らいでいく・・・。笑顔で居て・・・そして誰よりも優しい雅紀を・・・私は愛しているっ！」

とダイダークは自ら雅紀が好きになったことを話し・・・そして一気にフェイトを斬る・・・

フェイト「しまっ・・・」

なのは「エクセリオン・・・バスターーーーーッ！！！！」

と二人の間に砲撃が通った・・・。

なのは「フェイトちゃんっ！大丈夫っ！？」

となのはが来た……。

アリス『なかなかね……。このままじゃ……。終わらなさそうだし……。トドメ……。いくよ?』

とディダークは金のカードを出す……

『ファイナルアタックライド・デイ・デイ・デイ・ディダークッ!』

と発すると……。ディダークドライバーの刃先が黒くなっていき次第に大きくなっていく……。

なのは「私達も……。」

フェイト「全力で……。」

はやて「撃ちこむわっ!!!」

と三人も魔力を溜め、必殺技を放つ……

なのは「全力全開っ!!!スタアアライトオオ……。」

フェイト「疾風迅雷っ!!!プラズマザンバアアアア……。」

はやて「響けっ!終焉の笛……。ラグナロクッ!!!」

なのは「フェイト・はやて」「ブレイカー……ッ!!!!!!」

と三人の特大の砲撃がデイダークに迫る・

アリス『ディメンションデスサイズツ!!!!!!』

とデイダークは砲撃を斬り裂こうとする……そして……

ドゴオオオオオツ!!!!!!

互いの技のぶつかり合いで爆発する……。そして……衝撃で
辺りは粉々になっていた……。

なのは「……はあ……はあ……はあ……」

フェイト「くう……。」「

はやて「はあ……はあ……はあ……」

リインフォース「うっ……」

四人は倒れていた……リインフォースはユニゾンを解いて横たわる・
……そして……

アリス『私の勝ちだね……。』

この勝負の勝者は……デイダークだった……。

アリス『けど……私も……限界……かな……?』

と倒れてしまった……。

第41話（後書き）

さて・・・とんでもなかったな・・・女の戦い・・・。

雅紀「ブルブルブルブル・・・。」

怖がっているな・・・さて次回は・・・アリスと三人のお話編です・・・。それではっ！

第42話

なのは「ん……んん……。」

なのはは重い瞼を開ける……

なのは「此処は……医務室……かな……？」

と体を起こしながら言う……。

フェイト「あつ、なのは……。」

はやて「目……覚めたんやね……。」

隣にはフェイトとはやてがいた……。

なのは「フェイトちゃん、はやてちゃん……。」

フェイト「私達もついさつき起きたんだ……。」

はやて「私達……いつの間にか寝てたみたいなんよ……。」

なのは「そっか……。」

そして……しばらく沈黙が続いた……。

なのは「……負けちゃったんだね……私達……。」

フェイト「そう……だね……。」

はやて「私達の本気・・・・・・・・通用せえへんかった・・・・・・・・。」

と静かに悔しがる・・・・・・・・とそこへ・・・・・・・・

？「貴方達の本気・・・・・・・・少しは通じたわよ・・・？」

と声がしてきた・・・・・・・・三人は声がした方を向くと・・・・・・・・

なのは「アリスちゃん・・・・・・・・」

アリスが立っていた・・・・・・・・。

アリス「私もあの後倒れてね・・・・・・・・。目が覚めたら此処で寝てた
って訳・・・・・・・・。」

なのは「そうなんだ・・・・・・・・。」

とまた沈黙が続く・・・・・・・・

アリス「悔しかった・・・・・・・・？雅紀の傍にいたことができなくなったの
が・・・・・・・・。」

なのは「・・・・・・・・悔しいよ・・・・・・・・。」

フェイト「私も・・・・・・・・。」

はやて「私も・・・・・・・・。」

と返事をする・・・・・・・・

アリス「貴方達の・・・気持ちはわかったわ・・・なのはちゃんやフェイトちゃんは切り札を出すぐらいだものね・・・。よっばど勝ちたかつたのよね・・・？」

と静かに言う・・・。

なのは「あの・・・アリスちゃんは・・・雅紀くんといつも一緒にいたんだよね・・・？雅紀くんと何時出会ったの・・・？」

となのはは遠慮がちで聞く・・・。

アリス「・・・雅紀の世界が滅んだ日・・・かな・・・」

なのは「フェイトはやて・・・！！！！！！」

アリス「最初の頃は・・・とてもかわいそうで・・・寂しそうな子・・・って思ったの・・・。私が傍にいて・・・雅紀を元気づけようとしていたけど・・・逆に私が元気づけられてばかりだったかな・・・。私は雅紀のああいう性格に・・・惚れちゃったのかも・・・」

とアリスは懐かしく思う・・・。

アリス「なのはちゃんとはやてちゃんは・・・？フェイトちゃんの方は・・・戦いの最中に聞いたから・・・」

と今度はアリスが聞いてくる・・・。

なのは「私は・・・車にぶつかりそうになった時に助けても

らったのが・・・理由かな・・・。あの時は・・・私は・・・雅紀くんの笑顔に見惚れちゃったから・・・。自分が今抱っこされてい
ることもわからなかった・・・。そして・・・雅紀くんがディカオ
スさんて事を知った時は驚いた・・・。雅紀くんの過去が・・・
どれだけ辛いものなのか・・・知って、一緒に背負う覚悟も・・・そ
の時できてて・・・。ハウッ！／／／」

といろいろと思い出し過ぎて顔が真っ赤になりショートするのは
・・・。

アリス「あらら・・・。はやてちゃんは・・・？」

と今度ははやてが言う・・・

はやて「私は・・・いつも・・・どんな時でも笑顔でいる雅紀君が
好きになってもうた・・・。あ、あんなに・・・純粋な笑顔やったか
ら・・・顔が熱くなって・・・。ハウ・・・／／／。・・・で・・・
そんな雅紀君が私なんかよりも辛い思いをしてきたって知った時は
・・・守りたいって思ったんよ・・・。私が支えようと思って・・・
その時から・・・いや・・・それよりも前から好きになってもうたの
かも・・・／／／」

とはやては恥ずかしながらに言う・・・。

アリス「ふくん・・・そうなんだ・・・。（いつの間にか・・・
罪な男になっちゃたんだね・・・雅紀・・・）」

とアリスは思う・・・

はやて「でも・・・その望み・・・というか・・・雅紀君を支え

ること・・・出来なくなってもうた・・・。アリスちゃんの方が・・・
強いんやから・・・。」

と顔を傾けながらはやては言う・・・。なのはもフェイトもそうだ。
・・・。

アリス「・・・貴方達は強いわよ・・・？あの時の一撃は流石に私
もやばいって思っちゃったんだから・・・。それに・・・貴方
達は・・・雅紀の傍にいてもいいわよ・・・？」

とアリスが言う・・・その一言に三人は驚く・・・

なのは「えっ！？あ、アリスちゃんもう一回言っつてっ！！」

アリス「だから・・・貴方達は雅紀の傍にいてもいいわよ・・・て言
ったのよ・・・？」

フェイト「で、でも・・・私達はあの戦いで負けて・・・。」

アリス「ああ・・・アレはね・・・貴方達がどれだけ雅紀の事が好き
かって闘って知ってみたかったのよ・・・。貴方達の思いが一撃、
一撃にこもってから・・・雅紀の事が好きっていうの・・・十分に知
ったわ・・・。それに・・・。」

はやて「それに・・・？」

アリス「一回でいいから・・・貴方達と闘ってみたかったのよ・・・
。はは・・・面白かったな・・・。」

なのは「はあ・・・。」

となのははため息を吐いた……。

アリス「まあ……兎も角……貴方達は雅紀の傍にいてもいい
てこと……！好きなんでしょ……？雅紀の事が……？？」

と微笑みながら聞いてみると……

なのは「うん……／＼／」

フェイト「／＼／」

はやて「好きや……／＼／」

と三人は頬を染めて言う……

アリス「フフフ……雅紀もこんなに幸せ者になっただね……
。彼女の私も嬉しいぐらい……。」

と嬉しそうに言う……

アリス「さて……私はそろそろ行くわ……。貴方達はゆっくりと
休んでいなさいね……？」

なのは「うん。」

フェイト「そうします……。」

はやて「ホンマに疲れたわ……。」

と呟いていると・・・

アリス「あっ・・・それと・・・それ見て・・・頑張ってるね・・・」

とアリスは立ち去った・・・。

なのは「それって・・・コレの事かな・・・？」

となのはは傍に置いてあった紙を見ると・・・顔を真っ青にした・・・

・

フェイト「どうしたの・・・？なの・・・は・・・」

はやて「一体何が書かれてん・・・の・・・」

フェイトとはやてはなのはが持っている紙を見てみると・・・同じく顔を真っ青にした・・・内容は・・・

・・・請求費・・・

トレーニングルームの修理代その他もろもろ・・・

と書かれていた・・・総額を見てみると結構高い様子・・・

なのは「にゃーーーーーっ!!!??」

フェイト「えーーーーーっ!!!??」

はやて「ウソやわーーーーーっ!!!??」

とこの日・・・三人少女の悲鳴が聞こえたそうなの・・・

一方アリスは・・・

アリス「あら・・・驚いているみたいね・・・頑張っ
てね・・・三人とも・・・。」

と合唱していると・・・

雅紀「あ、アリス・・・起きたんだね・・・大丈夫か・・・？体・・・？」

そこに雅紀が現れた・・・。

アリス「あ、雅紀・・・うん・・・見ての通り大丈夫よ・・・。久々に闘って、よかったよ・・・体が鈍っていたから・・・。」

雅紀「あ、あははは・・・。」

と雅紀は乾いた笑い声を発する・・・

アリス「それより・・・雅紀なんだよね・・・？私達を医務室に運んだの・・・？」

と言ってきた・・・

雅紀「えっ！？い、いや・・・なんのことかな・・・。」

アリス「とぼけたって無駄だよ・・・私の鼻は敏感だから・・・。気絶していながらも雅紀のにおいを感じ取れるんだよ・・・？」

雅紀「・・・はいそうです・・・すみません・・・。」

と雅紀は謝る・・・

アリス「フフ・・・なんで謝るの・・・？」

雅紀「え．．．いや．．．謝らないといけないんじゃないかな．．．
て思ってたき．．．。」

アリス「別に謝らなくてもいいよ．．．？それと．．．」

と近づき．．．

アリス「．．．ありがとね．．．私達をを運んでくれて．．．。」

と呟き唇を重ねる．．．。

雅紀「．．．あ．．．その．．．どういたしまして．．．？」

アリス「フフフ．．．なんで疑問形なの．．．？．．．それと．．．しばらく．．．リリなのの世界に留まるよ．．．雅紀？」

雅紀「え．．．どうして．．．？」

アリス「雅紀は無茶ばかりしているから．．．体を休めるにはちょうどいいわ．．．。それに．．．彼女達は．．．雅紀の事好きなんだから．．．しばらくいてあげてもいいんじゃない．．．？」

と言っ．．．

雅紀「．．．いいのかな．．．？別に．．．」

アリス「別にいいよ．．．私は．．．雅紀の好きなようにすればいい．．．て思っているし．．．。」

雅紀「．．．わかった．．．そうする．．．。」

アリス「フフフフ……それと……もう一回……良い……
／／／？」

とアリスは頬を染めて唇に触りながら言う……。

雅紀「……うん……／／／」

と雅紀は言い……二人は顔を近づけそして……

アリス「ん……／／／」

雅紀「……／／／」

唇を重ねたのだった……。

第42話（後書き）

さて……今回もまた駄文になってしまった……ハア……

雅紀「落ち込むなつてのっ！全く……はやく次回のお知らせを言えッ！」

ああ……。今回は、雅紀達の目の前になのはとフェイトとはやてに似た三人が現れるっ！その三人はなんと……闇の書の……

雅紀「続きは次回で……それではっ！！」

第43話(前書き)

さてと・・・今回の話は・・・雅紀の前に三人の少女・・・ヒ
ントは闇の・・・

雅紀「始まりますっ!!!!」

第43話

あれから数日……

……夜中………高町家………

なのは「ん……雅紀くん……大好きなの……。」

と枕に抱きついて寝言を言うのは……夢の中でも雅紀がでてくるとは……驚き……と……

なのは「ふゆ……雅紀く………うっ!」

と可愛い寝顔が一変・・・苦しい顔に代わる・・・。

なのは「うっ！く・・・くううううううっ！」

となのは胸を抑えて苦しむ・・・

なのは「ううううううっ！あ、熱いの〜!!」

となのははパジャマの胸辺りのボタンを外す・・・見てみるとなのは体の色が紅葉に染まっていた・・・胸のあたりも・・・あゝ誘惑しているように・・・って頼むから刃物を投げたりしないでくださいっ！

そして・・・なのはの胸のあたりから・・・黒い何か飛び出してきた・・・

なのは「ひゃうっ！」

となのはは悲鳴を上げ気絶をする・・・黒い物体は・・・一度なのはを見た後・・・家を出た・・・。

・・・ハラオウン宅・・・

フェイト「ぐっ！ぐあっ！！」

フェイトの方でも同じ現象が起きていた・・・。

フェイト「うっうっ！ああっ！！」

とフェイトの胸のあたりからも黒い何か飛び出し・・・勢いよく外へ出た・・・。

．．．．八神宅．．．．

はやて「あっ！うづうづっ！！」

とはやての方でも同じ現象が起きていた．

ヴィータ「お、おいっ！はやてっ！！どうしたんだよっ！！？」

一緒に寝ていたヴィータははやての異常な症状に驚いた．．．。

はやて「く、苦し．．．．うづうづっ！」

ヴィータ「おいっ！はやて、しつかりしろっ！！（シグナムっ！シヤマルっ！ザフィーラっ！！誰かつ、来てくれよおッ！！）」

と涙目になりながら、ヴィータは念話を送る．．．．そして．．．

シグナム「どうしたっ！ヴィータっ！！？」

シヤマル「はやてちゃんに何かあったのっ！！？」

と慌ててシグナムとシャマル、そして・・・蒼い犬が現れる・・・

？「狼だ・・・。」

これは失礼・・・この狼は・・・ヴォルケンリッターの一人・・・
守護獣のザフィーラです・・・。

ヴィータ「はやてがつ！なんだかわからねえけど、苦しんでんだよ
っ！！シャマルっ！見てくれよっ！！！」

と泣きながらシャマルに言う・・・

シャマル「わかったわっ！見てみましょ・・・っ！！？」

とシャマルははやてを見ると・・・はやての胸のあたりから黒い物
体がでてきた・・・。

シグナム「なんだアレはっ！？」

ザフィーラ「恐らくアレが主を苦しませていたものやもしれんっ・・・
・・・！」

とシグナムはデバイスを起動し・・・ザフィーラは足に防具を身に
つけて警戒する・・・すると・・・

ピュンッ！

と黒い物体は外へ出た・・・

シグナム「待てっ!!」

とシグナム、ザフィーラは外へ出て黒い物体を追いかけたが・・・見失ったようだ・・・。

シグナム「くっ！見失ったか・・・。」

ザフィーラ「兎も角、主の所へ戻ろう・・・。」

と二人は戻った・・・。そこではシャマルがはやくは何かしていたところだ・・・。

シャマル「体には異常はないわ・・・安定している・・・。」

シグナム「よかった・・・。」

ザフィーラ「・・・。」

ヴィータ「はやく・・・。」

と安心する・・・。

シグナム「だが・・・あの黒いのは一体・・・何だったんだ・・・。？」

ザフィーラ「何か・・・良からぬことが起きるやもしれんな・・・。」

とシグナム、ザフィーラは呟いた・・・。

此処は海鳴市から数キロ離れた山奥・
・
・
・

そこには……先ほど、なのは達から出てきた黒い物体が集結していた……。互いを見合い……。そして……

ウニヨ……。ウニヨ……

と黒い物体は形を変えていく……。それは……。人の形にへと……。スタツ……

やがて黒い物体は人の姿をし地面に降り立つ……。月夜が辺りを照らし……。その姿がはつきりと見える……。そいつらは……。女性で……。しかも全裸だった……。！！

？「……………」

一人は黒い短い髪をしており……。発育がいい巨乳を持ち……。静かにしていた……。

？「フアアアアア！！……やっと外に出られたよ……。」

ともう一人は蒼く長い髪をしており……。こちらも巨乳で手を上に伸ばしていると……。その巨乳が震える……。

？「ふんっ！下朗が……。うるさいぞ……。」

ともう一人は首の辺りまでの白い髪をしており……。先端部分だけ黒い髪の毛をしていた……。二人ほどではない貧乳ほどの胸を持って

いる……。

？「ねえ……なんかさ……さっきから……胸がどづの……てのが聞こえるんだけど……。」

？「奇遇だな……我もそうだ……。これを言っている下朗を殺してやるうか……。」

わああああっ！！！すいません、すいませんっ！！許してー！ーっ！！！！！！

？「そう言ってますし……。許してあげては……？」

と静かにしていた一人が呟く……。

？「ふん……。まあいいか。僕には関係ないし……。」

？「貴様にも関係があるだろうが……。そんなことより……。これからどうする……？」

？「決まっているよっ！闘うんだっ！！！」

と一人は蒼い三角形の物を出す……

？「私も……。戦ってみます……。」

ともう一人も蒼紫色の丸い物を取り出す……。

？「貴様等とは今日は奇遇がいい……。我もだ……。この力……。持て余すのには惜しい……。」

と十字型のアクセサリーを取り出す……。

? 「行きます……。」

? 「行くよ〜っ!」

? 「いくぞ……。」

? ? ? ? 「セツト・アップッ!」 「」

と辺りが光に包まれ……夜空に三つの閃光が飛んで行った……。

翌朝……聖洋中……

雅紀「……………三人とも……………大丈夫か…？」

と雅紀は三人を見る……………。

なのは「大丈夫なの……………」

フェイト「ね……………寝不足なだけ……………」

はやて「心配あらへんよ……………」

と三人は言うが……………疲れ切っている様子……………。

雅紀「全然大丈夫そうに見えないぞ……………。なんかあったのか……………？」

なのは「……………なんかね……………夜中に変な事があって……………何か体が抜け出した感覚がするの……………。」

フェイト「実は私も……………」

はやて「私もなんよ……………。昨夜シグナム達が……………私の中から……………」

黒い何かがでてきて・・・それが原因じゃないかって・・・。」

雅紀「黒い何か・・・？それって・・・？」

と言っているとチャイムが鳴った・・・。

雅紀「あ、チャイムだ・・・続きは後で聞くからね・・・。」

とこの時間を普通に過ごしていた・・・。

そして・・・あっという間に放課後・・・。

雅紀「またとばしやがったな……あのダメ作者が……」

お〜い雅紀君……本編ではそれ禁句だからね……。

雅紀「はいはい……。」

とこの日は雅紀は一人で帰っていた……。理由は……

なのは「私達……管理局のお仕事があるから今日は帰れないの。
ごめんね雅紀くん……。」

との事でした……。

雅紀「ま、一人で帰るのもいいがな……。それよりも黒い何かか
……気になるな……。」

とブツブツと呟いていると……

雅紀「ん……？なんだ……流れ星か……？」

目の前にの空に三つの閃光が飛んでいた……。

雅紀「……今夕方だぞ……。それになんか一つ、一つ色が
違うし……。」

と見ていると……流れ星がこっちに向かってきた……。

雅紀「なっ！軌道変えた！？流れ星がかっ！！？」

と驚いていると……流れ星が目の前にドゴーンッ！……と

落ちた……。

雅紀「げほげほ……一体何なんだ……つ!!」

雅紀は流れ星が落ちた方を見ると……そこには……

雅紀「なのは……フェイト……はやて……?」

なのはとフェイトとはやてがそこに立っていた……。

雅紀「……いや……違うな……外見も違うし……何より雰囲気が違う……。」

と警戒していると……

?「貴方ですか?木利野 雅紀……という者は……。」

と言ってきた……。

雅紀「……なぜ俺の名を……。お前たちは一体……」

と返すと……

?「私は……「星光の殲滅者」……。」

?「僕は「雷刃の襲撃者」だよっ!」

?「我の名は……「闇統べる王」だ……。」

とそれぞれ名乗った……。

第43話（後書き）

さていよいよ出てきましたっ！マテリアル三人娘っ！！

雅紀「一体何者なんだよ・・・作者・・・？」

それは後のお楽しみさ・・・さて次回はっ！

雅紀「謎の三人が雅紀に戦いを挑んできた・・・。そいつらは一体何者なのか・・・一体どこから現れたのか・・・。」

気になる方は次回をお楽しみにっ！！！！

第44話

突如として雅紀の目の前に現れた謎の三人。そいつらは、なのは達とそっくりだった。

「星光の殲滅者に、雷刃の襲撃者に、闇統べる王……て何て名前なんだよ。」

「私達はこう言う固有名称なので。」

「僕たちは好きでこの名前を言っているんじゃないやっ！！」

「我は王が入っているから気に行っているがな。」

呆れる雅紀に三人は意見を述べる。

「まあいいが。お前ら、なぜ俺の友達と同じ姿をしているんだ？」

雅紀が警戒して言った途端、星光の殲滅者からとんでもないことが言われる。

星「私達は、高町なのは、フェイト・Ｔ・ハラオウン、八神はやてのそれぞれから生まれてきました。」

「なっ！！？」

これに雅紀は驚く。そしてある結論が出た。

「（と言う事はこの三人が、昨夜なのは達の異変の原因か。）」

そう思い、雅紀はさらに警戒を強めた。

「私達は…元は闇の書の一部でした。」

「っ…」

「彼女…高町なのはが闇の書に蒐集された時、私は彼女の中で眠ってしまいました。」

「僕もそうだよっ！フェイト・Ｔ・ハラオウンが蒐集された時も…僕は彼女の中で眠ってしまったんだっ！」

「我はこいつらとは違い、最初から八神はやての中で眠っていたのだ。」

三人は自らの生まれ、正体を言う。

「…なぜ今になって？」

「先日の…防衛プログラムが暴れ出した時、共鳴して目が覚めた…
と言えばわかりやすいです。」

「…とても闇の書の一部には思えない。」

「そう思いですか。さて、もう話はここまでとし…」

星光の殲滅者は自身のデバイス「ルシフェリオン」雅紀に向け…

「貴方を葬ります。」

そう言ってきた。

「…なぜ俺を？」

「僕たちは彼女達より強いおまえを倒しに来たんだっ…！」

「貴様には悪いが消えてもらっぞ塵芥！」

そう言いながら、二人もデバイスを出す。

「塵芥…？」

「では、先制はもらいます…！」

星光の殲滅者はアクセルシュータと同じ奴を発射した。

「うおっ…！…ちょっと待てっ…！此処じゃ民間人まで巻き添えを食っ
ぞっ…！」

「心配いらぬぞ、我が結界を張った。」

闇統べる王に言われ、見てみると空や建物の色が違っていた。

「さあっ！僕達にやられるー！ーッ！！」

雷刃の襲撃者はデバイスを鎌状にして斬りかかってきた。

「うおっと危ねっ！マジかよ…！！」

「どんどん行きます。プラストファイアーツ！」

今度はデバイスバスターと同じ奴を放ってきた。

「くっ！！」

雅紀はその場から逃げようとするが…

「逃がさないよっ…！！」

目の前に雷刃の襲撃者が現れた。

「早い…！！」

「それえっ…！！」

雷刃の襲撃者は今度は大剣で斬りかかる。

「ちいっ！！」

雅紀はギリギリで避け逃げ結界の外に出ようとするが…

バチバチッ！

「がっ！…な、なぜ…？」

結界は電流が流れていて外には出られなかった。

「無駄だ。この結界内に出られないようにしてある！もはや貴様は袋の鼠だ…！」

闇統べる王は言い放った。

「くう…。」

「さあ、逃げてばかりいないで、戦ってください。」

「さもないと殺すよっ…！」

「殺されかかったぞ…？」

そう言い合っていると、闇統べる王が言ってきた。

「貴様ら何をしているか。フン。少しは骨のある奴だと思ったが、失望した。消え去るがいつ…！」

闇統べる王は紫色の巨大な光弾を当てた。

「くっ！」

それは雅紀に直撃し辺りに煙が舞う。

「あゝあ…つまんないのお…。」

雷刃の襲撃者はデバイスを持ってブラブラとぶらつく。

「いえ。あれぐらいの攻撃で彼はやられるはずはありません。」

そう星光の殲滅者言っていると煙が晴れ、中から…

『危ねえな…！』

ディカオスに変身して雅紀の姿が現れた。

「（そう。彼は…そう簡単にやられない…！）」

星光の殲滅者は表情を変えなかったが、内心では闘争心に火が付きはじめていた。

「そんなヒーローマンの格好になったからって怖くないよっ！」

雷刃の襲撃者は一気に間合いを詰めてディカオスを斬り裂こうとする。しかし…

『フッ！』

それをディカオスは紙一重で避けた。

「何っ！？僕の一撃を避けたっ！？」

これには雷刃の襲撃者は驚いた様子。

「何をしているのだ馬鹿がつ！これでも喰らうがいいっ！！インフエルノツ！」

闇統べる王は先ほどの紫の光弾を発射した。

『今の俺じゃ、ソイツは…』

アドベントドライバーを構え、そして…

『無駄だっ！』

そう言い放ち、ミストラルティンもどきを撃ち落とした。

「ばかなっ！？」

これには闇統べる王も驚く。

「それでこそです…！」

星光の殲滅者は冷静にデバイスに魔力を送る。

「パイロシューター…シュートツ！」

言い魔力弾を放たれる。その数、約三十。ディカオスもまた冷静にカードを取り出しベルトに入れる。

『アタックライド・ブラストッ!』

連射して、魔力弾を撃ち落とすしていく。

「うわわっ！星光の魔力弾を全部撃ち落とすしちゃったよっ！?!?」

「落ち着けっ！雷刃っ！！まだ策はあるはずだっ！！」

そう言い合っていると…

「私達の最強の技を放ち、消します。」

星光の殲滅者は冷静に、だが物凄い怖い事を言ってきたのだ。

「なるほどっ！」

「その手があったかっ！やるではないかっ！星光のっ！！」

二人は納得した様子。デバイスを構え、デバイスに魔力を送る。

『（何か、大物が来るな…!!）』

デйкаオスは警戒し、金色のカードを手を持つ。

「受けてみてください、木利野 雅紀。これが私の全力です…!!」

「喰らって死んじゃえっ！！」

「全てを無にっ！」

チャージを完了し、そして叫ぶ。

「ルシフェリオン……」

「ライジングセイバー……」

「闇の剣…エクスカリバー！」

「……ブレイカー………ッ！……」

三つの閃光がディカオスに接近する。

『ファイナルアタックライド・ディ・ディ・ディ・ディカオスッ！

！……』

『ディメンションレイザー………ッ！……』

ディカオスもまた自身の必殺技を放つ。そして…

ドゴ………ンッ！………！

閃光はぶつかり合い、爆発した。

『……』

「……」

「うわっ！」

「うおっ！！」

その爆発の衝撃で辺りは吹き飛び、煙が晴れるとそこにあった建物が崩壊していた。

「どうやら引き分け…いえ、彼の勝ちのようですね。」

横たわる星光の殲滅者はデйкаオスを見て言う。デйкаオスはなんと立ち上がった。

「くっそ〜っ！！僕らの全力がやられるなんてっ！！」

「しかし、それを受け止めたあいつはホントに人間か？」

同じく横たわる雷刃の襲撃者はジタバタと悔しがり、闇統べる王はデйкаオスの力に驚いていた。

『ふう。なんとか勝てたな…っ！！』

デйкаオスが見ると彼女達の上にある建物の一部が崩れてきた。

「っ！？」

「えっ！？」

「なっ！？」

三人は驚くが、力がでないのか動こうとしなかった。

「（魔力はほとんど使ってしまった。もはや…此処までのようですね。）」

「（くっそ〜〜っ！動けっ！動けよっ！僕の体っ！！）」

「（くっ！此処で死ぬのかっ！！？）」

思っていると建物の一部はすぐそこまで迫ってきた。三人は眼をつぶり、死を覚悟をした。が、全然痛みも・・・何も感じなかった。星光の殲滅者は眼を開けると、そこには…

『くうう…』

デйкаオスが彼女たちの盾になっていたのだ。

「貴方は…どうして私達を助けるんですか…！？」

「そ、そうだっ！僕たちはお前を倒そうとしたんだぞっ！！」

「逃げろッ！いくら貴様でもそれを受け止めきれないぞっ！！」

三人は叫ぶがデйкаオスは動こうともしない。

『あのなあ…可愛い女の子が下敷きになってしまつのを、黙って見てられるかよっ！それに、こんなの…どうってこと……ねえっ！！』

そう言いながら、気合で瓦礫を吹っ飛ばした。

『ハア：ハア：やっぱり、ダメージもあってあんな重いものを持つたんじゃない…無理があつたかな…。』

ディカオスはその場で倒れてしまい、変身が解ける。それを三人は見る。

「…必死で私達を…。」

「こんなマテリアルの僕達なんかを…。」

「変わったやつだな。」

三人は先ほどのディカオスの言葉を思い出す。

『可愛い女の子が下敷きになってしまつのを…黙って見てられるかよっ！』

彼の言葉は、彼女たちの心にも響いていた。

「可愛い女の子、ですか…／＼／」

「なんかさ、照れるなあ／＼／」

「う、うむ。だ、だがコイツはどうするっ／＼／？」

頬を赤くする三人。

「一先ず、休める場所に行きましょう。私達も動けるようになりましたし。」

そう言いながら、星光の殲滅者は雅紀に肩車をし飛び去る。

「あっ！待ってよっ！星光っ！！」

「我を置いていくなッ！！」

二人も星光の殲滅者について行った。

第45話

とある場所・・・・・・・・

雅紀「・・・・・・・・ん・・・・・・・・ん・・・・・・・・あれ・・・？」

雅紀が眼を覚ますと・・・・・・・・そこは・・・・・・・・古い屋敷のようだ・・・。

雅紀「・・・・・・・・そういえば・・・・・・・・俺、あの後・・・・・・・・。」

と雅紀は先ほどの事を思い出していると・・・。

？「目が覚めたようですね・・・。」

と声が聞こえ・・・・・・・・その方を向くと・・・。

雅紀「おまえは・・・・・・・・星光の・・・。」

そこには・・・何かを持っていた星光の殲滅者がいた・・・。

星光の殲滅者「じつとしててください・・・。」

と星光の殲滅者は近づきながら言つと・・・

ピト・・・

と額に冷たい感触がした・・・。

雅紀「・・・冷たい・・・。」

星光の殲滅者「それはそうです・・・冷たいタオルを使っていますから・・・。」

と星光の殲滅者は言う・・・確かに額にタオルが・・・。

雅紀「・・・。。。」

星光の殲滅者の顔が間近にあるため・・・雅紀は頬を染めた・・・。
星光の殲滅者の顔はなのはそっくりなのだが・・・雰囲気は違く・・・
目の色は透き通るような青い色で・・・どこか違う魅力を感じる・・・。

星光の殲滅者「これで少しは涼しくなりました・・・。汗をかいていたので・・・。」

確かに今、自分は汗をかいている事に気が付く・・・すると・・・

？「あつ、やっと起きた〜。」

？」「とんだ居眠り小僧だな・・・貴様は・・・」

と二人の女の子の声がし・・・見てみると・・・

雅紀「雷刃のと闇の・・・。」

そこには髪の毛をタオルで拭いていた雷刃の襲撃者と闇統べる王だった・・・。

雅紀「・・・俺、何時間寝てたの・・・？」

星光の殲滅者「かれこれ・・・二、三時間ぐらいです・・・。」

雷刃の襲撃者「ま、その間に僕たちは水浴びをしてきたけどね。」

雅紀「水浴び・・・？」

闇統べる王「このあたりに滝があったから水浴びしてきたのだ・・・汗をかいていたのだからな・・・。」

と闇統べる王は言う・・・。

雅紀「・・・にしても此処はどこだ・・・？」

星光の殲滅者「古い別荘のようです・・・もう何年も此処に人は来ていませんね・・・。」

と星光の殲滅者は辺りを見渡しながら言う・・・。

雅紀「そうなのか……て……三人とも何時までそのバリアジャケットを着ているの……？」

と雅紀は三人を見ると……まだバリアジャケットを着ていた……。

星光の殲滅者「私達は……コレしか服がありません……。」

雅紀「……何て申しました……？」

闇統べる王「だから服がないのだと言っているのだっ！」

星光の殲滅者「バリアジャケットを解除すると……裸になつてしまいますので……。」

雅紀「は、裸っ／＼／＼!!!？」

雅紀は驚く……

星光の殲滅者「私達は裸のままデバイスを起動しましたので……。」

雷刃の襲撃者「お前が僕らの裸見たいんなら解除するけどお……？」

と雷刃の襲撃者がとんでもない発言を言う……

雅紀「いやっ！だめっ！！それは絶対だめっ！！！」

と雅紀は慌てながら言う……

闇統える王「随分と初心な奴だなあ・・・お前は・・・」

雅紀「お前らも少しは羞恥心を持ってっ／＼／＼!!」

と言いつつ・・・。

雅紀「・・・しょうがねえ・・・一旦俺の・・・正確的にいえば俺の知り合いの家に行くぞ・・・」

星光の殲滅者「・・・なぜ・・・?」

雅紀「なぜ・・・てなあ・・・お前らそれしかないんだから・・・服を借りにお前らも行くんだよ・・・」

と呆れながら言う・・・。

星光の殲滅者「・・・わかりました・・・」

雷刃の襲撃者「僕もいい加減、バリアジャケットを着ているの飽きた・・・」

闇統べる王「仕方がない・・・」

と三人は承諾・・・。

雅紀「じゃあ・・・行くかあ・・・ていうかどう行けばいいんだ・・・?」

と困っていると・・・

星光の殲滅者「なら・・・私が、貴方を抱えて飛びます・・・」

と星光の殲滅者が言った・・・。すると・・・

雷刃の襲撃者「星光はさつき、雅紀を抱えて飛んで行ったじゃんっ！今度は僕の番だよっ！！」

閻統ベル王「いやっ！此処は王たる我がやるっっ！！雷刃はひっこんでいろっ！！！」

と言い合う・・・。

雅紀「あ、あの～～～・・・。」

星光の殲滅者「なら・・・ジャンケンはどうですか・・・？」

雷刃の襲撃者「それ乗ったっ！！！」

閻統ベル王「我が勝ってやるっ！！！！！」

と物凄い殺気を放ちながら手を前に出し・・・

星光の殲滅者・雷刃の襲撃者・閻統ベル王「ジャンケン・ポンッ！！！！」

とジャンケンをした・・・。そして・・・

雷刃の襲撃者「わーっ！っ！僕が勝ったっ！！！」

と雷刃の襲撃者は満面の笑みではしゃぐ・・・他の二人は・・・

星光の殲滅者「・・・負けた・・・」

閻統ベル王「王たる我が負けるだとお・・・バカなッ!!」

と悔しがる・・・

雅紀「・・・もうわけわからん・・・。」

と呆れながら言う雅紀・・・。

雷刃の襲撃者「さっ、雅紀!おいでっ／＼!!」

と両手を広げながら雷刃の襲撃者は言う・・・。

雅紀「・・・なぜ・・・?」

雷刃の襲撃者「なぜって・・・こうした方が、雅紀を・・・ギョッ!と抱きしめられるじゃんっ／＼!!」

雅紀「・・・やめとく・・・つつか恥ずかしい・・・／＼」

と頬を赤く染めて言う雅紀・・・すると・・・

雷刃の襲撃者「もうっ!こうなったら無理やりだよっ!!」

と高速で雅紀の前に来て捕まえる・・・。

雅紀「なっ!離せっ／＼!!」

雷刃の襲撃者「いや〜だよおツ！あははっ！雅紀、温か〜っ！いつ／＼！！！」

と雷刃の襲撃者は頬を赤く染めながら抱きつき・・・雅紀の温もりを感じて嬉しがる・・・。一方、二人は・・・

星光の殲滅者・閻統ベル王「（羨ましい・・・）」「

と殺気と嫉妬が混ざった目で睨む・・・。

雷刃の襲撃者「じゃ、しゅっぱ〜っ！！！」

と雷刃の襲撃者は雅紀を抱えながら外へ出て飛んで行った・・・。
二人も睨みながら二人を追う・・・。

雅紀「・・・二人の目が怖い・・・。」

と雅紀は怯える・・・。

別荘から出て数分……

雅紀「あ……あそこだ……。」

と雅紀は指をさす……そこはアリス宅だ……。

雷刃の襲撃者「あそこだね……じゃあ、いつきま……す
っ……!!」

と急降下した……。

雅紀「ぎゃ……っ……!!」

そしてアリス宅の前に降り立つ……が……

雅紀「……」

雅紀は酔ってしまったようだ……。

雷刃の襲撃者「雅紀、大丈夫？」

雅紀「……大丈夫じゃ……ない……。」

と顔色を悪くしながら呟く……

星光の殲滅者「貴方は……雅紀の身も考えなさい……。」

闇統ベル王「いきなり急降下する奴が何処にいるかつ！馬鹿がつ！」

と追いついた星光の殲滅者と闇統ベル王が注意する……。

雷刃の襲撃者「うっ！……ごめんなさい……。」

と雷刃の襲撃者はしよぼんとする……。

雅紀「……ま……いいが……兎も角、入ろう……。」

と雅紀はドアを開ける……

雅紀「ただい……ま……。」

と雅紀の目の前には……鬼と化したアリスが立っていた……。

アリス「雅紀……。こんな夜遅くに帰ってくるって……。どう
ういう事かな……。？」

とアリスは静かに言うが怖い……。確かに今は夜だった……。

雅紀「い、いや……。その……。ちよつと戦闘にあつてな……。」

と言つと……

アリス「えっ！？雅紀、どこか怪我ないっ！！！？大丈夫っ！！！？」
とアリスは怒りのオーラを消して雅紀に言う……。

雅紀「大丈夫だけどさ……ちょっと頼みたいことが……。」

アリス「頼みたい事……？」

雅紀「この子達に、アリスの服を貸してもらえないかな……？」
と雅紀は後ろをの三人を見ながら言う……。アリスはその方を見て……。

アリス「あっ！！闇のマテリアルのっ！！」

と指をさす……。

星光の殲滅者「私達の事をを知っていましたが……。」

雷刃の襲撃者「僕らに服を貸してっ！！」

闇統べる王「我もだ……。」

とお願いする……。

アリス「うん、わかった……けど……ちょっと待っててね……
・雅紀、ちょっと……。」

第45話（後書き）

さて……最後のおしおきは何だったんだ……？

雅紀「あつ／＼／＼／＼／＼／／／」

アリス「フッフ……秘密だよ……作者さん……／／／。」

……そうですか……。さて次回は……闇のマテリアルの三人がアリス宅に泊まる……そして……その時、アリスが……。

アリス「みなさん、お楽しみにねっ／／／！！」

第46話

現在・・・・・・・・アリス宅・・・・・・・・。

アリス「あらあ・・・・やっぱり似合うよ。」

とアリスが三人を見て言う・・・・。三人の今着ている服は・・・・星光の殲滅者は桃色の服を着ている・・・・。

雷刃の襲撃者は少し蒼みが入った長袖を着ていて下が桃色のスカートをはいている・・・・。

閻統ベル王はグレーが入ったボーイッシュ的な服装をしていた・・・・。

アリス「雅紀はどう？彼女達？」

とアリスが雅紀に言う・・・・。

雅紀「・・・・・・・・。」

雅紀は三人を見ている・・・・。三人は雅紀に見られて頬を赤く染め

る……。

雅紀「うん……皆、可愛いよ。」

と雅紀は言った……。

星光の殲滅者「……//」

雷刃の襲撃者「あはは……//」

閻統ベル王「そ……そうか……//」

と三人は雅紀に言われ頬を真っ赤にする……。

アリス「うふふ……（これは……雅紀……またフラグを立てた様ね……）」

とアリスは感ずいた……。

アリス「さてと……じゃあもう遅いし……貴方達、今日は泊つてきなさい……」

とアリスが言う……。

星光の殲滅者「あの……良いのですか……？」

アリス「うん、良いよ。私達の二人しかないしね……一人や二人……大丈夫よ。」

雷刃の襲撃者「やった~~~~っ！！僕達、あのまま別荘に泊ろう

と思ったけど、ラッキーっ！」

閻統ベル王「このバカ者がっ！少しは遠慮と言うものを知れっ！！！」

とほしゃいでいた雷刃の襲撃者を叱る閻統ベル王であった・・・。

数十分後・・・

雷刃の襲撃者「うつつまーーーーーいつーーーーいつ!!!」

と雷刃の襲撃者の声が響いた……。

雷刃の襲撃者「アリスの料理、凄く美味しいっ!!おかわりっ!!」
「」

と雷刃の襲撃者はバクバクと食べおかわりをせがむ……。

閻統ベル王「やかましいっ!このバカがっ!!……全く……」

と閻統ベル王は呆れてる……。

星光の殲滅者「……確かに……美味しいです……」

と星光の殲滅者は呟く……。

雅紀「あはは……雷刃の気持ちもわからなくもないよ……俺だって初めてアリスの料理を食べた時は凄く美味しいって思っちゃったんだから……」

雷刃の襲撃者「だよねっ!だからおかわりっ!!」

閻統ベル王「いい加減にしろっ！貴様っ！！」

アリス「はいはい……。閻ちゃんもそんなに怒らないっ！」

閻統ベル王「閻ちゃんっ！？」

とアリスは閻統ベル王を弄る……。

星光の殲滅者「……。今度……教えてもらって……。雅紀に……。
・／／／（ボソッ）」

と星光の殲滅者はブツブツとつぶやく……。

そしてあっという間に寝る時間……。

雅紀「あ・・・、アリス達は先にお風呂入ってなよ・・・」

アリス「今日は雅紀が先に入って・・・お願い・・・。」

雅紀「・・・なんだかわからんが・・・入ってくるよ・・・。」

と言いつつ雅紀は部屋を後にする・・・部屋にいるのはアリスと三人だ・・・。

アリス「・・・さて・・・いきなり言うけど・・・貴方達・・・雅紀の事が好き？」

雷刃の襲撃者・閻統ベル王「ブウーーーーッ!!!」

星光の殲滅者「・・・!!!」

と雷刃の襲撃者と閻統ベル王は口に含んでいたお茶を噴きだす・・・
。星光の殲滅者はお茶を噴きだす事はしなかったが・・・内心ドキッ
!とした・・・。

アリス「その反応だと・・・好きなんだね？」

雷刃の襲撃者「い、いきなり何言い出すんだよっ!?!アリスっ／＼

／！！？」

閻統ベル王「そ、そうだった！お前、な、なにを言い出すかつ／／／！！？」

と二人は顔を真っ赤にして言う・・・。

アリス「雅紀の事が好き？って質問しただけよ・・・で・・・どうなのかな？」

とアリスは言う・・・二人はモジモジとした・・・。

雷刃の襲撃者「な、なんだかわからないけど・・・あ、あいつ・・・雅紀の事を思うと・・・心臓がバクバクして・・・止まらなくて・・・どうしようもないんだ・・・／／／」

と雷刃の襲撃者は顔を真っ赤に染めて・・・モジモジする・・・

閻統ベル王「・・・我もだ・・・知らない・・・気持ち・・・あふれるんだ・・・奴の事を思ってしまつと・・・王である我が・・・我じゃなくなりそうで・・・／／／。」

と雷刃の襲撃者ほどではないが、閻統ベル王も顔を真っ赤にする・・・。

アリス「フッフ・・・星光ちゃんは・・・？」

とアリスは星光の殲滅者を見る・・・少しだが頬を赤く染めている・・・。

星光の殲滅者「私は最初は・・彼女たちよりも強い力を持った彼を殺す・・・と言うのが目的でした・・。そして戦い・・敗北をし・・あの場で崩壊した瓦礫に下敷きにされそうだったのを・・彼が救ってくれました・・。以来・・私は彼を殺す・・と言う感情がなくなり・・代わりに・・変な感情が生まれました・・。彼を見ると、胸が熱く・・そして締め付けられる感覚・・、これは・・噂では・・恋・・・と言う感情なのかよくわかりませんが・・、たぶんそうだと思います・・。私は・・彼に好意を寄せているやもしれません／／。」

と最初は物静かに・・そして・・だんだんと普通の女の子のような喋りで彼女は言う・・。

アリス「フッフ・・・三人は・・・雅紀の事が好きなんだね・・？」

雷刃の襲撃者「・・・たぶん・・／／／」

閻統ベル王「・・・そうなのかもしれん・・／／／」

星光の殲滅者「私は・・・確実にそうだと・・／／／」

と三人は言う・・。

アリス「フッフッフ・・・じゃあ・・・ちょっと雅紀を驚かしに行こうよ・・？」

雷刃の襲撃者「驚かしに？」

アリス「・・・いま雅紀は入浴中・・・。絶好のチャンスよ・

一方雅紀は・・・

雅紀「ふう・・・・・・・・・・疲れた時に風呂は良いな・・・・。」

と現在入浴中・・・・。その時・・・

？「おじゃましましーーーーすっ！」

と勢いよく風呂のドアが開く・・・

雅紀「な、なんだっ！？・・・・・・・・てなっ／＼／＼！！？」

雅紀は見てしまった・・・・・・・・。そこにいたのは・・・・・・・・全裸の四人だった・・・。

アリス「フッフ・・・／／／」

雷刃の襲撃者「あははは／／／」

闇統ベル王「・・・／／／」

星光の殲滅者「・・・どうも・・・／／／」

雅紀「・・・あの・・・なんで・・・？」

アリス「雅紀と入りたくて・・・。」

雅紀「入りたくてっつてな・・・。」

アリス「もう遅いので入りまーすっ！！」

と言い四人は風呂に入った・・・。

雷刃の襲撃者「うわ〜狭いなあ・・・。」

星光の殲滅者「それでも・・・彼に触られている／／／。」

との事・・・実際に狭い・・・が・・・

雅紀「うにゅ・・・／／／」

雅紀は四人の美少女と一緒に入ってパンク中であつたとな・・・

第46話(後書き)

さて・・・次回はこの続き編です！

第47話

雅紀「…………何でお前ら、入ってくるんだよおっ／＼！」

現在……雅紀が入浴中に突如として……全裸となったアリス達が入ってきたのだ……。

アリス「いいじゃない。私、雅紀と入るのは初めてでドキドキしているんだから……／＼／」

とアリスは雅紀に寄り添う……。

雅紀「あのなあ…………ていうか狭い…………。」

と雅紀は言う……。そりゃそうだ……一人二人ぐらいしか入れない風呂に五人も入っているのだから……。その時…………。

ムニユツ……

と雅紀の腕に柔らかい感触がした……。

雅紀「…………ん…………？」

と雅紀は見てみると…………そこには……

星光の殲滅者「…………／＼／」

星光の殲滅者が雅紀の腕に抱きついていた……。

雅紀「星光っ／／！？．．．な．．．なんで抱きついてっ／／／！！？」

星光の殲滅者「．．．．．私は．．貴方に触れたい．．．．．
そして．．．．．」

と星光の殲滅者は雅紀の手を持ち．．自身の胸に触れさせる．．．
。

星光の殲滅者「貴方に．．．触れられたい．．．／／／」

と頬を赤く染めて言う．．．。

雅紀「っ／／！！！」

雅紀もまた顔を真っ赤に染める．．．。

雷刃の襲撃者「僕も．．．．．雅紀に．．．／／／」

と雷刃の襲撃者が雅紀の背中に抱きつく．．．その時．．

ムニユウ．．．

雷刃の襲撃者の胸が雅紀の背中に触れる．．．。

雅紀「なっ／／！！？」

雅紀は先ほどよりも顔を真っ赤に染める．．．。

アリス「フフフフ．．．．．雅紀は人気者だね．．．。」

雅紀「アリス、そんなのんきな事言っでないで助けて・・・。」

アリス「無理！」

雅紀「即答っ!?!」

星光の殲滅者「・・・そういえば・・・雅紀、体・・・洗いましたか・・・?」

雅紀「ふえ?・・・いや洗ってないが・・・。」

と雅紀が言ったその時・・・四人の目がキラッと光った・・・。

星光の殲滅者「なら私が雅紀の体を洗ってあげます・・・。」

雷刃の襲撃者「いやっ!僕がやるっ!!!」

閻統ベル王「此処は王である我がやるっ!!!」

アリス「彼女として・・・恋人として大好きな雅紀の体を洗っつ!!!」

と言い争う・・・。

雅紀「・・・なんでさ・・・。」

と雅紀は呟いていたとな・・・

星光の殲滅者「こうなれば・・・ジャンケンです・・・。」

雷刃の襲撃者「よしっ！やろっ！！」

闇統ベル王「今度こそ我が勝っつ！！！！」

アリス「負けないよっ！！」

と身構え・・・

アリス・星光の殲滅者・雷刃の襲撃者・闇統ベル王「ジャ
ケン・ポンっ！！！！」

とジャンケンをした・・・そして・・・

闇統ベル王「ハハハハハッ！！我が勝ったぞっ！！！」

と自慢げに闇統ベル王は言う・・・

星光の殲滅者「・・・負けてしまいました・・・」

雷刃の襲撃者「クッソッ！！」

アリス「負けた・・・私が・・・」

とそれぞれ悔しがる・・・

雅紀「ハア・・・」

と雅紀はため息を吐く・・・

閻統ベル王「さて・・・雅紀、行くぞ！」

と閻統ベル王が雅紀の手を掴み風呂から上がる・・・。

閻統ベル王「我が直々に洗ってやるのだ・・・感謝するがいつ／＼！！！」

雅紀「・・・・・・・・もう好きにして・・・。」

と雅紀は諦めた・・・・・・・・その時・・・

雅紀「ふあ・・・・・・・・・・。」

突如として雅紀の体に気持ちいい感触が伝わる・・・。

雅紀「(な・・・何だ・・・？気持ちいい・・・。何て言えばいいのかわからないけど・・・気持ちいい・・・／＼)」

とよく見ると・・・・・・・・体中泡だらけのようですね・・・・・・・・。そして・・・

閻統ベル王「／／／」

閻統ベル王もまた泡だらけのようです・・・・・・・・しかも・・・互いに体をくっつき合っているようです・・・。

雅紀「(はっう・・・・・・・・／／／なんだか体の力が抜けていくようだ・・・・・・・・)」

と雅紀は思っていたら・・・

ズリュツ！

雅紀「なっ!？」

近くに置いてあつた石鹼に手を滑らせた様子……その時……

ムニユウ……

何かを掴んだようだ……

雅紀「む……なんだ……?柔らかいぞ……?」

と雅紀はその方を見ると……

閻統ベル王「……//」

顔を真っ赤に染めている閻統ベル王がいました……。

雅紀「や、闇っ!?!?」

閻統ベル王「……貴様……王である私の胸を掴むとは……
いい度胸だな……//」

と怒り気味の様子です……。

雅紀「あ……その……ごめんなさ……」

閻統ベル王「だが今日は特別に触ることを許可しようっ//」!

雅紀「ハイイツ!!!?!」

これには雅紀もびっくりである……。

星光の殲滅者「……もう……」

雷刃の襲撃者「我慢の限界だつ!!!?!」

と言い二人は風呂から出て……そして……

雷刃の襲撃者「雅紀!僕らも洗ってあげるっ!!!そして胸を触ってもいいよっ!!!」

星光の殲滅者「……私も……//」

と雅紀に抱きつく……。

アリス「私も……発情しちゃったよお……雅紀い……
//」

と発情モードを発動したアリスも抱きつく……

雅紀「うあああああああああつ//!!!!!!!!!」

この時……雅紀の意識はシャットダウンしたとな……

そして・・・

アリス「狭いかもしれないけどごめんね・・・？」

と現在アリスの部屋・・・どう考えても狭いように見えない部屋だ・・・。

星光の殲滅者「・・・いえ・・・。」

雷刃の襲撃者「第一狭くないじゃん此処・・・。」

閻統ベル王「・・・我もそう思う・・・。」

星光の殲滅者「・・・それにしても・・・雅紀・・・大丈夫でしょうが・・・？」

と星光の殲滅者は言う・・・。現在、雅紀は・・・

雅紀「きゅ~~~~~~~~////」

自身の部屋で気絶中・・・。

雷刃の襲撃者「確かに・・・大丈夫かなあ・・・？」

閻統ベル王「心配いらんだろう・・・しかし・・・相当初心な奴だな・・・あいつも・・・。」

アリス「・・・（もう童貞卒業しているんだけどね・・・互いに一つになってるし////）」

とアリスは一人、妄想の世界に入っていく。。。

星光の殲滅者「……アリス……。」

アリス「何……？星光ちゃん……？」

星光の殲滅者「……私達は……もうすぐ、消えてしまします……。」

アリス「!!!？」

星光の殲滅者の言葉にアリスは驚く……。

雷刃の襲撃者「僕らは元々闇の書の一部……。」

闇統ベル王「我らは……いわばプログラムのような存在だ……。」

星光の殲滅者「ですから……消えて……。」

アリス「何で、消えちゃうのっ!!!？プログラムなんて関係ないよっ!!!？」

星光の殲滅者「……私達は……雅紀を殺す……という事を第一に考え行動するようになって今、目覚めました……。ですが……この後に……。私達の体に異常なバグが発生しました……。」

雷刃の襲撃者「恋……って感情……。僕らには必要のない感情が……生まれた……。」

閻統ベル王「殺す相手・・・雅紀によって・・・ソレが生まれ、次第にそれが我らの体を侵食しているのだ・・・」

星光の殲滅者「ですから・・・明日になったら・・・私達は跡形もなく消滅します・・・」

アリス「・・・そんなのって・・・」

雷刃の襲撃者「君の気持ちもわかるよ・・・でも・・・仕方ないんだ・・・」

閻統ベル王「我らはプログラムなのだ・・・」

星光の殲滅者「あの時・・・黙っていてすみませんでした・・・。しかし・・・残りの時間・・・笑い合い・・・そして・・・彼といた時間・・・この身に・・・心に・・・刻み込みました・・・」

雷刃の襲撃者「肉体が消えちゃっても・・・僕らは・・・雅紀を見守る・・・」

閻統ベル王「貴様は・・・我らの分まで・・・雅紀と過ごせ・・・」

アリス「・・・」

アリスは考える・・・この子達は・・・マテリアル・・・プログラムなのだと・・・だが・・・今彼女達は・・・普通の女の子だ・・・プログラムじゃない・・・死なせたくない・・・だが・・・どうしようもない・・・と・・・

アリス「……………わかった……………」

それだけしか言えなかった……………。

星光の殲滅者「…本当に…ありがとうございます……………」

雷刃の襲撃者「泊めてくれてありがとうございます……………」

閻統ベル王「王の我も感謝する……………」

星光の殲滅者「と言うわけですが……………お休みなさい……………」

と言い三人は眠った……………。

アリス「……………お休み……………」

とアリスは涙目の顔を隠すように毛布を被り眠った……………

翌日……

アリス「ン・ンん……ア・三人とも・消えちゃったのか
な……。」

翌朝眼を覚めし……三人を見る……すると……驚くもの
を目にする……

星光の殲滅者「……」

雷刃の襲撃者「……」

閻統ベル王「……」

三人がいたのだった……。

アリス「三人とも！死んだんじゃっ！！？」

コレにアリスも驚く……。

星光の殲滅者「そのはずなのですが……。」

雷刃の襲撃者「僕達……生きている……。」

閻統ベル王「体に異常はないし……まさか……。」

アリス「まさか……？」

閻統ベル王「我々は……完全に人間となったのではないか……。」

アリス「へ……つまり……。」

星光の殲滅者「私達は……消えずに済んだ……ということですね……。」

雷刃の襲撃者「やったー！ーっ！！！！これでまた雅紀をギョッ！と抱きしめられるんだっ！！！」

と三人は喜んだ……。

アリス「もう……貴方達は……。」

とアリスは涙目になりながら喜んでいたのであった……。

第47話（後書き）

さてと……急過ぎる展開になってしまった……。

雅紀「そうか……。」

はぁ……さて次回は……初のマテリアル三人となのは達の出
会いです……。

雅紀「お楽しみにっ!!！」

第48話

雅紀「うん……。」

雅紀は何やら悩んでいます……。

アリス「どうしたの……？雅紀……？」

アリスが聞いてくる……

雅紀「いやさ……実は……。」

と話は一時間前の事……

雅紀「翠屋……？」

雅紀はなのはに聞く……。

なのは「そう。私の家で経営しているんだけど……。よかったら雅紀くん、来ない？」

雅紀「……なぜ……？」

なのは「雅紀くん、体を休めたりしてないでしょ・・・？丁度この後の予定がないから・・・。雅紀くんは・・・？」

雅紀「特にないが・・・。ちゃんと休めたりはしているぞ？なのはにも、迷惑がかかるんじゃないk・・・」

なのは「ダメ・・・？」

となのはは上目づかいをする・・・

雅紀「・・・ワカリマシタ・・・。」

と約束をしたのであった・・・。

アリス「私は別にいよ・・・？行っても・・・私、留守番しているし・・・」

雅紀「いやだめ……。アリスも少しは羽を休めなさい……。」

アリス「はい……。」

雅紀「問題は……。三人なんだ……。」

と雅紀は言う……。

アリス「星光ちゃん達がどうしたの……？」

雅紀「星光達は……。なのは達から出てきた、闇の書の一部だった存在……。三人の姿……。所々なのは達と似ているだろ？一緒に行って、なのは達に会わせたらびつくりするんじゃない……。」

星光の殲滅者「私達は心配ないですよ？」

と三人は現れる……。

雷刃の襲撃者「僕達、あんまり気にならないしっ！」

闇統ベル王「我らが事情を話せばいい事だ……。」

雷刃の襲撃者「それ……につ！僕らはその翠屋ってところに行きたいしねっ……！」

とそれぞれ言う……。

雅紀「わかったよ……。」

そして翠屋・・・

雅紀「随分と綺麗なところだな・・・。」

アリス「やっぱ本物の方が綺麗ね……。」

星光の殲滅者「客には好印象なところです……。」

雷刃の襲撃者「あつ！何か美味しそうな匂いがするっ！！」

閻統ベル王「食い意地を張りおつてこのバカが……。」

雅紀「兎も角入ろう……。」

と五人は店の中に入る……と……

？「いらっしやいませ〜〜〜っ！」

と誰か来た……その正体は……

雅紀「な……なの……は……？」

メイド服に身を包んだのがいました……。

なのは「えへへ……どうかな、雅紀くん／／？」

とくるりと回りながら言うのは……

雅紀「あ、ああ……可愛いぞ……なのは……／／／。」

なのは「えへへ／／／。」

となのはは嬉しがる……その時……

？「雅紀、来たんだ・・・。」

？「雅紀君いらっしやいな〜。」

と奥から誰かが来る・・・。

雅紀「！！！」

見てみると、そこにいたのは、なのはと同じメイド服を着たフェイトとはやてだった・・・。

フェイト「・・・／／／」

はやて「どや？この格好は・・・？」

雅紀「・・・似合ってるよ・・・二人とも・・・／／／」

フェイト「・・・／／／」

はやて「あはは／／／」

と笑い合う・・・すると・・・

星光の殲滅者「随分とヒラヒラな格好をしていますね・・・。」

雷刃の襲撃者「僕もアレを着て雅紀にアタックかけてみようかなあ・・・。」

闇統ベル王「我の元となったコイツに呆れてくる・・・。」

と三人が言い……なのは達が驚く……。

なのは「わ、私なのっ!!!??」

フェイト「一体……」

はやて「どうなってんやッ!?コレっ!!!??」

雅紀「やっぱり驚くよな……。」

アリス「うん……。」

と二人は頷く……。

星光の殲滅者「申し遅れました……私は星光の殲滅者……。」

雷刃の襲撃者「僕は雷刃の襲撃者だっ!」

閻統ベル王「我は閻統ベル王だ……。」

とそれぞれ冷静に紹介する三人……。

星光の殲滅者「そして、私達は……貴方達から生まれた存在です……。

……。」

と言われ三人は固まる……そして……

なのは・フェイト・はやて……「え~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~っ!!!!」
?」「」

星光の殲滅者「……と言つ事です……。」

と星光の殲滅者は自分たちの事を話した……。

なのは「お、驚きな……。」

雅紀「そりゃ驚くだろ……俺も初めて会つた時は驚いたしな……。」

フェイト「な、納得がいくね……。」

はやて「シグナム達が言つてた黒い物体は……三人だったんだ

なあ……。」「

星光の殲滅者「あの時は……肉体は持っていませんでしたので……」

雷刃の襲撃者「僕らの元となった人間の肉体になればいいんじゃないかって思ってたねっ！」

閻統ベル王「結果、こうなったのだ……。」

なのは「そうなんだ……。」

となのは達は納得したようだ……。

なのは「……それにしても……雅紀くん……何で彼女たちといたのかな……？」

フェイト「そう言えば……彼女達からは、聞いていないよね……。」

はやて「なんでなん……？」

と三人は光のない瞳を見せながら言う……。

雅紀「い、いやね……これはな……。」

と雅紀は言おうとしたその時……。

星光の殲滅者「私達は、雅紀と戦闘した後……彼の家に泊りましたから……/ /。」

と星光の殲滅者が言った……瞬間、辺りが静まり返った……そして……

なのは・フェイト・はやて「と、泊った~~~~~っ！
！！！！？」「」

と叫んだ……。

なのは「雅紀くんっ！どういう事かなッ！！？」

フェイト「彼女達が泊ったって本当ッ！？雅紀っ！！？」

はやて「教えてなっ！！！」

と三人は顔を近づけて言う……。

雅紀「ま、まあ……その……本当だ……。」

閻統ベル王「しかも……我々は雅紀と風呂に入ったのだしなッ
！！！！／／／」

と閻統ベル王が自慢げに言った……その瞬間……

なのは・フェイト・はやて「「い、一緒にお風呂に入った~~~~
~~~~っ！！！！！！！！？」「」

と今度は先ほどよりも大きな声で叫んだ……

なのは「ま~~~~き~~~~ん~~~~~！！」

フェイト「どついう事かな・・・雅紀・・・？」

「はやて「肉体言語で・・・お話しようか・・・？雅紀君・・・。」

と怒り気味の様子の子の三人・・・。

雅紀「ヒ、ヒイイイイイイイイツ！！！」

とコレには雅紀も恐怖した・・・。その時・・・

星光の殲滅者「なら・・・貴方達も泊ったり、一緒にお風呂に入ればよろしいのでは・・・？」

・  
とまたもや星光の殲滅者はとんでもないことを言った・・・途端・

なのは・フェイト・はやて「「その手があったっ！！」「」

と目を光らせて言う・・・。

雅紀「星光っ！！何とんでもないことを言うんだよっ！！！」

と言うが時すでに遅し・・・。

なのは「じゃっ！雅紀くん、私達に黙っていた罰として、明日から私達の家泊ることっ！」

雅紀「な、なんでっ！！！」



フェイト「罰・・・だよ・・・雅紀・・・。それと・・・明日から六日間学校はお休みだよ・・・。」

はやて「だから、その中の五日間は私達の家にとまってもらおうよ！！」

雅紀「ちょ、ちょっと待てっ！五日間で・・・三人の家に泊るから三日間じゃ・・・」

なのは「アリサちゃんとすずかちゃんの分もあるんだよ、雅紀くん！」

フェイト「もうメールしちゃったしね・・・。」

となのはとフェイトの手に携帯が持つてあつた・・・。

はやて「もう遅いでっ！覚悟を決めて、私達の家にお泊るんやっ！！」

とはやては言う・・・。

星光の殲滅者「あ・・・。一つよろしいでしょうか・・・？」

なのは「何？星光ちゃん・・・？」

星光の殲滅者「高町 なのは・・・私を・・・貴方の家にお世話になつてもよろしいでしょうか・・・？」

なのは「えっ！？」

星光の殲滅者「実際・・・私達は、雅紀の家に泊っている身・・・。

雅紀には・・・何かしら迷惑がかかります・・・ですから・・・、  
此処で働きますので・・・私を貴方の家に住まわせてもらえないで  
しょうか・・・？」

と星光の殲滅者は言う・・・。

なのは「むう・・・私は良いけど・・・お父さん、お母さんが  
許してくれるかどうか・・・。」

と言っていると・・・

？「なのは、別にかまわないわ・・・。」

？「俺もだ・・・。」

と二人の男女の声が聞こえた・・・。なのはは声が出た方を向い  
てみると・・・

なのは「お父さんっ！お母さんっ！」

そこには・・・なのはの父・・・高町 士郎と・・・母・・・高町  
桃子であった・・・。

なのは「な、何でここにっ！？」

桃子「もう、丸聞こえよ、三人の声・・・。」

士郎「それにしても・・・なのはと同じだとは・・・丸で双子のよ  
うな感じだ・・・。」

星光の殲滅者「あの．．良いでしょうか．．．？」

士郎「もちろんかまわないよっ！」

桃子「働く人も増えたし．．良いわね．．。」

と二人は許可した．．。

星光の殲滅者「．．．ありがとうございます．．。」

と言う．．。

雷刃の襲撃者「（なあ．．星光．．いきなり何を言ってんだよ．．．．）」

闇統ベル王「（いったい何を考えているのだ．．お前は．．．）」

と二人は念話をして星光の殲滅者に聞く．．。

星光の殲滅者「（こうすれば．．．また雅紀とお風呂に入れることができますので．．．二人も．．．どうですか．．．？）」

と星光の殲滅者は言う．．．。二人はハッとして．．．フェイトと  
はやてに．．。

雷刃の襲撃者「なあ、フェイト！僕も．．君の家に住まわせてほしいっ！！」

闇統ベル王「我も頼むっ！！はやてっ！！！！」

とせがむ……。

フェイト「わ、わかったよ……一応母さんたちに相談してみるから……。」

はやて「私も……。」

と二人は言い……雷刃の襲撃者と閻統ベル王は小さくガッツポーズをした……。

なのは「と言う事で……雅紀くん……決まりだから明日から泊りに来てねっ!」

フェイト「約束だよっ!」

はやて「忘れないでやっ!」

と三人は言う……

雅紀「あ、アリスっ! 助けてよっ!」

アリス「無理……私じゃ彼女たちを止められない……。」

雅紀「そんな……。」

と雅紀の悲しい声が響いたとな……



第48話（後書き）

さてと・・・次回は特別編と言う事で書きますのでッ!!

雅紀「やめてくれっ!!!!」

作者権限だっ!!最初の泊り先は・・・もちろんこの人・・・  
なのはの家だっ!!!!!!

アリス「それじゃあね・・・。」

雅紀「嫌だ-----っ!!!!!!!!」

## 特別編第1話

雅紀「ハア・・・何でこんなことになったんだ・・・？」

現在雅紀は高町家の近くにいる。

雅紀「昨日いきなりのことだったし、もうわけわかんねえよ・・・。でも約束しちゃったから行かないとなあ。」

とブツブツ呟きながら、雅紀は高町家に着き、チャイムを鳴らす。すると・・・

ガチャガチャ・・・

と音がしてドアが開くと・・・

なのは「雅紀くんっ！おはようなのっ！！」

中からなのはが顔を見せてきた。

雅紀「おはよう、なのは。」

なのは「ささっ、上がってなのっ！！」

なのはが雅紀を家の中につれていく。

雅紀「お邪魔します。」

雅紀は言うところ・・・

桃子「あらいらっしやい、雅紀くん……だったけ？」

奥から桃子がやってきた。

雅紀「はい。あの今日一日、お世話になります。」

桃子「フッフ、丁寧で良い子ね。なのはが好きになるの、わかるわ。」

なのは「ちょっ、お母さんっ!」

桃子に言われ、なのはは顔を真っ赤にした。

士郎「おや、来たんだね、いらっしやいっ!」

すると、士郎がやってきた。

雅紀「あっ、おはようございます、士郎さん。」

士郎「ハハハ、随分と丁寧だな。今日一日、ゆっくりしていると良い……。」

雅紀「ありがとうございます。それと、士郎さん。」

士郎「ん？何だい？」

雅紀「……後ろの人……どうにかしてください。」

と雅紀は後ろを見ながらそう言う。後ろには、強烈な殺気を放つ、



シスコンの「高町 恭也」だ。

恭也「誰がシスコンだ……。」

どすが含んだ声で呟いている。怖いぞ〜。

士郎「はあ……恭也、そんなに殺気を放つな。」

恭也「だが父さん」

士郎「恭也。」

恭也「わかったよ……。」

恭也はしぶしぶ殺気を放つのをやめた。

雅紀「ホッ……。」

雅紀は安息の息を吐くと……

桃子「さてと、今日は休日だし、人が大勢来るわ。頑張りましょうっ！」

なのは「うんっ！」

士郎「じゃ、俺と恭也は店にいるな。」

と二人は部屋を後にする。

桃子「あ、雅紀くん。急だけど今日はお店の手伝い、お願いできる

かしら？」

雅紀「あ、良いですよ。」

桃子「ありがとうね。それじゃ。」

と桃子が何かを出した。

雅紀「あ……それは。」

と雅紀は見る。それは……

桃子「フッフ 執事服よ」

執事服だったとな。

桃子「今日はこれを着てもらったからね？」

雅紀「い、いや……それを着るのは、ちょっとお……。」

桃子「なのは」

なのは「了解なのっ！」

桃子に言われ、この場から離れようとする雅紀をなのはが後ろから捕まえる。

雅紀「んなっ!?!」

なのは「離さないよ、雅紀くん。」

なのはは離さぬようギュッと抱きしめる。その時になのはの胸が  
雅紀の背中に当たる。

桃子「さあ・・・着ましようね?」

雅紀「うわあああああっ!?!」

星光の殲滅者「……………」

翠屋の入り口でメイド服を着た星光の殲滅者が掃き掃除をしていた。

士郎「やあ。おはよう、星光ちゃん。」

恭也「掃除お疲れ様。」

そこに二人が現れる。

星光の殲滅者「いえ、雅紀は、来ましたか？」

士郎「ああ、さっき来たよ。今、家にいる。」

星光の殲滅者「…そうですか。」

と星光の殲滅者はひっそりと笑みをこぼす。そうしていると…

桃子「あなたー、恭也ー、星光ちゃん！」

奥からエプロン姿の桃子が現れる。

士郎「どうした？」

桃子「フッフ今日はアルバイトさんが一人いるわよ」

士郎「アルバイトさん？」

桃子「フッフ、じゃあ入ってきてーっ！」

そう桃子が言うと、奥からなのはが現れる、と同時に……

雅紀「……なぜ俺がこんな恰好を／＼／」

執事服を着た雅紀が現れた。

なのは「えへへ 雅紀くん、カツコイイの／＼／」

雅紀「……ありがとう／＼／」

二人はラブラブな桃色空間を発生させる。

士郎「アルバイトって、雅紀君だったのかぁ。」

恭也「なのはとあんなにいちゃいちゃしやがって~~~~~」  
「！」

士郎は納得して、恭也は先ほどよりも鋭い殺気を放つ。

星光の殲滅者「雅紀、似合いますよ／／／」

雅紀「星光……。」

星光の殲滅者「それと……私、似合ってますか？」

星光の殲滅者はメイド服を見せるように体を回転させた。

雅紀「……似合うよ、星光／／／」

と頬を染めて言う雅紀

星光の殲滅者「……ありがとうございます／／／」

と星光の殲滅者もまた頬を赤く染める。その直後に桃色空間も増す。

なのは「（……………なんか……嫉妬しちゃうの……………」

となのはだけは嫉妬の目で見る。

桃子「さてと翠屋、開店するわよ！」

と桃子は店を開店した。

数十分後

桃子の言う通り、開店した直後に店内は人でいっぱいになった。

なのは「お待たせしましたっ！ご注文の品ですっ！！！」

なのはが元気よく言う。

星光の殲滅者「ご注文の品です。どうぞ。。。」

逆に星光の殲滅者は、静かに言う。男性達は全員、なのはと星光の殲滅者のメイド姿に見惚れていた。

男性1「今日もなのはちゃん、可愛いつっ！」

男性2「あつちのなのはちゃんと同じ顔をした子も可愛いぜ？」

男性3「どちらにしても、可愛いっ!!！」

男性客がそう言っている間・・・

雅紀「おまたせしました。ご注文の品です・・・。」

雅紀は静かに言うが何処か魅力を感じさせる。執事服を着ているからなのか、女性客に人気となっていた。

女性1「あの、執事服を着た男の子、かっこいいわねえ。」

女性2「うんうんっ、顔は幼くて可愛いんだけど、カッコいいわあ  
~~~~!!！」

と女性達は黄色い声を上げる。その声に・・・ある二人の魔導師が
反応する。

なのは「(ムう~~~~)・・・、なんか、嫌な気分なのっ!!！」

星光の殲滅者「(雅紀を褒めてあげるのは、私だけで十分です・・・
・!）」

怒りと殺気と嫉妬が混ざったオーラを放つ二人。

雅紀「・・・二人とも、そのオーラを放つのをやめろ・・・。」

そう雅紀は言うのであった。

そして休み時間

雅紀「ハア・・・終わった・・・。」

雅紀は少々お疲れ気味の様子。

なのは「お疲れ様なの、雅紀くん。はい、麦茶っ！」

なのはが麦茶を持ってきた。それを雅紀は受け取り、飲んだ。

雅紀「プハア、美味しかったあ。なのは達の苦勞がわかったよ……」

なのは「フッフ 今日休日だったからだけど、そんなには人が来ないの。」

雅紀「でも、なのはは凄いよ。」

なのは「えへへ／／／」

雅紀に褒められ、なのはは嬉しがり、雅紀に寄り添う。

星光の殲滅者「雅紀、お疲れ様でした。これを……」

そこに星光の殲滅者が現れ、雅紀にタオルを渡す。

雅紀「あ、ありがとう、星光。それにしても、星光、初めてなのに接客よかったな。」

星光の殲滅者「いえ……私は、そんなにうまいというほどではない……」

雅紀「でも、良かったよ。」

星光の殲滅者「……ありがとうございます。／／／」

雅紀に言われ、頬を赤く染めた顔を傾けて、もじもじする。

なのは「……雅紀くん／／／」

星光の殲滅者「雅紀／＼／」

二人に寄り添られる雅紀。そんな雅紀をある人影が見ていた。

恭也「……雅紀……貴様、なのはだけに止まらず、星光にまで……許さんぞっ！！！」

恭也は、怒りを爆発させて、雅紀の所に行く。

恭也「雅紀っ！！」

雅紀「は、はい、何でしょうか……？」

恭也「今すぐ俺と一緒に道場に来いっ！！！！」

雅紀「えっ！？なぜですかっ！！！？」

恭也「貴様がなのはを独占し、さらには、星光にまで手を挙げたのだからだっ！！こいつ！！！！」

雅紀「えっ！ちよっ！！」

恭也は雅紀を引っ張ってその場を後にした。

なのは「ちよっ、お兄ちゃんっ！？」

星光の殲滅者「雅紀を連れて行かないでくださいっ！！」

ソレを見た二人は雅紀達の後を追った。

道場

雅紀「あ、あの……本当にやるんですか？」

現在、雅紀と恭也は竹刀を持ち構えている。

恭也「当り前だ……。貴様をなのはと星光に近づくと虫として排除してやる……！」

雅紀「凄い怖いんですけどっ!!?」

恭也「行くぞっ!!!」

恭也はすごい勢い接近し、二刀の竹刀を雅紀にぶつける。

雅紀「くっ!!」

雅紀はすかさず防御する。

恭也「ほう・・・なかなかやるようだな。」

雅紀「それほどでも・・・!」

恭也の繰り出す攻撃を防御する雅紀。そして互いに距離を置く・・・その時・・・

なのは「雅紀君っ!頑張って~~~~っ!!」

星光の殲滅者「雅紀っ!頑張ってくださいっ!!」

なのはと星光の殲滅者が雅紀にエールを送った。それを耳にした恭也の殺気は増した。

恭也「貴様は・・・生きて返してはおけんっ!!!!」

恭也は神速の速さで接近し、雅紀を翻弄させる。

雅紀「(速い・・・この人、本当に人間か・・・!?)」

そう思いながらも、雅紀は徐々に恭也の速さに慣れ、突き、斬るを竹刀で受け止める。

恭也「お前、本当になかなかやるな。俺の速さに追いつけるとはな。

「
雅紀「どうも……。では……。こっちも反撃、行きますよっ!!」

今度は雅紀が恭也に攻撃を繰り出す。その剣さばきは並ではなかった。

恭也「(ぐっ!こ、コイツ……。何て剣筋しているんだ……。俺でも避け切れない……。それにあの眼……。幾多の戦いをくぐりぬけた目だ……。!だが……。)」

雅紀「(さっきから攻撃しているのに……。この人……。すべて受け止めている……。やっぱり、並の人間ではない……。!だけど……。)」

恭也・雅紀「(負けられないっ!!!)()

だんだんヒートアップする二人。

なのは「す、凄いの……。)」

星光の殲滅者「雅紀は普段の姿でも、相当強いんですね。)」

二人は驚愕の目で見ている。両者の一撃は衝撃波となって辺りを襲う。

恭也「くっ!!」

雅紀「ハッ!!!」

徐々に恭也が押され始める。そして、お互い距離を置いた。

恭也「ハア・・・ハア・・・次で最後だ・・・！」

雅紀「そうしましょう・・・！」

互い構え・・・そして・・・

恭也「てやああああああっ！！！！」

雅紀「ハアアアアアアアッ！！！！」

全力の一撃を放つ。そして、二人はその場で止まる。

雅紀「・・・」

恭也「・・・俺の・・・負けの・・・ようだ・・・」

そう言うと、恭也は静かに倒れる。

雅紀「・・・」

雅紀は見てみると、持っていた竹刀が折れていた。

雅紀「（あの時・・・一瞬でも斬るのが遅かったら・・・やられたのはこっちだ・・・）」

と思いつながら竹刀を見つめている・・・

なのは「雅紀くんっ！」

星光の殲滅者「雅紀っ！」

二人が雅紀に抱きついてきた。

雅紀「な、なのはっ！？星光っ！？」

なのは「雅紀くんっ！凄いのっ！！お兄ちゃんを倒すなんてっ！！」

雅紀「……でもまだまだだ。俺も……。」

と雅紀は呟いていると……

士郎「雅紀君、すごいな。恭也に勝つとは……。」

？「私も帰ってきた時物凄い音がしたから見てみたら……凄いと
とになってたなあ。」

と士郎ともう一人、メガネをかけた女の人 came。この人、なのは
姉の「高町 美由希」だ。

雅紀「士郎さん……それと、どちらさん？」

美由希「あっ、自己紹介がまだだっってねっ！私はなのはの姉の美由
希よ、よろしくね、雅紀くんっ！！」

雅紀「はい……てゆうか何でおれの名を？」

美由希「なのはから聞いてね。いつも楽しそうに言うのよ。ふ〜

ん・・・」

と美由希は雅紀を見る

雅紀「あの・・・何か？」

美由希「なるほど・・・。なのはが好きになるのもわかるなあ。だつてこんなにかっこいいもんね！」

なのは「ちよつ、お姉ちゃんっ！」

となのはは頬を赤く染める。

雅紀「・・・。。。。。」

と雅紀はこの状況にどう反応したらいいのか迷い中・・・

士郎「もう遅いし家に戻ろう。恭也は俺が起こしておくから、雅紀君は戻って体を休めていなさい。」

雅紀「あ、はい。お言葉に甘えて。」

と言い雅紀は道場を後にしたのだった。

そして、お風呂・・・

雅紀「はぁ・・・こりゃあ筋肉痛になりそうだなぁ・・・」

と雅紀は風呂につかっている。すると・・・

?「おじやましまーすなのっ!!」

と声が聞こえた途端扉が開いて誰が入ってきた。

雅紀「なっ!!おまえらっ!!」

と雅紀の目の前になのはと星光の殲滅者が全裸で立っていた。タオルは巻いているけど・・・。

なのは「えへへ きちゃったの・・・」

星光の殲滅者「どうも・・・」

雅紀「なぜ入ってくるんだっ！？しかも星光は二回目だしっ！！！！
／／／」

雅紀は慌てて風呂からあがりこの場を後にしようとするが・

ガシッ！

なのは「逃がさないのっ！！」

星光の殲滅者「雅紀、諦めて私達と入ってください・・・／／／」

と二人に両手を掴まれ逃亡失敗。そして風呂に引つ張られる。

雅紀「ぎゃ~~~~~~~~っ！！！！」

と雅紀はまたしても、女の子と風呂に入ったとな・・・。

そして、なのはの部屋

雅紀「……そう言えば俺……どこで寝るんだ？」

なのは「雅紀くん、何のために私の部屋に来たかわからない？」

となのはが言う。

雅紀「ま……まさか……」

雅紀は何やら感ずいたようだ。

なのは「……一緒に寝るの……」

星光の殲滅者「私も一緒に……」

と二人はまるで誘うかのように唇に触れて言う。

雅紀「……それでは、また、あし……」

なのは「逃がさないのっ！」

星光の殲滅者「一緒に寝てくださいっ！」

二人は部屋を後にする雅紀を捕まえ、ベッドに押し倒す。

雅紀「うわっ！ってこんなとこ、誰かに見られたら・・・。」

なのは「心配無用なの！お母さんに許可得たからっ！」

星光の殲滅者「雅紀、観念して私達と寝てください。」

雅紀「・・・もう・・・好きにしてくれ・・・。」

と観念した雅紀・・・。二人は上機嫌で雅紀の隣にそれぞれ横になる。そして部屋の明かりを消す。

なのは「・・・雅紀くん、今日は楽しかったよ。」

雅紀「なのは・・・。」

星光の殲滅者「私も・・・今日は楽しかったです。」

雅紀「星光・・・。」

暗くてわからないが二人は今、頬を赤く染めているのだろう・・・。

なのは「なんだか、落ち着くなあ・・・。」

雅紀「？」

なのは「こっやって雅紀くんの鼓動が感じていると・・・心から安心できる・・・／／／」

星光の殲滅者「私もです……。こんなに安心できるのは初めてです。
。。。／／／」

雅紀「／／／」

なのは「また明日ね。雅紀くん／／／」

星光の殲滅者「良い……。夢を。／／／」

チュツ

と二人は雅紀の頬にそれぞれキスをし。その後眠りに着いた。。

雅紀「……。前の世界でこんなことされなかったな。／／／」

と雅紀はドキドキした。。

雅紀「……。ありがとうな……。なのは……。星光。／／／」

と雅紀は二人に礼を言い、眠りに着いた。

翌日……。この光景を恭也に見られて道場でフルボッコされたのは
言うまでもない。

特別編第1話（後書き）

さてと・・・書けたぜ・・・なのは編・・・。

雅紀「おいつ！最後はひどかったぞっ！作者っ！！」

さて・・・憎たらしいハーレム男はほっとして・・・次回の泊り先は・・・もちろんこの人・・・我らの執務官・・・フェイトだっ！！お楽しみにっ！！！！

雅紀「無視するなァッ！！」

アリス「私の出番がないよぉ・・・グス・・・。」

特別編第2話

なのはの家に泊った後、雅紀はフェイトの家に向かった……。

雅紀「うーん……このあたりかな……」

と雅紀は住所を頼りに歩く……

雅紀「……此処かな……？」

と雅紀の目の前に、マンションがあり……住所では此処をさしている……

雅紀「とりあえず行ってみるか……」

そして雅紀はマンションの中に入り……フェイト宅に向かう……

雅紀「確か……此処だ……」

と雅紀はチャイムを鳴らす……すると……

？『はい……どちら様ですか？』

と声がし……

雅紀「フェイトさんの友達の、木利野 雅紀ですけど……」

？『あー……君が……。ちょっと待っててね……』

としばらくすると……

雷刃の襲撃者「雅紀……っ!!」

と勢いよく扉が開き、中から雷刃の襲撃者が現れ、雅紀に抱きつく。
。。

雅紀「うわっ! 雷刃、おはよう……というか抱きつくのやめて……」

雷刃の襲撃者「いやだっ! 僕、まだ雅紀にギュッ! て抱きつきた
いつ!! / / /」

と雷刃の襲撃者が言っていると……

フェイト「雅紀おはよう……」

とフェイトが来た……

雅紀「あ、フェイト……おはよう……」

フェイト「うん……それと……雷刃……いい加減、雅紀
に抱きつくのやめなさい……」

雷刃の襲撃者「え……良いじゃんっ! 雅紀に抱きつくの……」

フェイト「そうしているのなら……覚悟はいい……?」

雷刃の襲撃者「すみませんでしたっ!!」

と勢いよく雅紀から離れる……。

フェイト「もう……さ、雅紀上がってね……。」

雅紀「は、はい……。」

と雅紀は家に入る……

？「あらいらっしやい〜。」

とそこに現れたのは、翠色の髪をした……二十代の美人な女の人
が現れる……。

？「私は、フェイトの母をやっている……リンディ・ハラオウン
よ……よろしくねっ。」

と言った時……雅紀は硬直する……

雅紀「え……お母さん……？」

リンディ「ええ……。そうよ……。」

雅紀「……お姉さんにしか思えなかった……。」

と雅紀は素直に言う……と……

リンディ「あらそう思っていたの？」

雅紀「はい……お若いと人って思いましたので……。」

リンディ「照れるわね。それに素直で良い子ね。．．．フェイトが好きになるのも無理はないわね。．．．。」

フェイト「ちょ。．．．母さんっ！／／／」

とフェイトは顔を真っ赤にして言う。．．．と。．．．

雅紀「!!!?」

物凄い。．．．殺気を感じ振りかえると。．．．

クロノ「。．．．。．．．。」

クロノが静かに殺気を放っていました。．．．。

雅紀「あ。．．．あの。．．．俺に何か。．．．?」

クロノ「。．．．いや。．．．このまま君を拘束しようと思ってね。．．．デイカオス。．．．」

雅紀「!!!」

と雅紀は警戒する。．．．。

クロノ「君の事は。．．．あの、GG事件で見ている。．．．そう警戒するな。．．．。」

そう。．．．あの時。．．．クロノは艦のなかである事件。．．．ギルド・グライアが起こした事件を見ていたのだ。．．．当然、雅紀がリ

インフォースとユニゾンした姿も目撃している……。
因みに……GG事件とは……ギルド・グライア事件と言うのを略
したものなのだ……。

雅紀「……………そうですか……………。ですが……………なぜそんな殺
気を放っているのです……………?」

クロノ「いやな……………君がフェイトと親しんでいるのを見て少し
な……………」

と言う……………クロノもまた……………恭也と同じく……………シスコン
なのだ……………。

クロノ「シスコンで言うな……………」

失礼しました……………じゃあKY……………

クロノ「KYと言うのもやめろッ!」

雅紀「さつきから、誰と話しているんだ……………?あの人……………?」

フェイト「さ、さあ……………?」

雷刃の襲撃者「危ない橋を渡らないように願おうよ……………」

と三人は言う……………。

フェイト「あ……………あのさ、雅紀……………」

雅紀「ん?何だ、フェイト?」

フエイト「今日、遊園地なんて……どうかな？」

雷刃の襲撃者「僕も行きたいっ！」

雅紀「遊園地か、良いよ。」

と雅紀は言つと、二人は喜びあう……

フエイト「じゃ、じゃあ、着替えてくるから……待っててね……？」

雅紀「わかった。」

雷刃の襲撃者「覗き見すんなよ。ま、僕は一回雅紀に裸見せたことがあるから良いけどねっ／＼／」

雅紀「のぞき見しないからっ!!！」

と強く否定。

二人は部屋に向かった……。

クロノ「君はあの、雷刃の襲撃者というマテリアルにも好かれていたのか……？」

雅紀「彼女はもう……マテリアルじゃなく、人間です。クロノさん……、そう言わないでください。」

クロノ「失礼した……。」

雅紀「俺は外で待つてようかな。」

と雅紀は外に出て待つ……。そして約十分後……。

フェイト「お、お待たせ……。」

雷刃の襲撃者「待たせてごめんね。」

と声がし、振り返ると……。

雅紀「／／／」

雅紀は二人に見惚れた……。

フェイトの方は、黄色いワンピースに黒い服を着ていた……。雷刃の襲撃者は蒼い半そでに、黒い半ズボンをはいていた。今の二人はまるでモデルさんのようだ……。

雅紀「二人とも……綺麗だな／／／」

と雅紀は頬を染める。

フェイト「／／／」

雷刃の襲撃者「えへへ／／／」

二人も雅紀に言われ、頬を染める……。

雅紀「と、と言うわけで、行くかっ!」

フェイト「うんっ。」

雷刃の襲撃者「だねっ！」

と三人は行った。それを背後から見ている人がいた・・・。

クロノ「うゝむ・・・あいつが二人に何かしないか心配だ・・・。」

リンディ「クロノの、シ・ス・コ・ンツ。」

クロノ「母さんっ!!！」

遊園地

雅紀「へえ・・・此処か・・・」

フェイト「そうだよ、少し遠いけど、面白い所で有名なんだ。」

雷刃の襲撃者「本当に面白そ〜っ！行こうよ、雅紀っ！」

と雷刃の襲撃者は雅紀を引っ張る。

雅紀「そんな慌てて引っ張るな。」

と二人は遊園地に入って行った・・・。

フェイト「もう、待ってよ、二人ともっ！」

とフェイトはすかさず追いかける。

雷刃の襲撃者「うわあ・・・雅紀、初めて見る物があるっ！！！」

雅紀「だなあ・・・。じゃ、最初何に乗る？」

雷刃の襲撃者「あれっ!」

と雷刃の襲撃者が指をさしたのは、ジェットコースター。しかも速そう。

雅紀「よし、アレ乗るか。ってフェイト、どうした?」

と雅紀はフェイトの方を見ると、顔を真っ青にしていた。

雷刃の襲撃者「もしかして、乗れないんじゃないのか?」

フェイト「そ、そんなことないっ!」

と強く否定するフェイトだが、顔は真っ青の状態だ。

雅紀「フェイト、あんまり無理するな。此处で待っててもいいんだぞ?」

フェイト「い、いやっ!私は乗るよっ!」(雅紀と一緒にいたいしっ!!)

雷刃の襲撃者「ふん。(ちえ)、せつかく雅紀と二人きりになれると思っただのにな)」

と二人はそう思う。

雅紀「わかった……。」

と三人はジェットコースターに乗る。席は前の方で、フェイトと雅紀は隣同士で、雷刃の襲撃者は後ろの方だ。

そして動きだす。

雷刃の襲撃者「わくわくっ！」

雅紀「何かドキドキしてきたな。」

フェイト「あうあう……。。」

そして頂上に着き、一気に落下する。

雷刃の襲撃者「きゃあ~~~~っ!!！」

雅紀「わあ~~~~っ!!！」

フェイト「ひゃあ~~~~っ!!!？」

と二人は楽しむが、フェイトの方は眼を回していた。その時、雅紀の手を強く握る。

雅紀「あ……。。(フェイトの手って、柔らかい。そして、温かい。……って何言ってるんだっ！俺はっ!!!/ノノノ)」

と青春真っ盛りな雅紀は思う。そして、終着点に着き、終わる。

雅紀「ふえ、フェイト、大丈夫かっ!？」

フェイト「きゅ~~~~……。。」

フェイトからは返事無し。そりゃそうだ、目を回せているのだから。

雷刃の襲撃者「ありゃあ、こりゃ重傷だなあ。乗らなきゃよかったのに。」

雅紀「そんなこと言ったられないって……。どこか休める場所、探さなきゃ。」

と雅紀はフェイトに肩車をして、休める場所を探した……。

しばらくして……

フェイト「う、う……ん……」

フェイトは眼を覚ました。

雅紀「お、フェイト、気が付いたか。」

と目の前に雅紀の顔があつた……。

フェイト「雅紀……ってなにか頭に乗っかっているような……」

」。

雅紀「ああ、それさ、俺が膝枕をしているからだ。」

フェイト「えっ！？／＼／」

とフェイトは顔を真っ赤にする。

雅紀「うおっ！どうした、フェイトっ！顔が真っ赤だぞっ！？」

フェイト「い、いや、何でもないよ……。(雅紀の膝枕……。ハ
ウウ……。／＼／)」

雷刃の襲撃者「雅紀」。飲み物勝ってきたよ。」

とそこへ雷刃の襲撃者が来た。

雅紀「ありがとう。フェイト、はいこれ。」

と雅紀はジュースを渡す。

フェイト「あ、ありがとう……。。」

とフェイトは体を起こしてジュースを飲む。

雅紀「プハア……。美味しい。」

雷刃の襲撃者「そう言えばさあ、雅紀、仮面ライダーっていうのを
教えてほしいんだけど。」

雅紀「え、．．ああ、良いぜ。まずどこから話すか．．．。」

と雅紀は雷刃の襲撃者に仮面ライダーの事を話す．．．。その光景をフェイトは見ていた．．．。

フェイト「（雅紀．．．仮面ライダーの事を話すと、まるで小さい子供のようなあ．．．。でも．．．そこが雅紀らしい．．．／＼／＼）」

と知っている．．．。

ピーピーピー．．．

と音がした。

フェイト「はい、こちら、Ｔ・ハラオウンですっ！」

とフェイトは通信した．．．。相手はシャーリーだった。

シャーリー「お休みな中、失礼しますっ！！フェイトさん、今、違法魔導師を見つけましたが、人数が多いんですっ！お願いしますかっ！？」

フェイト「了解っ！」

と通信を切る

フェイト「ごめんね．．．私、用事が出来ちゃった。」

雅紀「良いよ、そんなの．．．、それに、俺も手伝うぜ。」

フェイト「えっ!?!」

雅紀「仮にも俺、最強最悪のライダーだ。。。強いぞ?」

雷刃の襲撃者「微弱ながら、僕も助太刀するよっ!」

と二人は言い、フェイトは、

フェイト「わかった。。。じゃあ行こうっ!」

と返事をし、三人は遊園地を後にした。。。

とある管理世界

フェイト「ハアアアアッ!!」

とすでに戦闘をしているようで、フェイトはバルディッシュを振るう。

雷刃の襲撃者「そりゃあっ!!」

と雷刃の襲撃者もバルディッシュに似たデバイスを振るう。

雅紀『そらよっ!!』

とディカオスに変身した雅紀も武器を振るって戦う。

フェイト「後残るは、あの中にいるわずかな人数だけだっ!」

雷刃の襲撃者「片っ端に殺すよっ!」

雅紀『いやっ!殺しちゃダメだからっ!!』

と三人は言いながら走る。すると、

魔導師「くっ!プロジェクトFのガキかっ!!」

とその場にいた魔導師が言った。

雅紀『プロジェクトF?』

魔導師「知らないなら教えてやるっ!!そのフェイト・T・ハラオウンは、母、「プレシア・テストロツサ」が自分の子供に似せて作った、「人造魔導師」!クローンなんだよっ!!」

と魔導師が叫ぶ……。デイカオスは後ろを振り向くと、フェイトは絶望したような顔をしていた。

魔導師「ヒヤハハハっ！！絶望したかつ！ハハハハハ・・」

雅紀「だからどうしたよ……。？」

魔導師「ハ……。？」

雅紀「コイツ……。フェイトが人造魔導師……。？そんなの関係のない話だろっ！！フェイトはフェイトだっ！！今ここにいるフェイトは、そのプレシアって人の子のクローンじゃなく、一人の人間だっ！！！！それを笑うんじゃねえエエエツ！！！！！！！！」

とデイカオスは激怒する。

フェイト「雅紀……。」

フェイトは少し、涙目になる。

雅紀「それを平気に言うてめえは……。絶対え許さねえ……。！！」

『ファイナルアタックライド・デイ・デイ・デイ・デイ・デイカオスッ！』

とデイカオスはファイナルアタックライドを発動、勢いよくジャンプしキックの態勢に入る。

魔導師「く、来るな~~~~っ！！！！」

雅紀『死をもってその罪を償えッ！！デイメンションブレイカー
————！！！！』

とデйкаオスは魔導師に蹴りを放ち、煙が舞う。。

魔導師「あ……ああ……」

煙が晴れると、そこには、失神して倒れる魔導師の姿と・

雅紀『はずしてやったんだ……。感謝しろ。』

デйкаオスの姿だった。。。

数時間後、フェイト宅

雅紀「フェイト、何だ？話って？」

今、雅紀はフェイトに呼ばれブランダにいる……。

フェイト「うん……。さっきの事だけど……。」

雅紀「プロジェクトFの事が……？」

フェイト「うん……。雅紀……私の事、嫌いに……。」

雅紀「バーカ。」

フェイト「あいたっ！」

雅紀はフェイトにデコピンを食らわす。フェイトはいきなりの事だったので驚いた。

フェイト「ま、雅紀!?!」

雅紀「んなので嫌いになんかならねえよ。第一、おまえは俺と変わらない人間なんだぜ？少し生まれ方が違うだけで、他は何一つ普通の人間だ。」

フェイト「い、良いの・・・？」

雅紀「当たり前。お前は人間だ。俺がそう言う。」

フェイト「雅紀っ！」

雅紀「うおっっ！？」

フェイトにいきなり抱きつかれ驚く雅紀・・・その時、泣き声があった。それはフェイトからだ・・・雅紀は見ないように上を向く・・・すると・・・

フェイト「雅紀・・・。」

雅紀「ん？」

フェイト「・・・ん／／／」

雅紀「んっ！？／／／」

フェイトが雅紀にキスしてきた。不意打ちキスをされた雅紀は驚く・・・やがて唇を離す。

雅紀「ふえ、フェイトっ！？／／／」

フェイト「ありがとね、雅紀／／／」

雅紀「／／／」

フェイト「フフ／／／」

とすると・・・

？「何しているのかなあ・・・二人とも・・・？」

と声がし、二人は振り向くとそこには雷刃の襲撃者がいた・・・。

雅紀「雷刃！？」

フェイト「何時の間につ！？」

雷刃の襲撃者「さっきからだよ・・・。で、二人して何してたのかなあ・・・？僕にはキスし合っていたように見えただけど・・・？」

雅紀「いや・・・それはだなあ・・・。」

雷刃の襲撃者「ずるいよっ！フェイトばかりっ！！ぼくにもやらせろっ！！！！」

と雷刃の襲撃者は雅紀の方へ走っていき、雅紀を捕まえ、両手を頬に添え、そして・・・

雷刃の襲撃者「ん・・・！！／／／」

雅紀「んんん！！？／／／」

雷刃の襲撃者が唇を重ねてきた……。離さぬように、雅紀の背中に腕を回し、強く抱く……。

雷刃の襲撃者「ふはあ……。／＼／」

雅紀「雷刃っ！！？／＼／」

雷刃の襲撃者「えへへ、気持ちよかったよ雅紀／＼。さてと……。じゃあお風呂に入ろうかつ！」

雅紀「ハア！！？なぜそうなるっ！！？？」

雷刃の襲撃者「一緒に入った仲だろう……。？フェイトも入ろうよっ！」

フェイト「えっ！？私もっ！！？？」

雷刃の襲撃者「フェイトも雅紀と入りたいんだろっ！？？じゃあいつしよに入ろうよっ！！」

フェイト「いや……。私は……」

雷刃の襲撃者「無理やりだよっ！！」

と雷刃の襲撃者は二人を引っ張ってお風呂に行った……。そしてこの日も、雅紀は女の子とお風呂に入ったという……。

そして、フェイトの部屋

雅紀「また、また女の子と風呂に・・・／／／」

フェイト「雅紀と一緒に入っちゃった／／／」

と二人はゆでダコの状態・・・

雷刃の襲撃者「ハアゝ気持ちよかったゝゝ・・・。」

一方の雷刃の襲撃者はご満足の様子。

雅紀「……………そう言えば俺……………何処で寝るんだ……………?」

雷刃の襲撃者「今夜は此処で僕らと寝るんだよ、雅紀?」

雅紀「……………失礼しました……………」

雷刃の襲撃者「こらッ!逃げんなッ!」

と雷刃の襲撃者は雅紀を捕まえてベッドに寝かせる……………そして……………
なんやかんだでフェイトも入る……………

雅紀「なんでこんな……………」

雷刃の襲撃者「あはは……………やっぱり雅紀と寝るの気持ちいい……………
な……………」

と雷刃の襲撃者は就寝……………。

雅紀「はあ……………すまない、フェイト……………」

フェイト「うん……………気にしてないよ……………」

雅紀「今日は……………なんだかんだで楽しかったな……………」

フェイト「うん……………途中まではね……………」

雅紀「あゝ、まあな……………」

フェイト「……………お休み……………雅紀／＼／」

とフェイトは雅紀にキスをし、就寝・・・。

雅紀「はぁ・・・フェイトもか・・・。にしても・・・俺のどこが好きなんだ・・・？」

とここで鈍感スキルを放つ雅紀・・・

雅紀「まあ・・・良いか・・・お休み・・・」

雅紀は就寝した・・・。

翌日、クロノに見られてデバイス攻撃をされたのは言うまでもない。

特別編第2話（後書き）

さてと・・・フェイト編終了・・・。次回は未来の部隊長、はやての家ですっ！お楽しみに！！

特別編第3話（前書き）

投稿遅れてすいませんでしたっ！それでは始まりッ！！！！

特別編第3話

雅紀「はぁ・・・二日もえらい目にあつたな・・・。」

現在雅紀ははやての家に向かっているが、顔を見てみると、どこか切り傷があつた。これは先日の恭也とクロノにフルボッコとデバイス攻撃を受けた跡だ・・・。

雅紀「今日は何もなければいいんだが・・・と此処か。」

雅紀ははやての家に着き、チャイムを鳴らすと、

？『はい、どちら様ですか？』

雅紀「はやての友達の 木利野 雅紀ですけど・・・。」

？『はいはい、それじゃドアを開けるから待っててね？』

そう言われ、ガチャンツと音が鳴り、雅紀は扉を開けた・・・その時、

？「うらあああああつ！！！！」

雅紀「えっ？ぐはあああああつ！！！！！？」

突然何者かがハンマーで雅紀を攻撃してきた。雅紀は突然だったの
で攻撃をまともに受けた。

？「てめえ、誰だっ！？はやてに何か用かつ！！！！？」

少女が叫んでいると奥から、

はやて「雅紀君、来てくれたんやんね……って何しとるのっ！
？ヴィータッ！！？」

はやては急いで雅紀に近づき起こす。

ヴィータ「あん？はやて、コイツは誰だよ？」

はやて「雅紀君やつ！ヴィータだって知ってるやんか！！！」

ヴィータ「こんなガキ、あたしは知らね……。てちよつと待て……
コイツは確か……。」

ヴィータはジッと雅紀の顔を見つめ……

ヴィータ「あーっ！思い出した！コイツ、あの時の仮面野郎だっ
！！！」

思い出したのか、雅紀を指差しながら言う。

はやて「もうっ！いちいちデバイス攻撃をしないのっ！！雅紀君起
きてなっ！」

はやては必死で雅紀を起こそうとしていると……

闇統べる王「うるさいぞバカ者ども……。て雅紀、どうしたのだっ
！？そこで倒れてっ！！？」

奥から闇統べる王が現れて、雅紀を見ると急いで駆け寄る。

はやて「ヴィータがなあ・・・」

闇統べる王「・・・だいたい分かった。鉄槌の騎士よ・・・貴様には死という罰を与えねばなるまい・・・!」

ヴィータに物凄い殺気を放ちながらデバイスを起動させる闇統べる王。

ヴィータ「じよ、上等だっ!あたしがためえをぶっ叩くっ!」

負けじとヴィータも殺気を放つ・・・その時、

?「やかましいぞっ!お前たちッ!」

何者かが二人に拳骨を食らわした。

ヴィータ「いつて〜っ!何しやがるんだっ!シグナムッ!」

闇統べる王「そうだぞっ!!烈火の将!!」

二人の頭に拳骨を食らわしたのは、シグナムだった。

シグナム「主はやての友人の前で何を騒いでいるのだ・・・特に、ヴィータは失礼にもほどがあるぞ・・・」

ヴィータ「う、うるせえっ!つつかコイツ、あの時の仮面野郎なんだぞっ!」

シグナム「何？丁度いい……。コイツと一度手合わせをしたかったところだ……。」

闇統べる王「バトルマニアが……。」

三人は言っている……

雅紀「痛てて……。」

はやて「あつ、雅紀君、大丈夫っ!？」

雅紀「あ、ああ……。とうか一体何が起きたんだ？」

はやて「ちよつとね……。ヴィータ、謝りなさいっ!」

ヴィータ「何であたしが？」

はやて「私のお友達にハンマーで叩いたからや……。謝りなさい……。」

ヴィータ「わ、わかつたよ、はやてっ!そんな怖い声で言うなよっ!……!」

ヴィータは雅紀の前に行き……

ヴィータ「さっきは悪かつたよ……。」

雅紀「あ……。いや良いよ、別に、間違っただけだしさ……。」

二人は話している……

シグナム「お前、名前は何と言っ?」

雅紀「はい、木利野 雅紀ですけど・・・。」

シグナム「木利野、今から私と模擬戦をしてくれないか?」

とシグナムが言ってきた。

雅紀「模擬戦・・・ですか?」

シグナム「ああ。一度でいいから、お前と闘ってみたかったのだ。お願いできるか?」

雅紀「えくと・・・まあ良いですよ?」

シグナム「ホントか?!?では早速模擬戦を・・・」

はやて「シグナム、雅紀君はなのはちゃんやフェイトちゃんの家泊って疲れてるんや。模擬戦はまた今度な」

シグナム「うっ・・・わかりました、主はやて。」

はやてに言われ、シグナムはしぶしぶ下がった。

はやて「雅紀君も、シスココンビにやられたんやろ?」

雅紀「ああ・・・まあな・・・。」

はやて「今日はゆっくりしていつて。此処にはシスコいないし。」

雅紀「現に一回玄関でやられたが……。まあいいか。」

二人は部屋に入ると、奥からシャマルがやってきた。

シャマル「あらいらっしやい。」

はやて「シャマル、この人が雅紀君や。」

シャマル「あら、貴方がはやてちゃんのはやてちゃん、良い彼氏さんができたんですね。」

はやて「ちょっ！シャマル、そんなじゃあ……／＼／」

シャマルにそう言われ、はやては頬を赤く染める。

闇統べる王「そくだぞっ！雅紀は王である我の男だっ！！はやての男ではないっ！！！」

はやて「て、闇まで何を言うかつ！？雅紀君は私のやでっ！！！」

闇統べる王「いやっ！我のだっ！！！」

互いに睨み合いながら言い合った。

雅紀「あ、あの……喧嘩はやめたほうが……」

はやて・闇統べる王「雅紀（君）は黙って（て）（いろ）っ！！！！」

雅紀「そうですか……。」

二人の剣幕に押され、雅紀はため息を吐いていると……

？「雅紀、久しぶりだな。」

雅紀「リインフォース……。」

雅紀の前にリインフォースが現れる。

リインフォース「お前には、礼を言う。ありがとう。」

雅紀「え？いや、別に礼なんか……。」

リインフォース「こうして主や守護騎士たちとられるのも……お前のおかげだ。だから礼を言う。」

雅紀「そうか……。」

リインフォース「それにしても、主と闇が何か言い争っているが……どうしたのだ？」

雅紀「リインフォースは知らない方がいいと思う……。」

リインフォース「？」

と話していると……

？「貴方がお姉ちゃんを助けてくれた人ですか……？」

奥から手のひらサイズの人間が飛んできた。

雅紀「なっ！？何だ、妖精かつ！！？」

ソレを見た雅紀は驚くしかなかった。

？「妖精ではありませんっ！私は、二代目祝福の風「リインフォース・ツヴァイ」ですっ！」

雅紀「ツヴァイ・・・？つかリインフォースと同じ名前？」

リインフォース「この子は私の妹だ・・・。」

雅紀「妹っ！？」

リインフォース「ああ。主が私の欠片で作り出した、ユニゾンデバイスなんだ。因みに、私もこのように小さくなる。」

そう言うと、あっという間にリインフォースはリインフォース・ツヴァイと同じくらいに小さくなった。

雅紀「・・・すごい。」

リイン「あっ、因みに私の名前は、長いので、リインでお願いしますっ！」

雅紀「わかったけどリイン、何で俺の頭に乗っちゃってんの？」

今、リインは雅紀の頭に乗っちゃって寝ころんでいるのだ・・・。

リン「雅紀さんの頭、サラサラで、フサフサで気持ちいですう」

雅紀「あ、そう。。。」

リンフォース「全くお前は。。。」

リンフォースは元の大きさにもどり、呆れている。

はやて「ハア・・・ハア・・・もういいわ。。。。雅紀君、こんな感じ
だけど、ゆっくりしてっとな？」

闇統べる王「貴様のせいで、疲れた。。。。。」

いつの間にか言い合いは終わり、二人は息切れを起こしていた。

雅紀「わかった。。。。二人も、休んだ方がいいぞ？」

はちての部屋

雅紀「はぁ・・・こんな感じで、ゆっくりできるとは思わなかったなぁ。」

今雅紀は床に横になっている。

雅紀「うっくん・・・ねむくなってきたな・・・女の子の部屋だから良い香りがするし・・・」

そう言っていると雅紀は目を閉じ、眠ってしまった。

数時間後

はやて「雅紀君、ご飯やよ〜。．．．って寝ているし。」

はやてが部屋に入ると、雅紀は眠っていた。

はやて「もう．．．雅紀君、起きてや〜。．．．起きへんなあ。」

はやてが体をゆすつても雅紀は起きない。

はやて「そんなに疲れてるんやなあ。それにしても・・・」

はやては雅紀の顔を見る。

雅紀「ふゆう・・・すぴい・・・。」

雅紀は寝言を立てていた。

はやて「可愛い寝顔やなあ。癒されるわあ。・・・寝てるし、誰もいないから・・・良いかな？／＼／」

はやてはゆっくりと顔を近づける。そして・・・唇が触れ合いかけた・・・その時っ！

闇統べる王「ほう・・・貴様・・・我を差し置いて、なにをやっているのだあ・・・？」

はやて「!?!」

後ろから声が聞こえ、はやてはその場で硬直。

はやて「や、闇？何でここに？」

闇統べる王「貴様が来ないから。そして、雅紀に何かしているんじゃないかと思ってきたのだ。予想通り、雅紀の唇を奪おうとしていたな？」

はやて「えっ、いやね・・・これはね・・・。」

闇統べる王「雅紀の唇を奪っていいのは、王である我だけだ。邪魔をするな、馬鹿……！」

はやて「な、なんやあつ！王だ王だって、闇は普通の女の子やろっ！王じゃあらへんっ！！！」

闇統べる王「ふんっ！貴様も、夜天の主とかほざいて、魔法と出会えなかつたら、貴様もまた普通の人間だったはずだっ！！！」

はやて「なんやとっ！？」

闇統べる王「やるかあっ！？」

互い敵意むき出しの目で睨んでいると……

雅紀「ん……んん。あれ……寝てたのか、俺？」

雅紀は起きたのだ。

はやて「あ、雅紀君。」

闇統べる王「起きたのか。」

雅紀「ん？おはよう、二人とも。」

はやて「おはようて、もうお昼やで？」

闇統べる王「全く……。ホント、居眠り小僧だな、貴様は。」

雅紀「あはは……ごめんよ？もうお昼なのか。」

はやて「もうご飯や、行こう、雅紀君。」

雅紀「ああ……。」

そう返事をして雅紀は部屋を出た。

はやて「……なんか、喧嘩していたのがばからしくなってもうたな。」

闇統べる王「そう……だな……。」

はやて「ごめんね？いろいろと言って。」

闇統べる王「いい。気にするな……。それに我も悪かった……。すまないな……。」

はやて「もうええよ……。じゃあ、下に行こう……。」

闇統べる王「うむ……。」

雅紀「遅くなつてすみません……。」

茶の間に着き、雅紀は皆に謝る。

シグナム「気にするな、五分ぐらいだしな。」

ヴィータ「あたしは待ちくたびれたっ!！」

シャマル「まあまあ、ヴィータちゃん。」

リンフォース「そう騒ぐな、ヴィータ。」

リン「少し、声を抑えてくださいですっ!！」

ヴィータ「何だとおっ!？」

五人は言っていると、雅紀はあることに気付いた。それは・

雅紀「・・・犬だ。」

蒼い犬がいたという事だ。

?「狼だ・・・。」

雅紀「喋ったっ!？」

コレには雅紀も驚く。

ザフィーラ「盾の守護獣・・・ザフィーラだ。」

雅紀「守護獣?」

シグナム「この時代の、使い魔と若干違う存在だ。」

雅紀「なるほど。」

はやて「おまたせや。さてと・・・じゃあいただきますっ！」

はやてと闇統べる王が来て椅子に座り、全員が頂きますを言い、ご飯を食べる。

ヴィータ「相変わらず、はやての料理はギガうまだぜっ！！」

雅紀「おいしいな。」

はやて「うふふ。たくさん食べてな」

シグナム「木利野。」

雅紀「ん？何でしょうか？」

シグナム「模擬戦・・・。」

雅紀「・・・ご飯食べたらやりますんで。」

シグナム「うむっ！」

こんな感じで会話が進んだ。

数時間後・・・お庭

シグナム「此処なら、広いし、十分戦える・・・！」

雅紀「・・・まあ、木刀ですが。」

現在、二人は構え、静かに佇む。そして・・・

シグナム「ハアアアッ！」

雅紀「うおおおっ!」

一気に接近しぶつかり合った。

ヴィータ「アイツ、シグナムと互角じゃねえかつ!」

リン「凄いですう〜!」

シャマル「凄いわねえ、あの子。」

その場居た三人は驚愕の表情を浮かべると・

リンフォース「だが・・・」

ザフィーラ「わずかだが、シグナムが押しているな。」

二人は言う。はやてと閻統ベル王はというと・

はやて「(雅紀君、かつこいいわ〜! / / /)」

閻統べる王「(さすが、我が惚れた男だ・・・! / / /)」

心中で黄色の声を上げていた。

雅紀「くっ! さすがはヴォルケンリッターの一人っただけはありま
すね・・・!」

シグナム「フツ! だが、お前も私と少しはやれるようだが・・・!」

雅紀「いえいえ!」

二人は話し合いながらぶつかり合う。

ヴィータ「……なんかあいつら……楽しんでねえか……？」

リン「リンもそう思います。」

シャマル「雅紀くんも……バトルマニアなんでしょうか？」

リンフォース・ザフィーラ「……違う気がする……」

言っているが、実際にシグナムと雅紀はこの模擬戦を楽しんでいた。

雅紀「何でしょうか、楽しく感じてきますよ！」

シグナム「私もだ！こんな心躍る模擬戦は、テストロッサ以来か……！」

雅紀「フェイトと闘った事があるんですか？」

シグナム「ああ。五年前の闇の書事件でな。テストロッサとは何度も対等したのだ……。」

雅紀「そうですね……。」

このように話し合いながらぶつかり合う二人は……息切れを起ささないのか……。不思議だ。

シグナム「そろそろ、終わりにしよう……。」

雅紀「え・・・？」

シグナムは構え、そして・

シグナム「紫電、一閃っ！」

炎こそ纏ってないが、シグナムの紫電一閃ぐらいの破壊力のある一撃。

雅紀「くっ！」

雅紀は防御したが、木刀にヒビが入り、徐々に広がる。そして・

バガアンツ！

木刀は音を立てて破壊され・

雅紀「うわあっ！」

シグナムの一撃をくらった雅紀は吹っ飛んだ。

ザフィーラ「決着がついたな。」

ヴィータ「うわあ・・・アイツ痛そうだなあ・・・。」

リインフォース「だがとつさに後方に飛んで威力を弱めたのは良い判断だ。」

シャマル「兎も角、手当てしないと・・・。」

シグナムは倒れている雅紀の傍に行く。

シグナム「なかなか良い模擬戦だった……。礼を言っぞ。」

雅紀「いえ。足元にも及ばんなあ……。」

シグナム「だが、私も若干だが焦った。良い動きをしていたしな……。」

雅紀「あれで焦っていたって……。」

シグナム「また、頼めるか？」

雅紀「まあ……時間があれば……。」

そう言っている……

はやて「雅紀君っ！」

闇統べる王「雅紀っ！」

と二人が駆け寄ってきた……

はやて「大丈夫だった？」

雅紀「ああ、大丈夫……。」

闇統べる王「烈火の将……貴様、やり過ぎだぞ……！先の一撃は……！」

闇統べる王はシグナムに向けて殺気を放っていると、雅紀が止めに入った。

雅紀「闇、落ち着け。それに、シグナムさんも加減してくれたし。」

闇統べる王「何・・・？」

シグナム「わかっていたか。」

雅紀「はい。」

はやて「そうかぁ・・・。なんや焦ったわぁ。」

雅紀「ごめんね。」

闇統べる王「それにしても、もう夕方だぞ。家に入ろう。」

雅紀「ああ。」

闇統べる王「それとなんだが・・・雅紀よ、入るぞ。」

雅紀「何が？」

闇統べる王「・・・風呂にだ。／＼／」

雅紀「ハイイツ！！？／＼／」

闇統べる王「一緒に体を洗った仲だ。入れるだろう？／＼／」

雅紀「無理無理っ！／＼／」

闇統べる王「貴様はホントに初心な奴だなあ。まあいい、入るぞ。今日も体を洗ってやるからな？／＼／」

雅紀「あ~~~~~れ~~~~。・・・」

闇統べる王に引つ張られていった雅紀。

はやて「ちよっ！待ってやっ！私も雅紀君と入りたいっ！！そんなでもって雅紀君の体を洗いたい！！！！／＼／」

ソレを追うはやて。

シグナム「・・・主、恥ずかしくないのですか？」

ソレを見たシグナムは少し、自分の主に呆れていた。

雅紀「また女の子と入ってしまったし……また一緒に寝てしまうのか……俺はあ……／＼／」

闇統べる王「何をボソボソと言っているのだ？夜を共にするのも良いことだぞ？」

雅紀「うう……／＼／」

はやて「雅紀君は純情やなあ。それでも大好きや／＼／」

雅紀「はやて……／＼／」

闇統べる王「我もだ。馬鹿ではあるが真っ直ぐな貴様に惚れているのだ／＼／」

雅紀「闇……／＼／」

はやて「まあ兎も角、お休みな……雅紀君……」

闇統べる王「ゆっくりと眠るがいい……」

二人は雅紀の頬にそれぞれキスをし……眠りに着いた。

雅紀「二人もか……。はあ……。恥ずかしい……。//」
言いながらも雅紀も就寝。

翌日……。この光景を見たヴィータとシグナムに軽く説教をくらったのは言うまでもない。

特別編第3話（後書き）

さてと・・・めっちゃ大変だった、書くのがあ・・・。

雅紀「あ、そうなんだ・・・。」

ふう・・・さてと、次回はあの人、アリスの家だっ！お楽しみにっ！！

アリス「私の出番~~~~~」

特別編第4話

雅紀「はあ……はやての家にもシスコンと同じぐらいの人がいたじゃんか……。」

とボロボロの体を引きずりながら雅紀はアリサの家に向かう……だが……

雅紀「……どこなんだ……？」

雅紀はアリサの家が何処なのかわからなかった……

雅紀「確か豪邸の家だつて聞いたが……道がわからねえ……それに豪邸が見えねえ……。」

と雅紀、悩み中……すると……

プップーッ！

と音がした……。雅紀は音がした方向を見ると、そこには以前にも乗ったことある高級車がそこにあった……

？「雅紀ーっ！」

と中からアリサが顔を出す……

雅紀「アリサ……。」

雅紀はアリサの方に行く。

アリサ「やっと見つけたわ。アンタ全然来ないから迎えに来たわよっ！」

雅紀「何で俺が此処にいるってわかったんだ・・・？」

アリサ「そんなの・・・勘よ。」

雅紀「勘で・・・。」

アリサ「兎も角、乗りなさいっ。」

雅紀「ああ。」

と雅紀を乗せて、車を発進させる・・・。

アリサ「全く、地図ぐらいちゃんと持ってきなさいよっ！」

雅紀「悪い。海鳴の事まだ全然、把握できないんで・・・。」

アリサ「もっっ！少しは探す人の身にもなってもらいたいわっ！」

雅紀「・・・ごめんなさい・・・。」

と雅紀は言う・・・。

アリサ「わかればいいのよっ。ほら、言っている内に、着いたわ。」

アリサが指をさすと、そこには豪邸・・・アリサの家が見えた。

雅紀「本当に豪邸だな……。」

雅紀は驚く。

アリサの部屋

雅紀「この後どうする？」

アリサ「うーん……あ、その言えばこの間、新しいデパートができたから、そこに行きましょ。」

雅紀「わかった。」

デパート

雅紀「随分、混んでいるなあ……。」

アリサ「そりゃそうね。休日だし……。まず、洋服見てくわよう。」

雅紀「はいよあ……。」

と二人は洋服コーナーに行く

雅紀「結構種類があるなあ……。」

アリサ「雅紀ー、コレ見てーっ！」

雅紀「ん？なん・・・だ・・・。」

雅紀は思考停止してしまった・・・。なぜなら・・・

アリサ「どう？似合うかな？」

アリサがワンピースを着ていた・・・。

雅紀「・・・綺麗・・・。」

雅紀は思わずそう口にする・・・。

アリサ「えっ！？／／／」

雅紀「え、いや・・・アリサ、綺麗だなあ・・・て思ったさ・・・
／／／」

と雅紀は頬を赤く染める・・・。

アリサ「そ、そう？／／／」

雅紀「ああ・・・／／／」

アリサ「・・・ありがと・・・（ボソッ）」

雅紀「へ？」

アリサ「なんでもないわよっ！！／／／」

雅紀「なぜ怒るんだっ!？」

とこんな感じで洋服コーナーを後にした。。

数時間後

アリサ「ふう〜買いすぎちゃったわ。。。」

雅紀「。。。買い過ぎにもほどがある。。。」

と雅紀は荷物を持ち歩く。。。これ全部、服。。

アリサ「悪かったわね。。。」

雅紀「というか、お前の財布は。。。何なんだ？」

アリサ「何って、普通の財布よ？」

雅紀「こんなに買っただけのお金が入る財布って聞いたことがない……」

と話していると……

『ギアアアアッ！！』

『グルルルウツ！！』

と声がし、見てみると……そこには……

雅紀「イマジンに……アンノウンか……」

そう、イマジンとアンノウンだった……

アリサ「な、何あれっ！？特撮か何かっ！！？」

雅紀「(まあ……特撮の怪人達だからなあ……)」

と雅紀は心中呟く……

雅紀「(……あの時の残党がいたのか……)」

あの時の残党とは……以前の空港火災の時の奴らの事……

『ガアアアアッ！！』

そつこつ思っている時、イメージが攻撃をしてきた・・・。

雅紀「あぶねっ！」

とアリサの手を握り回避・・・。

アリサ「あ・・・／／／」

雅紀に手を握られ、頬を赤くするアリサ・・・。そして、壁を背にし隠れる・・・。

雅紀「はあ・・・危ねえ・・・。」

アリサ「あんた・・・何時まであたしの手を握っているつもりよ・・・／／／」

雅紀「え・・・？あっ！？／／／」

と雅紀はアリサの手を握っていたことに気付き、アリサの手を離す・・・。

アリサ「・・・もうちょっと・・・手・・・握ってほしかったな・・・何いってんのよっあたしはっ！！？／／／」

とアリサは思う・・・。

雅紀「（アリサがいたんじゃ・・・変身もできない・・・どうすれば・・・）」

と思っている内に・・・。

『ガアアアアッ!!!』

アンノウンに見つけられる・

雅紀「やばっ!!!」

と雅紀はアリサの前に立ち、盾になろうとした・・・その時・

ブウウウウンッ!!!

『グ?ガアアアアッ!!!!』

突然、何かが現れて、アンノウンを引いた・

雅紀「・・・デイクイザー・・・?」

ソレは・・・デイクオス専用バイク、そして雅紀の愛車、マシンデイクイザーだった・・・。

雅紀「A?でもついているのか・・・?」

とすると・・・

ピピッ!

とデイクイザーが走りだし・・・そして・・・

ウイイイイインッ!

と体が変形していく・・・

雅紀「んなっ!!!?」

これには雅紀もびっくり・・・

ウイイイインッ!

とデイクイザーはロボットになりイマジンを圧倒する・・・。
デイクイザーがロボットになった姿は・・・まるでトランスフォーマーアニメイテッドのプロウルのような感じの姿だ・・・だが、どこか違う部分もあり・・・騎士のような感じの姿だ・・・。

ウイイイインッ!

とデイクイザーロボットモードは腕を前に出すと、そこからガトリング砲がでてきて発射・・・イマジンを数体倒す・・・。

シャッ!

そして何処から出したのか・・・剣で切り裂き全滅させた・・・イマジンは・・・

雅紀「・・・すご・・・。」

と雅紀が茫然としていると・・・

アリサ「きゃっ!」

と悲鳴が聞こえ振りかえると

雅紀「アリサっ!！」

アリサがアンノウンに捕まっていた。。。

雅紀「ぐっ!」(このままじゃ・・・アリサが・・・そっだ! デイカイザーなら。。。)

と雅紀は振り返ると・・・

ウイーンッ!

デイカイザーが敵に囲まれてそいつらを倒していた。。。

雅紀「……………(どうしょーうっ!?!?)」

と雅紀は心中叫んだ。。。そして・・・ある決断をする。。。

雅紀「……………こうなれば・・・仕方がない……………」

と雅紀はアンノウンにアドベントドライバーを構え連射・・・アリサを捕まえていたアンノウンの一体に当てる。。。

アリサ「きゃっ!」

とアリサは悲鳴を上げながら雅紀の方に行く。。。

アリサ「あ、アンタ・・・武器を持ってたんならそれで倒しなさいよっ!」

雅紀「……悪い……。」

としていると、囲まれてしまった……。

アリサ「ど、どうすんのよっ！囲まれちゃったじゃないっ！！」

アリサは涙目で言う。

雅紀「……アリサ……。」

アリサ「なによ……？」

雅紀「俺を……信じて……。」

アリサ「え……？」

雅紀「変身っ！」

『カメンライド・デйкаオスッ！』

と雅紀はデйкаオスに変身した……。

アリサ「……雅紀……なの……？」

雅紀『ああ……。』

と返事をしてデйкаオスはアドベントドライバーで切り裂いていく……。

雅紀『アンノウンにはこのライダーだ……！』

『カメンライド・アギトオツ!』

とデйкаオスはアギトに変身し、パンチや蹴りでアンノウンを倒す。
。。

『ファイナルアタックライド・ア・ア・ア・アギトオツ!』

とDアギトの角からそれぞれ四つの小さい角がスライドして現れる。
。。

雅紀『ハッ!』

とDアギトはジャンプし・

雅紀『ハアアアアッ!』

とライダーキックをくらわす。

『ギイイイイッ!』

アンノウンは爆死した。。。そして・・・デйкаオスは変身を解除し、雅紀に戻る。。。。

雅紀「アリサ・・・怪我は・・・?」

アリサ「・・・ないわよ。。。。」

雅紀「・・・そうか。。。。」

アリサ「……アンタ……何者なのよ……？」

とアリサは警戒する目で言う……。

雅紀「……話は後で……今はこの場から離れよう……。ディカイザーも倒したころだし……。」

と雅紀が言うと、ディカイザーがこちらに向かって歩いてきて、そして……

ウイイインッ！

と元のバイクの姿に戻る……。

雅紀「乗って。」

アリサ「ええ……。」

と雅紀とアリサはディカイザーに乗り、その場を後にした……。

デパートから数キロ離れた公園で……雅紀はディカイザーを止め、ベンチに座る……。アリサも座る……

雅紀「まず……どこから話せばいいのか……。」

アリサ「じゃあまず……アンタのバイク……何？」

とアリサはディカイザーを指差して言う……。

雅紀「俺でもわからない……。あんなロボットになるなんて思わなかった……。」

アリサ「そうなの……。それと……もう一つは……アンタが何者かってことよ……。」

雅紀「……俺は……。」

と雅紀は仮面ライダーの事を、自分がこの世界の人間ではない事……。あの怪人達が何者かってこと……。全て話した……。

雅紀「……これで全部だ……。」

アリサ「……。」

雅紀「……信じられない……。て思ってもいい……。だがこれは……事実なんだ……。」

アリサ「……。」

沈黙が続いた・・・そして・・・

雅紀「嫌いになったなら別にかまわな・・・」

アリサ「バツカじゃないのっ！アンタはっ！！」

雅紀「！」

とアリサが突然立ち上がり言う・・・。

アリサ「何で、そんなであたしがアンタの事、嫌いにならなきゃいけないのよっ！！」

雅紀「い、いや、なんでって・・・。」

アリサ「あたしはっ！アンタのその話・・・信じるわよっ！！」

雅紀「！」

アリサ「あたしはね・・・あ、アンタに・・・ほ・・・惚れたのよっ！！！！／／／／」

雅紀「えっ！？／／／／」

アリサ「・・・だから・・・だからっ！あたしは・・・アンタの事が・・・好きだからっ！信じてあげるって言うてんのよっ！！！！／／／／」

と真っ赤な顔をして叫ぶ・・・。

雅紀「・・・／／／／」

アリサ「・・・それに・・・アンタ・・・この事、誰にも話してないの？」

雅紀「・・・なのは達に・・・ばれました・・・。」

アリサ「なら・・・なのは達は・・・アンタの事、嫌いになった・・・？」

雅紀「・・・いや・・・。」

アリサ「嫌いにならなかったんなら・・・皆も・・・アンタの事が好きだからよ・・・。あたしも・・・そんなんで・・・アンタの事・・・嫌いになるわけがないんだから・・・。」

とアリサが抱きしめてきた・・・。

アリサ「それに・・・誘拐された時、アンタに助けられて・・・。あたしは・・・その時に、好きってことに気が付いたのよ。それよりも前にも気づいていたのに否定してばかりで・・・でもわかった・・・。」

とアリサは顔を上げる・・・

アリサ「あたしは・・・アンタ・・・雅紀の事が好き・・・。大好き・・・なの／＼／」

とキスをしてきた・・・。

雅紀「!!!!」

アリサ「……」

やがて唇を離す……。

雅紀「アリサ……／＼／」

アリサ「これぐらい……アンタの事……好きだから……。」

と言ひ雅紀から離れる……。

アリサ「もう……帰りましょ……送って……／＼／」

雅紀「あ、ああ……／＼／」

と二人はその場を後にした……。

数時間後、アリサの部屋……

雅紀「まさか・・・此処で寝てほしいっていうんじゃないよな・・・？」

アリサ「ダメ？」

雅紀「ワカリマシタ」

アリサの上目づかいを見て雅紀は片言に言うしかなかった・・・。

雅紀「アリサ・・・さっきのは・・・本当に・・・。」

アリサ「当り前よ・・・あたしはアンタが好き・・・。何度も言
わせないで・・・／＼／」

雅紀「／／／」

アリサ「兎も角・・・お休み・・・」

と言いアリサは眠りに着く・・・

雅紀「アリサまで・・・このままじゃ・・・すずかまで俺に・・・」

そんなことない・・・よな？」

と言ひ雅紀は就寝・・・。しばらくすると・・・

アリサ「・・・寝た・・・かな・・・？」

アリサが起きる・・・どうやら狸寝入りをしていたようだ・・・

アリサ「さっきは勢いよくアンタの前でやっちゃったけど・・・今なら・・・」

と言ひアリサは雅紀にキスをする・・・。

アリサ「あたしは・・・どんなことがあっても・・・アンタを支えてあげるんだから・・・覚悟・・・しなさいよ・・・？／＼／＼」

と言ひまたキスをし・・・今度はちゃんと寝たアリサだった・・・。

特別編第4話（後書き）

さてと・・・今回の話で、完璧にアリサの心を奪った雅紀・・・さあ
目指せっ！ハーレムまっしぐらっ！！

雅紀「ふざけるなああああっっ！！！！」

ぐあああああっ！！！！！！

雅紀「全く貴様は・・・それにしても驚きなのは・・・デイクイザ
ーの事なんだが・・・ロボットになるとは・・・。」

隠し機能だからな・・・ほら、仮面ライダー555の時、オートバ
ジンがロボットになって敵を倒す・・・てのがあったじゃん・・・。

雅紀「まあ、確かに・・・だが、最終回で大破しちゃったんだよな・・・

」

うう・・・オートバジンッ！おまえは良いロボットだったぞっ！！

雅紀「・・・それと、サイドバツシャーもそうじゃん・・・。」

まあな・・・デイクイード編にも登場したからなあ・・・本編と映画
で登場回数が多かった・・・。

雅紀「そうだな・・・。」

さてと・・・次は、デイクイザーロボットモードについて説明し
ますっ！

デイクイザーロボットモード

姿はトランスフォーマーアニメイテッドのプロウルと似ているが所々に騎士の鎧に似た部分もあり、ナイトのようだ・・・。

パワーと耐久性は他のロボットよりも高く、最強怪人の攻撃でも簡単には大破出来ない・・・。が体が重いのが難点か、スピードがあまりない・・・。

勿論、空だって飛べちゃう、便利マシンです。

いつもバイクモードで過ごしているが主・・・雅紀がピンチになったら颯爽と駆けつける、忠義神の高いロボットです・・・。

武器は腕に隠してあるガトリング砲と剣・・・他に隠し機能があるかもしれない。

雅紀「・・・すごいな・・・」

だろう！これでピンチに陥った場合は助かるな・・・。

雅紀「・・・壊れないでほしいがな・・・オートバジンのように・・・」

ああ・・。さて次回は、
すずか編ですっ！お楽しみにっ！！

特別編第5話

雅紀「最後は……すずかの家か……。」

と雅紀はディカイザーに乗ってすずかの家に向かう……。

雅紀「また、道に迷ったりしないように、アリサに地図をもらって正解だったな……。」

と雅紀は言う……。アリサの家を出ようとした時に……

アリサ「アンタ、すずかの家もわからないんだから、地図を渡してあげるわ。」

とアリサが地図を渡したのだ……。

雅紀「これでスムーズにすずかの家に行けるな……と、此処だ……。」

と雅紀はディカイザーを止めて、屋敷を見る……。

雅紀「まえに此処に来たことがあるし……。屋敷を覚えといてよかった。」

と雅紀はチャイムを鳴らす。

？『はい、どちらさまでしょうか？』

雅紀「あ、すずかさんの友人の、木利野 雅紀ですが……。」

？』少々、お待ちください・・・。」

と返事をされて、しばらくすると、屋敷の門が開く・・・。

雅紀「お邪魔します・・・。」

と雅紀は中に入ると・・・

すずか「雅紀君いらっしやい。」

とすずかが出迎えてくれた・・・。

雅紀「おはよう・・・すずか。」

すずか「おはよう。」

と互いに挨拶をした・・・。

すずか「雅紀君、バイク持ってたんだね・・・。」

雅紀「あ、まあな・・・。」

すずか「すぐそこに車庫があるから・・・そこにね。」

雅紀「わかった・・・。」

と雅紀は車庫に向かう。すずかも一緒だ。

すずか「この子、AIついてるんだね・・・。」

雅紀「え・・・？」

すずか「アリサちゃんがメールで・・・昨日、怪人に襲われたって・・・雅紀君が仮面ライダー・・・で戦士の事も・・・そして・・・雅紀君の家族が・・・」

雅紀「・・・あんまり・・・それ以上は・・・言わないで・・・」

すずか「・・・」

雅紀「ごめんよ・・・。どうもあの過去は・・・考えると、嫌な気分になるんだ・・・」

すずか「こつちもごめんなさい・・・」

雅紀「いいよ・・・。今日は・・・どうするんだ・・・この後・・・」

すずか「今日はとくに用事はないし・・・家でゆっくりしていて。」

雅紀「わかった・・・」

と二人は車庫を後にした・・・

二人が中に入ると・・・

ニヤー、

ゴロゴロ〜

と猫達がたくさんいた・・・。

雅紀「・・・猫、多っ!？」

すずか「あはは・・・皆、捨て猫や、怪我をして連れてきた猫達なんだよ・・・。」

雅紀「そうなのか・・・にしても・・・可愛いな〜」。

と雅紀は猫を抱き上げて頬ずりをした・・・。

ウニヤ〜

と猫も気持ちよさそうにしていた・・・。

すずか「ウッフ、雅紀君、動物が好きなんだね。」

雅紀「ああ。やっぱり動物は・・・癒されるなあ〜・・・。」

と笑顔で猫たちと触れ合う雅紀・・・そんな光景をすずかは温かい目

で見ていた・・・。

すずか「（雅紀君・・・やっぱり笑顔が輝いていて・・・素敵だなあ・・・／＼／＼）」

とすずかは思っていた・・・。

雅紀「うにゅ〜」

とまだ雅紀は猫とじゃれ合っていた・・・その時に・・・

ノエル「すずかお嬢様、紅茶を持ってまいりました・・・。」

ノエルが来た・・・。

すずか「ありがとう、ノエル。」

ノエル「いえ・・・。」

雅紀「あ、ノエルさん、先日はお世話になりました。」

と猫とじゃれ合っていた雅紀はノエルに礼を言う。

ノエル「いえ、お礼はいいですよ?。」

雅紀「は、はあ・・・。」

ファリン「お菓子をもちました〜!。」

と次にファリンがやってきた。

雅紀「あ、ファリンさん、先日はどうも。」

ファリン「あ、君はあの時の。良いよ別にお礼なんて。」

すずか「お菓子ありがとね、ファリン。」

ファリン「はいっ!」

と雅紀は紅茶を飲む・・・

雅紀「わぁ・・・美味しい・・・。」

すずか「でしょ?ノエルとファリン特性なんだよ?」

雅紀「そうなのか・・・美味しい・・・。」

雅紀は紅茶を飲んだ・・・と雅紀はすずかの方を見る・・・

すずか「?どうかしたの、雅紀君?」

すずかは雅紀が見ていることに気付き聞く。

雅紀「いやさ・・・そうしていると、すずかはお嬢様なんだな・・・
と、思っ、て・・・。」

すずか「え!?!ノノノというか・・・雅紀君、普段私のことどう思っ
ているの?」

雅紀「えっと・・・おしとやかで優しい普通の女の子・・・かな・・・」

」。

すずか「／／／」

雅紀「ん？どうしたんだ、すずか？顔赤いぞ？」

すずか「え、ううん、何でもないよ・・・（面と向かってあんな風に言われたんじゃない・・・誰だっぺこうなるよ～～／／／）」

とすずかは心中そう呟く。

雅紀「????？」

雅紀はここでも鈍感スキルを発動する。普段はそうでもないのに、この時にはこうなってしまう・・・。

すずか「そ、それより・・・雅紀君・・・。」

雅紀「何だ？」

すずか「その・・・外に出ない？」

雅紀「え？」

すずか「・・・散歩・・・したくなってきて・・・。」

雅紀「まあ・・・いいよ・・・。」

と二人はその場を後にした・・・。それを見ていたノエルとファリンは・・・

雅紀「綺麗な庭だなあ．．．」

すずか「でしょ．．．？良いお花が咲いていて．．．」

雅紀「ああ．．．」

と二人は花園を歩いてた．．．

すずか「．．．ねえ、雅紀君．．．」

雅紀「何．．．？」

すずか「寂しくない？お母さんも、お父さんもいないのに．．．」

雅紀「大丈夫だ．．．俺は、寂しくない。確かに、俺の親はもういない．．．でも．．．こうして皆と話すと．．．落ち着くし．．．寂しくもない．．．それに．．．俺には．．．大切な人がいるし．．．（ボソ）」

と最後はボソツと呟く雅紀．．．大切な人は．．．もちろんアリスだ．．．

雅紀「だから．．．大丈夫だ．．．心配してくれてありがとう．．．すずか．．．」

すずか「うん．．．それと．．．雅紀君．．．」

雅紀「何だ？」

すずか「私ね．．．」

とすずかは言っていると顔をどんどん赤くさていく・

すずか「私ね・・雅紀君の事が・・・好き・・・なの・・・／／」

雅紀「・・・へ・・・？」

すずかの突然の告白に思考停止する雅紀・・。

すずか「私は・・雅紀君の事が・・好きなんです！／／／」

とすずかは先ほどよりも大きい声で、はっきりと言う・・。

雅紀「・・・マジ・・・？」

すずか「・・本当だよ・・／／／」

とすずかは一歩ずつ雅紀に近寄る・・。

すずか「いきなりかもしれないけど・・・私は・・ずっと待っていたの・・。こっやって二人つきりているのを・・／／／」

そしてやがてすずかは雅紀の前に立ち両手を雅紀の後ろに回し、抱きつく。

雅紀「！！／／／」

雅紀はいきなりの事で心臓をバクバクさせる・・。

「すずか「私は・・・本当に・・・貴方の事が好き・・・なんです・・・／／」

とすずかは雅紀の鼓動を感じ取りながらそう言う・・・。

雅紀「てゆうか・・・なんで俺なんかの事を好きに・・・？／／」

すずか「・・・あの時・・・誘拐された時に、雅紀くんにも助けもらってその時に・・・完全に・・・心を奪われてしまった・・・。

雅紀君を・・・友達だと思っていたのに・・・だんだんと・・・雅紀君の事、奪いたい・・・私だけのものになりたい・・・て思い始めたの・・・。雅紀君が私の心を奪ったように、私も雅紀くんの心を奪うって思っちゃった・・・。それになのはちゃん達だって、雅紀くんの事・・・好きなんだって、わかる・・・。だから・・・。」

とすずかは顔を上げ、雅紀に近づける・・・。

すずか「私は・・・負けない・・・／／」

とすずかは雅紀に唇を重ねてきた・・・。

すずか「ん・・・んん・・・負けないもん・・・／／」

雅紀「す・・・すずか・・・！？／／・・・て、んんっ！」

すずか「ん・・・レロ・・・チュピ・・・／／」

すずかがディープキスをしてきた・・・。雅紀は混乱する・・・。

すずか「ん・・・プハア・・・私は・・・なのはちゃん達には負けない・・・」

・必ず、雅紀君を好きにさせるもんっ！／／／

とすずかは言った・・・。

すずか「・・・覚悟・・・してね？雅紀君・・・／／／」

と突然の告白タイムは終了した・・・。

雅紀「・・・／／／」

すずか「・・・もう・・・屋敷に戻ろつか・・・？」

と二人はその場を後にした・・・。

？「うはあ！すずかお嬢様、やりますうっ！」

？「静かになさい・・・。」

と陰ながら二人を見ていた者がいた・・・。ノエルとファリンだ・・・。

ファリン「すずかお嬢様、あんなキスができるようになったちゃったんですねっ！ファリンは凄いつと思っちゃんいますウツ！」

ノエル「・・・ファリン、興奮しないの・・・。でも、
すずかお嬢様・・・やりますね・・・。」

と言う二人なのであった・・・。

そしてあっという間に夜・・・

雅紀「で・・・俺は何処で寝れば・・・。」

すずか「・・・一緒に・・・寝て・・・／＼／」

雅紀「・・・やっぱりこうなりますか・・・。」

すずか「・・・ダメ・・・？」

とすずかは上目づかいをする・・・

雅紀「ワカリマシタ」

と雅紀は此処でも片言で言うしかなかった・・・。そして二人はベッドに入る・・・。

雅紀「・・・すずか・・・本当なのか・・・？さっきの・・・」

すずか「うん・・・。雅紀くんの事が好きだよ／＼」

雅紀「はあ・・・。」

すずか「・・・ウフフ・・・じゃあお休みなさい・・・雅紀君／＼」

とすずかはキスをして、眠りに着く・・・

雅紀「とうとう・・・すずかまで・・・俺のどこが好きなんだよお・
・もう・・・／＼／」

と呟きながら、雅紀は就寝したの・・・。

翠日・・・ファリンやノエルにおめでとつごぞいませと言われ、
ド
キッ!とし、すずかが気絶したのは言つまでもない・・・。

特別編第5話（後書き）

さてと・・・終わりましたすずか編・・・！

雅紀「なんかすずかのキャラが変わったような・・・。」

すいません・・・。さて今回は最後となったらこの人、アリスだっ！！

雅紀「なんでっ！！？」

アリスにも出番をやらんとな・・・それにこの特別編をやる前にも決めていたことだし・・・。

雅紀「マジすか・・・。でも・・・同じ家だし・・・特別編に出さなくても・・・。」

フッフッフ・・・甘いぞ雅紀・・・次回はエロイ話にするからなのだっ！！

雅紀「ハアッ！！！！？」

久々の雅紀とアリスのセックス話だっ！コレを待っている読者のためにやらなくてはなっ！！

雅紀「やめてっ！！まじでやめてっ！！！！」

作者権限発動だっ！！！！もう俺を止められないぜ~~~~っ！！！！！！！！

雅紀「ヤメロオオオオオッ！！！！！！」

アリス「久々に登場・・・雅紀、覚悟してねえ・・・／／／」

特別編第6話（前書き）

今回はエロ話になります。ギリギリ15禁ですっ！見たくない方は見ない方がいいです。

特別編第6話

「ようやく帰れる…。」

雅紀はディカイザーを走らせて呟く。

「思えば皆、俺のどこが好きなのか全然わからないなあ…。なんでだ？」

雅紀は鈍感スキルを発動。

「まあ、いいか、はやく家帰ってゆっくりしたい。」

雅紀は戻って行った。

アリス宅

「ただいまー。」

「雅紀っ！おかえりなさいっ！！」

雅紀が扉を開けた途端、アリスが抱きついてきた。

「わっ！あ、アリスただいま。それと…当たってるんですけど…／／」

今雅紀の胸にアリスの豊富な胸が接触しているのだ。

「当ててるんだもん／／／」

「あんなあ…。とりあえず離れよう。」

「はい…。」

アリスはしぶしぶ離れる。そして雅紀は部屋で寝ころんだ。

「はあ…。やっぱり自分の…いや、正確的に言えばアリスの家は落ち着くなあ。」

一方、アリスの方は…

「（はあ…五日間がこんだけ長い日だとは思わなかったなあ。）」

アリスは雅紀を見つめる。

「（まあ、今日からまた雅紀が傍にいてくれるし…良いかな）」

「ん？アリス、どうかした？」

「あ、ううん。何でもない」

アリスは雅紀の傍によって、雅紀に寄り添った。

「アリス…？／／／」

「少しの間、こうさせて…／／／」

「あ、ああ」

数分間、二人はこの状態でした。すると…

ぐぎゅるるる…

という音が響いた。

「あ／／／」

どうやら音源は雅紀のお腹からのようだ。

「フッフ お腹すいたんだね。御飯作ってくるよ」

アリスはそう言って、部屋を後にした。

数十分後

二人は食事を取っていた。

「ハア：上手いな、ホントに」

「フッフ ありがとね」

「えと：寂しくなかったか？」

「え？」

「俺がいない間、アリスは一人だったから…」

「…寂しくなかったって言えばウソになるかな。雅紀が傍にいないと…何か、一人ぼっちなんだなって思っちゃって…」

「アリス…」

「ごめんね。一人は慣れていたんだけど…雅紀とずっといたから、もう…一人が嫌になって…」

アリスは顔を下に向けてそう言った。

「…ごめん。アリス、寂しい思いさせて…ごめん」

「あ、良いよ。雅紀が悪いんじゃない。私の…身勝手さ…」

「もう、言わなくて良いから…そんな事、言わないでくれ」

雅紀はアリスの手を握る。

「雅紀…」

「アリスは…笑ってる方が…一番、良いんだ。だから…」

雅紀はアリスの手を握りながら、そう言っていると、アリスは雅紀の頭を抱きしめた。

「うん。ありがとう。でも、もう寂しくないよ…雅紀がこうして、私の傍にいてくれるから／／／」

「あ…ああ／／／」

二人は数分間、そうしていた。

「ありがとうね、雅紀」

「あ、ああ…どういたしまして／／／」

二人は笑い合っていると、食事を再開した。

特別編第6話（後書き）

さてと次回は、闇のマテリアル三人の名前を考える話と…雅紀が女装っ！！！！？

雅紀「何でそうなるの！！！！？」

第49話

アリスと食事を終えて一時間…すると…

プルルルッ

電話が鳴った。

「ん？誰かな？」

雅紀は体を起こし受話器を取る

「もしもし」

『あつ、雅紀くん？』

相手はなのはだった。

「なのは、どうしたんだ？」

『話は後で言うから、翠屋に来てほしいのッ！』

「何で？」

『お願いなのっ！』

「わかった」

『じゃあねっ』

話を終える。

「一体何なんだろう？まあ、良いや。アリス、出かけるよ」

「え？何処に？」

「なのはが翠屋に来てって電話があったんだ。だから、アリスも連れてゆく」

「うん」

二人は着替えてマシンディカイザーに乗って翠屋に行った。

翠屋

「あ、雅紀くん、来たのっ！」

翠屋の前まで来ると、なのはがいた。

「おはよう、なのは。」

「なのはちゃんおはよう」

「おはようなの それと、雅紀くん…まだ中学生なんだからバイク乗っちゃダメなのっ！」

「これが、仮面ライダーの足になるもんなんだ。仕方ないだろ。それと、用は何だ？」

「あ、そうだ、とりあえず中に入ってなの。」

三人は中に入った。

「名前？」

「そう、星光ちゃん達のお名前なの！」

「なぜ？」

「なぜって、星光ちゃん達のお名前が普通の女の子の名前じゃないから、雅紀くんにもお名前、考えてほしいの」

「なるほど。確かに「星光の殲滅者」とか「雷刃の襲撃者」と「闇統ベル王」とか、普通の名前ではないし、呼びづらいしな」

「私達はこういう名前だったので名乗ってましたが、これからの事になるとさすがに不便ですの…」

「雅紀に名前を考えてほしい、僕らもそう思うんだっ！」

「王である我からも頼む、雅紀」

三人もそう言って、雅樹を見つめた。

「わかった。う〜ん〜ん…」

雅紀は三人は見ながら考え始めた。

「（星光は、星で…空だし、雷刃は雷…闇は…闇だし、王だし…）」
ふと雅紀はなのは達を見る。

「（なのはのバリアジャケットって、天使に見えるよなあ。フェイトの方は…悪魔？まあ、髪の毛が月に見える。はやては…風、夜天。よしっ）」

雅紀は決心した。

「決めたっ!」

「え、どんな名前にしたのっ?」

「ああ。こんなのはどうかな」

雅紀は三人を見る。

「星光は「ミソラ」、雷刃は「ルナ」、闇は「レイラ」」

「ミソラ…ですか?」

「ルナ…」

「レイラ…由来はなんだ?」

「ミソラは、なのはの事を考えた結果かな。なのはってバリアジャケットを着ると天使みたいじゃない?それで美しい空で、ミソラって名前にしたんだけど、どう?」

「（にや〜〜っ!!ノノノま、雅紀くん、天使みたって…恥ずかしいよお…ノノノ）」

なのはは一人顔を真っ赤にする。

「わかりました。今日から私の名は、ミソラです」

星光の殲滅者改め、ミソラは喜んで言う。

「ねえねえ、僕のは?」

「ああ、フェイトのバリアジャケットは黒で、髪の毛が金色でまるで月みたいだったからそう考えてみた」

「ふ〜ん。まあいいや。これから僕の名はルナ・T・ハラオウンだっ！！」

「Tはいらないんじゃない？」

「何言ってるの？僕は君から生まれたんだ。テストロツサも付けないよね」

「続いてだが、我は？」

「あ〜…俺の知っているさ、映画で王女様がレイラって名前だったんだ。それを借りてね」

「ほ〜う」

「闇も王じゃなか？丁度いいかなと思ってさ」

「ふむ、よかるう。我は今日から八神レイラだ」

「これで名前決め終了。俺は帰るかな」

「あ、待って、雅紀君。」

帰ろうとした雅紀を桃子が呼び止める。

「桃子さん、何でしょうか？」

「実はね、今日もお手伝い頼めるかしらって、お願いできる?」

「まあ、はい。ってまた執事服に着替えるんじゃ…」

「フッフ、今日は違うわ。まあ、来てみて」

「?」

雅紀と桃子が奥に行き、数分後の時だ。

「ぎゃああああああああああつ!!!!!!!!!!」

雅紀の悲鳴が聞こえた。

「ま、雅紀くんっ!?!」

「どっしたのっ!?!」

慌てて奥に行くと…

「ヒック…グスッ」

メイド服を着た子が隅っこでうずくまりながら泣いていた。

「あ、あの…お母さん、この子って?」

なのはは恐る恐る聞いてみる。

「あ、雅紀くんよっ。」

桃子は言った。その時、辺りは静まり返った。

『え〜〜〜〜〜〜つ!!!?!?』

沈黙して一分後、全員が驚いた。

「ま、雅紀くん…なの?」

「なのは〜〜〜〜…」

なのはの声で雅紀は顔を上げる。

「うっわ、似合いすぎるわぁ」

「お持ち帰りしたいノノノ」

ルナ「僕もノノノ」

「何でしょうか…独占したい気持ちがどんどん増してきました」

「貴様、性別間違えて生まれたんじゃないやあるまいな?」

「雅紀くん、可愛過ぎなのノノノ」

今の雅紀はメイド服に猫耳をした格好をしており、完璧に何処からどう見ても女の子にしか見えない。

「桃子さん、脱ぎますっ!」

「だ〜め 今日一日はその格好で居てね？」

「いやあああああっ！……！」

雅紀は絶望どん底に叩き落とされたような衝撃を受ける。

「雅紀くん、私からもその格好でいてなの／＼／」

「なのはまで！？」

「皆さんもそう願っているようですしね」

ミソラに言われ振り向くと、全員、上目づかいをしていた。

「わかったよっ！わかりましたよっ！！こうなったらヤケだっ！！！！」

雅紀は叫んだ。

数時間後

いつも以上に店内は客でいっぱいとなっていた。その理由は…

「ご注文の品ですっ！どうぞ！」

メイド服を着た雅紀を目当てに来たからだ。

「何だあの子？新人？」

「それにしても、すっげえ可愛いつ！」

「なのはちゃんクラスだぜっ！ありゃあっ！！」

男性客からは絶賛だった。

数時間後、店内に人はいなくなり休憩時間

「もういやあ……」

雅紀は隅っこで泣いていた。

「あちゃあ……重傷やなあ。あれ」

「女装されたのだからな。仕方あるまい。」

二人が言っていると、ミソラが雅紀に近づく。

「雅紀、大丈夫ですか？」

「ミソラ……」

「女装されたのは恥ずかしい事ですよね。大丈夫です、私が傍にいてあげますから、泣いて良いですよ？」

ミソラは優しくそう言う。まるで天使のようだ。

「ミソラア……」

雅紀はミソラに抱きつき泣いた。女装されて精神が崩壊しかけていた雅紀にとってミソラは女神だった。

「よっよっ」

ミソラは抱きついていて雅紀を抱き返し、頭を撫でている。

「にゃっ!?!ミソラちゃん、羨ましいのっ!」

なのはが叫んでいる時だった。

「(これで雅紀は私のものです)」

ミソラから念話が発せられ、皆ミソラを見る。

「(今の間は、私が雅紀を独占しています。邪魔をしないでくださいね?)」

先ほどとは違う黒い笑みでそう言う。天使ではなく、墮天使だ。

「(にゃっ!そういうことなのねっ!)」

「(今のは雅紀の心を癒すふりをして…)」

「(そこは本当ですよ?見てるだけで何もしない誰かさん達とは違い、私は雅紀の心を癒してあげるのです)」

さらにミソラは雅紀の頬に垂れた涙を拭きとる。

「（貴方達は、そこで見ていなさい）」

そう静かに言い放った。

「（むうっ！！雅紀くんを独占していいのはなのはただだよっ！！）」

「

「（なのはだけじゃない！私もっ！）」

「（私もやっ！！）」

「（ミソラばかりズルイっ！！）」

「（雅紀を独占していいのは王である我だけだっ！！！）」

念話をしていると…

「ミソラ、もういいや。ありがとう」

「えっ？…はい」

雅紀はミソラから離れる。ミソラは少しガツカリ気味の様子。

「ふう、少し楽になれた。もう帰ろう！桃子さんが次に何を着せに来るかたまったもんじゃないっ！」

雅紀は逃げようとしたその時だった。

ゴリッ

いきなりのことだったので雅紀は顔を真っ赤にする。

「ぷはぁ…えへへ / / /」

ルナはご満足の様子。

「フン！貴様はそんな子供じみたキスで喜ぶとは…まだまだだな」

レイラがルナを雅紀からひきはがし、そして…

「ん…れろ…ちゅ…」

「ん！？れろ…！！？」

レイラに今度は大人のキスを食らわされた。

「ぷはぁ…フッフ なかなかの味だったぞ？」

「あああああ………」

「もっ」

「我慢の」

「限界やわっ！！」

三人は一気に雅紀に詰め寄り…

『んっ！』

第50話(前書き)

突然の事ですが・・・雅紀が幼児化してしまいますっ！

雅紀「なぜだっ!!?」

始まりッ!!

雅紀「無視するなッ!!」

第50話

ミソラ達の名前が決まり、そして、恥ずかしい日の翌日……

翠屋

雅紀「管理局入り？ミソラ達が？」

ミソラ「はい……。」

ルナ「僕らも、一応魔導師だしねっ」

レイラ「だからこれから管理局入りのために一度、囑託魔導師試験を受けねばなるまい……。」

雅紀「そうか……管理局の事とか、俺には全然だしな……。」

と雅紀言う……。

ミソラ「そういえば……先ほど、なのはが……ロストロギアを回収したとか……」

雅紀「ロストロギア……?」

ルナ「まあ……簡単に言っちゃ遺失物……。失われた秘宝みたいなものだよ……」

レイラ「その力は次元震を起こしたりするなど危険なものも含まれているんだ……」

雅紀「何か聞いているだけでゾツとしちまうぞ……それ……?」

ミソラ「まあ……危険な物でも……何の能力かはそのロストロギアに限りあるので……」

ルナ「五年前のPT事件でも……願いをかなえるロストロギア……ジュエルシードを廻った事件だしな……」

雅紀「PT事件?」

レイラ「プレシア・テストロッサという者が起こした事件……別名、ジュエルシード事件とも呼ぶ……」

雅紀「(……フェイトの本当の母親か……)」

と雅紀は思った……。

雅紀「で……なのはが回収したロストロギアは……一体どんな能力なんだ……?」

ミソラ「それが・・・まだわからないそうです・・・。機能が停止していたので簡単に封印処理ができたって・・・。」

雅紀「ほえ〜・・・。」

と話していると・・・

なのは「雅紀くん」

なのはが来た・・・

ミソラ「噂をすれば・・・てところですか・・・。」

なのは「え？何の噂？」

ミソラ「独り言です・・・。」

なのは「？」

雅紀「そう言えばなのは、ロストログアっての回収したんだろ？」

なのは「あ〜、うん、そうだよ。今、管理局本部に持って行くところだけどね。」

レイラ「で・・・それは一体何だったんだ？」

なのは「コレなの・・・。」

となのはがレイジングハートから何かを取り出した・・・。

雅紀「うわぁ・・・綺麗・・・。」

それは・・・まるで宝石のように綺麗な輝きを放っていた・・・。

雅紀「これがロストロギアというのは思えないな・・・宝石だぞ？」

なのは「見た目はね・・・もうしまっよ・・・どういう力があるかわからないから・・・ってあっ！」

となのははレイジングハートに入れようとしたロストロギアを落としてしまった・・・。

雅紀「馬鹿っ！」

と間一髪で雅紀がキャッチ・・・。

雅紀「はぁ・・・あつぶねえ・・・。」

なのは「ありがとうなのぉ・・・雅紀くん・・・。」

雅紀「どういう力があるのかわからないって言ったのなのはだろう・
・落として何か力が発動したらどうするんだよっ!？」

なのは「ごめんなさいなの・・・。」

と雅紀に説教されたなのは顔を伏せる・・・。

雅紀「まあ、何も起きないし・・・良かったけどなあ・・・て何かこれ・・・前より輝いてね？」

と雅紀は手に持ってあるロストロギアを見てみると・・・前よりも輝いていた・・・。

雅紀「一体どうなって・・・てっわあっ!!」

とその輝きが辺りを眩しくさせるほどに増し・・・雅紀を包み込んだ・・・。

なのは「ま・・・雅紀くんっ!?!」

ルナ「眩しすぎて何も見えないよっ!」

レイラ「あの馬鹿・・・油断をしおってっ!!」

ミソラ「そんなこと言ってる場合ですかっ!?!」

と言っていると・・・輝きが弱まり・・・辺りは煙に包まれていた・・・。

なのは「雅紀くんはっ!?!」

となのは達は雅紀を探すと・・・

?「ゲホゲホッ!」たく・・・何だったんだ、一体?」

と雅紀がいた場所から子供の声が聞こえる・・・。

なのは「えっ?」

なのはは驚く・・・。

？「それに・・・何か・・・声が変になっているし・・・体に違和感が・・・」

と煙が晴れると・・・そこには・・・ブカブカの服を着た4～5歳前後の少年がそこに立っていた。

なのは「・・・誰・・・？」

となのはが呟いていると・・・

？「なのはか？何か大きく見えるのは気のせい？」

なのは「その服・・・も・・・もしかして・・・雅紀・・・くん？」

なのはは恐る恐る聞くと・・・

雅紀「そうだけど・・・どうしたんだ？」

と少年が言った・・・辺りは静まり返る・・・そして・・・

全員『え~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~っ!!!!!!!!!!??』

となのはとミノラ達が叫んだ・・・。

雅紀「うわっ!?!いきなり大きい声で叫ぶな・・・うるさいよ・・・」

なのは「だ、だだ、だって雅紀くんがっ!」

雅紀「俺がどうしたんだ？」

なのは「小さくになっちゃってるのっ!?!」

雅紀「え?」

と雅紀は改めて自分の体を見る……そして……どんだん顔を青ざめる……。そして……

雅紀「なんじゃこりゃ——————っ!?!?!?!?!」

と雅紀の悲鳴にも似た声が辺りに響いたとな……

数十分後

はやて「なるほどなあ・・・」

とはやてがため息交じりに言う・・・。

はやて「つまりこのロストログアは・・・発動した直後・・・持っていた者を幼児化させるという力をもっとる・・・ということか。」

フェイト「なんかおかしな力だね・・・それ・・・」

シグナム「おかしすぎだ・・・テストロッサ」

とフェイトとシグナムが言う。

ヴィータ「第一・・・コイツ、あの時の仮面野郎なのかあ・・・？顔つきが違うぞ？」

とヴィータが雅紀の顔を覗き込む・・・。

なのは「ヴィータちゃん、今の雅紀くんは幼児化してるんだよ？顔つきが違うのも当たり前だよ？」

となのはは苦笑いをしながら言う・・・。

ミソラ「それにしても・・・元に戻るのですか？」

はやて「それはわからへん・・・解析せえへんと・・・」

ルナ「僕は別にこのままの方がいいけどなあ・・・雅紀、可愛いしっ！／＼／＼」

レイラ「バカ者がっ！雅紀が不便だろっ！」

雅紀「・・・兎も角、ルナ・・・いい加減に下ろせ・・・！」

と雅紀が言う・・・。今の雅紀はルナの膝の上に座らされている・・・。

ルナ「いやだよぉ・・・まだ雅紀とこうしていたい／＼／＼」

とルナが駄々をこねるように雅紀を離さないでいる・・・。

レイラ「雅紀を抱いていいのは我だけだっ！雅紀を離せっ！！！」

とレイラが雅紀を捕まえる

ルナ「こらッ！雅紀は僕のだっ！！！」

レイラ「いやっ！我のだっ！！！」

と互い一歩も譲らず、雅紀を引つ張り合う・・・。

ミソラ「こ・・・こらっ！雅紀をそんなふうに扱ってはなりませんよっ

！？」

とミソラが注意するも二人は聞いておらず・・・そして・・・

雅紀「二人とも・・・いい加減にしろっ！！！」

と雅紀は限界に達して怒鳴る・・・。

雅紀「二人とも、そこに正座しなさいっ!!」

ルナ・レイラ「は・・・はいっ!!」

と二人は正座し、雅紀の説教を受けていた・・・。

シャマル「な・・・何かこうシュールな感じの光景ですね・・・?」

リインフォース「私もそう思う・・・。」

ザフィーラ「見た目は子供でも・・・中身は14だからな・・・。」

と三人は・・・いや、二人と一匹はそう言う・・・。

はやて「兎に角やつ!このロストロギア・・・解析せなっ!預かるでっ!!」

とはやては言う・・・。

雅紀「俺は・・・どうすればいいんだ・・・?」

と説教を終わらした雅紀は言う・・・。

はやて「しばらく、雅紀君はその姿でいてもらっな?」

雅紀「なんでっ!」

はやて「解析も速くは終わらんのや・・・せやから・・・その姿でいてな?」

雅紀「・・・わかった・・・。」

としぶしぶ雅紀は言う・・・。

なのは「それにしても、雅紀くん・・・可愛いの／＼／」

フェイト「ヴィータと同じ背丈だね・・・。」

となのはとフェイトは言う・・・。

ヴィータ「けっ！なにが同じだっ、たくっ。」

雅紀「いや・・・同じじゃないし・・・むしろ負けている・・・。」

と雅紀はヴィータの隣に立つ・・・。確かにヴィータとは背丈が若干、負けていた・・・。

はやて「でも、それがええっ！」

雅紀「なにがさっ!?!？」

ヴィータ「・・・勝った・・・(ボソッ)」

シグナム「対抗意識をしていたな・・・おまえ・・・。」

雅紀「俺はこれから・・・どうすればいいんだ~~~~~」
「？」

アリス宅

アリス「……！……雅紀の身になにか起こった……？……
そんなはずないよね……。」

とアリスは麦茶を飲んでいた……

アリス「はあ……あの時のセックスは……気持ち良かったあ……
子宮が精液でいっぱいになっちゃたし……雅紀にいろいろなところを……キャツ／＼。思い出しただけで、子宮がまた熱くう
／＼」

とアリスは一人、顔を真っ赤にさせながら言った……。

アリス「はあ・・・今度は・・・危険日の時に・・・やっちゃんおうかなあ・・・でも・・・まだ赤ちゃんを産むには速いしね・・・でも将来は子供たくさん・・・ウフフフフ／＼／＼」

とアリスはどんどん大人の階段を上っていくような感じがした・・・。

第51話

雅紀「ハア~~~~~」

と雅紀は深いため息を吐いた。

なのは「どうしたの？雅紀くん？」

雅紀「いやな・・・俺って・・・もしかして永遠にこの姿のままじゃないかって思ってしまった・・・」

と雅紀は絶望に染まった顔をして言う。

はやて「そりゃあらへんよ。効果が切れる可能性もあるんやから」。

雅紀「ふ〜ん・・・」

ミソラ「雅紀、紅茶を飲んで少し落ち着きましょう・・・」

とミソラが紅茶を出してきた。

雅紀「ありがとう・・・ミソラ・・・（此処の紅茶・・・美味しいんだよなあ・・・）」

と雅紀は紅茶を受け取り・・・口にする・・・と・・・

雅紀「うっ」

なのは「雅紀くん？どうしたのっ!？」

突然雅紀が苦しみ出す……。

雅紀「……こ……紅茶が……苦く感じる……。」

なのは「へ……?」

雅紀「な……なんていうか……いつもと変わらないんだが……味に慣れてない感覚に襲われて……。」

はやて「はっはっくん……もしかして……味覚まで子供になってるんじゃないか?」

雅紀「な……なにっ!？」

なのは「それもそうかも……この紅茶……大人の人には大流行だけど……今の雅紀くんのような体つきをしてる子には、苦手なんだよ……。」

雅紀「ま……マジかよ……。」

ミソラ「なら、ジュースかなにか飲ませましょう……。」

なのは「それいいね……。雅紀くん、何する……。て雅紀くん?」

となのはは雅紀を見ていると……。雅紀が別の方向を向いていた……。雅紀の視線の先には……

ヴィータ「此処のケーキはホントギガうまだぜっ!!」

とヴィータがケーキを食べていた……。

なのは「……雅紀くん……もしかして……ケーキが食べたい？」

雅紀「ふえ？い……いや……それは……」

と雅紀はヴィータが食べているケーキをちらつと見ながらモジモジしていた……。

なのは「（可愛過ぎなの〜〜〜〜ノノノ）」

とこれにはなのはの心にクリーンヒットッ！ハートをキュンキュンさせる雅紀……。

なのは「ケーキが食べたいんだね？なら今日は私のおごりだから……遠慮なく言ってもいいよ？」

となのはが優しく言う……

雅紀「な……なら俺は……ヴィータが食べているケーキを……」

と雅紀が言う……

なのは「……ご注文ありがとうございます。じゃあ持ってくるから待っててね？」

とお仕事モードに入るなのは……そして奥に入って行った……。

ミソラ「なら私も、なのは手伝いに行ってきます・・・。」

とミソラも奥に入って行った・・・。

はやて「フフフフ・・・ようやく邪魔者が消えたわ・・・。」

とはやてが怪しい笑みで言う・・・

雅紀「は・・・はやて・・・?」

と雅紀は嫌な予感がしてはやてから離れようとしたが・・・

はやて「うにゃ~~~~~っ!!!!/!/」

雅紀「なっ!?!」

とはやてがいきなり雅紀に抱きついてきた・・・。

はやて「もう我慢の限界だったんよっ!はあく、雅紀君、可愛過ぎるわ~~~~~!!/!/」

雅紀「ちょ・・・ちょっと、はや・・・むふっ!」

と雅紀が何か言おうとしたが・・・はやての胸で喋れなくなる・・・。

はやて「もっつ。雅紀君も照れ屋さんなんやねっ。あはあ・・・今の雅紀君は可愛さ倍増やっ!!もう離さへんでえっ!!!!/!/」

雅紀「むっ!ふあ・・・ふあふあふええっ!ふあふあふいふえっ!!!

）は・・・はやてえっ!離してっ!!!(/!/」

突然、頭に強烈な痛みが走った。。。

雅紀「(うつ！な・・・何だ・・・？・・・俺の意識が・・・消える・・・？)」

と雅紀は目をつぶり・・・そして目を開ける・・・。

ヴィータ「うゝん！これもギガうまつ！！」

とヴィータがバクバクと食べていると・・・

雅紀「・・・」

雅紀が近寄って来て、物欲しそうに見ていた・・・。

ヴィータ「・・・なんだよっ、食べたいのか？」

雅紀「・・・(ゴクッ)」

ヴィータ「・・・意地汚ねえガキだなあ・・・てめえ・・・。」

雅紀「・・・(ジュルッ)」

ヴィータ「いちいち、よだれを出すなっ！気持ち悪いんだよっ！やらねえぞっ！！」

雅紀「・・・(うつ)」

とケーキをやらないヴィータに雅紀は上目遣いしてきた・・・。

ヴィータ「ぐっ！て・・・てめえ・・・(なにそんな目であたしを見てんだっ！！？ドキドキしてくるじゃねえかよっ！!)」

雅紀「・・・(うるうる)」

ヴィータ「くっ！わかった、わかったっ！一緒に食うぞっ！それでいいだろっ！？／＼／」

雅紀「・・・!(パアッ)」

とヴィータがようやく承諾してくれたおかげで雅紀は眼を輝かせながらヴィータの隣に座る・・・。

ヴィータ「全く・・・(さっきのコイツ・・・可愛かった・・・て何言っただがんだ？あたしはっ！？・・・でも・・・コイツの笑顔は・・・悪くねえな・・・)」

とヴィータは心中そう呟く・・・。

雅紀「・・・(パクパク)」

と雅紀は満足に食べる・・・。

ヴィータ「ほら・・・口元についているぞ？・・・とってやるからじっとしとけよ・・・?」

とヴィータは雅紀の口元のクリームを取る・・・。

雅紀「ありがとう、おねえちゃん・・・。」

ヴィータ「礼はいらねえよ・・・）たくつ。ホント、あたしはどろしちまったんだ？顔が熱くなってきたてやがる・・・／＼・・・ておねえちゃん・・・？）」

とヴィータは思う・・・。

なのは「雅紀くん・・・お待たせな・・・の・・・」

ミソラ「なのは・・・どうしたのです・・・か・・・」

と二人が固まる・・・。二人の視線には・・・。

ヴィータ「・・・（ニコニコ）」

雅紀「・・・（ニコニコ）」

仲良く食べている雅紀とヴィータの姿がそこにあった・・・。

なのは「雅紀くん・・・なにしているのかな・・・？」

ミソラ「何だか・・・仲のいい事・・・ですね・・・」

と二人は怖いオーラを出す・・・。

なのは・ミソラ「私という人がいながらッ！！」

と二人は叫ぶ・・・。

なのは「雅紀くんっ！！」

「ミソラ」とうとう．．．ヴァイタにまで手を出したのですか．．．」

と二人は雅紀に聞く．．．。

雅紀「ふえ．．．？．．．おねえちゃん達．．．誰．．．？」

と雅紀が言った．．．。その言葉で．．．二人はまた固まる．．．。

なのは「え．．．雅紀くん．．．なんて．．．？」

雅紀「おねえちゃん達．．．誰って言ったんだよ．．．？」

ミソラ「雅紀．．．私達の事が、わからないのですか？」

雅紀「うん．．．知らないよ、僕？」

なのは「ぼ．．．僕って．．．。」

ミソラ「雅紀っ！覚えてないのですか!？」

雅紀「覚えてないよ？僕は．．．お母さんとお父さんと一緒にいたんだけどなあ．．．。」

と雅紀は困った顔をする．．．。

なのは「え？お母さんと．．．お父さんと．．．？」

雅紀「僕の家族だよ。おねえちゃん。」

なのは「（雅紀くんの両親は・・・もう・・・いないはず・・・でも・
・お母さんとお父さんて・・・）」

ミソラ「シャマル・・・！来て下さいっ！！」

シャマル「どうしたんですか？ミソラちゃん？」

とミソラに呼ばれ、シャマルは来る・・・。

ミソラ「今すぐ、雅紀の脳を調べてほしいんですっ！！」

シャマル「え？一体どうして・・・？」

ミソラ「雅紀が・・・記憶を失くしているかもしれないんですっ！！」

シャマル「えっ！？」

ヴィータ「ハアッ！？どういつこったよ、それえっ！？」

シャマル「と・・・兎も角、見てみましょ・・・。ちよつとごめんね・
・・・？」

雅紀「ふえ・・・？」

とシャマルは右手を雅紀の額に乗せ・・・魔法を使って雅紀の脳を
調べる・・・。

シャマル「・・・！！・・・こ・・・これはっ！！」

と突然シャルは叫ぶ・・・。

ミソラ「何か・・・わかったんですかっ!?!?」

シャル「・・・ミソラちゃんの言う通り・・・雅紀君・・・記憶を・・・失っているわ・・・」

とシャルは暗い顔をしてそう言う・・・。

ミソラ「そ・・・そんな・・・」

ヴィータ「おいっ!どうなっちまうんだよっ!?!?!?」

なのは「・・・ま・・・雅紀くん・・・!」

雅紀「ふゆう・・・?」

記憶を失った雅紀に・・・誰もが・・・驚いた・・・。

第51話（後書き）

さてと・・・大変なことになりましたっ！

雅紀「これも、あのロストロギアの力!？」

わからん・・・。さて次回は・・・記憶を失った雅紀をアリスが記憶を取り戻そうと奮闘しますっ!!

雅紀「それではっ!!」

第52話

はやて「雅紀君の記憶が……」

フェイト「ないって……」

ルナ「それホントなのっ！シャマルっ！！？」

レイラ「詳しく説明しろっ！シャマルっ！！！」

と四人が聞く……。

シャマル「そ……そんな怖い顔で聞かないで、レイラちゃん……。確かに、記憶を失っているわ……。で、脳を調べてみたら……プロテクトみたいなのが掛かってたの……。」

フェイト「プロテクト……？」

シャマル「ええ……。よくわからないけど……脳にプロテクトが掛けられていて……そのせいで雅紀君の記憶が消されている可能性があるかもしれないの……。」

はやて「……まさか……。」

レイラ「あの……ロストログアが影響か……。」

シャマル「たぶん……。」

ルナ「どうなっっちゃうのさ……雅紀……。」

シヤマル「このまま・ロストロギアの浸食が進んだら、最悪・自分の事も・何もかも忘れてしまふ……。」

四人『!』

シヤマルの一言に四人は驚愕……そして……暗い表情をする……一方雅紀は……

雅紀「ふゆう……すぴい……。」

なのはのお膝の上で熟睡中……。

なのは「……。」

なのはは悲しい表情をしながら、雅紀の頭を撫でている……。

ミソラ「雅紀……幸せそうですね……。」

なのは「う……ん……。」

二人は暗い表情をのぞかせる……。その時……

アリス「こんにちは……。」

アリスがやってきた……。

はやて「あ、アリスちゃん……。」

アリス「買い物帰りで此処によって来たんだけど……雅紀いるかな

？全然帰ってこないから、心配してきたんだけど……。」

はやて「……あんな……アリスちゃん……。」

アリス「何？はやてちゃん？」

はやて「……あれ……見てや……。」

アリス「うん？」

とはやての指先の方向を見てみると……なのはの膝で寝ている雅紀が見えました……。

アリス「あれ？何、あの子？隠し子？」

はやて「違うわ……。あれ……雅紀くん、なんよ……。」

アリス「へ……？それ……どういう事……？」

とアリスは聞く……。そして……はやてから事情を聞いた……。

アリス「う……そ……でしょ……？」

はやて「……ホンマや……。」

アリス「じゃ……じゃ……雅紀は……記憶が消えてなくなっちゃうの……？」

はやて「わからへん……だけど……このまま、漫食が進んだら……最悪……そうなってしまつて……。」

アリス「うそ・・・うそ・・・う・・・そ・・・」

とアリスは気絶してしまった・・・。

はやて「あつ！アリスちゃんっ！！」

とはやてがアリスを抱える・・・。

フェイト「アリス、大丈夫！？」

はやて「兎も角、寝かせる場所確保やッ！」

と二人はアリスをソファに寝かせる・・・。

ルナ「無理ないよ・・・雅紀があんな風になっちゃったんだしね・・・」

レイラ「シャマル・・・治せる方法はないのか・・・？」

シャマル「ロストロギアの効力が切れればなんとか・・・でも、その時に浸食が完全に進んでいたら・・・。」

ヴィータ「くそっ！このままじゃ、あたしらは雅紀の記憶が消えていくのを黙って見てるしかねえのかよっ！！？」

レイラ「貴様・・・雅紀に恋をしたのでは・・・？」

ヴィータ「そ、そんなことねえよっ！！！！！！」

と顔を赤くするヴィータ……。フラグをたてやがったのか……。
・？雅紀？

雅紀「むにゆう……。？うるさいよお。。。」

と雅紀が起きた。。。

なのは「あ、雅紀くん。。。」

雅紀「おはよう、なのはおねえちゃん。」

なのは「ふえっ！！？／／／」

六人「おねえちゃんっ！！！！？」

となのはは頬を染めて……。他の人は驚愕の表情で言う。。。

雅紀「ふゆう？あ、おねえちゃん達も。。おはよう。」

六人「うあっ！！！！／／／」

と雅紀のおねえちゃん発言で六人の心を掴む。。。。子供になって、
記憶を失ってもフラグ体質は変わらず。。。。

雅紀「ふゆう？どうしたの？お顔が熱いの？」

六人「な。。何でもないよっ！！！」

雅紀「ふゆう？でも、寝んねしなきゃだめだよお？」

六人「だ、大丈夫ですっ!!!」

なのは「(ふえ〜)。雅紀くん・子供になっても記憶を失っても、可愛過ぎなのっ!!!／／」

となのはは顔を真っ赤にする。。

アリス「う〜ん。。。雅紀い。。。!」

とアリスは眼を覚ました。。

雅紀「あ、おはようございます。。。」

と雅紀はアリスの事に気づき、挨拶をする。。。

アリス「(やつぱり。。。雅紀。。。)」

アリスは一人。。。悲しい表情をした。。。

雅紀「おねえちゃん?どうしたの?」

アリス「え?う〜ん、なんでもないよ。。。!」

アリスは元気な顔で言うと。。

雅紀「おねえちゃん・悲しい顔・しないで。。。?」

雅紀がアリスの頭を撫でていた。。

アリス「。。。／／」

アリスは一人、涙目になっていた・・・。

アリス「皆、私、雅紀を連れて・・・帰るわ・・・。」

なのは「アリスちゃん・・・。」

アリス「・・・行こう・・・雅紀・・・。」

雅紀「ふゆう？」

とアリスは雅紀と一緒に家に帰って行った・・・。

アリス宅

アリス「ホントに・・・何も覚えてないんだね・・・雅紀・・・」

雅紀「おねえちゃん・・・僕の事・・・知ってるの？」

アリス「うん・・・。いろんなこと・・・知ってるよ・・・。」

雅紀「へえ・・・。」

と話していると・・・

グウ~~~~~・・・

と音が響く

雅紀「はあ・・・お腹すいたなあ・・・。」

アリス「あらあら・・・じゃあ御飯作るから、待っててね・・・。」

雅紀「うんっ！」

とアリスは一人台所に向かう・・・

雅紀「・・・。」

雅紀はジッと辺りを見渡した・・・。

雅紀「なんだろう・・・初めてのお家のなのに・・・知ってる感じ

がするぞお？」

と雅紀は寝転がる・・

雅紀「それに・・・なんだか・・・落ち着く・・・。」

と言っ・・・。

数分後

879

雅紀「おいし〜いっ！」

アリス「うふふ・・・ありがとね・・・。」

雅紀「・・・（ハムハムッ）」

アリス「（・・・雅紀・・・子供の頃って・・・こんな感じの子だったんだね・・・）」

とアリスは雅紀を見ながら思う・・・。

アリス「（思えば・・・初めての出会いって・・・雅紀の世界が滅んだ日・・・。雅紀の事・・・まだ・・・なにもわかってない感じがしてならないな・・・）」

雅紀「ごちそうさまでしたっ！」

とアリスが思っている内にもう雅紀は完食した・・・。

雅紀「おねえちゃん、凄く美味しかったよおっ！」

アリス「ありがとね。」

雅紀「・・・ねえ・・・おねえちゃん・・・。」

アリス「ん？」

雅紀「・・・おねえちゃんに・・・抱きついて・・・良い？」

アリス「えっ？／＼／」

雅紀の突然の一言に、アリスはドキツとした・・・。

雅紀「なんだか・・・おねえちゃんに・・・抱きつきたいんだ・・・。
。良いかな・・・？」

雅紀の物欲しそうな瞳がアリスの心をキュンキュンさせる・・・。

アリス「・・・いいよ・・・。」

雅紀「うん……。」

そして雅紀は、遠慮がちでアリスに抱きつく。。。

雅紀「温かい……………」

アリス「……………」

雅紀「おねえちゃんの匂い……………良い匂い……………懐かしい……………」

アリス「そう……………」

とアリスは抱き返す……………。

アリス「……………お風呂……………入っちゃおうか……………?」

雅紀「うん。」

とアリスは雅紀を連れてお風呂場に行った……………。

お風呂場

雅紀「おねえちゃんの肌・・・綺麗・・・」

と雅紀はアリスの肌に見惚れる・・・。そりゃそつだ・・・。なにせアリスは美人なのだから・・・。

アリス「ありがとだね・・・。頭、洗ってあげるからおいで？」

雅紀「うんっ。」

とアリスは雅紀の頭を洗う・・・。

雅紀「あはあ・・・気持ちいい／＼／＼」

アリス「そう？」

と洗った後、お風呂に入ろうとしたが・・・

雅紀「深い・・・入れないよぉ・・・。」

と雅紀が言う・・・。確かに雅紀の今の体系と同じぐらいの子には無理がある・・・。

アリス「なら私が支えるから・・・来て・・・。」

雅紀「うん・・・。」

と雅紀はアリスに抱きつく……。そして風呂に入る……。

雅紀「ふはぁ……。。」

アリス「……………」

この場面からすれば……………ホントに親子にしか見えんっ！アリス、その歳になつてお母さんっ！

アリス「お母さんは早いよ……………でも……………いつか雅紀の子を……………フッフ……………」

あぁ……………もうそこまで思考が進んでいるのかっ！！！？

雅紀「おねえちゃん、一緒に寝てくれてありがとう……。」

アリス「どういたしまして……。」

現在、アリスの布団に雅紀が一緒に入ってる……。理由は……

雅紀「暗い所、一人で居るの嫌い……。」

とのこと……。

雅紀「今日は……おねえちゃんと一緒にいて良かった……。」

アリス「うん……。」

と雅紀はアリスに抱きつく。

雅紀「おねえちゃんに抱きついてると……落ち着く……。お母さんのおいがするんだ……。」

アリス「そうなんだ……。」

雅紀「おねえちゃん……。お休みなさい……。」

と雅紀は熟睡した……。

アリス「……。雅紀……。元に……。戻ってね……。この

まま・・・記憶を失って・・・自分の事も知らなくなっちゃったら・・・
嫌だよ」

と涙を流しながら呟く・・・。

アリス「元に・・・戻って・・・。」

とアリスは言いながら・・・雅紀の頬にキスをし・・・就寝・・・。

アリス「ん．．．ん．．．」

アリスは起きて目をさすり．．．雅紀を試してみる．．．と．．．

雅紀「むっ．．．むうう．．．あれえ．．．俺は．．．どうなって．．．」

雅紀がいた．．．。しかも．．．元の体系に戻っていた．．．。

アリス「ま．．．雅紀．．．？」

アリスは恐る恐る聞いてみる．．．

雅紀「ん？アリス．．．どうした．．．？」

と雅紀は不思議そうに言う．．．。

アリス「うう．．．ヒッぐッ．．．」

アリスは泣きだす．．．。

雅紀「うおっ！？どうしたんだ、アリスっ！！？どこか痛いのかっ！？」

アリス「雅紀~~~~っ！！／／／」

とアリスは抱きつく．．．。

アリス「よかったあっ！雅紀が元に戻ったあっ！／＼／」

雅紀「ちよっ！アリス、いきなり抱きつくなよっ！／＼／」

アリス「嫌だよっ、もう離さなくいつ！／＼／」

雅紀「ちよ、待って、アリスっ！痛い、痛いっ！！」

とアリスが力を入れて雅紀に抱きつく……。アリスは悪魔なので、人間よりも何倍もの力を持っている……。なので痛いのだ……。

雅紀「ぎゃっ！し……。死……。ぬ……」

と雅紀は顔を青ざめて気絶する……。

アリス「雅紀……。？雅紀っ！しっかりしてっ！！？」

アリスは雅紀が気絶したを気づき力を抜いて、雅紀に声をかけるのであった……。

第52話（後書き）

さて、終わりました・・・。

雅紀「後半はシリアスな感じがなかったぞ・・・？」

すみません・・・。

雅紀「全くお前って奴は・・・。ホントダメ作者だなあ・・・。」

ブチッ！（怒）

雅紀「・・・今のブチッって音は・・・何・・・？」

てめえは・・・いちいち、人が我慢していると言つのに・・・調子に乗りおつてっ！！！！（怒）

雅紀「うおっ！怖っ！！？」

丁度いい・・・今までの分・・・たっぷり仕返ししてやらアッ！！！！」

『アタックライド・ゲキジョウバンツ！』

雅紀「おいつ！それ、ディエンド・コンプリートフォームが使う技っ！！？」

さあいけっ！！劇場版ライダーたちよっ！！！！

雅紀「それ、アリスの必殺技あつ!!!?」

ザンンンツ!!!

雅紀「ぐ．．．はあ．．．」

手加減してやったんだ．．．感謝しろ．．．それに．．．作者権限で技も大幅に威力を抑えたしな．．．さて締めは．．．アリス。

アリス「はい．．．」

雅紀「ぐ．．．な．．．なんで．．．?」

さて．．．最後は．．．天国にも昇る．．．地獄のセックスだ．．．

雅紀「へ．．．?」

アリス．．．後は頼んでぜ．．．?俺は此処から去る．．．

アリス「ありがとう、作者さん．．．」

お礼はいらねえ．．．じゃあな．．．

アリス「はい．．．さてと．．．気持ちよくなるうね．．．?雅紀い．．．?」

雅紀「あ．．．あ．．．あああ」

アリス「フッフ．．．セックス．．．スタート」

第53話

聖洋中

なのは「雅紀くん、元に戻ってホントによかったのっ!!」

フェイト「一時はどうなるかと思ったよ……。」

はやて「でも……ロストロギアの力がなくなって良かったわあ……。にしても不思議なこともあるんやね……。完全に効力が消えるし……脳に異常がないなんて……。」

雅紀「すまない……迷惑だったろ?」

はやて「いや……あれが迷惑って……そらないわ……。」

雅紀「?」

なのは「えへへ……無邪気な雅紀くんを見て嬉しかったの!!!」

フェイト「反則すぎだったよ……あの笑顔!!!」

雅紀「記憶を失った俺は皆に何をしていたんだ……?」

と雅紀は考える……。とすると、先生が来た……。

先生「えー……実は急なのですが、このクラスに三人、転入生が来ますっ！」

と先生が言つと……クラスが騒がしくなつた……。

先生「男子達は喜ぶと思うが……その三人は皆女子よ……。仲良くしなさい。」

と先生が言つと、男子達が喜んだ……。

アリサ「全く……これだから男子達は……。」

すずか「でもアリサちゃん……。雅紀君は別だよ?」

アリサ「わかつてるわよっ!」

と男子達に呆れていたアリサにすずかは言つ……。

雅紀「(三人……女の子……まさか……いや……まさかなあ……)」

雅紀は何か勘付いたようだ……。

先生「じゃあ、入ってきて。」

と先生が言つと・・・三人の女の子が入ってきた・・・雅紀はその女の子達を見たことがある。その子達は・・・

ミソラ「今日からこのクラスにお世話になります・・・高町ミソラです・・・」

ルナ「僕は、ルナ・Ｔ・ハラオウンだよっ！よろしくねっ！」

レイラ「我が名は、八神レイラだ・・・世話になるぞ、下朗共・・・」

ご存じ、元闇のマテリアル三人娘でした（笑）

先生「え、では三人の席ですが・・・木利野君の後ろにしましように・・・」

雅紀「はっ!?!」

先生の一言に雅紀は驚く。

ルナ「やった〜っ!雅紀の近くだ〜っ!!/!/」

ミソラ「ラッキーです・・・」

レイラ「他の男共だったら、間違いなく消していたところだ・・・」

とそれぞれ言いながら、三人は雅紀の後ろの席に座る・・・

雅紀「なのは・・・コレどういう事・・・?」

なのは「あゝ．．．実はね、ミソラも学校行かなきゃダメだって．．．お父さんが．．．。」

雅紀「確かに．．．あの人なら、そう言うな．．．。」

ミソラ「雅紀、これからはよろしくお願いします．．．。」

雅紀「ああ。」

と話していると．．．

先生「さてと．．．此処からは質問などにしましょう．．．。」

と先生が言うと．．．ほとんどの男子達が来た．．．。

「なのはちゃんと顔同じだけど．．．双子？」

「趣味は何？」

「好きな男性のタイプは？」

などと盛りだくさん．．．。

アリサ「はいはい．．．もうそのへんにしなさ．．．。」

とアリサが止めに入ろうとした、その時．．．

レイラ「黙れ、下朗共．．．耳ざわりだ．．．。」

と殺気を放ちながらレイラが言った……。途端、辺りは静まり返る……。

雅紀「ね、レイラ……ちょっと怖いぞ……?」

レイラ「こんな耳ざわりな奴らにはちょうどいいのだ……。」

とレイラは平気に言う……。だが……

男子達『怖くても可愛い~~~~っ!!!!!!!!』

とますます好意をもたらしてしまった……。

雅紀「……どういう性格してんだ……?こいつら……。」

ミソラ「単なる変人ですね……。」

と引いている……。

レイラ「消されたいか……?貴様らは……!!!」?

はやて「(レイラっ!落ち着いてっ!)」

とキレ気味のレイラをはやてが念話で落ち着かせる……。

雅紀「まあ……落ち着け、レイラ……。」

レイラ「雅紀がそう言うのなら……仕方がない……。」

とレイラは殺気を放つのをやめる……。

男子1「おい、木利野・・レイラちゃんとはどういつ関係だ・・・？」

雅紀「へ・・・？」

男性2「そつだ。何気に仲が良さそつだしな・・・？どうなんだ・・・？」

と男子達が詰め寄る・・・。

雅紀「いや・・・それはだなあ・・・。」

と雅紀は説明をしようとしたその時・・

レイラ「雅紀は我が唯一惚れた男だっ！」

とレイラが雅紀と腕を組んでそう言う・・。

男子達『何だとおおおオオオオオツ!!!!!!!!!!?』

と男子達が騒ぎ・・女子達は黄色い声を上げた・・。

雅紀「ちよつ、レイラ、何を言うかつ!!?」

レイラ「将来は結婚するのだ・・。言ってもよかるう・・。」

雅紀「結婚てっ!!?」

男子達『結婚だとオおおおおオオオオオツ!!!!!!!!!!』

そして一気に放課後・・・

雅紀「で・・・どうだった、今日は・・・？」

と雅紀が三人に聞いてみる・・・。

ミソラ「知らない子がいっぱいいました・・・。」

ルナ「僕も、学校は面白く感じたっ！」

レイラ「邪魔な虫共がいたがな・・・。」

なのは「雅紀くんは大丈夫だったの？」

となのはが聞く・・・。

雅紀「大丈夫・・・。なんとか逃げてきた・・・。」

フェイト「雅紀もお疲れ様・・・。」

フェイトは苦笑いする・・・。

はやて「ま、仕方がないわなあ・・・あれ・・・。」

アリサ「ホント、男子達には呆れてくるわっ!!」

すずか「アリサちゃん、雅紀君は別だよ？」

アリサ「当り前じゃないっ!」

と言う・・・。

雅紀「じゃ、俺はこの辺で・・・また明日なあ!」

と雅紀はアリス宅に帰って行った・・・。

ミソラ「・・・そう言えば・・・私達のほかにも・・・まだ、いましたね・・・強敵が・・・。」

ルナ「アリス・・・だね・・・!」

レイラ「負けられないな・・・!」

なのは「負けられないのっ!」

フェイト「うんっ!」

はやて「なんとしても振り向かせなっ!」

アリス「上等っ！」

すずか「うんっ!!」

と八人はアリスに闘争心を向けた・・・。

翌日

雅紀「おはよう。」

なのは「おはようなの〜、雅紀くん!」

と雅紀は下駄箱で八人に会う。そしてなのは達は下駄箱の扉を開けると・・・

ドシャアアアッ!

なのは「にゃあ~~~~っ!?!」

フエイト「わああっ!?!」

はやて「わわっ!?!」

アリサ「ちよつと。何よこれっ!?!」

すずか「な、何!?!」

ミソラ「よくこんなに入れましたね・・・」

ルナ「わあ・・・なんだ?この紙きれ・・・?」

レイラ「邪魔だ・・・!」

とそれぞれのげた箱には・・・どうやら大量のラブレターが入れられていたようだ・・・。

雅紀「大変だなあ・・・皆も・・・俺は大丈夫だがな・・・っ!?!」

と雅紀は自身のげた箱を開けると・・・ラブレターが入っていた・・・。

なのは「雅紀くん・・・それ、貸してなの・・・」

雅紀「あ．．ああ．．。」

と雅紀はラブレターをなのはにやる．．．。すると、なのは達はデバイスを起動した．．。

雅紀「おいっ！何でデバイスなんか．．．！？つつか人に見られてらヤバいんじゃない．．．。」

レイラ「我が結界を張ったから．．．心配するな．．．。」

雅紀「だからって、どうして．．．．？」

なのは「じゃまなラブレターは排除なのっ！」

となのはが言った．．途端．．

なのは「アクセルシューターアア．．．。」

ミソラ「デスシューターアア．．．。」

フェイト「プラズマランサアア．．．。」

ルナ「ライトニングランサアア．．．。」

はやて「ダークネスウウ．．。」

レイラ「デスジャッジメントオオ．．．。」

なのは「ミソラ『シューートッ！！！！』」

フェイト・ルナ『ファイアっ!!』

はやて・レイラ『バスターーッ!!』

と魔力弾や砲撃を放ち・ラブレターを跡形もなく消した・。

なのは「雅紀くんに近づいて良いのは、なのは達なのっ!」

ミソラ「それに・・・私達に触れていいのは・・・雅紀だけです・・・」

と皆を代表してなのはとミソラが言った・・・。雅紀は・・・

雅紀「皆して・・・怖い・・・」

と女の嫉妬に恐怖したとか・・・

第53話（後書き）

さて・・・今回はミソラ達の突然の転入話でした・・・。

雅紀「最後のあたりがヤバかった・・・。」

女の嫉妬は怖いからなあ・・・。さて次回は・・・ミッドチルダに怪人達が一斉に襲来っ！そして・・・リリなの編最終回近しっ！！

雅紀「それではっ！！」

第54話

聖洋中

雅紀「三人とも、もう此処には慣れたか？」

と雅紀はミソラ達に聞く。

ミソラ「ええ。まあ、なんとか・・・。」

ルナ「いっぱいお友達ができたっ！」

レイラ「虫どもがうるついていて邪魔だったかな・・・。」

雅紀「ほうほう・・・。あゝ、それと、囑託魔導師試験だったわけ、それはどうだった・・・？」

ミソラ「合格しました。」

ルナ「楽勝だったよ〜！」

レイラ「あんな問題、王である我には容易いことだった・・・。」

と三人が言う・・・。

雅紀「そうか。おめでとうな、三人とも。」

ミソラ「いえ・・・／＼／」

ルナ「えへへ／＼／」

レイラ「う・・・うぬ／＼／」

雅紀におめでとうを言われ、頬を染める三人・・・すると・・・

男子達「木利野オオオオオオオオオオツ！！！！貴様はまたあああああああつ！！！！！！！！！！」

と男子達が一斉に雅紀に襲い掛かってきた・・・

雅紀「うおっ！？またかつ！！！？」

と雅紀は追いかけてまわされる・・・

なのは「にやはは・・・雅紀くん、大変だね・・・」

フェイト「怪我しなければいいんだけど・・・」

はやて「男子達の嫉妬は怖いもんやね・・・」

アリサ「ホントねっ！！」

すずか「でも、他人事のように言っている私達もどうかなと思うんだけど……。」

と五人が言っていた……と……

？「(すみませんっ！皆さん、緊急事態ですっ！！)」

と六人に念話が入る……。

フェイト「(こちら、T・ハラオウン……どうしたの、シャーリー？)」

とフェイトが聞く……どうやら念話の相手はシャーリーからのようだ……。

シャーリー「(フェイトさんっ！先ほどミッド上空に謎のオーロラが発生して、そこから大量の異形が現れましたっ！今現在、現場の魔導師と交戦中ですが、数が多いせいで、次々に落とされてしまっていますっ！お願いできますかっ！?)」

フェイト「(了解っ！……皆、聞いてるよね……？お願いできるかな……?)」

なのは「(うんっ！)」

はやて「(お任せやっ！)」

ミソラ「(囑託としての初の戦いですね……！)」

ルナ「(一気にぶっ殺すよっ！)」

レイラ「（相手が異形なら・・・遠慮はいらんな・・・）」

と六人は頷き合う・・・。

なのは「アリサちゃん、すずかちゃん。今日はノート、お願いできるかな？」

アリサ「わかったわっ！」

すずか「なのはちゃ達は気をつけてね？」

なのは「うんっ！」

雅紀「俺も行くぞ。良いか？」

なのは「うん・・・てわかるの？私達がやるうとしてること・・・」
「？」

雅紀「さっきの・・・念話だっけか・・・？丸聞こえだったぞ？」

なのは「ふえ〜っ！？」

フェイト「たぶん・・・あの時、なのはやリインフォースとユニゾンしたことが原因かな・・・？」

はやて「まあ・・・兎も角いかなっ！」

と七人はその場を後にした・・・。

ミッドチルダ

フェイト「ハアアアアアアアアアアツ!!!」

雅紀「ウラアアアアアツ!!!!」

とフェイトとディカオスに変身した雅紀が怪人達を切り裂いていく。

なのは「ディバイイン・・・バスターーーツ!!!」

なのははディバインバスターで怪人達を倒していく。

フェイト「流石に数が多いね・・・。」

なのは「だねっ!」

雅紀『だが倒さないとな．．．そうだ．．！』

とデイカオスはカードを出す。

雅紀『フェイトっ！ちよつと力を貸してくれっ！！』

フェイト「へ？」

『アタックライド・ユニゾン・インツ！フェイトオツ！！』

フェイト「わあっ！？」

デイカオスの変身が解け．．フェイトが雅紀に突っ込んでく．．同時に二人の周りに金色のオーラが発生し二人を包む．．そして．．

雅紀「ユニゾン完了っ！』

ユニゾンを完了した雅紀が現れる．．。その容姿はフェイトのバリアジャケット（男用）を着ていて．．髪は金色、瞳は赤．．右手にはバルディッシュが握られていた．．。

フェイト『こ．．．これがユニゾン？ホントに．．雅紀と一つになつてるみたい．．。』

雅紀「しっかりタイミング合わせろよ、フェイト？」

フェイト『うんっ！』

雅紀はバルディッシュを構え．．魔力を込める．．。

リインフォース「ああ・・・。」

一方、別の場所では・・・シグナムとリインフォースが怪人達を見ている・・・。

リインフォース「行くぞっ！シグナムっ！！」

シグナム「あぁっ！！」

シグナム・リインフォース「ユニゾン・インッ！！」

とシグナムとリインフォースがユニゾンをし、シグナムの姿が変わる・・・。その容姿は・・・髪が白く・・・瞳が血のような赤で・・・バリアジャケットが黒くなっている・・・。

リインフォース「炎熱加速っ！！」

とリインフォースがシグナムの魔力変換・・・炎熱の能力を上げる・・・。

シグナム「ハアアアッ！！」

とシグナムはレヴァンティンを鞘に戻し、カートリッジをした直後、勢いよく抜く・・・と同時に、レヴァンティンから出る炎が黒く変化する・・・。そして・・・身構え・・・

シグナム・リインフォース「黒龍・・・一閃っ！！」

とシグナムがレヴァンティンを振ると・・・黒い炎が一気に舞い・・・黒い龍を形成しながら・・・怪人達に突撃していく・・・。

ジュアアアアッ！！！！

黒い龍に飲み込まれた怪人達は皆・・・灰になって消えた・・・。

シグナム「このまま押し通るっ！！」

とシグナムはいつきに怪人達と間合いを詰めて、切り裂いていく・・・。

ヴィータ「ラケーテンッ！ハンマーーーッ！！」

一方のヴィータはグラーフアイゼンを豪快に振り回し、怪人達を圧倒・・・。

ヴィータ「ちよろい連中だぜっ！どんどん掛かってこいっ！！」

とヴィータは余裕の表情を浮かべる・・・。

ザフィーラ「テオオオオオオッ！！」

一方の場所ではザフィーラが咆哮しながら怪人達に噛みつき引っ掻き、そして、魔法で地面から光の刃を出現させると圧倒・・・。

怪人達は負けじと一斉に光弾を発射し・・・町に当てる・・・だが・・・

シャマル「クラーウルヴィントッ！防いでっ！！」

湖の騎士シャマルがそれを許さない・・・光弾を翠色の光の壁で防ぐ・

シャマル「此処から先には・・・近づかせないし・・・攻撃など・・・許さないわ・・・。」

ザフィーラ「全て守る・・・!!」

と鋭い目で言い・・・怪人達を怯ませる・・・。

ミソラ「デスシューターアア・・・シュートッ！」

ルナ「ライトニングランサアア・・・ファイアッ!!」

とミソラとルナが魔力弾を撃ちまくりで怪人達を圧倒・・・

レイラ「詠唱完了・・・離れている・・・。」

ベルカの魔法陣を出し・・・詠唱をしていたレイラが言い・・・二人は下がる・・・。

レイラ「全てに・・・闇の裁きを・・・。」

と呟いていると・・・レイラの真上に黒い魔法陣が現る・・・そして・

レイラ「デスジャッジメントバスターーッ!!!!」

とレイラが叫ぶと・・・黒い魔法陣から砲撃が出て・・・。怪人達を
飲み込む・・・。

ドゴオオンッ！！

そして目の前には・・・怪人が一匹もいなかった他・・・近くの建
物が消えていた・・・。

ミソラ「レイラ・・・もう少し、その出力を抑えた方が良かった
・・・。」

レイラ「そのようだな・・・。リミッターでも掛けるか・・・。」

などと話していた・・・。

戻って、雅紀達の方では・・・

雅紀「ふう・・・これで全部のようだな・・・。」

なのは「だね・・・。」

フェイト『でも・・・なにか嫌な胸騒ぎがする・・・』

と言っている・・・

ゴゴゴゴゴゴゴツ！！！！

と地響きが起きた……。

雅紀「うおっ！？な……何だっ！？」

なのは「じ……地震は嫌いなの……っ！！」

レイジングハート『マスター、前方に巨大生命体反応、確認……』

バルディッシュ『警戒レベル3です……マスター。』

とレイジングハートとバルディッシュがそう言う……。

雅紀「巨大生命体反応って……まさか……」

と雅紀は何やら感ずいた……すると……

ギャオオオオツ！！！！

と地面から巨大な何かが現れた……。

なのは「な……何？この異形はっ！？雅紀くんわかるっ！？」

雅紀「ああ……コイツは……電王の世界の……暴走イマジンだ……」

と雅紀達の目の前には……電王の世界にいる……イメージが暴走したイマジン……「ギガンテス」がいた……。

ギャオオオオツ!!!

雅紀「あぶねっ!!!」

と雅紀はなのはを抱え、飛ぶ……。何とか巨大怪人の攻撃を免れた……。

雅紀「ふう……危なかった……」

なのは「ま……雅紀くん……」

雅紀「ん？何だ、なのは？」

なのは「もう……降ろして良いよ……？／／／」

雅紀「あっ／／／」

今の雅紀がなのはを抱えている状態は……お姫様だっこだった……。

雅紀「ごめんっ!!」

なのは「ううん……気にしないで……（雅紀くんにお姫様だっこされちゃった／／／）」

。雅紀は急いでなのはを降ろし、なのはは頬を染めて内心嬉しがる……。

フェイト『（なのははびっくり……ズルイ……いつか私も雅紀に……）』

一方、雅紀とユニゾンしているフェイトは嫉妬していた・・・。

雅紀「兎も角・・・此処は数で・・・だな・・・。ユニゾン解除っ！」

フェイト「わっ!?!」

雅紀はユニゾンを解除し、ディカオスに戻る・・・フェイトはユニゾンを解除したことから出てきた・・・。

雅紀『一気に特大のを食らわせれば・・・倒せる・・・。行くぞっ!』

なのは・フェイト「うんっ!」「」

と三人は身構えると・・・

ギャアアアアッ!!!

イメージが突っ込んできた・・・

雅紀『うおわっ!?!?!』

そのイメージの突進にディカオスは吹っ飛んだ・・・。

なのは「雅紀くんっ!」

フェイト「雅紀っ!」

雅紀『ぐウッ!』

とデйкаオスはビルにぶつかる・・・と思ったら・・・

ガシィッ!

雅紀『え・・・?』

デйкаオスは自身を抱えている者を見る・・・。それは・・・

雅紀『デйкаイザー・・・!』

ロボットモードになったマシンデйкаイザーだった・・・。

ウイイイイィンッ!

雅紀『うおっ!?!?』

デйкаイザーはデйкаオスを上へ投げる・・・そして・・・一気にバイクモードになる・・・

雅紀『うおっとっ!』

そしてデйкаオスはデйкаイザーに跨る・・・。

雅紀『俺にどうしろってんだよ・・・て何?』

デйкаオスが見たものは・・・タッチパネルのようで・・・そこからデータが現れる・・・。

雅紀『そうか・・・おまえ・・・そんな機能があったのか・・・よしっ!』

とディカオスは納得したようでタッチパネルを操作……。すると・

『ディカイザー、フライトモードッ!』

とディカイザーが発すると……。ディカイザーの後ろのタイヤが割れ、車体の隣に一つずつ移動……。そして、前車輪は横に倒れ、車体が少し斜めに倒れる……。これがディカイザーのもう一つの姿・
・フライトモードだ……。

雅紀『うわあっ!カッケええッ!』

ディカオスはコレに満足した……。

雅紀『よし、いつけええッ!』

とディカイザーをとばす……。

『ファイナルアタックライド・デイ・デイ・デイ・ディカオスッ!
!』

とディカオスはファイナルアタックライドを発動……。怪人めがけてディカイザーをとばす……。

雅紀『受けてみるッ!』

とディカオスはそのままジャンプ……。ディカイザーに乗った勢いで・・加速

雅紀『マッハディメンションブレイカーーッ!』

とディカオスはそのまま怪人にキックを食らわす・・・そして・・・
貫いた・・・。

ギャオオオオツ！！！！

と怪人は爆死した・・・。

フェイト「なんか・・・私達の出番が・・・なくなったような・・・」

なのは「だね・・・。」

その場にい二人はそう呟いた・・・。

はやて「(こちらははやてや・・・もう怪人がいないし・・・戻るか・・・?)」

なのは「(了解なの)」

フェイト「雅紀・・・帰るよ・・・て雅紀?」

フェイトが見てみると・・・

雅紀『待つて待つてっ！コレの使い方が難しいっ！！』

とディカイザーをとばしながらゆっくりフェイトの方に向かう・・・

フェイト「もう・・・じゃあ、帰る・・・。」

となのはとフエイトは先に進んだ・・・。

雅紀『・・・(今回の件・・・もしかして・・・俺がいるからなのか・・・?)』

と思いつながらディカオスは帰って行った。

第54話（後書き）

さて終わりました。

雅紀「今回は見どころ満載だったな・・・。」

だな・・・まず最初は、シグナムとリインフォースとのユニゾンっ！

雅紀「原作には出てこなかったユニゾンだよな・・・。」

その通り、だから・・・リインフォースも生存しているなら・・・このまま守護騎士たちとのユニゾンもいいかなって思いましたっ！

雅紀「うむうむ・・・そして次はディカイザーだな・・・。」

ああ・・・まえの後書きでまだまだ隠し機能を持っていると書いたので・・・出してみました・・・アイディアはWのハードタービュラーですっ！

雅紀「ほうほう・・・。」

さて話はここまでとし・・・次回の話は・・・ミッドに怪人達が現れたことは自分が原因だと知った雅紀・・・そして・・・ある決断をする・・・

雅紀「俺は・・・この世界から・・・。」

続きは次回っ！お楽しみにつ！！！！

第55話

ミッドチルダでの戦いから数日

アリス宅

雅紀「……………」

……………雅紀はこのような状態となっていた……………。

アリス「……………雅紀？どうしたの？そんな深刻そうな顔をして……………？」

とアリスが聞いてきた……………。

雅紀「アリス……………」

アリス「何か……………考え事？」

雅紀「……………」

と雅紀は顔を伏せる……。

雅紀「なあ……アリス……。」

アリス「ん？何？」

雅紀「……前に……ミッドチルダに怪人達が襲い掛かってきたって話したろ？」

アリス「うん……。」

雅紀「普通じゃ……この世界はライダーの世界じゃない……けど……怪人達が現れた……。」

アリス「……。」

雅紀「俺さ……なんか、思いついたことがあるんだけど……。」

アリス「……。」

雅紀「俺がいたから……怪人達が現れたんじゃないかな……？」

アリス「！」

雅紀「俺が……この世界の人間じゃないし……この世界に介入してしまっただけに……。」

アリス「そんなこと言わないでっ！！！」

雅紀「！」

とアリスは立ち上がる。

アリス「怪人達が現れたのは雅紀のせい？そんなわけないよっ！！
何か・・・何か別な原因で・・・」

雅紀「じゃあ何だっただよっ！！！！」

アリス「！！！」

雅紀の怒鳴り声にアリスは驚き体をビクツとさせる・・・。

雅紀「あの時の・・・ギルドとの戦い・・・その後は全然、滅びの現象
がなかったのに・・・最近になって・・・また・・・俺が・・・
いたからなんだよ・・・。」

と雅紀は悲痛に満ちた声を上げて言う・・・。

アリス「雅紀・・・。」

アリスは言葉が思いつかなかった・・・。

雅紀「だから・・・俺は・・・。」

数時間後

高町家

なのは「雅紀くん……私達にお話があるって何なのかな……？」

となのはが言う……。この場にはなのは・フェイト・はやて・アリサ・すずか・ミソラ・ルナ・レイラの八人がいた……。

フェイト「さあ……？でも……何だろうね……？」

はやて「電話で聞いてて……雅紀君の声……何か重い声な感じやっ
たしなあ……。」「

アリサ「まゝた何か隠し事でもしてて・・・誰かに知られたとかじゃないの？」

すずか「そうなのかな・・・？」

ミソラ「隠し事している風には見えませんでしたか・・・」

ルナ「なんか別の事だったりしてっ!!」

レイラ「兎も角だ・・・アイツには・・・何か我らに話さなければならぬ事があるんだろう・・・。」

レイラの一言に皆、真剣な表情をする・・・そして・・・

ピンポーンッ

なのは「あ・・・雅紀くんかな？」

チャイムの音を聞いて、なのはは玄関に向かう・・・。

なのは「はい。」

雅紀「なのは・・・俺だ。」

なのは「あ、雅紀くん。今開けるね？」

となのはは扉を開けて雅紀を入れる・・・そして二人で皆がいるところに行った・・・。

雅紀「皆・・・おはよう。」

フェイト「おはよつて・・・もうお昼過ぎてるよ?」

雅紀「そうだな・・・」

アリサ「所で、話つて何よ?」

とアリサが聞く・・・皆も真剣な表情で見つめる・・・。

雅紀「・・・実は・・・この前のミッドの襲撃で・・・怪人達が襲い掛かってきた・・・。」

なのは「それはわかるよ・・・?」

雅紀「何で奴らが現れたのか・・・原因がわかった・・・。」

フェイト「ホントなのっ!?!?」

はやて「雅紀君凄いなあ・・・。」

なのは「教えてなの・・・雅紀くん・・・。」

雅紀「・・・それは・・・俺がいたからなんだ・・・。」

と雅紀は言った・・・辺りは静まり返った・・・。

なのは「へ・・・?何言ってるの?雅紀くん・・・?」

雅紀「俺がこの世界に来たことにより・・・この世界に滅びの現象が生じた・・・。」

フェイト「滅びの現象って……。」

雅紀「それは……アイツ……ギルド・グライアを倒すことにより……解決した……。だが……俺がそのあとこの世界に留まったせいで……また、滅びの現象が生じようとしている……。」

はやて「で……でも、それが雅紀君のせいっておかしいよ……。」

雅紀「おかしくはない……はやて……。現に、G G事件が解決しても……怪人達が現れていた……。あの時のミッドに現れた怪人達だつて……前よりもかなりの数で襲い掛かってきた……。」

だから……俺がこの世界にいれば……必ずまた……奴らがこの世界に……いや……管理局が管理してある世界や……そうじゃない世界にも……現れるだろう……。しかも今度は前よりも想像以上の数でくるに違いない……。だから……。」

ミソラ「だからって何ですか……？まさか……。」

雅紀「……俺は……この世界から……いなくなる……。」

全員『！！！！！』

雅紀「そうすれば……怪人達は……この世界には……現れなくなる……。」

なのは「ちよつと待ってなのっ！！！」

となのはが叫んだ

なのは「何で、雅紀くんが、この世界からいなくならなくちゃいけないのっ!? 怪人達が現れたっただけで・・・そんな・・・」

雅紀「俺は、この世界では・・・イレギュラーな存在なんだ・・・。イレギュラーの俺がこの世界に足を踏み込んだから・・・奴らも現れた・・・。だから・・・俺がこの世界からいなくなれば・・・奴らも現れない・・・。」

フエイト「そんなの関係ないよっ！ 雅紀は・・・その後どうするの？ 雅紀の世界はもう・・・無くなって・・・。」

雅紀「俺は旅人だ・・・幾つもの世界を転々と渡り歩いて行く・・・。」

アリサ「あ・・・アンタっ！ 勝手すぎよっ!!」

すずか「そっだよっ！ 雅紀君っ！」

ルナ「怪人達なんか、また現れたら・・・ぶっ倒してやるまでだよっ!!」

レイラ「私の広域攻撃で瞬殺すればいいっ!!」

はやて「私もやっ！ だからこの世界からいなくなる必要はないでっ!!」

ミソラ「皆・・・貴方の事が・・・」

と皆それぞれ言う・・・。

雅紀「皆の気持ちはわかる……。だけど……。もう、迷惑はかけられない……。」

フェイト「迷惑って思ってないっ！」

雅紀「お前たちはそう思っているが……。他の奴らは何て言うか？ ミッドチルダに住んでいる人達は……。皆、俺の事……。嫌いになるし……。迷惑がっているに違いないだろう？俺はもう……。いろんな人の涙や傷ついた姿はみたくないんだ……。」

と雅紀は悲痛の声で言う……。

なのは「……。」

するとなのは立ち上がってその場を後にした……。

はやて「なのはちゃん!？」

フェイト「なのは、何処に行くのっ!？」

とはやてとフェイトは言った……。

雅紀「くっ!」

雅紀はなのはの後を追った……。

なのはの部屋

なのは「ひっぐ……ぐす……」

なのはは一人、泣いていた……。

なのは「（雅紀くんがいなくなっちゃう……。嫌だ……。嫌だよお……）」

となのはが思っていると……

雅紀「なのは……。」「」

雅紀の声が聞こえた……。

なのは「雅紀くん……。」

雅紀「なのは……。ごめん……泣かせてしまった……。」

なのは「……。」

雅紀「もう人の涙は見たくないのに……俺は……なのはを泣かせてしまった……。本当にごめん……。」

なのは「……。」

雅紀「なのは……俺だって正直、辛いんだ……。皆と別れるのが……。」

なのは「雅紀くん……。」

雅紀「俺がこの世界に来て……。なのはやフェイト、はやてやアリスやずか……。そして……。ミソラやルナやレイラや……。いろんな人と仲良くなれた……。俺にとっては……。皆の存在がだんだんと大きくなって……。此処に来る前にも……。結構……。苦しかった……。きつと……。皆、悲しむって思ってた……。」

と雅紀は淡々と呟く……。なのはは黙って聞いている……。

雅紀「この世界は……。俺にとっては大切な世界なんだ……。だから……。その世界が……。今滅びの現象が生じているのなら……。俺は……。」

と雅紀が言っていると……ドアが開く……。そこからなのはが現れる……。

雅紀「なのは……。」

なのは「雅紀くん……。」

互い見つめ合い……沈黙が続く……

なのは「雅紀くん……。」

雅紀「ん？」

なのは「雅紀くんがどんな思いで……この世界を去るのか……
わかった気がする……。」

雅紀「……。」

なのは「私……我が儘を言っちゃってた……。雅紀君の気持ち……
知らなくて……。」

となのは話していると涙があふれていた……。

なのは「だから……一つ……約束してほしいの……。」

雅紀「約束？」

なのは「うん……。必ず……また……この世界に来てね……
？私……待ってるから……。」

雅紀「……わかった……。まあ……世界はいつだって繋がっているしな……。その約束……。必ず……。守る……。」

と雅紀は力強く言う……。

なのは「うん……。じゃあ……。雅紀くんのお別れ会でもしようかな？急だけど……。」

雅紀「だが……。フェイト達は納得するかな？」

なのは「そこは私が納得させるよ？まあ……。時間かかると思っけど……。」

雅紀「うん……。」

と二人は戻って行った……。

なのは「じゃあこれからお別れ会をします……。」

となのはの一言でお別れ会が始まる……。

雅紀「皆・・・ホントごめん・・・。」

フェイト「良いよ、雅紀？私も・・・何かと我が儘を言ってたから・・・。」

はやて「私もや・・・でもなあ・・・もうちょっと雅紀君とラブラブしていたかったのに・・・。」

レイラ「そこは我だろっつ！」

アリサ「アンタ達、喧嘩はやめなさいよ？」

すずか「はあ・・・（雅紀君とお別れは・・・流石に切ないなあ・・・。）」

ミソラ「兎も角・・・貴方達までくる必要がなかったのでは・・・？」

とミソラが言うと・・・八人のほかに・・・八神家や、ハラオウン家などの人たちがいた・・・。

シグナム「そう言うな・・・。」

シャマル「お別れ会だから、私達も行くのかなと思ひまして。」

リインフォース「一番行きたがっていて・・・泣きかけていたのはヴィータの方だな？」

ヴィータ「リインフォースっ！てめえ、そんなこと言うなッ！！！！／／」

リン「わあっ！ヴィータちゃん、顔真っ赤ですう。」

ヴィータ「リン！てめえも調子に乗るなッ！」

リン「わあ~~~~っ！ですっ！」

とヴィータはリンを追いかけまわす。。

リンディ「はぁ。。。雅紀君とフェイトが結婚するところとか見れなくて。。。母さん悲しいわぁ。。。」

フェイト「ちよっっ！かあさんっ！！！！」

クロノ「フェイトは渡さんっ！」

エイミー「クロノくんのシスコン。」

とにぎやかになっていた。。。

雅紀「騒がしくなってきたな。。。」

なのは「だね。。。」

そして数時間後辺りは暗く・・・皆眠りについた・・・。

雅紀「・・・」

そんな中・・・雅紀は一人・・・月を見ている・・・と・・・

なのは「雅紀くん・・・」

なのはが雅紀に近寄る・・・。

雅紀「なのは・・・」

なのは「ちよつと・・・散歩しない？」

雅紀「ああ。」

と二人は家を出て・・・夜道を歩いていた・・・。

なのは「・・・ねえ、雅紀くん・・・」

雅紀「ん？」

なのは「約束・・・守ってね・・・？」

雅紀「言われなくても・・・そのつもり・・・必ず・・・なのは達
会う・・・」

なのは「うん……。ねえ雅紀くん……。」

雅紀「何？」

なのは「……今更なのかもしれないけど……私も雅紀くんと一緒に
行つて良いかな？」

雅紀「え!？」

と突然の事に一瞬驚いたが……雅紀は冷静になる……。

なのは「だめ……?」

雅紀「……ごめん……。」

なのは「……。」

雅紀「なのはには……守るべき世界がある……。この世界はな
のはの力を必要としている世界なんだ……。だから……ごめん……
」。

と雅紀は申し訳なさそうに言う……。

なのは「ううん……いいよ……。そうなるかと思っていたし……
」。

雅紀「なのは……。」

なのは「でも……。」

雅紀「でも……?」

なのは「これぐらいは……良いよね……? / / /」

雅紀「ん……! ? / / /」

となのはは雅紀にキスをした……。

雅紀「なのは……」

なのは「……絶対に……会えるよね……?」

となのはは不安げな瞳を見せながら言う……。

雅紀「大丈夫……絶対に……会える。」

なのは「ん…… / / /」

と雅紀は言った後……なのはにキスをした……。

それは……美しい星空と……丸い大きな月をバックにした……
長いキスだった……。

アリス「あの馬鹿・・・ホント、勝手なんだから・・・。」

すずか「アリスちゃん・・・。」

ミソラ「ホント・・・雅紀は女泣かせが得意ですね・・・。」

ルナ「もうちょっといてほしかったよ・・・。」

レイラ「全く・・・あの馬鹿ものが・・・。」

と涙目になっていた・・・。だが一人・・・涙目になっていない者がいた・・・。

なのは「大丈夫だよ皆？雅紀くんは必ず戻ってくるよ？だから泣かないっ！」

となのはが元氣強く皆を励ます・・・。

なのは「（私・・・待ってるよ・・・？雅紀くん・・・。）」

と窓に映る景色を見ながらなのはは思った・・・。

アリス宅

アリス「・・・本当に良いの？」

とアリスは不安げに雅紀に聞く・・・。

雅紀「ああ・・・俺達は・・・旅人だ・・・それに・・・次の世界が、俺たちを待っているッ！」

と雅紀は言った・・・。

アリス「そう・・・じゃあ・・・行くよ？」

とアリスは言った・・・。

雅紀「（また会おうぜ・・・。なのは・・・皆・・・。）」

と雅紀は頬についた涙を拭いて・・・思った・・・。

そして・・・雅紀とアリスは・・・この世界から去って行った・・・

第55話（後書き）

さてと……終わりました……。リリなのの世界編！

雅紀「長い話だった……。」

ああ……。そして……この小説を見ている読者の皆さま……。申し訳ございませんっ！

雅紀「なんだ？どうして謝る……？」

え……。感想などで……なのはやフェイトなどのキャラが……。ディケイドに出てくるユウスケみたいに雅紀と同行するんじゃないかと……。書かれていて……。非常に……。戸惑いました……。

雅紀「ほうほう……。。」

んで……。少しネタばれなのですが……。何十話ぐらいしたら……。また……。リリなのの世界編を書きますので……。ご承知くださいっ！

雅紀「何十話かって……。もしかして……。」

そのもしかして……。今度は……。ストライカーズのお話を書きたいと思っていますっ！

雅紀「ほえ……。。」

さてと……。ネタばれ話はここまでとして……。次回のお話は……

雅紀「次の世界にたどり着いた俺達・・・だがその世界は・・・俺でも知らない・・・未知のライダーが存在する世界だった・・・！」

続きをお楽しみにっ！！

第56話

アリス宅

雅紀「次はどういう世界なんだ・・・？」

アリス「それは来てからの楽しみだよ。・・・あ、もう着くよっ
！」

と二人は新たな世界に着いた・・・。

雅紀「さてと・・・この後どうしよう・・・？」

アリス「一先ず、探検しない？この世界がどうなっているのか・・・
？」

雅紀「それもそうだな・・・行こうか・・・。」

と二人は家を出て、町を歩いていた・・・すると・・・

バンツ！バンバンツ！！

という音がした・・・。

雅紀「これって……。」

アリス「銃声……だよな……？」

雅紀「一先ず、行ってみようっ!！」

アリス「うんっ!！」

と二人は銃声がした方に行ってみた。

バババンッ!!

という銃声が絶え間なく続く……。どうやら、警察が何かと交戦しているようだ……。

雅紀「警察だったのか……。」

アリス「でも……何と交戦しているのかな?」

と二人がその場に来て、見てみると……

？「キシヤアアツ！！」

と上半身が女の体を持ち・・・下半身が蛇の体を持った怪人がいた・・・。

雅紀「何だ？あの怪人は・・・！？見たことがないぞ・・・？」

と雅紀は驚いた顔で言った・・・。仮面ライダーオタクの雅紀でさえ知らない怪人のようだ・・・。

雅紀「兎も角・・・奴を倒さないと・・・。っ！？」

雅紀はディカオスドライバーを持って変身しようとする・・・。

ブウウウウンッ！

よバイクの音がし・・・それがどんどん近くなってくと・・・何者かが怪人をはねた・・・。

雅紀「あ・・・あれは・・・！？」

と雅紀は見ると・・・

？「・・・。」

蒼いバイクに乗った・・・仮面ライダーがそこにいた・・・。

雅紀「あのライダーは・・・一体なんだっ！？」

と雅紀は言った・・・。ライダーオタクの雅紀も知らないライダー

がでてきたのだ・・・。

？「ふっ！」

とその仮面ライダーは怪人に向かっていき、パンチを食らわす・・・。

？「シャアアアッ！」

と怪人も負けじと・・・光弾を浴びせる・・・。

？「はっ！」

と仮面ライダーはそれを避ける・・・。

雅紀「あのライダーは一体・・・。」

アリス「雅紀は知らないの？」

雅紀「ああ・・・。テレビでも・・・映画でも見たことがない・・・。」

アリス「ふうん・・・。じゃあ教えるね・・・。」

とアリスは仮面ライダーの方を向く・・・。

アリス「あのライダーは・・・邪悪なる運命を変える・・・戦士・・・。

仮面ライダー……デステイニーよ……」

とアリスが言った……。

雅紀「仮面ライダー……デステイニー……。」

と雅紀はデステイニーと呼ばれるライダーをみて呟いた……。

デステイニー「タアツ！」

とライダーはキックを浴びせる……。

？「シャアアアツ！！」

とすると……怪人が尻尾を使ってデステイニーを捕まえた……。

デステイニー「くっ！」

とデステイニーは力を込めて振りほどこうとするが……びくともしない……。

雅紀「あのままじゃマズイぞっ！」

アリス「待って、雅紀……。」

雅紀「アリス、何で止めるっ!」

アリス「あれぐらいじゃ……デステイニーはやられないよ? 見てみると良いよ?」

雅紀「え……?」

アリスに言われ、雅紀はデステイニーを見る……。

デステイニー「フォーム……ジャステイスツ!!」

とデステイニーが叫ぶと……体が赤く光った……。すると次の瞬間っ!

ズバアアアアツ!!

と斬る音がした……。

?「シャアアアツ!!!!」

どうやら怪人の蛇の下半身が……斬られたようだ……。そして怪人の目の前には……

デステイニー「ふう……。」

ボデイが赤くなり、形も変わったデステイニーの姿がそこにあつた……。

雅紀「姿が変わった!?!」

アリス「アレは、近接に優れた、ジャスティスフォームね……。」

雅紀「フォームチェンジができるのかぁ……。」

アリス「うん……。デステイニーはその場にに応じて、フォームを変え、武器を変えて相手を倒すの……。」

雅紀「へえ……。」

と雅紀は納得した……。

デステイニー「ハアアアッ!!！」

とデステイニーは自身が持つ武器……ジャスティスカリバーで怪人を真つ二つに切り裂いた……。

?「ギャアアアッ!!!！」

と怪人は爆死した……。

雅紀「すげえ……。」

デステイニー「……。」

デステイニーはバイクにまたがりその場を後にした……。

アリス「戦いは終わったね……。」

雅紀「と言う事は……此処は……「デステイニーの世界」って事か……。」

アリス「そうなるね・・・。」

と二人もその場を後にした・・・。

アリス宅

雅紀「・・・！」

と雅紀は新聞を読んでいると・・・驚いた顔をしながら、新聞を見た・・・。

アリス「どうしたの？」

雅紀「コレ……。」

とその場にいたアリスに新聞を見せる……。その内容は……

「また現れた！生命体サキユバスと未確認生物……。」

などと書かれていた……。

雅紀「サキユバス……。未確認生物は……。デステイニーなのか……。？」

アリス「そのようだね……。サキユバスか……。どつりであんな男を惑わすようないやらしい体をしていたわけね……。」

とアリスは言った……。

雅紀「いやらしいって……。アリスだって十分……（ボソッ）」

とボソボソと言っていると……

アリス「私も十分いやらしいかぁ……。ウッフ……。雅紀、そう思っ

てたんだ・・・？」

雅紀「なっ！？聞こえてたのかっ！！？」

アリス「私の耳は、人よりも何倍のもの聴力を持つてるの。で・
さっきの事・・・どうなの？」

雅紀「え・・・えと・・・」

アリス「どうなのかなあ・・・？」

とアリスは聞いてくる・・・。アリスは基本的、清楚な女の子だが・
雅紀とのエッチ、おしおき、セックスになると・サキュバスのよ
うにエロくなる・・・。悪魔だが・・・。

雅紀「・・・アリスも十分いやらしいです・・・。」

アリス「ふうん・・・。私をそんな風に見てたんだ・・・。雅紀のエ
ッチっ！／／／」

とアリスは頬を染めて言う・・・。

雅紀「なっ！そ・・・そんな事は・・・。」

アリス「そんなことを思っている雅紀には・・・おしおきをしない
とねえ。」

雅紀「え・・・？」

アリス「この世界のサキュバスと同じように・・・雅紀を食べてあ・

げ・るっ！うにゃっ！！／／／

とアリスは雅紀に飛びかかる・。

雅紀「ああああっ！！！！」

とこの日も勿論、アリスに食べられたな・・・。

翌日

雅紀「結局、アリスに……。ハアア……」

と雅紀は近くの公園にいた……。

雅紀「それにしても……デステイニー……か……。」

と雅紀は青空を見ながらぼやいていた……。すると……

?「キヤアアツ！」

と女の人の悲鳴が聞こえた……。

雅紀「!!！」

と雅紀は悲鳴が聞こえたほうに行く……。

女「離してくださいっ!!！」

男1「え〜、良いじゃんかよおツ！」

男2「こんなピッチピチなスタイルしているのに……一緒に遊ぼう
ぜえ？」

女「いやっ!離してえッ!!！」

と女の子が男につかまって泣き叫んでいた……。

雅紀「はぁ……どの世界も……こういうのがあるんだな……た
くっ!!！」

と雅紀は怒りながら・・・向かうと・・・

?「アンタ達っ!やめなさいよっ!!!」

と女の声がした・・・。雅紀は振り返ると・・・そこにいたのは・・・
長い髪を後ろでまとめた制服姿の
女の子がいた・・・。

女「よつてたかって女の子をいじめるってサイテーよっ!」

と女が指差して言った・・・。

男1「ああっ!おいおい嬢ちゃん・・・何、偉そうにいつてんのか
あっ!?!」

男2「全くだぜえっ!ねえ兄貴っ!この女の子からまず先にやっち
やいますウツ!?!」

男1「おうっ!やっちゃんやおうぜ・・・。この女も良く見てみると結構、
スタイル良いじゃん!」

と男たちが言う・・・。確かにこの女の子・・・アリスに負けず劣
らずの良いスタイルの持ち主だった・・・。しかも何気に巨乳・・・
。。。

女「あたしを甘く見たら後悔するわよっ!」

と女は木刀を持って男に間合いを一気に詰めて・・・。

女「ハアアアッ！」

と女は木刀で男の頭をたたく。

男1「があっ！」

と男は体をふらつかせる……。

男2「てめえっ！よくも兄貴をつっ！」

ともう一人の男が殴りかかる……。

女「ハッ！」

と女は素早い身のこなしで避け……そして……

女「ハアッ！」

と男の脇腹に木刀をぶつける……

男2「ぐえっ！！！」

と男は小さく叫び倒れる……。

女「ふう……。」「

と女は木刀をしまおうとすると……

男1「オラアッ！！！」

とさきほどの男が女を羽交い絞めにした・・・。

女「ちょっ！離しなさいっ！！」

男1「いやなこつたねえッ！！さうてこの女、たっぷりと体で払ってもらおうかつ！！」

と男が激怒している様子・・・。

女「くそっ！」

と女は諦めかけたその時・・・

雅紀「はい、そこまで・・・。」

と今まで空気になっていた雅紀が男の腕を掴んでいた・・・。

男1「ああっ！なんだてめえはっ！！？」

雅紀「いやなあ・・・どっかの誰かさんが女の子をいじめようとしているから・・・。」

と雅紀は顔こそ笑顔でいるのだが・・・青筋を立てて・・・そんなもって男の腕を掴んでいた右手に物凄い力を入れる・・・。

男1「ああっ！この餓鬼っ！！離しやがれっ！！！」

雅紀「めっちゃやくちや腹立つんだよっ！！！！出直してきやがれっ！！！！！」

と男を殴り、数メートル吹っ飛ばした……。

男1「こ……この……おぼえてやがれ……っ!!」

男2「ああっ!待ってくれよッ!兄貴……っ!!!!」

と男たちは逃げて行った……。

雅紀「全く……大丈夫?」

と雅紀は女に聞く……。

女「ええ、平気よ。」

雅紀「そう、なら良かった。」

女「……アンタこのあたりじゃ初めて見る顔ね……。」

と女が言う。

雅紀「あ……俺、最近引っ越してきたばかりなんだ……。」

女「ふ……ん……。あ、アンタ名前は?あたしはアスナ。白鳥アスナ。よろしくねっ!!」

雅紀「あ、俺は木利野 雅紀。よろしくアスナ。」

とこの日……雅紀とアスナの運命の出会いの日となる……。

第56話（後書き）

さてと、新たなライダーがでてきましたっ！！

雅紀「その名は仮面ライダーデスティニー！」

そして、新キャラ、白鳥 アスナっ！

雅紀「新ライダーと新キャラか……」

ああ……。さてと今回は、いよいよ対面っ！デスティニーとディカオスッ！

雅紀「次回っ！お楽しみにっ！！！」

第57話

路上

アスナ「アンタ、よくこの町に引っ越してこれたわねえ。」

雅紀「え？」

とアスナから言われた雅紀・・・。

アスナ「アンタ、新聞とかニュースとか見てないの？この町はサキユバスって怪人がよく現れる危険な街でもあるのよ？」

雅紀「ああ・・・。新聞で見たんだけど・・・サキユバスって・・・何？」

アスナ「っ！！・・・ハアツ！？」

と雅紀の一言にコケるアスナ・・・。

アスナ「あ・・・アンタっ！サキユバスの事知らないでこの町に来たのっ！？」

雅紀「うん。」

とアスナの質問に軽く答える雅紀……。そんな雅紀をアスナは呆れた顔で見た……。

アスナ「サキユバスってのはねえ……。人の精気を吸い取る化け物なのよ……。特に男性が襲われる被害が多いの……。だから、アンタも気をつけた方がいいわよ？」

雅紀「へえ……。精気を吸われるって……。基本的どうやって？」

アスナ「……。いわゆるキスをして吸い取るそうよ。」

雅紀「キスッ!? 化け物にキスされるって……。不運だな……。逃げればいいのに……。」

アスナ「それもそういかないの……。サキユバスは普段、人間に化けてこの町をさまよっているのよ……。しかも女……。」

雅紀「女に？」

アスナ「そう。美しい女に化けて……。男を誘惑するの……。そして……。その誘惑に負けた男は……。精気を奪われる……。」

雅紀「……。気をつけた方がいいな……。」

アスナ「そうね。じゃ、あたし学校行くから……。て、アンタは学校、行くの？」

雅紀「えと……。学校まだ……。」

アスナ「……まだ転入手続きとかしてないんだ……。よかつたらあたしの学校来ない？この近くだし……。見学は許してもらえるかもしれないし。」

とアスナが言った。

雅紀「じゃあ、お言葉に甘えて。」

と雅紀はアスナと一緒にアスナの通っている学校にむかった。。。

学校

雅紀「なかなか綺麗な学校だなあ……。」

と雅紀が言った……。確かにこの学校はまるで新築したばかりのように綺麗なのだ……。

アスナ「まあね……。此处、サキュバスが出した流れ弾が来て崩壊しちゃったのよ。だからしばらくの間は休みで今日がやっと学校にいけるようになったのよ……。」

雅紀「そうだったのか……。ところでさ……。さっき木刀持ってたけど……。」

アスナ「あ、アレ？あれは練習用に使うやつよ。あたし女子剣道部だから。」

雅紀「そうなのか。」

アスナ「そうよ。あ、あたし朝の練習があるから、適当に見て回って頂戴っ！じゃねっ！！」

とアスナは行ってしまった。

雅紀「さてと・・・俺はどうするか・・・？適当に見て回るか・・・。」

と雅紀は校舎に入ってしまった・・・。

校舎内

雅紀「此处はいろいろな部活があるんだな・・・。」

と雅紀は朝の練習をしている部活の様子を見ていた・・・すると・・・

男1「おい、お前誰だ？この学校じゃ見ねえ顔だが？」

と一人の男が聞いてきた・・・。

雅紀「俺はこの学校の生徒じゃない、見学しに来たんだ・・・。」

男1「ほう・・・見学か。じゃあ俺がこの学校を紹介するぜ。来いよ?」

と雅紀は男と一緒に学校内を見て回った・・・。

男1「それにしてもお前・・・よくこの町に引っ越してきたな・・・?」

雅紀「それ・・・前にいわれたな。」

男1「ほう、誰にだ?この学校の生徒?」

雅紀「ああ。白鳥 アスナっていう子だけど・・・。」

と雅紀が言った途端、男が驚いた表情をした。

男1「あの白鳥 アスナとしゃべったのか?おまえっ!?!?」

雅紀「あ、ああ。そうだが・・・。それがどうかしたのか?」

男1「おまえは知らないからわからんが・・・白鳥 アスナて子・・・結構 ツンな女の子なんだぜ?男とは全く話もしないし、告白されてもそれを断固拒否。全く持って、男に興味なしな女の子だ・・・。」

雅紀「そうなのか・・・?俺は普通に喋ったけど・・・。」

男1「お前が初めてだぜ。あの白鳥 アスナとまともに喋り合った

奴は……。」

雅紀「はあ……。」

男1「羨ましいねえ。あの子結構スタイル抜群な子なんだ。モデルさんみたい……。」

雅紀「下心がでてるな……。」

男1「うるさいっ！……そうだっ！なんならお前に良い所……連れてってやるよ。」

雅紀「良い所？」

男1「来てみればわかるさっ！ほらこいっ！」

雅紀「おっ！おいつ！！」

と雅紀は男に引っ張られていった……。

女子剣道部更衣室

アスナ「……………」

アスナは一人汗を拭いていた……。と・

女1「ねえねえ、アスナ！」

と一人の女の子が来た。。。

アスナ「何よ……？」

女1「聞いたよお？アスナが今日、男の子と一緒に学校来たの？」

アスナ「なっ！！！」

これに、アスナは驚いた表情をする。

女2「え〜〜〜っ！うっそっ！マジっ！？あの超が付くほどツンなアスナが、男の子と一緒にっ！！？」

アスナ「うっ、うっさいわねっ！！たまたまそうだったのよっ！！！」

とアスナは言う。

女1「へえ……。でも、仲良く喋り合ってたって聞いたよお？」

アスナ「うなっ!？」

女2「どうなの〜？アスナ〜〜？」

と女の子たちは詰め寄る……。

アスナ「うっ、うっさいっ!!あたしシャワー浴びてくるっ!!」

とアスナは怒って更衣室を後にする……。

シャワー室

アスナ「全く、皆してあたしをからかって……。」

とアスナは一人、シャワーを浴びながら呟く……。

アスナ「しっかし、あの二人の言う通り・・・普通なら、男とは全く話さないのに・・・。あたし・・・どうしちゃったのかしら？」

とアスナは呟き続けた・・・。

一方、雅紀は・・・

男1「はい、此処が俺達男子だけの秘密の場所さ。」

雅紀「秘密の場所って・・・あんまり、人気のない所だな・・・。」
と雅紀は辺りを見渡す・・・。辺りには、望遠鏡やら、戸棚とか・・・
いろいろな物が置かれてあった・・・。どうやら雅紀達がいるところ
は・・・物置になっている部屋のようだ・・・。

男1「へへへ・・・。でも、此処も・・・結構良い所なんだ・・・。」

もう良いころだな。」

と男は望遠鏡を窓の方に置き、何かを見てみた……。

雅紀「何をしているんだ……？」

と雅紀は尋ねると……

男「フッフフ……お前も男だ……覗いてみると良いぜ……。その代わり、鼻血出すなよ？」

と男は言った……。

雅紀「鼻血出すなよって……何かあるのか……っ!!？」

と雅紀は望遠鏡を見るとそこに映ったものは……女子達の裸体だった……。

男「ハッハッハッ!どうだ、この時間帯は女子剣道部が朝の練習を終えて、シャワーを浴びる時間帯なのだっ！」

と男は笑った……。

男「そつだ……お前にはとつておきに良いものを見せてやるよ……」。

と男望遠鏡を移動させて雅紀に見せた……。

雅紀「おっ、おいっ!顔を引つ張るなッ!……っ!!!!/!/」

雅紀は顔を真っ赤に染める……。雅紀が見たもの……。それは……
アスナ「……………」

アスナだった……。しかもシャワーを浴びていてスタイル抜群な裸体が見えた……。

雅紀「あ……。あ……。ああ……………」

と雅紀は体を硬直させる……。一方のアスナは胸や髪などを洗っていた……。降ろした髪が水に濡れ、妖艶な感じがした……。さらにいえば、アスナの裸体はシャワーを浴びて紅葉に染まっていた……。

男「いやあ、あの光景は凄まじかったよ。まさに女神だって思っ
てしまうぐらいになあ。しかも、白鳥つて、シャワーを浴びている
時は、結構色気が良いしねえ……。って……。おい、どうした？」

と男は雅紀を揺らす……。すると……

バターーンッ

と倒れた……。

男「お、おいっ！大丈夫かよっ！！？」

と男は返事をするが……

雅紀「あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう……………」

と雅紀は気絶していた・・・。

男1「おいおい・・・コイツ初心な奴だなあ・・・。ま、それほど、白鳥の裸体は凄まじいというわけかつ！」

と男は言った・・・。

数十分後

雅紀「あの男・・・ただの変態だな・・・」

と雅紀は言った・・・。

雅紀「うう・・・頭の中にまだ・・・／＼／」

と雅紀は言った・・・。アスナの裸体が脳内に焼き付いてしまったようだ・・・。

雅紀「くそっ！忘れろッ！！」

と雅紀は呟きながら言っている・・・。

アスナ「あ……。」

とそこでアスナと出くわした。

雅紀「あ、アスナっ!!」

と雅紀は顔を真っ赤に染めて言った。

アスナ「何よ?いきなり大声で言って……それにどうしたのよ、顔が赤くなっているわよ?」

とアスナが聞いてきた……。そりゃそうだ……。雅紀はアスナの裸体を見てしまったのだから……。

雅紀「い、いや、ちょっとこれはな……。」

と何か言おうとした時……

ピンポンパンポーンッ

という音が聞こえた。

『皆さま……経った今、サキユバスがこの近辺に現れました……。大至急、避難をしてください!繰り返しします……』

と放送が鳴る……。

雅紀「サキユバスっ!?!」

アスナ「こんな朝っぱらからっ!?!もうっ!逃げるわよっ!雅紀っ
!!!」

雅紀「あ、あぁっ!!!」

と二人は避難を始めた。。。二人は避難をしていると。。

ギヤアアアアッ!!!

という悲鳴が聞こえた。。。

雅紀「な。。。さっきのは!?!」

アスナ「誰かサキュバスにやられたのよっ!しかも近いわっ!急ぎ
ましょっ!!!」

とアスナが言い、二人は全速力で逃げる。。。。すると。。

シャアアアッ!!!

と目の前にサキュバスが現れた。。。

雅紀「くそっ!」

アスナ「目の前からってありえないでしょっ!?!」

と二人は後ろを振り向き、逃げる。。。

シャアアアアツ！！！！

とサキュバスは逃げていく二人を追いかけた。。。

体育館倉庫内

雅紀「何とか・・・まいたようだな・・・」

アスナ「そうね・・・。」

と二人は言った。。。

アスナ「でも、気をつけた方がいいわよ・・・。サキュバスは、匂いを嗅いで探すこともできるから・・・。」

雅紀「そうなのか……。それにしても、お前、サキュバスには結構、詳しいんだなあ。」

アスナ「……。偶然よ……。そんなの、誰だってわかるわ……。」

雅紀「あ、そうか……。」

と二人は話し合う……。すると……。

シャアアア……。

と蛇の音がした……。

雅紀「近いな……。」

アスナ「……。あたしが行って、確かめに行くわ……。」

とアスナが言った……。

雅紀「危険だつ。此处でじっとしてろ、俺がいく……。」

アスナ「良いわよ……。あたしはこういうのに慣れてるのよ。」

とアスナは行ってしまった……。

雅紀「おいっ！アスナっ！！」

と雅紀はアスナを追いかけたが、アスナの姿が見当たらない……。

雅紀「くそっ！兎も角あいつを探さなきゃ、一人じゃ危険だっ！！」

と雅紀はアスナを探そうと走ったその時っ！

シャアアアアッ！！！！

とサキュバスが現れた・・・。

雅紀「こんな時に・・・。」

と雅紀はディカオスドライバーを腰に付け・・・

雅紀「変身ッ！！！」

『カメンライド・ディカオスッ！』

とディカオスに変身した・・・

雅紀『速攻で倒すっ！！』

とディカオスはサキュバスに突っ込んで行った・・・。

一方、アスナは・・・

シャアアアアッ！！

とサキュバスに見つけられた。。

アスナ「全く、朝から襲ってくるとは、いい度胸してんじゃないっ
！！」

とアスナは怒鳴り、腹に力を入れる。。すると。。

ブウウウンッ

とベルトが出現。。アスナは両手を前で交差させる。。

アスナ「変身ッ！！」

とアスナは叫ぶ。。すると、ベルトが反応し、そして光りはじめる。。

シャアッ！

とサキュバスは警戒する。。そして光が治まると。。そこにいたのは、アスナではなかった。。それは。。

サキュバス『。。。。デス。。。。ティニー。。。。』

とサキュバスが口走る……。そう、今サキュバスの目の前にはア
スナではなく、デステイニーがそこに立っていた……。

アスナ『さあっ！覚悟はできてるんでしょっねっ！！』

とデステイニーが声を上げた……。デステイニーの正体は……
アスナだったっ！！

第57話（後書き）

さてと……ディカオスとの対面を次回にします。申し訳ございません。

「雅紀「さてと、驚いたのは……アスナがデステイニーだった……」

ああ。まあ、デステイニーを出す段階で、そう決めてたしな……。

「雅紀「女ライダーがまた増えた……」

小説ではな……。さて、次回はっ！

「雅紀「サキュバスと闘っていた俺は……デステイニーと闘ってしまったことに……」

「お楽しみにっ！！」

第58話

体育館内

雅紀『オラアアアッ!!』

とディカオスはサキユバスに蹴りを入れる。

シャアアアッ!!

とサキユバスは負けじと尻尾での攻撃を食らわす。

雅紀『うおっ!くっ!!』

ディカオスは防戦一方と思えた・・・が・・・

雅紀『な〜んちゃってっ!!』

とディカオスはサキユバスの尻尾を掴み、

雅紀『オラアアアッ!!!!』

と遠くへ投げとばす・・・。

シャアアアアッ!

サキュバスは壁に激突・・・。

雅紀『ん〜・・・と、サキュバスには、バンパイアで勝負・・・かな。』

とディカオスはカードを取り出し、ベルトにセット。

『カメンライド・キバアツ!』

とベルトが発し、音色が聞こえ、ディカオスの体がガラスのようなもので覆われる。そして・・・

バキイインツ!

ガラスが割れ・・・中からディカオスが変身した、Dキバが現れた・・・。

雅紀『さて・・・キバっていくぜっ!!』

とDキバは構える・・・。

シャアアツ!!

サキュバスは体を起こしていきいきにDキバとの間合いを詰める。

雅紀『ハアツ!』

とDキバは高くジャンプし避ける。

雅紀『おらよっ!』

とDキバはそのままキックを浴びせる。

シャアアッ！

サキュバスが怯んだすきに・・

雅紀『ハアアアアアアッ！！！！』

パンチやキックの連打をたたきこむ……が……

シャアアアッ！！

雅紀『ぐおっ！？』

サキュバスの尻尾攻撃で吹っ飛ばされてしまう……。

雅紀『痛てて……頑丈なのかよ……。ならこれだっ！！』

『フォームライド・キバ・ドツガッ！』

とDキバはフォームライドをしてDキバドツガフォームになる……。

雅紀『くらえっ！』

とDキバはドツガハンマーを思いっきり振った……。

シャアアアッ！！！！

とサキュバスはドツガのパワーで吹っ飛ばされ、さっき飛ばされた

壁を突き破った・・・。

雅紀『流石はドツガフォームだな・・・。はあ、すげえなあ・・・。』

とDキバは満足の様子・・・。

雅紀『って、ぼんやりしている場合じゃないっ！早く倒さねばっ！』

とDキバはサキュバスを追いかけた・・・。

一方のデステイニーは・・・。

アスナ『ハアアッ！！』

パンチやキックで圧倒していた。

シャアアッ!!

サキュバスは光弾を発射してデステイニーから離れる・・・。

アスナ『離れたって無駄よっ!フォーム・・・フリーダムッ!!』

とすると・・・デステイニーの体が白く輝く・・・。そして姿が変わった・・・。

アスナ『さあ・・・たつぷりと撃ち負かしてやるわっ!!』

とデステイニーは言い放つ。今のデステイニーは体が白く背中に蒼い翼を生やし、両手に銃を持っていた・・・。これが遠距離攻撃を可能とする、デステイニー「フリーダムフォーム」だ・・・。

キシイイッ!!

とサキュバスは大量に光弾をぶちまけた・・・。

アスナ『そんなの・・・全部撃ち落としてやるわっ!!』

とすると・・・背中の翼が分離し、一つ、一つバラバラに動く・・・。
そして・・・。

アスナ『ドラグーンッ!!フルバーストッ!!!!』

とデステイニーが叫ぶと、一斉にビームを発射、サキュバスが放った光弾を撃ち落とした・・・。

シャッ!!!?

これにはサキュバスも驚き……。

アスナ『さてと……覚悟はできてるんでしょうね……?』

とDestinyニーは歩み寄る……。

シャ……シャアアアツ!!

とサキュバスは逃げていく……と……

ドガアアアツ!!

突然、サキュバスの目の前の壁が崩壊……そして……

シャアアアツ!!!!

ドゴツ!

中からもう一体のサキュバスがでてきて、ぶつかつた……。

アスナ『もう一匹いたのねっ!!!』

とDestinyニーは構える……と……

?「あり?もう一匹いたのか……。」

と呟くものがいた……。

アスナ『え……?』

デステイニーは壁の方を擬視すると・・・そこには・・・

雅紀『まあいいや・・・二体まとめて叩くまでだ・・・』

Dキバがいた・・・。

アスナ『な・・・何っ!?あいつはっ!!!?』

とデステイニーは驚いた・・・。そんなデステイニーをかまいなしにDキバは・・・

『ファイナルアタックライド・キ・キ・キ・キバアッ!!』

とファイナルアタックライドを発動・・・ドツガハンマーを構える・・・。

雅紀『そらよっ!動けなくなれっ!!』

とDキバがドツガハンマーのレバーを引くと・・・ドツガハンマーから目がでてきて、サキュバスを動けなくさせた・・・。そして、真上にドツガハンマーの先端に似せたエネルギーを作る・・・。

雅紀『ドツガサンダースラップッ!!』

とDキバは一気にドツガハンマーを振り、エネルギーの塊をぶつけた・・・。

シャアアアッ!!

とサキユバスは断末魔を上げて爆死した・・・。

雅紀『終了と。』

とDキバは元のディカオスに戻る・・・。それを見たデステイニーは・・・。

アスナ『（コイツの姿・・・間違いない・・・「あの男」が言っていた通りの姿だっ！！！！）』

とデステイニーは両手に持っており、フリーダムバスターを強く握る・・・。

アスナ『おいっ！おまえっ！！』

とデステイニーは叫ぶ・・・。それにディカオスが反応する・・・。

雅紀『ん？俺の事か・・・？』

アスナ『そうよっ！アンタね・・・サキユバスよりも恐ろしい・・・最強最悪のライダーっ！ディカオスってのはっ！！！！』

とデステイニーは言う・・・。それにディカオスは驚く・・・。

雅紀『・・・なぜ俺の名を・・・？』

アスナ『聞いたからよっ！！いずれ、最強最悪のライダーがこの世界に現れるってねっ！！この世界のため・・・アンタは此処で・・・消えてもらっわっ！！！！』

とDestinyニはフリーダムバスターを連射・・・。

雅紀『うおっ！？あぶねっ！！！』

とディカオスは避ける。

アスナ『逃がさないっ！行けっ！ドラグーンッ！！！！』

とDestinyニが叫ぶと、先ほどから宙に浮かぶ翼が反応し、ディカオスに攻撃する・・・。

雅紀『まるで、ガンダムシー〇のストライク〇リーダムじゃねえかっ！！！！』

とディカオスはご存じ大人気のロボットアニメの名を口にしながら避ける・・・。

アスナ『そらそらそらっ！！！！』

とDestinyニは攻撃の手を緩めない・・・。

雅紀『クソッ！！なら・・・』

とディカオスはカードを出す。

『アタックライド・ブラストオツ！』

とディカオスはブラストでドラグーンを狙う・・・。

ドガアッ！

とドラグーンは次々に破壊される

雅紀『ふう・・・』

アスナ『よそ見は禁物よっ！！フォーム！ジャスティスッ！！』

とデステイニーは素早くフリーダムフォームからジャスティスフォームにチェンジする。

アスナ『テエエエエエイツ！！！！』

とデステイニーはジャスティスカリバーで切り落とそうとする・・・。

雅紀『ぐわっ！！』

とディカオスは斬られ、吹っ飛ぶ・・・。

アスナ『どうよっ！このやるオツ！！』

とデステイニーは叫ぶ・・・すると・・・

雅紀『痛いじゃねえかよ・・・。』

アスナ『っ！！』

デステイニーの後ろに所々火花が散っているディカオスが立っていた・・・。

アスナ『あ・・・アンタ・・・何時の間に・・・！！！？』

雅紀『ちよつと、神速を使ったのさ……。所で……。聞きた
いことがある……。』

アスナ『な、何よっ!?!』

雅紀『誰から……。デйкаオスの事を聞いた……。?』

アスナ『何言つてんだっ! 悪魔がつ!!! 人を襲う化け物がつ!!!』

雅紀『俺は、人を襲わない……。信じてくれ……。』

とデйкаオスは安心させるような声で言う。。。

アスナ『……。何が信じてよ、よっ!!! このオツ!!!』

とデステイニーはジャステイスカリバーを振る。が、

ガキンツ!

デйкаオスが受け止める。。。

雅紀『俺は……。悪魔や……。化け物ではない……。人を……。守
る仮面ライダーだっ!!!』

とデйкаオスは強く言う……。その叫びで……。デステイニーは……

アスナ『……。知ってどうすんのよ……。?』

雅紀『どうもしない……。ただ……そんな馬鹿げたウソを言ったのはだれかって……。知りたい……。それだけだ……。』

アスナ『……。メガネをかけて……。旅人のような格好をした……。男よ……。』

とデステイニーは呟いた……。その男の誰なのかディカオスはわかった……。

雅紀『「鳴滝」……。か……。』

とディカオスは呟いた……。

アスナ『あんた……。そいつのこと知ってるの……。？』

雅紀『実際に会ったことがないが……。デイケイドっていう仮面ライダーを、悪魔だとか、世界の破壊者などと他の世界にそう認識させ、デイケイドと闘わせた……。しかも、後に、スーパーショッカーって言う悪の組織が集結した組織の大幹部、ゾル大佐になってデイケイドと闘った……。まあ実際は現場指揮していただけが……。奴は、デイケイドを倒すためならどんな手段を選ばない奴だ……。』

とディカオスは説明した……。

アスナ『それを……。信じてもいいわけ……。？』

雅紀『信じる、信じないかはお前の自由だ……。だがこれだけは言っとく……。俺は……。人を襲わない……。』

とディカオスは言った……。デステイニーは黙る……。

アスナ『（コイツの言うことが本当なら・・・あたしは、騙されてい
たってこと・・・？）』

と思っていると・・・

？『ディカオスっ！世界を破滅へと導くものよっ！！！』

と何処からか、声が聞こえる・・・。

雅紀『この声・・・鳴滝か・・・。何処にいるっ！！？』

とディカオスは叫ぶ・・・。

鳴滝『私なら・・・此処だ・・・。』

と目の前にオーロラが出現し・・・そこから鳴滝が現れた・・・。

鳴滝「お初にお目にかかれるかな・・・。仮面ライダーディカオス・
・・・。いや、木利野 雅紀くん・・・。」

雅紀『っ！！！』

アスナ『え・・・どういふ事よ・・・！！？』

鳴滝の一言に二人は驚く・・・。

雅紀『なぜ・・・。』

鳴滝「なぜ・・・君の名を知ってるか・・・かい？」

雅紀『そうだ……。』

鳴滝「いいだろう……。なぜ……。君の事を知ってるのか……。理由は簡単……」

……。見たんだよ……。君の世界が滅ぶ瞬間を……」

と鳴滝は言った……。

雅紀『な……。なんだと……。？』

鳴滝「私は・・・ディケイド達により、スーパーシヨッカーが滅ぼされた時・・・君の世界に逃げ込んだんだよ・・・。そしたらそこはもうすでに滅びの現象が起きていてね・・・。私でさえも、止められない状態だったのだよ・・・。そしたら・・・君を見つけてね・・・。その時に君の事を知ったんだよ・・・。」

雅紀「・・・。」

アスナ「どういう事よ・・・。コイツの世界が滅んだって・・・どういう事よっ！！!?」

鳴滝「彼は・・・唯一、大シヨッカーが開発した最高傑作、ディカオスドライバーを使いこなせる者なのだよ・・・。これは運命かもしれないね・・・。あの時、世界が崩壊してなければ・・・ディカオスドライバーを手に入らなかったのだからね・・・。ディカオスドライバーよ・・・君はディカオスを破壊するための道具にしあさないのだよ・・・。」

アスナ「なんですってっ！！!?」

鳴滝「もう、君に任せられん・・・。」
と鳴滝が言っていると、鳴滝の後ろにオーロラが出現・・・。

鳴滝「このライダーたちで失敗した最高傑作を破壊してやるっ！！！」

と鳴滝が叫ぶと・・・オーロラから・・・

牙王「すべて、食らい尽くしてやるよぉ・・・。」

リュウガ『…………』

王蛇『此処かあ！？祭りの場所はあ……？』

悪のライダーが出現……

鳴滝「さあいけえッ！！ディカオスを始末するのだあッ！！！」

と鳴滝は言い放ち、オーロラの中に入って行った……

雅紀『…………。デステイニー…………。頼みがある…………。』

アスナ『何よ？』

雅紀『一緒に…………あいつ等を…………。』

アスナ『言われなくてもわかってるわよ……。こっちは頭にきてんだからっ！！！！』

とデステイニーは叫ぶ……

雅紀『じゃあ、行くぞっ！！』

アスナ『ええっ！！！！』

とディカオスとデステイニーは三人のライダー達に突っ込んでいった……

第58話（後書き）

さてと・・・鳴滝が登場しましたっ!!

雅紀「鳴滝は・・・俺の世界が滅ぶ瞬間を見たのか・・・。」

全く持って怪しからん奴だな・・・。さてと・・・次回のお話は・・・。

雅紀「悪のライダー達と闘った俺とデステイニー・・・そして・・・互いかなぜライダーになったのか・・・教え合い・・・。」

続きは次回っ!!お楽しみにっ!!!!!!

第59話

雅紀『ハアアアッ!!』

アスナ『アアアッ!!』

とデイカオス、デスティニーは三人のライダーに向かっていく。。

牙王『オラアッ!』

リュウガ『!!』

王蛇『ヒヤッハアッ!!』

対する三人のライダーも二人に向かっていき。。。

雅紀『フッ!!』

王蛇『ヒヤハハッ!!』

リュウガ『ハッ!』

デイカオスは、王蛇、リュウガと対決。

アスナ『ハアッ!!』

牙王『喰らえっ!』

一方のデステイニーは牙王と対決。

『『ソード・ベントツ！』』』

と王蛇、リュウガは、カードで、剣を召喚し・・・迫る。

『アタックライド・スラッシュユツ！』

対するデイカオスはスラッシュを発動し、そのまま・・・

ガキンツ！ガンツ！キンツ！

と剣と剣のぶつかり合いをする・・・。そして・・・ぶつかり合いの
末・・・

雅紀『ハアツ！！』

王蛇『ガアツ！』

リュウガ『グツ！』

デイカオスが二人を斬り飛ばす。飛ばされた、二人は、

『『アドベントツ！』』』

と王蛇は契約モンスター、「ベノスネーカー」を、リュウガは「ドラグブロッカー」を呼び出した。

シャアアッ！

ゴオオオオンッ！！

と二体のモンスターが咆哮する。

雅紀『それ……有りかよ……。まあ……こちらにはそう言っているがな……。』

とディカオスはカードを出し、

『カメンライド・リユウキイツ！』

とディカオスの周りに幾つもの鏡が現れ、それがディカオスと重なると、ディカオスがD龍騎となった。

D龍騎はカードを出し、

『アタックライド・アドベントオツ！』

と空から、龍騎の契約モンスター「ドラグレッダー」が次元を超えてやってくる。

雅紀『頼んだぞ？』

とD龍騎が言つと……

ゴオオオンッ！

とドラグレッダーは返事をし、そのまま、ベノスネーカーとドラグブロッカーに接近する。

雅紀『さてと……こちらも行きますかっ！……！』

とD龍騎もまた、王蛇とリュウガに接近する・・・。

ガッ！ドガッ！

D龍騎はパンチやキックの連打を浴びせる。

リュウガ『グウウッ！』

とリュウガは負けじとカウンターパンチをする・・・が・・・

雅紀『残念・・・。』

D龍騎はソレを読んでいたのでかリュウガの拳を受け止める・・・。

雅紀『零距离でこれを喰らったら、たまったもんじゃないよな？』

とD龍騎はいつの間にか腕に装着していたドラグクローを見せながら言う・・・。そして・・・

雅紀『喰らえっ！！』

とD龍騎はドラグクローから出た炎をリュウガに浴びせる。

リュウガ『グオオオッ！！』

これには流石のリュウガもたまったもんじゃない、吹っ飛ばされ、オーロラの中に消えて行った・・・。

王蛇『くそがっ！！』

『ファイナルベントッ!』

と王蛇は必殺技を発動、ベノクラッシュをD龍騎に喰らわせようとする……。

雅紀『こっちも行くか。』

『ファイナルアタックライド・リュ・リュ・リュ・リュウキイツ!』

D龍騎はファイナルアタックライドを発動、必殺技の態勢に入り、そして……

雅紀『ハッ!』

高くジャンプし、その周りにドラグレッダーが舞い、D龍騎も空中で回転し、

雅紀『ハアアアッ!!!』

とドラゴンライダーキックをぶつける……。

ドゴオオオオンッ!!

両者の必殺技がぶつかり合い、爆煙が舞う……。そして……決着は……。

王蛇『ち……ちくしょうがあ……』

ディカオスの勝利であつた・・・。

アスナ『ハアアアッ！！！！』

牙王『クオツ！』

一方のデステイニーは牙王を圧倒していた・・・。

アスナ『喰らいなさいっ！！！！』

牙王『グオオオツ！！！！』

デステイニーの一撃で吹っ飛ばされる牙王。デステイニーはこのまま接近し、切り裂こうとしたその時っ！！

牙王『まだまだ、甘いなあ・・・。』

と牙王はデステイニーのジャスティスカリバーを受け止める。

アスナ『えっ！？』

牙王『隙だらけだぜっ！！！！！！』

と牙王はデステイニーを切った・・・

アスナ『キャアアツ!!』

デステイニーはそのまま吹っ飛ばされ、ジャスティスカリバーを手放す・・・

牙王『これじゃあ食い足りねえなあ、女・・・』

アスナ『むっかつくわねっ!!フォーム・・・フリーダムツ!!』

とデステイニーはフリーダムフォームにチェンジ。そして、

アスナ『オオオオオツ!!』

フリーダムバスターを連射・・・だが・・・

牙王『それでも、食い足りねえぜ・・・!!』

と牙王は余裕でバスターを全部、切り裂いた・・・

アスナ『くそっ!ドラグーンツ!!』

とデステイニーは背中に着いてあるドラグーンを出し、空中へ飛ばす。

アスナ『ドラグーン!フルバーストツ!!』

とデステイニーは渾身の力で牙王を撃ちまくる・・・だが・・・

『フルチャージ』

牙王『オラアアアッ!!』

だが、牙王はタイラントクラッシュで全て防ぎ、そして、デステイニーを切り裂く・・・。

アスナ『アアアッ!!』

油断をしていたデステイニーは避ける事も出来ず切り裂かれる・・・。
そして、元の基本形態「デステイニーフォーム」に戻る。

アスナ『くっ! 実力の差がありすぎじゃないっ!!!!』

とデステイニーは舌打ちをした・・・。

牙王『食い足りねえ奴だ……。もういい……。消してやる。』

『フルチャージ』

と牙王はまた、タイラントクラッシュでデステイニーを切り裂こうとする。その時!

雅紀『おっと、そうはさせないっ!!!!』

『アタックライド・スラッシュュッ!』

ディカオスがタイラントクラッシュを防いだ……………。

牙王『チィ・・・おまえも・・・俺を楽しませてくれるのかあ?』

雅紀『わからんな．．だが、おまえは此処で．．ジ・エンドだっ！』

牙王『おもしれえッ！！』

『フルチャージ』

『ファイナルアタックライド・デイ・デイ・デイ・デイカオスッ！』

と互いに必殺技を発動した．．。

牙王『ハアアアッ！！』

雅紀『デイメンションストラッシュュッ！！』

と互いの必殺技がぶつかり合う．．．。

牙王『オオオオオッ！！』

雅紀『ハアアアアアッ！！』

と二人は全パワーを注ぐ．．．そして．．．

ガアアアンッ！！

牙王の刃が破壊され、一気に牙王に迫る。

牙王『ち．．．ここまでか．．。』

と牙王は吹っ飛ばされ、オーロラの中に消えて行った。

雅紀『大丈夫だったか？』

アスナ『何、勝手に横取りしてんのよっ！』

雅紀『いや・・・危なかったから助けようと・・・。』

アスナ『あたしは誰の助けも受けないわよっ！さっきのは、あたし一人の戦いだっただのよっ！』

雅紀『・・・で？』

アスナ『で・・・て・・・』

雅紀『同じ仮面ライダーがピンチだったのに、助けに行かない奴はいないぞ？』

アスナ『じゃ、さっきの奴らは何よっ！？』

雅紀『あいつ等は悪のライダーだ・・・正義のライダーもいれば・・・ああいうライダーもいる・・・世の中が、善と悪にわかれているよにな・・・。』

アスナ『・・・。』

雅紀『それに、お前は这个世界を守る、正義の仮面ライダー・・・。悪い奴じゃない・・・。』

アスナ『あんたは……どうなのよ……。正義なの？悪なの？』

とデステイニーは聞く。

雅紀『俺は……基本的は正義のライダーだ……。……兎も角、一旦変身を解こう……。戦いは終わったし……。』

アスナ『……。そうね……。』

と互い、変身を解いた……。瞬間、互いの顔を見合って驚いた……。

雅紀「アスナ……。」

アスナ「まさか……。アンタだったとはね……。」

と二人は言い合う。

雅紀「……。聞きたいことがあるんだが……。」

アスナ「その前に……。此処から離れましょう……。誰かきたら困るし。」

雅紀「そうだな……。」

と二人は体育館から出た……。

学校門

雅紀「で・・聞きたいことがあるんだけど・・・。」

アスナ「あたしが答えられる範囲なら良いけど・・。」

雅紀「じゃあ・・どうやって、ライダーの力を手に入れた・・・？」

と雅紀は質問した・・。

アスナ「それは・・・・数か月前の事よ・・・。」

とアスナは言い始めた。

数か月前

アスナ「何？この古臭いベルト？」

とアスナは自主トレの最中、山奥でベルトを発見する……。

アスナ「誰かの忘れもの？全く、困ったものね……。」

とアスナが呟いていると……

フアアアアアン……

とベルトが光り出し……

アスナ「えっ！？」

アスナは驚きベルトを離れた瞬間……

シュンツ！

ベルトがまるで生き物みたく、アスナの腰に巻きついた……。

アスナ「ちょ、何よっ！？このベルト、気持ち悪いわねっ！」

とはずそうとするが全くびくともしない……すると……ベルトから熱が伝わってくる……。

アスナ「ア……アアアアアッ！！！」

とアスナは声を上げる……。

アスナ「あ、熱いつ！熱いよおおっ！！！！／／／」

とアスナはだんだん顔を真っ赤に染めて叫ぶ……。

アスナ「あ……あ……くうっ！熱いイイッ！！！！／／／」

とアスナは着ていたジャージを脱ぐと……白い肌や胸が露出する……。

アスナ「ア……アン……アンン！！！！／／／」

とアスナの声がだんだん快樂のものとなる……と、ベルトがだんだんアスナの体内に消えていく……。

アスナ「アン、アアン！アアアアアアッ！！！！／／／」

とアスナは叫び、絶頂した……。すると、だんだん体が変わっ

ていき、それは妖艶な何かに変わり・・・そして・・・その上に固
いアーマーが装着する・・・。
こうして・・・仮面ライダーデスティニーが誕生した・・・。

現在

雅紀「そうだったのか・・・。」

アスナ「今も・・・体内にベルトがあるわ・・・。しかも、それに
神経が通っていて・・・とれなくなってるのよ・・・。」

雅紀「（まるでクウガみたいだな。）で・・・鳴滝とは・・・どうやっ
て出会った・・・。」

と雅紀は質問をする。

アスナ「あの男と出会ったのは……その時よ……」

数か月前

アスナ「ハア……ハア……。こ……これは？あ……あたしは、どうなっちゃってのっ！？」

とDestinyニーに変身したアスナは自身の変化に驚く……。と……？「それは……Destinyニーというライダーの力だよ……」

アスナ「っ！だ……。誰よっ！！？」

とDestinyニーは警戒すると……。奥の茂みから旅人の格好をした男が現れる……。

鳴滝「すまないね……。警戒することはない。私は、君の味方だよ?」

アスナ『信じるとでも思っっ!?!?』

鳴滝「信じなくてもかまわない……。君にはそれが何なのか。教えようと思っっね……。」

アスナ『コレの事……。?』

鳴滝「そう……。それは……。直にこの世界に現れる生命体、サキュバスを倒すために、生み出された……。運命の力、デステイニィさ……。」

アスナ『デステイニィ……。?』

鳴滝「そうだとも……。君は、それに選ばれてしまったんだ……。もう運命を変えることはできない……。君は……。サキュバスと闘わねばならない宿命なのだ……。」

アスナ『何が宿命よっ!?!こんな、はずしてやるっ!?!!』

とデステイニィはベルトをはずそうとする。

鳴滝「だから無駄だよ……。そのベルトは、君の体の一部となっってる。無理やり取れば、君は死ぬのだ……。」

アスナ『そ……。そんな……。』

とデステイニィは絶望した……。

鳴滝「まあ・・・そんなに悲しむことはない。君には、やらねばならないことがあるのだからね・・・。」

アスナ『・・・・何よ・・・』

鳴滝「君の前にいずれ・・・この世界を破壊へと導く悪魔が現れる・・・そいつをほつとくと・・・この世界が滅んでしまうのだよ・・・。」

アスナ『な・・・何ですってっ!?!?』

鳴滝「君だけが頼りだ・・・悪魔・・・ディカオスを・・・倒してくれッ!」

と鳴滝はオーロラの中に消えていった。

アスナ『・・・・やるしかないのね・・・』

とDestinyニ-は呟く・・・。

アスナ『わかったわよっ!こうなったら、とことんやってやるっじやないっ!?!?!』

とDestinyニ-は叫んだ・・・。

現在

雅紀「そういうことになったのか・・・。」

アスナ「おかげで、あの男にだまされたわっ！今度会ったら、ただじゃおかないっ！！！」

とアスナは執念を燃やす。

アスナ「そう言えば・・・アンタはどうやって、その力を得たのよ・・・？」

雅紀「・・・俺か・・・？・・・ただ単に・・・世界を守ろうと、悪魔と契約的感じな事してこの力を手に入れたってとこだ・・・。」

アスナ「悪魔？」

雅紀「まあ……ディカオスの意志……みたいなやつだよ。そいつの力を受け入れ、ディカオスの力を手に入れて……世界を守ろうとした……。だが結果は守れなかったがな……。」

と雅紀は遠く、悲しい瞳をした……。それに映る物は……絶望か、怪人に対する怒りか……。それとも……大切な友の姿か……。ソレを見たアスナは

アスナ「（コイツの瞳……。何だろう。悲しみに満ち溢れてる……。一体、どんな事が起こったのよ？コイツには……。？）
とアスナは思っていた。

雅紀「ま……。こんな暗い話をしていても仕方ないし、その……。」

アスナ「何よ？」

雅紀「……。また、襲わない？」

アスナ「当たり前よ……。どうやら、ウソだったみたいだし……。」

雅紀「あ、そう……。なら……。俺と友達にならない？」

アスナ「ハア？何よソレ？」

雅紀「いや……。その、ライダー仲間として……。」

アスナ「ふざけんじゃないわよ……。勝手に仲間にしな……。」

とアスナは雅紀に背を向ける・・・。

アスナ「・・・ま・・・まあ・・・アンタがそう言うなら・・・なっ
てやってもいいわよ？／＼／」

雅紀「え？」

アスナ「だから、友達になってやってもいいわよって言うてんのよ
っ！！／＼／」

とアスナは叫ぶ・・・。

雅紀「おお！？・・・よ、よろしくな？」

アスナ「フンツ！！／＼／（何よ・・・あたし、顔真っ赤にしちゃ
って・・・バツカみたい・・・）」

とアスナは思っていた・・・。

アスナ「（でも・・・コイツといると・・・素直に・・・なれる・・・
なんでだろう・・・。こんな思い・・・今までなかったのに・・・
。なんで・・・？）」

とアスナは雅紀を見ていた・・・。すると・・・

キュイン・・・

アスナの瞳が黄色くそして、獣のようなかんじに変わるが・・・それ
は一瞬だった・・・。

アスナ「（！・・・なに？今の・・・？・・・気のせいよね・・・？）」

雅紀「ん？アスナ、どうかしたか？」

アスナ「なんでもないわよっ！ほら、さっさと、他の生徒と合流するわよっ！！！」

雅紀「お、おう。」

と二人は走って行った・・・。

第59話（後書き）

さてと・・・早めに次回の話！アスナの身に変化が起きるっ！！

雅紀「マジかよっ！！？」

まあな。それでは！お楽しみにっ！！！！

第60話(前書き)

更新遅れて申し訳ございませんっ！それでは始めますっ！！

第60話

悪のライダーとの戦いに勝利し、学校から離れた雅紀とアスナはと
いこう…

避難所

「アスナ~~~~っ！大丈夫だった！？心配したよ~~~~！！」

「心配なんかいらないわよ。この通りピンピンしているわ」

「うん…」

「と・こ・ろ・で、アスナ~~~~？」

すると、もう一人の女の子がやってきた。

「な、何よ？気味悪い言い方して…」

「あっちにいるアスナと一緒に来た男の子、誰かなあ？」

女の子が指差した先には…

「……………」

雅紀がいた

「あいつは、逃げてる最中に一緒に行動したっただけよ。誰なのか、わからないわ」

他の人に、仮面ライダーの事を教えたら大変だと思つての説明なのか。

「ふ〜ん…ひよつとして、アスナはあの子に惚れた？」

「っ！！ハアツ！！？」

女子の言葉にアスナは驚く。

「うつそっ！？マジっ！？あの超が付くほどツンなアスナが〜っ
！！！？」

「あ、アンタ何いつてんのよっ！！？／／／」

「今まで、男の子とは一緒に行動なんてなかったじゃない。もしかしたら、と思つてね」

「だ、誰があいつのことっ！！あたしは…あいつの事なんか…／／」

アスナは雅紀の事を思ったのか、顔を真っ赤に染める。

「どうやらホントね〜」

「確かにあの男の子、見た目は可愛いとカッコイイの両方があるからなあ。アスナが乙女に…フムフム」

「アンタ達ね〜〜〜〜〜っ！！！！／／／」

アスナは女の子達を追いかけて回した。

「アスナの方は騒がしいな」

その場を見ていた雅紀はそう呟いていた。

「にしても…鳴滝…」

雅紀は一人、鳴滝の事を考えていた。

「（奴の狙いは、門矢 士…デイケイドの抹殺から俺…デイカオスの抹殺。鳴滝があそこまでデイケイドを狙い続ける理由は謎のまま。一体、奴がどの世界から来たのかも謎だらけ。だがわかるのは、奴は執念深いこと…デイケイド抹殺のためなら手段を選ばない事。この先、鳴滝が絡んで来るのは間違いないな…！）」

雅紀はそう思った。

女子トイレ

「全く、あいつらときたら…！」

アスナはブツブツ呟きながら手を洗っていた。

「あたしがあいつの事……くっ！バツカみたいっ！！／／／」

アスナは雅紀の事を思ったのか、顔を真っ赤にする。

「あいつのどこがいいんだか…あいつは何ていうか、ほとんど謎めいているし、時たま可愛い顔になるし、カッコいい顔になるし……そんなで優しいし……ってっ！なんであたしがこんなにあいつの事思っちやうわけよっ！…!?」

アスナの眩きが響く。

「あ~~~~ッ！たくっ、頭に来るわっ！自分につー！」

アスナが女子トイレを後にしようとしたその時だ。

シヤアアアア...

という声が頭に響いた。

「っ！この声…サキユバスっ！？どこにいるんだっ！！？」

アスナは警戒するも...

シヤアアアア...

という声しか聞こえない。

「どこにいるのよっ！？さっさと出てきたらびびっ！...？」

アスナは叫ぶと...

「っ！？な、何っ！？」

アスナの体の熱が上昇し始めた。

「くっ！熱いっ！何よっ！...！どっなって...アアアアッ！...！」

アスナは自身の変化に驚いていると、また、熱が上昇してくる。

「熱いつ！熱いいッ！アアアアンツ！！／／／」

アスナは苦しみ出す。顔も熱の上昇によってか、真っ赤だ。

「くっ！あっ！くうっ！！／／／」

アスナは体を動かして、トイレに再び入り、ドアを閉める・・・。

「くっ！この体が熱い原因はさっき声が聞こえたサキュバスのせいねっ！！見つけたらタダじゃおかな…あんっ！！／／／」

アスナが叫んでいる最中も熱は上昇し続ける。

「くうっ！下が熱い！何でっ！？」

アスナは自身のを触れると、濡れていて、下着は濡れていた。

「な、なによコレっ！！？これじゃ、お漏らしと一緒じゃないっ！！」

アスナは急いでスカートと下着を脱いで、トイレットペーパーで秘所を拭くが、拭いても拭いても液が出続けて止まらない。

「何でエッ！？勝手にこんなに出てくんのよっ！アアンツ！！／／／」

アスナが困っていると、容赦なくまた熱が上昇する。

「あっ！くあっ！あんっ！な、何か…！／／／」

アスナは自身の熱上昇を感じていた。

「くう…！服が邪魔っ！／／／」

アスナは服を脱ぎ、全裸になる。

「くアアンツ！か、体が溶けてくみたい…！」

体の熱は一気に上昇。

「も、もう、ダメえツ！アアアアンツ！／／／」

アスナが叫んだと同時にアスナの体に変化し始める。背中から羽が生え、爪が伸び、体が薄紫色に変わり、瞳は獣のような黄色い瞳、牙が伸びる。そして、その体は、構築されていき、妖艶な鎧を纏う。

「シャアアアアアアアアツ！！！！」

アスナは怪物……サキュバスにへと変貌を遂げた。

一方雅紀は…

「そう言えば、アスナは何処に行ったんだろ？」

雅紀はアスナを探そうと立ち上がった時だ。

「キヤアアアアッ！！！！！」

「さ、サキュバスが現れたーっ！！！！！」

男女が慌てながら逃げていくと…

「シャアアアアアッ！！！！！」

一体のサキュバスが大空を飛行しながらやってきた。

「なっ！？今までとは違うタイプだ…！パワーアップでもしたのか…！？？」

雅紀はディカオスドライバーを腰につける。

「変身ッ！」

『カメンライド・ディカオスッ！』

雅紀はディカオスに変身し男女を襲おうとするサキュバスに…

『おらっ！やめるっ！！！』

「シヤッ！？」

アドベントドライバーで威嚇射撃をし、自分に注意をひきつける。

『此処だと人がいて危険だ…！よし…！』

デйкаオスは走る。

『此処までおーいでーっ！ベロベロ〜〜〜！！』

出口の方にサキュバスを誘導させようとする。

「シヤアアアッ！！」

サキュバスは怒り、デйкаオスに一気に接近する。

『早っ！？ぐああっ！！』

デйкаオスが驚いている隙をにサキュバスはデйкаオスを攻撃した。

『ぐっ！このやろっ！！』

『アタックライド・ブラストオツ！』

デйкаオスは反撃と言わんばかりにアドベントドライバーを連射する。

「シヤアアアッ！！」

サキュバスは余裕で避ける。

『くっ！なら…これだ！！』

『フォームライド・ブレイドっ！ジャックッ！！』

ディカオスはディカオスブレイド・ジャックフォームDBJFに変身し大空を舞う。

『アタックライド・ブレイラウザー』

DBJFは聖剣ブレイラウザーを召喚。手に持ち攻撃する。

『ハッ！そりゃっ！！』

攻撃するも避けられる。相手はDBJFよりもスピードは上なのだ。

「シャアアアッ！！」

サキュバスは両手から邪悪な霧を発生させる。霧が晴れた時、その両手には銃があった。

『なっ！武器を隠し持ってたのかよっ！！（てかあれって、どこかで見たことがある気が…）』

DBJFは思っている時だ。

「シャアアアッ！」

サキュバスが銃を連射してきた。

『ぐおっ！！』

DBJFはもろに喰らってしまっ。

『くそっ！！だったらこっちは…稲妻を食らわしてやるっ！！』

DBJFはブレイラウザーのある部分からカードを出す。そして、ブレイラウザーにスキャンさせる。

『サンダー』

ブレイラウザーが発し、剣先から稲妻が走る。

『喰らえッ！！』

ブレイラウザーを振るい稲妻が宙を舞っ。

『シャアアアッ！！』

それにサキュバスが直撃。

『やっぱり、ブレイラウザーを召喚するとカードもまた一緒に召喚され、俺はアンデッドの力を使えることができるっ！！』

DBJFはブレイラウザーを見ながらそう言っている時だった。

『グッ…アアアッ！！！！』

サキュバスが苦しみ出したのだ。それにDBJFは警戒していると…

「グウ…マ…サキ…」

サキユバスが喋った。

『喋ったっ!? しかも、俺の名を…何で?』

これにはDBJFは驚く。

「雅紀、あたし…アスナだよ…」

『なっ!? アスナッ!!? 何でお前がっ!!!?』

「わからない。体が急に熱くなって、気が付いたら空を飛んでいて…」

アスナは戸惑うと…

「君は人を超えてしまったのだよっ!!」

という声が響いた。

『この声は……鳴滝っ!!!!』

DBJFは叫ぶと目の前にオーロラが発生し中から鳴滝が現れた。

「彼女、白鳥 アスナは人を…サキユバスを超えた存在になったのだよ」

『どっついうことだっ!?!? どうしてアスナがっ!』

「それはデステイニーのベルト「デスレイクル」から出てしまったものだよ。最初は平然としていたが、デスレイクルから出てくる全てのサキュバスの祖先のサキュバスの力が流れ込んだために今、彼女はサキュバスに覚醒をした。本当ならそれは起きなかつたはずなのに…デイカオスッ！お前がこの世界に来てしまったから、彼女はサキュバスを超えた存在になってしまったのだっ！！」

鳴滝はDBJFに言い放った。

『…俺のせいなのか…。なら一つ、質問があるんだが…』

「何だ？」

『なぜ、デイケイドをそんなに恨み、抹殺したがる？』

「それは、デイケイドが世界の破壊者だからだっ！」

『それは昔の話だ。今のデイケイドは世界の破壊者ではない。人を守る正義のライダーだ。それなのにアンタはスーパーショッカーに入り、ゾル大佐となってまでアンタはデイケイドを抹殺したがつていた。容赦なく、民間人まで殺し、世界を破壊する怪人達の巣にアンタは身を投じた。もし、デイケイドを殺した後はどうするつもりだっただんだ？』

「ふんっ！そんなの知ったことかっ！デイケイドが滅んでくれさえすれば…」

『滅んでくれさえすれば、他の世界の人達が怪人達に殺されても構わないってか？アンタの方が破壊者にしか見えない…！』

「何イツ!？」

『今までも、世界を越える力で、ライダーを召喚して戦わせたり、響鬼の世界で、化けガニを使って響鬼や他のライダーも巻き込もうとした。アンタの方が世界を破壊する悪魔にしか見えないと俺は思っているっ!しかも、ディケイドが行く世界では、いつも滅びの現象があった。しかも、アンタは一足先にその世界にいたよね?そこで俺は、ある仮設を立てた。もしかしたら、滅びの現象を起こしているのが…鳴滝…アンタのせいじゃないだろうか…てなっ!』

DBJFは言い放つ。

「な、何を根拠に…」

『アンタはいつもディケイド達よりも一足先に来ている。クウガの世界ではユウスケさんが初めてクウガの力を手にした時にアンタはディケイドの事を教えた。しかも、随分前の事になる。究極の闇であるグロンギが封印されていた時はグロンギも復活していた。もし、最初にクウガにディケイドは悪魔と教えた後、グロンギを復活させたならほとんどがアンタが仕組んだことになる』

「……………」

『どうなんだ、鳴滝?しかも、俺が来たからアスナがサキユバスになっただけで言っていたけど、俺が来る前にも既にデスレイクルからサキユバスの力がアスナの体に流れていたらどうなる?しかも、数か月前に誕生したのだから、この数ヶ月間で、徐々にそうなるってしまったのも過言ではない。アンタはそんなにデステイニーの事に詳しいのなら、なぜその時にアスナにそう言わなかった?まるで仕組

んでいるようにしか見えんのだが…!」

「うるさい、うるさい!お前は此处で、死ねっ!」

鳴滝は激怒し、オーロラの中に消えていく。それと同時にオーロラからスピードのカテゴリキング、コーカサスビートルアンデッドが現れた。

「明らかに逆切れで…凶星だった…!なら、今までの原因は鳴滝が…!」

DBJFはそう呟いている時だった。

「あたし…あたしがサキユバスに?いや…嫌…!」

アスナが叫び何処かへ飛んで行った。

「アスナっ!?待てっ!」

DBJFは追いかけようとしたが…

「ガアアッ!」

コーカサスビートルアンデッドの攻撃で行く手を阻まれる。

「くっ!まずこっちが先かっ!」

とDBJFはコーカサスビートルアンデッドに向かって行った。

第60話（後書き）

さてと、駄文となつてしまいましたっ！！申し訳ございませんっ！！

雅紀「全くもっつ！」

あと一つお知らせが、この先こんな感じで投稿が遅れる場合があります。読者の皆様、申し訳ございません。くれぐれも、この作品を忘れないでください。お願いします。

雅紀「俺からも、お願いします。」

さてと、気を取り直して次回は…

雅紀「コーカサスビートルアンデッドを倒し、アスナを探した俺はようやくアスナを見つけるだがアスナは…」

アスナ「あたしはもう人じゃない。雅紀、お願い。アンタの手で…
あたしを…」

続きは次回っ！！お楽しみにっ！！！！！！

第61話(前書き)

仮面ライダーバトルガンバライド・カードバトル大戦を夢中にやっていたせいで投稿に遅れました……。申し訳ございませんっ！
それでは始まりッ！！

第61話

雅紀『おおおおおっ!!!!』

とDBJFはコーカサスビートルアンデッドに向かっていく。

コーカサスビートルアンデッド『グウウウウッ!!!!』

一方のコーカサスビートルアンデッドは自身が持つ剣を振るいたたせる。

雅紀『オラアアアアッ!!!!』

ガキンッ!ガキン!ガキンンッ!!

DBJFのブレイラウザーとコーカサスビートルアンデッドの剣がぶつかり合い、火花を散らす。

コーカサスビートルアンデッド『ウウウッ!』

雅紀『うおっ!!?!』

カがコーカサスビートルアンデッドの方が上なのか、DBJFは吹っ飛ばされる。

雅紀『この野郎っ!!』

とDBJFはブレイラウザーから二枚のカードを取り出す。

『スラッシュ』

『サンダー』

と二枚のカードをスキャンすると、背後にカードが出現。それがD
BJFに吸収される。

『ライトニングスラッシュ』

雅紀『ハアアッ!!』

とDBJFは必殺技「ライトニングスラッシュ」を發動させ、コー
カサスビートルアンデッドを切る……が……

ガキンッ!

コーカサスビートルアンデッドの盾に防がれてしまった。

雅紀『何っ!?!ぐああああっ!!』

DBJFが油断をした際にコーカサスビートルアンデッドは剣でD
BJFを切り裂いた。

雅紀『ぐっ!……今は急いでいるんだ……悪いが二対一とさせて
もらっ。』

と元に戻ったディカオスはカードを取り出し、アドベントドライブ
にセットする。

『カメンライド・ダブルウツ!』

とディカオスは仮面ライダーWを召喚した。

W『さあ・・・お前の罪を数えろ・・・!』

とWはお決まりの決めポーズをする。

雅紀『悪いけど、一緒に闘ってくれ。』

W『言われなくてもやるぜ・・・。他のライダーの手伝いも・・・探偵の仕事さ。』

W『黄金の虫か・・・興味深い・・・。』

とディカオスの頼みに、二つの意識を持つWは快く引き受ける。

雅紀『行くぞっ!』

W『あぁっ!』

とディカオスとWはコーカサスビートルアンデッドに向かっていく。

雅紀『おらっ!』

W『ハアッ!』

とディカオスとWはパンチや蹴りで攻撃する。

コーカサスビートルアンデッド『グオオッ!』

とコーカサスビートルアンデッドは剣でディカオスとWを振り払う。

雅紀『くっ!』

W『メモリチェンジだっ!』

Wはドライバーからメモリを抜き、代わりに赤と銀のメモリを出す。

『ヒートッ!』

『メエタルウツ!』

『ヒート・メエタルウツ!』

とWはヒートメタルにチェンジ。背中に付いている「メタルシャフト」を取り出し、コーカサスビートルアンデッドに迫る。

雅紀『へえ……。フォームライドさせなくてもフォームチェンジ可能なのか……。』

と感心していると……

W『おいっ! ポケッとしてねえでさっさとお前もやれえっ!』

雅紀『あ……ごめんなさい。』

とWに怒られたディカオスはアドベントドライバーをソードモードにさせて立ち向かう。

コーカサスビートルアンデッド『ムウンッ!』

二人の攻撃にたじたじとなるコーカサスビートルアンデッド……
だがその時……!

ヒューーーーーーン……ドゴオオオオンツ!!!

雅紀『うわっ!』

突然、別の方から光弾が飛んできてディカオス達に当たる……。
ディカオスはダメージを食らったが……。ヒートメタルになっている
Wはダメージが少ない……。

W『何だっ!? 新手かつ!』

W『翔太郎! アレを見るんだっ!』

とWは光弾が飛んできた方向を見ると……。そこには……

パラドキサアンデッド『……』

ハートのカテゴリーキング……。パラドキサアンデッドがいた。

雅紀『パラドキサアンデッドかよっ! カテゴリーキングが二体って
ヤバイじゃんかつ!』

W『おいおい……。ただでさえ一体でやっとなのによお……。』

W『翔太郎……。エクストリームになればいいじゃないか。』

W『なるほどっ! さすがだぜっ! フィリップっ!』

とWは言っている……。カメンライドで召喚したライダーは無言で感情がない状態で主の指示に従うのだが、性格や感情は一緒のようだ……。

W『こいつ！エクストリームっ！！』

とWは叫んだが……

シーーーーーーン……

エクストリームメモリは現れず……

W『おいつ！どういふことだよっ！！？なんで来ないんだよっ！！！？』

W『翔太郎、落ち着こうっ！まず落ち着こうっ！！』

とWは慌てていると……

雅紀『此処はアンタ達の世界じゃないし……フィリップさんの肉体はこの世界にないからじゃない？それに……本物じゃないし……』

とディカオスは言った。

W『んなっ！？俺等は偽物だったのかっ！？』

W『なるほど……。だからエクストリームも来ないということか……一理ある。』

W 『フィリップ、何一人で納得してんだよっ！！！！？』

雅紀 『はあ……仕方がない……。』

とデйкаオスは金色のカードを取り出す。

雅紀 『お二人さん、行くよ？』

W 『は？』

W 『へ？』

『ファイナルカメンライド・ダ・ダ・ダ・ダブルウツ！』

とアドベントドライバーに入れて起動させた途端……

W 『うわっ！？』

W 『この感覚は……まさかっ！？』

W が……サイクロンジョーカーエクストリームとなっていた……

雅紀 『これなら文句ないでしょ？』

W 『助かったぜ……。』

W 『兎も角……相手は待っているようだし……行くよ？』

と二人はカテゴリーキング二体に顔を向ける……。カテゴリーキ

ングの二体はイライラしているのか・・・暴れようとしていた・・・。

雅紀『行くぜっ!』

W『おっ!』

とディカオスとWは立ち向かう。カテゴリーキング達もディカオスとWに立ち向かう・・・。

W『ハアアッ!』

パラドキサアンデッド『ゲギッ!?!』

雅紀『オラアッ!』

コーカサスビートルアンデッド『ギッ!』

Wの方は優先だがディカオスの方は一人でコーカサスビートルアンデッドに立ち向かう。

『プリズム!マキシマムドライブッ!』

W『プリズムブレイクッ!』

とWはプリズムソードでパラドキサアンデッドを切り、コーカサスビートルアンデッドの方に飛ばす。

パラドキサアンデッド『ゲッ!』

コーカサスビートルアンデッド『ギッ!?!』

雅紀『こっちは急いでいるんだ・・・早めにくたばれっ!!』

『ファイナルアタックライド・デイ・デイ・デイ・デイ・デイカオスッ!
』!』

『ファイナルアタックライド・ダ・ダ・ダ・ダブルウツ!!』

とベルトとアドベントドライバーにカードを入れ必殺技を発動・・・

『エクストリーム!マキシマムドライブッ!!』

W『ハッ!!』

雅紀『ホッ!』

二人はジャンプし・・・Wは翠色の竜巻に包まれ・・・デイカオスはカードを貫きながらアンデッドに向かう・・・

雅紀『ディメンションブレイカーッ!』

W『ダブルエクストリームッ!!』

と二人は必殺技をぶつけた・・・

パラドキサアンデッド・コーカサスビートルアンデッド『グウウ
オオオオオオッ!!!!』

とカテゴリーキング二体は爆死した・・・

雅紀『ありがとう・・・W。』

W『礼はいらねえ・・・。また何かあったら、いつでも呼びな・・・。』

W『じゃあね。』

とWは消えていった。

雅紀『急いで、アスナを探さないと・・・！』

とデイカオスはマシンディカイザーを呼び寄せ、アスナが行った方向に走った・・・。

数十分後

雅紀『くそっ！アスナ・・・どこにいるんだ・・・？』

雅紀はあれから何分も探して回ったが・・・アスナの行方がわからなくなった・・・。

雅紀「一体どこにいるんだ？アスナ・・・。」

と雅紀はディカイザーを発進させようとすると・・・

『マ・・・キ・・・』

何処かから声が聞こえた・・・。

雅紀「？」

『ま・・・さき・・・。』

どうやらこの声は頭に響いてきたようだ・・・。

雅紀『テレパシーか何かか？頭に響いてくる・・・。』

と感覚を研ぎ澄ませると・・・。

『雅紀・・・雅紀・・・。』

雅紀「この声・・・アスナっ!？」

と雅紀は驚く・・・。

『雅紀・・・来て・・・雅紀・・・。』

雅紀「来て……て……あっちかつ！」

と雅紀はディカイザーを発進させて……向かう……。

山奥

雅紀「此処か……？」

と雅紀は山奥を歩いていた……。しばらく歩いていると……

「来たんだね……雅紀……。」

と目の前に女の子がいた……。アスナだ……。

雅紀「アスナ．．．っ！！？／／／」

雅紀はアスナを見て顔を赤くする．．．。なぜならアスナは裸だったからだ．．．。

アスナ「何でアンタを呼んだか．．わかる？」

雅紀「アスナ．．．」

アスナ「雅紀．．．あたし．．．もう戻れないんだ．．．。」

雅紀「．．．」

アスナ「あたしの体．．．サキュバスになっちゃってる．．．。今、自我が残っているから良いけど．．．何時、自我を失ってしまうのか．．．わからない．．．。」

とアスナは涙目になりながら話す．．．そして．．．

アスナ「あたしはもう人じゃない．．．だから雅紀．．．アンタがあたしを．．．殺して．．．。」

とアスナが言った．．．。

雅紀「何を言ってるんだっ！？まだ他に方法があるはずだっ！！」

アスナ「他に方法なんて．．．ない．．．。雅紀．．．アンタだから頼めるんだ．．．。」

雅紀「アスナ．．．！！」

アスナ「お願い・・・あたしの意識があるうちに早・・・っ!!」

アスナは突然苦しみ出す・・・。

雅紀「アスナっ!!」

と雅紀はアスナに駆け寄ろうとしたその時・・・

アスナ「雅紀・・・早く・・・あたしを・・・ウワアアアア
ッ!!!!!!!!!!」

アスナは涙を流しながら言っていると・・・叫び声をあげる・・・。

雅紀「アスナっ!!」

と雅紀は駆け寄り・・・アスナの体を支える・・・その時っ!

ザグウツ!

雅紀「!!」

と雅紀は突然、腹に激痛が走る・・・。

雅紀「な・・・何だ・・・っ!?!」

雅紀は腹を見てみると・・・腹から血が大量に出ていた・・・そ
して・・・雅紀の腹を誰かが貫通していた・・・それは・・・

アスナ「・・・」

アスナだった・・・。

雅紀「アスナ・・・？」

アスナ「雅紀・・・だから言ったんだよぉ・・・？自我があるうちに殺してつてえ・・・。」

とアスナは淡々と言う・・・。

アスナ「おかげであたしい・・・意識も感覚も・・・全部・・・サキユバスになっちゃったじゃない。」

とアスナが顔を上げる・・・。その表情は冷たい笑みでどこか妖艶な感じがする・・・。

雅紀「な・・・何で・・・？？」

と雅紀が言っている・・・。アスナは雅紀の腹から自身の手を抜く・・・。

アスナ「何って・・・？言っただじゃない・・・。もうあたし・・・身も心もすべてサキユバスになっちゃったって・・・。」

とアスナは手に着いた雅紀の血をなめる・・・。

アスナ「そ・れ・よ・り・も！」

とアスナは雅紀の体を押し倒す・・・。

雅紀「アスナ・・・？」

アスナ「あたし・・・気づいてたんだ・・・。あたしは雅紀の事が好きなんだって・・・。でも・・・ソレを否定し続けた・・・。だけど・・・今ではつきりわかった・・・。あたしはアンタが好きだって・・・だから・・・アンタの全部を奪って・・・あたしだけの物にするってね・・・////」

とアスナは唇を重ねようとした・・・。

アスナ「気持ちよくなりましたっとう・・・？雅紀い・・・？」

雅紀「ぐうっ！！」

『カメンライド・デイカオスツ！』

と雅紀はデイカオスに変身をした・・・。アスナは変身の余波で後ろに吹っ飛ぶ・・・。

雅紀『ハア・・・ハア・・・ハア・・・』

とデイカオスは腹を触りながら息を乱している・・・。

アスナ「そうなんだあ・・・。なら力づくでえ・・・！！」

とアスナはベルトを出現させる・・・。

アスナ「暗黒・・・変身・・・」

とアスナが呟くと・・・デステイニーのベルト、デスレイクルから邪

悪なオーラが発生し・・・アスナの身を包む・・・そして・・・

バアンツ！

オーラが消え中から紫色のボディを持ち・・・背中にサキユバスを連想させる翼があり・・・蛇のしっぽのアーマーが肩に着いていて・・・目が獣のような瞳になっていた。

コレが・・・封印されし、・・・暗黒の力・・・DESTINYニ・・・DESTINYドフォームだ・・・。

アスナ『ハハハ！たつぷりと痛めつけて・・・あたしのものにするんだからっ！！！！』

とDESTINYニは狂喜に狂った笑い声を響かせる。

雅紀『お前を必ず・・・正気に戻してやるっ！！！！』

と二人は構え・・・そして・・・

雅紀『ハッ！！』

アスナ『フフッ！！』

駆け出す・・・。

ドガッ！ドゴッ！

互いに殴り合いをする・・・。がディカオスの方は殴ろうとはしない・・・。

雅紀『(アスナを傷つけないで正気に戻す方法はないのかっ)!!?』

とディカオスは考え続ける。。。

アスナ『ハハッ!さっきから攻撃してこないねえっ!そんな余裕でいられると思ってるっ!?!?』

とデステイニーは攻撃をし続ける。。。

雅紀『くっ!アスナ、やめろっ!!!』

アスナ『やだよお。。。アンタをこの手で奪うまではっ!!!』

とデステイニーは黒いオーラを発散し。。。パンチを食らわす。。。

ドゴオオンッ!

雅紀『グアアアアアッ!!!』

とディカオスは吹っ飛ばされる。。。

アスナ『変身したところで。。。怪我してるんじゃ。。。意味はないわよ。。。』

とデステイニーは冷酷な声で言う。。。

雅紀『ぐう。。。アスナ。。。元に戻ってくれよ。。。』

アスナ『もう。。。昔のあたしじゃないっ!!今は。。。サキュバスよっ!!!』

とデステイニーはディカオスを殴る、蹴る。

雅紀『ごはあっ!』

その戦いを遠くから見ていた人物がいた……。

鳴滝「フッフ……ディカオスを倒す手間が省けたな。」

鳴滝であつた。

鳴滝「まさか……デステイニーにあんなフォームがあつたとは……。禁断の力か……。恐ろしいよ……。さあ……ディカオスを倒しておくれよ……。」

と鳴滝は呟いて、オーロラに入つて行つた。

雅紀『グワアアアアッ!』

とディカオスは吹っ飛ばされる……。

アスナ『いい加減……あたしのもになりなよ……。』

と右手を黒いオーラで包ませたデステイニーが言う……。

雅紀『誰か……!?!?お前を……正気に戻すまでは……やらねえぞ……!』

とディカオスは立ち上がる……。

』

雅紀「今のお前は・・・サキユバスの力にのまれて・・・意識も何も・・・心の奥底に封じ込まれているんだっ！鎖を破れば・・・お前は元に戻れるはずだっ！！」

アスナ『いい加減にしろって言いたいののはこっちだよ？』

とデステイニーは雅紀の首を持ち上げる・・・

雅紀「かはっ！」

アスナ『アンタ・・・あきらめが悪いんだね・・・なら、骨の一本か二本折って動けなくさせてあげる・・・』

とデステイニーは右手を構える・・・

雅紀「アスナ・・・お前は・・・こういうことをしたくないはずだ・・・。お前は・・・優しい女の子で・・・仮面ライダーだろ？」

アスナ『・・・』

デステイニーは無言で・・・雅紀の腹に拳を叩きこむ。

雅紀「がっ！」

と雅紀は口から血を吐きだす。

雅紀「ゲホッ！・・・アスナは・・・人々を守る仮面ライダーだろ？敵に・・・サキユバスに心を支配されちゃダメだ・・・！」

アスナ『フンッ!』

とデステイニーはまた一発、腹に叩きこむ。

雅紀「ガハッ!・・・闇に・・・飲まれるな・・・アスナっ!」

と雅紀は言う。

アスナ『これで・・・最後・・・』

とデステイニーが狙いを腹から顔に変え、殴ろうとする。

雅紀「・・・いい加減、目を覚ませっ!!アスナーーーーーっ
っ!!!!」

と雅紀は大きい声で叫ぶ。

アスナ『!!!』

デステイニーの拳は・・・雅紀の顔まで数センチの距離で止まった。
。。。

雅紀「アスナ・・・?」

と雅紀は恐る恐る聞く。。。

アスナ「雅・・・紀・・・?あれ・・・?何であたし・・・っ!雅
紀っ!!!」

とデステイニーは雅紀を離す……。そして・・・変身を解く……

アスナ「雅紀っ！アンタっ！何でこんなに怪我してんのよっ！！？
何でっ！？」

とアスナは雅紀を抱き起こす……。

雅紀「おお……。どうやら元に戻ったようだな……。」

アスナ「まさか……。あたしの事を元に戻そうとして……。こんな
に……？」

雅紀「あ……。あはは……。」

アスナ「バカアアツ！！！」

とアスナは雅紀に抱きつく。

雅紀「いっつっ！！……アスナ！？」

アスナ「アンタ……。ホントに大馬鹿よっ！！バカアツ！！！」

とアスナはワンワンと泣きだす。

雅紀「あ……。アスナ……。そんなに泣くな……。可愛い顔が台無し
になっちゃうぞ……？」

アスナ「雅紀……。」

雅紀「な？せっかく元に戻ったんだし……。笑顔でいろ……。よ……

」。。

と雅紀は眼を閉じて動かなくなる。。。

アスナ「雅紀？雅紀っ！雅紀っ！！」

とアスナは呼びかけるが。。返答なし。。。

アスナ「雅紀イイイイイイ！！！！！！！！」

とアスナの悲しい叫びが。。山奥にこだました。。。。。

第61話（後書き）

さてと・・・今回は重傷だったなあ・・・雅紀。
さてと、早めに次回のお話は・・・重傷を負った雅紀を・・・アスナ
がその身に持った、敵の力で・・・
まあ、気になる方は次回をお楽しみにっ！！

第62話

アスナ「雅紀っ！返事してよおッ！！」

正気に戻ったアスナは雅紀を抱えて叫んでいた……。雅紀はアスナの攻撃で重傷を負った。

アスナ「このままじゃ……。雅紀が……。！どうしたらいいのよ……」

とアスナは泣いていると……。

『全く……。そうやって泣いていても……。雅紀は眼を覚まさないわよお？』

と何処かから声が聞こえた……。

アスナ「だ……。誰よっ！？どこにいるのっ！！？」

とアスナは叫ぶ。

『あたしは……。アンタよ……。白鳥 アスナ……。』

と声の主はそう言った……。

アスナ「あたし……。？あたしは此処にいる一人だけよっ！というか、さっさと姿を現しなさいっ！！」

『それは無理よ……。だってあたし……。アンタの心の中にい

るんだから……。」

と声の主は言った……。

アスナ「あ……あたしの心の中……！？ふざけてんじゃないわよっ
！！」

『ふざけてないわよお？証拠に……感じなさい……。あたしが
アンタの中に存在していることが……わかるからさ……。』

と言われ……。アスナは眼を瞑って感じる……。すると……
中に……。何かがあるのかがわかった……。

アスナ「ホントだ……。」

『でしょ？』

アスナ「なら何で……。アンタがあたしの中に……？」

『ま……。簡潔に言えば……。あたしはアンタの心の闇とでも良
いわよ……。』

アスナ「心の闇？」

『ええ……。アンタがサキュバスになり……。その時にアンタの心
中に潜む、闇が増幅し……。あたしが生まれた……。いわば……。あ
たしは欲望……。怒り……。憎しみ……。それらの感情の集合体。』

アスナ「闇……。」

『そう……。闇よ……。まあ……。あたしは第二の人格みたいなもんだしね。』

アスナ「あ……。そう。じゃあ……。何て呼べばいいのよ……。？」

『そうねえ……。じゃあ……。あたしの名前はアスラで良いわ。アスナだしね。アンタは。』

アスナ「あ……。そう……。」

アスラ『それよりも……。良いのかしら？彼をほつといて……。』

アスナ「はっ！そうだっ！雅紀っ！！」

とアスナは雅紀に気付く……。

アスラ「此処だと……。病院に連れてく前に死ぬわね……。」

アスナ「アンタ、何、平気に言ってるのよっ！！？」

アスラ『そう怒らない……。一つ……。助かる方法があるわ……。』

とアスラは言う……。

アスナ「助かる方法……。それを教えなさいっ！！」

アスラ『それはねえ……。サキユバスの力を使えばいいのよ。サキユバスの治癒能力で雅紀の体を回復させる……。』

アスナ「それで助かるのねっ！じゃあ早速っ！……。て……。ど

うすればいいのよっ!!!？」

アスラ『慌てないの……。アンタがあたしに体の主導権を渡せば・
・サキユバスの力を100%出せるわよ……。』

アスナ「そう。なら、お願いっ!!！」

アスラ『意外とあっさりね……。一つ・言うておくわ……。こ
のまま……。あたしが主導権を握り……。もうアンタに主導権を渡
さなかつたらどうするの……。?』

とアスラは言う……。しばらく沈黙が続く……。そして……

アスナ「そんなことしないんでしょ、ホントは？」

アスラ『それを信じると……。?』

アスナ「だって……。アンタは……。あたしの一部なんだからね・
。分かるわよ……。」

アスラ『……。全く……。わかりまくりね……。わかった……。
早速……。行くわよっ!!!!!』

アスナ「っ!!!!！」

とアスラの掛け声とともに……。アスナは意識が引つ張られる感覚を
感じた……。そして……

アスラ「フフフ……。アスラ様の登場よお。」

とアスナと入れ替わったアスラが出てきた……。後ろでまとめた髪が……。ストレートヘアになる……。

アスラ「さてと……。」

とアスラは雅紀を抱き起こす……。

アスラ「……。アンタのせいで……。アスナが眼をさましちゃったじゃない……。でも……。ごめんね……。傷つけて……。今……。あたしが助けてあげる……。だって、このまま死なれちゃ……。アンタと気持ちいい事が出来ないからね……。」

とアスラは自身の唇を雅紀の唇に重ねる……。

アスラ「（あたしの唾液……。力をあげるから……。感じて……。）」

とアスラは自分の唾液を雅紀に飲み込ませた……。

雅紀「く……。あ……。」

と雅紀は小さく吐く。すると……。体の傷が徐々に治っていく……。

アスラ「普通なら……。治るのに時間がかかるのに……。アンタ……。ますます好きになっちゃうじゃないかい……。／＼／」

とアスラは雅紀に抱きつく……。

アスナ『アンタ……。いい加減、体の主導権を返しなさいっ！！』

と心の中にいたアスナが叫ぶ……。

アスラ「フッフ・・もう少しだけ．．．。」

とアスラは引き下がらず．．．．とその時っ！！

？「あなた．．．私の雅紀に．．．何してるのかな．．．．？」

アスラ「！！！」

アスラは振り返ると．．．そこにいたのは．．．

アリス「邪悪な気配を感じ取って来てみたら．．．．雅紀を．．．．許さないよ．．．．！！！」

とてつもない殺気を放つアリスだった．．．．。

アスラ「誰よ．．．アンタは．．．？」

アリス「私はアリス．．．。雅紀の彼女よ．．．．。」

アスラ「えっ！？？」

アスナ『彼女っ！！？』

とアスラとアスナは驚く．．．。

アリス「それよりも．．．貴方が．．．雅紀を傷つけた罪．．．．その身でとくと思いき知らせてあげるわよ．．．．。」

とアリスはディダークドライバーを構える．．．。

アスラ「ククク・・・上等じゃない・・・。アンタが雅紀の彼女なら・・・。あたしがアンタを殺して・・・。雅紀の彼女になるわ・・・。」

アスナ「ちよっ！アスラ、何を言ってるのよっ！！？」

アスラ「アンタは黙ってなさい・・・！」

アスナ「アス・・・」

とアスラはアスナを心の中に閉じ込めた・・・。

アリス「・・・ふざけないで・・・。雅紀の彼女は私・・・。雅紀を取り戻すんだからっ！」

『カメンライド』

とアリスはデイダークドライバーにカードをセットする・・・。

アスラ「雅紀を奪ってあげるわ・・・。絶望を知りなさい・・・。」

とアスラは冷酷な笑みでそう言い・・・ベルトを出現させる。

アリス「変身ッ！」

『デイダークッ！』

アスラ「暗黒変身ッ！」

バアンッ！

とアリスはディダークに・・アスラはデステイニー「デスシードフ
オーム」に変身した・・。

アリス「バトル・・」

アスラ「スタートよっ!!!!」

と互いに駆け出す。

アリス「はあっ!!!!」

とディダークはディダークドライバーでデステイニーを切り裂こう
とする・・。

アスラ「よっ!!はっ!!」

とデステイニーは余裕で避ける。

アリス「すばしっこいわねっ!!」

アスラ「ククク・・アンタの实力はこんなもんなの?」

とデステイニーは馬鹿にしてくる。

アリス「ふざけないでっ!!!!」

「アタックライド・スラッシュッ!!」

アリス『ハアアッ!』

とディダークはパワーアップした鎌でデステイニーを切り裂いた・
。

アスラ『ガハアッ!・・・なかなかやるじゃない・・・!こつちだ
つてっ!!!』

とデステイニーは黒いオーラをまとった拳をディダークにぶつけた・
。。

ドガアアッ!

アリス『くあっ!!!』

とディダークは後ろに吹っ飛ぶ・・・。

アスラ『ククク・・・一気にトドメを・・・』

と言ったそのとき・・・

『アタックライド・スマツシュツ!』

という機械音が聞こえた瞬間・・・デステイニーの服部にエネルギー
の塊が当たった・・・。

アスラ『ぐああっ!』

とデステイニーは小さい悲鳴を上げて・・・吹っ飛ぶ・・・。

アリス『お返しよ……。』

どうやら先ほどの攻撃はデイダークによる攻撃だった……。

アスラ『全く……頑丈なのね……。』

とデステイニーは起き上げる……。

アリス『（さっきの攻撃をまともに食らってまだ立ち上がる……。あのフォームといいイレギュラーね……。普通なら……。デステイニーにあんなフォームは存在しないのに……。）』

とデイダークは思った……。デイダークの言う通り……。デスシードフォームはイレギュラーのフォームで……。封印されて……。その力が解き放たれて……。今……。暗黒の力を手にしてしまったのだ……。

アスラ『もういい……。めんどくさいけど……。トドメ……。食らわす。』

アリス『私だって……。』

『ファイナルアタックライド・デイ・デイ・デイ・デイダークツ！』

とデイダークはデイダークドライバーにエネルギーを送り、デステイニーは足先に力を込める。

アスラ『ハアアアアアッ！！』

とDestinyニーはジャンプし・・・キックを食らわす。

アリス『ディメンションデスサイズツッ!!』

とディダークはエネルギーにより長く、鋭利になったディダークド
ライバーを振るった・・・。

ドゴオオオオンッ!!

アスラ『あつ!!』

アリス『きゃっ!!』

と互いに必殺技を相手にぶつけ・・・吹っ飛ぶ・・・そして・・・変身
が解除した・・・。

アリス「くうう・・・」

アスラ「く・・・まさかここまでやるなんてね・・・でも・・・アン
タの負けよ・・・。」

とアスラはサキュバス形態になる・・・。

アスラ『あたしには・・・サキュバスの力があるからね・・・』

とアスラは右手を上上げる。

アスラ『さよなら・・・』

と言ったその時・・・

アリス「貴方だけだと・・・思わないで・・・。クアアアアッ！
」

とアリスは悪魔形態になる・・・。

アスラ「なっ！？あんたまで・・・!？」

アリス「この姿になるのは・・・嫌だけど・・・そうは言ってもらえない・・・行くよ?」

とアリスが言った瞬間・・・

ドッ！

とアスラの腹にパンチをぶつけた・・・。

アスラ「がっ！（あたしが反応できないくらいのスピード・・・。）
」

とアスラは思っていると・・・

アリス「まだまだー！ーっ!!!!」

とアリスはお得意の超スピードでパンチやけりを食らわす。

アスラ「くっ！調子に乗らないでっ!!!!」

とアスラは周囲に衝撃波を放った。

アリス『なっ!?!』

それで動きが止められた・・・。

アスラ『テアアアアッ!』

とその瞬間を逃さず、アスラはアリスの腹にパンチを食らわした・・・。

アリス『きゃっ!?!』

とアリスは吹っ飛ぶ・・・。

アスラ『一発は一発よ・・・。アンタは・・・スピードが自慢のようだけど・・・、あたしはパワーが自慢なのよっ!』

とアスラは言った。

アリス『負けられないっ! 雅紀を傷つけた罪を償ってもらわなきゃっ!?!』

とアリスは立ち上がる・・・。お互い、見合い・・・そして・・・

アリス『ウオオオオッ!?!』

アスラ『タアアアアアッ!?!』

と互いの拳がぶつかり合うその時っ!?!

?『はい・・・お二人さん、その辺で・・・。』

と誰かがアリスとアスラの拳を受け止める。その人物は・

アリス・アスラ『『雅紀っ！』』

デイカオスに変身した雅紀だった。

雅紀『全く、人が気絶している時に……何、喧嘩してんだよ。』

アリス『雅紀！？怪我してたんじゃない？』

雅紀『怪我なら……アスナが治してくれた……。』

とデイカオスは変身とき、雅紀に戻る。二人も、元の姿に戻る……

雅紀「アスナ……正気に戻ったのに……また……」

アスラ「勝手な誤解しないで……。アスナはあたしの中にいる……。あたしは……もう一人のアスナ……アスラよ……」

雅紀「アスラ……。サキュバスの方の……意識か……」

アスラ「そうよ。あ、もう傷つけないから心配しなくてもいいわよ。彼女さんもお怒り気味だし。」

雅紀「そうか……。アリス……もう俺は大丈夫だから……。怒らない。」

アリス「雅紀……」

雅紀「俺のために怒ってくれたのはありがたい……。だけど……やり過ぎ……。」

アリス「……ごめんなさい。」

とアリスは謝る。

アスラ「ま……あたしもやりすぎたかな……。ごめんね……。それにしても……。」

とアスラは雅紀を見る……。

雅紀「何だ？」

アスラ「フッフ……やっぱり……。アンタの事見ると……。体が欲しがってるよ……。アンタの事があ……。／＼／」

とアスラは甘ったるい声で言いながら雅紀の右腕に抱きつく。

雅紀「アスラっ!?!？」

アスラ「アスナもアンタの事が好きみたいだし……。一石二鳥ね。」

とアスラはウインクした。

アリス「コラー……ッ！雅紀は私のだよっ!！」

とアリスは雅紀の左腕に抱きつく……。

雅紀「アリスっ!?!?!？」

アスラ「な〜によ？好きな人に抱きついてもいいじゃない？」

アリス「ダメえツ！これ以上、雅紀の事が好きな人が増えると・・私も困るのっ！！」

アスラ「へえ・・・案外、罪作りな男だねえ・・アンタ。ま、あたしはポジションは関係ないけど。」

アリス「何を言うかつ！雅紀は私の事が好きなのっ！！」

アスラ「ならあたしは・・・アンタ以上に雅紀に好かれればいいわ・・。」

とアスラは自身の胸を触らす。

アスラ「アンタのよりも・・少しは大きいからねえ・・。お子ちゃまはひっこんでなさい？」

アリス「ムう~~~~っ！！私だつて大きい方だよっ！！」

と今度はアリスが自身の胸を触らしてきた。

アリス「雅紀っ！」

アスラ「どっちの方が！」

アリス・アスラ「大きいのっ！？」

と声を合わせて言うてくる・・・。雅紀は・・

雅紀「もう・・・いい加減にしてくれえ・・・・・・・・きゅう／＼／」

とまた気絶してしまったのであった・・・。

第62話（後書き）

さてと・・・最後は両手に花の状態だったな。

雅紀「恥ずかしい・・・／＼／」

フフフ・・・羨ましいぜ・・・ちきしょう・・・さてと・・・急なこ
とだが・・・アスナにもう一つの人格を与えました・・・。

雅紀「アスラだっけか。」

そう。超ツンデレなアスナに・・・少々大人びて色っぽいサキュバスの
アスラ・・・。一つの体で二人分の楽しさ・・・を考えてみた結果
だ・・・。

雅紀「そうか・・・。」

さてと・・・次回の話は・・・再び鳴滝による、ディカオス抹殺作
戦が決行される。

雅紀「続きは次回・・・お楽しみにっ！！」

第63話

アスラ「へえ〜。アンタ達の家って綺麗ねえ。」

とまず言ったアスラ・・・現在、三人はアリス宅にいる。

アリス「私達、二人だけしかないしね。」

アスラ「それ、ほぼ同棲じゃん・・・羨ましいわねえ。」

アリス「恋人同士だしね／＼／」

とアリスは頬を染める。とすると・・・

雅紀「二人して、何話してるのさ・・・？」

雅紀が来た。

アリス「フフフ・・・私と、雅紀がどれだけ愛し合っているのかをアスラちゃんにねっ／＼／」

とアリスは満面の笑顔で言う。

雅紀「愛し合っているって・・・／＼／」

と雅紀は頬を染めてもじもじする・・・。

アスラ「ハア・・・そうになっているアンタを見てると欲しくなってきたよお。ねえ・・・雅紀い／＼／」

とアスラは身を寄せながら雅紀に言う・・・。

雅紀「な・・・何だ？アスラ・・・？っていうか・・・近い／／／」

と雅紀はドキドキする・・・。アスラは物欲しそうな瞳を見せながら雅紀を見る・・・。

アスラ「寝よお？一緒に・・・。一つになろうよお・・・／／／」

と言ってきた・・・。

雅紀「ハアツ！？」

と雅紀は顔を真っ赤にする・・・。

アスラ「そんな・・・初心で純粋なアンタを見ると・・・堪らなく子宮が熱くなるの・・・どうにかしてよお／／／」

とアスラは雅紀の手を取り・・・自身の秘所に触らせる・・・。触ってみると・・・濡れていた・・・。

アスラ「ねえ・・・？アンタの手、触られて・・・ますます濡れてきてるんだよお・・・？このまま・・・アンタの一部を入れて・・・一つになろうよお・・・？／／／」

とアスラは何時でも準備万端なのか・・・雅紀と唇を重ねようとする・・・。だが・・・

アリス「私の目の前でやらないでほしいんだけど・・・？」

とアリスが物凄い殺気を放ちながら言った・・・。

アリス「それに・・・雅紀は私のだよ？勝手に一つならうなんて言わないで・・・。」

アスラ「ふん・・・。アンタはしたことがあるの？雅紀と・・・？」

アリス「うん。したよ・・・。処女喪失・・・さらには雅紀の童貞を奪って・・・雅紀の精液を子宮で受け止めたんだから・・・／／／」

とアリスはとんでもない発言を連発した・・・。

アスラ「・・・そうなんだあ・・・。じゃあ、経験済みなんだし・・・できるよねえ？」

とアスラは雅紀に聞く・・・。

雅紀「な・・・俺は・・・。」

アスラ「あたしとアスナは初めてだから・・・優しくしてねえ・・・
・／／／？」

とアスラは雅紀を抱きしめ・・・受け入れ態勢に入る・・・。

アリス「だから・・・私の前でやらないでっ！！雅紀は私のなんだからっ！！」

とアリスは雅紀を奪い取る・・・。

アスラ「ちえ〜……。でも……あたしは雅紀が好きだし……。
一夫多妻つてので良いんじゃない？」

とアスラは雅紀に抱きつく。

アリス「一夫多妻つて！？ダメえツ！雅紀は私と結婚するもんつ！
！」

とアリスは強く雅紀に抱きつく。

雅紀「結婚てっ！！？／／／」

雅紀もアリスの結婚宣言で頭から煙を出す。

アスラ「結婚かあ……。あたしも……。雅紀と結婚して……。
一つになって……。子供作つて……。キャツ／／／」

とアスラは一人……。妄想の世界に入っていた。。。

アリス「雅紀の子供作るのは、恋人である私だよっ！」

アスラ「フフフ……。なら、お互いに雅紀と愛し合つて、一緒に雅
紀の子供作っちゃえばいいじゃない？」

アリス「……………」

アスラ「子供いっぱいだったら……。幸せじゃない？」

アリス「……………よし、そうしましょう。」

アスラ「受け取って・・・」

とアリスとアスラは甘ったるい声で言う・・・すると・・・

アスナ『いい加減にしなさいっ！！！！』

アスラ「え？ちよっ！キヤツ！！」

と突然、中にいたアスナが眼を覚まし、アスラを精神を引っ張りだし・・・

アスナ「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

アスラと入れ替わった。

アスナ「アスラの奴っ！勝手なこと言わないでほしいわよっ！！子供って・・・ハウッ！！！！」

とアスナはアスラに怒り・・・子供の事を考えて・・・赤面する。

雅紀「アスナか？」

アスナ「ええ、そうよ。怪我は・・・治ってるみたいね。」

雅紀「ああ。」

アスナ「・・・あたし・・・ちよっとトイレに行ってくるわ・・・。」

とアスナは言い、部屋を後にした・・・。

雅紀「ふう・・・（やばかった・・・あの時、アスナがでてこなかったら俺・・・完璧に二人と・・・／／／）」

と雅紀が思っていると・・・

アリス「アスラはリタイアだけど・・・私がいること・・・忘れないでね？」

雅紀「はっ!」

と雅紀はアリスの事を思い出し、後ろを振り向くと・・・

アリス「ウフフフフ・・・／／／」

発情モードを発動したアリスの笑顔があった。

雅紀「あ・・・アリス・・・？」

アリス「子作りのために・・・いっぱい、私の中に出そうねえ／／／?」

雅紀「アリスっ!?!?・・・ギャアアアアアアアアアアッ!?!」

と此処からは・・・18禁クラスになりそうです。

一方のアスナは・・・

アスナ「……………」

アスナはトイレで……自身の秘所に触れる……。

アスナ「……濡れちゃってる……。」

秘所はまだ濡れていた……。

アスナ「アスラ……何で、アンタはそんなにあいつに……？」

アスラ『あら？嫉妬？』

アスナ「そんなんじゃないっ！……アンタ……あたしの意識がない時に……アイツの事、殺そうとしたじゃない……。」

アスラ『まあねえ……手足を折って動けなくさせて、精気を根こそ

ぎ吸い取っちゃおうかなあ・・・て思ってたけど・・・。」

アスナ「・・・・・・・・最低ね。」

アスラ「酷いわねえ。・・・でも、あたしはもうアイツの精気を吸い取るなんてことはしないから安心なさい。」

アスナ「そう・・・で、何で・・・。」

アスラ「雅紀が好きかって？そりゃ、アレよ。他の男達と違って、あいつはかなりの純情で初心じゃん。そこるところ、可愛いしね。でも、戦いになるとカツコイインだけどねえ・・・ま、いろいろとアイツの事が好きなのよ・・・。守ってあげたいくらいに・・・ね。」

とアスラは内に秘めていた雅紀に対する気持ちを話した。

アスナ「・・・・・・・・そう・・・。」

アスラ「アンタはどうなの？雅紀の事・・・？」

アスナ「・・・・・・・・わかんない・・・。」

アスラ「わかんない？」

アスナ「アイツに対する・・・この感情が分かんないのよ・・・。アイツを見ていると・・・体の奥が熱くなってきた・・・。心臓がバクバクするし・・・。何ていうか・・・。あたしだけのものしたいって気持ちになっちゃうのよ・・・。」

とアスナは言う・・・。

アスラ『・・・アンタ・・・それが恋なのよ?』

アスナ「恋・・・?」

アスラ『そんな感情があるなら・・・完璧にそうよ。あたしだってアイツを見ていると・・・そんな感情になっちゃうのよ・・・』

アスナ「・・・」

アスラ『アンタも・・・違和感があったんじゃない?他の男子達とは話もしないのに・・・雅紀にだけは・・・素直に話せるってのは・・・?』

アスナ「・・・まあ・・・それは、確かに変だなあとは思っていたけど・・・」

アスラ『だから、アンタは雅紀に対して、知らずに恋愛感情を抱いているのよ・・・』

アスナ「そう・・・なんだろうか・・・?」

アスラ『そう、そうっ!これから雅紀の所に行って、告白タイムよっ!』

アスナ「勝手に言わないでっ!・・・まあ・・・行ってみるわ・・・」

とアスナはトイレから出て・・・雅紀の方に行く・・・。

雅紀とアリスがいる部屋に来たアスナ・・・すると・・・

雅紀「アリスっ！やめてえっ！！」

アリス「いやっ！久しぶりに一つになるんだからっ！！雅紀っ！脱いでっ！裸になって、一つになるっ！気持ちよくなるっ！！！！／／」

などという声が聞こえた・・・。

アスナ「な・・・何やってるのよっ！？あいつらっ！！！！？／／／」

アスラ「チイツ！アリスに先を越されちゃうわっ！！」

と二人は言う・・・。

アスナ「アンタ達っ！何してんのよっ！！！！？」

とアスナは勢いよく扉を開ける・・・。目の前には・・・全裸になっ

たアリスと上半身裸にされた雅紀がいた・・・。

雅紀「あ・・・アスナっ！助けてえッ！！／／／」

と雅紀は助けを求めるが・・・。

アスナ「・・・知らないっ！！」

とアスナが出て行ってしまった。

雅紀「アスナっ！？」

アリス「覚悟オツ！うにゃ~~~~~っ！！／／／」

雅紀「あああああっ！！！！」

と雅紀はアリスと一つにされてしまった・・・。

アスナは・・・

アスナ「……………やっぱり、男ってキモいわっ!」

アスラ『あれは、アリスが雅紀を襲ったのよ……。雅紀は気持ち悪くはない。』

アスナ「だけどっ!……………やっぱり、男は皆そうなのよ……。サキュバスみたいに……欲求を解消するために……」

とアスナは言う……………。

アスラ『全く……………あんたって子は……………』

とアスラは呆れ気味の様子……………。

鳴滝「くウツ！デステイニーはディカオスを抹殺しなかったのかっ
！」

と山奥で鳴滝は愚痴をこぼしていた。

鳴滝「まあ良い。この世界のサキュバスを利用して……」

と鳴滝は奥へと進んだ……。

一方、雅紀は……

雅紀「もう・・・もうやめてえッ!!」

と叫んでいる・・・。現在、アリスと一つにされている。

アリス「ダメえ。私の中に出すまでは・・・離さないよお？」

とアリスは言った。アリスは一気にラストスパートに入り、腰を振る・・・。

アリス「あんっ！アンツ！雅紀い、・・・出したい時は・・・出してねえッ・・・？／／／」

雅紀「いやっ！だめっ！マジで中に出したらヤバいっ!!」

と雅紀は精液を出さないように踏ん張る。

アリス「アハハ。もう声も震えているよお？限界なら・・・諦めなよお？」

雅紀「だめっ！マジでダメえッ!!」

と雅紀は叫んでいると・・・

「キヤーーッ!!」

「助けてくれええっ!!」

「サキユバスだあッ!!」

という悲鳴が外から聞こえた。。

雅紀「サキユバスっ!? あ、アリス! やめろっ! サキユバスがでたってっ!!」

アリス「ムウウツ! こういう時に出てくるなんてっ!! 許せないっ!! 血祭りにあげてやるっ!!」

とアリスは怒り気味の様子。。

雅紀「行こうっ!!」

アリス「うんっ! 倒したら、またやるからねっ! さっきよりも激しくッ!!」

雅紀「いやっ! マジで勘弁っ!!」

と二人は服を着て、家を出た。。

アスナ「・・・サキュバスが襲ってきたのねっ!？」

一方のアスナも、サキュバスの存在に勘付いた。

アスナ『ええ・・・。気配だと・・・何十体もいるわねえ。』

アスナ「行くわよっ!！」

とアスナは走って行った。

シヤアアアッ!!

現場ではサキュバスが男や女の精気を奪っている。そこに・・・

雅紀「もうやめろっ!！」

と雅紀とアリスが来た・・・。

アリス「もうっ!貴方達のせいで、雅紀との子作りを中断しなきゃいけないかったじゃないっ!！」

雅紀「いやっ!それはいいからっ!!!/!/」

と雅紀は突っ込む。そこに、

アスナ「アンタ達っ！」

アスナが来た。

雅紀「アスナ……」

アスナ「……」

雅紀「アスナ……その、先のは……」

アスナ「いいわ……。それよりも、こいつらを倒すのが先決よっ
！！」

とアスナは言う。

雅紀「そうだな……。行くぞっ！アリス、アスナっ！！」

と雅紀はディカオスドライバーを腰に装着する。

アリス「うんっ！」

アスナ「わかってるわよっ！」

とアリスはディタークドライバーを出し、アスナは腰からデスレイクルを出現させる……

『カメンライド』

雅紀・アリス・アスナ「「変身ッ！」」

「デイカオスッ！」

「デイダークッ！」

と三人は変身した・・・。

雅紀「行くぞっ！」

アリス「ええっ！」

アスナ「おうっ！」

と三人は、サキュバスの大群に突っ込んでいった・・・。

第64話

雅紀『ウオオオオオッ!!』

アリス『ハアアアアッ!』

アスナ『テヤアアアッ!!!』

ディカオス達、ライダーはサキュバスの群れに突っ込み、パンチやキック、切り裂きと連発で倒していき、数を減らしていく。

雅紀『ふう……ザコ連中のようだが……下っ端か……?』

アリス『そう……だね。』

アスナ『兎も角……ぶっ倒すっ!!』

と三人は頷いた……その時っ!

?『シヤアアアアアッ!!!』

雅紀『え?……グハアアアッ!』

アリス『雅紀!?キヤアアアッ!』

アスナ『アンタ達ッ!?うああっ!』

行き成り、三人が何者かに攻撃され、倒れる。

雅紀『い……一体……何が……？』

とディカオスが前を見ると、そこには・

？『貴様らか……？我ら一族を絶滅させようとする奴は……』

サキュバスがいた。しかし、体が他のサキュバスとは違っていた。

サキュバス『我らの一族を絶滅しようとする貴様らには……死の制裁を与えてやる……』

とサキュバスは強烈な威圧感を出しながらそう言い放つ……。それだけでディカオスは……危険だとわかった。

雅紀『アリス……アスナ……、気をつける……コイツは……』

アリス『手ごわい……でしょ……？』

アスナ『上等じゃないっ！』

と三人は立ち上がり、そして・

雅紀『行くぞっ！！』

ディカオスの掛け声とともにサキュバスに向かって走る。

サキュバス『フン……』

一方のサキュバスはその場から動かない。

雅紀『ウオオオオツ!!』

とディカオスはアドベントドライバーを振るう……が・

ガキンツ!

サキュバス『効かん……。』

手で止められてしまった。

雅紀『何っ!?!』

サキュバス『フンツ!』

ディカオスが驚いている隙について、サキュバスはディカオスの腹にパンチを食らわす。

雅紀『ぐあああつ!!』

サキュバスのパンチを食らったディカオスはビルに激突。

アリス『雅紀っ!?!このっ!!』

とディカオスはディダークドライバーで切り裂く……

サキュバス『……。フン……。!』

だがこれも受け止められてしまう。

サキュバス『ハツ!』

とサキュバスは衝撃波をデイダークに浴びせる。

アリス『キャアッ!』

デイダークは吹っ飛ばされ、倒れる。

アスナ『喰らいなさいっ!!』

とデステイニーは必殺キックを喰らわす。

ドゴオオンッ!

辺りは煙が立ちこもる。煙が晴れてくると……デステイニーのキックを首で受けていたサキュバスが立っていた。

アスナ『……なっ!!!?』

とデステイニーは驚く。

サキュバス『くだらん……。』

サキュバスは蹴りを食らわす。

アスナ『あっ!』

とデステイニーは飛ばされ倒れる。

サキュバス『弱い連中だな……。ザコが……。』

とサキユバスが呟いていると・・・

雅紀『誰がザコだ・・・』

とデйкаオスが現れた。

雅紀『高速で・・・必殺技を食らわしてやるっ!!』

『カメンライド・ファイズッ!』

とデйкаオスはD555になる・・・。

『フォームライド・ファイズッ!アクセルウツ!』

さらにフォームライドをする。・・・前のボディが開き、中の機械部分が露出し、体のフォトンブラッドが白く、瞳が赤く変色した・・・
。高速形態「555アクセルフォーム」にフォームチェンジした。

『スタートアップッ!』

ダウンッ!ダウン!ダウンッ!ヴァーンッ!ヴァーンッ!ヴァーンッ!

とD555AFは左腕に付いてある「ファイズアクセル」のスイッチを押し、高速モードになる。

雅紀『ハッ!』

とD555AFは勢いよく地面を踏み、サキユバスとの距離を縮める。

『ファイナルアタックライド・ファ・ファ・ファ・ファイズッ!』

とD555AFはジャンプし、足に付いた、ファイズポインターからレーザーをサキュバスを囲みながら発射させる。

雅紀『ハアアアッ!』

とD555AFはアクセルクリムゾンスマッシュをサキュバスに叩きこんだ。

『3・・・2・・・1・・・タイムアウトッ』

と高速モードを解けてD555はデイカオスに戻る。

雅紀『どうだ・・・?』

とデイカオスはサキュバスがいた方を見る・・・すると・・・

サキュバス『くだらんな・・・』

と煙が晴れ、中から多少、ダメージが通ってあるが、平然と立っているサキュバスが姿を現した。

雅紀『何っ!?!』

これにデイカオスは驚愕。

サキュバス『・・・消える・・・!』

とサキュバスが呟くと、巨大なエネルギー波を放出し・・・辺りは

爆発した……。

雅紀『うあああああああつ!!!』

アリス『雅紀っ!』

アスナ・アスラ『雅紀っ!!!』

とデイカオスがサキュバスの近くにいたため、爆発に巻き込まれる。デイダークとデステイニーもその爆発に巻き込まれてしまう。

ドッゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

煙が晴れると……辺りの建物は崩壊しており……巨大なクレーターがあつた。

サキュバス『……』

そのクレーターの中心にサキュバスが立っている。

アリス『く……くうう……』

アスナ『か……かはあ……』

周りには、変身が解けたアリスとアスナが倒れていた。体中が傷だらけである。

サキュバス『まだ生きていたか……。あの紺色のがいないが……まあ良い……。』

とサキュバスは、同族のサキュバスの達の方を向く。

サキュバス「我が同士達よ．．．！こいつらの精気を吸い尽くせっ！
女だが、腹の足しにはなる．．．」

と言い放つ。サキュバスは咆哮しながら．．．アリスとアスナをとらえようと動く。

その光景を一人の男が見ていた。

鳴滝「流石は、サキュバス達の親玉だ．．．。凄い力だ．．．。」

鳴滝であった。

鳴滝「ディカオスは滅んだようだな．．．。後は、ディカオスの仲間を殺してくれさえすればいい。ディケイドと手を組まれては困るしな。」

と鳴滝はそう呟くとオーロラに包まれていった。

下っ端サキュバス1「シャアアア．．．！」

下っ端サキュバスはアリスの髪の毛を掴む。

アリス「あっ！」

アリスは小さく悲鳴を上げる。

アスナ「アリスっ！」

下っ端サキュバス2「シャアッ！」

もう一匹の下っ端サキュバスがアスナの髪の毛を掴む。

アスナ「痛っ！は・・・離せっ！！」

とアスナはジタバタ暴れる。

サキュバス「そう暴れるな・・・一瞬であの世に行けるから・・・心配するな。」

アスナ「何が心配するなよっ！？ふざけないでっ！！」

アスラ「そうよっ！まだ、雅紀とあんなことや、こんなことだってしていないのっ！！」

とアスナは言い、アスラは危ない発言をする。

サキュバス「・・・殺れ・・・。」

とサキュバスが言い放つ。

下っ端サキュバス「シャアア・・・。」

下っ端サキュバスはアリスののど元に噛みつきこうとする。

アリス「あ・・・ああ・・・。」

アリスは絶望に満ちた表情になった。

アスナ「アリスっ！・・・くそっ！このオッ！！」

下っ端サキュバス2「シャアアア」

と今度はアスナを捕まえているサキュバスがアスナのど元に噛みつきつとする。

アスナ「くそっ！クソオツ！」

アスラ「死にたくないっ！！！」

とアスナとアスラは叫ぶ。そして……二人の頭に雅紀の顔が浮かぶ。

アスナ・アスラ「雅紀イイイツ！！！」

と叫んだ……。

サキュバス「あの紺の戦士の名か……無駄だ、奴はくたばって……」

？「くたばってなんかいねえぞっ！」

サキュバス「！！！」

サキュバスは振り返る……。そこには……

雅紀「ハア……ハア……ハア……」

雅紀がいた……。だが……血だらけでフラフラだった。

アスナ「雅紀っ！」

アスラ『生きてたんだっ！良かったよおっ！』

アリス「雅紀い……」

三人は涙目で言う。

サキュバス『あの衝撃をまともに食らったというのに……まだ、生きていたのか……。』

雅紀「まあな……。生憎、俺は悪運が強いみたいでな……。」

と雅紀は笑みを浮かべるが、体はすでに限界にきている。

サキュバス『だが無駄だ……。貴様には、戦える力など……。もう残ってない。消えるがいい。』

とサキュバスは言い放ち……。下っ端サキュバスが雅紀に襲い掛かる。

雅紀「悪いが……。俺には……。頼もしい仲間が……。まだいるんだよっ！」

と雅紀は叫ぶ……。すると……

ブウウウウウンッ！！！！

マシンディカイザーが現れる。そして……

ウイイインッ！

ロボットモードに変形し・・・

ザシュザシュッ！

サキュバス達を切り裂き・・・

アスナ「うわっ！」

アリス「うう・・・」

アリスとアスナを救いだし、雅紀の隣に移動する。

雅紀「ありがとう・・・。デイクイザー・・・。」

と雅紀はデイクイザーに礼を言う。デイクイザーは頷く。

サキュバス「い・・・一瞬で・・・我が同士達を・・・。おのれえっ！！！」

とサキュバスは怒る。

雅紀「二人とも・・・大丈夫か・・・？」

アスナ「あたしは平気・・・でも・・・アリスが・・・」

とアスナに言われ、雅紀はアリスの方を見ると・・・

アリス「う・・・うう・・・」

足を怪我しているようだ・・・。

雅紀「アリスは・・・休んでいる・・・。」

アリス「平気だよ・・・。私・・・戦えるから・・・。」

とアリスは立とうとするが・・・雅紀に止められる。

雅紀「ダメ・・・。アリスは、休んでいる・・・。大丈夫だ・・・。俺が奴を倒す。」

と雅紀はアリスに安心させるように言う。

雅紀「デイカイザー。アリスの事・・・頼む。」

と雅紀は言うのと、デイカイザーは頷く。

雅紀「よし・・・行くか・・・。」

と雅紀はサキユバスの方に向かう。

サキユバス『愚かな人間よ・・・。なぜ、足掻く？貴様らは、我らの食糧だというのに。』

雅紀「食糧？誰が決めた！？人間は食糧なんかじゃないっ！」

サキユバス『では・・・何だというのだ・・・？』

とサキユバスは聞く。

雅紀「人間は・・・人間だ・・・。この世を、限りある人生を、必死で生きているッ！お前らだって・・・そうだろ・・・？」

サキユバス「我らは・・・クズな貴様ら人間共とは違い・・・何百年も生きられる・・・。長き命を持っているのだからな・・・。」

雅紀「なら分らないだろうな・・・。生きることのありがたさが・・・。」

サキユバス「生きることのありがたさ・・・だと・・・？」

雅紀「人間は・・・死ぬ寸前で・・・生きることがどんなにいいのかが・・・わかる。今の人たちは・・・気づいてないようだが・・・。」

と雅紀は自分が死にかけた事を思い出す。

雅紀「俺のこの命は・・・アリスが自分の命を分け与えて・・・俺にやった命だ・・・。もし・・・アリスがいなかったら・・・俺は死んでいた。」

・・・それで、俺は生きることがどんなにいいのかわかった。おかげで、大切な・・・人たちができたから。」

と雅紀はアリスや・・・リリなのの世界にいるのは達を思い浮かべる・・・。

サキユバス「フン・・・生きること何のありがたみがある？貴様らは・・・我々の食糧だ・・・。我々に精気を吸い取らばいいだけの・・・下等生物でしかない・・・。」

雅紀「ふざけるな……。お前たちの……。そんな理屈は……。間違っている……。」

サキュバス『間違っではない……貴様らは……。我々に食われる運命……。諦める……。』

とサキュバスは構える。

雅紀「だったら……。その運命、俺が変えてやるっ！」

アスナ「あたしのことも忘れないでよねっ！」

雅紀「アスナ……。」

アスナ「あたしだって……。その邪悪な運命変えてやるわよっ！アンタとなら……。それが……。できるかもって思っわっ！」

雅紀「アスナ……。ああ……。そっだなっ！」

と二人は頷き合う。

サキュバス『貴様ら……。一体何者だ……。？』

とサキュバスは聞く。

雅紀「俺達は……。」

アスナ「あたしたちは……。」

と雅紀はディカオスドライバーを腰に付け……。アスナはデスレイク

ルを出しながらつぶやく。

雅紀「最強最悪の……」

アスナ「邪悪な運命を変える……」

雅紀・アスナ「仮面ライダー（だ）（よ）っ！覚えてお（け）（きなさい）っ！変身ッ！！！！」

『カメンライド・デイカオスッ！』

バアンツ！

二人はそう叫び……デイカオス……デステイニーに変身する。

同時にデイカオスの目の前にカードが出現。ソレを取る……。

雅紀『行くぞ……アスナ……！』

アスナ『ええ……』

と二人は頷き合う。

サキュバス『葬り去ってやる……！』

と親玉サキュバスの目の前に、下端サキュバスがうっうよと現れる。

雅紀『ハアアッ！』

アスナ『オオオッ！』

と二人はサキュバス達に突っ込んでいき、パンチやけりを食らわす。

『アタックライド・スラッシュッ!』

雅紀『うおおっ!』

とディカオスはアドベントドライバーで切り裂いていく。だが……
一向に数が減らない。

アスナ『く……多いわねっ!一気に倒せられればいいんだけど……』

とデステイニーは言っていると、ディカオスが一枚のカードを出す。

雅紀『アスナ……ちょっと痛いかもしれないけど、我慢して……』

アスナ『え?』

ディカオスはそのカードをベルトに入れた。

『ファイナルフォームライド・デ・デ・デ・デステイニーッ!』

雅紀『それっ!』

アスナ『あんっ!』

とディカオスはデステイニーの背中に触れる……。すると……

アスナ『あ．．．ああ．．．ん．．．』

デステイニーの体が徐々に変形していき．．．足がバスターになり．．．腕にブースターが付いたりと．．．戦艦のような感じになっていく。

雅紀『やっぱ．．．これって．．．ガ○ダム．．．？』

とデйкаオスが呟く。そう、デステイニーがファイナルフォームライドした姿は、ガ○ダム○ードシリーズに出てくる小型戦艦そのものだったのだ．．．。

アスナ『ちよっ！？何よこの格好っ！！！？』

とデステイニーは驚いた。

雅紀『一応．．．武器．．．？名前は．．．デステイニーミ
ーティアって所で．．．』

とデйкаオスは言った。

アスナ『ハア！？何よソレ．．．？まあ．．．良いけど、どつするの？』

雅紀『こつするのさっ！』

とデйкаオスはデステイニーミーティアにドッキングした．．．。
○リーダーダムがミーティアにドッキングするように．．．。

アスナ『な！？なにすんのよっ！！！？』

雅紀『悪いけど、そのままな……。よし……。試し打ちだ
っ！！』

とデйкаオスはデステイニーターのバスターを発射した。
ズドドドドドドドオオンッ！

と下っ端サキュバス達は、どんどん倒されていった。

サキュバス『なっ！？馬鹿な……。一瞬でっ！！？』

これにはサキュバスも驚き……。

雅紀『一気にトドメをさしてやるっ！！』

『ファイナルアタックライド・デ・デ・デ・デステイニーツ！』

デйкаオスは必殺技を発動した。

雅紀『タイミング合わせるよ……。アスナ？』

アスナ『わかってるわっ！奴に、あたしたち人間の力を見せてやる
っ！！！』

とデステイニーターティアからミサイルポッドが出現。バスター
からもエネルギーがたまっていく。そして……

雅紀・アスナ『ミーターティア……。フルバーストオオオッ！！！』

とデステイニーミーティアから大量のミサイルとビームが発射された……。

サキュバス『く……っ!』

サキュバスは逃亡を図ろうとするが……ミサイルが追ってきて、逃げようがなかった……。そして……

ズドゴオオオオオオンツ!!

サキュバス『ガアアアアアアアアッ!!!!!!』

サキュバスに命中。落下してきた……。デイカオスはデステイニーミーティアのドッキングを解除し、デステイニーミーティアは元のデステイニーに戻る……。

サキュバス『グウ……。この私が……。滅ぶのか……。?』

雅紀『ああ……。』

サキュバス『死ぬのか……。く……。確かに、貴様の言う通り……。生きることがどんなにいいことか……。わかってきた……。』

雅紀『そうか……。なら、安らかに眠れ……。』

サキュバス『人間よ……。我らの恐怖から逃げられたこと……。嬉しく思うがいい……。』

と言うと、サキュバスの体が徐々に消えてなくなっていった。そして、二人は変身を解く。

雅紀「終わったな……。」

アスナ「そうね……。」

と二人は言う。

雅紀「そろそろ、戻るか……。」

アスナ「そうしましょ。」

と言って、二人はアリスの所まで行って、現場を後にしたのだった。

第64話（後書き）

まず先に更新を遅らせてしまい、申し訳ございませんっ！

さてと・・・次回は・・・雅紀達がデステイニーの世界からでて、次の世界に行くその時に・・・アスナが雅紀を連れて、初めてあった公園に・・・。

アスナ「あたしさ・・・アンタの事が・・・」

続きは次回っ！お楽しみにっ！

第65話

サキユバスとの戦いから・・・数時間後・・・

アリス宅

雅紀「アリス、大丈夫か・・・？」

と雅紀は心配しそうに言う。

アリス「平気だよ・・・。大丈夫。」

とアリスが言うが、体中に傷があるので、とても大丈夫とは言えない。

雅紀「大丈夫に見えないってっ！何か、傷薬をぬって、包帯を巻いて・・・。」

と雅紀はあたふたしていた。

アリス「だから、大丈夫だよ、人間より回復力が高いから・・・。」

雅紀「だけど・・・俺は・・・アリスに傷ついてほしくなくて・・・」

と雅紀は悲しい表情をしながら言う。

アリス「・・・雅紀・・・そんな悲しい顔しないで・・・」

とアリスは雅紀の頬に触れながら言う。

アリス「私、雅紀のそんな顔・・・見たくないよ。」

と言い、唇を重ねた。

アリス「ん・・・んん・・・」

雅紀「ん・・・んん！／／／」

やがて唇を離す・・・。その時、唾液の橋ができていた。

雅紀「アリス・・・／／／」

アリス「フフフ・・・雅紀はそうやって、初心で純粋な可愛い顔や・・・笑顔が・・・私は大好き／／／」

雅紀「／／／」

アリス「だから・・・悲しい顔はしないで・・・。死なないから・・・」

とアリスは安心させるように・・・優しく、そう言っ。

雅紀「・・・わかった・・・。でも・・・今日は寝てるよ・・・？」

アリス「そうするね・・・。」

そう返事をして・・・アリスは寝た・・・。

雅紀「お休みな・・・。」

と雅紀はアリスの頭を撫でる。

アリス「ハハ・・・雅紀に撫でてもらうのは初めてだね？」

雅紀「えっ！？寝てたんじゃ・・・。」

アリス「そう早く眠れないよ・・・。でも・・・雅紀に撫でられると・・・気持ちいい／／／」

と頬を染めながらアリスは言って、今度こそ寝た。

雅紀「・・・やっぱ、アリスの寝顔は・・・可愛過ぎる・・・／／／」

と雅紀は破壊力のあるアリスの寝顔を見ていた。

雅紀「そう言えば・・・この世界、デステイニーの世界は・・・平和になったようだな。サキュバスの大將みたいなやつを倒したし・・・。アスナに・・・お別れ言わないとな。」

と言っているよ……

ピンポン……

とチャイムが鳴った。

雅紀「ん？誰だろ？こんな時間に……」

と雅紀は玄関に行った。

雅紀「はいどちら様ですか？」

と言つと、

アスナ「雅紀？あたし、アスナよ。」

相手はアスナだった。

雅紀「アスナ？今、ドア開けるから……」

と雅紀は言い、ドアを開けた。

雅紀「どうしたんだ……？こんな時間に……」

アスナ「ちょっとね。あ、アリスは？」

雅紀「アリスなら、寝てるよ。怪我していて、だいぶ疲れていたし……」

アスナ「アンタは？休んでないの？」

雅紀「ああ……。そうだが……。？」

アスナ「休めっ！このバカっ！」

とアスナは雅紀の頭に軽い拳骨を食らわす。

雅紀「え……。？」

アスナ「アンタが一番、怪我してんのに……。休んでないって……。アンタ、自分の体、大切にしなさいっ！！」

雅紀「えつと……。ごめん。」

アスナ「フンッ！……。まあ……。そんなこと、今はいいわ……。ちよつと話があるんだけど……。ついてきてくんない……。？」

雅紀「……。だが、アリスの看病が……」

アスナ「今……。ダメ……。？」

とアスナは上目づかいをしてきた……。

雅紀「なっ！？……。わかったから……。そんな目で見ないでくれ……。それに……。こつちも話したいことがあるし。」

と雅紀はそれに耐えられず、そう言うしかなかった。

アスナ「そう……。じゃ……。行くわよ？」

と、アスナは行った。雅紀はそのあとをついて行く……。

公園

雅紀「此処って……確か……」

アスナ「そう……此処で……あたしたちは会った……。」

とアスナは言った。そう、此処はアスナが痴漢達を闘って、同時に雅紀と会った場所だ。

雅紀「で……話って……」

と雅紀は聞いた。

アスナ「まず、アンタから言いなさいよ。」

雅紀「え……でも、アスナの方が先に……」

アスナ「良いからっ！アンタが先に話しなさいっ！！！」

雅紀「は、ハイッ！」

と雅紀は敬礼した。

アスラ『アンタって、何言ってるのよ……。此処は先にアンタが言うところでしょ？』

アスナ（うっさいっ！！黙っててっ！！！！）

とアスラとアスナは言い合う。

雅紀「じゃな……。まず、俺達は、別の世界から来た人間だ……」

アスナ「そんなのわかってるわよ？」

雅紀「話は最後まで……。で、俺達は、この世界でサキュバスの大将を倒し、世界を平和にした……。」

アスナ「あたしも含まれてるんだけど。」

雅紀「それで、この世界の役目も終えたから、俺達は、別の世界に行くんだ。」

アスナ「えっ！！？」

とアスナは驚く。

雅紀「また、新しい世界に行く時に、アスナにお別れを言いに行こうかなくて、考えてたんだ。だから、今、話そうかなくて。」

アスナ「あ、アンタっ！もうちょっとはこの世界にいなさいよっ！そんな急に行かなくても・・・。」

雅紀「それがそう言うわけにはいかない。前にも、役目を終えてもまだその世界にいた時に、滅びの現象が生じようとしていた。そんなに長くいたら、この世界もいずれ滅びの現象が生まれる。それに・・・ソレを起こしている黒幕がいるのなら、尚更だ。だから、俺達は旅に出る。・・・短い付き合いだけど・・・ごめんな。」

と雅紀は申し訳なさそうに言った。

アスナ「・・・。」

雅紀「今度は・・・アスナの番・・・。」

アスナ「わかってるわよっ！」

とアスナは強気な態度を取る。

アスナ「じ……実はね……その……」

アスナは急に頬を染めながらモジモジしだす。

雅紀「……どうしたんだ？顔が赤くなっただけど……？」

アスナ「あ……あたしね……アンタ……いや、雅紀の事が……」

と何か噴出しそうなくらい真っ赤な顔になり、次の瞬間っ！

アスナ「雅紀の事がっ！好きっ！大好きっ！！／／／」

と叫んだ。雅紀はキョトンとして……やがて、徐々に頬を染める。

雅紀「え……ええっ！？な、何で俺っ！？」

と雅紀はあたふたする。とすると……

ぎゅっ……

雅紀「え……」

アスナ「……／／／」

アスナに抱き締められる。

雅紀「あ……アスナ……？」

アスナ「少しは落ち着いた？」

雅紀「いや、落ち着いたって……」

アスナ「……ごめん。いきなりこんなこと言って……。」

雅紀「……」

アスナ「……だけどさ……やっぱ、思いを伝えなきゃって思っ
て」

雅紀「何で、俺の事が……」

アスナ「……アスラに言われたの……。」

数時間前

アスラ『アスナく、いい加減、何時になったら雅紀に告げるの?』

アスナ「っ！・・・ハアツ！」

アスラの一言にアスナは思わず吹く・・・。

アスラ『だってそうじゃない。アンタ、雅紀の事好きなくせになかなか告白しないじゃん。』

アスナ「あんたねえっ！んな事いきなり言う！？」

アスラ『あたしは告ったよ？後はアスナだけ。』

アスナ「あんなんで告白って、アンタの脳はおかしいんじゃないっ！？」

アスラ『サキュバスではこういう感じで告るのよ。その時に、身を一つにすれば、オーケー。』

アスナ「何がオーケーよっ！？馬鹿っ！！！」

と二つの人格は言い合う。他人が見てれば明らかに変質者だ・・・。

アスラ『だから、早めにアイツに告白しちやいなさいっ！』

アスナ「・・・無理よ。」

アスラ『はあ？何が無理なのよ？』

アスナ「だって・・・あいつには、アリスがいるし。あたしなんか・・・あいつの傍にいる資格なんて・・・」

アスラ『馬鹿アスナっ！！！！』

アスナ「っ！！！」

アスラ『いつものツンで、強気なアンタはどこいったっ！？』

とアスナの中でアスラは叫ぶ。

アスラ『そんな、弱気なアンタ、見てらんないわっ！！あたしとかわれっ！！』

アスナ「え、ちよっ！！！」

とアスナが止めようとしたが遅し、アスラがでてきた。

アスラ「あたしがアイツの所に行ってやるっ！その時に、アンタが告白すんのよっ！！！」

と言い放ち、急いで雅紀の所に行ったのであった。

現在

雅紀「……………」

アスナ「……………」

数分間、二人はこんな状態。

アスラ『こらッ！何時まで、抱きついてんのよっ！早くッ！キスしちやいなさいっ！！』

アスナ（うるさいっ！！！）

とアスナは叫ぶ。

雅紀「アスナ……………」

アスナ「何よ？」

雅紀「ダメだ……。」

アスナ「……………やっぱり、アリスがいるから？」

雅紀「違くて……。まあ……嬉しいって感じだけど……俺なんかじゃ、勿体ないぞ……」

アスナ「……………何でよ……………」

と抱きつかれたまま呟き続ける二人……。

雅紀「アスナは……俺なんかよりも、もっと上を狙える。こんな、つまらない俺なんかよりも……アスナは……」

と言おうとしたが、アスナの指でふさがれる。

アスナ「それ以上言うな……………」

雅紀「アスナ……」

アスナ「あたしは……その……アンタだけしか……………考えられない……………」

雅紀「へ……………」

アスナ「だから……アンタだけしか、好きな人はいないのよっ！
！バカアツ！！！！」

雅紀「なぜ馬鹿っ!?!」

とすると……より一層、アスナは抱きしめてく。

アスナ「他の男なんてさ……あたしは、好きになれなかった。男なんて、ただの変態だと思ってた。だけど、アンタは違ってた。」

とアスナは脳内で雅紀と出会った時の事を思い出す。

アスナ「あんたってさ、他の奴らとは違って、変に純情で、優しく、強くて、自分の身よりも他人を守るうとして・・・その・・・意識しちゃうのよっ！／／／」

雅紀「意識って・・・。」

アスナ「おまけに言えば・・・アンタってその・・・可愛過ぎっ！！／／／」

雅紀「なぜっ!?!」

アスナ「えーと・・・えーと・・・／／／」

と今度はアスナがあたふたし始める。

アスラ「ああ、もう見てらんないわねえ。」

アスナ「ひゃっ!」

と突然、アスラと入れ替わった。

アスラ「ようは・・・アスナはアンタの全部が気に行ったのよ。まあ、あたしもそうだけど。」

と言った直後、アスナと入れ替わる。アスナは顔を真っ赤にする。

アスナ「は・・・ハア・・・／／／」

雅紀「・・・」

二人して黙り合う。

アスナ「ベ・・・別に、その、そんなですきなったんじゃ、ないんだからね？」

雅紀「現にアスラが言いましたが・・・」

アスナ「うっさいっ！／／／」

雅紀「・・・ホントにいいのかよ・・・俺なんかでさ・・・」

アスナ「・・・」

雅紀「俺は、旅人だ、この世界からいなくなるし、お前は这个世界を守らないといけない役目みたいなものがある・・・一緒にはいけない・・・だから俺の事は諦めてもい・・・っ！！」

アスナ「ん・・・」

言いかけたがアスナの唇でそれは塞がれた。やがて唇を離す。

雅紀「アスナ・・・」

アスナ「か、勘違いしないでよねっ！そんな弱気、聞きたくなかっただけだからねっ！！／／／」

とアスナは言い放つ。

アスナ「ファーストキスなんだから……大切に……してよね……? / / /」

とアスナはうるんだ瞳を見せながら言う。

雅紀「あ…… / / /」

アスナ「も……もう、帰るわっ!じゃあねっ!! / / /」

と言い、アスナは帰って行った。

雅紀「……」

一人、雅紀は公園にポツーンと立っていた。

アリス「ふう……少しだけど、元気になった。……雅紀？どうしたの？」

とアリスは聞く。

雅紀「い、いや……何でもない……。」

アリス「そう？じゃ、次の世界に行こうか。」

雅紀「ああ……。」

と雅紀はふと空を見る。

雅紀「（なのは達といい、アスナといい……ホントに、何で俺の事好きになったんだろう……？）」

と雅紀は思った。その時、アリス宅は消え、残ったのは、空地だけだった。

アスナ宅

アスラ『ホントに良かったの？あれで・・・？』

アスナ「良いじゃない・・・別に・・・。」

アスラ『まあ良いわ。アンタらしいしね。あ、もう学校行く時間よ。行った、行ったッ！』

アスナ「わかってるっ！」

と言って、アスナは家を後にし、走っている最中、ふと空を見た。

アスナ「また・・・アンタに会えたらいいな・・・。雅紀・・・／＼」

と言うと、再び走りだした・・・。

その時、ふと後ろに、謎のオーロラが、アスナに接近してきて・・・

第65話（後書き）

さてと、デステイニー編、終了っ！

雅紀「お疲れ。」

はいありがとうございます！

さてと、次回は・・・

雅紀「次の世界にたどり着いた俺達・・・そこは、今年のトリロ・・・」

言うなーーーーっ！！

代わりに俺が、なんやかんだで、雅紀達は、あの女の子と、早めの再会を果たす。

雅紀「おまえは・・・アス」

続きは次回っ！お楽しみにっ！！！！

第66話

アリス宅

アリス「痛っ！」

現在、アリスはベッドで寝ているが、体の傷がまだ完治しきれないため、眠れなかった。

雅紀「アリス……。大丈夫か？」

と、その場に雅紀が現れる。

アリス「雅紀。うん、大丈夫だよ。心配しない……。痛っ！」

とアリスは元気づけるように言うが、痛みが走るため、苦痛に満ちた顔になってしまう。

雅紀「アリス……。傷、全然治らないね。」

アリス「うん……。そんな事はないんだけど……。それに体だるいし……。」

雅紀「風邪？」

アリス「違う。何か・・・疲れている・・・感じ・・・。」

雅紀「貧血・・・？」

と雅紀は言う。

アリス「・・・そんなことは・・・。」

雅紀「ちゃんと、御飯食べてる？ぐっすり眠っている？」

アリス「うん・・・。」

雅紀「・・・なら何でかな・・・？」

アリス「こつこつも、回復が遅いとなると・・・方法は・・・。」

雅紀「方法は・・・？」

とすると、アリスは雅紀の顔を見つめる・・・。

アリス「ダメだ・・・。雅紀が嫌がる・・・。」

雅紀「教えて。俺、嫌いにならない・・・。ホントに。」

アリス「うん。」

とアリスは物欲しそうな瞳を見せる。

アリス「雅紀の血・・・吸わせて・・・。」

雅紀「・・・へ？」

アリス「血を吸えば・・・回復力、底上げすると思うから・・・。」

雅紀「・・・わかった。」

と雅紀はアリスの方に近づいて、首元を見せる。

雅紀「はい・・・。」

アリス「・・・ありがとう・・・／＼／」

と言うと、アリスは雅紀の首にかみついた。

カプツ

雅紀「っ！・・・（あれ？痛くない。）」

雅紀は痛みを感じなかった。

アリス「ん・・・チュウ・・・んん・・・／＼／」

アリスは夢中で雅紀の血を吸う。

雅紀「・・・くすぐりたい。」

やがて、アリスは離れる。そして・・・みるみると傷が消えていった。

アリス「ハア・・・雅紀の血・・・美味し過ぎるよぉ・・・。発情しちゃう・・・ノノノ」

とアリスはトロロンとした瞳をしながら言う。

雅紀「ハ・・・ハア・・・。」

と雅紀は言う。

アリス「うんっ！雅紀の血を飲んだから元気がでてきたっ！！さあ、次の世界にレッツゴー！」

雅紀「アリス・・・元気すぎじゃね・・・？」

と雅紀は啞然としていた。

数分後

雅紀「ん？次の世界かな？」

アリス「うん。外に出てみよう。」

雅紀「だな。」

と二人は外に出た……。すると……

フワアアン

雅紀の服が変わった。

雅紀「何これ……？」

アリス「あ、旅人が着る服だよね？ソレ。」

とアリスは言う。雅紀の今の服装は……門矢 士が着た旅人服を
紺いろに染めた感じの服だった。

雅紀「旅人服……しかもこれって門矢 士が着たのと同じだな・
……。だとすればこの世界は……」

と言いかけたその時っ！

ドゴオオオオンッ！

という爆音が響いた。

雅紀「なっ！？何だっ！！？」

アリス「爆音っ！？何かあったんだ・・・！」

雅紀「行こうっ！」

アリス「うんっ！」

と二人は爆音がした方向に向かった。

現場

？『ヒヤッハーツ！』

と何者かが暴れていた。

雅紀「ん？アイツは……電王に出てくる……ウルフイマジ
ンじゃないかっ！！」

とその場に来た雅紀が言った。そう、暴れている奴は電王にでてく
るイマジンだった。

雅紀「と言う事は……此処は「電王の世界」か……」

アリス「そうだね。」

と言っていると……

？「現れやがったなあッ！イマジンっ！！」

とイマジンに向かって吠える少年がいた。

ウルフ『ああ？何だ、てめえは？』

？「俺様か？ハンツ！てめえがよく知ってるやつだぜえ？わかん
ねえんなら……。」

と少年は何かベルトを取り出し、腰に巻きつけ、手に黒いパスを出
す。

くくく

少年がベルトの赤いボタンを押すと、音楽が鳴る。

雅紀「あれって……ていうか、あの男の子は……もしかして……」

と雅紀は知っている様子。

？「俺様がじっくり教えてやるぜっ！変身ッ！！」

『ソードフォーム』

と少年がパスをベルトにタッチさせると、音声が鳴り……少年の体をエネルギーが包み込み、姿を変えた。しかも大人の体系で……すると……辺りに赤いアーマーが出現し、ボディにくっつき頭に桃の形をしたのが走ってきて二つに割れ、それが仮面になる……。

？『俺、参上ッ！！』

とそのライダーは歌舞伎のようなポーズをとって言う。

雅紀「……電王か……。」

と雅紀は呟いた。そう、あのライダーはこの世界を守るライダー、電王だった。

電王『行くぜ、行くぜ、行くぜー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』

と電王は腰に着いてあるデングシャヤを組み立て剣の形にして、イマジンに突っ込んだ・・・。

ウルフ『チイツ！電王かつ！！』

電王『オラアッ！』

と電王はイマジンを斬って斬って、斬りまくる。

ウルフ『チツ！荒削りな奴だぜっ！』

電王『それが俺なんだよっ！！』

とさらに戦いが激しさを増す・・・と・・・

？『ウオラアアアッ！！』

電王『うおっ！？』

と第3者が乱入してきた。それは・・・イマジンだった・・・。

イマジン『何手こずってんだよっ！兄貴っ！』

ウルフ『うっせッ！こうなったら二人でやるぞっ！』

イマジン『はいでっせッ！』

と二体のイマジンは構える。

電王『チイツ！二体って反則だろっ！このやるオッ！！』

ウルフ『それが俺達何だよおッ!!』

と二体のイマジンは一斉に電王に襲い掛かる。

電王『チッ!コノヤロオッ!』

と電王は二体のイマジンに悪戦苦闘。

ウルフ『へへッ!二人で掛ければ負けないぜっ!』

と言っていると・・・

雅紀「そいつはどうかな・・・」

とその場を見ていた雅紀がアドベントドライバーを発射させて・・・
イマジン二体に当てた。

ウルフ『ああっ!?!何だあっ!!?!』

雅紀「二体一ってのは・・・ちよいと卑怯だから、俺も参加させてもらっ。」

ウルフ『ハンッ!てめえみたいなガキがっ!俺たちになんうはずがないだらうっ!!』

イマジン『そうだ、そうだっ!!』

とイマジン達は余裕で言う・・・。

電王『おいつ！危ねえぞっ！早く逃げろッ！！』

雅紀「あ、大丈夫だから、モモタロス。」

と雅紀の一言に電王・・・モモタロスは驚く。

モモタロス『ハアッ！？何でおれの名前を知ってたんだよっ！！！？』

雅紀「ま、そんなことは・・・兎も角・・・変身ッ！」

『カメンライド・デйкаオスっ！』

と雅紀はデйкаオスに変身・・・。

モモタロス『なっ！？てめえ・・・あの通りすがり野郎と、泥棒野郎と同じライダーかっ！？』

雅紀『その人たちとは会ったことないけど・・・。まあ、実際同じタイプだから・・・。』

と話し合う。

ウルフ『コリアッ！無視してんじゃねえっ！』

とウルフイマジンは攻撃してきた。

雅紀『ほらよっ！』

ドゴッ！

ウルフ『ぐあっ！』

とデイカオスはウルフィマジンの顔を殴って吹っ飛ばす。

雅紀『んぐと……狼は……喰らえば……腹の足しにはなる……かな？』

とデイカオスはカード出す。

『カメンライド・ガオウツ！』

とデイカオスは姿を変え、牙王になった。

モモタロス『なっ！あいつは……牙王っ！』

良太郎『あの子……牙王に変身できるのっ！？』

とモモタロスと……主人公「野上 良太郎」は驚愕。

雅紀『変身して早速だが……消える……。』

『ファイナルアタックライド・ガ・ガ・ガ・ガオウツ！』

雅紀『オラアアッ！！』

とD牙王はタイラントクラッシュを発動。

ウルフ『グアアアアッ！』

ウルフィマジンは一撃で爆死……

イマジン『あ、兄貴っ！あ・・・あ・・・悪魔あつ！！』

ともう一体は逃げてく。

雅紀『逃がさねえよ・・・。』

とD牙王は続けて切り裂いた。

イマジン『ギャアアアアッ！』

とイマジンは爆死。

雅紀『ふう・・・これで全部か』

モモタロス『ぐあああつ！！！！』

雅紀『！！』

D牙王は振り返ると・・・

イマジン2『クハハハッ！好きありだったぜっ！』

イマジンがいた。

モモタロス『く・・・くっそオッ・・・』

電王は・・・みていると、足を怪我したようだ。

雅紀『くそっ！！』

とD牙王は攻撃をしようとする・・・

？「待ちなさいっ！」

と言う声が聞こえる。

雅紀『・・・この声は・・・』

イマジン『ああ・・・？ゲオオオツ！？』

といきなり誰かがイマジンを攻撃した。そして・・・少女が現れた。

？「アンタは、このあたしがぶっ倒すわっ！！」

と言った・・・その少女を・・・見たD牙王は・・・ディカオスに戻る。

雅紀『おまえ・・・アスナ・・・か！？』

と恐る恐る聞く。

アスナ「ん？・・・て、雅紀っ！？何でアンタが此処にっ！？旅に出たんじゃっ！！？」

その少女はアスナだった。

雅紀『何で・・・お前が・・・電王の世界にいた~~~~~っ！！！！？』

と言つ声が辺りに響いた・・・。

第66話（後書き）

さてと、今回は電王の世界編の始まりだっ！

雅紀「それにしても、なぜアスナがつ！？」

理由は次回でな……。さてと……。次回は……。イマジンを倒した雅紀達は……。デンライナーに招かれる。そして……。良太郎が怪我を……
してしまつて電王になれない……。どうする！

雅紀「お……。俺が……。電王につ！？」

続きは次回ツ！お楽しみにっ！！

第67話

イマジンの不意打ちを食らった電王を助けたのは・・・なんとデステイニーの世界にいるはずのアスナだったっ！

雅紀『何でお前が此処に？』

とディカオスは唾然としていると

イマジン『この女っ！調子に乗りやがってっ！！！！』

イマジンは激怒していた。

アスナ「今は・・・あの怪人を倒すのが先決ね。」

とアスナはデスレイクルを出現させ、ポーズをとる。

アスナ「変身ッ！」

とアスナはデステイニーに変身した。

モモタロス『なっ！？女がライダーにつ！！！？』

良太郎『もう何でもありなんだね……。』

とモモタロスと良太郎は言う。

アスナ『ハアアッ!』

とデステイニーは接近する。

イマジン『ガアッ!』

とイマジンも接近し、

ドガッ!ドゴッ!

拳のぶつかり合いをする。

イマジン『チイッ!ならこれだあッ!』

とイマジンはブーメランを出し、デステイニーに向かって投げる。

ビュッ!

とデステイニーは避ける。

アスナ『そう簡単に当てられると思ったら大間違いよっ!』

イマジン『思ってたないっ!これから勝負だっ!』

とイマジンは言い放つと、ブーメランが軌道を変えてデステイニーに近づく。

アスナ『わっ！よっ！ほっ！』

とデステイニーは避け続ける。

イマジン『フハハハッ！逃げてるだけじゃ意味はないぜえッ！』

アスナ『確かに・・・アンタの言う通りね。じゃ、一気に行かせてもらっつー！！』

とデステイニーは力を込める。それに答えるかのようにデスレイクルの真ん中にある結晶が青から紅蓮の赤に染まる。

アスナ『フォーム・・・ジャステイスツ！！』

とデステイニーはジャステイスフォームにチェンジした。

イマジン『姿を変えたところで、このブーメランの動きが読めるものかっ！』

とイマジンは余裕を崩さない。

アスナ『・・・』

一方のデステイニーはその場から動かず、精神を集中している。ブーメランは真っ直ぐデステイニーに向かう……。そして……

アスナ『そこっ！！』

とデステイニーはブーメランを紙一重で交わし、手に持ったジャス

ティスカリバーで・・・

ザンツ！

ブーメランを真っ二つに切った。

イマジン『な・・・何だとオツ!!?』

アスナ『ハアアアッ!』

イマジンが驚いているすきにデステイニーは距離を詰めて・・・

アスナ『カリバースマツシュツ!!』

とデステイニーは必殺技でイマジンを切り裂いた。

イマジン『ガアアアアアッ!!!!』

とイマジンは爆死した。

アスナ『ふう・・・』

とデステイニーは元のアスナに戻る。

雅紀「アスナ・・・。」

とすっかり空気になった雅紀が近付く。

アスナ「雅紀・・・アンタは・・・旅に出たんじゃ・・・。」

雅紀「そうだけど・・・此処は・・・アスナが知っている世界じゃないんだ・・・」

アスナ「えっ!?!」

雅紀「此処は、電王の世界。アスナのいるデスティニーの世界じゃない。全く、別の世界だ。」

アスナ「じゃあ・・・あたし・・・どうやって・・・」

雅紀「一先ず、俺達の家に来て、アスナを元の世界に送る。」

と話し合っていると・・・

良太郎「あの・・・話している所、悪いんだけど・・・ちょっと、手を貸してくれないかな・・・?」

二人は振り向くとそこにいるのは、足をけがしてしまったせいで動きが鈍くなっている良太郎の姿があった。

雅紀「ごめんなさい。今、手を貸します。」

と雅紀は言つて、良太郎に肩車をして、立たせる。

良太郎「君は・・・土さんや大樹さんと同じ、別の世界から・・・?」

雅紀「はい・・・まあ、そんなところです。」

良太郎「詳しい事は、デンライナーの中で・・・。」

と良太郎が呟くと・・・

）
）

と辺りに電王のベルトから鳴った音楽と同じ音楽が響く・・・。そして・・・

プアアアアン・・・

と空から時の中を通して、デンライナーが来た。

雅紀「うオオオツ！生のデンライナーだあああああつつ！！！！！！」

と雅紀はオタクの本能をバリバリ発揮させる。

アスナ「うわっ！？何、あの電車っ！！！？」

とアスナもまた驚く。

アリス「デンライナーよアスナちゃん。」

アスナ「アリスっ！？」

と空気になっていたアリスを見て驚く。

良太郎「あはは・・・。じゃあ、乗って。」

と四人はデンライナーに乗り、デンライナーは発進し、時の中に入って行った。

デンライナー内部

四人はデンライナーの中に入り、まず見たものは……

モモタロス「おおっ！良太郎、大丈夫だったかつ！？」

と良太郎と同じく足にけがをしていた。桃太郎に出てくる赤鬼をイメージして実体化したイメージ、モモタロスが駆け寄ってきた。

良太郎「うん、大丈夫。」

？「全く、先輩はいつも無鉄砲だから、イメージに不意打ちを食らわされちゃうんだよ？」

と今度は浦島太郎に出てくるウミガメをイメージして実体化したイメージ、「ウラタロス」が言ってきた。

モモタロス「んだよっ！亀っ！」

とモモタロスは反抗。

？「うるさいわっ！寝ていられへんやろっ！」

と今度現れたのは金太郎に出てくる熊をイメージして実体化したイメージ、「キンタロス」が現れた。

モモタロス「うっせんだよっ！熊っ！何時も寝てるだけで何もしてねえくせによおッ！」

キンタロス「なんやとっ！俺やって、ちょっとは皆のためにやっつるわっ！！」

とモモタロスとキンタロスは喧嘩し始めた。

？「わーい、喧嘩だ、喧嘩だ」

と遠くでシャボン玉をとばしながら見ていたのは、竜をイメージして実体化したイメージ、「リュタロス」だった。

良太郎「ふ、二人とも、落ち着いてっ！」

と良太郎は止めに入ると・・・

？「いい加減にしなさいっ！アンタ達っ！」

と少女が現れ・・・

ドゴツ！バキッ！

モモタロス「ぐおっ！？」

キンタロス「むがあっ！？」

二人にパンチを食らわして喧嘩を止めた。

？「良太郎が傷ついているのに、喧嘩しても仕方ないでしょっ！それに、お客も来てるのにつ！！！」

と怒鳴る・・・この少女はデンライナーに住んでいる、ハナ。見た目は少女だが、実は大人なのだ。ある原因でこの姿になって今は子供になっている。

因みに良太郎も実際は大人だが、ハナと同じく子供になってしまっているのだ。

モモタロス「くっそオツ！このコハナくそ女っ！痛てえだろっ！！！」

ハナ「あ、うちの馬鹿達が迷惑かけました。どうぞこっちに座ってください。」

とモモタロスの怒鳴りを華麗にスルーしたハナは雅紀達を迎える。

雅紀「うわゝ。本当にデンライナーに乗ってんだな、俺はっ！」

と雅紀は外の景色を眺めながら言う。

アリス「雅紀の世界は仮面ライダーは存在してなかったからね……」

アスナ「てゆうか、この電車、どこ走ってんのよ？」

とアリスとアスナは言う。と……

プシュー

と言う音とともに向かいのドアが開く。そこから出てきたのは……ステッキを持った物腰のよさそうなおじさんと露出度が高い服を着た女の人だった。

？「このたび、デンライナーにご搭乗、ありがとございませう。私、客室乗務員のナオミです」

と女の人……ナオミが言った。

？「ナオミくん、いつもの、お願いします。」

と言ったのは、このデンライナーのオーナーである人。年齢、本名、その他もろもろが不明な人である。

ナオミ「はい」

とナオミは返事をする。

オーナー「さてと・・・君たちは、あのディケイドの仲間ですか？」

とオーナーが聞いてきた。

雅紀「あ、いえ。俺達はディケイド・・・土さん達とは、まだ一度もお会いしたことがなくて。」

オーナー「では三人で旅ですか。若いのに頑張りますね。」

雅紀「まあ・・・はい。て、そんなことより、良太郎さん、大丈夫で
すか？」

と雅紀は良太郎に聞く。

良太郎「あ、うん。大丈夫だよ。まだ少し痛むけど・・・。」

と良太郎は返事をしたが・・・足は包帯でぐるぐる巻きにされて
いる。

オーナー「うーん・・・。良太郎君が、そんな状態では、電王にな
れませんか・・・。」

とオーナーはナオミが持ってきたチャーハンを食べながら言う。

オーナー「幸太郎君に頼むところですが・・・彼も今は別ルート
に探索していますからね・・・。」

とオーナーはふと、雅紀を見る。

オーナー「君、名前は……？」

雅紀「あ、木利野 雅紀です。」

オーナー「では、雅紀君。君がしばらくの間……電王になってくれませんか？」

とオーナーは言う……。しばらく沈黙が続いた……。そして、

雅紀「え……え……え……え……！？お、俺が、電王につ……？」

オーナー「はい、そうです。」

雅紀「いやいや、何で俺なんですか！？俺よりも、他のの方が良い気が……と思いますが!？」

オーナー「以前にデイケイドがモモタロス君達に憑依された時、彼は意識を保っていましたからね……。別世界から来た君も、もしかしたら……と思ひましてね。」

雅紀「いえ……俺はそんな意識保ってられる自信がないですし……。」

オーナー「では……モモタロス君。」

とオーナーはモモタロスを呼ぶ。

モモタロス「ん？何だよ、おっさん。」

オーナー「一回、彼に憑依してみてください。」

モモタロス「ああ？何でだよ？」

オーナー「後でプリンをあげますから・・・」

モモタロス「わかったぜっ！！」

雅紀「うおっ！？」

とモモタロスは雅紀に憑依した。

雅紀「俺・・・参上っ！」

と雅紀・・・モモタロスはお決まりの決めポーズをとる。髪が逆立って赤いメッシュが付き、瞳も赤色に変色していた。

雅紀『え？俺・・・どうなってんだ・・・？』

M雅紀「お？ちゃんと意識が保ってるな。あ、もういいだろう、おっさんっ！」

オーナー「はい、良いです。」

とオーナーの返事を聞き、モモタロスは雅紀から出る。

雅紀「うおお・・・まさか、モモタロスに憑依されるとは・・・。」

オーナー「これで、はつきりしましたね。」

雅紀「俺なんかでよろしいのでしょうか？」

オーナー「はい。」

雅紀「では・・・その、交換条件があります。」

オーナー「何でしょうか？」

とオーナーが聞くと・・・

雅紀「皆さんのサインが欲しいですっ！」

と雅紀はどこから出したかわからないが、紙とペンを出して言った。それで周囲が静まり返る。

オーナー「サイン・・・ですか？」

雅紀「はいっ！」

モモタロス「それなのか？交換条件は・・・？」

雅紀「うんっ！俺、仮面ライダー大好きだしっ！特に電王なんて、子供には大人気なんだっ！ぜひ、サインくださいっ！！」

と雅紀はオタクの本能をバリバリ発揮させて言う。

キンタロス「俺等のサインか・・・。ええでっ！」

ウラタロス「ふふん。嫌いじゃないね。そっいう性格。」

リュウタロス「よし、書きちゃっぞ〜」

と許可を得て、順番に書いてもらった。

雅紀「うおおおっ！宝物だ〜〜〜っ！！」

と雅紀は感動した。

アスナ「アイツ・・・あんな性格だっけ？」

アリス「雅紀は仮面ライダーが本当に好きだね・・・。そんな雅紀も大好き／＼／」

アスラ『あたしも〜っ！』

とアスナとアリス、そしてアスラが言った。

オーナー「では・・・よろしくお願いしますよ。」

雅紀「はいっ！！」

とこうして雅紀は電王代理になった。

第67話（後書き）

さてと、長話だった。

雅紀「アスナがどうやってこの世界に来たのか・・・て理由がないぞ？」

そこは次回です。さてと・・・次回の話は・・・

雅紀「電王としての初バトル。だが、そんな時にイメージがアリスの体をのっとなってしまったっ!？」

続きは次回、お楽しみにっ!!

第68話

雅紀が電王代理になってから、数日後

ドゴオオオツ!!

とある場所で、爆発が起き・・・人々は悲鳴を上げて逃げていく・・・。

イマジン『ヒャー！ハハハハハハハッ！泣け、叫べっ！人間どもオツ！!!』

爆発の原因であるイマ진은・・・笑い狂った。そんな時・・・

？「こんな破壊が・・・君の契約者の望みかい？」

という声が聞こえ、イマ진은振り向く。そこにいたのは・・・

U雅紀「随分と、荒い契約者なんだねえ。」

ウラタロスに憑依された雅紀がいた。髪を右に降ろし一部には蒼のメッシュがついて、メガネをかけ瞳も蒼くなっている。

イメージ「ガキがつ！何の用だつ！！」

U雅紀「言葉の裏には針千本。おまえを釣りに来たってわけ。」

と余裕の表情のU雅紀は電王のベルトとパスを取り出し、腰に巻きつけ、蒼いボタンを押す。

）
）
）

電王ベルトの中心が蒼くなり、海のような音楽が奏でられる。

U雅紀「変身。」

『ロッドフォーム』

とU雅紀は電王「プラットフォーム」となり瞬間、周りにアーマーが出現し、形を変え、蒼のボディを露出し、電王の体に装着される。そして、顔に亀に似た電仮面がでてきて、形を変え、仮面になる。

U雅紀『おまえ・・・僕に、釣られてみる？』

コレが、電王「ロッドフォーム」だ。

イメージ『電王かつ！』

ウラタロス『ふふん。その通りだよ。』

雅紀『まさか電王になれるなんて感激だっ!』

とウラタロスと雅紀は言う。

イマジン『俺達の仲間のくせに、電王の味方につくとはどういっ
とだっ!?!?』

ウラタロス『僕は君らなんかより、良太郎達といた方が楽しいと思
ってね。中々、楽しいよ。』

雅紀『ウラタロス、ドーンとやろっつ!』

ウラタロス『ドーンとってのは、僕の主義じゃないんでね。まあ、
行かせてもらおうかなッ!』

と電王はデンガッシャーを槍の形に連結させて、イマジンに突きを
入れる。

イマジン『コイツっ!?!』

とイマジンは突きを避けたり、武器で受け止める。

ウラタロス『全く。すばしっこいし、ちょっと嫌になってくるね。』

雅紀『ウラタロス。』

ウラタロス『ん?何?』

雅紀『ここは、ウラタロスのお得意のアレでやろつ。』

ウラタロス『アレ？ああ、なるほどね。君も案外頭いいね。』

雅紀『ウラタロスの戦法はビデオで何度も見ているからね。』

と話し合う。

イマジン『ボケっとしていると、あぶねえぞっ！』

とイマジンが突っ込んでいくと・・・

ウラタロス『ん？君の後ろに変な生き物があるんだけど？』

と電王は唐突にそう言う。

イマジン『何？』

ウラタロス『ウ・ソ、だよっ！』

イマジン『ぐあっ！！！！』

イマジンが後ろを振り向いた直後に電王は突きをかました。

イマジン『てめえ、卑怯だぞっ！！！！』

ウラタロス『よく言われるよ。』

雅紀『ウラタロスは電王メンバー唯一、頭がいいほうだからね。騙し打ちも上手だからね。』

ウラタロス『それほどでもないよ。さて、そろそろ、三枚に下ろさうかな。』

と電王はパスを出し、ベルトに触れさせる。

『フルチャージ』

とベルトからデンガツシャーにエネルギーがたまる。そして・・・

ウラタロス『テエエッ!』

力強くイマジンに投げ、イマジンの体を貫く。

イマジン『グガッ!』

イマジンを捕らえるように亀の甲羅に似たものが出来上がる。そして、電王は高くジャンプし・・・

ウラタロス『テエエエエエイツ!』

とデンライダーキックをかました。

イマジン『ガアアアアアアッ!』

とイマジンは断末魔を上げながら爆死した。

ウラタロス『ふう〜。一著上がりってとこかな?』

雅紀『お疲れ、ウラタロス。にしても生の戦闘シーンが見れて嬉し

い。
』

ウラタロス『フ・・・君はホントにオタクだね。ま、嫌いじゃないけど。』

と言いながら、ウラタロスはデンライナーに戻って行った。

雅紀「ふう・・・俺も、家に帰ろう。」

と雅紀はアリス宅に帰って行った。

アリス宅

雅紀「ただいま。」

と雅紀は帰ってきた。

アスナ「あ、雅紀。お帰りー。」

と最初に出迎えてくれたのは、アリスではなくアスナだった。

雅紀「ただいま。あれ？アリスは？」

アスナ「買い物だって、因みにあたしはお留守番。ホント、アリスって料理や家事全般何でもこなすわね。」

とアスナは言った。

雅紀「まあな・・・アリスはホントに凄いよな・・・。」

と雅紀もまた言った。

アスナ「それにしても・・・何時になったらあたしは戻れるのかなあ・・・。」

雅紀「この電王の世界を平和にしないと・・・。まずそれが先だ。」

アスナ「うん・・・。」

雅紀「（にしても・・・）」

と雅紀は思い返す。

電王メンバーとの初対面の日・・・

雅紀「そういえば・・・アスナはどうやってこの世界に？」

と雅紀は唐突に言った。

アスナ「ん？あたしも何が何だか分かんないのよ……。気が付いたらさっきの所にいたし……。」

雅紀「……あのさ……。何か……。変な空間つか……。辺りが灰色に包まれた感じがしなかった？」

と雅紀は聞く。

アスナ「あっ！そう言えば……。そんな感じがする！一瞬だったけど。」

とアスナは言った。

雅紀「（やつぱりユウスさんと同じだな……。）。と言う事は……。今回の件も鳴滝か……。？いや……。いつも行動してたキバーラか……。？わからないな……。）」

と雅紀は考えた。

アスナ「（この世界が平和になったら……。あたしは元の世界に戻れる……。けど、あいつとは……。また、会えなくなる。）」

アスラ「じゃあ、頼んでみなよ？雅紀に、あたしも一緒に行く……。てね？」

アスナ「（な、何言ってるのよっ！？そんな……。雅紀の足手まといだ……。）」

アスラ「全く……。アンタはホント、雅紀の事考えると強気なところがなくなるわねえ……。」

アスナ「(うっさいっ!)」

とアスナは心の中にいるアスラと話し合っていた。

一方、アリスは……

アリス「ふっふっふん、ふっふっふん」

と上機嫌で歩いていた。

アリス「今日はお肉が安かったし……今日は雅紀のためにハンバーグを作ってあげようかな」

と上機嫌だったのはそういう理由だった。アリスはホントに雅紀ラブだな……。

アリス「ありがとね 言われなくても、私は雅紀ラブだもんっ！あの時はなのはちゃん達に雅紀と一緒にいても良いとか、何とか言っちゃったけど、負けないもんっ！」

とアリスは気合満タンで言った。

アリス「さてと、帰って食事の支度しなきゃ。雅紀の喜ぶ姿が見たいもん」

と言つて、アリスは走った。その時……

ヒューン……

アリスの背後から光の玉が飛んでくる……。そして……

ズドンッ！

アリス「ひゃっ！」

アリスの体に入っていった。

アリスは体の動きを止め、停止していた。そして、次の瞬間……

アリス「ふう〜、意外と簡単に憑依できわね。まあ良いか。この子の体を使って……」

とアリスは……いや……アリスの体に憑依した誰かが話した。

？「おいっ！そんなこといいから・・・速くしろっ！」

と近くの男性が言った。

アリス？「なーによ、「ゴースト」？良いじゃないっ！初めて使う体なのにつ！」

ゴースト「うるせえっ！やるぞっ！」

アリス？「わかったわよ・・・偉大なる・・・「キメラ」様のためにつ！」

とゴーストと呼ばれる男性と、アリスに憑依した何者かは、腰にベルトを巻きつけ・・・

アリス？・ゴースト「「変身ッ！」」

『スカルフォーム』

『ハイジャックフォーム』

と体中が傷だらけでボロボロになった装甲をまとい、一方は骸骨の飾りをつけて、もう一方は左手に籠手を着けたライダーになった。この二体は「さらば仮面ライダー電王」に出てきたライダー「幽汽」だ。

ゴースト『さあ宴の時間だぜっ！』

アリス？『血祭りよっ！』

二体のライダーは咆哮しながら辺りを無差別に破壊していった。

第68話（後書き）

さてと、なんとアリスがイマジンに乗っ取られたッ！まずいぞっ！

雅紀「アリスっ！！」

こうしてはいられんっ！次回は・・・幽汽となってしまうたアリスを止めるため、雅紀はディカオスに・・・だが・・・どうしても・・・幽汽とは闘えず悪戦苦闘。

雅紀「俺は・・・アリスとは・・・戦いたくないっ！！」

次回をお楽しみにっ！

第69話

アリス宅

雅紀「アリス、全然帰ってこないなあ……。」

アスナ「そうよねえ。一体どうしたんだろ？」

と話していると……

モモタロス『雅紀っ！イマジンだっ！それも二体ッ！』

とモモタロスが話してきた。

雅紀「二体？」

モモタロス『ああ。しかも何かヤバい感じだ……。』

雅紀「わかった。」

と雅紀は立ち上がる。

アスナ「イマジン？」

雅紀「ああ。しかも二体だそうだ。」

アスナ「じゃ、あたしも行くわ。一人じゃ勝てないでしょ。」

雅紀「わかった。」

と二人は家を出て現場に向かった。

現場

雅紀「と、此処だなっ！」

アスナ「うっわ、建物が崩壊してるっ！」

雅紀とアスナは現場に来て辺りを見回す。すると・・・

？「ああ？何だ、まだガキが二人いるじゃねえか・・・。」

？「あら、可愛い子。」

雅紀・アスナ「「！！！」」

と二人は振り返る・・・。そこにいたのは・・・

雅紀「仮面ライダー・・・幽汽。」

仮面ライダー幽汽「スカルフォーム」と「ハイジャックフォーム」
だった。

アスナ「何、あいつら・・・？味方・・・じゃなさそうね。」

雅紀「その通りだな・・・。」

と雅紀とアスナは身構える。

ゴースト「おいおい、俺達と闘おうってのか？」

？「無駄よ、無駄。」

雅紀「無駄じゃないさ……。」

アスナ「あたしたちだってね……。」

と雅紀はディカオスドライバーを出し、アスナはデスレイクルを出現させる。

雅紀・アスナ「変身ッ！」

雅紀はディカオスに、アスナはデステイニーに変身した。

ゴースト「ほお……お前らもライダーだったのか……。なら……。」

？「倒しがいがありそうね……。」

と対する幽汽は身構える。

雅紀「（スカルフォームの方は……もしかして、ゴーストイマジンかもしれない。だが、ハイジャックフォームに変身している奴は誰だ？声からして女の人のようだが……。）」

とディカオスは警戒する。

ゴースト「オラアッ！！！」

アスナ「っ！」

幽汽SFはデステイニーに襲い掛かった。

雅紀『アスナっ！』

？『アンタの相手は私よ、ぼっやっ！』

雅紀『っ！』

ディカオスには幽汽HFが襲い掛かる。

？『ハアアッ！』

雅紀『くっ！』

と両者のぶつかり合いが続く。

？『中々良い剣の使い方ね。ぼっや。』

雅紀『ぼっやって言われるのは・・・嫌なんだがなッ！』

とディカオスはアドベントドライバーを銃に変形させて幽汽HFに向けて撃つ。

バンッバンッバンッ！

？『ぐっ！』

三発のうち、一発はベルトに直撃し、ベルトが外れた。

パアアアアン・・・

そして、変身が解除され、その姿が明らかとなる。

雅紀『っ!』

それにはディカオスは驚愕した。

雅紀『あ……アリ……ス……?』

雅紀の目の前にいたのは……アリスだった。

アリス「く……変身が解けてしまったか……。」

雅紀『何で……?』

アリス「ん?ぼうや……。この子の知り合い?」

雅紀『この子……まさか……イマジンかっ!』

イマジンアリス「ご名答。私はイマジンよ。変身するのに……」
の子の体を使ったのよ。」

雅紀『アリスを返せっ!』

とディカオスは怒鳴る。

イマジンアリス「いや〜よ。この子の体、気にいったもん。そ・れ・
に、アンタの倒し方、わかっちゃった。」

『ハイジャックフォーム』

アリス『ハアアッ!』

雅紀『くっ!』

再び剣がぶつかり合う。そして、

雅紀『ハッ!』

ディカオスは幽汽HFを切る……しかし、

イマジンアリス「この子を切って良いのお?」

と変身を解除してアリスの姿を見せる。

雅紀『っ!』

寸前でディカオスは止まる。

イマジンアリス「隙ありよ。」

とイマジンは武器を出して、切り裂いた。

雅紀『ガアアアッ!』

とディカオスは吹っ飛ぶ。

イマジンアリス「キャハハハっ! やっぱりこの戦法の方が坊やには苦痛ね。」

雅紀『く……(アリスの姿でいられたら……攻撃できないし……

・変身しても、アリスの体にダメージが・・・」

アリス「ボくっとしている暇があるのかいっ！」

とイメージンはさらに斬る。

雅紀「ガアッ！」

一方のデステイニーと幽汽SFは・・・

ゴースト「オラアアッ！」

アスナ「ハアアッ！」

ジャステイスフォームとなって幽汽SFと対決していた。

ゴースト「オラオラッ！パワーが足りてないぜっ！！！」

アスナ「うっさいわよっ！このっ！」

とデステイニーは押し返す。

ゴースト『ハンツ！少しは骨がありそうだな、女っ！』

アスナ『アンタとそう長く相手してらんないのよっ！』

と再び剣のぶつかり合いが始まる。

戻ってディカオスの方は・・・

雅紀『くぅ・・・』

所々、火花が走っているディカオスがいた。

イマジンアリス「ハハツ！ボロボロだっ！弱いねえ〜。」

雅紀『く・・・アリスっ！聞こえるかっ！イマジンなんかには操られるなッ！！』

とディカオスは叫ぶ。

「 イマジンアリス「無駄無駄。この子は今、私が抑えているんだから。」

雅紀『アリスっ！』

「 イマジンアリス「もう、その口、塞ごうかな？」

とイマジンは容赦なく切り裂く。

雅紀『ガアッ！』

「 イマジンアリス「フッフ、良い悲鳴……。さあ、死・ん・で」

とイマジンは剣にエネルギーを注ぎ、一気に振りおろす。

ザンツ！！

雅紀『があああああっ！！』

とディカオスは変身が解けて雅紀に戻る。

雅紀「ぐ……ぐう……」

「 イマジンアリス「あゝらら……まだ生きてたんだ。でも、もう一撃喰らえば死ぬし……」

とイマジンは呟いた。

雅紀「アリスっ！戻ってこいっ！」

イマジンアリス「だ・か・ら・無理だつて。」

とイマジンは雅紀の首を掴み、持ち上げる。

雅紀「か・は・は・は・」

イマジンアリス「もう、楽に、あの世に行っちゃつて。」

とイマジンは剣を構える。狙いは、雅紀の心臓。

雅紀「あ・アリス・イマジンなんか支配されなくてくれ・
・。俺は・いつものアリスが好きなんだ・。だから・
戻ってきてくれー！ーっ！！」

イマジンアリス「だから・諦めな・っ！」

とイマジンに、アリスの体に異変が起きる。

アリス「雅紀・」

イマジンアリス「なッ!?意識が戻つて・。ぐあっ!!」

とアリスからイマジンが飛び出した。

アリス「雅紀・」

雅紀「アリス・戻ってきてくれたんだな・。」

アリス「うん。だって・聞こえたもん。雅紀の声が・。」

とアリスは雅紀を抱きしめる。それに答え、雅紀もアリスを抱きしめる。

アリス「雅紀、此処は私がやるから……休んでて……。」

雅紀「アリス？」

アリス「私は……奴を倒すっ！」

とアリスはイマジンの方に顔を向ける。

イマジン「なぜだっ！支配したのにつ！」

アリス「よくも……よくも、雅紀を傷つけてくれたわね……許さないよ……。」

とアリスは見ただけで殺せそうな強烈な殺気を放つ。

イマジン「ヒッ！あ……アンタ、何者っ！」

とイマジンは怯えながら聞く。

アリス「私は……。」

とアリスはディタークドライバーにカードを入れる。

『カメンライド』

アリス「雅紀の……大好きな雅紀の恋人よっ！！変身ッ！！！！！！」

『ディダークッ！』

とアリスはディダークに変身した。

アリス『覚悟はいい・・・？血祭りにしてあげるから・・・。』

と怒りにより、悪魔と化した、ディダークの戦いが始まった。

第69話（後書き）

さて・・・アリスが戻ってきたッ！

雅紀「良かった・・・」

ああ。さてと次回は・・・ディダークの怒りにふれたイマジン、ディダークの強さに恐怖する・・・。

アリス「雅紀があなたから受けた痛みは・・・これほどじゃないよ・・・。」

続きは次回っ！お楽しみにっ！

第70話

アリス『……………』

デイダークに変身したアリスは無言のままイマジンに向かって行く。

イマジン『チィッ！姿が変わったってっ！殺気を放ったってっ！！』

とイマジンはデイダークに向かって光弾を発射した。

アリス『ハッ！』

とデイダークはそれをデイダークドライバーで切り裂く。

アリス『フッ！』

そして一気に間合いを詰めてイマジンを切り裂いた。

イマジン『キャアッ！』

とイマジンは悲鳴を上げて吹っ飛ばす。

アリス『……………』

デイダークは再びイマジンに向かって歩き出す。

イマジン『く……………来るなっ！！』

とイマジンは光弾を何発も撃った。

アリス『……………』

だが、デイダークはそれを無言で切り裂きながら徐々にイマジンに近づいて行った。

イマジン『ヒ……ヒイイイツ!!』

アリス『……………』

デイダークは目の前で怯えるイマジンを見ながら無言でデイダークドライバーを構え……そして……

ザンツ!!

切り裂いた。

イマジン『アアアアアッ!!!!!!』

イマジンは悲鳴を上げる。

アリス『フンツ!!』

とデイダークは痛みで転げまわるイマジンを蹴る。

イマジン『ガッ!!』

イマジンは吹っ飛び壁に激突。

イマジン『この……………こうなったらあ……………!!』

イマジンはそう呟くと、背中に翼を出現させて、空を飛び、逃げようとした……だが……

『アタックライド・ウイングス！』

と言う音声が届いた瞬間……

アリス『逃がすと思って……？』

目の前に肩の翼を広げたデイダークがいた。

イマジン『なっ！！？』

イマジンは驚くしかなかった。そして、次の瞬間っ！

ザシュツ！！

デイダークの攻撃がイマジンの翼に直撃した。

イマジン『キャアアアアアッ！！』

イマジンは悲鳴を上げながら地面に衝突した。その時、クレーターができた。

アリス『……』

デイダークは無言のままイマジンの近くに降り、近づくと……

アリス『この翼は……邪魔ね。』

デイダークはそう呟くと同時に・・・

ザグシュッ！

イメージンの翼の片方を切り取った。イメージンの翼があったところから鮮血がほとばしる。

イメージン『アアアアアアアッ！！！！』

とイメージンは何度目かの悲鳴を上げながら、翼のあったところを触る。

アリス『こつちのも・・・。』

ザグウッ！

とデイダークは容赦なく、もう片方の翼も切り取った。さらに鮮血がほとばしった。

イメージン『アアアアアアッ！！！！！！！！！！』

とイメージンは悲鳴を上げながら転げまわる。

アリス『痛い？でも・・・雅紀が貴方から受けた痛みは・・・これほどじゃないよ・・・？』

とデイダークはドスのきいた声でそう言った。

イメージン『ぐ・・・ぐう・・・この・・・悪魔アッ！！！！』

アリス『光栄ね。そう言われずとも．．．私は悪魔だよ。貴方が私を怒らせたのも．．．悪いしね。』

とデイダークは呟いた．．．

イマジン『ち、ちつきしょう．．．！殺すっ！アンタを殺してやるうっ！！』

とイマジンはデイダークから離れる。

イマジン『おおおっ！！！！』

イマジンは上空に巨大な光弾を作り上げる。

イマジン『死ねえええっ！！！！』

とイマジンは光弾を発射した。光弾は地面を削りながら、デイダークに迫る。

アリス『死ぬのは．．．貴方の方よ．．．』

『アタックライド・スラッシュュッ！』

アリス『ただし．．．傷めつけながら．．．苦しめながら．．．ね。』

デイダークはスラッシュュを発動し、デイダークドライバーの刃先にエネルギーを込めた。

アリス『ハアッ！』

掛け声とともに、ディークドライバーを振るう。

ズバアアアッ！

光弾は真っ二つに切られ、爆発する。

イマジン『なっ！！！？』

これにはイマジンは驚愕。

アリス『驚いている暇があつて？』

イマジン『！！』

イマジンが驚愕しているすきに、ディークは一瞬でイマジンの目の前に来た……。そして……

ズバッ！

何かを切り裂いた。

イマジン『……？何を斬つたんだ？外したのか……っ！！？』

イマジンは右腕を見てみると……右腕が肩のあたりまでなくなっていた。気が付いた時には、右肩から、勢いよく鮮血が飛ぶ……。

イマジン『アアアアアアアッ！！！！！』

アリス『貴方の腕は……ここ。』

イマジン『!』

イマジンを見ると、デイダークの持っている物は、自分の右腕だった。

イマジン『か……返せつ!!!!』

とイマジンは訴える。

アリス『フッフ……嫌だよ。』

と言いデイダークはイマジンの右腕を上投げ……そして……

ズバズバズバズバツ!!

デイダークドライバーで切り裂き、形が残らないほどに粉々に切り裂いた。残ったのは……肉片だけだった。

アリス『どうせ、砂の塊なんだから、契約者に頼んで、修復してもらえばいいじゃない?』

イマジン『あ……ああ……』

アリス『いないの?はぐれイマジンなの?じゃあ、仕方がないね。消えちゃうね。』

とデイダークは言い放つ。

イマジン『い……イヤアアアアアアアアアッ！！！！』

とイマジンは全速力で逃げる……が……

アリス『だから、逃がすと思って？』

一瞬でデイダークに回り込まれ……

ザグシュッ！

左腕を斬り落とされた。

イマジン『ヒギヤアアアアアアアッ！！！！！！』

とイマジンは絶望し、悲鳴を上げた。

アリス『ウッフ……。良い悲鳴』

デイダークは嬉しそうに言う。

アリス『もっと、もっと苦しませて、悲鳴を出させてあげ……る』

とデイダークは悪魔の本性を出しながら、デイダークドライバーを構える。

イマジン『あ……あ……あああっ！』

イマジンは深く後悔した。悪魔の逆鱗に触れてしまったことを……。

アリス『さあ……もつと、もつと苦しみなさい。』

とディダークは言い放つ。すると……

雅紀「アリスっ！もうやめろっ！！」

と言う声が聞こえた……。雅紀だった。

アリス『雅紀？何で？何でやめなきゃいけないの？この子は雅紀を傷つけた、最低の……ゴミ以下の奴なんだよ？』

雅紀「だけど、やり過ぎだっ！アリスは……そんな事をするような子じゃないはずだぞっ！？」

アリス『……そう、いつもの私は……ね。だけど……今は違うよ。私は自分の怒りを抑えられないほど……この子の事が許せないのよっ！！』

雅紀「アリス。」

アリス『ごめんね……。でも、私は……この子を殺すわ。』

雅紀「……なら……。最後は、楽に逝かせてやって。」

アリス『……相変わらず、優しいね。雅紀は……。私と大違い。』

雅紀「……違う。アリスだって、優しい。」

アリス『……ありがとうね。』

「アリス「雅紀の頼みだもん。私も、もう十分仕返しをしたしね・・・」

雅紀「・・・・・・・・・・」

雅紀は急に険しい表情をした。

アリス「雅紀？」

雅紀「・・・なあ、アリス。さっきのイメージが言っていたこと・・・覚えているか？」

と雅紀は聞く。

アリス「聞いたよ。私の背後には、キメラ様が・・・でしょ？」

雅紀「ああ。どうやらソイツが・・・この世界を破壊しようとしている原因だな。」

アリス「・・・そうだね。」

雅紀「しかも・・・キメラ・・・。キメラと言う言葉は・・・幾つもの動物の一部を合成してできた獣と同じ名前だ・・・。恐らく・・・今までのイメージの体の一部が集合してできたイメージだろう。恐らく、能力も・・・。」

アリス「・・・今度のは・・・厄介だね。」

雅紀「こりゃあ・・・少し、力を貸してもらわないとな・・・。」

アリス「そうだね。」

雅紀「……………とここで……………アスナは？」

アリス「あ……………」

二人はアスナの存在を忘れていたとな……………

第70話（後書き）

さてと・・・マジで怖くなってきたな・・・

雅紀「アリスだろ？」

ああ・・・。ちょっと酷い部分書きちゃったしな。

雅紀「もういだろう。早く次回予告しろ。」

了解。さてと、次回のお話は・・・デンライナーに戻った三人は元凶を話す。そして・・・イマジンが現れ、電王に変身しようとしたが、何者かが憑依してきて、白い電王になった。

？「降臨・・・。満を」

続きは次回でっ！お楽しみにっ！！

第71話

アスナ『ハアアアアッ!』

デステイニーは幽汽を切った。

アスナ『あたしを甘く見ないでっ!』

ゴースト『ちいっ!このやるおっ!』

と負けじと切ってくる。

アスナ『っ!』

デステイニーはジャスティスカリバーで受け止め・

アスナ『ハアッ!』

撃ち返す。

ゴースト『ガハッ!・・・くそっ!この女っ!』

『フルチャージ』

と幽汽は必殺技「ターミネイトクラッシュ」を発動する。

アスナ『カリバー!・・・スマッシュ!』

対するデステイニーも必殺技を発動。そして・

ドオオオンッ！

互いの必殺技がぶつかり合う。

ゴースト『ぐくくうううっ！』

アスナ『う……うおおおおおっ！！！！』

徐々に、デステイニーが押していき……そして……

ズバアアアッ！

幽汽を切り裂いた。

ゴースト『がああっ！！！！』

幽汽は爆発し、中から男と、男に憑依していたゴーストイマジンが姿を現す。

ゴースト「ちきしょう……ちきしょおおおっ！！！！」

ゴーストイマジンはそう叫ぶと……爆死した。

アスナ『ふう……一著上がりっど……』

とデステイニーは呟く。そして、変身を解く。

アスナ「雅紀は……倒したのかしら？」

とアスナは雅紀を探した。

その頃・・・雅紀とアリスは・・・

雅紀「アスナと合流して、デンライナーに戻ろう。」

アリス「うん。でもその前に、雅紀の治療が先。」

とアリスは言う。

雅紀「平気、平気。掠り傷だよ。」

アリス「そんなに傷があるんじゃないや、掠り傷とは呼びません。」

アリスの言う通り、雅紀の傷は掠り傷ではないほど、傷ついている。

雅紀「うっっっっ……」

アリス「ちょっと待ってね？」

と言うと、アリスは自信の左手を・

ピッ

爪でひつかく。傷口から血がでてきた。

雅紀「そう言えば、アリスの血って、治癒能力を高める効果があったんだっけ。てか、痛くないの？」

と雅紀は言っている……

アリス「ちょっとね……。雅紀はそのまま置いてね？」

アリスはそう言って血を口に含み、雅紀に近づく。

雅紀「え、ちょ、ちょっとっ！まさかキスするんじゃないよね！？自分で飲めるから良いよ……。んっ！／／／」

アリス「ん……／／／」

雅紀が言い終わるうちにアリスは唇を重ねてきた。同時に口移しで血を飲ませる。

雅紀の口内はアリスの血でいっぱいになる。味は……。鉄のような味ではなく……。甘い味がした。そして、雅紀の傷が治ってきた。

アリス「ん……んん……んっ／／／」

雅紀「ん……んんん……んんっ！／／／」

雅紀が血を飲んでも、アリスは唇を重ね、舌を絡ませ、雅紀を求め
る。

アリス「ん……んんん……ふはあ／／／」

雅紀「あ……アリスっ！口移しでなくても、俺は飲めるぞっ！？
／／／」

アリス「雅紀に血を飲ませるのは口移しが良いの。久々だったし。
雅紀とキスすると、自分でも止められなくなって……。それに……
・雅紀の唇、柔らかくて、気持ちいいんだもん／／／」

とアリスは自身の唇を触りながら、トロ〜ンとしたような瞳を見せ
ながら言う。

雅紀「あ……あのなあ……／／／」

と話し合っていると……

？「へえ……随分、お熱いわねえ……」

雅紀・アリス「「！！」」

二人は声が聞こえた方に顔を向けると……そこにいたのは……

アスナ「人が、頑張ってるイメージを倒している間、アンタ達は、ラブにキスをしあっていたのねえ・・・(怒)」

怒りのオーラをまとったアスナがいた。

雅紀「あ・・・アスナ、これには理由が・・・」

アスナ「キスし合っているのにどういう理由があるわけっ!?!」

とアスナは怒鳴る。

アリス「まあ、アスナちゃん。理由を聞いて。」

とアリスがアスナに、雅紀とキスをし合っていた理由を話した。

アスナ「ふ〜ん・・・。でも、キスしなくてもよくない?」

雅紀「俺は恥ずかしいノノノ」

アリス「久しぶりだったんだもんノノノ」

アスナ「・・・」

アスナは何か不快そうな表情をしながらアリスを見る。

アリス「ん?アスナちゃん、どうしたの?」

アスナ「何でもないわよっ!フンッ!」

とアスナは後ろを向く。

アスラ『嫉妬しちゃってるわねえ・・・』

アスナ「（うっさいっ！黙ってっ！）」

とアスナとアスラは言う。

アスナ「（あたしは・・・）」

チラツと雅紀を見ながら・・・何かを思うアスナ・・・。

雅紀「あ、そうだ。早くデンライナーに戻ろう。」

アリス「そうだね。」

アスナ「そうね・・・。」

と三人は、12時12分12秒丁度にデンライナーに戻った。

デンライナー

オーナー「なるほど・・・キメラ・・・ですか。」

とオーナーはチャーハンを口にしながら言う。

雅紀「はい・・・。今回の原因は・・・そのイマジンなのかもしれません。」

オーナー「これは・・・少々、厄介なことになるかもしれませんね・・・。」

と二人は話し合う。そこに・・・

モモタロス「おい、雅紀。そのキメラって奴は何もんだ？」

雅紀「まだ姿を現してないからわからないが・・・たぶん・・・今までのイマジンの力を使える能力を持ったイマジンかもしれない・・・しかも体も・・・」

モモタロス「それって・・・俺等の「てんこ盛り」と同じか・・・？」

とモモタロスは言った。因みにてんこ盛りとは、電王「クライマックスフォーム」のことだ・・・。

雅紀「いや・・・皆のてんこ盛りとは違う。皆は仮面がくつついたってやつだけど・・・キメラは・・・体の一部・・・たとえば右腕がモールイマジンとか・・・左手がスノーイマジンとかって感じになつてると思う・・・。」

モモタロス「・・・すまねえ、もう一回言ってくれ・・・。」

ウラタロス「つまり、そのキメラっていうイマジンは今までのイマジンの体の一部が集まってできたイマジンでことだよ・・・。」

モモタロス「それ、けっこうやばくねえか・・・?」

とモモタロスは言う。

雅紀「まあ・・・流石にな・・・でも、こっちもてんこ盛りで戦えば・・・なんとかなるかもしれないし・・・。」

ハナ「でも、雅紀。てんこ盛りはけっこう体に負担があるわよ?良太郎だって最初の頃はそうだったし・・・。」

良太郎「あはは・・・。」

とハナは言い、良太郎は苦笑いした。

雅紀「それって、電王に変身してない時でしょ?なら、電王に変身してれば、負担がなくなるはず。」

と雅紀は言う。

キンタロス「確かに、そりゃそうかもしれへんけど・・・。」

ウラタロス「君は良太郎と違って、まだ子供だからね……。変身しても負担がかかるかもしれないよ？」

雅紀「別にいいよ。クライマックスフォームになるには……。なにかしらの負担があるってのは覚悟の上だ……。」

モモタロス「……。おまえ……。っ！雅紀、イマジンだっ！！」

とモモタロスは叫ぶ……。

雅紀「よし、じゃあ行くよっ！」

と雅紀はデンライナーから降りて現場に急行した。

現場

イメージン『がははははっはっ！！人間ども・怯え、逃げ惑ええええっ！！』

とサイをイメージしたイメージン、ライノイメージンがそう言い放った。

雅紀「ライノイメージンには・・・キンタロスっ！」

と雅紀はキンタロスと通信する。

キンタロス『おっしゃっ！任せときッ！！』

雅紀「うっ！」

雅紀はキンタロスに憑依される。

K雅紀「よしっ！いくでっ！！！」

とK雅紀は言う。外見は髪を後ろで侍風にし、瞳が金色、髪に金のメッシュが入っている。そして電王ベルトを腰に巻きつける。

）
）
）

ベルトからたくましさをアピールするようなメロディが流れ、ベルトの中心部分は金色に変わる。その時っ！

K雅紀「変身……むわあっ!？」

突如、現れた光玉がK雅紀の中に入っていった。そのせいでキンタロスが雅紀から排出された。

デンライナー

キンタロス「うおおっ!？」

とキンタロスはテーブルにぶつかり倒れる。

モモタロス「おい熊っ!どうしたんだよっ!？」

キンタロス「わからへん!だが、何かが入ってきおったでっ!」

ウラタロス「まさか……イメージっ!？」

リュウタロス「それってまずいんじゃない?答えは聞かないけど。」

モモタロス「おいつ！雅紀っ！！」

現場

ライノイマジン『ん？まだガキがいたか。丁度いい・・・踏みつぶしてやるっ！！』

とライノイマジンは突進してきて、雅紀を掴もうとする・・・
が・・・

雅紀？「そんな汚れた手で、私に触れるなッ！」

と雅紀？が攻撃をかわし、蹴りを食らわした。

ライノイマジン『がっ！・・・このガキっ！』

とライノイマジンには雅紀を見ると・・・雅紀の外見が少し変わっていた。髪が後ろにいき、白いメッシュが幾つも入っていて、瞳が白く、中心だけが黒くなっていた。

雅紀？「私をガキ呼ばわりとは・・・不届き者めっ！頭が高いっ！」

と叫ぶと、どこからともなく、ベルトが空を飛び、回転しながら雅紀の腰に着く。それは・・・電王ベルトに似た、真ん中に翼のような部分があり、真ん中が空色となっている。

くくく

ベルトから美しく・・・清らかなメロディが流れる。そして、雅紀？はパスを持った右手を頭上に構え・・・

雅紀？「変身っ！」

ベルトにタッチした。

『ウイングフォーム』

雅紀の体が変わり、姿を現したのは・・・電王のプラットフォームと同じだが、体が黒ではなく、金と白の二色となっていた。

そして、周りにオーラアーマーが現れ、電王の体に装着される。そして、顔に白鳥に似た電仮面が現れ、変形していき、装着される。その姿は・・・電王ソードフォームに似ていた。

雅紀『降臨っ！満を持して……』

これが……電王「ウイングフォーム」だ……。

第71話（後書き）

さてと、いよいよ出てきたましたウイングフォーム！

雅紀「ということは・・・アイツかつ!?!」

ああっ!さてと、今回は・・・ウイングフォームとなった電王がライノイマジンを倒すお話です。

雅紀? 『我が刃にひれ伏せっ!!!』

続きは次回・・・お楽しみにっ!!

第72話

ライノイマジン『電王かつ！！』』

とライノイマジンは構える。

雅紀？『まあ、これは私の戦うための鎧だな……。』

と電王WFは言う。

雅紀『その喋り方に、この電王は……。まさか……。ジーク？』

と雅紀は尋ねる。

ジーク『ほう、私の事を知っていたか。褒めてつかわす。』

雅紀『やっぱし。……。あのさ、頼みたい事があるんだけど……。』

ジーク『ん？何だ？』

雅紀『目の前のイマジンを倒すの手伝って。』

ジーク『……。よからう。私も、そのつもりだ。』

と電王WFは言う。

ライノイマジン『っのっ！』

とライノイマジンは突進してきた。

ジーク『動きが単純だ。』

と電王WFは軽く避け、

ドッ！

パンチを食らわす。

ライノイマジン『グフッ！・・・貴様っ！！』

とライノイマジンはお怒り気味。

ジーク『フッ。体だけでなく、頭まで固いようだな。』

雅紀『まあ、そりゃあサイだからだろ？』

ジーク『フム。気にいったぞ、おまえ。これからはお供その7にしてやる。』

雅紀『ありがと。・・・て、お供その7っ！！？』

と話し合う。

ライノイマジン『貴様アアアアアッ！！！』

とライノイマジンは武器を構えて突進してきた。

ジーク『フッ！』

電王WFはデンガツシャーを取り出し、ブーメランモードとハンドアックスモードに連結させる。

ジーク『ハアッ！』

と二刀流で防いで切る。

ライノイマジン『グアッ！』

とライノイマジンは吹っ飛ぶ。電王WFはパスを掲げ・

『フルチャージ』

ベルトにタッチ。白いエネルギーがデンガツシャーに注がれる。

ジーク『我が刃にひれ伏せっ！』

と電王WFはデンガツシャーブーメランモードを投げる。

ライノイマジン『うおっ！？』

ブーメランモードの動きに戸惑うライノイマジン……。そのすきに・

ジーク『ハッ！』

電王WFはデンガツシャーハンドアックスモードを構え、ライノイマジンとの間合いを詰める。

ライノイマジン『なっ！？』

ライノイマジンが気づくころには・・・ハンドアックスがライノイマジンの胸を深々と刺していた。

ジーク『ハアッ！』

と電王WFはエネルギーを注ぎ込み、一気に切り・・・後ろから容赦なくブーメランが返ってきてライノイマジンの背中を切り裂いた。

ライノイマジン『グアアッ！』

ジーク『ラストっ！』

とブーメランとハンドアックスを構え・・・

ズバアッ！

真っ二つにした。

ライノイマジン『ガアアアアアッ！』

ライノイマジンは爆死した。

ジーク『ふう・・・良い運動になった。』

雅紀『それは良かったな。』

ジーク『さてと・・・』

と電王WFはベルトをはずし、変身を解く。

G 雅紀「これからどうしたのか・・・。」

雅紀『あ、じゃあデンライナーに来たら？ちょっとジークの力が必要だから。』

G 雅紀「む？事情によればだがな・・・。それに・・・姫にも会えるしなあッ!!!」

雅紀『（そうだった・・・。ジークってハナさんラブだった・・・。）
と雅紀は心中で呟く。そんな感じで・・・二人はデンライナーに戻って行った。

デンライナー

G 雅紀「・・・。」

G雅紀はデンライナーの車両に來た・・・。

モモタロス「おいっ！雅紀・・・・・・・・って手羽先野郎じゃねえかっ！！」

とモモタロスは怒鳴る。

G雅紀「うるさいぞ、お供その１・・・もう少し声のボリュームを抑える・・・。耳ざわりだ・・・。」

モモタロス「んだとおおっ！！！？」

とモモタロスはG雅紀の胸倉を掴む。

ウラタロス「せ、先輩っ！この体は雅紀のだから傷つけちゃダメだよっ！！」

キンタロス「落ち着き、モモのじっ！」

とキンタロスはモモタロスを羽交い絞めする。

モモタロス「離せっ！離しやがれっ！熊あつ！！」

リュウタロス「わーい、わーい、鳥さんだ~~~~」

とリュウタロスははしゃぐ。

G雅紀「ふう・・・」

と雅紀からジークがでてきた。

ジーク「皆の者・・・よきにはからえ・・・。」

モモタロス「誰がするか、この野郎っ!!」

雅紀「まあまあ・・・。ジーク、ちょっと頼みがあるんだ・・・。」

ジーク「ん？何だ、お供その7」

雅紀「あのさあ・・・いちいちお供その7とかって呼ばないでくれない？俺は雅紀って名前があるんだ。他の人たちも名前があるんだ・・・。名前で呼びなよ？」

ジーク「ふうむ・・・。よかろう、これからは名前で呼ぼう・・・。ただし・・・お供その1、その2、その3、その4、その5、その6、はそのままで。」

モモタロス「んだとおおおっ!!この手羽先ガアッ!!!!」

とモモタロスはジークを殴ろうとする。

ジーク「お供のくせに・・・主に向かって、暴力か？頭が高いっ!!」

とジークはモモタロスを指差すと・・・

モモタロス「お・・・おおおっ!?!」

モモタロスは見る見る小さくなっていった。

雅紀「あ・・ジークってそういう能力があるんだった。」

ハナ「ジーク、やめなさいっ!」

ジーク「むっ!これは、姫っ!相変わらずの美しさっ!ぜひ私とデートをつ!」

ハナ「お断りっ!」

ジーク「があっ!?!」

ハナを見てデート誘いをするジークは一瞬で玉砕された・・。

雅紀「あ・・あはは・・。あ、それともう一つ頼みが・・。」

ジーク「む?」

と雅紀は今までの事をジークに話した。

ジーク「ふうむ・・。ようは、キメラというイマジンを倒すために私に力を貸してほしいと?」

雅紀「まあ、そんなと」。 「

モモタロス「おい、雅紀っ!何でコイツをつ!?!」

雅紀「いやさ・・ジークもてんこ盛りで背中にくっつくから良いじゃない?て思っつて。」

モモタロス「はあっ！？俺はお断りだっ！！」

雅紀「だけど、今のてんこ盛りでやられたらどうする？ジークの力を必要としないと・・・。」

モモタロス「ぐっっ！」

雅紀「それにさ、俺、今まで疑問に思っていたんだけど・・・てんこ盛りで、ウラタロスが右肩、キントロスは左肩、リュウタロスは胸・・・モモタロスは顔って感じてくっつくじゃん。でも、背中がぁまってるからどうするんだ・・・って思ってたけど・・・鬼が島の決選でみせたてんこ盛りでジークがくっついた・・・俺の考えだから・・・ジークなしの状態でのてんこ盛りは80%だと思うんだ。だから、

のこり20%を埋めるには・・・ジークの力をプラスしないと・・・。」

ウラタロス「なるほどね。」

キントロス「まあ、正直あの時はいつもよりは力が発揮できたようやしな・・・。」

リュウタロス「また鳥さんもくっつくんだっ！嬉しいっ」

モモタロス「お、俺は絶っっっ対、反対だっ！！」

と未だモモタロスだけは納得してない様子。

雅紀「それに・・・もし、相手が空を飛ぶ能力なら、ジークの力で埋められる。」

ウラタロス「君って・・・案外、頭いい方じゃない？」

雅紀「いや・・・俺はあまり良くない方だ・・・。コレなんか、アニメやビデオで何度も見たから得たものだし・・・。」

キンタロス「それでも、対してもんやつ！」

リュウタロス「えら〜い、えら〜い」

とキンタロスは褒め、リュウタロスもまた、ほめながら雅紀の頭を撫でる。

雅紀「ありがとう。」

と雅紀が言っていると・・・

？「へえ、そいつか？じいちゃんの代わりに電王になっている奴って・・・。」

と言う声が聞こえ、全員は振り向く。そこにいたのは・・・

幸太郎「なかなか度胸があるんだな。」

テディ「確かに。」

未来から来た良太郎の孫・・・「野上 幸太郎」とその相棒「テディ」であった。

良太郎「幸太郎。」

幸太郎「よっ、じいちゃん。」

テディ「ご無沙汰してます。」

雅紀「貴方が・・・野上 幸太郎・・・」

と雅紀は幸太郎を見ながら言う。

幸太郎「俺を知ってんなら大歓迎だ。それにお前・・・あのディケイドと同じライダーだってな？」

雅紀「知ってたんですか？」

幸太郎「ああ、オーナーから聞いてな。こんなまだ子供がライダーなんてな・・・」

雅紀「・・・悪いですか？」

幸太郎「いや、そうじゃない・・・。おまえ・・・怪人と闘うってのは・・・命をかけるのと同じことだぞ・・・？」

雅紀「わかってますよ。」

幸太郎「死ぬかもしれないんだぞ？良いのか？」

雅紀「ライダーになったのなら・・・覚悟してます。それに・・・俺は守らなきゃいけないんだ。もう、あんな悲しみが繰り返さないように・・・」

と雅紀は家族を殺された時の事を思い出す・・・。幸太郎は彼の目を

見た。覚悟があり、決意を持った瞳だ。

幸太郎「そうか……。なら俺は止めない……。」

雅紀「……。」

と沈黙が続いた。

オーナー「ええ……。話はその辺にして……。チャーハンはいかがでしょう?。」

ナオミ「皆の分も作っちゃいましたので……。冷めないうちに食べてください。」

とナオミはチャーハンを出してきた。

雅紀「ありがとうございます。」

と雅紀は食べようとした……。その時っ!!

モモタロス「んっ!おい、雅紀、幸太郎っ!イマジンだっ!!!」

雅紀・幸太郎「!!!!」

モモタロス「気をつけろッ!今度はかなりやべえぞっ!」

雅紀「とうとう……。大将が自ら出陣か……。」

幸太郎「だろっな……。」

と二人はデンライナーから降り、現場に向かった。

現場

雅紀「此処か……。」

幸太郎「酷い荒れようだな……。」

二人は現場に着き、現状を見る……。すると……

ザッザッザッザッ

という足音がした。二人は足音のした方を向くと……そこにいたのは……

イマジン『……』

イマジンだった。だが、他の奴らとは違い……体の部分がい
ろと違っていた。

イマジン『貴様らか……電王は……』

幸太郎「あぁっ！」

雅紀「俺は代理だけどね。」

と二人は答える。

キメラ『我が名は……キメラ。我らの同士を殺してきた貴様らを殺す。』

雅紀「随分物騒なことやってんな。でも生憎、俺たちがおまえを倒す。モモタロスっ！！」

モモタロス『おうつ！』

と二人はベルトを腰に巻きつける。

）
）
）
）

と二つのベルトにそれぞれ、音楽が鳴る。

雅紀・幸太郎「変身ッ！！」

『ソードフォーム』

『ストライクフォーム』

と雅紀は電王SFに変身。幸太郎は「NEW電王」に変身した。

モモタロス『行くぜっ！幸太郎っ！！』

幸太郎『あぁっ！テディっ！！』

テディ『あぁっ！』

とテディは剣と銃が一体化した武器「マチエーテディ」に変わった。

キメラ『来いっ！』

モモタロス『言われなくても来てやらぁっ！！』

と二人はキメライマジンに向かって行った。

第72話（後書き）

さてと・・・ちよつと更新を遅らせてしまい申し訳ございません。

雅紀「全く。なんでこんなに遅く？」

ネタがあんまり思いつかなくて・・・。

雅紀「ふうん・・・。」

あと・・・ちよつと読者の皆さんに・・・お願いが・・・

雅紀「何？」

感想を書く人が減ってきてます。書いてくださいっ！

雅紀「・・・おまえはな・・・」

・・・次回のお知らせですっ！

雅紀「とうとう現れたキメライマジン。俺達は戦ったが、いとも簡単に破れてしまった。そんな時・・・良太郎さんが・・・」

良太郎「僕は・・・もう平気だっ！だから・・・戦っよっ！」

続きは次回、お楽しみにっ！！

第73話

モモタロス『行くぜ、行くぜ、行くぜー！っ！』

と電王SFはキメライマジンに接近する。

キメラ『フン……。』

とキメライマジンはその場から動こうとしない。

モモタロス『テヤアアッ！』

と電王SFは先制攻撃をした……。だが・

ガキインツ！

金属がぶつかり合う音が響く。

モモタロス『な・何イツ！？』

電王SFは驚いた。それは・キメライマジンがデンガツシャーを腕で止めたからだ・。

キメラ『ぬるい……。』

とキメライマジンは左腕を刃に変える。

ズバアアッ！

モモタロス『うわああああっ!!』

キメライマジンは斬られた電王SFはビルに衝突。

幸太郎『モモタロスっ! 雅紀っ! このっ!!』

とNEW電王はキメライマジンに接近する・・・が・・・

シュンッ

突如、キメライマジンが姿を消した。

幸太郎『なっ!?! どこにっ!!?!?』

とNEW電王は探す・・・すると・・・

テディ『幸太郎っ! 後だっ!!』

幸太郎『っ!』

キメラ『遅い。』

NEW電王が気づいたころにはキメライマジンの攻撃を受けて吹っ飛ばされていた。

幸太郎『うわああああっ!!』

キメラ『散れ・・・』

とキメライマジンは光弾を発射。それをNEW電王は食らってしま

った。

幸太郎『があああつ!!!』

テディ『幸太郎ーっ!』

まともに食らったNEW電王は変身が解けて倒れる。

キメラ『ふん……弱いな……。』

とキメライマジンは虫を見るような眼をして幸太郎を見ていると・
・

モモタロス『このやろおおッ!!!』

と電王SFが突っ込んできた。

キメラ『そういえば……お前もいたな……。』

とキメライマジンは電王SFに向けて光弾を発射する。

モモタロス『うおっ!』

と電王SFはまともに食らいつ。

モモタロス『ぐっ!くっそおっ!あの合成野郎っ!!!』

雅紀『モモタロスっ!今こそ、てんこ盛りだっ!!!』

モモタロス『ちいっ!……わかったよっ!!行くぞっ!お前ら

っ！！』

ウラタロス『どうぞっ！』

キンタロス『よっしゃ、いくでっ！』

リュウタロス『てんこ盛り』

ジーク『仕方がない。』

とそれぞれ返事をする。電王SFは変身アイテム「ケータロス」を取り出す。

『モモ』

『ウラ』

『キン』

『リュウ』

キメラ『させるか。』

変身コードを入力している最中にキメライマジンが光弾を発射してきた。

モモタロス『なっ！？ぐあああっ！！！！』

と電王SFは吹っ飛び、ケータロスを落としてしまう。

キメラ『お前らが考えていることが読めた。大方、合体変身をするつもりだったが・・・そうはせん。』

モモタロス『ぐ・・・くそおっ!』

キメラ『消える・・・。』

とキメライマジンは左腕の刃にエネルギーを注ぎ巨大化させる。そして・・・

キメラ『フンッ!』

ザアアアアアンッ!!

モモタロス『グアアアアアアアアアッ!!!!』

電王SFを中心に爆発が起きる・・・。

ドゴオオオオオンッ!

そして、煙が晴れた時には・・・キメライマジンしかなかった。

キメラ『逃げたか・・・。逃げ足が良いな・・・。』

と呟いていると・・・

?「助かったよ。感謝するよ。」

と誰かが近付いてきた。

キメラ『おまえか……。例はいらん。それに……。おまえがイメージしたこの肉体で、勝てたのだから、お互い様だ……。』鳴滝」

そう、キメライマジンに近づいてきた男は……。鳴滝だった。

鳴滝「ククク……。これで……。ディカオスを倒し、電王まで倒せた。世界は再び、安息の時を迎える。」

と鳴滝は呟くのだった。

モモタロス「ぐううう……」

とモモタロスはボロボロの体を動かす。

ウラタロス「先輩っ！無茶しちゃダメだっ！！」

キンタロス「少しは休め、桃のじっ！」

とウラタロスとキンタロスは止める。

モモタロス「うるせえよっ！そんなことより、雅紀と幸太郎だっ！あの二人の方が傷ついてんだぞっ！」

とモモタロスは叫ぶ。その後ろでは……

雅紀「いちち……」

幸太郎「く……」

体に包帯を巻いていた雅紀と幸太郎がいた。

雅紀「幸太郎さん、大丈夫ですか？」

幸太郎「俺なんかよりも、お前が大丈夫かよ？」

雅紀「大丈夫ですよ……。」

と話していると……

アリス「雅紀っ！」

アスナ「雅紀っ！！」

とアリスとアスナが来た。

雅紀「アリス、アスナ」

アリス「雅紀、大丈夫っ！？今すぐ治療してあげるからねっ！？」

とアリスは爪で腕を切ろうとするが・・・

アスラ『ここはあたしに任せなさい。』

アスナ「ひゃうっ！」

とアスラが現れた。

アリス「アスラちゃん。」

アスラ「アリス、アンタはちょっと休んだ方がいいわ。それじゃ貧血になっちゃうよ。此処はあたしがするから」

とアスラは雅紀に近づく。

アスラ「あたしの力・・・感じてねえ・・・」

雅紀「アス・・・んっ！？／／／」

雅紀が言い終わるうちにアスラは唇を重ねてきた。

アスラ「んん．．．／／／」

雅紀「んんっ！／／／」

すると．．．雅紀の体の傷がみるみる回復してきた。

アスラ「ん．．ふはあ．．。はい、おしまい／／／」

雅紀「アスラ．．．／／／」

アスラ「アリスばかり、ズルイ。あたしだって雅紀とキスしたいのに。でも、出来たから良いか／／／」

とアスラは妖艶な笑みをする。

雅紀「／／／」

ウラタロス「凄いいえ．．．。君、僕の彼女にならないかな？」

アスラ「黙れ．．キザ亀．．。殺して、鍋に入れるよ？」

とアスラはウラタロスに対して、強烈な殺気を放つ。

ウラタロス「ご．．ごめんなさいっ！」

とウラタロスは怯えた。

アスラ「全く．．。あ、雅紀、またね」

とアスラは戻りアスナと代わる・・・。

アスナ「あ・・・その・・・あうう・・・／／／」

雅紀「あの・・・アスナが赤くなる？」

アスナ「うっさいっ！／／／」

とアスナは怒ってしまった。

幸太郎「おまえの仲間は・・・不思議な力があるんだな・・・。」

雅紀「ええ・・・まあ・・・（アリスは悪魔で・・・アスナは・・・半分がサキュバスだからなあ・・・）」

と雅紀は思っている・・・

オーナー「それにしても・・・キメラは相当厄介な相手ですね・・・。」

とオーナーが言う。

モモタロス「あの野郎、俺たちがてんこ盛りになろうとしたこと分かっていやがったぜっ！」

モモタロスは悔しそうに言う。

幸太郎「俺達は手も足も出なかった。」

雅紀「キメラは相当な奴だ・・・。早めてんこ盛りにならないと・・・

・・・」

幸太郎「くそ……せめて、じいちゃんの怪我が治っていれば……」

と幸太郎が呟いていると・・・

？「僕は大丈夫だよ。」

と言う声がし、全員は振り向いてみると・・・

全員『良太郎（じいちゃん）っ！！！！』

良太郎がいた。

良太郎「話はわかったよ。僕も戦う。」

モモタロス「けどよ、おまえ、怪我は平気なのかよっ！？」

良太郎「うん。もう平気。だから闘うよ。」

と良太郎は言う。

雅紀「良太郎さん」

良太郎「雅紀君、ありがとう。もう電王代理をやめてもいいよ。」

雅紀「はい……。こっからは、ディカオスとして戦います。」

と雅紀は返事をし、良太郎は頷く。すると・・・

ビュンッ

雅紀の目の前にカードが出現。雅紀はそれを取る。

雅紀「これって・・・電王のファイナルカメンライド・・・？」

と雅紀は呟いた。絵柄には・・・電王の「超クライマックスフォーム」が描かれていた。

？「後、俺たちも助っ人で来たぜ。」

と言う声がした。見ると良太郎の後ろに茶髪の青年とイメージがいた。

？「そこのおまえと会うのは初めてだな？俺は桜井 侑斗だ。」

？「俺はデネブ。よろしく。はい、記念のキャンディー。」

とこの二人は仮面ライダー「ゼロノス」に変身する人とそのイメージなのであった。

雅紀「ありがとう。」

侑斗「んで、今度のイメージは厄介だったな？俺たちも全力を尽くすぜ。」

デネブ「微弱ながら、俺も。」

と侑斗とデネブは言う。

雅紀「いや、二人も来てくれて頼もしい限りです。それと・・・すみませんがサインくださいっ！」

と雅紀はオタク本能を發揮しながら言う。

良太郎「まあ・・・それは後にして、皆で力を合わせようっ！」

全員『オーーーーーッ！』

と全員は掛け声を合わせた。

第73話（後書き）

さてと・・・とうとう復活、良太郎と助っ人の侑斗とデネブが来てくれたっ！

雅紀「ホントに嬉しいぜっ！」

さてと、時間がないから早めに次回な！

雅紀「キメラとの最終決戦を迎えた俺達、そして、ついにあのファイナルカメンライドが発動っ！」

次回、ついに二体の超電王がそろっ・・・。お楽しみにっ！

第74話（前書き）

今回は結構、長話になります。ご承知ください。

第74話

キメラ戦から一日……

ターミナル

雅紀「ほえー。まさか生のターミナルに行けるなんて……。感激だな。」

と雅紀はターミナル内を身回る。現在、雅紀達ディカオスメンバーと電王メンバーはターミナルに来ているのだ。理由は……

オーナー「久々に、駅長とチャーハン対決をしたいので……。」

というオーナーの一言だ。因みに駅長と言うのは此処、ターミナルのお偉いさんだ。しかもオーナーと姿が瓜二つだ。誰もが見間違える。

雅紀「ああ……ホント、夢を見ているようだな。」

良太郎「あはは……ホントに君はオタクなんだね。」

と良太郎は言う。

雅紀「そりゃそうですね。俺の世界では、ライダーは現実には存在せず、空想の産物だったんです。だから、嬉しいんです。」

良太郎「そっか。」

と二人は話し合いながら進む。

雅紀「（そう言えば……ここ最近、鳴滝の動きがないな……。もしかすれば、キメラと……）」

良太郎「ん？雅紀君、どうしたの？」

雅紀「あ、いえ、なんでもありません。」

良太郎「せっかく来たんだし、もう少し見て回って、楽しもう？」

雅紀「はい。」

としている時……

モモタロス『良太郎ッ！雅紀ッ！イマジンだっ！』

雅紀・良太郎「っ！！」

モモタロス『気をつけろっ！このターミナルにいやがるみてえだっ！』

雅紀「良太郎さんっ！」

良太郎「うん！」

と二人は走る。

雅紀「っ！良太郎さんっ！その場でストップっ！！」

良太郎「えっ！？」

と二人はその場で止まる。すると・・・

タン・・・ッ

目の前にイメージが現れた。

雅紀「・・・コイツか・・・。」

良太郎「モモタロス・・・っ！？モモタロスっ！？」

雅紀「どうしたんですか？」

良太郎「モモタロス達と繋がらないっ！」

雅紀「っ！・・・どうやら、結界かなにか、はったようだ・・・。」

と雅紀は辺りを見回す。どうやら結界をはられているようだ・・・。
そしてイメージを睨みつける。

イメージ『いかにも・・・。キメラ様の望みを果たすため・・・貴様らには消えてもらおう。』

雅紀「望み？・・・世界滅亡？それとも世界征服？」

イマジン「貴様らが知る必要はない・・・。なぜなら此処で、死ぬのだからな・・・！」

とイマジンは武器を取る。

雅紀「・・・奴の考えは・・・時を・・・壊すのか・・・わからんな。」

と雅紀はディカオスドライバーを構える。

雅紀「それに、こちらは死ぬのはまっぴらごめんだ。それに・・・そのキメラの望み・・・撃ち砕くまでだ・・・！」

と雅紀は鋭い殺気をイマジンに送る。

イマジン「ただの人間の小僧ではないと思っていたが、戦いの経験があるようだな。」

雅紀「ああ・・・。行くぞ。」

「カメンライド・ディカオスツ！」

と雅紀はディカオスに変身した。

イマジン「来い・・・！」

雅紀「そうさせてもらおう・・・！」

とデイカオスは呟くと同時に動き、イメージとの間合いを詰める。

雅紀『ハアアッ!』

イメージ『っ!』

ガキンツ!ガキンツ!ガキンツ!

と武器と武器のぶつかり合いが続く。

良太郎「(コレがあの子の戦い。あの時しか見なかったけど・・・
なかなかやるな・・・)」

と言っている内に・・・

雅紀『ハアアアッ!』

デイカオスがイメージを吹っ飛ばす。

イメージ『ぐっ・・・』

雅紀『結界とかのサポート系が得意そうだが・・・戦いはあんまり
だな・・・』

イメージ『フ・・・だが・・・負けられんだ・・・』

と言つとイメージはさらに武器を取り出す。

イメージ『キメラ様の望みは・・・絶対に叶えなければならんっ!』

雅紀『……そうか……』

と呟くと……

ザンツ!!!

デイカオスはイメージを真つ二つに切り裂いた。

雅紀『俺達は止める……カメラの野望とやらを……』

とデイカオスが吐くとイメージは何も言わず、爆死した。

雅紀『ふう……。』

とデイカオスは変身を解除する。

雅紀「これで結界は解けたな……。良太郎さん、モモタロス達を繋がりましたか？」

良太郎「……それが……」

と良太郎は青ざめて表情をする。

雅紀「まさか……繋がらない……とか……?」

良太郎「……そのまさかだよ……。どうすれば……」

雅紀「モモタロス達はこのターミナル内にはいるはずですよ。探せばなんとか・まあ、乗ってください。」

と雅紀はディカイザーに乗る。

良太郎「何時の間にあつたの？ソレ・・・？」

一方モモタロス達は

モモタロス「良太郎っ！雅紀っ！！おいっ！！・・・くそっ！ダメだっ！全然繋がらねえっ！！！」

ウラタロス「こっちもだよ。イメージにまんまとやられたね。」

キンタロス「良太郎と雅紀は無事かいな！？」

モモタロス「知るかよっ！とにかく二人を見つけるぞっ！！！」

リュウタロス「かくれんぼだ〜」

モモタロス「かくれんぼじゃねえっ！！！」

と四人は二人を探そうと走ろうとしたその時っ！！

フアアアアアンツ！！！！

突如として、目の前にオーロラが発生。

モモタロス「うおっ！？なんだっ！！？」

とモモタロスが動揺していると、

ザザッ！

イマジン「……」

イマジンが現れた。しかも四体。

モモタロス「おいおい……どういつつもりだあ？」

ウラタロス「僕らを倒そうとしているのは間違いないね。」

と二人が呟くと……

イマジン「……」

イマジンはすでに攻撃態勢ができているのか、襲ってきた……。その時っ！

？」「ごめんよっつっ！」

ドゴアアアアアンツ！！！！

イマジン「ぐあああつ!!?」

モモタロス「は・・・?」

何者かの攻撃で吹っ飛ぶイマジン達、その光景をモモタロス達は茫然と見ていた。

雅紀「ふう・・・間に合ったか。」

良太郎「皆、大丈夫っ!？」

先ほど、イマジン達を吹っ飛ばしたのは、雅紀と良太郎だった。

モモタロス「良太郎っ! 雅紀っ! おまえら何処に行ってたんだよっ!?!」

雅紀「こっちの方でいろいろとな、さてと・・・やりますか。」

良太郎「モモタロス、いくよ?」

と雅紀はディカオスドライバーを、良太郎は電王ベルトを構え、腰に巻きつける。

『カメンライド』

）
）

雅紀・良太郎「変身っ!」

『ディカオスッ!』

『ソードフォーム』

と雅紀はデイカオスに、良太郎は電王に変身した。

モモタロス『俺、参上っ！』

雅紀『早速だが……こっちは後二人は呼ばせてもらっ。』

とデイカオスは二枚のカードを取り出し、アドベントドライバーに入れる。

『カメンライド・ネガデンオウツ！ジーデンオウツ！』

雅紀『行って来いっ！悪と正義の電王。』

とデイカオスの目の前に二体のライダーが召喚された。

ネガ電王『強さは別格だがな……。』

G電王『イマジンを確認。これよりせん滅する。』

召喚したのは電王SFと姿が似た悪の電王「ネガ電王」と、次元警察の黒埼レイジが変身する「G電王」だった。

雅紀『二体は俺達がやるから……二人は他の二体を。』

ネガ電王『いいだろう。』

G電王『了解。』

とネガ電王とG電王は二体のイメージに突撃して行った。

雅紀『さてと、俺たちも行くかつ!』

モモタロス『おうよっ!』

と二人もまた、イメージに突撃した……。

そして数分後

雅紀『ディメンションブレイカーーツ!』

モモタロス『俺の必殺技、パート2ツ!』

ネガ電王『フンツ!』

G電王『ハツ!』

ザコだったのか……イメージはあっという間にやられた。

雅紀『はい、お疲れさん。二人とも、戻って休んでいていいよ。』

ネガ電王『また、戦いになったら呼べ。』

G 電王「それでは。」

と二人は消えて行った。そして、二人は変身を解除する。

モモタロス「いやあ、しかし、あっけない連中だったぜえ。」

良太郎「ホントだね。雅紀く・ん？」

と良太郎は雅紀を見る。雅紀は何か考えている表情をする。

雅紀「(なんだ？何か引つかかる。こつもあつさりイメージンは倒せたし・・・良いんじゃないかって思うけど・・・何か引つかかる。)

と雅紀は考えた結果、ある答えが見えてきた。

雅紀「っ!!！」

と雅紀は走りだす。

良太郎「ちよっ!雅紀君、どうしたのっ!!!？」

雅紀「やられた!さっきのはおとりだったんだっ!俺達が来ないよ
うにッ!!」「奴」が命じたんだっ!!！」

一方、残りの電王メンバーはと言つと……

ドゴオオオンッ！

幸太郎「ぐあああつ！！！」

とあるところで、NEW電王がやられ、変身を解除される。

侑斗「デネブっ！いくぞっ！」

デネブ「了解っ！」

とこちらでは、侑斗が変身した「ゼロノス ゼロフォーム」が何者かに向けて専用武器「デネビツクバスター」を連射する……だが……

？「つまらん。」

ドゴオオオンッ！

侑斗「ぐああああつ！！！」

当たる直前に光弾で弾かれ、やられ、変身を解除される。

? 『弱いな……。いや……。我が強すぎたのか?』

と呟くのは……。キメライマジンだったっ!

幸太郎「くそ……。こんな時にじいちゃん達、何してんだよ……?」

キメラ『あの電王だろ……。? 奴らは我らの同士が抑えている。来ることは……』

? 「ああ……。普通はな……。」

キメラ『っ!』

キメラが振り向いたその先には……

雅紀「時間が食っちゃったぜ。」

雅紀達がいた。

キメラ『ほう気づいたか。』

雅紀「ようキメラ……。随分と卑怯くさいことしてんじゃん。』

キメラ『貴様は危険人物だと言われてな……。』

雅紀「ふうん……。まあ良いや。お前を倒す。」

良太郎「皆、行くよ。」

幸太郎「遅いぜ・・・。」

侑斗「たくっ！」

と四人はそれぞれベルトを腰に巻きつける。

雅紀・良太郎・幸太郎・侑斗「」「」「変身っ！」「」「」

『カメンライド・デйкаオスっ！』

『クライマックスフォーム』

『ストライクフォーム』

『チャージ・アンド・アップ』

と四人は変身する。

雅紀『さてと・・・こっちも。』

『カメンライド・デンオウツ！』

『ファイナルカメンライド・デ・デ・デ・デンオウツ！』

デйкаオスはD電王に変身、さらにD電王スーパークライマックスフォームSCFに変身する。

雅紀『此処からが・・・ラストバトルだっ！！』

第74話（後書き）

さてと、長話になってしまつので、次回はこの後編をやることにします。

雅紀「はあ〜。」

さてと・・・次回を終えた後、ほんの少しの間、日常編をすることにします。ご承知ください。

第75話

今、キメラの目の前に、五人のライダーが集う。

モモタロス『おまえ、てんこ盛りにもなれるのかよ……。』

とまず第一声を上げたのは電王SCFに憑依しているモモタロスだった。

雅紀『ああ。あの時、使用可能になってな。この時のために使わずして何になる?』

ウラタロス『ちゃっかり言い台詞が混じってるね。』

侑斗『おいっ! どうでもいいから早く奴を倒すぞっ!』

幸太郎『向ここの奴らはやる気満々だぜ?』

とゼロノスZFやNEW電王に言われ振り向くと……

キメラ『……。』

キメライマジンが戦闘準備万端で会った。しかも背後にはイマジンが何体もいる。

雅紀『侑斗さん、幸太郎さんは……。』

侑斗『イマジン達の方をやれだろ? わかってるぜ。』

幸太郎『言われずとも、お前らはキメラをなっ！』

雅紀『はい！』

モモタロス『おうっ！』

とD電王SCFと電王CSFは共に頷く。

侑斗『行くぞっ！デネブっ！』

デネブ『了解っ！』

幸太郎『行くぞテディ。俺達はゼロからが本当の戦いだっ！』

テディ『ああっ！』

とゼロノスZFとNEW電王はイマジン達に突っ込む。

キメラ『貴様らとまた戦うとはな……。』

モモタロス『待たせたなッ！こっからが本番だっ！あんときみてえにやられるわけにはいかねえッ！』

雅紀『二体一だが・お前を倒すにはちょうどいい。』

と身構える二人。

キメラ『フン。まあ良い。今度こそ息の根を止める。』

モモタロス『上等だこのやるオッ！』

と電王SCFは突っ込んでいく。

モモタロス『うおらあっ!』

とパンチを浴びせるが・キメラに避けられる。・・・だが、

ウラタロス『よっよっ!』

ともう一人、電王SCFに憑依しているウラタロスがキックを浴びせる。

キメラ『むっ!』

ウラタロス『こっちは先輩だけじゃないんだよ?』

キンタロス『つっぱりいっ!』

電王SCFが言い終わると同時にキメライマジンに突っ張りをかける。

キメラ『ぐっ!』

キンタロス『俺の強さは泣けるでえッ!』

リュウタロス『トドメだっ!どーん』

と電王SCFはデンガッシャーをガンモードにさせて撃つ。

キメラ『くっ!そんなもので・・・』

雅紀『俺の事を忘れなっ！』

キメラ『っ！ぐああっ！！』

キメライマジンは気づくころにはD電王SCFに斬られ、吹っ飛ばされていた。

キメラ『・・・くっ！』

とキメライマジンは翼を出し、空を飛んだ。

モモタロス『おいおい、そりゃねえだろおっ！』

雅紀『ほっ！』

電王SCFが怒鳴っていると、D電王SCFが背中中のウイングを羽ばたかせ空を飛ぶ。

モモタロス『ておいつ！何でお前ができて俺等ができねえんだよっ』

ジーク『めんどくさい。』

モモタロス『手羽先野郎っ！やっぱおめえかっ！つつか真面目にやれえッ！！』

と一人、電王SCFは怒鳴り続けていた。

雅紀『はあっ！！』

キメラ『っ!!』

そうこうしている内にこちらではD電王SCFとキメライマジンによる空中大決戦が勃発。様子を見ると・D電王SCFが押している。

雅紀『やっぱり、スペックはこっちが上か。』

キメラ『なかなかだ……。戦いはこうでなくてな……。』

雅紀『お前の目的はなんだ？時を壊すのか？』

キメラ『そうではない。我は強さを求める。世界が壊れようが知って事ではない。』

雅紀『そうか……。ならなおさら、お前を倒すっ!!』

とD電王SCFはパンチを浴びせる。

キメラ『確かに、我より、お前は強い。だが……。』

とキメライマジンは眩くと、同時に消える。

キメラ『スピードは我が上のようだ……。っ!!!!』

とキメラが言っている時に何か驚いた。それは……

雅紀『お前の動きは……。前の戦いでわかった。そのスピードはあんまり長くはないし、速すぎて曲がれないのが特徴。だから……。』

D電王SCFがキメライマジンの動きを読んで、すぐ目の前にいたからなのである。

雅紀『動きを止めれば楽勝っ！』

とアドベントドライバーを○距離で放つ。

キメラ『ぐああっ！！』

キメライマジン、大ダメージ。そんな時、

モモタロス『おい雅紀っ！てめえ俺等の事忘れるなあっ！！』

と電王SCFがようやく来た。

雅紀『遅いよ。何してたの？』

モモタロス『手羽先野郎が・・・』

雅紀『だいたい分かった。おいジーク、あんまり皆に迷惑かけるな。』

ジーク『むう・・・私にこんな仕事をやらせて・・・』

雅紀『あんまり愚痴っていると、ハナさんとは永遠に会わせないよ。うにするよっ？』

ジーク『ま、待てっ！それだけはやめてくれっ！！』

雅紀『ならしっかりやるっ！』

と叫ぶ。

モモタロス『こいつ、手羽先を齧してやがる……。』

良太郎『あ……。あはは……。』

と電王SCFは茫然と見ていた。

雅紀『さてと……。行くよ？』

モモタロス『お、おうっ！』

と二人は並びあう。

一方、ゼロノスZFとNEW電王は……

ドゴツ！ドガツ！バキイツ！！

侑斗『おりいっ！！』

幸太郎『はあぁっ！！！！』

絶賛、イマジンフルボッコ中。

侑斗『デネブっ！』

デネブ『了解っ！』

幸太郎『テディっ！』

テディ『あぁっ！』

『フルチャージ』

とそれぞれに必殺技を発動。

侑斗『おりあぁあぁぁっ！！！！』

デネブ『はあぁぁっ！弁っ！！！！』

とデネビツクバスターから特大のビーム砲「バスターノヴァ」が発射される。

ドゴオオオオンッ！！！！

イマジン達は大爆発。あの白い魔王のような……。「魔王じゃないもんっ！！」……すいませんっ！！！！！！

幸太郎『ハアアアッ！！！！』

ズバアアアッ！！

とNEW電王はマチエーティを振るい、カウンタースラッシュでイマジンを切り裂く。

ドゴオオオオンッ！

こちら也大爆発。イマジンは全滅。

侑斗『後はあいつ等の仕事だな。』

幸太郎『頑張ってくれよっ！』

戻って電王SCFとD電王SCFは……

『ファイナルアタックライド・デ・デ・デ・デンオウツ!』

『チャージ・アンド・アップ』

と必殺技を発動。

モモタロス『行くぜ、俺達の……』

雅紀『必殺技あ……』

と二人は呟くと、空高く舞い上がる。

キメラ『ぐ……』

太陽がまぶしく、二人を捕らえない。すると・

雅紀・モモタロス『ディカオスバー……ジョント……!』

と二人合わせて超ボイスタースキックをキメライマジンに喰らわした。

キメラ『グアアアアアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!』

とキメライマジンは爆死した。二人はそのまま着地。

モモタロス「ふう．．．あ~~~~、終わったあツ！」

雅紀「はあ．．．。」

と二人は体の力を抜く。そこに変身を解除した侑斗と幸太郎、デネブとテディが来て、騒いだ。

？「くそう．．．やはり奴ではダメだったか．．．！」

その光景を誰かが見ていた、鳴滝だった。

鳴滝「やはりお前は危険な存在だ．．．デイカオス．．．！」

と呟くと、鳴滝はオーロラの中に消えた。

雅紀「それでは、皆さん。また……。」

良太郎「うん。君も頑張つてね。」

モモタロス「また来いよなあッ！」

と雅紀は電王メンバーと別れをし、デンライナーから降り、アリス宅に戻って行った。

雅紀「ただいま。」

アリス「お帰り〜。もうこの世界の役目は終えたの？」

雅紀「うん。また新たな世界に行こう。」

アリス「そうだね。」

と二人は茶の間に行く。

アスナ「あ、雅紀お帰り。」

雅紀「ああ。ただいま。」

アリス「さてと・・・じゃ、出発っ！」

とこの日、雅紀達は電王の世界を後にした。

第75話(後書き)

さてと、電王編、終了!

雅紀「キメラが弱すぎでは?」

すまん。超電王を強くし過ぎた。

雅紀「あ、そう。確か次回は日常編だっけ?」

ああ、しばらく・・・または二話ぐらいはな。その後に次の世界の話だ。

雅紀「ほうほう。」

さてと・・・次回は日常編、そして・・・とうとう、お待ちかねっ!!アスナとアスラとのセックス話だ~~~~っ!!!!!

雅紀「何いいいっ!!!?!?」

作者権限発動、もう俺を止めることはできんぞ~~~~っ!!!!!

雅紀「やめろおおおおおっ!!!!!~~~~!!!!!」

第76話(前書き)

今回は駄文になるかもしれませんが。ご承知ください。

第76話

電王の世界を去って数日

アリス宅

「……………」

アスナは一人、テレビを見ている。すると……！

『アスナ〜。』

アスラが呼んだ。

「（何よ？）」「

『何時になつたら雅紀とやるのさ？』

「（っ！！はああッ！！！？）／／／／」

アスラの一言にアスナは顔を真っ赤にする。

『雅紀に告白したもののまだしてないじゃん。今はアリスがいないから、絶好のチャンスよ?』

因みにアリスは今はいない。チラシを見て、食材が安くなっている
と知り、急いで向かって行ったのだ。当分は帰ってこないだろう。

「(何でそんなことしなきゃいけないのよっ!!? / / /)」

『そんなことっ!?!アスナはわかってないわっ!?!いい?雅紀とすれば、アンタは真の女になれる。そして…子どもだって…』

「(それ以上言うなアアアアッ!!!!) / / /」

アスナはアスラの爆弾発言を阻止する。

「(あたしは…雅紀と、き…キスするぐらいで十分よっ!!!)」

『ふうん。一度はやってみたらいいわ。病みつきになるから』

「(あんだってやったことないくせに…)」

アスナは再びテレビを見ていると…

「(雅紀とか…)」

アスナは雅紀としていることを妄想する。そのせいでまた顔が真っ赤になる。

「あーもうっ！！風呂に入ってこようっ！！」

そう言い、アスナは風呂場に行った。

一方の雅紀は…

「んん…ああ、たまにはこう、体を休めるのもいいなあ」

と雅紀は二枚のカードを取り出す。そのカードはWと電王のFKRのカードだった。

「Wと電王だから…残りは9枚か。俺達の旅は長いな…」

そう呟きながら、雅紀はカードをしまっ。

「んんん…寝るかな…」

そう言い、雅紀は眠った。

一方のアスナは…

シャーーー…

風呂場でシャワーを浴びている。

「（雅紀…）」

アスナは雅紀の顔を思い浮かべる。思い出しただけで頬を染め、口元が緩む。

『乙女よ、アスナ』

「（っ！っっさいっ！！／＼／＼）」

『しちやえばいいのにっ』

「（っっさいっのっ！！…！）」

心中で騒ぐ二人…いや、二つの意識。

戻って雅紀は…

「んんん……あれ？まだ十分も経ってない。ま、いいか」
体を起こし欠伸をする。

「ふわ〜。風呂に入ろうかな…」

雅紀は部屋を後にした。

風呂場

雅紀は服を脱ぎ、扉を開けた。と、そこにいたのは…

「……………」

アスナでした。

「あ…あ…アスナ…!?!」

「こんのお…変態……………!!」

ドグシャアアアアツ!!

「ぎゃああああああああ…!!」

雅紀はアスナにボコされた。

数分後

「すみません!」

現在、雅紀はアスナに土下座している。アスナは雅紀に背を向けている。

「本当にすいません。決してのぞき見しに来たのではなくて…」

「いいわよ、もう。」

「アスナ…」

「アンタがそんなことするはずがないってわかっていたのに…ごめん。痛かった？」

「え、ああ。全然…」

「…そう」

ふと、アスナは雅紀を見る。

「（雅紀の肌、以外に綺麗ね。それに、筋肉もあるんだ…／＼／＼）」

と思っているよ…

「アスナ？どうかしたのか？」

「っ！な、何でもないっ！もうあたし、上がるわ…っ！…！」

アスナは急いでこの場を後にしようとした時、誤って足を滑らせてしまう。

「アスナっ！」

雅紀がアスナを支えようとしたが時すでに遅し、一緒に倒れてしま
う。

「痛てて…アスナ、大丈夫か？」

「え、ええ…」

二人は顔を見合わせる。唇が後数センチの距離であった。

「あ、今どくから…／＼／」

アスナは雅紀から離れた。

「ごめん。受け止められなくて…」

「だから良いっての！てか、あたしの方こそ、ゴメン」

「ああ…大丈夫だから」

「さっさと入れば？あたしはもう上がるから」

「あ、ああ」

アスナはその場を去った。

「…機嫌悪そうだったなあ…。後でもう一度、謝っておこうかな」

雅紀はそう呟いて、風呂に入った。

アスナの部屋

「ハア…ハア…」

アスナは部屋のベッドで横になっていた。

「ハア…心臓バクバク…」

自信の心臓音を感じながら息を整えた。

「ハア…後で謝ろうかな…」

アスナはそう呟いた。

第76話（後書き）

さてと、いかがでしたでしょうか？さてと、次回のお話は、雅紀達が歌コンテストに参加っ！？

雅紀「なんで!？」

アリス「私の出番がなかったよぉ・・・ふえええん・・・。」

第77話

商店街

「おお…にぎわってるなあ。」

現在、雅紀達は商店街にいる。その理由は…

「雅紀やアスナちゃんもたまには一緒にお買い物でしょ」

というアリスの一言から始まった。

「結構食材とかも売ってるし…主婦の人には嬉しいわね。」

「フフン 私は、雅紀の恋人であり、主婦でもあるから、本当に嬉しい／＼／」

アリスは雅紀の腕に抱きつき、雅紀の指を絡め、胸を押しつける。

「アリスっ！？／＼／」

「全く、アンタ達はどこでもラブラブなのね。」

『そういうアスナもラブでしょ？雅紀の事。』

「（うっさいっ！！／＼／＼）」

と三人は商店街を歩いていると…

「あー、君達。」

一人の男性が声をかけてきた。

「はい、何でしょう?」

「いやね、今日このあたりで歌自慢大会があるんだが、良かったら参加してみないかい?」

とチラシを取り出しながら言う。

「歌自慢大会?」

「歌でも歌うのかな?」

「そうなんじゃない?」

「参加してみないかい?」

「どうする、二人は?」

「私はオーケーだよ。」

「あたしは…まあ、やってみようかな。」

「うん。じゃ、そういふことなので。」

「そうかい。じゃあ、あっちで受け付けがあるからね、行くつか。」

そう言われ、三人は会場に向かった。

会場

三人が来てみると、町の人たちが来ていっぱいだ。

「うわあ、すごいな。」

「皆、参加者や見に来た人たちだね。」

「盛り上がってんのね。」

三人は受け付けを済ませる。すると…

『えー、間もなく、始まります。それでは、お楽しみあれ〜。』

先ほどの男性がステージの中央に立って話していた。

「はい、番号はこれにありますので取ってくださいーい。」

と女性が箱を持ちながら近づいてきた。三人はそれぞれ箱に手を入れ、番号が描いたボールを取った。

「俺は…11番か。」

「あ、私は3番だ。」

「あたしは4番。」

それぞれ番号を確認する。

『それではエントリーナンバー1番どうぞ〜!』

こうして大会が始まった。最初の人が出す。

「選んだやつを歌うのか…。」

「私はお気に入りの歌があるからそれにしよう〜」

「あ、あたしはどつしどつ。」

それぞれ言った。

それから数分

『さて、お次はエントリーナンバー3番。どつぞつ』

男性が言った。

「私だ！じゃあ雅紀、言ってくるね」

「ああ。」

アリスはステージに立ち、マイクを取る。

『じゃあ、歌います。聞いてくださいっ!』

とアリスが言うと、音楽が流れる。

くくく

「(あれ?この音楽、どこかで…)」

と雅紀が思っていると、アリスが歌手顔負けの美声で歌い始めた。それにより観客は茫然と聞く。

「あ…この歌は!」

「雅紀、知ってるの?」

「ああ。確か、どこかの歌番組で聞いた曲だ…。」

雅紀は驚愕した表情で言う。

「曖昧ね。」

「まあ…。というか、アリスって歌えたのか…。」

「あたしも驚き。」

二人は驚いている中、アリスはラストまで歌う。最後まで歌い切り、観客を盛り上がらせた。

『いや、なかなかの歌でした!ということでエントリーナンバー』

3番、アリスさんでした。」

男性が言った後、アリスは戻ってきた。

「雅紀、どうだった？」

アリスは雅紀の腕に抱きつきながら聞く。

「あ、ああ。良かった。とても良かったよ。」

「ホント！？嬉しい / / /」

雅紀にそう言われ、アリスは喜んだ。

『それではエントリーナンバー4番、白鳥 アスナさん、どうぞ。』

』

「あ、あたしだ…！」

アスナは言った。よく見ると、体が震えていた。緊張しているのだらうと思った雅紀は…

「アスナ。」

「ん？」

「そんな緊張するな。大丈夫。精一杯、歌ってこい。」

「雅紀…わかった！」

アスナは勇気づけられたのか、勢いよく向かう。

『えーと…歌います。聞いてくださいっ!』

そう言つと、音楽が流れる

くくく

「(あれ?この音楽もどこかで…)」

雅紀は思っていたら、アスナが歌いはじめた。アリスにも負けない美声が観客を虜にする。

「これも歌番組で聞いた事が…。しかし、アスナ、うまいな。」

そうしていると、アスナは歌いきった。観客も盛大に拍手。

『はい、こちらは大変良い歌でした。それではエントリーナンバー4番、白鳥 アスナさんでした!』

男性が言い、アスナは雅紀の所に戻った。

「あ~~~~~、緊張したああ…。」

「でも、すごい良かったぞ。アスナ。」

「…ホントに?」

「ああ!ホントっ!」

「…そう／＼／」

アスナは雅紀に褒められ嬉しいのか、頬を染める。

それから数十分後。

『はい、盛り上がってきたところで、次の人っ！エントリーナンバー
111番っ！木利野 雅紀君、どうぞ。』

「あ、俺だ。」

とうとう自分の番が来たとはかりに体が震えてきた。

「雅紀、雅紀なら大丈夫だよっ！頑張っつてっ！」

「アリス…。」

「そうよ。あたしだってやったんだから、やっちなさいっ！」

「アスナ…。ああ、二人とも、ありがとう。」

二人に礼を言い、雅紀はステージに立ち、マイクを持つ。

『えー、それでは歌います。』

雅紀が言うと、音楽が流れる。

〵
〵
〵

雅紀は歌い出した。それで観客もこれまでにないほどテンションがMAXになっていた。その光景を見ていたアリスとアスナは…

「（雅紀…かつこいい…／＼／＼）」

「（あいつ…うまいじゃん／＼／＼）」

見惚れていた。そして雅紀は歌い終わり、音楽も止む。そして、しばらくすると…

『ワアアアアアアアッ！！！』

観客達は叫び拍手した。

『はい、これは素晴らしいっ！！！！もう、優勝は決まったも同然ですっ！！！！』

「へ？」「

『優勝は、木利野 雅紀君でー！すっ！！！！』

「はいいいつ!?!」

男性の優勝発言に戸惑いを隠せない雅紀。

『それでは、雅紀君に、優勝賞品としてお米一年分をプレゼントオオツ!』

「ええええつ!?!」

男性の後ろにでかい米袋があり、雅紀は驚いた。

『えー、それでは、歌自慢大会、これにて終了っ!』

こうして大会は幕を閉じた。

「雅紀、やったねっ！お米一年分だよ」

アリスははしゃいだ。

「まさか、米一年分とは…」

「それよりも、アンタって、歌うまかったのね。」

アスナが言ってきた。

「…そんなにうまかった？」

「うん。」

雅紀の質問にアリスとアスナは声をそろえて言う。

「そうかなあ？」

雅紀は疑問に思っていた。

「フフフ。じゃあはやく次の世界に行こう」

「そうね。」

「ま、このことはまた今度で良いか。行こう。」

雅紀達は次の世界にむけて出発した。

第77話（後書き）

さて、いかがでしたでしょうか？

雅紀「アリスとアスナってうまかったなあ。」

まあなあ。さてと、早めに次回の予告をしなければな。

雅紀「早くしなさい。」

おう。えへんと、次なる世界に来た雅紀達、怪人に遭遇し、変身しようとする雅紀だが、ディカオスドライバーを落とす、変身不可能に、その時、駆けつけてきたその世界のライダー。だが、あっさりとやられてしまい、ピンチ。その時、雅紀はそのライダーの変身アイテムを見つめ、そして…

雅紀「変身っ！」

『スタンディングバイツ！コンプリートッ！』

続きは次回、お楽しみにっ！！

雅紀「というか次回予告長すぎだろっ！？しかもネタばれじゃないかッ！！」

第78話

アリス宅

雅紀「次の世界はまだかな？」

アリス「楽しみだねえ。」

アスナ「そうね。」

三人は言っていると・・

シユン・・・

次の世界に着いた。

雅紀「着いたな・・・。」

アリス「そうだね。」

雅紀「町でも見てようかなあ。じゃ、俺は行ってくるから。」

アリス「あ、行ってらっしゃーい。」

雅紀はアリス宅を出て一人、町を見ていた。

雅紀「ふう、結構平和な世界だなあ・・・。」

呟いていると・・・

男性「・・・」

一人、の男性が現れ雅紀の目の前で止まる。

雅紀「何か俺に用があるんですか？」

男性「お前には悪いが消えてもらう。・・・王の命令だからな・・・。」

男性が呟くと、その姿が変わっていった。

オルフェノク『だが、俺のようにオルフェノクになれるかもしれないがな・・・。』

雅紀「オルフェノク。と言う事は、此処は「555の世界」か・・・。」

雅紀はディカオスドライバーを持ち、構えたその時っ！

オルフェノク『おおおっ！！！！』

オルフェノクが突進してきた。

雅紀「うああっ！！！！」

雅紀はそれを食らって吹っ飛び、車の上に落ちた。

雅紀「いつてえええ．．．なんつう突進力だよ．．．。もう．．．
ってあれ？デйкаオスドライバーは．．．？」

雅紀はデйкаオスドライバーが手元にないことに気付き辺りを見ると、オルフェノクの後ろにデйкаオスドライバーがあった。

雅紀「あんなところに．．．っ！」

オルフェノク『おおおっ！！』

オルフェノクは容赦なくまた突進を仕掛けてきた。

ドグシャアアッ！

車はつぶされてしまう。

雅紀「ぐあー！」

雅紀はとっさに避けたものの、頭を打ってしまう。

雅紀「くそ．．．マジで痛い。」

オルフェノク『逃げ足が速いな．．．。だが、これまでだあッ！！』

オルフェノクはまた突進を仕掛けようとしたその時．．．

ブウンッ！！

バイクの音が聞こえた。オルフェノクと雅紀はその方向に目を向けると・・・そこには・・・

男性「その子から離れろっ！」

女性「その子、逃げてっ!!」

一人の男性と女性が立っていた。

雅紀「あの人たちは・・・」

雅紀は呟いていると・・・

ガチャッ!

男性が何か、ベルトを取り出し、腰に付け、銃のグリップに似たものを持ち構えた。そして・・・

男性「変身っ！」

『スタンディングバイツ』

男性の声に反応し、グリップから音声が鳴る。そして男性はグリップをベルトの脇にある者に付けた。

『コンプリートッ!』

グリップが発し、ベルトから白い光の線がでてきて形を変え、男性の体を覆う。そして辺りが光に包まれ光が消え、男性がいた場所には別の何かがあった。それは・・・

雅紀「仮面ライダー・・・「デルタ」」

そう、555の仲間のライダー、デルタだった。

デルタ「はああっ!!」

デルタは勢いよくオルフェノクに向かって行った。

オルフェノク「デルタか・・・!」

オルフェノクは身構える。デルタはオルフェノクに向かってパンチを食らわす。

オルフェノク「くっ!こいつっ!!」

オルフェノクはお返しとばかりにデルタにパンチを食らわした。

デルタ「ぐああっ!!」

デルタは吹っ飛びフェンスにぶつかる。

オルフェノク「いくら性能が良くても、所詮はザコが持っていれば宝の持ち腐れだなっ!!」

オルフェノクは突進をしけてきた。

デルタ「くっ!」

デルタはベルトの脇にあるデルタムーバーを取り出し・・・

デルタ『ファイアッ!』

『バーストモードッ!』

デルタはオルフェノクに向けて発射。

オルフェノク『ぐふっ!ぐううう、まだまだあアッ!』

直撃をしたのになお、突進を止めないオルフェノク。デルタは再度発射するが、オルフェノクの突進は止まらず・・・

ドゴオオッ!!

デルタ『うあああっ!!!!』

デルタはそれを喰らって、吹っ飛ばされる。その拍子でベルトが外れ、変身が解けてしまった。

女性「三原君っ!!!」

女性は男性「三原 修二」に近づく。

三原「くう・・・」

三原は直撃をまともに喰らったからか動けないでいる。ソレを見た雅紀は・・・

雅紀「(このままじゃ、二人はやられる・・・ディカオスドライバーは俺の手元じゃないし・・・仮に取りに戻ったとしても、その間に二人

は……どうすれば……っ!」

そう考えていると……デルタギアが眼に入る。

雅紀「(こっとなったら……やけくそだっ!!!!)」

雅紀はデルタギアを取り……

雅紀「やめろっ!!!」

オルフェノクに向かって叫ぶ。

オルフェノク『おまえは……』

雅紀の声に反応し、オルフェノクは振り向く。同時に三原と女性も振り向く。

女性「だ、だめっ!来ちゃダメっ!!!」

三原「そうだっ!逃げるんだっ!!!」

二人は叫ぶが、雅紀は一向に逃げようとしなない。

雅紀「三原さん、コレ……少し借りますよ……!」

雅紀はデルタギアを腰に巻きつけた。

三原「なぜ俺の名前を……ていうか、それは……。ダメだっ!それを使ったら君はっ!」

雅紀「大丈夫ですよ。暴走はしないと思います。たぶん・・・ですが・・・。」

オルフェノク「ふんっ！人間のガキがソレを使いこなせると思っているのか・・・？」

雅紀「やってみなきゃ、わからんだろ？」

雅紀はデルタフォンを持ち、構える。だが、その手は震えていた。もしかしたら自分は暴走してしまうのかもしれない、そう頭に浮かんでしまう。そして・・・

雅紀「変身っ！！」

「スタンディングバイ・コンプリートツ！」

雅紀は掛け声と同時にデルタフォンをデルタムーバーに付けた。そして、デルタギアから白いフォトンストリームができて雅紀の体を覆い雅紀はデルタに変身した。だが、先ほどとは違い、稲妻が走っていた。

雅紀「・・・。」

とデルタは軽く手を握り、構える。

オルフェノク「フンッ！変身できたとしても、所詮は・・・。」

雅紀「ザコ・・・だからか？あ？」

デルタは一瞬でオルフェノクと間合いを詰めた。

オルフェノク『何っ!?!』

オルフェノクが驚いているすきに・

雅紀『フンッ!』

ドッ!

パンチを食らわす。

オルフェノク『ぐあっ!く……このオッ!』

オルフェノクは突進攻撃を食らわそうとするが……

雅紀『突進はさせないぞ?クズめ……!』

またデルタは一気に間合いを詰めた。

雅紀『はっ!せやっ!』

ドッ!バキッ!ドゴッ!!

そしてパンチを連打し、オルフェノクを吹っ飛ばす。

オルフェノク『ぐおおおっ!』

雅紀『お前の攻撃は単純に突進だけ……。それを封じれば、お前はザコに等しいんだよ!』

オルフェノク『こんな・・・こんなことがあって・・・!』

雅紀『ファイア・・・!』

『バーストモード!』

オルフェノクが言っている間にデルタは容赦なくデルタムーバーを
発射する。

バキュンッ!バキュンッ!

オルフェノク『ぐああっ!!!』

とオルフェノクに直撃。デルタはなおもデルタムーバーを連射。

女性「凄い・・・。」

三原「あの子は・・・何者なんだ・・・?」

その光景を見ていた二人は茫然と見ているしかなかった。

雅紀『さてと・・・トドメだ。死んどけ。』

『レディー』

デルタはベルトについてあるミッションメモリーを取り、デルタム
ーバーに付ける。デルタムーバーの先が伸びる。

雅紀『チェックッ!』

『エクシードチャージ』

ベルトからフォトンストリームを通じてデルタムーバーにエネルギーが注がれる。

バギユンツ！

デルタが撃つと、オルフェノクに直撃。そしてオルフェノクの目の前に三角形型の光が出現。

雅紀『ハッ！』

デルタは高くジャンプし、そして・

雅紀『ルシファーズ……ハンマー……ッ！！！！』

叫びながらデルタは片足を前に出し、光に向かって一直線に向かった。

ドオオッ！！

デルタは光に包まれ、オルフェノクを貫いた。

オルフェノク『ぐあ……あ……あ……ああ……』

とオルフェノクの目の前に の紋章が刻まれ、後ろからデルタが現れ、オルフェノクの体から赤い炎がでてきて、オルフェノクは灰化して、消えた。

雅紀『フン……』

ソレを見たデルタは虫を見るように見つめて、変身を解き、雅紀に戻る。

雅紀「コレ、ありがとうございます。」

と雅紀は三原にデルタギアを渡し、ディカオスドライバーが落ちたある場所に戻った。

雅紀「え〜と・・・あ、あったあった。」

雅紀はディカオスドライバーを見つけ、取った。その時・

三原「君ーっ！」

三原と女性が来た。

雅紀「ん？何ですか？」

三原「何ですか？じゃないよ！君は・・・一体何者なんだ？デルタに変身して、あそこまで戦えるなんて・・・。」

雅紀「あ〜・・・それですか？俺は貴方と同じく、ああいう、怪人と闘ってる者なんで・・・。」

女性「君がっ！？ウソでしょ・・・？」

雅紀「本当の話です。阿部 里奈さん。」

と雅紀は言い、女性・・・里奈は驚いた。

里奈「私の名前を……何で……?」

三原「そう言えば、俺の名前も知ってたな?どうして知っているんだ?」

雅紀「話が長くなると思いますよ?」

三原「……まあ……ここではなんだ……。知り合いがいるところに行こう。君は良いか?」

雅紀「はい。わかりました。」

里奈「でも、私達、バイクだよ?二人乗りは……違反になっちゃうし……。」

雅紀「それなら心配はいりません。デイカイザーっ!」

雅紀は叫ぶと……専用マシンデイカイザーが現れた。

雅紀「じゃ、行きますか?」

と雅紀はヘルメットを被ってデイカイザーの跨る。

三原「そ……その歳でバイクに乗れるなんて……。」

里奈「ちよつとそれは……。」

と呟きながら、三人はバイクでその場を後にした。

第78話（後書き）

さてと、いかがでしたでしょうか？

雅紀「お前には感謝してるぞ、作者っ！・・・でも、何であんな言葉遣い？」

フツ！なあに、容易いことだ・・・。そりゃ、暴走するんだもの。さてと次回は・・・

雅紀「三原さんと里奈さんと一緒にとあるクリーニング店を訪れた俺は、あの人と遭遇する。」

？「俺は・・・乾　たく・・・」

続きは次回！お楽しみにっ！！

第79話

雅紀は三原と里奈に連れられ、とある所に来た。

クリーニング店

雅紀「此処ですか。」

と雅紀はそのクリーニング店を見て言う。

三原「ああ。此処に、俺達と同じく、オルフェノクと闘っているライダーがいるんだ。」

里奈「結構、良い人たちだから。」

と三原と里奈が言った。

雅紀「(だとすれば……あの3人かな……)」

と雅紀は思いながら中に入って行った。

？「いらっしやーい！」

と奥から女性が来る。

里奈「やあ、真理。」

三原「久しぶり。」

と二人は女性、園田 真理に挨拶する。

真理「里奈に、三原君久しぶり。つと……後君は……誰？」

と真理は雅紀に聞く。

里奈「そのことで、来たんだ。乾さん、いる？」

真理「あ、巧ならおくにいるよ。此処じゃなんだし、上がって。」

と真理に連れられ、三人は奥に行く。すると……

？「あ、三原さん、里奈さん。久しぶり。」

と今度はエプロンを着た青年が来た。

真理「あ、啓太郎、巧どこ？」

と真理は青年、菊池 啓太郎に聞いた。

啓太郎「あ、たつくんなら今昼寝してるよ。」

真理「全くもうっ。ちよっと待っててね。」

と真理は一人、行くと・・・

パチインツ！！

?「いてててっ！！おい真理っ！いきなりなにすんだよっ!?!」

真理「うっさい！仕事サボって寝てないのっ！！それと、三原君達が来たの、何か用があるのよ」

何か叩く音と男性の声と真理の声が聞こえた。

?「三原達が？何の用だよお・・・」

とすると・・・奥から茶髪の長髪をした青年が頭をかきながら現れた。

?「んだよお？」

声からして機嫌が悪そうだ・・・

三原「や、やあ・・・。ちよっと言いかないかな？皆もちよっと・・・」

啓太郎・真理「「?」「」

?「ん?おい、三原、誰だよこのガキ・・・。」

と青年が雅紀を指差しながら聞く。

三原「この子に関すること何だ……。」

?「あん?」

雅紀「あ、自己紹介が遅れました。俺は木利野 雅紀です。よろしくお願いします。」

?「ああ……。俺の名は……乾 巧だ……。」

と青年、 乾 巧は言った。

三原「実は……。」

と三原は先ほどの事を話した。それに三人は驚く。

真理「この子が……デルタに!? 暴走しなかったのっ!?!?」

里奈「暴走しなかったみたい……。」

啓太郎「じゃ、じゃ、お、お、オルフェノクなの!? 君っ!?!?」

雅紀「違います。俺がオルフェノクだったら……皆さんを殺してますよ?」

と雅紀は冷静に言った。

三原「この子は、俺たちと同じ……オルフェノクと闘っているラ

ライダーなんだ……。」

巧「おい、ベルトはもう555とデルタだけだろ？まだ残っていたのか？」

雅紀「いえ、俺は……オルフェノクの他に……別の怪人達と闘っている、この世界とは別の世界……並行世界から来たライダーです。俺のベルトは……このディカオスドライバー……。」

と雅紀はディカオスドライバーを皆に見せた。

雅紀「貴方達のように……携帯を使つての変身ではありませんが・
・変身には条件があるというのは……同じです。」

巧「おいおい……。並行世界つて……。んなのあるはずがねえだろお……？」

雅紀「……それはないと言う人たちがいますが……実際には存在している。幾つもの世界に……数多のライダーが存在する……。」

真理「じゃ、君は……並行世界から来た人間……？」

雅紀「そうです……。因みに……俺の世界では……この555の物語は……アニメとして放送されており……三原さんや、里奈さんの名前も、ライダーも知ってるのも……それですから。」

里奈「なるほど……。」

雅紀「だから俺は……この世界ではイレギュラー。だから……デ

ルタに変身しても・・・何も変化は起きなかった・・・ということですよ。なんなら、555に変身してみますか・・・？」

と雅紀は聞いてみた。

巧「いや、ダメだ・・・。貸せねえ・・・。これは・・・人を守るための力だ。お前のように、得体が知れねえ奴には貸せねえ・・・。」

真理「ちよつと、巧っ!」

雅紀「その通りです。得体が知れない人間に貴重なライダーの力を貸すわけにはいかない。まあ・・・555のベルトを使わずとも・・・俺には変身できるので・・・。」

と雅紀は555のKRのカードを出し、皆に見せる。

真理「555の絵柄が描かれたカード・・・?」

三原「それが君の・・・」

雅紀「ええ・・・力です。俺のようにカードを用いて、戦術を変えるライダーもいます。」

巧「ほう・・・っ!」

と巧は突然、部屋に出て行った。

真理「ちよつ!巧!何処行くのっ!??」

と真理は追いかけようとするが・・・

雅紀「すいませんが・・・此処にいてください。」

真理「え・・・？」

と真理の代わりに雅紀が追いかけた。

外

巧「はあ・・・はあ・・・」

巧は息を荒くしながら自身の手を見る。手から・・・何か灰がでていた。

雅紀「体が崩壊しかけているようですね・・・。」

巧「っ！！お前・・・。」

巧の後ろには雅紀が立っていた。

雅紀「知ってますよ。貴方がオルフェノクだって事。貴方が崩壊を早める薬を投与されたこと・・・。」

巧「・・・。」

雅紀「あ、なぜ知ってるかは・・・アニメで見たからですよ・・・。信じてもし信じなくてもかまいませんが・・・。」

巧「・・・そうかよ・・・。」

と巧は手をポケットにしまう。

雅紀「どうするんですか？貴方は・・・これから？隠しきれませんよ??。」

巧「知るかよ。俺の勝手だ。」

と巧はぶっきらぼうに言った。

雅紀「まあ・・・そう言う性格でしたっけ・・・貴方は。一言、言っておきますが・・・王はまだ・・・死んでないですよ・・・。」

巧「っ!?!?!」

「王」という単語を聞いて巧は驚いた表情を見せる。

雅紀「俺を襲ったオルフェノクが言っていました。貴方が倒したと思います・・・奴は不死身です。仲間の・・・ラッキークローバ

「の一人が、王を蘇らせようとしているかもしれない。あるいは・
・もうすでに蘇っている。」

巧「な．．．!？」

雅紀「貴方も見たでしょ？王が仲間のオルフェノクを不死にする瞬間を．．．。奴は．．間違いない．．襲ってきますよ．．。貴方達を．．。」

と雅紀は言いながら何処から来たのか、ディカイザーに跨り、そのまま何も言わずに帰って行った。

巧「．．．．。」

巧は一人、佇んでいるだけだった。

巧「(アイツの言ったことがホントなら．．．．真理達が危険に．
．．)」

と巧は思っていた。

第79話（後書き）

さて、いかがでしたでしょうか？

雅紀「今回は戦いがなかったな。」

おう。たぶん・・・次回かな・・・？

雅紀「なぜ疑問文？まあいいや。早く次回予告。」

ああ。さてと、今回は・・・オルフェノクの王、アークオルフェノクが復活っ！

・・・かも。

雅紀「かもじゃねえっ！まじめにやれっ！！」

は、はいっ！！し・・・しかも・・・その・・・性的行為をするかも・・・あるいは・・・生殖？

雅紀「おまえなあ・・・って生殖！？」

俺の頭でネタ考えたんだけどさあ・・・オルフェノク同士のセックスもいいかなあ・・・と思っつて。

雅紀「ふざけたあ・・・こいつ・・・。」

いうなや。セックス相手は・・・あのラッキークローバーの一人ですっ！それではっ！！！！

「雅紀」マジでやるつもりだ……!! コイツを止めねば……!!

第80話(前書)

第80話

555メンバーと接触し、アリス宅に向かってディカイザーを走らせる雅紀は…

「この555の世界での俺の役目は大方、アークオルフェノクを倒す事かな…」

雅紀はディカイザーに走らせながらつぶやく。

「だけど、相手は不死だ。どうやって、倒すかが重要だな…」

そう雅紀は考えている時だった。

ドゴオオオンッ！

目の前で爆発が起きた。

「っ！なんだっ!？」

雅紀はデイクイザーを止め、警戒すると…

『うううううっ！』

オルフェノクが数体いた。

「今度は何体もか。まあいいや。被害が大きくなる前に、片づける」

雅紀はディカオスドライバーを腰に装着。

『カメンライド・ディカオスッ！』

『ハアッ！』

ディカオスはジャンプし、一体のオルフェノクに蹴りを放つ。

『っ！うおおおっ！！』

それに気付いたオルフェノク達は一斉に襲い掛かる。

『よっ！ほっ！そらっ！』

ディカオスはオルフェノク達の攻撃を軽々と避かわす。

『喰らえッ！』

ディカオスはアドベントドライバーを連射し…

『ぐあああっ！！』

オルフェノクを一体、倒した。

『一気に行くかつ!』

デйкаオスは二枚のカードを出し、デйкаオスドライバーに入れる。

『アタックライド・スラッシュッ!』

『アタックライド・ソニックッ!』

『おおおおっ!!!!』

デйкаオスは高速でオルフェノク達を真っ二つにしていった。

ドゴオオンッ!!

オルフェノクをすべて倒したデйкаオスは佇む。

『ふう…。これで全部だな。早く帰ろう』

デйкаオスは変身を解こうとした瞬間。

『カイジンライド・ドラゴンオルフェノクッ!』

『っ!!!』

何か音声が聞こえ、振り向くと…

『ウアアアアッ！！！』

デйкаオスの目の前にドラゴンオルフェノクが立っていた。

『アレはドラゴンオルフェノク！？だが、北崎はアークオルフェノクに食い殺されたはず…！それにさっきの音声は！？』

デйкаオスが驚愕している時だ。

『オオオオツ！！』

ドラゴンオルフェノクが襲い掛かってきた。

『ぐっ！！』

デйкаオスはドラゴンオルフェノクの攻撃を避け、アドベントドライバーを連射。だが…

『オオオオツ！！』

ドラゴンオルフェノクには効いていなかった。

『くっ！なら、このライダーの力を試してやるっ！！！！』

デйкаオスは一枚のカードを出し、デйкаオスドライバーに入れる。

『カメンライド・ゼロノスッ！！』

デйкаオスはDゼロノスに変身。さらにカードを取り出す。

『錆びても、強いっ！！！』

そう言いディカオスドライバーに入れる。

『ファイナルカメンライド・ゼ・ゼ・ゼ・ゼロノスッ！！』

Dゼロノスの体が錆びていき、全身が赤くなり、ゼロフォームに変身した。

『アタックライド・デネビツクバスター』

ディカオスドライバーからデネビツクバスターを召喚させる。

『おりいっ！！』

デネビツクバスターを連射。

『ぐが・・・があっ！！』

これをうけ、ドラゴンオルフェノクはダメージを食らった。

『高速形態になる前に、さっさとけりをつける！！』

『ファイナルアタックライド・ゼ・ゼ・ゼ・ゼロノスッ！！』

Dゼロノスはデネビツクバスターにエネルギーを溜め、そして…

『バスタアアア……ノヴァッ！！！』

デネビツクバスターから必殺光線が放たれる。

『グオオオオオツ！！！！』

ドラゴンオルフェノクはオルフェノクはこれをまともに食らった。

『どうだ！！』

Dゼロノスはデйкаオスに戻り叫ぶと…

『ぐ…ぐおお…』

ドラゴンオルフェノクの体が透けていき、消えた。

『爆死しない……どうということだ？』

デйкаオスは変身を解き、雅紀に戻る。

「それにさっきの「カイジンライド」って…！？鳴滝だったら、オーロラを利用して怪人を呼び出すし…まさか、俺達の他に、誰かがこの世界に来ているのかっ！？」

雅樹はあたりを見渡すが、人影がなかった。

「…この事を話さなければな」

雅紀はデйкаイザーに乗り、その場から去る。

「……………」

そんな雅紀を誰かが見ている。

「中々ですね、ディカオス。ですが、油断はしない方が身のためですよ。」

何者かが呟き…

シュンッ

何処かへと消え去った。

とある場所

そこは暗く、一つの赤い光が、照らすだけだった。

『何時、お目覚めになるのでしょうか？王よ』

一人、何かが入った水槽を眺めるものがいた。

『早くお目覚めになって…人間達を抹殺しましょう』

それは、人ではなく、オルフェノクだった。このオルフェノクはラツキークローバーの一人で・アークオルフェノク力で人間の体を捨てて不死になった「影山 冴子」またの名を「ロブスターオルフェノク」だった。

『王よ、早く貴方の声が聞きたい』

ロブスターオルフェノクは水槽に入っており、一体のオルフェノクの頭を撫でた。このオルフェノクこそ、オルフェノクの王である・アークオルフェノクだった。その時…

『…ううつ…』

アークオルフェノクの顔が少し、動いた。

『っ！！王よ、今、目覚めるのですねっ！？』

ロブスターオルフェノクは感激の声を上げる。そして…

バリイインッ

水槽が爆発し、中の溶液が飛び散った。水槽があった場所に、何か

が宙を浮いてた。

『…』

アークオルフェノクだった。ソレを見たロブスターオルフェノクは…

『ああ！王よっ！目が覚めたのですねっ！！この日をどれだけ待ったことか！』

ロブスターオルフェノクはアークオルフェノクの近くに行く。

『っ！』

突如アークオルフェノクはバランスを崩し、膝をつく。

『王っ！』

ロブスターオルフェノクはアークオルフェノクを抱える。

『まだ555にやられた傷が回復していませんね。復活したとはいえまだしばらく、体を休めていてください。』

ロブスターオルフェノクが言うが…

『その必要はない…』

アークオルフェノクがそう呟いた。

『っ！王！言葉が発せられるのですね！？』

ロブスターオルフェノクは驚く。

『うむ。貴様、我が目覚めるのを待っていたようだな』

『はい！もう一度、貴方の声が聞きたかった』

『そうか…く…！』

アークオルフェノクは体を動かそうとするも、すぐに膝をついてしまふ。

『王、まだ体を休めて…！』

『そう言うわけにはいかん…と、言いたいが…このままではダメだな…！』

すると、アークオルフェノクは両腕を握りしめ、

ズブウッ！

自信の腹を貫通させた。

『っ！？王、何を…！？』

『黙って見ている…！』

アークオルフェノクはそう言いながら、手を抜いた。両腕には灰色のような物があり、それを前に投げると…

『オオオ…』

『アアア…』

次から次にオルフェノクに姿を変えた。

『これは…!?!?』

『我が体の一部を個体にさせた物だ。この者達を使い、555を…!』

そう言った途端、アークオルフェノクの口から砂が零れおちる。

『王、今は休んでください…!』

ロブスターオルフェノクはアークの体を支え、別の水槽に入れた。

『私は、王の傍にいる。お前達…555を…倒してこい…!』

『ウウウウウ…!』

『アアアア…!』

ロブスターオルフェノクが命じると、オルフェノク達はゆらゆらと動きだし、その場を去った。

『王…』

残ったのは、水槽に入っているアークオルフェノクとロブスターオ

ルフェノクだけであった。

第80話（後書き）

今回は、アークオルフェノクの分身達が町を破壊していく。その時、奴が現れる。

巧「おまえは死んだはずだっ！なのに、なぜ生きてんだっ！木場っ！！！！！！」

「変身…」

『スタンディングバイ！コンプリート』

続きは次回、お楽しみにっ！！

雅紀「もうネタばれだ」

第81話

アリス宅

「えっ！？私達の他にも、この世界に來ている人がいるのっ！？」

第一声を上げたアリスは驚愕する。

「ああ。帰ってくる最中にオルフェノクと遭遇。倒した後に「カイジンライド」って音声が聞こえてな」

「カイジンライド？何それ？」

アスナはわからないようだ。

「まあ、簡単に言っちゃ、怪人の力を操れる力の事だ。」

「へえ……」

「たぶん、相手は俺達を狙って襲ってくるだろうから、二人とも気をつけてな」

「あたしはそう簡単にくたばったりはしないから大丈夫よっ！……ア
ンタを置いて死ぬなんて……ごめんだし……（ボソッ）／＼／」

最後にボソツとアスナは呟いた。

「私もだよ。簡単には死なない。それに雅紀を置いて死ぬなんて嫌だもん。」

アリスは徐々に雅紀と距離を縮めて行く。

「アリス…」

「私は、雅紀の事が…大好きだから…／／／」

アリスは雅紀にキスをしようとするが…

「どさくさにまぎれて何してんのよ?」

アスナが阻止した。

「ブウ…」

アリス頬を膨らませる。

「ブウ…じゃない!アンタ、毎日雅紀にキスしてんじゃないっ!」

アスナは言う。アスナの言う通り、アリスは毎日、雅紀にキスをし
ていて寝てる時には襲うという事があるのだ。

「だって…雅紀とキスしていると気持ちよくて…可愛い声を上げられると…／／／」

アリスは唇を触りながら言う。

「アンタねえ…」

「ううう…もう我慢できないっ！／＼／」

アリスは雅紀に襲い掛かった。

「アリス！？うああああっ！！！！」

雅紀は逃げようとするが時すでに遅し。獣と化したアリスに捕まえられ、キスをされ、口内で暴れられる。

「んん…！雅紀っ！雅紀っ！！雅紀イツ！！！！」

「アンタ！人が眼をそらしているすきにつ！！！！」

アスナはアリスを羽交い絞めにする。

「うにゃっ！？アスナちゃん、離してっ！！！！」

「雅紀、今のうちよっ！早く逃げなさ…」

『それじゃあ、つまらないわよ』

「ひゃあっ！？」

アスナの精神が引きずり込まれ、アスラが表に現れた。同時にアリスを解放。

「ねえ、アリス。私も混ぜて？」

「良いけど…雅紀とは…？」

「それはいいわ…。今日は譲るけど、後日は…」

「うん、わかってる。じゃあ、やるうか…」

二人は雅紀を見る。

「あ、あ、アリス、アスラ…？」

雅紀は体を震わしながら言う。二人の目を見たからだ。二人の目はまるで獣のようだからだ。

「さあ、雅紀い…／／／」

「あたしたちとやりましょう　／／／」

甘い声と言って襲い掛かってきた。

「ああああああっ！！！！／／／」

雅紀は二人に襲われた。

クリーニング店

「はあ〜。まさか、あんな子供が私達みたいに闘っているなんて、それに並行世界から来たって驚きだよね〜」

「そうだねえ。ホント、凄いやっ！」

「俺はあんまそうは思わねえが…」

三人は服を乾かしている。因みに、三原と里奈は保育所に行っている。すると…

ピリリン、ピリリン…

「あ、私だ。」

真理は携帯を取り出す。

「はい。」

『真理っ！』

電話の相手は里奈からだ。

「どうしたの？」

『オルフェノクがっ！三原君が闘っているけど、多いのっ！来てっ
！！』

「うん！分かったっ！巧！！オルフェノクよっ！！」

と真理は携帯を切って巧に言う。

「わかった。」

と巧は急いで現場に向かった。二人は後に続いた。

現場

『はあっ！せやっ！たあっ！！』

デルタに変身した三原はオルフェノク達と闘っていた。

『…お腹すいたあ…』

『人間…食っ…』

オルフェノク達はデルタに近づいていく。

『このっ！！』

とデルタはデルタムーバーを連射。すると…

ブウウンッ！

一台のバイクが現れ、次々にオルフェノク達をはねて行った。

「大丈夫かつ！三原っ！！」

『っ！ああっ！！』

巧はバイクから降り、ファイズギアを腰に巻きつけ、ファイズフォ
ンを取り出す。その時だ。

サラサラ…

またもや巧の手から灰がこぼれおちた。

「ちっ…！」

『5・5・5』

『スタンディングバイ』

巧はコードを入力。

「変身っ！」

『コンプリート！』

ファイズフォンをファイズギアにセットし、ファイズギアから赤いフォトンストリームが放たれ、巧の体を覆い、仮面ライダー「555」に変身した。

『おおっ…！』

555はオルフェノク達にむかって、パンチと蹴りを連打する。

『はっ！せやっ！』

デルタもパンチと蹴りを連打。徐々に数を減らしていく。

とある場所

『っ…！』

アークオルフェノクは水槽から頭を出した。

『どうかしたのですか？王』

『我が分身が消えていくのを感じる…！』

『何ですって…！？』

『行かねば…！555がいるはずだ…！』

アークオルフェノクは体を起こそうとするが、ロブスターオルフェノクが止める。

『お待ちください。その体では無理です』

『どけ…！』

『最適な奴がいます。ソイツを送り込みますので…！』

戻って555達は・・・

『おおおっ!!!!!!』

555はファイズエッジを振り回し…

『はああっ!!!!』

デルタはルシファーズハンマーで一気に倒していった。

『これで全部だな』

『ああ……っ!!!!』

デルタはその場で止まる。

『どうした……っ!!』

555はデルタに近寄り、デルタの見ている方向に目を向けて驚愕した。

『おまえ……』

その場にいたのは男性だった。その腰には金色のギアが巻きつけられていた。

『なぜ……』

555は震える。

『あの時、お前は死んだはずだっ！なのに、なんで生きてんだっ！？木場あッ！！！！！！』

555は叫んだ。そして男性……木場は……

『0・0・0』

『スタンディングバイ』

金色の携帯にコードを入力。

「変身。」

『コンプリート』

金色のギアから金色のフォトンストリームが放たれ、木場の体を覆

い、姿を変えた。それは…

帝王の力の一つ…

オーガだった。

第81話（後書き）

いよいよ出ました木場さんっ！

雅紀「なぜ、帝王のベルト？映画にだけしか出てこないだろ？」

いやあ、やっぱりオーガといたら木場さんじゃん。それに、なぜ帝王のベルトがでてきたのかは…何話かの話。

雅紀「そうか」

さてと、次回は555VSオーガですっ！

雅紀「映画のようだな」

第82話

『何でお前が此処に…!?!?』

『…』

555が驚いているすきにオーガは555に接近し、パンチを食らわす。

『ぐあっ!おいつ!?!やめろ木場っ!?!』

555はオーガに言うが、オーガは聞く耳持たずで何度もパンチを食らわす。

『があっ!?!?!』

555は吹っ飛ぶ。

『…』

オーガは555に迫る。その時…

『ファイアツ!?!』

『バーストモード』

と言う声と音声が聞こえ、オーガに光弾が当たる。

『…』

オーガが振り向いたその先には、デルタムーバーをオーガに向けたデルタがいた。

『アンタ、いったい何がしたいんだっ！？それにそのベルトは…！？』

デルタは聞く。だがオーガは無言で専用武器「オーガストランザー」を持ち、デルタに迫った。

『なっ！？』

デルタは反応が遅れ、オーガの攻撃を受ける。

『うあっ！！』

デルタは吹っ飛び、デルタギアが外れ、変身が解けてしまう。

『…』

オーガは555の方に顔を向ける。555はファイズエッジを持ち、立っていた。

『木場、俺達の事がわからねえのか？』

555は聞く。

『…』

だがオーガは無言で構える。

『そうか。お前に一体何が起きたのか、わからねえが、今は俺達の敵って事になってるなら、倒さなきゃならねえッ!』

そう叫び、555はオーガに向かった。

『ラアアッ!』

『…』

ガキイインッ!

両者の武器がぶつかり、火花が走る。徐々に555が押され始めていた。

『ぐ!グウウウッ!』

『…』

555は耐えるが、オーガはさらに力を入れる。

ズバアアアッ!

『うあああああッ!』

555は吹っ飛び、同時に変身が解除してしまった。

「…」

オーガは巧に近づく。巧は体を起こし…

「く…オオオオオオオオツ！！！！！」

吠えた。すると顔に狼の顔の様子が浮かんだ瞬間、巧の姿が変わり、灰色の狼と化した。

「ウルアアアアアアツ！！！！！」

これが巧のもう一つの姿「ウルフォルフェノク」だ。

「オオオオツ！！！」

ウルフォルフェノクは雄たけびを上げながら、オーガに迫った。オーガもまた、ウルフォルフェノクに迫った。

一方の雅紀は…

「もうやめて~~~~っ!! / / /」

現在、裸にされアリスと一つになっていた。

「ウフフフ やめないよお。そんな声を上げられちゃ、止まらないよお / / /」

アリスは腰を動かし続ける。

「ふ…はあ…ふう。今日は安全日だから、出してもいいよお? / / /」

「いや安全日だからじゃなくて…離してくれッ! アスラっ! / / /」

「ダメよ。まだアリスの中に出してないんだからあ。」

今のアスラも裸になって、雅紀に抱きつくように捕まえている。

「やめ…ひゃあっ! / / /」

「ウフフ もう限界がきたんだね。さあ、いっぱい出してえ… / / /」

アリスは雅紀の耳元で言う。

「ぐ…ぐぐう…。」

「あらら、我慢しているみたいだねえ。でも…」

アスラは一旦、雅紀を離し、自身の胸を掴み…

「えい」

ポニヨンッ

雅紀の顔を挟んだ。

「クククク…どう？あたしの胸は、気持ちいい？」

アスラは雅紀に胸の感触を感じさせる。

「うあ…あぁ…／／／」

雅紀はその気持ちよさに言葉がでない。

「…アリス。」

「うん。雅紀、さぁ、出して…／／／」

アリスは雅紀のを奥まで押しこんだ。

「も…もう…ダメえええ…／／／」

と雅紀は絶頂した。

「あ…あ…雅紀のが… / / /」

アリスもまた絶頂する。

「だ…出してしまった / / /」

「でも、気持ち良かったでしょ？ならいいじゃない？」

「くう…」

と雅紀は脱力し、アスラにもたれかかる。アスラは雅紀を支える。

「ウフフ 今度はあたしが雅紀と… / / /」

アスラは雅紀と唇を重ねようとした瞬間だった。

ブウウウウンッ！！！！

バイクのエンジン音が響いた。

「え？この音は…？」

と雅紀は眼を開けて言う。

「外？あ、ヒヤアッ！ / / /」

アリスは外を見ながら言った瞬間、雅紀のが抜かれていく感じがした。

「い、いめん…。」

雅紀は優しく抜き、無言で外を見ると…

ブウウウンッ！

デイクイザーが音を出していた。

「デイクイザー？どうしたんだ？まさか…何かあったのか！？」

雅紀がそう聞くと…

ブウウンッ！

デイクイザーが返事をした。

「そうか…。よし、行くぞっ！」

雅紀は服を着てデイクイザーに跨る。

ブウウウンッ！

雅紀はデイクイザーを走らせ、現場に向かった。

一方、巧は…

『オオオオツ!!!』

ウルフォルフェノクは宙を一回転してオーガを翻弄させる。

『……………』

対するオーガは無言でウルフォルフェノクに斬りかかるが、全て避けられる。

『ラアアアアアッ!!!』

ウルフォルフェノクは攻撃し、オーガにダメージを与えていく。だが…

『……………っ!』

オーガは負けじと言わんばかりにウルフォルフェノクに切りかかった。

『ウアアアアアアッ!!!』

攻撃を受けウルフルフェノクは吹っ飛び、元の巧の姿に戻る。

「ぐ…ぐう…」

巧は動けないでいる。しかも、所々灰がこぼれおちている。

『……………』

オーガは巧に近づき、オーガストランザーを持つ手に力を込める。

「くう…」

巧は死を覚悟した。その時だった。

ブウウウウンッ！！！！

ドゴオオッ！

『っ！？』

とバイクの音がした途端、オーガは何かにぶつかり、吹っ飛ぶ。

ブウウン…！！

一台のバイクが巧の前で止まる。

「巧さん、大丈夫ですか？」

それは、デイカイザーに乗っていた雅紀だった。

「おまえ……」

巧はふらついていた。

「崩壊が速くなってきたようですね。それに、あのオーガは、誰が変身しているんです？」

雅紀は巧を抱え、オーガを見ながら聞く。

「……木場だ。」

巧は答えた。

「木場……木場 勇治さんですか。死んだんじゃないんですか？」

「知るか。だけど……あいつは今……目の前にいやがる。」

「……そうですか。三原さんも大丈夫ですか？動けるなら、巧さんを連れて早くこの場から逃げてください。」

「わ、わかった。」

三原はそう言い、巧を支える。

「おまえ、一人で大丈夫かよ？」

「大丈夫です。早く行ってください。」

雅紀はそう言い、三原は巧を連れてその場を後にした。雅紀はオীগアを見る。

「木場さん。どうやら、アークオルフェノク力で蘇生されて、操り人形にされたという事ですか。」

雅紀はディカオスドライバーを腰に巻きつける。

「変身！」

『カメンライド・ディカオスっ！』

雅紀はディカオスに変身した。

『貴方を正気に戻してみせますっ！』

第82話（後書き）

さてと、いかがでしたでしょうか？

雅紀「早くない？555対オーガの場面。しかも、何でいちいちエロイ所を出すんだっ！！？しかもシリアスな時につ！！？」

いやあ、雅紀よ、この作品は、ほとんどがエロイ所も含まれた作品だぞ？シリアスや、面白い所、バトル中でも、エロイ所を出さなきゃなあ。

雅紀「…お前をボコすしか方法はないようだなあ…！」

え！？ちよつ、まつ！！あ~~~~~

ドゴツ！バキッ！グシャアアッ！！ドゴオオオオンッ！！！！

雅紀「ふう、さてと、作者が虫の息になってしまったので代わりに俺が、次回予告を…！」

ま、だ…死んで…ないぞ…。

雅紀「……次回はディカオス対オーガです。しかも、マシン対決！あの超高速マシン同士の激突だぁッ！！見ていくれよなぁッ！！それでは、次回をお楽しみにっ！」

くそぉ…いつか…お前を、恥ずかしい目にイ…

第83話

ガキイインツ!!!

雅紀『オオオオオオオツ!!!』

木場『……』

ディカオスとオーガ……二人の武器のぶつかり合いが響く。

ガキイインツ!!

雅紀『ふっ……!』

とディカオスは一旦、オーガと距離をとる。

雅紀『流石は……帝王の力って事だけはあるか……。』

とディカオスは呟く。

木場『……』

対するオーガは無言で構える。

雅紀『……こうなったら……。』

とディカオスは一枚のカードを取る。

雅紀『アンタが……地の帝王なら……。』

『カメンライド』

雅紀『こっちは天の帝王だっ！！！！』

『サイガアツ！』

とデイカオスの体を蒼いフォトンストリームが覆う。そして・・デイカオスは仮面ライダーサイガにカメンライドした。

雅紀『ハアアツ！！！！』

とDサイガは最初から装着されていたフライングアタッカーのレバーを持ち、飛び立つ。

雅紀『ハアアアアアアツ！！！！！！』

とDサイガは飛びながら、フライングアタッカーをブースターライフルモードにしてオーガめがけて撃つ。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドツ！！！！

光弾の雨が、一斉にオーガに降り注ぐ。

木場『・・・』

オーガは驚かず、オーガストランザーを振るい、防ぐ。

雅紀『オオオオオオオオツ！！！！！！！！！！』

Dサイガは止まらず、連射する。

木場『…………』

対するオーガは徐々に……ダメージを受ける。

雅紀『（よし……！これなら……）』

とDサイガは思った……その時……

ドンッ！

雅紀『なっ！？』

突如、フライングアタッカーから煙が上がる。

雅紀『何……！？』

とDサイガは驚愕していると……

ドンッ！ドンッ！

金色の光弾がフライングアタッカーに直撃。

雅紀『ぐっ……まさか……！』

とDサイガはオーガを見ると……

木場『…………』

オーガフォンとオーガストランザーを銃の形態に変えたオーガが立っていた。

ドンッ！

オーガストランザーから放たれた光弾は・・・フライングアタッカーを貫く。

雅紀『うあっ！ぐああああっ！！！！』

とフライングアタッカーから火花が飛び、Dサイガは落下し、地面に衝突した。

木場『・・・・』

オーガはオーガフォンをベルトに戻し、再びオーガストランザーを剣の形態に戻す・・・すると・・・

雅紀『オオオオオオッ！！』

とDサイガが勢いよく、オーガに突っ込んできた。

ガキインッ！

雅紀『サイガの武器は・・・ブースターライフルだけじゃないっ！！』

とDサイガは叫ぶ。そう・・・サイガの武器は他に・・・ステアコントローラーを変形させた近接戦闘用のトンファーエッジモードがある。Dサイガはそれをしようとしたのだ。

雅紀『こっちは二刀だ……。一気に倒させてもらっつー!!!』

と叫び、オーガにトンファの連打をぶつけた。

ガキインツ！ガキインツ！ガキインツ！

オーガは防ぐが、なにしろ、一刀しかないので……。もう一刀は……

ドゴオツ!!

防ぎきれない。

木場『……!!!』

オーガはDサイガから離れ、腹を抑える。

雅紀『どうやら……。まともに受けたようだ……。』

とDサイガは呟く。オーガはオーガフォンを取り出し……

ピッピッピッ

と何かコードを入力した。

雅紀『（何をするつもりだ……。？）』

とDサイガは思っていると……

木場『……!!!』

オーガはオーガフォンをベルトに戻し、Dサイガに突っ込んで行った。

雅紀『ハッ！』

木場『．．！』

再び、武器同士のぶつかり合いが響く。

雅紀『さつき．．何かを入力していた．．．。何だ？何をしようとしているんだ．．？』

とDサイガは思っていると．．

ゴオオオオツ！！！！

と言う音が聞こえた。

雅紀『な．．．何だ．．．！？』

木場『．．．』

Dサイガが戸惑っているすきに、オーガはDサイガから離れる。

雅紀『このっ！』

とDサイガがオーガに向かった．．．その時．．

ゴオオオオオオオツ！！！！

雅紀『うあああっ!!』

と突然、黒い何かが現れ、Dサイガはそれにぶつかり、デイカオスに戻る。

木場『・・・』

オーガはジャンプし、それに乗った。

雅紀『いつてえ・・・何だぁ・・・ってあれはっ!?!』

とデイカオスはそれを見て驚く。それは・・・

雅紀『ジェット・・・スライガー・・・?』

とデイカオスは呟く・・・。そう、オーガが乗っているのは、後ろにブースターがついた高速戦闘マシン「ジェットスライガー」だったのだ。・・・だが・・・

雅紀『・・・色が違うね?』

普通なら、銀と黒がはいったボディをしているが、オーガの乗っているのは、全身が黒で金のラインが入ったジェットスライガーだった。

雅紀『さしずめ・・・オーガ専用ジェットスライガー・・・てと
ころか・・・』

ゴオオオッ!

デйкаオスが言っている内に、オーガがジェットスライガーを操り、デйкаオスに接近した。

雅紀『うおっ！』

デйкаオスは避け、体勢を立て直す。

雅紀『こっちも・・・そう言うのがあるんだっ！』

とデйкаオスはカードを取り出し、

『カメンライド・デルタアッ！』

とデйкаオスの体を、白いフォトンストリームが覆い、仮面ライダーデルタにカメンライドした。

雅紀『やっぱり、コレには、デルタが似合っているからな。』

『アタックライド・ジェットスライガー』

すると・・・デйкаイザーの前にデルタのマークが出現し、それがデйкаイザーを包むと、デйкаイザーがジェットスライガーとなつて、Dデルタの方に向かった。

雅紀『ハアッ！』

とDデルタはDジェットスライガーに乗り、スピードを上げる。

ゴオオオオッ！！！！

速度は先ほどよりも増し、ものすごいスピードだった。

雅紀『ぐう・・・体が・・・バラバラになりそうだ・・・。巧さんや・
・他の人は良くコレに耐えられたなあ・・・。』

とDデルタは呟きながら、オーガに接近する。

木場『・・・!』

オーガはそれに気づき、ジェットスライガーからレーザーを発射させる。

雅紀『おっとつ!』

とDデルタはそれを避け、同じくレーザーを発射。

ドンッ!

ジェットスライガーに直撃したが、装甲が硬いのか、いまひとつダメージを与えられなかった。

雅紀『くっ!』

とDデルタはモニターのタッチパネルを操作し、

ドドンッ!

ミサイルを発射。

木場『っ！』

オーガはそれに逃れようとするが、ホーミングで避けられない。

木場『・・・』

オーガはレーザーを発射し、ミサイルを爆破したが、何発か、直撃し、装甲が傷ついた。

雅紀『おしっ！』

と余裕でいると・・・

ドドドンッ！

とオーガのジェットスライガーから、Dデルタのジェットスライガーから放たれたミサイルよりも倍の数が発射される。

雅紀『何イツ！？』

とDデルタは驚愕しながらも、適切にミサイルを撃って爆破させる。

雅紀『オオオオオッ！！』

とDデルタはオーガに接近しながらレーザーを発射。

木場『・・・』

オーガも負けじとDデルタに突っ込んでいく。

雅紀『オオオオオッ！！！！』

木場『・・・・・・・・！！！！』

そして・・・

ドゴオオオオオンっ！！

ジェットスライガー同士が衝突し・・・Dデルタのジェットスライガーが元のデイクイザーに戻り・・・落下・・・。

キィィンッ

だが・・・オーガのジェットスライガーは健在。装甲の硬さでは・・・オーガのジェットスライガーが勝っていたようだ・・・。その時！

『ファイナルアタックライド・デ・デ・デ・デルタアッ！！』

という音声が聞こえた途端、オーガめがけて、白い三角形の光が飛んできた。

雅紀『テアアアアアッ！！！！！！』

木場『！！』

オーガは上空を見ると・・・Dデルタがキックの態勢でオーガに向かって突っ込んできた。

雅紀『この落下速度なら・・・ひとたまりもないだろうっ！！！喰らえええっ！！！！』

とDデルタの足が光り・・・三角形の光に突っ込んだ。

雅紀『ルシファーズ・・・ハンマーーーーーッ!!!』

とDデルタは光に包まれた。

木場『・・・!!!』

オーガはそれを直撃。その途端・・・何かの映像が頭の中に見えた。

巧『行くぞっ!木場アツ!!!』

木場『こいつ!乾イイツ!!!』

それは・・・555と、一体のオルフェノクとの対決・・・

木場『・・・!!!』

オーガはソレを見て苦しんだ・・・

ドゴオオオオンッ!!!

雅紀『がは・・・ああ・・・』

と変身が解けた雅紀が落下していく。

ブウンッ!

それをディカイザーがフライトモードで受け止める。

雅紀「ぐ……ぐう……木場さんは……」

と雅紀は虚ろな目で見た……。

木場「……」

どうやらオーガは無事のように……現場を後にして行った

雅紀「負けたか……」

と雅紀はそのまま気絶した。

一方の巧は……

真理「ちよっ！巧！どうしたのっ！！？」

と真理は巧をみて驚く。

三原「驚くのは後だ！手当てをッ！」

真理「うんっ！」

と三原は巧をソファーに寝かせ、血だらけの服を脱がす。そして・

三原「な・・・何だよ・・・コレ・・・！！？」

と三原は驚く。救急箱を持ってきた真理も・それに驚いた。

真理「・・・そんな・・・！？？」

二人が眼にしたのは・・・巧の体から灰がこぼれていたということだった・・・。

第83話（後書き）

さてと・・・ついにばれちゃったなあ・・・巧。

雅紀「この後・・・どうなってしまうのか・・・。」

ふむ・・・。それにしても、強かったな、オーガ。

雅紀「ああ・・・。結構やばかった。」

おまえ、負けたしな。

雅紀「・・・そうだな・・・。」

ま、今日は休め。さてと・・・次回は・・・ついにアークとディカオスの対決・・・。その時・・・巧は・・・

巧「アゲウ・・・アアアアアア！！！」

次回を・・・楽しみに・・・。

第84話

オーガに敗北した雅紀はというと……

雅紀「……………」

一人……暗闇の中にいた……その時……

(……………き……………)

雅紀「……………」

雅紀の頭に……声が響いてくる。

(……………さき……………)

それは徐々に、はっきり聞こえてくる。

雅紀「……………声が聞こえる……………誰だろ……………?」

(……………雅紀……………雅紀……………)

雅紀「（この声・・・聞いたことが・・・。この声は・・・。?）」

と雅紀は辺りを見回しながら・・・声がする方を探す。

（雅紀・・・起きてえ・・・）

（起きないと・・・許さないんだから・・・!!）

雅紀「・・・そうだ・・・この声は・・・!!）」

と雅紀は声がする方に走っていく・・・。その瞬間・・・辺りが光に包まれた・・・。

雅紀「・・・んん・・・」

雅紀は重い瞼を開けると・・・

アリス・アスナ「雅紀ーっ!!」

アリスとアスナに抱きつかれた。

雅紀「うわっ!? えっ!?」

雅紀は驚く。

アリス「雅紀っ! やっと目が覚めた! 良かったよお・・・」

アスナ「アンタ・・・心配かけさせてんじゃないわよっ!! バカアツ!!!」

とアリスとアスナは目に涙を溜めながら言う。

雅紀「・・・二人とも・・・ごめん。心配掛けて・・・」

と雅紀は謝る。

アリス「ううん・・・。謝らなくていいよ・・・。でも・・・」

アスナ「アンタ・・・何があったの・・・?」

雅紀「何って・・・?」

アリス「雅紀・・・帰って来た時・・・傷だらけだったんだよ・・・?」

雅紀「あ・・・!」

と雅紀はオーガと闘った事を思い出す。

アスナ「アンタ・・・意識がないから、焦ったわよ・・・。」

アリス「すぐに傷を直したんだけど・・・雅紀・・・全然、目を覚まさないから・・・」

雅紀「うう・・・。でも・・・俺・・・意識がないからどうやって此処に・・・？」

と雅紀は聞くと・・・

アリス「・・・ディカイザーが・・・雅紀を運んできてくれたんだよ。」

雅紀「ディカイザーが・・・!？」

と雅紀は驚きながら、外を見ると・・・

ブウン・・・

ディカイザーがエンジン音を出しながら、雅紀を見ていた。

雅紀「そうだったのかぁ・・・ありがとうな・・・。」

ブウン・・・

とディカイザーは返事をする・・・待機状態になった。

アリス「それと・・・雅紀・・・話して・・・。何であんなに傷ついてたか・・・」

雅紀「あ・・・ああ。実はな・・・」

と雅紀はオーガと戦った事を話した。

アリス「まさか・・オーガと・・」

アスナ「結構、ヤバい奴ね・・そいつは・・」

雅紀「ああ・・。だが・・木場さんが・・何でオーガになつたのかだ・・。俺はアークオルフェノク力で蘇生された可能性が高いが・・どうやって蘇生したかだ・・。」

と雅紀は考え込んでいると・・

ブルルルルル・・

と言う音がした。

雅紀「あ、電話だ。」

アスナ「あたしがでるよ。」

とアスナは電話を取る。

アスナ「はいもしもし。」

？『あ・・。すみません、木利野 雅紀君て子、いますか？』

受話器から男の人の声がきこえた。

アスナ「（雅紀を知ってる・・。？）はい、います。」

？『お願い。ちょっとかわってくれないかな？』

アスナ「はい。雅紀〜！」

とアスナは雅紀を呼ぶ。

雅紀「ん？何？」

アスナ「アンタに話したいそうだよ。」

雅紀「俺に……？……はいもしもし……。」

と雅紀は受話器をとり、話す。

啓太郎「あ、雅紀君？僕だよ、啓太郎だよ。」

電話の相手は啓太郎のようだ。

雅紀「啓太郎さん。どうかしましたか？てか……どうやって此処の電話番号を……？」

啓太郎「何か電話帳にのってて……て、今はそんなことじゃないよっ！！今すぐ来てほしいんだっ！！！」

と啓太郎は言う。声からして慌てているようだ。

雅紀「なぜ？」

啓太郎「たっくんが……たっくんが……死んじゃうんだあッ！」

「!!」

雅紀「っ!!!……わかりました!すぐに行きます!!!」

と雅紀は外に行き、ディカイザーに跨る。

アリス「雅紀!?!どこ行くのっ!!!?」

アスナ「アンタ……体治ったばかりなのに、無茶しちゃダメじゃないっ!!!」

とアリスとアスナが来た。

雅紀「悪い……。ちょっと、この世界のライダーの所に……。かなり危険な状態になっているそうだ……。」

アリス「っ!!!……わかった。でも、一緒に行くよ。良い?」

雅紀「……ああ……。でも……。3人も乗せられないぞ?」

アスナ「大丈夫よ。あたしには……。あれがあるから。」

とアスナは指をさす。

雅紀「え?」

雅紀はアスナが指差した方向を見ると……。そこには、一台の蒼いバイクがあった。

雅紀「アレは?」

アスナ「あたしのバイク・・・デステンダー」よ。」

とアスナは言いながらデステンダーに跨る。

雅紀「よし、行こう。」

と雅紀達はその場を後にした。

クリーニング店

ブウウウウウンッ!!!

と雅紀達はクリーニング店に着いた。

啓太郎「あつ！やつと来たあッ！！早くッ！！」

雅紀「啓太郎さん！」

と三人は中に・・・そして見たものは・・・

巧「ア・・・グウウウ・・・！！」

体中から灰が少しずつこぼれおちている巧の姿だった。

アリス「っ！・・・酷い・・・。」

アスナ「ちょっ！コレどどういう事よっ！？」

とアリスとアスナは驚く。

雅紀「・・・啓太郎さん。これは・・・。」

啓太郎「わからないよ！帰って来た時・・・こうなってたんだから・・・。」

と啓太郎は言う。

雅紀「・・・巧さん・・・。貴方・・・オルフェノクになったのですか？」

巧「ウグウ・・・それが・・・何だよ・・・？」

と巧は言う。

雅紀「そんな状態で、オルフェノクになったら・・・体の崩壊を早めることになるんですよっ！」

と雅紀は叫ぶ。

巧「・・・それがどうしたよ・・・あん時は仕方がなかったんだよ・・・」

雅紀「貴方は・・・死ぬかもしれないのに・・・」

巧「知るかよ・・・お前には関係ねえだろ。」

雅紀「・・・ありますよ・・・。だって・・・同じ・・・ライダーなんだから・・・！」

巧「っ！・・・おまえ・・・」

巧は雅紀を見る。と・・・雅紀はその場を後にする。

アリス「あ、雅紀っ！」

アスナ「ちよっ！何処に行くのよっ!？」

と二人は雅紀の後を追う。

雅紀「ちよっと・・・行きたいところに行くんでな・・・」

アリス「何処に・・・？」

雅紀「・・・スマートブレインの会社・・・にだ・・・」

と雅紀は呟いた。

翌日

雅紀「……………」

と雅紀はとある場所に来ていた。それは……スマートブレイン本社だった建物だ。

アリス「ねえ、雅紀、何で此処にくる必要が……？」

とアリスは尋ねる。

雅紀「まあ……巧さんを救うためだ……。」

アスナ「え？あの人、もう死にかけてたでしょ……？救えるの？」

雅紀「……555の最終回を見た時……。巧さん、崩壊を早める薬を投与されてあんな状態になってしまったんだ。恐らく此処に……その解毒剤と……延命できる薬とかがあるはず。」

と雅紀は言う。

アスナ「相変わらずのオタクね……。」

アリス「だけど、それが雅紀らしいから……良いんだよね／＼」

とアスナとアリスが言っていると……

雅紀「と……此処かな？」

と雅紀は扉を開けて、中を見てみると……試験管やら、何やら、科学で使われるものが多くあった。

雅紀「研究室のようだな……。此処に薬があるはず。」

と雅紀は探していると……

『良く来たな……。別次元から来た少年、少女よ……。』

という声が聞こえた。

アリス「何!？」

アスナ「誰?!？」

と二人は警戒する。一方の雅紀は冷静でいる。

『よくぞ、私の巢に来たな……。歓迎する。』

雅紀「何が巢だよ……。つつか顔見せる。」

『良いだろう。』

と奥から何かが来る。

雅紀「……。やっぱり……。生きていたか……。」「アークオルフェノク」……。」「

と雅紀は構える。そう……。さきほどの声の主は、アークオルフェノクだったのだ。

アークオルフェノク『私の事を知っているとは……。褒めてつかわす。』

雅紀「俺達が何のために来たか……。わかってんだろうな……。」

アークオルフェノク『うむ……。あの裏切りのオルフェノクの崩壊を止めるために薬剤を奪いに来たのであるう。持ってゆくなら持つて行け……。だが……。我を倒してからだ……。』

とアークオルフェノクは言う。

雅紀「上等……。予想通りの展開だ……。」

と雅紀はディカオスドライバーを、アリスはディダークドライバー

を、アスナはデスレイクルを出し、構える。

雅紀・アリス・アスナ「っっ変身っ！」「っ」

『カメンライド・ディカオスッ！』

『カメンライド・ディダークッ！』

バアンッ！

と3人はライダーに変身した。

雅紀『行くぜっ！アークオルフェノクッ！！』

と三人はアークオルフェノクに向かって行った。

第84話(後書き)

さてと……いよいよ、555編も終わりかなあ……。

雅紀「ラスボスとバトルか……。ところで……木場さんはどうしたよ?」

すまん……。たぶん、次回か……。そのまた……。

雅紀「おい……。」

……まあ……。この話は後にして……。次回は……。アークオルフェノクVSダイカオスマンバーです。

雅紀「ちゃんと書けよ。」

うん……。それでは、次回をお楽しみにっ!

第85話(前書き)

今回の戦闘シーンですが、正直、自信がありません。

雅紀「おい。」

ですが温かく見守ってください。

雅紀「ハア〜」

第85話

『オオオオオツ!!!』

まず先制攻撃をしたのはディカオスアドベントドライバーを振るつ。

『……………』

アークオルフェノクはそれを避けた。その時だ

『ハアアアツ!!!』

背後からデイダークの攻撃を受ける。

『ぐっ!!』

『ハッ!!』

追い打ちをかけるかのように、デステイニーがアークオルフェノクの腹にパンチした。

『グッ!フツ、なかなかの攻撃だ。少しは楽しめる』

『こっちは急いでいるんだ。早く、倒させてもらっつ』

『ふん。では、我も少し、本気を出すか…!!』

アークオルフェノクは体に力を込める。

『オオオオオオ…!!』

アークオルフェノクが力を込めているとき、周囲の大气が震える。デйкаオス達は構えていると…

『ハッ!!』

アークオルフェノクの右手から光弾が発射される。

『くっ!!』

デйкаオスは避けると、後ろにあつた机が跡形もなく消えた。

『凄すぎるだろ…!!?』

『私の力はまだまだこんなものではない』

アークオルフェノクは言いながら、足に力を込め…

ドンッ!!

勢いよくジャンプし、一瞬でデйкаオスに近づく。

『早っ!!?』

『フンッ!!…!!』

『うわっ!!』

ディカオスが驚いているすきにアーケオルフェノクはディカオスを吹っ飛ばす。

『雅紀っ！』

『ぐ…』

ディダークはディカオスを支える。

『なんて脚力だ…！まあ、バツタがモチーフだしな』

『雅紀、そんなのんきなこと言っただけだよ！どうするの？』

『此処じゃ、薬も危うい。俺があいつの注意をひきつける…！アリスとアスナは…』

『薬を探せ…だね？わかったよ』

『頼む。』

ディカオスとディダークは離れ、そして…

『やーい、鬼さん、こっこま〜でお〜いで〜！』

ディカオスは注意を惹きつけた。

『よかるう。行ってやる。』

アーケオルフェノクはディカオスに向かって走る。

『おっとっ！』

デイカオスはその場を後にする。アークオルフェノクもまた、その場を後にする。

『よし、私達は薬を探そう！』

『ええっ！』

二人は薬を探す。すると…

『っ！アリスっ！来てっ！！』

デステイニーが何かを発見したようだ。

『何、アスナちゃん？』

『コレ…そうなんじゃない？』

アスナが指差したその先には幾つもの薬剤があり、そこに「二つ」、「延命」と「解毒」と書かれた薬があった。

『それだっ！』

デイダークは薬を取った。

『これがあれば、巧さんは助かる！』

『じゃあ、早いところ行きましょっ！…！』

二人が走りだした瞬間！

『待て…！』

『『っ！！』』

誰かが現れた。それは…

『貴様らをそう簡単には行かせない…！』

ロブスターオルフェノクであった。

『貴方は！？』

「私は、王に従うオルフェノクさ」

『大方、あたし達の敵…てことね。』

『その通り…出でこい！』

ロブスターオルフェノクが叫ぶと、何十体ものオルフェノクが姿を現した。

『さあ、お行き！』

『ウウウウ…』

『ゴハアン…』

オルフェノク達は二人に歩み寄る。

『オルフェノクがこんなに…!』

『このっ…!』

DESTINYはオルフェノクにパンチをぶつける。

『イタイ…イタイ…!』

『うう…。何か気味が悪い…!』

『…なら…!』

ロブスターオルフェノクは一つのベルトを取り出し、腰に巻きつける。

『3・1・5』

『スタンディングバイ』

『変身』

『コンプリート』

ベルトから蒼いフォトンストリームが流れ、ロブスターオルフェノクを包み、ロブスターオルフェノクは仮面ライダーサイガに変身した。

『サイガ…天の帝王…!』

『まさか、アンタもライダーなんてね…!』

『来い…!』

とサイガVSディダーク・デステイニーの戦いが始まった。

一方、ディカオスはというと…

『ハアッ!…!』

『ムンツ！！』

激しいぶつかり合いをしていた。

『なるほど。多少はやるようだな。555どもよりは、マシか』

『そうかよっ！！』

デйкаオスは一旦、距離を置く。

『ムンツ！』

アークオルフェノクは光弾を放つ。

『ハアツ！』

それを、デйкаオスはアドベントドライバーで撃ち落とす。

『ほう。なら、これはどうだ…！』

アークオルフェノクは指先に力を込めるとそこから青白い光線を出す。

『おつとっ！』

デйкаオスは避けると、後ろにあった自動車が鉋物と化した。

『そういえば、あの技でドラゴンオルフェノク…北崎を瞬殺して食ったんだっけ…！』

デйкаオスは冷や汗をかく。

『ハッ！』

アークオルフェノクはまた光線を放つ。

『くっ！』

『アタックライド・ブラストッ！』

デйкаオスはまた避け、同時にブラストを放つ。

『ハッ！ハッ！！』

だが、これはアークオルフェノクの攻撃で防がれる。

『流石に効かないか…！』

『ムウウン…ハアアアッ…！』

アークオルフェノクは巨大な光弾を放ってきた。

『うおっ…！？』

デйкаオスは避けようとするが時既に遅し。後数十センチの距離だ。

『やられる…！』

デйкаオスは呟いた瞬間だ。

ブウウンッ！

デیکاオスの前に何かが現れ…

ドオオンッ！！

アークオルフェノクが放った光弾を受けた。

『な…何だ！？』

デیکاオスを見ると、そこにいたのは…

『ピピッ！』

デイカイザーがロボットモードで立っていた。

『デイカイザー！？助けに来てくれたのか！？』

『ピピッ』

デیکاオスの問いにデイカイザーは頷く。

『そうか…って、あれを受けても平気って…凄い頑丈なんだな、おまえ』

『ピュイッ』

『まあ良いや。いくぜ、デイクイザー…!』

『ピュッ』

デイクオスとデイクイザーは構える。

『面白い…来るがいい!』

対するアークオルフェノクも構える。戦いはまだ、始まったばかりだ。

第85話（後書き）

さてと、これ以上は長くなるので、次回に持ち越した！

雅紀「いろいろと疑問に思っただが…なぜロブスターオルフェノクがサイガにつ！？」

あゝ、あれね。オーガも出したんだから、サイガも出さなきゃ、って思っただね。

雅紀「ほう。で、今回はこの後編だけ？」

そう！しかも、あの子が現れますよ。

雅紀「あの子って？」

そうアークオルフェノクが覚醒するまえ、ある少年がいたじゃん。

雅紀「あの子か。確か、てる…」

雅紀よ、それ以上言ったら、ネタばれだ。やめろ。

雅紀「はい。」

さてと、それでは、次回をお楽しみにっ！

第86話(前書き)

さてと・・・今回の話では・・・劇中で闘う場面がなかった・・・あのフォームが現れます。

第86話

雅紀『オオオオオオオッ！！！！』

とまず先制したのはディカオス。

アークオルフェノク『フ……。』

と対するアークオルフェノクはディカオスに光弾を発射する・・・と・・・

シュバツ！

ディカイザーがソレを切り裂く。

雅紀『ハアアアッ！！』

ディカオスはアークオルフェノクにめがけてアドベントドライバーを振るう。

ガキイツ！！

が、アークオルフェノクの体は強固で刃が通らない。

アークオルフェノク『その程度か・・・？』

雅紀『ちがうな。』

とディカオスはアークオルフェノクから離れると・・・

ドドドドドドドドドドドドドドドドッ！！！！

デйкаオスの背後から大量の弾丸が飛んできて、アークオルフェノクに当たる。

アークオルフェノク『クッ！』

アークオルフェノクは見てみると・・

ピピッ

デйкаイザーが腕をガトリング砲に変形させて撃っていた。

アークオルフェノク『ほう・・・あの機械か。なかなかの威力だ・・』

とアークオルフェノクは呟く。

雅紀『デйкаイザーの攻撃を受けてもあまりダメージがないようだな・・・。なら・・』

とデйкаオスはカードを出す。

『カメンライド・ダブルウツ！』

〜
〜
〜

カードをベルトに入れ・・二つのメロディが奏でられ、辺りに暴風が舞い、デйкаオスはDWにへと姿を変える。

そしてもう一枚、今度は金色のカードを取り出す。

雅紀『最強の敵には……こちらも最強の力で挑まなければ……!』

『ファイナルカメンライド・ダ・ダ・ダ・ダブルウツ!』

と音声が鳴った瞬間……一つのメロディが流れるとともにDWの真ん中の線から虹色のような、神々しい光があふれ、それがDWの体を包み込み……姿を現したのは……地球の全てを手に入れた最強形態……DW「サイクロン・ジョーカー・エクストリーム」だった。

『アタックライド・プリズムビツカーツ!』

とベルトからプリズムビツカーが出現。ソレを取る。

雅紀『ハアッ!』

とDW「J」Xは向かって行く。

ガキンツッ!ガキンツッ!

とDW「C」JXはアークオルフェノクに剣の連打をたたきこむ……が……

アークオルフェノク『まだまだ……ぬるいな……。』

とアークオルフェノクは平気の様子。

雅紀『く……。』

とDWCJXは一旦、後方に飛ぶ。

雅紀『なら・・・これはどうだっ!!』

『ファイナルアタックライド・ダ・ダ・ダ・ダブルウツ!!』

雅紀『ビッカーチャージブレイクッ!!』

と刃先が七色に輝くプリズムソードでアークオルフェノクに向かって・・・

ザンツ!!!

切り裂いた。

アークオルフェノク『グオッ!!』

とアークオルフェノクは吹っ飛び・・・ビルに衝突。

雅紀『どうだ・・・!!』

とDWCJXは言つと・・・

ドヒュンツ!!

アークオルフェノクがいた方向から光線が飛ぶ。

雅紀『なっ!!?うわっ!!』

とDWCJXは不意を突かれ、ビッカーシールドで防ぐが・・威力が強いのか・・吹っ飛ばされてしまった。同時に・・先ほどの光線の影響なのかビッカーシールドが石のように固まってしまった。

雅紀『ぐう・・!・・。ビッカーシールドが・・!それに今はまさか・・。』

とビルを見ると・・

アークオルフェノク『今のは効いたぞ・・。』

胸に切り傷があったアークオルフェノクがいた。

雅紀『うそだろ!?ビッカーチャージブレイクを受けても・・立っ
ていられるなんて・・!?!?』

アークオルフェノク『むう・・。傷が回復しないな・・。我が回復
能力を無効にしたのか・・?』

とアークオルフェノクは胸の切り傷を触りながらDWCJXに向か
って行く。

雅紀『くそっ!!!』

とDWCJXはプリズムソードを持ってアークオルフェノクに切り
かかる。

アークオルフェノク『自棄を起こしたか・・。馬鹿な奴よ・・。
』!』

とアークオルフェノクは拳を振りかぶり……

ドゴオッ!!

DWCJXの腹にぶつけた。

雅紀『がああっ!!』

とDWCJXはビルに衝突。

ピピッ!

デイクイザーは主のかたきと言わんばかりにアークオルフェノクに突っ込む。

アークオルフェノク『フン……。貴様も……。愚かな……。』

バキィッ!!

とアークオルフェノクパンチを食らって、吹っ飛ばされる……。アークオルフェノクから受けた所は凹んでしまった。

ブウウウン……

同時に戦闘不能なのか……。バイクモードに戻って機能停止してしまっ。

雅紀『デイクイザーが瞬殺……。!?あのパンチ……。さっきの光弾よりも威力が段違いってことかよ……。』

とDWCJXは立ちあがるが・・・ふらつく。

アークオルフェノク『さて・・・お遊びはここまでとしよう・・・。』

とアークオルフェノクが呟いた瞬間・・・！

ドゴオッ！

一瞬でDWCJXの腹にパンチを食らわす。

雅紀『があっ！！』

とDWCJXは吹っ飛ばが・・・アークオルフェノクはDWCJXの頭を掴んで、吹っ飛ばされないようにした。

アークオルフェノク『まだまだ・・・苦しめ・・・！』

ドゴッ！ドガッ！バキイッ！！

雅紀『ガ・・・！！グッ！！ガアアッ！！！！』

とDWCJXの体から火花が飛び散る。やがて・・・アークオルフェノクはDWCJXを離し・・・

アークオルフェノク『フンッ！！』

蹴りを食らわす。

雅紀『がつー！！』

DWCJXはまたしてもビルに衝突。

アーケオルフェノク『次で貴様をあの世へ葬り去ってやる。』

とアーケオルフェノクは腕にエネルギーを集中させる。

雅紀『（俺・・・死ぬのかな・・・？）』

とDWCJXは戦意喪失しかけていた。そんな時・

アリス『雅紀！』

アスナ『雅紀っ！』

とDWCJXの脳裏に・・・アリスとアスナの顔が浮かび上がる・・・
同時に・・・

巧『アッ！グッ！！アアアッ！！』

体中から灰がこぼれおち・・・苦しんでいる巧の姿が浮かび上がる。

雅紀『！！・・・そうだ・・・。』

とDWCJXはゆっくりと立ち上がる。

アーケオルフェノク『む・・・？まだ立ち上がれる力が残っていたか・・・。』

とアーケオルフェノクは呟く。

雅紀『俺は・・・こんなところで死ねない・・・。アリスやアスナを悲しませてしまうし・・・何よりも・・・巧さんを助けられないといけないんだあッ!!--!!』

とDWCJXは叫ぶ・・・と・・・

フアアアン・・・

デйкаオスドライバーから光が放たれる。

雅紀『え・・・?』

DWCJXが戸惑っていると・・・

シュンッ

デйкаオスドライバーから放たれる光が徐々に集合し、形を変えて・・・一枚のカードとなった。

雅紀『何だよ・・・このカード・・・?』

とDWCJXはそのカードを手に取り、絵柄を見る・・・。

雅紀『これは・・・!まあ・・・今使わないと・・・いけないか・・・力を貸してくれ・・・。』

とDWCJXはベルトにそのカードを入れる。

『ファイナルカメンライド・ダ・ダ・ダ・ダブルウツ!--!!』

極のWだ・・・!!」

とDW C J X・・・いや・・・、左側が赤色に・・・瞳が蒼に変色した・・・究極のW・・・「サイクロン・アクセル・エクストリーム」が言い放った。

アークオルフェノク「面白い・・・。究極の力・・・。見せてもらうっ!!」

とアークオルフェノクは一気にDW C A Xとの間合いを詰め・・・

アークオルフェノク「ハッ!!」

とアークオルフェノクはエネルギーが集まったパンチを食らわす・・・
・だが・・・

ガシイッ!!

DW C A Xが素手で止めたのだ・・・!

アークオルフェノク「な・・・何っ!?!」

雅紀「オオオオオッ!!」

アークオルフェノクが驚愕しているすきに・・・DW C A Xの左手から炎がいきおいよく現れる。

雅紀「ハアアアアッ!!!!」

ドガアアアアッ!!

と炎を纏った拳をアークオルフェノクにぶつけた。

アークオルフェノク『ぐあああああつ!!』

とアークオルフェノクはビルに衝突……。壁を壊して内部まで吹っ飛んだ。

アークオルフェノク『な……。なんという力だ……。』

とアークオルフェノクは呟く。アークオルフェノクの胸から大量の灰がこぼれおちていた。

アークオルフェノク『まさか……。私の肉体の一部を……。一撃で灰化させるとは……。』

と言っていると……

ジュアア……

DWCAXが先ほど、アークオルフェノクが作った穴から中に入ってきた。その時に壁がDWCAXから発せられる熱気で溶けてしまっていた。

アークオルフェノク『物凄い熱量だ……。だが……。それだけでは勝てぬぞおツ!!』

とアークオルフェノクは光線を放つ……。が……

雅紀『ウアアアアツ!!』

DWCAXが、今度は右側のサイクロンサイドから暴風を発生させ・

ビュオオオオオオツ！！

光線をかき消した。

アークオルフェノク『なっ！！？』

雅紀『テアアアアッ！！』

とDWCAXは風を纏った右拳と、炎を纏った左拳をアークオルフェノクにぶつける。

ドゴツ！ドガツ！！バキッ！！！グキイイツ！！

アークオルフェノク『ぐあああっ！！』

とアークオルフェノクは地面にぶつかりながら吹っ飛ばす。

アークオルフェノク『ぐ．．．なんて力だ．．．こんな力を隠し持っていたとはな．．．』

とアークオルフェノクは言うが．．．体中から灰がこぼれおちているため、動けずにいた．．．

雅紀『トドメだ．．．』

『ファイナルアタックライド・ダ・ダ・ダ・ダブルウツ！！』

とDWCAはFARを発動……。体から暴風と炎が中を舞う……。

雅紀『オオオオオツ!!!!』

とDWCAはアークオルフェノクに向かって走り……

雅紀『ハッ!』

ジャンプする……。そして……

雅紀『ダブルサラマンドーエクストリームツツ!!!!!!』

と暴風と炎を纏ってアークオルフェノクに突っ込む。

ドゴオオオオオツ!!!!

アークオルフェノク『グオオオオオオオツ!!!!』

とアークオルフェノクは叫び……。辺りは炎に包まれる。

雅紀『ハア……。ハア……。ハア……。ハア……。あ……。アークオルフ

エノクは……。?』

と辺りを見回すが……。誰もいなかった。

雅紀『ハア……。ハア……。逃げたのかもしれない……。クウ……。こんなところで……。寝ちゃいけない……。だろ……。』

と変身を解除し・・・元の雅紀に戻ると・・・

バタツ・・・

倒れてしまった。

一方・・・アークオルフェノクは・・・

アークオルフェノク『ぐ・・・ぐう・・・』

一人、通路にいた。

アークオルフェノク『くっ・・・まさかこの我が・・・ここまでやられるとは・・・不覚だ・・・。』

と呟いていると・・・

『だれか・・・助けて・・・』

と少年の声が聞こえた。

アークオルフェノク『・・・まだ眠っていないかったのか・・・』

とアークオルフェノクは自身の影を見ると・・・

男の子『誰か・・・助けてよぉ・・・』

と影が一人の少年の姿に変わった。

アークオルフェノク『貴様は我の糧・・・我が覚醒するまで守られていた器だ・・・。もう・・・出てくるな・・・』

男の子『助けて・・・たすけ・・・』

と男の姿は消えて、元の影に戻った。

アークオルフェノク『ぐう・・・回復するのに・・・少々時間が必要だな・・・。』

と、アークオルフェノクは呟いていた。

第86話（後書き）

さてと・・・いかがでしたでしょうか？

雅紀「おい、あのWは何だ・・・!？」

あつれ〜？雅紀はわからないのか〜？そりゃそうだよね〜、お前の世界は消えちゃったから、そっちではまだオーズも放送されてないんだよね〜・・・

雅紀「うっぜ〜・・・」

ま、この話は後でにして・・・まあ、一回は出したって思ったから急ぎよ出してみちゃいました・・・みたいな？

雅紀「もういい・・・お前は喋るな・・・」

オーマイガーーー・・・

雅紀「はあ・・・さて、次回はサイガVSディダーク・デステイニ
ーとのバトルです・・・。お楽しみに・・・」

第87話

デイクオスがアークオルフェノクと戦闘している頃、ディダーク、デステイニーはというと…

『ハアアッ!!!』

『フッ!!!』

『オオッ!!!』

激しい戦いを繰り広げていた。

『ハッ!!!』

ディダークはディダークドライバーをサイガにめがけて振るう。

『フンッ!!!』

サイガはすかさず避ける。その時…

『ハアアッ!!!』

デステイニーがサイガにパンチを食らわす。

『ウツ！』

サイガは腹を抑える。

『今だっ！』

ディダークはとどめを刺そうと動こうとした。その時…

『ゴハン…』

『ウウウ…』

オルフェノクが行く手をふさぐ。

『なっ！？』

『オオオ…！』

ディダークが驚いているすきに、オルフェノク達は一斉にディダークに襲い掛かる。

『アリスっ！』

『よくやってくれた…！さあ、今度は私の番だ…！』

『シングルモード』

サイガはサイガフォンを銃形態にしてデスティニーに向かって放つ。

『あつ！』

デステイニーはダメージを受け、一旦、ディダークの所に行き、オルフェノク達を殴る。

『アリスっ！しっかりしなさいっ！』

『アスナちゃん…！』

ディダークとデステイニーは構える。すると、出入り口からオルフェノクが沸いて出てきた。

『うっ！コイツら…どんだけいるのよ！？』

『流石にちよつとやばいかも…』

『フン！さあ、殺れ！！』

サイガが言い放ち、オルフェノク達は一齐にノロノロと二人に迫る。

『あたし達は、はやく雅紀と合流して、巧さんの所に薬を届けなきゃいけないのにつ…！！』

『落ち着いて、アスナちゃん』

ディダークは冷静に言い、カードを出す。

『お願い。力を貸してね？』

ディダークはカードにそう言い、ディダークドライバーに入れる。

『カメンライド・ブレイドッ!』

『ハッ!』

ディダークはディダークドライバーを振ると、目の前に仮面ライダーブレイドが出現した。

『サンダー』

『ハアアアッ!!!』

ブレイドは雷を発生させ、それをオルフェノクに向かって放った。

『オオオオツ!』

オルフェノク達は倒れる。

『なんだ!? 一体どこから現れたんだ!?』

『アリス、そいつは?』

『私のお友達。さてと...』

『ファイナルフォームライド』

『ちょっと痛いけど、我慢してね?』

『ブ・ブ・ブ・ブレイドッ!!!』

『ハアアッ!』

ディダークはディダークドライバーでブレイドを切り裂く。

『がっ!』

『ちよっ! 味方を攻撃してどうすんのよっ!?!?』

『大丈夫。これは攻撃じゃないから』

そう言うと、ブレイドの体が變形して、大剣「ブレイドブレード」になる。

『よいしょ』

ディダークはブレイドブレードを持つ。

『ライダーを剣に…って、あたしも雅紀に戦艦にされたことが…』

DESTINYは以前にディカオスにFFRされた事を思い出す。

『仲間を剣に變形させるとは…何という能力なんだ!?!?』

『これは、私のようなライダーしかできない技だよ。さてと、一気にいくよ…!』

ディダークが呟いて瞬間…

『ギャッ!?!?!?』

二人の前方にいたオルフェノク達は真つ二つに切られた。

『なっ!!?!?』

サイガは驚いていると…

『ファイナルアタックライド・ブ・ブ・ブ・ブレイドッ!!』

『今度は貴方の番だよ?』

ブレイドブレードを怪しく光らせるディダークが言う。

『くそっ!!!!』

サイガは自棄を起こして、背中のブースターライフルで撃とうとするが…

『ディダークエッジッ!!』

ディダークによる攻撃が早く、不発に終わってしまう。

『あああああっ!!!!』

サイガは吹っ飛んだ。同時にサイガドライバーが壊れて、変身が解除した。

『あらら、壊れちゃった。』

『馬鹿な…!天の帝王の力が…』

アリス『貴方みたいな人では、帝王の力は使えこなせないんだと思うよ』

ディダークはブレイドブレードを消して、言う。

「くっ！ならば…！」

冴子は立ち上がり、ロプスターオルフェノクと化す。

『ハアアアツ！！』

ロプスターオルフェノクはディダークに接近する。

『ハアアアツ！！』

対するディダークはディダークドライバーを使って迎え撃つ。剣と鎌が激しくぶつかり合い、火花が舞い、お互い、一歩も譲らない。そして…

『テヤアアアツ！！』

ディダークがロプスターオルフェノクの腹めがけてディダークドライバーを振るった。

『キャアアアツ！！』

ロプスターオルフェノクは勢いよく壁にぶつかる。

『どう？これで勝負あったわ。』

そう言っていると…

『ククククク…』

ロブスターオルフェノクは笑う。

『…何がおかしい？』

『クク…！私のことを甘く見るな…！』

ロブスターオルフェノクは立ち上がる。するとディダークにやられた所が消えていった。

『えっ！？』

『フン。私は王の力で不死になったのだ。これくらいの傷、大したことはないのさ』

『…！』
『なら、それ以上のダメージを食らわせばいいってことじゃないっ！』

DESTINY-1がジャスティスフォームとなって接近してきた。

『そう言えば貴様もいたな』

『忘れてもらっちゃ困るわよっ！』

DESTINY-1JFはジャスティスカリバーでロブスターオルフェノクを切る。だが、それをロブスターオルフェノクは剣で防ぐ。

『まだまだだ!!』

ロブスターオルフェノクが叫ぶと…

『ウウウウウ…』

オルフェノク達がでてきた。その数、二十体以上。

『またっ!?!』

『フンッ!』

『あっ!』

ロブスターオルフェノクにはじかれ、デステイニーJFは後ずさる。

『どっつするのさ、この数』

とデステイニーJFは焦っていると…

『大丈夫だよ。こんな時には…』

ディダークは一枚のカードを取り出す。

『アスナちゃん、ちょっと我慢してね?』

『え?ま、まさか!?!』

『そのまさか』

『ファイナルフォームライド・デ・デ・デ・デステイナーッ!!』

『それっ!!』

『痛あっ!?!』

ディダークに切られたデステイナーJFは元のデステイナーフォームになると、体が変形していき、デステイナーミティアにへと変わった。

『なっ!?!またこんな姿にっ!?!』

『ちよつとの間、我慢してね?』

ディダークはそう言いながらデステイナーミティアとドッキング。

『いつけー!』

ディダークはデステイナーミティアについている武器を乱射。

『オオオオオオッ!!?!』

一瞬でオルフェノク達を撃破。

『なっ!?!』

ロブスターオルフェノクが驚いていると...

『ファイナルアタックライド・デ・デ・デ・デステイナーッ!!』

『いくよ、アスナちゃんっ!』

『ええっ!もう全力全開よっ!!!』

『(それって、なのはちゃんという言葉だよ?)』

デイダークはデステイニーミーティアにエネルギーを込め、そして…

『『ミーティア…フルバーストっ!!!』』

ロブスターオルフェノクに向けて、幾つものミサイルとビームを放つ。

『なっ!?!ウアアアアアアッ!!!!!』

ロブスターオルフェノクはその攻撃を喰らい、そして爆発する。デイダークはデステイニーミーティアとドッキングを解除し、デステイニーミーティアは元のデステイニーに戻った。

『やったのかしら?』

『ううん。たぶん、生きてる。だって、不死って言ったもん。』

二人は警戒するが、気配を感じない。

『逃げた様ね』

『そうだね。さてと、今のうちに雅紀と合流して、巧さんにコレを届けなきゃ…』

デイダークはその場を後にしようとした時だ。

『くっ！！』

突如、胸に痛みが走り、胸を抑える。

『ん？アリス、どうしたの？』

デステイニーは聞くが、それはデイダークの耳には入ってない。デイダークの脳裏にはある光景が浮かんできた。

「……………」

炎の中で倒れている雅紀の姿だった。

『雅紀…！？雅紀が…雅紀が危ないっ！！』

デイダークは猛スピードでその場を後にした。

『ちよっ！アンタ、そんな急いで何処に行こうとしてんのよっ！！』
『？』

『雅紀の所によ』

心の中でアスラが話しかけてきた。

『雅紀の所？雅紀がどうしたのよ？』

『今、この建物の中に生体反応を感じるわ。だけど、弱い反応よ。しかも、こんな純粹で汚れてない命は雅紀しかいないわ』

アスラの言葉にデステイニーは驚く。

『えっ!!?じゃ、じゃあアリスがさっき急いで何処かに行ったのは…』

『雅紀の事を感じ取ったのよ』

『こうしてはられないっ!!早く雅紀を助けに行かないとっ!!』

『あたしが言った方向に行きなさい。道案内してあげる!』

『ありがとう!!』

デステイニーはもうダッシュで雅紀の所に向かった。

第87話（後書き）

さあ、どうでしたか？面白かったですか？

アリス「何がおもしろかったのかな？作者さん？」

どおっ！！？あ、アリスっ！！？何でここに！？

アリス「今回は雅紀の代わりだよ。それよりも、最後はどうしてあんなの書いたのかな？かな？」

あ、アリスさん、そんな怖い顔で聞かないくださいよお。

アスナ「どうなのよっ！！教えなさいっ！！」

って、アスナもかいいいつ！！？

アスナ「お・し・え・な・さ・いっ！！！！」

アリス「教えないと…覚悟はいいかな？」

ヒイイツ！！わ、わかりましたっ！！まあ、簡単にいえば、前回で雅紀はぶっ倒れたから。今、どうなっているのか…な…

アスナ「そう…なら、覚悟はできているのねえ…！！」

アリス「雅紀を危ない思いをさせてばかりの作者さんには、おしおきをしないと…」

ヒッーッ、ここは一時退ち…

アスナ・アリス「無駄っ！！」

ドゴッドガツバキツズシユツグチャアアツ！！！！

アツギヤアアアアアアツ！！！！

アスナ「ふう…さてと、次回は！」

アリス「雅紀の救出と、巧さんの救出だよっ！」

アスナ・アリス「お楽しみに」

ぐぐふう…まさか此処まで二人は雅紀の事を…！おそろ…し…

第88話(前書き)

更新遅れてすみませんっ!!

ええ・・・今回の話は・・・あまり期待しないでください。

第88話

ゴオオオオ・・・

とある場所で、炎がゴオツ！と燃え上がる。そして、一人・・・その場で倒れている者がいる。

雅紀「・・・・・・・・」

他でもない雅紀だった。意識を失っているのか・・・力なく倒れている。

ゴオオツ！

炎の勢いは・・・確実に増してきている。

一方のディダーク・デステイニーは・・・

アリス『雅紀・・・雅紀・・・雅紀・・・!!』

廊下をものすごい勢いで走って行くディダーク・・・彼女の頭には・
・雅紀の事でいっぱいになる。

アスナ『ハア・・・ハア・・・あ・・・アリスってば・・・あんなス
ピード出して・・・疲れないの・・・?』

とこちらはデステイニー・・・ライダーで身体能力が何倍にもなっ
ているが・・・スピードはディダークの方が上で、一向に追いつか
ない・・・。

アスラ『ならフリーダムになって飛べばいいじゃない』

と心の中でアスラが言う。

アスナ『確かにそうだけど・・・アレって疲れるのよ・・・。』

アスラ『そんなこと言って言ってる場合じゃないっ!! 雅紀が死ん
でもいいのっ!!?』

アスナ『っ!!・・・確かにそうね! やってやるわっ!!!』

とDestinyニーのベルト、Destレイクルの中心が青から、白に変わる。

アスナ『フォーム・・・フリーダムッ!!!』

と叫ぶと、Destinyニーの体に変化し、白く染まり、フリーダムフォームに変わる。

アスナ『ハッ!』

とDestinyニーHFは勢いよく飛び、ディダークと同じスピードで向かう。

戻って、雅紀の方は・・・

ゴオオツ！！

以前よりも炎の勢いが増している。その時・

雅紀「・・・う・・・うう・・・。」

雅紀は重い瞼を開けた。

雅紀「此処は・・・？　そう言えば、アークオルフェノクと闘って・
逃げられて・・・って熱っ！？」

と雅紀は今の自分の状況を把握してきた。

雅紀「・・・そう言えば・・・俺・・・。」

雅紀は脳裏にある光景を思い浮かべる。

雅紀『ダブルサラマンダーエクストリームッ！！』

DWCAXになった自分が必殺技をぶつけて、この部屋を炎上させたことを・・・。

雅紀「・・・やばいな・・・。」

と雅紀は危険を察して起きようとするが・・・なかなか起き上らない・

雅紀「あれ・・・？　何で動かないんだ・・・？　それに・・・体が重たいし・・・妙に眠い・・・。」

と雅紀は言う。

雅紀「そうか……。WCAXの反動かな……。無我夢中でやっ
てたもんなあ……」

と雅紀はのんきに言うが……。内心では焦っていた……。

雅紀「……。俺……。このままどうなる……。？」

と雅紀は呟いていると……

オルフェノク『オ……。オオオオ……。』

オルフェノク『ゴハアン……。』

四方八方からオルフェノク達が現れた。

雅紀「オルフェノク……。やば……。」

と雅紀は必死で体を動かそうとするが……。動けない。

オルフェノク『ゴハアン……。ミツケタア……。』

オルフェノク『タベヨウ……。タベヨウ……。』

とオルフェノク達は雅紀に近づく……。

雅紀「くう……。手だけでも動かせれば……。アドベントドライ
バーで追い払えるのに……」

と雅紀は悔しそうに思う。

雅紀「（嫌だ・・・！俺はまだこんなところで死ねないっ！！巧さんを助けなといけないし・・・アリスやアスナ・・・なのは達に、悲しい思いをさせてしまっ！！）」

と雅紀は心の中で叫びながら、起き上がるつとめるが・・・

オルフェノク『ゴハアン・・・』

オルフェノク達はすでに眼前にいた。

雅紀「な・・・！！」

オルフェノク『イタダキマス・・・』

と一体のオルフェノクが口を大きく開けて、雅紀の頭を食べようとする。

雅紀「く・・・」

と雅紀は言つと・・・

ザンツ！！！！

という音が聞こえた。

雅紀「え・・・？」

雅紀は見ると・・・

オルフェノク『ア……………』

自分を食おうとしたオルフェノクの頭半分がなくなっていた。そして、オルフェノクは力なく倒れて灰化した。

オルフェノク『ダレ……………？』

オルフェノク『ゴハアン……………マダアルウ……………？』

とオルフェノク達は言うところ……

？「残念ながら……………貴方達にはもうご飯はない……………」

オルフェノク達『！！』

オルフェノク達は声がした方向に顔を向けると……………そこにいたのは……………

アリス『雅紀を食べようとした貴方達には……………死が待ってる……………
……………！！』

デイダークドライバーを掲げたデイダークだった。

雅紀「あ……………アリス……………！！」

アリス『雅紀……………少し待っててね……………？』

とデイダークは雅紀にそう言い……………

ザンツ！ズバツ！！ザンツツ！！

目にもとまらぬ速さで、次々とオルフェノク達を斬っていく。

ポトポトツ

後に残ったのは肉片……。それも灰化して消えた。

アリス『ふう……。雅紀、大丈夫？』

とディダークは雅紀に近づきながら聞く。

雅紀「ああ……。大丈夫だけど……。体が動かないんだ……。」

と雅紀は言う。

アリス『体に反動を残すほどの力を使ったんだね……。肩を貸すよ。』

とディダークは雅紀を肩車して起こす。

雅紀「ありがと……。」

アリス『うん。早く此处から出なきゃ。雅紀が死んじゃう！』

雅紀「いや……。俺はまだ死んでない……。」

としていると……

オルフェノク達『ゴハアン……』

とまたもやオルフェノク達が現れた。

アリス『くっ！まだいたのねっ！』

とディダークはディダークドライバーを構えると・・・

ドゴオオンッ！！

？『ラアアアアッ！！！！』

突如、壁が壊れ、そこからエネルギー弾が飛び・・・

オルフェノク達『オオオツッ！？』

オルフェノク達を殺していく。

アスナ『どんなもんよっ！・・・あ、二人とも、助けに来たわよっ！』

と壁の向こうから、デステイニーHFが姿を現す。

雅紀『アスナっ！』

アスナ『雅紀・・・。良かった、無事のような・・・。』

アスラ『ホント、よかったわ・・・』

とデステイニーHFとアスラは言う。

オルフェノク達『ウウウ……オマエリア……コロシテヤルウウ……』

と残ったオルフェノク達が襲い掛かる。

アスナ『アリスっ！アンタはそのまま雅紀を担いでなさいっ！！』

アリス『あ、うんっ！』

ディダークが返事をして、デステイニーHFは前に出る。

アスナ『ハアツ！！』

と背中からドラグーンを飛ばす。

アスナ『ドラグーンッ！フルバーーストッ！！』

とドラグーンと両手に持つてるフリーダムバスターから一斉に大量のエネルギー弾が発射され……

ドッゴオオオオオオッ！！！！

次々とオルフェノク達を撃破。破壊していく。

アスナ『はい、一丁上がり……。さてと……。いくわよっ！』

アリス『うん！』

と三人はその場を後にした。

外

雅紀「ハア……助かった……。」

と雅紀は安心する。

アリス「そうだね……。はあ、雅紀が無事でよかった……。」

と変身を解いたアリスは雅紀を見ながら言う。

アスナ「全くよ……。一時はどうなるかと思った。」

と同じく変身を解いたアスナが言う。

雅紀「あはは……。心配掛けてごめん……。それと……薬は……？」

アリス「もちろん。」

アスナ「持って来たわ。」

とアリスとアスナが雅紀に薬を見せる。

雅紀「そうか……。これで巧さんは助かるな……。よし……。このまま行こう……。一刻の猶予もない。」

アリス「そうだね。雅紀は……。寝てた方がいいよ。」

雅紀「大丈夫……。」

アスナ「大丈夫に見えないわよっ！馬鹿っ！！！」

アリス「体が反動で動かないんだから……。私が運転するよ……。」

雅紀「え……。？アリスって運転できるの……？」

アリス「これでも、運転はできる方よ。第一、雅紀は無免許でしょ？」

雅紀「……すいません。」

アリス「……ふふ……。さてと……。行こうか。」

とアリスはデイカイザーに跨り、その後ろに雅紀を乗せ、出発する。

アスナ「……。いつもあの二人はべったり……。」

アスラ『ホントよお・・・嫉妬しちゃうわあ・・・』

アスナ『アンタと同じね・・・。』

とアスナとアスラは言いながら、二人に嫉妬オーラを出しながら、後を追いかけた。

クリーニング店

巧『ぐ・・・あっ！ぐああっ！！』

と巧の灰化はどんどん、速くなってきている。

啓太郎『たっくんっ！しっかりしてっ！！』

真理「巧っ！！死なないでっ！！」

と二人は巧そう言う。その時・・・

アリス「すいませんっ！！」

アスナ「お待たせしましたっ！！」

とアリスとアスナが駆け付けた。

啓太郎「あ、君達、何で出て行っちゃったの！？たつくんがこんな状態なのにっ！！」

アリス「啓太郎さん、怒らないで・・・さて、巧さん、ちょっと痛いけど我慢してください。」

とアリスは薬と一緒に持ってきた注射器に解毒剤を入れて・・・

プスッ

巧の腕に刺す。そして、薬は巧の体内に入っていく。

巧「く・・・あ・・・」

と徐々に巧の灰化が治まってきた。

啓太郎「たつくんっ！」

真理「巧っ！！」

と二人は安息する。

アスナ「安心するのは、まだですっ！さあ、今度はコレっ！！」

とアスナはアリスに延命の薬を渡し、アリスは注射器に入れ、

プスッ

また腕に刺す。

巧「・・・ふう・・・スウ・・・」

注射をした後、巧は眠りに着く。

アリス「これで、灰化は免れました。」

アスナ「ついでに、延命の薬を注入したから、生きていけるわっ！」

真理「はぁ・・・巧い・・・」

啓太郎「良かったよぉ・・・」

と二人は涙を流す。

アスナ「これで、一件落着ね・・・」

アリス「いいえ・・・。まだ、私達は残ってるわ・・・。」

アスナ「アークオルフェノクを倒すってことね・・・。」

と二人は言う・・・。

一方の雅紀は・・・

雅紀「ふゆう・・・すぴい・・・」

寝てたとな・・・。

第88話（後書き）

はぁ・・・さてと・・・今回はあまり自信がなかったよ。

雅紀「そうかい。」

それに、こっちは忙しいから中々更新できなかった。

雅紀「そうか。」

さて、今回は・・・目覚めた巧の前に、木場、現るっ！

巧「お前の目を覚ましてやるぜっ！木場あつ！」

『スタンディングバイ』

『アウエイクニム』

次回、ブラスター・・・登場。お楽しみっ！

第89話

巧を崩壊から救って一日・

クリーニング店

巧「ん・・・んん・・・」

巧は重い瞼を開ける。

巧「うう・・・確か、俺は・・・っ！」

と巧は自身の体を見る。

巧「灰がでてこねえ・・・それに、いつもの痛みもねえし・・・」

と巧はふとテーブルを見ると・・・そこにあっただのは、雅紀達がつ

てきた解毒薬と延命薬だ。。。

巧「・・・あいつらが・・・」

と巧は思い、下を見ると・・・

啓太郎「・・・」

真理「・・・」

啓太郎と、真理が寝てた。

巧「こいつら・・・床で寝る奴がいるかよ、普通・・・。おいっ！起きろッ！！」

と巧は二人の頭を叩く。

真理「痛っ！・・・あ・・・巧」

啓太郎「んん・・・あ、たっくんっ！」

巧「たっくん！寝るならベッドで寝ろよ・・・」

真理「巧っ！」

啓太郎「たっくんっ！！」

と二人は巧に抱きつく。

巧「うおっ！？ば、馬鹿っ！お前ら急に抱きつくくなッ！暑苦しい！」

「!!」

真理「巧く、良かったあ……!!」

啓太郎「ホントだよっ！良かった〜〜っ!!」

巧「ばっ！おいつ！鼻水たらすなッ!!」

と三人は言う。そんなにぎやかな光景をある二人が見ていた。

アリス「巧さん、良かったね。」

アスナ「そうね。真理さんと啓太郎さんもだけど。」

と二人はふと、後ろを見る。

アスナ「こういう感動的な状況で……良く眠れるわねえ……」

とアスナが言う。二人の視線の先には……

雅紀「すう……すう……」

ソファで眠っている雅紀の姿だった。

アリス「しょうがないよ、アスナちゃん。雅紀だって、疲れたんだから」

アスナ「まあ、そうだけども……。しかし、良く眠れるなあ……。もう一日あんな状態よ。」

とアスナは呆れ半分で言う。そう、雅紀はクリーニング店に戻ってきてから、眠り続けているのだ。

アリス「それほど・・・強い力を使ったんだよ・・・。反動が残るくらいにね・・・。」

アスナ「はあ・・・。まあ、それが雅紀だもんね・・・。」

アリス「そう、雅紀の良い所はそれだもん／＼／」

アスナ「まあね・・・（アリスに一理ある・・・。あたしが雅紀に惚れたのは・・・雅紀のその純粋な優しさを持っているから・・・。他にはない・・・光を持っているから・・・／＼／）」

とアスナは温かい目で雅紀を見る・・・。

一方・・・アークオルフェノク達は・・・

アーケオルフェノク『……』

アーケオルフェノクは一人、水槽の中にいた。

アーケオルフェノク『回復は……まだまだか……』

ロブスターオルフェノク『はい……。』

とアーケオルフェノクの近くにいるのはロブスターオルフェノク……。

ロブスターオルフェノク『申し訳ございません、王よ……。私がもっと強ければ……。このような……。』

とロブスターオルフェノクは手を強く握る。

アーケオルフェノク『もうよい……。我はもうしばらく眠っている。貴様も眠っておくがいい……。』

ロブスターオルフェノク『……はい……。』

と話す……アーケオルフェノクは眠りに着き……。ロブスターオルフェノクは……

ロブスターオルフェノク『く……。っ！憎い……。あの小僧が憎い……。……！』

と自身の中にドロドロと黒いものを生み出している……。

ロブスターオルフェノク『私が……この手でえ……!……いや……私が行った所で……やられるだけ……』

とロブスターオルフェノクは思い返す。ディダークとデスティニーとの戦いを……。完膚無きにまでされた自分を……

ロブスターオルフェノク『……ここは……』

とロブスターオルフェノクはとある一室に行く。中をのぞくと……

木場「……」

青年、木場 勇治がポツーンとベッドの上に座っていた。この部屋はいわば牢獄のようなもので、ベッドと便器しかなかった。

ロブスターオルフェノク『出番だ……。お前に指令を出す。』

とロブスターオルフェノクが言い放ち、牢獄の扉を開ける。

木場「……」

木場は無言で部屋から出てきた。

ロブスターオルフェノク『内容は、ディカオスと呼ばれるライダーに変身する小僧を殺すことだ……。乾 巧の所にいるはずだ……。殺しに行けつ!……』

とロブスターオルフェノクが命じると・・・木場はベルトを取り出し、腰に装着。そして・・・

『0・0・0』

『スタンディングバイ』

オーガフォンに変身コードを入力。

木場「変身・・・。」

『コンプリート』

木場はオーガに変身した。そして・・・その場を後にする・・・。

ロブスターオルフェノク『奴は私よりも力が上・・・。さあ・・・殺せえ・・・!!!!!!』

とロブスターオルフェノクの怨念のような叫ぶがこたえました。

戻ってクリーニング店・・・。

真理「ホント良かったっ！巧が元気になって」

啓太郎「そうだよな」

と二人は機嫌よく仕事をしている。そんな中、不機嫌でいる人が一人・・・。

巧「お前ら・・・俺は病み上がりなんだぞ・・・！何で仕事しなきゃいけないんだ・・・！？」

と巧が言った。しかも、二人よりも服の量が多い。

真理「アンタは病み上がりでなくても仕事をさぼってたんだから、罰よっ！！」

啓太郎「たっくんがさぼっているから、僕の仕事の量が増えるんだから僕の身にもなってよねっ！」

巧「おまっ！それ完璧に八つ当たりだろっ！？」

と言い合っていると・・・。

ドオオオンッ！！

とクリーニング店のあたりで爆発が起こる。

巧「なんだ・・・！？」

と巧は外に出て見てみる・・・。

巧「・・・っ！！・・・お前か・・・木場ア・・・！！」

そこにいたのは・・・オーガに変身している木場だった。

巧「お前・・・！今度は真理達までも殺そうってのか・・・！？」

木場「・・・」

とオーガは無言で構える。

巧「・・・そうかよ・・・」

と巧はファイズドライバーを装着し・・・

『5・5・5』

『スタンディングバイ』

あるツールに変身コードを入力。

巧「なら俺が・・・お前の目を・・・覚まさせてやるぜっ！！変身

っ！！！」

と右手に持ったファイズフォンを左手にあるツールに差し込む。

『アウエイクニム』

とファイズドライバーからフォトンストリームが放たれ、通常とは別のラインになる。そして・・・周囲は赤い光に飲み込まれる。

木場『・・・！！』

光が治まり、オーガの目の前には555がいた。だが・・・いつもの555ではない。体中にフォトンブラッドが流れ、赤く変色したボディ・・・。背中にバックパックが装備されていた。

これが555の最強形態「ブラスタフォーム」だ。

巧『・・・』

木場『・・・』

互い無言で構える。そして・・・

ダッ！

動いたのはほぼ同時。

ガキンッ！ガキンッ！

互いの武器がぶつかり合い、激しく火花が散る。

巧『ウラッ!』

555BFがパンチを食らわす。

木場『……!』

オーガはそれを食らって後ろに下がる。と同時にある光景が浮かんだ……。

巧『ウオアアアッ!!!!』

木場『ウアアアッ!!!!』

二体のオルフェノクが激しくぶつかり合う光景。

巧『ハアアッ!!!!』

そうしていると、555BFが背中ของバスターを前に出して、オーガに放つ。

ドンッ!ドンッ!

木場『ツ!!!!』

オーガはそれを食らって腹を抑える。すると……またある光景が浮かんだ……。

巧『行くぜっ!木場!!!!』

木場『ああ!乾君!!!!』

それは互いにぶつかり合う光景とは別の・・・ともに敵と戦う光景だった。

木場『・・・!!』

オーガはその光景を消そうと頭を振るう。

巧『オラアッ!』

と555BFは追い打ちをかけるように再びパンチを食らわす。

木場『・・・!!』

とオーガはまた後ろに下がる。

巧『どうしたっ!・・・前のお前なら・・・攻撃され、傷ついたとしても止まらず突っ込んでくるはずだぜ・・・!!』

と555BFは言う。そして、またオーガの脳裏に光景が浮かぶ。

木場『オオオオオオッ!!』

巧『うああっ!!』

自分がオルフェノクとなり、さらには下半身を馬に変えて555に突進している光景を・・・。

木場『・・・!!』

だが、オーガは再び、頭を振り、オーガストランザーで555BFを切り裂こうと突っ込む。

巧『ハアッ!』

と555BFはファイズブラスターで迎え撃つ。

ガキンツ!

また、武器同士のぶつかり合いをする。。。

所変わってアリス・アスナは・・・

アリス「すう・・・すう・・・」

アスナ「ふう・・・すう・・・」

二人は雅紀に寄り添うように眠っていた。そんな時・

ドゴオンツ！ガキンツ！ザンツ！！

という音が外から聞こえてきた。

アリス「ん・ん・ん・ん・この音は・・・？何かのぶつかり合い・・・？敵・・・！？」

と徐々に頭を覚醒させて、アリスは目覚める。

アリス「アスナちゃん！起きてっ！」

とアリスはアスナの体をゆする。

アスナ「ん・ん・ん・雅紀イ・・・」

だが、アスナは一向に起きない様子。寝ぼけて眠っている雅紀に抱きつく。

アリス「・・・（ムカツ）」

そんな光景を見たアリスは頭に怒りのマークを作る。そして・・・

アリス「おきなさー！っ！！」

とアスナの耳元で叫んだ。

アスナ「きゃっ！！？・・・ちよっ！アリス、いきなりあたしの耳

元で叫ばないでよっ!!」

と目覚めたアスナは怒る。

アリス「中々起きてくれないんだもん……。それに雅紀に抱きついてたし。」

アスナ「なっ!? 雅紀に抱きついて……。!? / / /」

とアスナは頬を染める。

アリス「そんな頬を染めないっ! それは置いといて! 敵だよっ!! 外で戦闘が起きてるっ!!」

アスナ「えっ!? わかったわっ!!」

とふたりは外で。そして、二人が見た光景は・

巧『ハアアッ!』

木場『。。。!!』

555BFとオーガがぶつかり合う光景だった。

アリス「巧さん……。まだ、治ったばかりなのに……」

アスナ「あの黒いライダーはっ!?!」

とアスナはアリスに問う。

アリス「オーガだよ……。」

アスナ「オーガ……。アレが……。！」

とアスナは拳を握る。

アリス「アスナちゃん？」

アスナ「アイツが雅紀を……。！」

アリス「アスナちゃん！落ち着いてっ！！」

アスナ「っ！……。ええ……。！」

と二人はソレを見守った。

戻って555BFとオーガは……

巧「ハッ！」

ガキッ！

徐々に555BFが押していつている。

木場『……!』

そして、何度目かの光景を見る。

巧『行くぜ、木場、三原。・俺達の思いを・俺達の手でっ!』

巧・木場・三原『『変身っ!!!』』

それは・巧・三原・木場が555とデルタと・体に黄色のフォトンストリームを放つライダー「カイザ」にへと変身し・

アークオルフェノク『……』

アークオルフェノクに立ち向かう光景であった……。

木場『……!!!』

オーガはこの光景に驚く。その時……

巧『ハアッ!』

ドッ!

木場『!』

555BFのパンチで現実に戻される。オーガは一旦555BFと

の距離を置き、

『エクシードチャージ』

オーガストランザーにエネルギーを込める。

巧『・・・行くぜ・・・!!』

『エクシードチャージ』

と同じく555BFも足先にエネルギーを込める。

巧『はっ!!』

と555BFは高くジャンプ。

木場『・・・!!』

オーガは勢いをつけてオーガストランザーを振り上げ、オーガストラッシュを放つ。

巧『ハアアアッ!!!!』

対する555BFはブラスタークリムゾンスマッシュを放つ・・・。
そして・・・

ドオオオオオオッ!!!!

互いの必殺技がぶつかり合う。その光景は・・・映画「555 パ
ラダイスロスト」の555とオーガが互いに必殺技を放ち、ぶつか

り合った時と同じ光景だった。

巧『ウウウ……ハアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！』

互いに一步も譲らない中……555BFは渾身の力でオーガの必殺技を破る。

ドゴオオオオツ！！

そしてそのままオーガに喰らわした。そして、オーガはまた……光景を見る。

アークオルフェノク『ぐあっ！！』

木場『ぐうう！！』

巧『木場っ！！』

木場『……（コクッ）』

巧『うう……ウアアアアアアアアッ！！！！』

それはアークオルフェノクとの戦いの映像。オルフェノクと化した木場がアークオルフェノクを道連れに555BFの必殺技を受ける光景だった。

木場『！！！！……そうだ……俺は……』

とオーガはつぶやき、倒れる。その拍子に、変身も強制的に解除さ

れる。

巧「ハア・・・ハア・・・」

と555BFは木場を見つめる。すると・・・

木場「うう・・・」

木場が起き上ってきた。

巧「・・・！」

555BFは構えると・・・

木場「あはは・・・相変わらず・・・容赦ないな・・・君は・・・」

巧「なっ!?!」

木場の声に、555BFは驚く。

木場「大丈夫だよ・・・乾君・・・俺は全てを思い出した。」

と木場は言う。木場の一言を聞き、555BFは変身を解除する。

巧「・・・木場・・・おまえ・・・」

木場「ああ・・・俺は自分を取り戻した・・・」

と木場は言う。

巧「木場・・・！」

と巧は木場に近づき・・・そして・・・

巧「目を覚ますのが遅いんだよっ！ばかやろっ！！」

と巧は木場を殴った。

木場「うあっ！？・・・痛いじゃないかっ！何をするんだ！！」

巧「うっせえっ！！こっちはお前のおかげで痛い思いをしたんだぞっ！！」

と二人は喧嘩し合う。だが・・・その表情は、喜びの表情だった。

第89話（後書き）

さてと、いかがでしたでしょうか・・・？

雅紀「本日、出番があまりなかった雅紀です。」

ふむ、機嫌が悪そうだな。

雅紀「まあな・・・。」

まあどうでもいいや。ついに巧は木場と再会できたな。

雅紀「嬉しいことだ。」

うむうむ。さてと、今回は大量のオルフェノク軍団に、ディカオス・555・デルタ・オーガが立ち向かう！
そして・・・

雅紀「コレが俺の・・・新しい力だっ！！！！」

『ファイナルカメンライド・ファ・ファ・ファ・ファイズッ！』

続きは次回、お楽しみにっ！！！！

第90話

オーガとの戦いから数時間後

雅紀「……んん……あれ……？何時の間に寝てた？」

と雅紀は体を起こして目をさすりながら言う。

雅紀「ま、いいや。……此処は巧さん達の家かな。ひとまず出よう。」

と雅紀はその場を後にする。

そして、隣の部屋に入った瞬間、ある者が眼に着いた。

木場「……」

巧たちと仲良く話している木場だった。

雅紀「……なぜ貴方が此処に？」

木場「ん？」

雅紀の声に反応し、木場は振り向く。

真理「あ、雅紀君。目が覚めたんだね。」

啓太郎「一日中、寝てたんだよ。君は。」

雅紀「一日ですか……。って、そんなことよりも……。なぜ木場さん、貴方が……」

木場「ちよつとね……」

雅紀「？」

巧「簡単に言っちゃ、コイツと喧嘩して、目覚ましてやったってところだ。」

雅紀「なるほど。」

真理「そんなんでわかるの？」

雅紀「わかるとすれば、正気ではない木場さんを、巧さんが555になって正気に戻した、ってところでしょ？」

啓太郎「ふむふむ。」

と啓太郎は頷く。

雅紀「問題は……。なぜ、貴方は蘇った。アークオルフェノクとの

戦いの中に貴方は死んだはず・・・」

と雅紀は言っていた時に・・・

？・・・？「雅紀――！――！！！！」

雅紀「なのになあああああああっ！！！！？」

と誰かに抱きつかれた。その正体は・・・

アリス「雅紀――！良かったよお！ようやく起きた〜」

アスナ「アンタ、いつたい何時間寝たら気が済むのよっ！馬鹿っ」

アリスとアスナだった。

雅紀「アリス・・・アスナ・・・。おはよう・・・。それと・・・皆が見てる／／／」

アリス・アスナ「へ・・・？」

と二人は後ろを振り向くと・・・

真理「・・・／／／」

啓太郎「な・・・何か・・・邪魔見たいかな・・・あはは・・・／／／」

木場「そ・・・そのようだね／／／」

巧「おまえらよお・・・俺達のいないところでイチャついている

よな・・・。」

と三人は頬を染め、巧は呆れた顔で言う。

アリスもアスナも、顔を真っ赤にして急いで雅紀から離れた。

雅紀「あゝ・・・ゴホンツ！えと・・・さっきの続きですが・・・／
／」

木場「あ、うん。実は・・・」

と木場は自分の事を話した。

回想

巧『木場アツ！』

木場『……………(コクッ)』

巧『ウウ……………ウアアアアアアッ!!!!!!!!!!』

と555BFが木場・ホースオルフェノクごと、アークオルフェノクにブラスタークリームゾンスマッシュを放つ場面。

真理「巧っ!!」

巧『ハアアアアッ!!!!!!』

ドゴオオオオオっ!!!!!!!!!!

・ 辺りが光に包まれ、同時に木場の意識は闇の底に落ちた。そして・

・ 『コイツと一緒に連れていくのは……………ちょっと気が進まなかったが……………良い実験材料だ。』

声が聞こえ、意識を覚醒し、目を開けたその先には……………

ロブスターオルフェノク『あら?目が覚めた様ね……………』

目の前にロブスターオルフェノクがいた。自分はなにやら水槽の中に浮かんでいた。

木場「(此処は……………俺は死んだはずだ……………)」

と思っていると……………

ロブスターオルフェノク『自分は死んだと思っているでしょうが・
・お前は死んでない。』

木場「!!！」

ロブスターオルフェノク『お前は我らの王を道連れにしようとしたのは良い策だが555の攻撃だけでは王は死なん。あの時に王はお前ごと薄いオーラで555の攻撃を防いだのだ。だが、結果は、王は仮死状態になり、お前が生き残った。王の肉体がある限り・・・王は死なん。』

木場『（そ・・・そんな・・・!!なら・・・この場で俺が・・・!!）』

と木場はオルフェノクになろうとしたが・・

ロブスターオルフェノク『無駄だ・・・。今の貴様は人間同様。その水槽内にいるかぎり、オルフェノクの力は100%も出しきれない。ましてや・・オルフェノクに変身することもできない。』

木場『ナツ!ガボツ!!』

木場は驚き、口を開けてしまい、水槽の中の水を吸い込んでしまう。

ロブスターオルフェノク『フフフ・・・心配しなくても・・・貴方は忘れるわ・・・。だって・・・

私や王の奴隷にしてあげるんだから・・・」

木場『グガツ!?!』

ロブスターオルフェノク『と、いうことで・・・そろそろ始めるわ・・・。じゃあね。』

とロブスターオルフェノクは前にある装置の赤いボタンを押し、キーボードを操作する。

キュイイイイインッ!!

木場『ガ!ブバアアアアアッ!!!!』

と木場は苦しみ始める。同時に記憶がどんどん消され始める。

木場『ぐ・・・いやだ・・・俺が消えてしまう・・・!皆・・・。!!!(』

と木場は力なく首を落とす。

ロブスターオルフェノク『あら？はやくも記憶消去。フッフ、さて、今度は体の修復ね・・・』

とロブスターオルフェノクはキーボードを打ち続けた。

現在

木場「と、言うことなんだ・・・」

雅紀「なるほど・・・」

木場「乾君のおかげで、おれはこつやって、皆を殺さずに済んだ。」

巧「たくっ！お前もお前だぜ・・・。あの女にやられるなんてよお。」

木場「仕方ないだろ……。あの時はカイザギアもなかったし、オルフェノクのカモ封じられていたんだから。」

雅紀「まあまあ……。それと……。問題はここからなんですが、どうやってアークオルフェノクを倒すかです。」

アリス「え？雅紀が倒したんじゃない？」

雅紀「あの時は、追い払っただけだ……。このWの力がなければ、俺は死んでいたし……。それにこのWの力を使っても、少しのダメージしかない。奴は短時間で回復するしな……。それに不死だし。」

と雅紀はW C A Xのカードを出しながら言う。

アリス「それって……。C A Xっ!？」

とアリスは驚いた表情で聞く。

雅紀「え？ああ、そうだけど……。なんだ？そんなに驚き……。？」

アリス「驚くもなにも……。そのWはね、本来なら存在するはずがない、Wなんだよ……。。」

雅紀「え！？そうなのか!？」

アリス「うん。それはフィリップさんと照井 竜さんが変身した姿なんだよ。でも、物語ではそれは未登場で出なかったんだよ……。」

雅紀「そうだったのか・・・俺はてっきり、翔太郎さんが竜さんからアクセルのメモリを渡されて使用したんじゃないかと・・・」

アリス「違うよ・・・でも・・・何で、それを持ってるの？雅紀・・・？」

雅紀「あ、これは・・・ディカオスドライバーから出てきたんだよ・・・。何でかはわからないけど」

と雅紀は考え込む。

アスナ「そんな考えるのは後よっ！今は、どうやってそのアーケオルフェノクってやつを倒すかでしょっ！」

雅紀「ああ、そうだったな。」

と皆は考え込む。

一方のロブスターオルフェノクは・・・

ロブスターオルフェノク『くそおっ!!まさか・・奴の記憶がよみがえってしまおうとは・・仕方がない。』

とロブスターオルフェノクはある一室に入り、何かの薬剤を持つ。

ロブスターオルフェノク『王よ・・。私はもつと強くなります。んん・・』

とロブスターオルフェノクはその薬剤を飲み、捨てる。そして・・苦しみ出す。

ロブスターオルフェノク『んんはああ・・っ!王よ・・。私は貴方のもの・・。私は・・貴方のお傍にいたいっつ!!』

とロブスターオルフェノクは人間の冴子に戻り、徐々に肉体を変えていく。髪が灰色に変わり、胸も膨らみ、よりスタイルが抜群になる。

冴子『ハア・・ハア・・んんんああああっ!』

それだけでは収まらず、お腹が膨らみ、お尻から次々と勢いよくオルフェノクを生み出していく。

冴子『さあ、行って、私と王の子達よあ・・。!!行って・・。555やディカオス達を皆殺しにイイイツ!!!!!!!!!!』

と叫んだ。

戻って雅紀達は……

プルルル……

真理「あ、あたしだ。はいもしもし。」

と真理は携帯に出る。

里奈『あ、真理？今すぐ来てッ！オルフェノクよっ！！！！』

真理「えっ！？うんわかったっ！巧、木場さん、オルフェノクだよ

っ!!」

巧「なに？」

木場「きつと、ラッキークローバの奴が生みだしたオルフェノクだよ・・・！」

巧「仕方ねえ、行くかつ！」

と巧は555ドライバーが入ったケースを持ち、外へ飛び出す。

雅紀「俺たちも行くか・・・！」

アリス「うん!というか・・・大丈夫なの?からだ・・・?」

とアリスは心配しそうに聞く。

雅紀「ああ、一晩寝てたら、だいぶ。行くよっ！」

アリス「うん！」

アスナ「ええッ！」

と三人は飛び出す。

木場「俺も行こうっ！」

と木場も飛び出す。

三原『はっ！ハッ！』

とデルタに変身した三原がデルタムーバーでオルフェノク達を倒していく。

三原『まだ来ないのかつ！？』

里奈「後もうちょっとで来るから、辛抱してっ！！」

と言っているところ。

ブウウッ！

と一台の車と二台のバイクが現れた。中から、巧や木場達がでてくる。勿論、二台のバイクはディカイザーとデステンダーなので、雅紀たちです。

巧「待たせたな、三原！」

三原『ん！？おい、そいつは・・・』

木場「大丈夫だ・・・元の俺に戻った。」

と二人はベルトを装着する。

『5・5・5』

『0・0・0』

『『スタンディングバイ』』

巧・木場「『変身っ！』」

『『コンプリート』』

と巧は555へ、木場はオーガに変身した。

雅紀「俺たちも！」

雅紀・アリス・アスナ「『変身っ！』」

『カメンライド・ディカオスッ！』

『カメンライド・ディダークッ！』

と雅紀達も変身。

オルフェノク達『ウウウウッ！！！！』

とオルフェノク達は一斉に襲い掛かっていく。

ドガッ！ドゴオッ！！

戦いは順調にライダー達が圧倒……。とすると……

？『オオオオオツ！！！！』

と何者かが現れ……

ズバアツ！！！！

ライダー達『うああつ！！！！』

ライダー達を切り裂いた。

巧『いつつ！……なんだ……！！？』

木場『っ！……あいつは……！！』

とライダー達の目の前にオルフェノクが出現。

ロブスターオルフェノク『私と王の子達を傷つけるなあ……！！』
『！』

よりパワーアップしたロブスターオルフェノクだった。体中に突起物を生やしている。

雅紀『あれって、ロブスターオルフェノクなのか……！！？パワーアップしてね……？』

アリス『アークオルフェノクのパワーアップしたのかな？』

アスナ『今はそれを考えている場合じゃないわっ!』

ロブスターオルフェノク『その通りだっ!!!』

とロブスターオルフェノクは体中に生えている突起物とミサイルのように飛ばす。

ドゴオオオオツ!!!!

ライダー達『おわああああっ!!!!』

とライダー達は吹っ飛ばされる。

真理「巧!コレっ!」

と真理は待機状態のファイズブラスターを555に渡す。555はそれを受け取る。

巧『サンキュー。』

『5・5・5』

『スタンディングバイ』

『アウェイウクニム』

と555はBFにフォームチェンジする。

雅紀『よし・・・俺も・・・コイツで・・・!』

とデイカオスはWのCAXのファイナルカメンライドのカードを持つ・・・と・・・

アリス『ダメっ！それを使ったら、また雅紀が倒れたちゃうよっ！』
デイダークに止められる。

雅紀『っ！・・・だけど・・・使わなきゃ・・・！』

アリス『巧さんがBFになったんだから・・・大丈夫だよ・・・』

巧『うおあああっ！！』

雅紀・アリス『！！』

と二人は振り向くと・・・

ロブスターオルフェノク『どうしたっ！そんなものかあッ！！』

ロブスターオルフェノクにやられている555BFの姿が目に入る。

雅紀『やばいじゃねえかよっ！！』

アリス『そんなんっ！！』

とデイカオスはアドベンツドライバーを放ち、555BFから遠ざける。

木場『オオッ！！』

三原『ハアッ!』

アスナ『ドラグーン・・・フルバーストッ!』

一方のオーガ・デルタ・デステイニーはオルフェノクと戦闘。

雅紀『オオッ!』

とデイカオスはロブスターオルフェノクに攻撃・・・だが・・・ロブスターオルフェノクは防いだ。

ロブスターオルフェノク『掛かったわね・・・!』

雅紀『何っ!?!』

とデイカオスは周囲を見ると・・・

ゴオオオッ!

大量のミサイルが突っ込んできた。

アリス『雅紀を傷つけないもんねっ!』

その時、デイダークが助けに来て、ミサイルを切り裂く。

巧『オラアアッ!』

ロブスターオルフェノク『なっ!』

555BFの攻撃により・・・ロブスターオルフェノクの腹に大きな

穴を開ける……。だが・

シューウウウ・

順次に回復してしまう。

巧「ちっ！どんだけ治りがはやいんだよっ！」

ロブスターオルフェノク「クク！死ねッえッ！」

ドドドドドドドドドドドッ！！

雅紀・アリス・巧「うあああああっ！！！」

と三人はミサイルの攻撃にあい、吹っ飛ばされ、変身が解除されてしまう。

ロブスターオルフェノク「クククク……全ては王のために……」

とロブスターオルフェノクは不気味な足取りで雅紀達に近づく。

巧「くう……おい、お前ら……まだやれるか……？」

雅紀「ええ……！」

アリス「なんとか……」

巧「アイツを倒せるにはどうすればいいんだ……！？」

雅紀「そりゃ・・・奴に大量のフォトンブラッドを浴びせればいいんじゃないですか？フォトンブラッドはオルフェノクの嫌いなものですから・・・。」

巧「よし・・・やるうぜ・・・。アイツをほつといたら・・・後々面倒だ・・・！」

雅紀「ええ・・・やりましようっ！・・・っ！！！」

と雅紀の目の前にカードが出現。それを取る。

雅紀「コレが俺の・・・新しい力だ・・・！」

と立ち上がる。

『5・5・5』

『スタンディングバイ』

『『カメンライド』』

雅紀・アリス・巧「『変身っ！』」

『アウエイクニム』

『デイカオスっ！』

『デイダークッ！』

『カメンライド・ファイズ』

『ファイナルカメンライド・ファ・ファ・ファ・ファ・ファイズッ!』

と三人はライダーに変身し、ディカオスはD555BFにFKRする。

雅紀『行くぜっ!』

戦いは第二ラウンドへ・・・

第90話（後書き）

さてと、いかがでしたでしょうか？

雅紀「凄いことになったな・・・。」

ああ。さてと、休みたいので、次回はこの後編ですっ！お楽しみに
っ！！

第91話

シリ……

ロブスターオルフェノクを前に……555BF、デイダーク、D555BFが構える。

雅紀『良いですか？俺と巧さんとで……奴に必殺技をぶちこむ……相手が攻撃してきたら……アリスが防御を……』

アリス『うん！』

巧『それがダメだったらどうする？』

雅紀『策なんて……いくらでも思いつく限りやる……！』

と話していると……

ロブスターオルフェノク『ごちゃごちゃと……耳ざわりだっ！』

とロブスターオルフェノクが背中中の棘をミサイルにして発射する。

雅紀『回避……！……！』

と三人は回避。自分の所に向かってくるミサイルは武器で対処した。

雅紀『巧さんっ！』

巧『ああ・・・やってやるっ!!』

と555BFとD555BFが動いたのはほぼ同時。二人はロブスターオルフェノクに向かって突っ込む。

ロブスターオルフェノク『自棄になったのかあッ!?殺してやるっ!!』

とロブスターオルフェノクはミサイルを発射・・・二人に迫る・・・だが・・・

『アタックライド・スラッシュッ!』

アリス『そうはさせないっ!』

とディダークが二人に向かってきたミサイルを全て切り裂き、防いだ。

ロブスターオルフェノク『なっ!?!』

アリス『続いて援護射撃っ!』

『アタックライド・スマッシュッ!』

アリス『それっ!』

とディダークドライバーの刃先からエネルギー弾が発射され、

ドゥッ!

ロブスターオルフェノクの腹部に直撃する。

ロブスターオルフェノク『がつ!』

巧『オオオオツ!』

雅紀『テヤアアアアツ!!!』

とロブスターオルフェノクが怯んでいるすきに二人はロブスターオルフェノクにファイズブラスターを当てる。

『エクシードチャージ』

『ファイナルアタックライド・ファ・ファ・ファ・ファイズツ!』

ロブスターオルフェノク『しまっ!』

ロブスターオルフェノクが気づいた時にはもう遅い。エネルギーがファイズブラスターに集められ、大量のフォトンブラッドを放つ。

巧『オオオオオツ!!!』

雅紀『オオオオオオオツ!!!』

とファイズブラスターから、ロブスターオルフェノクの体内へ、フォトンブラッドが注がれる。

ロブスターオルフェノク『な、何だっ!? 体に何かが流れて・・・これは・・・まさか・・・!!!?』

巧『そのまさかだ・・・!』

雅紀『気づいた時には時すでに遅しってねっ!』

と二人は言いながら、さらにパワーを上げる。

ロブスターオルフェノク『くうっ!こ・・・こんなの・・・不死である私には通用しない・・・!!!』

雅紀『それはどうか・・・いくら不死になっても、こんなに大量のフォトンブラッドを注がれちゃ・・・無意味だぞ?』

巧『これで・・・終わりだアツ!!!』

と二人のパワーが最大限まで到達し・・・ロブスターオルフェノクにフォトンブラッドを通常の何倍も注いだ。そして・・・一気にフォイズブラスターを振り上げる。

ザンツ!!!

ロブスターオルフェノク『キャアアアアアア!!!』

とロブスターオルフェノクは吹っ飛ばされ、倒れる。

ロブスターオルフェノク『ま、まだだぁ・・・まだ、私はやられ・・・ウウウツ!!!』

ロブスターオルフェノクは傷ついた体を起こそうとするが・・・体から大量に灰が落ち、倒れる。

雅紀『どうやらうまくいった。』

巧『アイツもこれで終わりだ……。』

と二人はそれを見ながら呟いた。

木場『乾君っ!』

とその場にオーガ・デルタ・デステイニーが来る。

巧『木場・三原……。』

雅紀『アスナ、オルフェノクは……。?』

アスナ『もう、全部灰にしてやったわ。それで、そっちは倒したのね。』

雅紀『ああ。』

と話す。と……

ゴオオオオオオオオオオツ!!!

と物凄い音が響く。

巧『うわっ!?!うっせ!?!なんだ、この音はっ!?!?』

雅紀『……まさか……。!』

とD555BFは何か勘づいたらしい。そして……

ヒユウウウ・・・ドゴオオオンツ！！

ロブスターオルフェノクの前に何かが現れた。そいつは・・・

アークオルフェノク『・・・』

アークオルフェノクだった！

ロブスターオルフェノク『オオ・・・王よ・・・』

とロブスターオルフェノクは弱弱い声を出しながら手を伸ばし・・・
王を求める。

アークオルフェノク『・・・貴様・・・よく、我のためにここまで
やってくれた・・・褒めてつかわす。』

ロブスターオルフェノク『王よ・・・』

とアークオルフェノクはロブスターオルフェノクの体を起こす。

アークオルフェノク『貴様の命は残りわずか・・・不死にした身で
も・・・もう死ぬ寸前。我の中で・・・生き続ける・・・そして、糧
となれ・・・』

ロブスターオルフェノク『・・・はい・・・王と一つに・・・』

とロブスターオルフェノクが答えると・・・アークオルフェノクは
ロブスターオルフェノクを抱きしめ・・・

シューウウウウウ・・

ロブスターオルフェノクを吸収した。

巧『仲間を・・』

雅紀『吸収した・・!?!?』

とライダー達は驚く。

アークオルフェノク『ふう・・さて・・邪魔な貴様らを排除する・・!』

とアークオルフェノクが力を込めると・・背中から、先ほどロブスターオルフェノクが使った棘が現れ、一気に発射される。

ライダー達『ウアアアアアッ!!!!!』

とそれは全員に直撃。倒れてしまう。

アークオルフェノク『我らオルフェノクだけを生きのこし、人間を抹殺するには・・貴様らが邪魔だ・・。』

巧『そうかよお・・だが・・負けねえ・・!』

雅紀『同じく・・!』

と二人は立ち上がり・・そして・・

ダッ!

アークオルフェノクに向かって突っ込む。

アークオルフェノク『フン……パワーアップした我には……勝てんぞ……!』

雅紀『やってみなきや……』

巧『わかんねえだろうがあっ!!!!』

と二人は言いながら、アークオルフェノクにファイズブラスターを振るうが……

ガシツツ!!

アークオルフェノクはそれを受け止める。だが……

雅紀『巧さんっ!』

巧『おうっ!』

『エクシードチャージ』

『ファイナルアタックライド・ファ・ファ・ファ・ファイズツ!』

とファイズブラスターにエネルギーを送る。それは……先ほどロブスターオルフェノクを倒した戦法だ……。
二人のファイズブラスターから流れるフォトンブラッドがアークオルフェノクに注がれる……。

アーケオルフェノク『ぐ……!!』

とアーケオルフェノクはくるしむ。二人は心中でこれなら……! 希望するが……

アーケオルフェノク『なんてな……。』

雅紀・巧『え……?』

アーケオルフェノク『フンツ!!』

とアーケオルフェノクがファイズブラスターを振り払い、二人に強烈なパンチをくらわす。

雅紀・巧『うあああつ!!』

と二人は吹っ飛ばす。

木場『このおおおつ!!』

三原『テヤアアアツ!!』

とソレを見たオーガとデルタは怒り、アーケオルフェノクに突っ込む。だが……

アーケオルフェノク『ハツ!』

アーケオルフェノクが棘と光弾を同時に撃ってきて、それが二人に当たる。

木場・三原『うああああああっ！！！！！！』』

とまともに受けた木場と三原は変身が解除され倒れる。

アークオルフェノク『フン・・・』

とアークオルフェノクは鼻で笑う。

巧『くそお・・・どうすればいいだよ・・・』

雅紀『もう、勝てることできないのか・・・！！？』

と全員は悔しがる。

アークオルフェノク『フン・・・さあ、諦めて・・・あの世に逝く
が良い・・・っ！！！！』

とアークオルフェノクが急に苦しみ出す。

雅紀『（なんだ・・・？）』

とD555BFが不審に思う。と・・・

？『助けて・・・助けてえ・・・』

少年の声が響く。

アークオルフェノク『ぐう・・・貴様・・・またあ・・・！！』

どうやらその声はアークオルフェノクの影からのようだ・・・。それ

をみたD555BFは・・・

雅紀『そういうことかっ!!!』

と何やら思いつき、アークオルフェノクに接近する。

雅紀『オオオオオオオオッ!!!』

とファイズブラスターを振り上げる……。狙いは・・・アークオルフェノクではなく、アークオルフェノクの影にだ……。そして……

ドンッ!

と影が貫かれる……。そして、次の瞬間。

ゴオオオッ!

影から穴が出現その中から少年の手がでてくる。

雅紀『フッ!』

その手をD555BFは取り・・・そして……

雅紀『オオオオオオオオオオッ!!!!!!』

力いっぱい引きずり出した。影から一人の少年ができて地面に倒れる。

照夫「ううう……」

それはアークオルフェノクを体内に宿し、そして、覚醒とともに死んだはずの鈴木 照夫だった。

真理「て・・・照夫君っ!?!」

啓太郎「うそっ!?!どういうことっ!?!?!」

とその場にいる全員が驚愕。

アークオルフェノク「グウツ!!・・・貴様、気づいたのか・・・!?!」

とアークオルフェノクは全身から灰を出しながら言う。

雅紀「そう・・・おまえはあの照夫のなかでしか生きられない寄生虫のようなもの。覚醒とともにお前は照夫の体をのっとり、照夫の意識を闇の底に封じ、表に出てきた。つまり・・・照夫はお前の影の中で眠っていて今・・・目覚めて反抗してきた・・・と言えわかるかな?今の状況も含めて・・・」

とさりげなく草加 雅人風にいうD555BF。そして、そのことを聞いたライダー達は驚愕する。

アークオルフェノク「ぐ・・・まさか、先の一瞬でそこまで・・・!?!」

雅紀「おまえは確かに不死だ・・・。だが、それは照夫の体に寄生している時だけ・・・照夫の体から離せば・・・おまえは不死のオルフェノクではなく・・・ただのオルフェノクだ・・・!?!」

とD555BFはアークオルフェノクに言い放つ。

アークオルフェノク『くっ！．．．こんなことがあ．．．！！！！
だが．．．我を殺したら．．．そこにいる555とオーガは死ぬぞ．
．？それでもいいのか．．．！！！！』

とアークオルフェノクは言うが．．．

巧『関係ねえ．．．。俺達は．．．人間を守る。たとえ．．．自分が死
んでしまっても知ってもな．．．！！』

と555DFがD555BFの隣に立つ。

アークオルフェノク『くう．．．！ありえんっ！ありえー！んっ
！！！！』

とアークオルフェノクは叫び．．．自棄を起こして光弾をあちこち
に飛ばす。

雅紀『巧さん！いきますよっ！！！！』

巧『ああっ！！見せてやろうぜ．．．俺たちの思いを．．．俺達のカ
でなァッ！！！！』

『エクシードチャージ』

『ファイナルアタックライド・ファ・ファ・ファ・ファイズッ！』

と二人は足先にエネルギーを込め．．．そして．．．

ドオオツ!!!

背中のバツクパツクを利用し、空高くジャンプ。そして・

雅紀・巧『テヤアアアアアアアアッ!!!』

上空から一気にブラスタークリームゾンスマツシュを放つ。それは・流星のように、アークオルフェノクに突っ込む。

アークオルフェノク『オオオオオオオオオオオオッ!!!』

とアークオルフェノクは光弾を放つが二人の力が合わさったブラスタークリームゾンスマツシュの前では無意味。そして・

ドゴオオオオオツ!!!

アークオルフェノクを貫き、着地。アークオルフェノクの体には大穴があいていた。

アークオルフェノク『オオオオオオオオオオッ!!!』

とアークオルフェノクは断末魔を上げながら、灰化した。二人は変身を解く。

雅紀「巧さん。」

と雅紀は巧を見る。アークオルフェノクを倒せば、全てのオルフェノクが絶滅してしまうのだ……。オルフェノクである巧や木場も例外ではない。

だが……。一つの奇跡が起きた。

巧「……………」

木場「……………」

何時まで経っても、二人は灰化して消滅しなかった。

巧「おい……どうなってんだよ……。俺達、消えるはずじゃ……」

と巧は不審に思う。

雅紀「どうやら……奴は王ではなくなったようだな。」

巧「どういうことだよ？」

雅紀「奴は照夫から寄生して、王として君臨していたが……照夫から離れてしまって王の力が失い……不死ではなくなって……奴が死ねば、全てのオルフェノクは死ぬっていうのも……無効になったのでしょ。」

巧「じゃあよ……俺達は……」

雅紀「ま、簡単に言っちゃあ……生き続けられるって事かな……」

巧「そうか……」

と巧は呟く。そして……皆の元に戻って行く……と……

巧「そういえば……お前には礼は言わなかったな……」

雅紀「へ？」

巧「……ありがとよ……。お前のおかげで……。生きられる……。皆の所にいられる……。」

と巧が言った。

雅紀「フフ……お礼なんて……。あなたらしくない……。ですが……。有りがたく受け取ります。」

と雅紀は言い、その場を後にした。変身を解いたアリスとアスナは雅紀の後に着いて行く。

巧「……。チ……。俺らしくないか……。たくつ……。！」

と巧は言うが……。内心では、雅紀に対して感謝の気持ちでいっぱいだった。

アリス宅

アリス「良いの？皆にちゃんとお別れ言わなくて・・・？」

雅紀「いいんだ・・・。あの人たちは・・・これからは・・・ちゃんと人間と同じく生きられるのだから・・・」

アスナ「訳わかんない。」

アリス「フフ・・・さてと・・・じゃあ出発しよ！」

と三人は555の世界から去った。

第91話（後書き）

さてと、どうでしたか？

雅紀「ふむ・・・」

さてと、質問なんだが・・・前の後書きでの雅紀が草加 雅人になっ
ちやったって・・・その所、どうなのよ？

雅紀「単に・・・台詞がないから・・・」

あ、そ。さてと・・・次回は本編を休みにし、キャラクター紹介です
っ！お楽しみにっ！！

キャラクターとライダーの説明パート2（前書き）

さてと、今回は本編の方を休み、キャラクターとライダーの説明の第二弾です。

愚だぐダになるし、説明文が長くなると思いますが、ご承知ください。

それではスタート！

キャラクターとライダーの説明パート2

キャラクター説明

白鳥 アスナ

デステイニーの世界の人間で、仮面ライダーデステイニーに変身する少女。

見た目は雅紀よりもちよつと低い身長。腰まで届く長い髪を後ろでまとめた髪型。瞳は赤。年は雅紀と同年。部活は剣道。

当初は男性とは全く話さない、クラスメイトや同年の人たちには超が付くほどツンな少女と言われていたが、雅紀との出会いでそのツンは少々なくなっている。

ナンパされている少女を助けようと不良と闘って捕まってしまった所を雅紀に助けられる。その時に出会いをする。

ライダーの力を手にしたのは自主トレ中に山で変身ベルト「デスレイクル」を見つけ、デスレイクルに選ばれ仮面ライダーとなる。デスレイクルから神経のようなものがある。アスナの肉体の一部とな

っており、はずせば、即死になる危険もある。敵、サキュバスと闘う運命を背負うが・・・世界を守るために、戦うことを決意。

その時に鳴滝と出会い、ディカオスは悪魔だということと言われ、ディカオスと衝突。一度、戦った後、和解して、互いの正体を見せ合う。

さらに、その後、デスレイクルの中に封じられていた全てのサキュバスの祖先の力が解き放たれ、人間とサキュバスを超えた存在になる。当初は暴走してしまい、意識までもサキュバスとなってしまうが、雅紀の呼びかけにより、人間に戻り、もう一つの人格「アスラ」を生み出すことにより、半分が人間、半分がサキュバスとなっている。

初心、純粹、可愛さ・・・その他もろもろな雅紀を好きになる。その翌日に別世界に移動されて、電王の世界で雅紀とアリスに再び会い、その後一緒に行動し、旅の仲間になる。

アスラ

アスナのもう一つの人格。デスレイクルによるサキュバス化、そして、雅紀の呼び声により、アスナが意識を取り戻したことがきっかけでアスナの中の心の闇が具現化した、怒り、憎しみなどによる感

情の集合体。

普段はアスナの心の中にいるが、アリスがいない時に出てくる事が多い。

アスラが表に出てきた時の容姿は後ろでまとめた髪が解かれ、少々、波打った髪型。瞳の色はアスナと同じ赤。アスナとは違い、色っぽくなっている。

アスナとは違いツンではなく、雅紀に甘え、妖艶かつ、大人びた性格をしている。サキユバスのような残酷さも持っている。

デステイニーに変身するときは、ポーズもとらないで掛け声で変身可能。アスナとは違い、基本形態のデステイニーフォームではなく、闇の力を持ったデスシードフォームに変身する。

今のところ、アスラが表に出た時に変身するフォームはコレだけとなる。

サキユバスに変身することも可能。

続いて、ライダーの説明

仮面ライダーデステイニー

アスナが変身する仮面ライダー。大昔にサキユバスと闘うために作られた。

変身ベルト「デスレイクル」を使って変身。

フォームチェンジでいろいろな戦法を得意とする。
現在、4フォームが存在するが・・・後に、増える可能性がある。

デステイニーがなるフォーム

デステイニーフォーム

デステイニーの基本フォーム。カラーが蒼。
バランスが優れたフォームで武器がなく、拳や蹴りなどを使った格闘戦を使う。

必殺技は相手に向かって蹴りを放つ「デステイニーブレイク」。

ジャステイスフォーム

デステイニーが持つもう一つのフォーム。カラーは紅蓮の赤。

「ジャステイスカリバー」を使った戦いをする。他のフォームよりも、感覚と、パワーに優れている。

必殺技はジャステイスカリバーにエネルギーを込めて、敵を斬る「カリバースマッシュ」。

フリーダムフォーム

二つ目のフォーム。カラーは白。

「フリーダムバスター」と、背中にあるウイングから出現するドラグーンを使った遠距離攻撃に特化した形態。飛ぶことも可能で、空の敵に太刀打ちできる。

必殺技はフリーダムバスターとドラグーンを使って一斉に発射し、敵を一掃する「ドラグーンフルバースト」。

デスシードフォーム

アスラが表に現れたときに変身するフォーム。カラーは黒が混じった紫。

パワー、スピード、技などの全てが他のフォームよりも高く、拳や足に闇の力を込めて敵に食らわせば、ひとたまりもない。

アスナが表に現れた時には、変身不可能だが、アスラならそれが可。いわばアスラ専用のフォーム。

必殺技は足先に闇の力を込めて勢いよく敵にぶつける「デスシードエンドブレイク」。

本編では今のところ未登場だが、敵に闇の波動をぶつける「ダークネスカノン」。

以上、キャラクターとライダーの説明を終了。

キャラクターとライダーの説明パート2（後書き）

いかがでしたでしょうか？

雅紀「はよ、本編を書け。」

はいはい。早めに次回な。次の世界にたどり着いた雅紀達が眼にした物は、3人のライダー。それらは雅紀が見たことがあるが、知らないフォームに変身していたっ！

雅紀「なんか、へんな次回だが…お楽しみにっ！」

第92話

シュウウン・・・

アリス宅

雅紀「あ、着いたな。」

アリス「そうだね。」

アスナ「今度はどんな世界だろう。」

と雅紀一行は次の世界に到着。外へ出る。

雅紀「この世界のライダーは・・・何なんだろうかなあ・・・。」

と雅紀が言っていると・・・

キヤアアアアアッ！

ウアアアアアアア！！

という叫び声が出た。

雅紀「なんだ!？」

アリス「あつちからだよっ!」

と雅紀達は声が出た方に行くと・・・

アルビローチ達『ウウウウ!』

と白い怪物達が人を襲っていた。それを見た雅紀は・・・

雅紀「あれは・・・アルビローチ・・・ということとは、「ブレイドの世界」か。」

と雅紀は言っていると・・・

ブウンッ!!

と二台のバイクが現れた。

アルビローチ達『ウウッ!』

とアルビローチ達はそれを見る。二台のバイクから、二人の青年が降りる。

?「大丈夫ですか?」

と一人が近くにいる女性の安否を確認し、もう一人はアルビローチを睨む。

？「行くぞ、睦月。」

睦月「はい、橘さん！」

と橘と睦月はあるバツクルを取り出し、一枚のカードを入れる。そして、腰に付ける。

シユルルルル……

とバツクルからカードがでてきて、それがベルトへ変わる。ベルトからそれぞれ、待機音が鳴る。そして、それぞれ構える。

橘・睦月「変身っ！！」

『ターンアップ』

『オープンアップ』

とベルトのレバーを引き、ベルトから巨大なカードを思わせる物が眼の前に出現する。

橘「フッ」

一人はその巨大なカードに向かって走り、もう一人はその場から動かず、近づいてくる巨大な紫のカードを見ている。

橘「ハアアッ！！」

と橘は巨大カードを通り抜けた瞬間、その姿が変わり、ダイヤとクワガタをモチーフにしたライダー「ギャレン」へなった。

睦月『オオオッ！』

と睦月の方も、巨大カードを通り抜けた瞬間、クラブとクモをモチーフにしたライダー「レンゲル」へと変わる。

橘・睦月『オオオッ！！』』

と二人はそれぞれの武器でアルビローチ達を撃破していく。

雅紀「ギャレンに……レンゲルか……。」

アスナ「あれがこの世界のライダーね。」

と雅紀は呟き、アスナは、少々、興味を持ちながら言う。

『バレット』

橘『ハアッ！』

とギャレンは専用武器「ギャレンラウザー」にカードをスキャンし、弾丸の威力を上げる。

アルビローチ達『オオッ！！』

ソレを受けてアルビローチの数体、爆死。

『ブリザード』

『バイト』

『ブリザードクラッシュ』

睦月『オオオオオッ!』

とレンゲルは専用武器「レンゲルラウザー」に二枚のカードをスキヤンし、必殺技を発動。アルビローチ達を凍らせ、それを足で砕く。

雅紀「凄いな。」

と雅紀は呟いていると・・・

女性「きゃあああっ!」

アルビローチ『ウウウウッ!』

と一人の女性が一体のアルビローチに襲われる。

雅紀「助けに行かなきゃっ!」

と雅紀は行こうとすると・・・

ブウウウウッ!!

ドゴオッ!

アルビローチ『グギッ!』

と一台のバイクがアルビローチにぶつかった。

? 「逃げる・・・。」

とバイクに乗っていた男はヘルメットをはずし、バイクから降りると、

シユアア・・・

と腰からベルトを出現させる。そして、一枚のカードをベルトにスキャンさせる。

? 「変身・・・。」

『チェンジ』

とバックルが発すると、男の体が何かに包まれ、そしてそれがはじくと、男の姿が変わり、ハートとカマキリをモチーフにしたライダー「カリス」に変身した。

? 「ハッ!」

とカリスは専用武器「カリスアロー」を出して、アルビローチ達を斬って行く。

橘 『始っ!』

睦月 『始さんっ!』

ギャレンとレンゲルが言う。

『チヨップ』

始『ハッ！！』

とカリスはカリスアローにカリスラウザーを装着し、一枚のカードをスキャンさせて、パワーアップしたチヨップで、ギャレンとレンゲルの後ろにいたアルビローチを倒す。

始『よそ見をするな……。』

橘『すまない。』

睦月『でも、これで全部ですね。』

と三人が言っている。・・

『オオオ・・！！』

と別の怪人が現る。

橘『トリアルシリーズ！』

始『一度に二体か……。』

と三人は警戒する。目の前にいるのは、トリアルシリーズと呼ばれる怪人でアンドッドと人間の細胞を組み合わせて人工的に作り出された改造実験体だ。

トライアルシリーズ『オオオオツ!!!』

とトライアル達は三人に向かって攻撃してきた。

橘『くっ!』

睦月『はっ!』

とギャレンとレンゲルはコンビネーションでトライアルに攻撃していく。

トライアルD『ウウウツ!!!』

対するトライアルDはダメージを受けても、倒れることなく、襲ってくる。

始『フツ!ハツ!』

とこちらではカリスとトライアルBが闘っている。

トライアルD『オオオオツ!!!』

橘『ぐあっ!』

睦月『ぐああっ!』

とトライアルDの攻撃により、ギャレンとレンゲルは吹っ飛ぶ。

トライアルB『ガアッ!』

始『ぐあっ!!』

こちらもトリアルBの攻撃を受けて吹っ飛ばされる。

雅紀「こりゃあ、助けに行かないと・・・やばいなっ!」

と雅紀たちは変身しようとする・・・

橘『こうなれば・・・いくぞっ!睦月!!』

睦月『はいっ!橘さんっ!!』

と二人は一枚のカードを取り出し、左腕に装着されている「ラウズ
アブゾーバー」に入れる。

『『アブゾーブクイーン』』

雅紀「へ・・・? (ギャレンの方は・・・ジャックフォームに変身するのわかるけど・・・レンゲルが・・・!?)」

と雅紀は一瞬、動きを止めている・・・

『『エボリユーションキング』』

と言う音声が響いた。

雅紀「エボリユーションっ!?!」

と雅紀は驚愕していると・・・

橘・睦月『オオオオオオツ!!!』

二人の周りにそれぞれ、13枚のカードが出現し、それが、二人の体を包み込む。辺りは黄金の光に包まれる。

ギユアアアアアア・

と光が消えると・・・そこにいたのは・・・13のアンデッドが刻まれた金色の鎧を身にまとったギャレンとレンゲルが立っていた。

雅紀「ウソだろ・・・キングフォームにチェンジしたっ!？」

と雅紀は叫ぶ。そう、二人が変身したのは、13体のアンデッドと融合した「キングフォーム」と呼ばれる形態なのだ。

橘『フッ!』

睦月『ムウウウンツ!』

とギャレンKFとレンゲルKFはそれぞれのキングラウザーを持ち、構える。

始『・・・』

『エボリユーション』

ともう一人、カリスは一枚のカードをスキャンし、13体のアンデッドと融合した「ワイルドカリス」に変身した。

トリアルシリーズ『グウウウウ!!!』

と対するトライアルシリーズは警戒した。

雅紀「一体・・・何がどうなって・・・!!?」

と雅紀は一人・・・混乱するのであった。

第92話（後書き）

さてと、どうだったでしょうか？

雅紀「おいつ！何で、ギャレンとレンゲルがKFにっ！！？」

そこんところは話目かの話でなっ！

雅紀「今答えるッ！」

無理だっ！今後の話が減るっ！

雅紀「くっ！……というか……マジで気になるっ！！」

ああ、気にしているっ！！

アリス「そんなことよりも、作者さんっ！」

アスナ「はやく、次回予告しなさいっ！！」

どおあっ！？二人が現れたっ！！わかりましたっ！！

雅紀「何で二人には敬語……？」

うん、なんとなく……。そんなことよりも、今回はこの続きの場面と……ディカオスと三人が遭遇する話ですっ！
それでは……

雅紀・アリス・アスナ「次回をお楽しみにっ！」「」

じわ~~~~~!!!!台詞をとるな~~~~~!!!!(涙)

第93話

雅紀「一体・・・なぜあの二人が・・・!!」

と第一声を上げたのは雅紀・・・。目の前で決して存在しない、ギヤレンとレンゲルのキングフォームがいたのだから・・・。

橘「オオオオツ!!」

とギヤレンKFは銃型のキングライザーでトリアルDを撃つ。

トリアルD「ゴオオツ!!!!」

ソレを受けたトリアルDはひとたまりもない・・・。体がいつきに傷だらけになる。

睦月「ハアアアツ!!」

と今度はレンゲルKFの攻撃。槍型のキングライザーを振るう。

ゴオツ!!

と音を立ててトリアルDの腹を斬る。

トリアルD「ガアツ!!」

とトリアルDは吹っ飛ぶ。

始「フツ!ハツ!!」

とこちらではワイルドカリスが醒鎌「ワイルドスラッシャー」を振るってトリアルBにダメージを与えてく。

始「ハッ！」

トリアルB「ガッ！！！」

とトリアルBは吹っ飛ぶ。

橘「いくぞっ！睦月っ！！！」

睦月「はいつ！」

と戻ってギャレンKFとレンゲルKF。二人は、カードを五枚自分のキングラウザーに入れる。

「ダイヤ10、J、Q、K、A」

「クローバー10、J、Q、K、A」

「ロイヤルストレートフラッシュ」

と二人の目の前に、先ほど入れたカードが出現。

橘「オオッ！ハアッ！！！」

とギャレンKFはカードに向かって光弾を撃つ。そして、カードをくぐりぬけるたびに威力が増してくる。そして、トリアルDに直撃する。

トライアルD『ゴオツ!』

睦月『オオオオオツ!!!!!!』

とトライアルDが怯んでいるすきに、レンゲルKFはカードをくぐりぬけて、トライアルDを杖で貫く。

ドスウツ!!!!

トライアルD『ガアアアアアアッ!!!!』

とトライアルDは爆死した。

始『・・・』

とワイルドカリスの方では、目の前に13枚のカードを出現させ、それを一枚のカードにする。それを取り、ワイルドスラッシャーとカリスアローを合体させて、スキャンさせる。

『ワイルド』

始『テアッ!』

とワイルドの力で強化された弾丸をトライアルBに放つ。

ドオオツ!!

トライアルB『グアアアアアアアッ!!!!!!』

とトライアルBは爆死した。

雅紀「……………」

と雅紀は茫然と見ていた。

橘『これで全部だな。』

睦月『そうですね』

始『……………』

『スピリット』

とギャレンKFとレンゲルKFが話している間に、ワイルドカリスはカードをスキャンして、元の姿になった。

同じく、ギャレンKFとレンゲルKFも変身を解く。

橘「ん？」

と橘は雅紀達を見つけた。

橘「君たちッ！そんな所で何をやっているんだ？」

と言つと…

雅紀「へ……………？い……………いやあ……………なんでもありません……………
っ！…！」

と雅紀が言い返そうとしたその時！

ビートルアンデッド『ウウウウッ!』

ビートルアンデッドが現れた。

雅紀「ビートルアンデッド……スペードのカテゴリA……
!」

橘「あれは……剣崎の……!」

と橘はポケットから、カードを取り出し……見る。

ビートルアンデッド『オオオオッ!』

とビートルアンデッドが叫ぶと……

アルビローチ達『ウウウッ!』

とどこから、アルビローチ達が現れた。

睦月「また!?!」

橘「睦月!驚いている場合ではないっ!いくぞっ!」

始「変身。」

『ターンアップ』

『チェンジ』

と橘と始はギャレンとカリスに変身し、戦う。

睦月「はいっ！」

『オープンアップ』

と睦月も遅れてレンゲルに変身し、戦う。

橘『くっ！数が多い……。睦月！もう一度、やれるなっ！』

睦月『はいっ！』

とギャレンとレンゲルはKFになろうとラウズアブゾーバーにカードを入れようとする……。と……

アルビローチ達『オオオオオッ！！』

アルビローチ達がソレを阻止する。

橘『なっ！？くそっ！このままでは！』

睦月『くっ！』

始『チッ！おまえら……。さがれ！』

『チヨップ』

『トルネード』

『スピニングウェーブ』

始『ハアアッ!!』

とカリスは二枚のカードをスキャンし、コンボを発動させて、アルビローチ達を撃破していく。

始『今だ・・・!』

睦月『はいつ!』

橘『すまないっ!』

『『アブゾーブクイーン』』

とギャレンとレンゲルはQのカードを入れる。そしてKのカードを入れようとした瞬間。

『オオオオオオオッ!!』

とどこからか、声が響いた瞬間、二人のKのカードに光線が当たる。

橘『なっ!』

睦月『えっ!?!』

とすると、Kのカードからアンデッドがでてきた。

ギラフアアンデッド『ウウウッ!』

タランチュラアンデッド『ハアアア・・・』

橘『カテゴリーK達が!』

睦月『今は・・・!』

とレンゲルは光線が来た方向に目を向けると・・・

トリアルルR『ウウウウツ!』

一体のトリアルルがいた。

睦月『あれは・・・トリアルルか!?!・・・しかも・・・さっきのはリ
モートだ・・・!』

とレンゲルはクローバーの10のカードを見ながら言う。

トリアルルR『ボオオオツ!』

とトリアルルRが叫ぶと・・・

ギラファアンデッド『ウウウウ・・・』

タランチュラアンデッド『フシユウウ・・・』

カテゴリーKのアンデッド達が二人を襲う。

橘『ぐっ!..こいつはっ!』

睦月『うっ!やめてくださいっ!嶋さんっ!..!』

タランチュラアンデッド『ウウウッ!!』』

とレンゲルはタランチュラアンデッド・嶋に言うが、タランチュラアンデッドは答えない。

始『無駄だ・・・!今のそいつはあのトライアルに洗脳されている。アイツを倒すしか・・・方法はないぞ・・・!!』』

とカリスはレンゲルに言いながら、トライアルRに向かって走る。

始『ハッ!』』

とカリスはトライアルRを斬ろうとするが・・・

ガシィッ!

トライアルR『ブモオオッ!!』』

始『何っ!』』

ドゴッ!

始『ぐあっ!』』

カリスは動きを止めてしまい、そこをトライアルRに攻撃される。

始『く・・・!こうなれば・・・』』

とカリスはハートのKのカードを取り出すと・・・

トライアルR『ゴオツ!』

とトライアルRが眼から光線を放つ・・・が、カリスはそれを避ける。

始『何度も同じ手が食らうか・・・奴らと一緒にするなよ・・・!』

とカリスはスキャンするその時・・・!

ビートルアンデッド『オオツ!!!』

始『っ!ぐあっ!!!』

カリスはビートルアンデッドに気付き、避けようとするが、ビートルアンデッドに攻撃されてしまう。その時に、Kのカードを手から離してしまう。

それをビートルアンデッドが手にする。

始『しまった・・・!!』

ビートルアンデッド『オオオツ!!!』

とビートルアンデッドはトライアルRにカードを向ける。

トライアルR『ブフウウツ!』

とトライアルRはカードに向けて光線を放つ。それが見事に命中し

・

パラドキサアンデッド『グゴオオツ!!!』

カードからパラドキサアンデッドが出現する。

パラドキサアンデッド『オオッ!!』

始『ゲウ!』

とパラドキサアンデッドはカリスに攻撃してくる。カリスはそれを受け止めるが、苦戦を強いられる。

そんな時……

雅紀「あっちゃく……こりゃあ、助けなきゃまずいでしょ!」

とその場を見ていた雅紀がアドベントドライバーでアンデッド達を撃つ。

バンッ!バンッ!バンッ!

アンデッド達『ウウウッ!?!』

橘『何だ……!?!?』

とアンデッド達とライダー達が見る。

雅紀「俺等も加勢するよ……!いくよ、アリス、アスナ!」

アリス「うん!」

アスナ「任せなさいっ!」

『『カメンライド』』

雅紀・アリス・アスナ「「変身っ！」」

『デйкаオス！』

『デイダーク！』

と雅紀達はライダーに変身する。

橘『なに！？』

とライダー達は驚愕する。

雅紀『行くぜ……！！』

とデйкаオスはアドベンツドライバーを剣にして、ギラファアンデツド・タランチュラアンデツドを迎え撃つ。

アリス『貴方の相手は私だよ。』

パラドキサアンデツド『ウウウッ！？グゴオッ！！』

とこっちはデイダークが不意打ちを食らわして、カリスから遠ざける。

アスナ『それっ！！』

ビートルアンデツド『ぐおっ！！』

とこちらではデステイニーがビートルアンデツドを攻撃する。

雅紀『そらっ！そらっ！！』

とディカオスがギラフアアンデッドとタランチュラアンデッドを相手に勇敢に戦う。

ギラフアアンデッド『グオオツ！！』

タランチュラアンデッド『キシヤアアツ！！！』

と二体のアンデッドは怒ってディカオスに攻撃しようとするが・

『アタックライド・ソニックツ！』

雅紀『久々に使うな。』

とソレを神速で避けて、二体のアンデッドを連続で斬る。

ギラフアアンデッド『グウウツ！』

タランチュラアンデッド『キシヤアツ！』

雅紀『さてと・・トドメだ・・！カテゴリーKは強いかもしれないが・・俺はそれを超えているんでな・・なんてね。（現にオーガやアーケオルフェノクにやられちゃったんだがなあ）』

『ファイナルアタックライド・デイ・デイ・デイ・デイカオスツ！』

雅紀『ディメンションイレイザーツ！！！』

とディカオスは必殺技を二体のアンデッドに食らわした。

ギラファアンデッド『グアアアッ！！！！』

タランチュラアンデッド『グオオッ！！！』

だが、カテゴリーKのアンデッド達だからか・少しダメージを負っただけであった。

『ファイナルアタックライド・デイ・デイ・デイ・ディークツ！』

アリス『ディメンションデスサイズツ！！』

ズバアッ！！

パラドキサアンデッド『グアアアッ！！』

とディークの必殺技を受けたパラドキサアンデッドは胸に切り傷を作り、二体のアンデッドのまえに倒れる。

トリアルR『ブモオオッ！！』

とソレを見たそトリアルRは煙幕を発射して、三体のカテゴリーK達と逃げに行った。

雅紀『逃げたか・・・』

と言っていると・・・

アスナ『ハアアアツ！デステイニーブレイク！』

ビートルアンデッド『ゴオツ！！！！』

とデステイニーが必殺技をぶつけてビートルアンデッドを倒す。

カシャ・・・っ

とビートルアンデッドのベルトが割れた。

橘『……………』

そこにギャレンが無言でカードを投げ、ビートルアンデッドはそれに吸い込まれて、封印された。

橘『……………助けてくれたことを感謝する……………。だが、君たちに聞きたいことがある……………。俺達と来てくれないか？』

とギャレン達は変身を解除する。ディカオス達も変身を解除する。

雅紀「いいですよ……………あ、自己紹介が遅れました。俺は木利野雅紀……………。そしてこっちが……………」

アリス「私はアリスです。」

アスナ「あたしは白鳥 アスナです。」

と三人は自己紹介をする。

橘「うん。自己紹介、ありがとう。詳しい話は……………後で……………行

「うん。」

と橋を先頭に・・・全員は走り去った。

第93話（後書き）

さてと、いかがでしたでしょうか？

雅紀「で？何でKFになれるんだ・・・？質問から、13体アンデッドと同時融合できるのは、剣崎さんと始だけだ・・・て書かれていたが・・・？」

ああ、橘と睦月がどうして13体アンデッドと同時融合できるかと言いますと・・・それは・・・次回は、その次に・・・

雅紀「おい・・・!!」

まあ、次回は、この後編。そして・・・また鳴滝が現る！

雅紀「続きは次回、楽しみに!!」

第94話(前書き)

今回は戦闘がないかもしれないです。
それではスタート！

第94話

ブウウンッ!

と雅紀達と橘達とはある家に来た。

橘「さあ、入ってくれ。」

と橘が扉を開けて、中に入る・・・すると・・・

? 「あ、お帰りなさい」

と女性が出迎えてくれた。

? 「ん? あの・・・この子達は?」

と女性は聞く。

睦月「あ、広瀬さん。この子達は・・・」

始「俺達と同じく、ライダーになれる奴らだ。」

と二人は、女性・・・「広瀬 栞」に言う。

栞「えっ!?! どういうこと・・・?」

と栞は少々驚きの様子。

橘「詳しい話は中で。」

と橘が言い、皆は奥に行った。その時・

カタカタ・・・

と何やらパソコンを使っている男性がいた。

？「ん？あゝ、お帰り〜。」

と男性は皆に気付き、牛乳瓶を持ちながら言う。

橘「ああ。それと小太郎。口、口」

小太郎「え？」

と橘に言われ、男性「白井 小太郎」は口を触ってみると・・・牛乳が付いていた。

小太郎「おつとと・・・ごめん。」

と小太郎は口についてある牛乳を拭く。

小太郎「それにしても・・・お客さんがいるね。」

睦月「はい。なんとというか、俺達と同じ・・・まあ、同業者達です。」

小太郎「同業者・・・と言う事は・・・君たちはライダーなのかい！？」

と小太郎は聞く。

雅紀「はい。」

小太郎「うわあ〜。君達みたいな子がライダーなんて・・・驚きだよ〜！！！」

と小太郎は興奮気味。

橘「あ〜・・・嬉しい所すまないが、ちょっとこれから、大事な話があるんだが・・・」

小太郎「あ、そうだった・・・」

と全員はイスに座る。

橘「じゃあ、まず、聞きたいことは・・・君たちは・・・俺達とは違うな・・・？」

雅紀「はい。俺達は貴方達のように、アンデッドの力を使って変身しません。俺達は・・・まあ、俺の隣にいるアリスは、カードを使って・・・ですが・・・。」

と雅紀とアリスはカードを見せる。

橘「確かに・・・。では・・・これは一体だれが・・・開発したんだ？」

雅紀「大シヨツカー・・・という組織が作ったとされているらしいです。」

橘「大シヨツカー・・・確か、その名の組織は世間で噂されていた

が・・・壊滅したと聞くぞ・・・。」

雅紀「ええ。壊滅しました。ですが・・・壊滅される前に、これは開発されていたようです。」

アリス「私は旅の途中で、コレを。」

と雅紀達は言う。

橘「そうか・・・。では、君はどういうことでだい。腹からベルトを出していたが・・・。」

と橘はアスナに聞く。

アスナ「あたしのこの力は、サキュバスと呼ばれる怪人と闘うために、古代の人間が作り出したベルトです。腹から出したのは・・・ベルトから神経が通っているためです。」

橘「そうか。俺達が闘っている奴らとは別の奴が・・・この世に存在していたのか。」

雅紀「いえ、ただ単に、この世界にいないからです。」

橘「何？」

雅紀「俺達は別の世界から来た人間です。サキュバスはアスナがいた世界に存在する怪人です。」

橘「と言う事は・・・君たちは世界を超えられる力を・・・!?」

雅紀「そう言う感じですか。。。」

睦月「凄いな。。。」

小太郎「世界を超える仮面ライダーか。。。。凄いやっ！」

始「。。。。。」

皆が驚いている中、始は無言でいる。

橘「じゃあ、俺達の事も。。アンデッドの存在も知っているのか。。？」

雅紀「はい。そちらにいる始さんが。。「ジョーカー」だということも。。。」

始「!!!!」

雅紀がジョーカーの名を口にした瞬間、始は驚いた表情をする。

橘「君はそんなことまで。。。。!!」

雅紀「ええ、今の始さんの姿が、人類の祖である「ヒューマンアンデッド」の姿であることも。。。」

始「。。。。怖くないのか？俺の正体を知っているのに？」

雅紀「別に。。あなたは人を襲わないでしょ。今まで。。皆さんと天音つて子と接したおかげで。。。」

始「・・・そうか・・・」

と始は落ち着きを取り戻したようだ。

雅紀「まあ、話は戻って・・・次は、俺が聞きます。橘さん、睦月さんが、なぜ・・・KFになれるかです。」

と雅紀の一言に橘と睦月は真剣な表情をする。

雅紀「俺の知っている限りは・・・KFは13体のアンデッドと融合ではなく、カテゴリーKだけの融合のほうです。それに13体アンデッドと融合したKFは融合係数の高さにより、それが可能となるはず。なのに、貴方達は融合係数が高くないのに13体アンデッドと融合したKFになった。なぜです？」

と聞く。

橘「それは・・・俺達の・・・所長の「烏丸 啓」と言う人のおかげだ。」

雅紀「烏丸 啓・・・BOAROのか・・・その人がKFを・・・」

睦月「ああ・・・俺達が使っているラウスアブゾーバーに改良をしてくれたんだ。融合係数が低い俺達でも、13体アンデッドと融合したKFになれるようにね・・・」

橘「だが、いくら改良してくれたとはいえ・・・KFになれる時間が短い・・・何よりも負担がかかるんでな・・・」

雅紀「そうですか。俺、最初見た時には驚きました。所で・・・睦

月さんが使っているラウズアブゾーバーは……もしかして……」

と雅紀が聞くと……睦月は無言で頷く。

睦月「うん。君も知っているかもしれないけど……剣崎さんのなんだ……。」

雅紀「やはり……。では、剣崎さんはまだ……。」

と雅紀は頭に仮面ライダーブレイドに変身する「剣崎 一真」の事を考えた。

橘「剣崎の行方はまだつかめてない。アイツが今、どこで何をしているのかもな……。」

雅紀「……。」

始「あいつは人一倍、人を守る為に闘う奴だ……。今の事態も、知らないはずはない。」

雅紀「そうですね。では、その啓さんは、今どちらに?。」

橘「今、所長は別行動だ。何をやっているのかもわからない。」

雅紀「はぁ……で、次には……どうしてアンデッドが再び、この世に?。」

橘「何でなのかは知らないが……何者かが、アンデッドの封印を解き、さらに、トリアル達を作った。」

始「おかげで俺達はカテゴリーKを失い、KFになれないがな。」

雅紀「そうかぁ・・・そういえばぁ・・・（これも、鳴滝が絡んでいるな・・・）」

と雅紀は思う。

雅紀「でも、全て・・・ではないのでしょうか？」

橘「ああ。主に、剣崎が所有していたスペードのカードに封印されていたアンデッド達だ。」

睦月「俺達はそいつらを倒し、封印して・・・残ったのはあと5枚。」

始「その5枚に封印されていたアンデッド達は今も、どこかで身を潜めている。」

雅紀「・・・バトルファイト・・・」

橘「何？」

雅紀「恐らく・・・黒幕はバトルファイトを再び開始させるつもりです。それも、トライアル達も含んだ。」

ソレを聞いた橘達は驚く。

小太郎「それって・・・結構やばくない。」

始「・・・かなりだ・・・」

雅紀「へたしたら、大戦争になるかもしれないよ……。」

睦月「一体……その黒幕とやらは……何を考えているんだ……？」

雅紀「わかりませんが……そういう可能性もあるってことはありますよ。」

と皆は黙り込む。

橘「こうしていても仕方がない。君達……力を貸してもらえないだろうか？」

と橘は聞く。

雅紀「無論、了解です。」

アリス「私も。」

アスナ「目の前の火の粉を振りはらわないとね」

と雅紀達は言う。

橘「すまない……。」

と橘は礼を言った。

とある場所

？「フフフフフフ……カテゴリーKがそろったな。実にいい成果を出している。」

と一人、不気味に笑う者がいた。

鳴滝「フフフ……「ケルベロス」の力を使えば……この世界のライダーも……ディカオスも勝てまい。」

そいつは鳴滝であった。

鳴滝「カテゴリーK達を吸収させ、さらに強くさせる。フフフフフフ……ディカオス……貴様もこれでおしまいだ……フハハハハハハハハハハハッ！！！！」

と鳴滝の笑い声が響くのであった。

とある森

？「・・・アンデッドが再び、この世に戻ってきたか・・・。」

とフードを被った一人の青年がいた。

？「俺の力で・・・なんとか・・・だが・・・この力を使えば、俺は・・・意識までもがジョーカー化してしまう。」

と青年は言う。

？「だが・・・おれは戦う。戦えない人たちのためにも・・・！」

と青年・・・「剣崎 一真」はそう言った。

第94話（後書き）

さてと・・・いよいよ、登場しました。 剣崎 一真！

雅紀「性格は変わっていないようだな。 ディケイドにでてきたのは別人？」

うーむ・・・そこところはわからんな・・・ 並行世界だし。 同じ容姿を持った人間なんて一人か二人はいるってよく言うじゃん。」

雅紀「ふーん・・・ まあいいや。 早く次回を・・・。」

ああ、そうだった！さてと、今回はアンデッド達と対決。 そして・・・この男が皆の前に再び姿を見せる。

剣崎「俺は闘う・・・！」

次回をお楽しみにっ！

第95話(前書き)

今回はたぶん、短い話になるとおもいます。
それではスタート。

第95話

とある場所

？「もうすぐだ・・・！」

此処に、一人の男性がいた。

鳴滝「もうすぐだ・・・。もうすぐケルベロスが復活する。しかも、より強力に・・・より、凶暴に・・・！！！」

その男性は鳴滝であった。

鳴滝「・・・これで、ディカオスの抹殺準備は整った・・・！！！」

と鳴滝は狂喜な笑い声を出しながらそう言った。

白井家

ブブー！ブブー！

突如として、アラームが鳴る。

雅紀「この音は・・・？（たしかコレは・・・）」

栞「アンデッドサーチャーに反応！」

と栞はパソコンへと足を運び、画面をのぞいた。

栞「皆！カテゴリーKよっ！」

橘・睦月・始「「コクツ」」

三人は頷き、その場を後にする。

雅紀「カテゴリーク・・・とすれば・・・あの三体か・・・行くよ、アリス、アスナ。」

アリス「うんっ！」

アスナ「さつさと倒しましょう！」

と雅紀達もその場を後にする。

小太郎「無事を祈ってるよっ！」

栞「・・・」

二人は戦えないから・・・此処で、皆の無事を祈るしかない。

？「・・・」

そんな中・・・二人とは別に雅紀達を見ている者がいたのは・・・誰も知らなかった・・・。

現場

パラボキサアンデッド『ウウウツ！』

タランチュラアンデッド『ハアアア……！！』

ギラフアアンデッド『オオオオオツ！！』

現場では三体のカテゴリーKが暴れまわっていた。

ブウウウンツ！

その場に、雅紀達 came。

橘「やはり、あの三体かつ！」

睦月「行きましょう、橘さん！」

始「……」

と三人はベルトを出す。

雅紀「俺達も、行くよっ!」

アリス「うんっ!!」

アスナ「やってやるわよっ!」

と雅紀達もベルトを出す。

六人「変身っ!!」

『ターンアップ』

『オープンアップ』

『チェンジ』

『カメンライド・デイカオスッ!』

『カメンライド・デイダークッ!』

と六人はライダーに変身した。

パラドキサアンデッド『オオオオオッ!!!!』

それに気付いたパラドキサアンデッドが先制攻撃を仕掛け、六人に向かって斬撃を飛ばす。

ドゴオッ!

六人はソレを避け・・・アンデッド達に突っ込む。

橘『ハアッ！』

バンッバンッ！！

ギャレンはギラファアンデッドに向かって弾丸を放つ。

ギラファアンデッド『ムウンッ！』

対するギラファアンデッドはのこぎりのような剣を二つだし、ソレを防ぐ。

雅紀『隙ありイッ！！』

そのすきに、ディカオスがギラファアンデッドの腹に、アドベントドライバーの弾丸を零距离で放つ。

ドンッドンッドンッ！！

ギラファアンデッド『グオッ！』

これによりギラファアンデッドはダメージを受けるが、大したことはなく、襲い掛かってくる。

タランチュラ『ムウウッ！』

と一方ではタランチュラアンデッドが、レンゲルとデステイニーに襲い掛かってくる。

睦月『嶋さん。。。』

レンゲルはタランチュラアンデッドを見ながらそつ呟くと・・・

睦月『俺が・・・必ず、正気に戻しますっ!!』

とレンゲルラウザーを構えて、突っ込む。

アスナ『あの人と、あのアンデッドに何かあったのかな?』

アスラ『そんなこと考えてないで・・・今は目の前に集中しなさい!!』

アスナ『わかってるわよっ!!』

とデステイニーもまたタランチュラアンデッドに突っ込む。

パルドキサアンデッド『ゴオオッ!!』

始『お前を封印する・・・!!』

一方ではカリスとパルドキサアンデッドが闘っていた。

パルドキサアンデッド『オオオッ!!』

始『っ!くっ!!』

パルドキサアンデッドの斬撃が飛び、カリスはそれに直撃する。

パルドキサアンデッド『オオオッ!!』

パラドキサアンデッドはカリスに突っ込み、鎌で切り裂こうとする
と・・・

アリス『私がいるってこと・・・忘れないで!』

とディダークが来て、パラドキサアンデッドに一撃を食らわす。

パラドキサアンデッド『ゴッ!?!』

始『・・・礼は言わないぞ・・・』

アリス『別にいいですよ。』

とこんな感じでカリスとディダークはパラドキサアンデッドに突っ
込む。

雅紀『ハアアッ!!--』

戻って、ディカオスは一人でギラファアンデッドに斬りかかる。

雅紀『(大ダメージを与えて、橘さんが封印すれば・・・!)』

そついう考えでディカオスは斬って、斬って斬りまくる。

橘『なかなかだな・・・。俺も、行くぞ!』

『アブゾーブクイーン』

とギャレンはラウズアブゾーバーにQのカードを挿入。

キラファアンデッドは倒れる。

『スタツブ』

睦月『ハアアッ！！』

とレンゲルは威力が増したレンゲルラウザータランチュラアンデッドを刺す。

ドッ！

タランチュラアンデッド『ゴッ！』

タランチュラアンデッドは刺された部分を触りながら体をふらつかせる。

アスナ『デステイニーブレイクッ！！』

そのすきにデステイニーは必殺技をタランチュラアンデッドにぶつける。

タランチュラアンデッド『グオッ！』

タランチュラアンデッドは避けようとするが、避けきれず、右肩に当たってしまう。

レンゲル『・・・行きます。』

『アブゾーブクイーン』

とレンゲルはラウズアブゾーバーにQのカードを挿入し・

『フュージョンジャック』

Jのカードをスキャンし、レンゲルはJFへと姿を変える。それはギャレンのJFとは違い、翼が生えておらず、象の牙を思わせるものが両肩に装着されていて、レンゲルラウザーも刃先がより鋭利になっていた。後部の所には鉄球が付属している。

『ラツシュ』

『ブリザード』

『ポイズン』

『ブリザードベノム』

睦月『ハアアア……!!』

とレンゲルJFは構え……一気に接近し・

睦月『ウリヤアアアアツ!!』

レンゲルラウザーでタランチュラアンデッドを刺して、氷漬けにした直後、猛毒を注ぎ込んだ。

睦月『ムウンツ!!』

レンゲルJFはそのまま、タランチュラアンデッドを投げ飛ばす。

タランチュラアンデッド『グ・・・オオ・・・!!』

タランチュラアンデッドは力なく倒れた。

一方、カリスとディダークは・・・

パラドキサアンデッド『キシイイツ!!!!』

始『ハアッ!』

アリス『それっ!!!!』

初めての共同作業なのか!?!?!と思わせるような、抜群のコンビネーションでパラドキサアンデッドにダメージを与える。

アリス『ハアアアッ!!!!』

パラドキサアンデッド『グオッ!』

ディダークはパラドキサアンデッドを斬って吹っ飛ばす。

アリス『始さんっ!!』

始『・・・』

ディダークはカリスの方に顔を向け、カリスは無言で三枚のカードをスキャンする。

『フロート』

『ドリル』

『トルネード』

『スピニングダンス』

とカリスを覆うように暴風が生まれ、カリスは回転しながら、上空を舞う。

始『ハアアアアッ!!!』

そして、その勢いで、パラドキサアンデッドにドリルキックを浴びせる。

ズドオオオオッ!!!

パラドキサアンデッド『グオオオオッ!!!』

パラドキサアンデッドは吹っ飛んだ。

ギラファアンデッド『グ・・・ウウ・・・』

タランチュラアンデッド『オオ・・・』

パラドキサアンデッド『ギイ・・・』

倒れた三体のアンデッドを囲むように、ライダー達は集まる。

雅紀『橋さん、睦月さん、始さん、今です。』

橘『ああ。』

睦月『嶋さん……もう一度……眠りについてください。』

始『……………』

と三人はKのカードを取り出し、アンデッド達を封印しようとしたその時……！

？「フフフ……ようやくこの時が来たあッ……！」

と何処からか声が響くと……

ドゴオオオオツ……！！

六人『うああああああッ……！！』

ライダー達に光弾が飛び……ライダー達は吹っ飛ぶ。

雅紀『く……………今の声は……まさか……………！！』

？「そのまさかだよ……デイカオスッ！」

と目の前に……鳴滝が現れた。そして、その隣に何かがあった……それは……

橘『……………ケルベロスっ！？』

人造アンデッドのケルベロスだった。

始『馬鹿な．．．!? 奴は倒したはず．．．!』

鳴滝「この私が．．．封印を解いてあげたのだよ．．．まだパワーは不十分だが．．．君らのおかげで、カテゴリーK達を楽に吸収させることができる。」

雅紀『まさか．．．俺達に倒させようと最初から見物していたわけだな．．．!』

鳴滝「その通りだっ! 君たちは．．．カテゴリーKを倒し、ソレをケルベロスに吸収させる手駒だったにすぎない! さあ、ケルベロスよ! カテゴリーK達を吸収しろっ!」

ケルベロス『フシユウウウ．．．。オオオオオオオオオツ!
!?!』

ケルベロスは鳴滝に命じられるがままにカテゴリーK達を吸収し始める。

ギラファアンデッド『オオオオツ!?!』

タランチュラアンデッド『キシヤアアアツ!?!』

パラドキサアンデッド『ギイイツ!?!』

と次々にカテゴリーK達は吸収されていった。

ケルベロス『フウウウ．．．。』

鳴滝「残るは、コーカサスビートルアンデッドのみ……まず、
力試しに、貴様ら、ライダー達を消してくれるっ！！殺れっ！ケル
ベロスっ！！」

ケルベロス『オオオオオオッ！！』

とケルベロスは咆哮し、ライダー達に接近しようとしたその時……
！

？「待てっ！」

という声が響いた。

鳴滝「……誰だ……？どこにいるのだ……？」

と鳴滝は辺りを見回すと……

？「俺は此処だっ！」

とライダー達の目の前に一人の青年が現れた。その青年をギャレン
達とディカオスは知っていた。

雅紀『……剣崎……一真……！？』

とディカオスは呟く。そう、この青年こそが、仮面ライダーブレイ
ドの剣崎 一真だ……。

橘『剣崎っ！』

睦月『剣崎さん！』

始『剣崎……なのか……!?!?』

とギャレン達は驚く。

剣崎「ああ。久しぶり。始……おまえは相変わらずだな。」

と剣崎は呟く。

鳴滝「ブレイド……! 貴様……!! ケルベロス! まず先にそいつだつ!!」

と鳴滝はケルベロスに命じる。

橘『剣崎!』

とギャレンは剣崎にあるものを渡した。剣崎はそれを取る。

剣崎「これは……。」

それは、ブレイバツクルとスピードのAのカードだった。

橘『もしものために……持って置いてよかった……。変身するんだつ!! 剣崎!!』

と橘は言うが……

剣崎「……」

ガシヤアッ!

剣崎はブレイバツクルを地面におとす。それを見向きもしないで、ケルベロスを見る。

橘『剣崎！何をやっているんだ！？速く拾うんだっ！！』

剣崎「そんなの使わなくても・・・俺はできますよ・・・。」

と言うと、剣崎の腹から、カリスラウザーに似た・・・ジョーカーラウザーが出現する。

剣崎「変身・・・。」

と剣崎は呟き、カードをスキャンする。

『チェンジ』

とジョーカーラウザーが発すると、剣崎の体は何かに含まれ、それがはじかれると・・・そこにいたのは・・・

ビートルアンデッド『・・・』

ビートルアンデッドだった。だが、腹にはジョーカーラウザーがついていた。

剣崎『行くぞ！』

とビートルアンデッド・・・いや、剣崎は武器を持って、ケルベロスに突っ込むのであった。

第95話（後書き）

さてと、久々の更新です。

雅紀「おいつ！なぜ、剣崎さんがビートルアンデッドにつ！！？」

ほら、ジョーカーラウザーでスキャンすると疑似変身するじゃん。
マンティスアンデッドはそのままライダーの姿だからけども、ビートルアンデッドは普通にアンデッドだから・・・

雅紀「あのなあ・・・。」

さて、次回はこの後編。そして・・・剣崎が暴走っ！？

剣崎『ハカイ・・・ハカイ・・・ハカイダアアアアッ！！！！』

続きは次回、お楽しみにっ！！

第96話

剣崎『オオオオッ!』

ビートルアンデッドに変身した剣崎はケルベロスに迫る。

鳴滝「怯むなッ!」

ケルベロス『ガウウウッ!』

ケルベロスもまたビートルアンデッドに接近する。

剣崎『ハッ!』

ビートルアンデッドは剣でケルベロスに斬りかかる。

ズバッ!

それはみごとに命中し、ケルベロスの右肩に傷を作る。

ケルベロス『グウウッ!ゴオオオオオッ!』

ケルベロスは一瞬、怯んだが負けじと爪で反撃してきた。

ガキィッ!

だが、これはビートルアンデッドが持つ盾で防がれる。

剣崎『ハアッ!』

そのすきに、ビートルアンデッドはケルベロスを切り裂いた。

ケルベロス『ゴオッ!』

ケルベロスが後退してしまう。その時・・・

剣崎『ウエエエイツ!!!』

ビートルアンデッドは剣でケルベロスを上段から斬りつけた。

ズバアアッ!!

ケルベロス『グオオオオオオオッ!!!』

ケルベロスは鳴滝の方まで吹っ飛ばされる。

鳴滝『ば・・・バカな・・・!カテゴリーKの力を吸収して最強になったケルベロスが・・・!!』

剣崎『だけど現にケルベロスは俺に負けているぞ?』

鳴滝『クウウッ!黙れっ!ケルベロス!!貴様、ブレイドを殺せないなど・・・どういうことだっ!!殺すんだっ!!八つ裂きにしろオッ!!!』

鳴滝はケルベロスにそう言いながらオーロラの中へ消えた。

ケルベロス『オオオオオオオッ!!!!!』

ケルベロスはビートルアンデッドを殺そうと迫る。

剣崎『ウェイッ！！』

ビートルアンデッドは剣でケルベロスに連打を食らわす。

ケルベロス『グウウオオオオオツ！！』

それでもケルベロスは止まらなかった。

剣崎『何・・・！？』

ケルベロス『オオオオオオオオオツ！！』

ケルベロスは爪をより鋭利にしビートルアンデッドに斬りかかった。

剣崎『くっ！』

ビートルアンデッドは盾で防ごうとするが・

ガシヤアツ！！

一撃で破壊されてしまった。

剣崎『っ！』(さっきのよりもパワーが増している！パワーを全開にして俺を倒そうとしているのか！)『

ケルベロス『オオオオオオオウウツ！！』

剣崎『くっ！！』

ビートルアンデッドはケルベロスの攻撃を今度は剣で防ごうとするが・・

ガシヤッ！

これもまた破壊される。武器がなくなってしまったビートルアンデッドは・・

ズバアッ！

剣崎『ぐあっ！』

ケルベロスの攻撃を受けてしまい、吹っ飛ぶ。

剣崎『ぐう・・・！』

ビートルアンデッドは立とうとするが・・先の一撃をまともに受けたせいか、動けなかった。

ケルベロス『ガアアアッ！』

ケルベロスはそれが好機とばかりにビートルアンデッドに攻撃をしようとする・・その時・・

？「はい、お前のターンはここまでだ。」

と言ったと同時に・・

バンッ！バンッ！バンッ！

ケルベロスに向かって三発の光弾が飛んできて・

ケルベロス『グオツ!?!』

それがケルベロスに直撃する。そしてビートルアンデッドの前にそれを撃った張本人が立っていた。

雅紀『ここからは・俺達の攻撃だ・!』

出番がなかったディカオスだ・

雅紀『出番ないなんて言うな・あとでお話だぞ・?』

大変、すみませんでした~~~~っ!! (汗)

雅紀『さて、気を取り直して・大丈夫ですか? 剣崎さん。』

剣崎『お前は・一体・?』

雅紀『俺は・最強最悪のライダー・ディカオスです・ま、本名は木利野 雅紀です。』

橘『剣崎!』

とそこへ、ギャレン達 came。

睦月『剣崎さんっ! 大丈夫ですか!?!』

剣崎『橘さん・。睦月・。』

ビートルアンデッドは交互に見る。

始『・・・・・・・・』

カリスは皆から少し遠い所にいる。

剣崎『始・・・・・・・・』

立ち上がりながら、ディカオスの前に立つ。

剣崎『お前は・・・・子供なのか？』

雅紀『14歳の中学生です。』

剣崎『そうか・・・・。俺は剣崎・・』

雅紀『知ってますよ、剣崎 一真さん。』

剣崎『そうか・・・・。』

と言っていると・・・・

ケルベロス『オオオオオオオオオツ！！！！』

ケルベロスが光弾を発射してきた。皆はそれを避ける。

雅紀『そういえば・・・・奴の事、忘れてた。』

剣崎『奴にはダメージを与えたが・・・・今の状態からすると・・・・

パワーアップしている可能性があるな。』

雅紀『なるほど。では、ケルベロスなら・・・このライダー達でしょよ。』

とディカオスは三枚のカードを取り出し、そのうちの一枚をディカオスドライバーに、もう二つをアドベントドライバーに入れる。

『カメンライド』

雅紀『変身！そんでもって、いってらっしゃいっ！』

『グレイブツ』

『ラルクウツ！』

『ランスウツ！』

とディカオスはDグレイブに・・・そして目の前に仮面ライダー「ラルク」と「ランス」を呼び寄せる。

剣崎『なっ！？なんだかわからないけど・・・仮面ライダーを呼び寄せた！？』

雅紀『召喚したんです。一人か二人は、多い方がいいでしょ。』

『アタックライド・グレイブラウザー』

雅紀『ハアツ！』

とDグレイブはグレイブラウザーを召喚してケルベロスに斬つてかかる。それに続くかのように、ランスとラルクが来る。

橋「剣崎！コレを使うんだ・・・！ジョーカーになって、アンデッドになったとしても・・・ライダーの力がなくては・・・奴には勝てんぞ・・・」

剣崎「・・・（使わなきゃいけないのか・・・）」

ビートルアンデッドはギャレンJFが持っていたブレイバツクルを取り・・・一度元の姿に戻る。

始「やはり・・・おまえは俺のようにハート2のカードを使用しなくても、人間に戻れるんだな・・・」

剣崎「・・・変身っ！！」

「ターンアップ」

剣崎はブレイバツクルのレバーを引き・・・カードをくぐりぬけると・・・ヘラクレスオオカブトとスピードをモチーフにしたライダー「ブレイド」に変身する。

ケルベロス「オオオオウッ！！」

ランス「ぐあああっ！！」

ラルク「キャアアッ！」

ケルベロスの攻撃を受け、ランスとラルクは消えてしまう。

雅紀『おいおい・・・出番がこれだけって・・・！それに・・・ゆるさねえッ！！』

Dグレイブは怒り・・・ケルベロスに斬りかかる・・・

剣崎『ウェイッ！』

ブレイドはケルベロスを蹴り、Dグレイブの隣に立つ。

雅紀『剣崎さん・・・！』

剣崎『・・・行くぞ・・・！』

雅紀『・・・ええ！』

ブレイドとDグレイブは互い頷き合う。

剣崎『オオオオオッ！！』

雅紀『ハアアアッ！！』

二人はケルベロスに斬りかかる。

ケルベロス『ゴオオッ！』

ケルベロスは光弾を大量に放つが・・・

橘『させるかっ！』

アリス『えいつー!!』

アスナ『ドラグリーン・・・フルバーストッ!』

とギャレンJFとディダーク、そしてデステイニーHFが光弾を撃ち落とす。

始『ハアアッ!!』

睦月『ハアアッ!!』

カリスとレンゲルJFは二人の援護に行く。その時・・・

ズキインッ!

バチバチ・・・

ブレイドの体に激痛が走り・・・そしてブレイバツクルから稲妻が走る。

剣崎『くっ!ウェイイイッ!!』

ブレイドはそれを感じながらもケルベロスを斬る。

ケルベロス『ゴオオッ!』

ケルベロスは吠える。そして、四人はケルベロスを囲む。

『ファイナルアタックライド・グ・グ・グ・グレイブッ!!』

Dグレイブはグレイブラウザーにエネルギーを注入。

『キック』

『サンダー』

『ライティングブラスト』

剣崎『ハアアアッ!』

ブレイドはブレイラウザーを地面に刺し・・・顔を赤く発行させる。

『トルネード』

『ドリル』

『スピニングアタック』

始『ハアアアア・・・』

カリスが構えると・・・暴風が巻き起こり、カリスを包む。

『バイト』

『ブリザード』

『ブリザードクラッシュ』

睦月『オオオオオオオ・・・』

レンゲルJFの足先に吹雪が発生……。そして…

雅紀『テヤアアアアアッ！！！！』

剣崎『ウエイイイイイイイイツ！！！！』

始『ハアアアアアアッ！！！！』

睦月『ラアアアアアアアアアアアッ！！！！』

四人のそれぞれの必殺技がケルベロスに迫る。

ケルベロス『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ツ！！！！！！！！！！』

ケルベロスはそれに命中し……。吹っ飛ばす。

ケルベロス『グ・グウウ……。！！！！』

ケルベロスは倒れると……。ケルベロスからカテゴリーK達がでてきた。

雅紀『ハッ！橘さん、始さん、睦月さん！今ですっ！！！！』

橘『ああっ！！！！』

始『……。！！！！』

睦月『嶋さん……。！！！！』

三人はカテゴリーK達に向かってカードを投げつけ、カテゴリーK達はそれぞれのカードに封印されていた。カードは回転しながら持ち主に戻っていく。

雅紀『これでケルベロスは弱体化・・・いや・・・カテゴリーK達を吸収しても・・・全然、強くなかったな。』

と元に戻ったディカオスが呟くと・・・

剣崎『ガ・・・ウウツッ!!』

ブレイドが急に苦しみ出した。

雅紀『剣崎さんっ!?!』

ディカオスがブレイドに近づいていくと・・・

剣崎『く・・・来るなあッ!!』

ブレイドが止めた。

睦月『剣崎さんっ!?!どうしたんですかっ!?!?!』

始『まさか・・・お前・・・!!』

皆が慌てているなか・・・カリスは何かを察したようだ。

剣崎『グ・・・グウウ・・・グアアアアアアアッ!!!!』

ブレイドは咆哮し・・・ブレイバツクルは強制的にはずれ、変身が解

ける。すると・・

ギュアアアアアア・・・・・

剣崎の体が変わる。それを見たデイカオスは・

雅紀『・・蒼い・・ジョーカー・・!?!?』

と呟いた・・。目の前にいる剣崎は・・始がなるジョーカーとは
違い、蒼い体をしているジョーカーとなってしまった。

剣崎『グウウウ・・』

ジョーカーとなってしまった剣崎は息を吐く。

睦月『剣崎・・さん・・!?!?』

橘『剣崎・・!』

アリス『私の知らない・・ジョーカー・・!?!?』

アスナ『ウソでしょ!?!?』

それを見た皆はびっくりする。

剣崎『・・グウウウ・・』

と呟いた・・瞬間っ!

剣崎『ウウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

咆哮し……それで地面が揺れ……削れる。それはまるで、衝撃波のようだ……。

雅紀『ぐうっ！……まさか……アンデッドの本能に操られてジョーカーに……!?!?』

始『剣崎……やはりお前は……!……この事を知っていたはずなのに……!』

カリスは悲痛の声でそう言う。

剣崎『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!!』

剣崎……ジョーカーとなって……暴走……。

第96話（後書き）

さてと、いかがでしたか？

雅紀「いかがでしたか？じゃない。なぜ剣崎さんがジョーカーに……！？しかも蒼っ！？」

始と近くにいたらジョーカー、アンデッドの本能を抑えられないじやん。始と同じ、ジョーカーじゃつまらないから蒼くしてみた。

雅紀「あのなあ……」

まあ、今回は……ジョーカーとなってしまった剣崎は皆を襲う……すると……

？「ディカオスは私が殺すのですから……邪魔しないでください。

」

『カイジンライド……』

次回……新キャラ登場？お楽しみにっ！！

第97話

『アアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！』

蒼いジョーカーとなった剣崎は雄たけびを上げる。それだけで周囲の物は破壊される。

『くっ！吠えただけで地面が削れていくっ！凄すぎだろっ！』

ライダー達はそれに耐えるが、何時、吹き飛ばされるか、時間の問題であった。

『け、剣崎！何でアイツが…！』

『…俺のせいだ。』

『始さん？』

『俺があの時、封印されていれば、剣崎はジョーカーにならずに済んだ…！』

カリスは以前の出来事…ジョーカーとなってブレイドと闘った事を思い出しながら、悲痛な声を上げる。

『始さん。何も始さんのせいじゃありません。剣崎さんも…こうなる事を承知で、皆の前に来たはずです。それに、そんな事…剣崎さんが聞いてたら、何か言われますよ？』

『お前…』

カリスは顔を上げ、デیکاオスを見る。

『今は、剣崎さんを止めるのが先です…!』

デیکاオスはジョーカーとなった剣崎の方に顔を向ける。

『（考える…! 剣崎さんを救う方法を…!）』

デیکاオスは考えていると…

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!!』

ジョーカーとなった剣崎はこれからはブレイドジョーカーとしますライダー達に接近し、襲いかかってきた。

『うおっ!?!?!?! 橘さん、睦月さん、始さんっ! KFにはなれま
すねっ! 剣崎さんを止めますよ!!!!』

『わかった! 行くぞ! 睦月!』

『はいっ!』

『剣崎: 今度は俺が、お前を止めるっ!!!!』

『『アブゾーブクイーン』』

『『エボリユーションキング』』

『『エボリユーション』』

ギャレンとレンゲルはKFに、カリスはワイルドカリスになった。

『いくよ！アリス、アスナ！』

『わかったよ！』

『あの人の暴走…止めてやろうじゃないっ！』

ライダー達はブレイドジョーカーに向かって行く。

『ラアアアアアアアアアッ！！！！』

ブレイドジョーカーは鎌のような剣で攻撃を仕掛けてくる。

『くっ！はっ！！』

ライダー達はブレイドジョーカーの攻撃を避け続ける。

『剣崎ッ！』

『剣崎さんっ！』

ギャレンKFとレンゲルKFがブレイドジョーカーを取り押さえる。

『オオオオオオオオオオオオッ！！』

それをブレイドジョーカーは力任せに振りほどき、二人に攻撃する。

ドッ！ズバッ！

『がっ！』

『あっ！』

二人は攻撃を受け、倒れる。

『剣崎イイツ！』

ワイルドカリスはワイルドスラッシャーを持って、ブレイドジョーカーに攻撃する。

『グウツ！』

ブレイドジョーカーは鎌のような剣でソレを防ぎ…

ゴオツ！

パンチを食らわした。

『ぐっ！剣崎！目を覚ませっ！！』

ソレを受けながら、ワイルドカリスは必死にブレイドジョーカーに呼びかける。

『グウウツ！！』

ブレイドジョーカーはそれには答えず、ワイルドカリスに攻撃を与え続けた。

ズバツツ!!

始『ぐあああつ!!!!』

『始さんっ!!!!…剣崎さん…!!』

『グウウウウ…!!』

デйкаオスの目の前にいるのブレイドジョーカーはもはや剣崎ではなく、ジョーカーそのものだった。

『く…何か、止められる方法はないのか…!!』

デйкаオスは必死に頭をフル回転させる。

『ウアアアアアアアアアアアッ!!!!』

それを邪魔すると言わんばかりに、ブレイドジョーカーはデйкаオスに攻撃を定める。

『雅紀を傷つけは…!!』

『させないっ!!』

それをデイダークとJFにフォームチェンジをしたデステイニーが

止める。

『ガアアアアッ！！！』

『キャッ！』

『うあっ！』

ブレイドジョーカーの攻撃をディダークとデステイニーJFは受けてしまう。

『くうっ！負けるもんですかっ！！』

デステイニーJFは負けじとブレイドジョーカーに攻撃を仕掛けるが…

『オオオオオッ！！』

『キャアアアアッ！！』

ブレイドジョーカーにカウンターを食らわされ、吹っ飛ばされた。

『アスナっ！！』

ディカオスはデステイニーJFの元へと行くところだが…

『グオオオオオッ！！』

ブレイドジョーカーがソレを邪魔する。

『くっ！』

ディカオスはアドベントドライバーを使って、ブレイドジョーカーと闘う。

「く…くう…！」

一方、デステイニージフは変身が解けてしまい、倒れていた。腹に一撃を食らったせいで、苦しい表情をする。

『があっ！』

眼を開けてみると…ディカオスがブレイドジョーカーにやられていた。

『剣崎！やめろっ…！』

ギャレンKFがキンググラウザーでブレイドジョーカーを撃つても、ブレイドジョーカーはそれを手で防ぐ。

『オオオオオオッ…！』

ブレイドジョーカーは左手にエネルギーを込め、上空にあげると…

バリバリッ！！

左手から雷が発射され…

『うあああああつ！！！』

ライダー達に直撃する。

「皆が……あたしだけ、倒れているなんて……ダメよっ！」

アスナは必死で体を起こすと……

『ちよつと失礼』

「キヤアツ！！」

アスラがでてきて、アスナと入れ替わった。

『アスラ！いきなり何すんのよっ！？』

「アンタは休みなさい。今度はあたしがやるから。それに……雅紀を傷つけた罰を与えなきゃね……！」

アスラは怖い表情をしてブレイドジョーカーを睨んだ。

『あ、アスラ？その……殺さないですよ？』

アスナはそれに恐怖しながらもアスラに言う。

「わかってるわよ。ただ単に罰……おしおきよ。」

『そ、そう』

「さてと、久々に運動でもしますか……暗黒変身っ！！！！」

アスラはデステイニーDFにへと変身した。

『ぐああっ!!』

戻ってディカオスはブレイドジョーカーの攻撃を受け、吹っ飛ばされていた。

『よっとう!!』

そこにデステイニーDFがディカオスを受け止めた。

『アスナ…あ、その姿だとアスラか。ありがとう。』

『いいよ。大好きな雅紀が無事なら それに嬉しい、ありがとうっ
て…フフ、今夜は、あたしが、相手して、あ・げ・る / / /』

先ほどの怖いオーラではなく、桃色ラブラブオーラを放出していた。

『今夜つて…何？何を相手？』

『とぼけちゃって わかってるでしょう？ / / /』

『……………きゆう / / /』

ディカオス何を想像したのか…気絶してしまう。

『あっ！此処で気絶しないでよっ！もう。でも、そっいつ所また…
雅紀の魅力。可愛いんだから / / /』

デステイニーDFは愛しそつに気絶しているディカオスを抱きしめる。

『グオオオオオオッ！！』

そこへ、ブレイドジョーカーが攻撃を仕掛ける。

『よっ』

デステイニーDFはディカオスを抱えながらそれを避ける。

『もっつ！せつかくのラブラブな雰囲気か台無し。アンタにおしおきがあったけど、ソレ、三倍にするから、よろしく。』

デステイニーDFはブレイドジョーカーにそう言い、右手を前に出す。

キュイイイイ…

右手にエネルギーが込められ、黒く輝く。そして…

『ダークネス……カノンッ！！』

右手から波動砲が発射され、地面を削りながらブレイドジョーカーに直撃する。

『グオっ！！』

ブレイドジョーカーは吹き飛ばされる。

『ククク…！消えちゃえ…！』

先ほどのアスナの「殺さないで」というお願いはどこへやら、デステイニーDFはダークネスカノンを連発した。

『グオツ…！』

ブレイドジョーカーは避けきれずに受けてしまう。

『き、君っ！やりすぎだっ…！やめろっ…！』

ギャレンKFはデステイニーDFを止める。

『何？あたしに命令？邪魔しないでよ…！』

『ぐああっ…！』

デステイニーDFはギャレンKFに蹴りを食らわす。

『あたしはごみ処理してんのよ？それに、あたしに命令することができるのは…雅紀だけなの。うざったいクワガタは退場なさい。』

デステイニーDFはギャレンKFにダークネスカノンを撃とうとしたその時だ。

『うっ…はっ！アスラ、やめろっ…！』

先ほど気絶してたディカオスが目を覚まし、デステイニーDFに向

かって叫ぶ。

『雅紀？何で邪魔するの？このクワガタ、うつさいのよ？』

『うつさいからって……あのね、そういう事で攻撃しちゃダメ！いい！？』

『…はあ、わかった。雅紀が言うなら。命拾いたわね、クワガタ。』

『なっ！…さつきとは性格が違うよっな…』

『すいません、橘さん。この子は二重人格なんです。今のアスナはもう一人の人格のアスラの方なんです。』

『そ、そうか。わかりづらいな。』

ギャレンKFは苦笑いをする。

『グウウウウウウツツ！！！！』

ブレイドジョーカーは立ち上がる。

『とりあえず、剣崎さんを止めようっ！全力で…！！行くよ、アスラ…！！』

『ええ…！あたしたちの愛の力、見せてやりましょう…！！』

ディカオスとデスティニーDFは身構える。

『私の事も忘れないでほしいなあ…』

後ろからディダークがディカオスに抱きついた。

『アリスっ！？』

『アスラちゃん、何どさくさにまぎれて雅紀と話していたの？雅紀とするのは私だよ？』

『アンタは毎日してんじゃない？あたしとアスナはね、どれだけ我慢してるか…！雅紀として、日頃の疲れを解消するんだから…！！そして…雅紀とより愛し合うんだから　／／／』

『をつけたってダメ。雅紀とするのは私なの。』

『なら、一緒に…』

『ならOK。』

二人は話し合った。

『二人とも…今は戦闘中なんだよ…？』

ディカオスは言うが、誰も聞いてはくれなかった。

「ほう、剣崎　一真がジョーカーになったか…！」

一方、ディカオス達を見ていた者がいた。鳴滝であった。さっき逃げたのに、懲りないね。

「黙れ！それはそうと、ジョーカー化しているが、今のところピンチなようだな。ディカオスを抹殺するのに手間が省ける。ちょっとした救いを与えてやるか。」

鳴滝が呟くと、後ろからオーロラが出現し、中からトライアルシリーズが現れた。

「さあ行くがよい。ジョーカーを救い、そしてディカオスを抹殺しろ。」

鳴滝の命令を聞き、トライアル達は行くことすると…

「待ちなさい。」

目の前にオーロラが出現し、中から一人の少女が現れた。

「君は何者だい？」

「私はあなたと同じ、ディカオスを抹殺する同業者のようなものです。しかし…」

少女は何処から出したのか、右手に銃のようなものが握られてあった。

「ディカオスは私が殺すのですから…邪魔しないでください。」

少女はそう言い、一枚のカードを取り出し、銃に入れた。

『カイジンライド』

「何！？カイジンライドだと…！？君は一体……！」

「私は、ディカオスを殺すように命じられた…「天使」です。」

『マンティスアンデッド』

銃からカリスに似たアンデッド、マンティスアンデッドが現れた。

「行きなさい。そのトライアルが貴方の敵です。」

『オオオオオオオッ……！！！！』

マンティスアンデッドはトライアル達に接近した。

「くっ！」

鳴滝はオーロラの中へと消えた。

「逃げ足が速い人ですね。後は、あの蒼いジョーカーを排除し、ディカオスとその仲間を抹殺しますか…。」

少女はディカオスの方に顔を向ける。

「彼は悪魔を超えた……魔王なのですから……！」

少女はそう口にした。

第97話（後書き）

さてと、いかがでしたでしょうか？

雅紀「あのさあ、いろいろと聞きたい事が…なぜ、ブレイドジョーカーなんて名前にしたんだ？」

あはは…すまん、名前が思い浮かばなくて…ネーミングセンスが悪かった。

雅紀「はあ…で、次回はどうなるの？」

ああ、次回はこの後編。そんなもって剣崎がケルベロスに誘拐される！？

雅紀「マジか！？つか、出番なかったな、ケルベロス。」

まあな…では、お楽しみに！

第98話

『グウウウウ…』

ブレイドジョーカーはディカオス達を見て身構える。

『今のところ…一番、ダメージを与えているのはアスラだ。動けなくさせる程度でいいから…』

『わかったわ。そしてこれが終わったら、たっぷりと愛し合いましよう』

『私も入れてよ…ね？』

『あの…アリスさん、怖いんですけど？』

などと話をしている内に…

『ウアアアアアッ！！！！』

ブレイドジョーカーが接近してきた。皆はそれぞれ避ける。

『うわっ！っ！こうなったらこのライダーにっ！』

『カメンライド・ダブルウツ！』

ディカオスがカードを入れ、作動させた瞬間、辺りに暴風が巻き起こり、それがディカオスを包む。二つのメモディーが流れ、ディカオスはDWへと変わった。

『ハアッ!!!』

DWは風を纏った右足でブレイドジョーカーを蹴る。

『グウッ!!!』

ブレイドジョーカーはソレを避け、DWを攻撃する。

『フォームライド・ダブルウツ!サイクロンメタルウツ!』

その直前にDWはカードを入れ、黒かった左部分が銀色に変化し、背中に棍棒が付いていた。

ガキンッ!

サイクロンメタル
DWCMはメタルシャフトでそれを防ぎ、

『ハアアッ!!!』

メタルシャフトに風を纏わせ、ブレイドジョーカーをたたく。

『グウウウッ!』

対するブレイドジョーカーはそれを避けるが…

ズドンッ!!!

『グオッ!!!』

ブレイドジョーカーの背後を誰かが撃った。それは…

『後ろがから空きなのよっ！ゴキブリっ！！！』

『アスラちゃんっ！ソレを言っちゃダメえッ！！』

ダークネスカノンを連発してるデステイニーDFとデステイニーDFのゴキブリ発言を止めながら撃っているディダークだった。

ブレイドジョーカーはデステイニーDFとディダークに狙いを変えようとしたその時…

『ファイナルアタックライド・ダ・ダ・ダ・ダブルウツ！！』

『くらえっ！！』

『グルッ！？』

ブレイドジョーカーが後ろを振り向いたその先には、メタルシャフトに先ほどよりも凄い風を纏わせていながらこっちに向かってくるDWC Mの姿だった。

『ハアア…！メタルツイスターーッ！！』

DWC Mはそう叫び、回転しながらメタルシャフトを振るい、ブレイドジョーカーにぶつける。

『ゲウウッ！！』

ブレイドジョーカーはその暴風にも等しい風に耐えきっているものの、少々動きを封じられたせいか、脇腹にメタルシャフトがぶつか

った。

『グアアアッ!!』

ブレイドジョーカーはそのまま吹っ飛び、地面に激突する。

『まだまだっ!!』

『ファイナルカメンライド・ダ・ダ・ダ・ダブルウツ!』

DWC MはDWC JXにへとFKRした。

『ファイナルアタックライド・ダ・ダ・ダ・ダブルウツ!』

『ビツカー…ファイナルイリュージョンッ!』

直後にFARを発動し、プリズムビツカーから四色の光線がブレイドジョーカーに直撃する。

『ウウウツ!!』

ブレイドジョーカーは破壊しようとして鎌を振るが、威力は上のようではじき返され、ダメージを受けた。

『どうだっ!』

DWC JXは叫ぶ。だが…

『グウウツ!』

一向に倒れる見込みなし。その時…

『あたしたちを忘れないでよねっ！ゴキブリイツ！！』

『だからアスラちゃん！ソレを言っちゃダメだってばあッ！！』

デステイニーDFとディダークがブレイドジョーカーに攻撃したのだ。

『グアッ！』

『ソラソラアッ！！』

今度はデステイニーDFが剣崎に強烈な連打を食らわす。

『良いぞっ！アスラっ！！』

『（また褒められた…！キャハッ　もっと…もっと、褒めてもらっんだからっ！！／／／）』

DWCJXに褒められたデステイニーDFはますます力を発揮し、強かったブレイドジョーカーを吹っ飛ばした。

『グウウッ！！』

ブレイドジョーカーはダメージが大きく、動けないでいる。

『今だっ！行くぞ、アスラ！！』

『ええっ！』

DWCJXはデステイニーDFと並びあう。

『ファイナルアタックライド・ダ・ダ・ダ・ダブルウツ!!』

『ハアアアア…!!』

DWの周りに暴風発生。

『ハアアアア…!!』

デステイニーDFの周りには黒いオーラが発生。

『ダブルエクストリームツ!!』

『デスシードエンドブレイクツ!!』

DWCJXとデステイニーDFが突撃する。

『オオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

ドゴオオオオオオオツ!!

『グアアアアアアツ!!』

二人は一気にブレイドジョーカーに接近し、キックを食らわした。

『グウウウツ!!』

だが、二人の必殺キックを受けても、ブレイドジョーカーは何とか耐えていた。

『しづといわね…!』

デステイニーDFが右手に黒いオーラを纏わせる。

『待った』

だが、それをDWCJXが止める。

『何言ってるの?このままじゃ…!』

『…第二射がある』

『第二射?』

デステイニーDFが疑問に思っていると…

『今です!橘さん、睦月さん、始さん!』

いつの間にかブレイドジョーカーを取り囲んだギャレンKFとレンゲルKFとワイルドカリスがいた。

『ハアアアアアアアッ!』

『テヤッ!』

それぞれの必殺技を、ブレイドジョーカーにぶつけた。

『ガアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！』

ブレイドジョーカーは断末魔を上げると、元の剣崎に戻った。

雅紀『よしっ！』

DWCJXは元のディカオスに戻り、ガッツポーズをする。

『やったよっ！雅紀イツ！』

その時に隣にいたDestinyNDFが抱きついてきた。

『あ…アスラ！？／／／』

『ねえ雅紀い、私を褒めてよお…頑張ったんだから／／／』

DestinyNDFは甘ったるい声でそう言い、ディカオスを抱きしめる。

『あ、ああ。良かったよ。うん、良かった。』

ディカオスは何を言えばいいのか思いつかず、そう言っしかなかった。

『嬉しい お礼にキスしてあ・げ・る　／／／』

DestinyNDFはディカオスに顔を近づけ、キスしようとしたが…

ガチ…ッ

仮面が邪魔でキスができなかった。

『え……?』

『……雅紀、今すぐ変身を解いて。キスしたいから』

『い、今すぐって……つか、何でキスっ!?!?!』

『お礼だよ。さあ早く変身を解いて……いっぱい愛し合いたいの……/ /』

DESTINY-N-D-Fはディカオスドライバーに触れて変身を解こうとする。

『ちょ、ちょっと待てっ!何でそこまで……!?!?!』

『あたしは雅紀が大…いや、超好きなの。だからなの… / /』

『やめろってばっ!?! / /』

二人の周辺に桃色オーラが発生している。

『な、何だかあそこで変なオーラが見えるのだが……疲れがたまっているのか…?』

『いや、俺にも見えますよ、橘さん……』

『剣崎が戻っただけ、良しとしよう。』

『ムウウツ！アスラちゃん、あんなに雅紀とイチャイチャして…！
それに雅紀は…後で少し…（ボソツ）』

ギヤレンメンバーとデイダークは呟くが、デイダークの方は危ない
発言をし、さらには嫉妬のオーラを出していた。その時だ。

『グルアアアツッ！！』

突如、何者かが二人に襲い掛かってきた。

『何っ！？』

『っ！アイツは！』

二人は目の前の敵を見る。そいつはケルベロスだった。

『そう言えばすっかり奴のこと忘れてた。』

『影薄いのね、あの犬。』

二人は何気に酷い事を言う。

『グルオオオオオオツッ！！』

そんなことは気にせず、ケルベロスは剣崎を抱えて何処かへ行っ
てしまふ。

『おい待てっ！！』

ディカオスが追おうとしたが、すでにケルベロスの姿が確認できなかった。

『あの犬はあのゴキ…剣崎だっけ？アイツをどうする気だろう？』

さりげなくゴキブリと言いつづになったデスティニーDFはディカオスに聞く。

『もしかしたら、奴は剣崎さんを取り込もうとしているのかもしれない…！』

『そいつは大変ね…。ま、あたしには関係ないし』

『アスラも関係あるの。力を貸してくれ。』

『…わかったわ。雅紀のために…ね』

二人は空を見ながらそう言った。

一方、別の場所では…

『グオオオオオッ！！！！』

『グガアアッ！！！！』

トリアルシリーズとマンティースアンデッドが暴れていた。だが数ではマンティースアンデッドが不利だ。

「仕方ありませんね。助けに行きなさい」

ソレを眺めていた少女は白い銃型のアイテムにカードを入れる。

『カイジンライド・タブードーパントッ！』

『カイジンライド・ナスカドーパントッ！』

少女の目の前にタブードーパントとナスカドーパントが現れた。

『ハッ！』

『フッ！』

タブードーパントは上空から、ナスカドーパントは超高速でトライアルシリーズを打ちのめしてゆく。

『ゲガアアアッ！！』

マンティスアンデッドも負け自とトライアルシリーズに立ち向かう。その結果、全滅した。

「お利口さん。戻って、休んでいなさい」

少女がそう言った瞬間、三体の怪人は最初からそこにいなかったのよう消えた。

「あつちでの戦闘は、もう終わったようですね。しかし、この世界のライダーに危機が…！」

少女はそう呟いた後、オーロラの中へと消えた。

第98話（後書き）

さてと、いかがでしたでしょうか？

雅紀「パワーバランスがおかしいとか書かれていたぞ？」

悪い、強くし過ぎた。

雅紀「ハア、それに、今回の話でジョーカー化した剣崎さんは前回と打って変わってやられ放題じゃないか？」

すみません。

雅紀「反省しなさい。じゃ、次回予告。」

はいよ。次回はケルベロスの復讐です。お楽しみに！

雅紀「短いな」

第99話

白井家

橘「剣崎・・・無事なのだろうか・・・」

橘は呟く・・・。ライダー達は皆・・・白井家に戻っていた。

雅紀「ケルベロスの目的は・・・剣崎さんを吸収し、自分のものにして・・・俺達を倒す事・・・」

アリス「そして・・・残るアンデッドも・・・もしかすれば・・・」

アスラ「ま・・・剣崎って奴が・・・あの犬に吸収されるのも、時間の問題よ。」

と雅紀達は言う・・・。因みにアスラはまだ体の主導権を握っているようだ。

橘「・・・そうか・・・」

始「剣崎は先の戦いで傷ついている。まともに動けない。」

睦月「じゃあ・・・剣崎さんは・・・死んでしまつて・・・事ですか・・・!?」

雅紀「睦月さん・・・それはたぶん、違うと思います。」

睦月「え？」

雅紀「たぶんですが・・・カテゴリーク達を同じ感じだろうと思いません。現に、ケルベロスから生きて出てきてますから。」

睦月「それは、アンデッドは不死生物・・・っ!」

睦月は何か気付いたようだ。

雅紀「気づきましたね・・・。剣崎さんも、アンデッド・・・ジョーカーなら・・・生きて出てくるはずですよ。俺達が・・・ケルベロスに大ダメージを与えれば・・・」

始「だが、もしまた剣崎が暴走したら・・・?」

雅紀「その時は・・・また・・・。」

などと、重い会話が続く。

雅紀「兎も角・・・今は、剣崎さんの行方です。ケルベロスが行った先には・・・丁度、森があったから。吸収すれば、その場で、カテゴリーク達のように吸収すればいい・・・。」

橘「奴はダメージがあつたから、あの場で吸収できなかったんじゃ・
」

雅紀「ふうん・・・なら、あの森に何かあるんじゃないのでは・・・
？」

始「俺はコイツの意見に賛成だ。あの森には・・・何かある・・・」

睦月「俺もです、橘さん！」

雅紀の意見に、始と睦月は賛成した。

橘「・・・わかった。なら、俺達は森に・・・二人は・・・」

栞「アンデッドサーチャーで確認するわ。」

小太郎「もし、何かあつたら言つてね。」

二人はそう言い、ライダー達は頷き合い・・・その場を後にする・・・

？「・・・」

その様子を外から見ている人物がいた・・・先ほど、怪人達を操つていた少女だ。

？「デیکاオスがこの世界に来た理由は、ジョーカーとなったブレイドの救出。それが・・・世界を救うことになるか・・・破滅をもたらすことになるか・・・もう少し、彼らの観察をしますか・・・」

少女はそう言いながらオーロラの中へと消えた。

とある場所

剣崎「……う……う……」

剣崎は眼を開けて、周りを見る。

剣崎「ここはどこだ？俺は……」

そうしていると……

ケルベロス『グルルルル……！』

ケルベロスが現れた。

剣崎「ケルベロス……ぐっ！」

剣崎は力を使おうとすると……

バチバチイツ！！

体に電流が流れる。

剣崎「があああっ！！」

剣崎は自分の体を見ると・・・装置かなにかに縛られているようだ。

？「むださ・・・力は使えない・・・。」

そこに、何者かが現れた。

剣崎「お前は・・・何者だ・・・！」

？「フフ・・・俺か？俺は、元BOARROの研究员・・・と言えば、わかるかな？」

男性はそう口にした。BOARROという単語を聞き、剣崎は驚いた表情をする。

剣崎「BOARROの！？そんな・・・BOARROの人たちは・・・アンデッドに・・・！」

？「殺されたはず・・・と言うか？クク・・・俺は、その前に・・・BOARROを辞めさせられたんでね。」

剣崎「何？」

？「俺は・・・アンデッドを使った実験をするのが・・・BOARROに

入った理由でね。あまりにもそれに執着しすぎて・・・BOAROの
研究員の一人を実験台にしたのさ・・・ソレを知られて、俺は辞めさ
せられたんだ。」

剣崎「なんだと・・・!」

ソレを聞いた剣崎は怒りに震える。

?「それでも俺は諦めなかった・・・。研究をし続けた・・・。おかげ
で・・・誰かが作り出した怪人どもを作れるようになった。それに・・・
アンデッドを操れる装置だって開発した。」

剣崎「アンデッドを操れる装置だと・・・!?!」

?「ま、小型で、奴に当てないとダメだがな。コイツが此処の近く
でふらついているのを見つけて、装置を撃つたのさ。そしたら、は
い見事に命中でこの様よ。アンデッドも大した事ない。」

剣崎「お前・・・!」

?「ま、そう睨むなよ。んで、コイツの力を使っておまえを吸収さ
せるのが、目的。コイツもお前を吸収しようと担いでたようだしな
。」

剣崎「ふざけるな!そんなのお断りだ!!」

剣崎は体に入力を入れると、電流が流れ・・・それに耐えながら脱出し
ようとする。

?「はぁ・・・餌は黙ってやられるよ。威力最大。」

男はため息をつきながら電流の威力を上げた。

バチバチバチイッ！！

剣崎「があああああっ！！！！」

先ほどよりも威力のある電流が剣崎の体中を駆け巡る。

？「ククク・・・さてと、ケルベロス・・・こいつを吸収しろ。」

ケルベロス『グウウウウッ！！』

男に命じられ、ケルベロスは剣崎に近づく。

？「おっと、そうはさせないぜ。」

とそこへ、何者かの声が聞こえた途端、

バンツバンツバンツ！

ケルベロスに向かって光弾が発射され、ケルベロスはそれを避ける。

？「誰だよっ！？」

男が叫ぶと・・・足音が幾つも聞こえる。

雅紀「俺達は・・・剣崎さんを助けに来た・・・仮面ライダーさ。」

そこに現れたのは、雅紀達、仮面ライダーたちであった。

？「ほう・・・よく此処がわかったな。」

雅紀「話は聞かせてもらった・・・。お前は・・・外道だな。」

？「フン。ガキのくせに俺の事を外道って言うんじゃないよ。やれ、ケルベロス！！」

ケルベロス『ウオオオオオツ！！』

男の命令で、ケルベロスは標的を剣崎からライダー達にかえた。

雅紀「鳴滝に操られ・・・今度は科学者に操られ・・・随分とかわいそうな目に逢っているな。お前」

橘「そんな事を言っている場合じゃないぞ！」

雅紀「そうでした。俺達が奴の相手をしますんで、橘さんは剣崎さんを・・・」

橘「ああ！」

橘は頷き、剣崎の元へ向かった。始も睦月も剣崎の方に向かった。

雅紀「さてと、いきますか！」

『カメンライド』

雅紀・アリス「「変身っ！」」

アスラ「暗黒・・・変身っ！」

雅紀達はライダーに変身し、ケルベロスに向かい撃つ。

橘「剣崎！」

剣崎「た・・・橘・・・さん・・・」

始「剣崎、あまり喋るな・・・」

睦月「今、はずします！」

橘達は剣崎を縛っている装置を破壊しようと試みる。

雅紀「はっ！ハアッ！！」

アリス「せやああっ！！」

一方、ディカオスとディダークがケルベロスに攻撃を仕掛ける。

ケルベロス「ググウツ！！」

対するケルベロスは避けて、手で防御して防戦一方の様子。

アスラ「こんがりと焼きつくしてやるよ・・・犬・・・！！」

ディカオスとディダークの後ろには両手を前に出して・・・手から黒く・・・邪悪な光弾が作っているデステイニーDFがいた。

アスラ「ダークネスカノンッ！！」

デステイニーDFから発射された光弾は光線になり・・・一直線にケルベロスに向かう。

雅紀『うわつと!』

アリス『わわつ!』

ディカオスとディダークはそれを何とか避ける。

ケルベロス『グアアアッ!!』

ケルベロスはソレを受けて壁に激突。

雅紀『アスラ・・・必殺技は後でやって。此処、崩れそうだから。』

アスラ『必殺技を連発しちやえば・・・楽に片付くじゃない。以前に、剣崎があのがキブリになった時だって・・・あたしがダークネスカノンを連発で当てたから勝てたし・・・』

雅紀『そういう問題じゃないから。』

と言っていると・・・

ケルベロス『グオオオオオッ!!』

ケルベロスが咆哮しながらディカオス達に接近した。

アスラ『しつこい犬ね。ほら、これでも喰らって静かにしてなっ!』

デステイニーDFが再びダークネスカノンを放つと・

シューウウウ・・・

ケルベロスが・・・ダークネスカノンを吸収した。

アスラ『何!?!』

雅紀『奴は学習でもしたのか・・・?』

アスラ『・・・フンッ!ふざけんじゃないわよ・・・ボコしてやる!』

デステイニーDFはケルベロスに接近し、パンチを食らわそうとするが・・・

ケルベロス『ゴハアアアッ!』

ケルベロスが口のあたりから黒い砲撃を放ってきた・・・

アスラ『っ!?!』

デステイニーDFはそれに驚きながらも前に黒い障壁を出して防ぐ。

雅紀『アスラ!大丈夫か!?!』

アスラ『大丈夫だけど・・・あの黒いの・・・あたしのダークネスカノンと似ている・・・いや、そのものだった・・・!』

雅紀『・・・と言う事は・・・奴は自分のものにしたってことか・・・』

アリス『厄介な事に・・・なったの・・・!』

三人は構えると・・・

剣崎「お前ら!」

そこに、剣崎達が来た。

雅紀『剣崎さん、大丈夫ですか?』

剣崎「体中、痺れているが・・・大したことはない・・・!それよりも、今はケルベロスだ!」

橘「剣崎!」

橘は剣崎にブレイバツクルを投げ渡す。

剣崎「・・・変身したら、また暴走しますよ?橘さん。」

橘「その時は、全力で止めてやる。」

剣崎「・・・そうですか。」

剣崎はブレイバツクルにカードを挿入し、腰に付け、構える。

剣崎「変身!!!」

『ターンアップ』

剣崎はブレイドに変身した。

剣崎『力を貸す。』

雅紀『はい。』

互いに頷くと・・・デйкаオスの目の前にカードが四枚ほど出現する。

雅紀『新たな力・・・ブレイド達の力・・・!!』

デйкаオスはカードの内の三枚をしまい、カードをもう一枚出してデйкаオスドライバーに挿入する。

『カメンライド・ブレイドッ!』

デйкаオスの目の前にカード状のスクリーンが出現し、それを通り抜けると、デйкаオスはDブレイドになった。

雅紀『さらにコレが・・・ブレイドのエボリューションした形態。』

『ファイナルカメンライド・ブ・ブ・ブ・ブレイドッ!』

Dブレイドが金色のカードをデйкаオスドライバーに挿入すると、幾つものカードがDブレイドの周りをまわり、そしてDブレイドの体が黄金に染まり、カード達が一齐にDブレイドのアーマーと化す。黄金に染まったその姿は・・・神々しく輝いていた。これが、ブレイドのKF。

剣崎『お前・・・!KFに・・・!?!』

雅紀『姿と力だけですから、アンデッドと融合はしてません、たぶん。それに、貴方はKのカード・持ってないでしょう・・・?』

剣崎『それは・・・まあ・・・』

雅紀『それにしても・・・なんとなくか、目立つ色だなと思っていたが・・・本当に目立つな・・・コレ。』

DブレイドKFは自分の体を見て呟く。

剣崎『そう言うな。仕方ないし・・・。』

雅紀『ま、いいや。さてと・・・此処からが・・・俺達のターンだ・・・!!』

アリス『その台詞・・・戦隊ヒーローに出てくるライオン騎士が言う台詞だよ。雅紀・・・』

雅紀『あ、そうなの?』

アリス『うん』

とこんな感じで第二ラウンドが始まった。

第99話(後書き)

さてと、いかがでしたでしょうか？

雅紀「……………」

あ……あの……何で黙っているの？

雅紀「いったい、何日更新が遅れていると思っっているんだ？」

その……すいません。

雅紀「おまけに……感想などではパワーバランスがおかしいだとか書かれているぞ……？デステイニーDFはブレイドジョーカーよりも強く、ブレイドジョーカーは俺とダイダークとKFになったギャレン達よりも強いってどういこうこつちゃねん？」

それは……その……ごめんなさい！！

雅紀「許すか！もうちょっと更新速度を上げる！！そんでもってパワーバランスをおかしくするな！！！！」

許して~~~~~！！！！！！

雅紀『許さないって言ったろう？おまえにはたっぷりとお仕置きしてやる！今までのFARを全部喰らえええエエツっ！！！！！！！！』

ドッゴオオオオオオオッ！！！！！！！！！！

あがきがごっ！！！？

雅紀「ふう．．．ストレス解消．．．お？なにか書いてあるな．．．」
．．．．次回予告して．．．．

雅紀「血で書いたな．．．まあいいや。次回はこの戦いの続きです。
お楽しみに！」

．．．．お楽しみに．．．．

雅紀「．．．それにしても．．．今回の話で出てきた科学者．．．出てくる意味なくね？」

．．．．ご都合主義．．．．

雅紀「いちいち、血で書くな．．．死んでないなら喋ろ。」

．．．．

雅紀「コイツ．．．本当にうざいな．．．」

第100話

雅紀『さてと・・・一気にいくか・・・!』』

FKRしたDブレイドKFはケルベロスを睨む。

?「フ・・・フンツ!この金メッキがつ!!殺れ、ケルベロス!」

ケルベロス『グルルルウウツ!!』』

男の命令にケルベロスは吠え、DブレイドKF達に襲い掛かる。

雅紀『行くぜ・・・!!』』

DブレイドKFはケルベロスに突っ込み、手に持っているキンググラウザーを振るう。

ガシッ!

だが、ケルベロスはキンググラウザーを受け止め、攻撃しようとする。

雅紀『攻撃するのは俺だけじゃないぞ?』』

ケルベロス『グルツ?』』

DブレイドKFの言葉に首を傾げていると・・・

バンツバンツ!

DブレイドKFの背後から弾丸が飛んできてケルベロスに直撃する。

ケルベロス『グルッ!?』

橘『今だ、睦月!』

睦月『はい!』

ギャレンの声に応え、レンゲルはレンゲルラウザーでケルベロスに一撃を食らわす。

ケルベロス『ガッ!?!』

?「何やってんだ、この野郎!?!この俺・・・」遠田 豪「の命令を忠実にこなせないのか?!!?!」

と男・・・遠田 豪はそう吠えた。

ケルベロス『グググウウ・・・グガアアアアアアアアアアア
ッ!!!!!!!!!!』

ケルベロスは立ち上がると・・・全身から大量の黒いエネルギーを放出し始めた。

雅紀『うおっ!?!』

剣崎『なんだ!?!何が起きてる!?!』

ライダー達は皆、吹き飛ばされないようにその場で耐えている。

アスラ『アレは・・・あたしの力じゃないかい！』

アリス『どういう事なの！？』

アスラ『さつき、あいつはあたしのダークネスカノンを吸収したじやない！その時に闇の力がアイツの体の中で成長して、あんなことになってんのよ！』

アリス『止める方法はないの、アスラちゃん？』

アスラ『わかんないわよ！こんな事、経験したことないんだから！』

とデステイニーDFとデイダークが言っていると・・・

雅紀『だ・・・だったら、アスラ！ケルベロスのように、闇の力を放
出できるか？』

DブレイドKFがデステイニーDFに聞いてきた。

アスラ『え？それぐらいなら簡単だけど・・・』

雅紀『なら、闇の力を放出して・・・相殺させるんだ！』

アスラ『相殺？・・・やってみる！危ないから・・・何か掴んでっ！』

デステイニーDFがそう言つと、皆は、武器や、壁などを掴んで、
支えにした。

アスラ『行くわよ……セエエヤアアアアアアアアアアアッ！』

デステイニーDFは体内にある闇を放出する。その勢いはまるで暴風のような。

雅紀『うわわっ！あ……改めてアスラは凄いつて感じた。』

アリス『だね。でも、どうする？相殺できなかつたら……』

雅紀『その時は……その時だ。』

DブレイドKFとデイダークはそう言いながら、デステイニーDFを見つめる。

アスラ『ウオオオオラアアアッ！！！！』

デステイニーDFは勢いを上げていくと、ケルベロスから放たれる闇と混ざり合い、消え始めていく。

雅紀『アスラ！その調子だ！頑張れえッ！！』

アスラ『雅紀……うん！ウオラアアアアアアアッ！！！！』

DブレイドKFの声に反応し、デステイニーDFはさらに勢いを上げていく。

ジュアアア……

そして、ケルベロスから放たれた闇が消えた。

ケルベロス『ゲルウウツ!?!』

ケルベロスは驚きながら一旦、後ろに下がる。

アスラ『ハア・・・ハア・・・』

デステイニーDFはその場で膝をつく。

雅紀『アスラ、大丈夫か?』

DブレイドKFはデステイニーDFに近寄り、体を支える。

アスラ『大丈夫・・・ハア・・・雅紀、後は・・・よろしく・・・ハア・・・あたし・・・寝てるわ・・・』

そう言うと・・・デステイニーDFはDブレイドKFに身を預けながら変身を解き、眠りに着いた。

雅紀『お休み、後は俺達がやる。アリス、アスラの事・・・頼む!』

アリス『任せて!』

DブレイドKFはアスラをディダークに預けると・・・ケルベロスに顔を向ける・・・。

雅紀『さて・・・一気に片を付ける。』

ライダー達はケルベロスに攻撃を仕掛けようとしたその時・・・

ドゴオオオンッ！！

突如、壁が崩壊し、中からトリアル達が現れた。

雅紀『なっ！？トリアルシリーズ！？』

始『奴め・・・こんなまで従えてたのか・・・！』

睦月『十体以上はいますよ！どうしますか？』

橘『決まっているだろ！いくぞ、睦月！』

ギャレンとレンゲル・・・そしてカリスはトリアルの方に向かうと・・・

『『アブゾーブクイーン』』

『『エボリユーシヨンキング』』

『『エボリユーシヨン』』

ギャレン達はKFにフォームチェンジした。

橘『お前達、二人はケルベロスを頼む！』

ギャレンKFがそう言うと、トリアル達に突っ込んで行った。レンゲルKFとワイルドカリスもそれに続く。

雅紀『向こうは橘さん達に任せましょう。行きますよ、剣崎さん！』

剣崎『ああ!』

二人は頷き合い、ケルベロスに突っ込んで行った。

?「トリアルシリーズ……アンデッドとは別のこの世界を脅かす存在。ソレが何体も……」

一方、ライダー達の戦いを見ていた少女がいた。

?「となると……この場所を破壊しなくては……なりませんね。」

少女がそう言っていると……

トリアルシリーズ『ウウウウ……!!』

トリアル達の何体かが建物の外に出て行く。

?「……どうやら、私も貴方達の相手をしなくてはなりませんね……」

「・

少女はそう言うと・・銃を取り出した。それにカードを挿入する。

『カメンライド』

銃から音声が響いて、それに気付いたトリアル達は少女に向かって光弾を発射した。

？「変身」

少女がそう呟きながら銃のトリガーを引く。銃から何か音声が響いたが光弾が地面に当たる音でかき消されてしまう。

そして・・辺りは一瞬、光に包まれた・・。

戻って、DブレイドKF達は・・。

雅紀『オオオツ！！』

剣崎『ウエエエエエイツ！！』

二人はケルベロスに突っ込んで行く。

遠田「ケルベロス！」

ケルベロス『グルウウツ！』

ケルベロスは両手に闇のエネルギーを集め、発射した。

雅紀『スラツシュとサンダーのコンボ！』

DブレイドKFの部分が金色に輝くと・・・キングラウザーが光り、
そして稲妻が纏う。

『スラツシュ』

『サンダー』

『ライトニングスラツシュ』

同じく、ブレイドもカードを二枚スキャンさせ、ブレイラウザーに

稲妻を纏わせる。

雅紀『ハッ!』

剣崎『ウェイ!』

二人は黒いエネルギー砲を切り裂いた。

ケルベロス『グルウウウツ!』

ケルベロスは吠えながら闇のオーラを全身に纏い、二人に突っ込んで行く。

剣崎『ウェイツ!』

ブレイドはブレイラウザーでケルベロスを切り裂くが・・・

ガキンツ!

闇のオーラでダメージを与えられない。

剣崎『何!?!』

ケルベロス『グルアアアツ!』

ブレイドが隙をついている瞬間にケルベロスはブレイドにパンチを食らわした。

剣崎『ぐっ!』

ブレイドはブレイラウザーで受け止めようとしたが・

バキイインッ！

ブレイラウザーはいとも簡単に破壊された。威力が落ちていないケルベロスのパンチをブレイドは食らってしまう。

剣崎『ガアアッ！』

雅紀『剣崎さん！』

ケルベロス『グガアアッ！』

DブレイドKFはブレイドの所に向かうがケルベロスがソレを邪魔する。

剣崎『ぐ……が……ゲホッ！』

ブレイドは胸を抑えながら立ち上がったその時・

ドクンッ！！

剣崎『がつー！』

ブレイドから鼓動が聞こえ……ブレイドは膝をつく。

剣崎『グウウ……また……俺はアンデッドの本能に支配されてしま
う……！！だが……！』

ブレイドはふらつきながら立ち上がる。

剣崎『俺は負けないッ!!!』

ブレイドはそう叫びながらケルベロスに突っ込み・

剣崎『ウエエエエイツ!!!』

稲妻を纏ったキツクを食らわした。

ケルベロス『グガアッ!』

ケルベロスはそれを食らって吹っ飛ぶ。

雅紀『剣崎さん。』

剣崎『いくぞ!』

雅紀『・・・はい!』

二人は並びあい、ケルベロスを睨む。

ケルベロス『グオオオオオッ!!!』

ケルベロスはまたもや闇のオーラを纏う。

剣崎『アレを断ち切るには・・・生半可な攻撃じゃ通用しないぞ!』

雅紀『・・・なら!』

DブレイドKFは何やら思いついた様子。カードを取り出し、ディ

カオスドライバーに挿入する。

『ファイナルフォームライド』

雅紀『剣崎さん、ちょっと我慢してくださいね？』

剣崎『え？』

『ブ・ブ・ブ・ブレイドッ！』

剣崎『うあっ！？』

ブレイドは変な声を上げながらブレイラウザーに似た巨大な剣・ブレイドブレードにFFRした。DブレイドKFはそれを持つ。

雅紀『一撃で・・・切り裂く！！！！』

『ファイナルアタックライド・ブ・ブ・ブ・ブレイドッ！』

DブレイドKFはFARを発動。目の前に金色のカードが五枚、現れる。

雅紀『ハアアアアッ！』

DブレイドKFは右手にブレイドブレード・左手にキングラウザーを持って金色のカードを突き抜け、ケルベロスに突っ込む。

ケルベロス『グガアアアッ！』

ケルベロスはDブレイドKFにパンチを食らわそうと動く。そして・

・

雅紀『ファイナル・ロイヤルストレートフラッシュシューウツ!!!』
ブレイドブレードとキンググラウザーを振るって・ケルベロスを切り裂く。

ケルベロス『ゴオオオツ!!』

ケルベロスは拳に闇の力を纏ってぶつける。

ドツゴオオオオオツ!!

辺りに衝撃波が飛ぶ。

ケルベロス『グウウウツ!!!』

雅紀『オオオオリヤアアアアアツ!!!』

DブレイドKFが渾身の力を振りしぼり・ケルベロスを押し返す。

ケルベロス『ゴツ!?!』

見るとケルベロスの拳にヒビが入り・そして・

バキインツツ!

碎かれる。

雅紀『喰らええええええっ!!』

DブレイドKFは勢いを殺さず・・・そのまま一気にケルベロスをX字に切り裂いた。

ケルベロス『グアガアアアッ！！！！』

ケルベロスは吹っ飛び、壁に衝突する。

ケルベロス『グ・・・ガアア・・・』

そして、倒れた。DブレイドKFはそれを見ながら、ブレイドブレイドを上投げた。

剣崎『うおっと！』

ブレイドブレイドは元のブレイドに戻り・・・DブレイドKFは元のデイカオスに戻った。

雅紀『剣崎さん。』

剣崎『ああ。』

ブレイドはカードを取り出し・・・ケルベロスに向かって投げると・・・

シュアアア・・・

ケルベロスはカードに封印された。

遠田『バカな・・・バカなアアッ！！！！』

橘『観念しろ!』

睦月『もう逃げ場はない!』

驚愕している遠田の前にギャレンKF達が来る。

遠田「俺は・・・まだ、諦めないぞおッ!」

始『諦める・・・!』

ドッ!

遠田「ぐふっ!」

ワイルドカリスはそう言う・・・遠田の首に手刀を食らわし、気絶させた。

雅紀『これで・・・終わったな。』

デйкаオスは呟くと変身を解く。ライダー達も同じく変身を解いた。

剣崎「・・・」

そんな中・・・剣崎は一人、何処かへ行こうとした。

雅紀「剣崎さん?何処へ行くんですか?」

雅紀の声を無視し、そのまま何処かへ行こうとする剣崎だが・・・

橘「剣崎!」

睦月「剣崎さん！」

橘と睦月が剣崎を止める。

橘「剣崎！またお前は俺達の前からいなくなるつと……！」

剣崎「……俺がいれば、皆に危害を加える。」

睦月「そんなことは……」

剣崎「そんなことはない……か？現にあつたじゃないか！だから俺は皆の前からいなくなる！」

始「……剣崎……」

と今まで黙っていた始が剣崎に近づき……そして……

バキッ！

殴った。剣崎はそのまま倒れる。

始「剣崎……いい加減にしろ。危害を加えてしまつからいなくなるなど……言うな！」

剣崎「始……」

始「お前は……アンデッドの本能を抑える事が出来ただろう？現に、俺の近くにいっても……アンデッドの本能に支配されていない……！」

剣崎「……」

始「剣崎……もう、俺達の目の前からいなくなるな……！」

始はそう言いながら、手を差し伸べる。

剣崎「……」

剣崎は無言でその手を取り……立ち上がる。互いに笑い合う。

雅紀「これで……この世界の役目は終わったかな……」

アリス「そうだね。」

雅紀がそう言うと、アスラをおんぶしているアリスが頷く。

雅紀「じゃ、帰るか。」

アリス「うん」

二人はそのまま……帰って行った。

バキユンツッ！バキユンツッ！

トリアルシリーズ『グアアアツッ！！』

トリアル達は皆、光弾を食らい、爆発していく。トリアル達を倒したのは・・・仮面ライダーだった。

？『これで全部ですね・・・。後は・・・この建物の破壊。』

仮面ライダーはそう言う・・・建物を破壊してゆく。

？『デイカオスはすでにこの場を後にしました。次の世界で・・・彼を・・・』

仮面ライダーはそう呟きながら、建物を破壊しつくした。

アリス宅

アスラ「すう．．すう．．」

アリス宅では、アスラは部屋で熟睡していた。

アリス「アスラちゃん、疲れて熟睡しているよ。」

雅紀「そうか。さてと．．次の世界に行くか。」

アリス「だね。」

そして次の瞬間．．アリス宅は消え．．雅紀達はこの世界を去った。

第100話（後書き）

さてと・・・終わったぞ、ブレイドの世界！次はどこの世界にしようかなあ？

？「考え中のようですね。」

おや、君は・・・新キャラの・・・

？「名前は明らかにしてませんが、そうみたいですね。それと、タブーさんからの感想を見てみてください。」

ん？なにになに・・・ふむふむ・・・なるほどお。そういえば、君の目的がいまいちわからないね。雅紀を殺すかと思えば、観察する事に変わっているし。

？「私の目的は・・・ディカオスの抹殺です。これは皆さんも、おわかりしている事です。」

では、なぜ観察を？

？「時には、状況を把握し・・・ディカオスがこれから何をするか・・・どういう行動を取るかを・・・見ることもあります。」

じゃ、はやく殺せばいいのにな？

？「そう思いでしょうけど、この観察はあくまで分析みたいなものですので、おきになさらず。」

あ、そう。いまいち意味不明だけど・・・

？「そんな事を言っている場合ですか？はやく次回予告をしなければならぬでしょう？」

あ、そうだ。ゴホンツ！次回予告！次の世界にたどり着いた雅紀達はそこで、新聞記者の青年に出会う。
その青年の名は・・・

？「俺の名前は・・・城戸 しん・・・」

？「続きは次回・・・お楽しみに。」

次回で少女が雅紀達に接近するかも？

第101話(前書き)

今回は・・・ちよい長め？

雅紀「なんだそりゃ。」

第101話

ブレイドの世界を去って一日……。

アリス宅

雅紀「ん……んん……朝かあ……ん？」

いつものように朝を迎える雅紀……。だが、左腕に何か重みを感じる。

雅紀「なんだ？妙に左手に重みが……。しかも……柔らかい？」

と雅紀は手でその何かを掴む。

ムニユムニユ……

？「あん！あっ！はっ……！」

掴んでみると、柔らかく、少し重みがあった。そして・・・ベッドの中から声が聞こえる。

雅紀「な・・・何だ！？この柔らかさ・・・！？ってゆうかこの声は・・・！」

雅紀は徐々に頭を覚醒させ、布団を取ると・・・そこにいたのは・・・

アスラ「ハア・・・ハア・・・ハアア・・・／／／」

頬を赤く染め、ギュツと雅紀の左腕に抱きついてしているアスラの姿だった。

雅紀「え・・・えええええエエエエエエツつ！！！！？」

雅紀はアスラを見て顔を真っ赤に染める。

アスラ「ふううん・・・あ、雅紀、おはよう。」

雅紀の声で、アスラは眼を覚ます。

雅紀「おはようじゃなくて、何でアスラが俺のベッドの中に潜り込んでるの！？」

アスラ「何って・・・雅紀と、エッチしに来たのよ・・・。」

そう言って、アスラは雅紀を押し倒し、雅紀の上に乗る。

雅紀「ちよっ、何すんだ！？」

アスラ「雅紀ってば、昨日エッチしようって約束したのに・・・あ
しが眼を覚ませば、ぐっすりと夢の世界に行っちゃって・・・」

雅紀の問いに答えず、アスラは淡々と呟く。

アスラ「だから、アンタが目を覚ます間・・・あたしはアンタのベ
ッドに潜り込んで・・・アンタの寝顔を見ていた・・・。ククク・・・ホ
ント、可愛かったよお・・・雅紀の寝顔・・・まるで小さい子供によ
うで・・・食べちゃいたいくらいに・・・ね・・・／／／」

アスラは妖艶な笑みをしながら雅紀を見つめ・・・徐々に顔を近づけ
る。

雅紀「アスラ・・・んんっ!？」

アスラ「んん・・・んっ／／／」

そして唇を重ね・・・舌を雅紀の口内に入れる。雅紀の舌と触れ合っ
た途端、蛇のように舌が雅紀の舌と絡まり・・・刺激を与えていく。
室内に水音が数分間響く。

雅紀「んんっ・・・レロ・・・ん・・・!？／／／」

アスラ「ん・・・レロ・・・チュピ・・・ん・・・コクッ・・・ぷはあ・・・
／／／」

アスラは唇を離すと・・・名残惜しいように・・・唾液の橋ができる。

雅紀「ハア・・・ハア・・・あ・・・アスラ・・・／／／」

アスラ「ククク・・ホント、アンタの唾液って・・甘くて美味しい・
・。一口飲んだだけで体の奥が熱くなってきたあ・・／／／」

と、アスラはまるで酔っぱらったかのようにトロンとした瞳で雅紀を見つめる。そんなアスラに、雅紀は目惚れてしまう。

アスラ「もう我慢できない・・アンタのを挿れて、一つになる／／
／」

アスラは服を脱ぎ始める。

雅紀「えっ！？ちよっ！アスラ、何脱いでんだよ！？／／／」

雅紀はアスラを見ないようにしながら服を脱ぐのを止めさせる。

アスラ「いや〜だ。こればかりは命令は聞けない・・。今の主導権を握っているのはあたしの方。雅紀はこれからもエッチな事に主導権は永遠になさそうだけど・・。」

言い終わるうちに、アスラは服を脱ぎ捨て、全裸になる。

雅紀「うう・・そうだ、アスナに止めてもらおう！」

雅紀は元の人格のアスナに呼びかけようと試みる。

雅紀「アスナ！聞こえるなら、アスラを止めてえッ！」

雅紀が幾度言っても、アスナは出てこようとしなかった。

アスラ「ククク・無駄だよ。アスナは今、おねんねしてるから、いくら叫んでも聞こえないんだあ・・・」

雅紀「う・・・ウソだろお・・・!？」

アスラ「そんな事よりも・・・雅紀、ちゃんとあたしを見てよ・・・」

アスラは雅紀の顔を自分に持つてこさせる。雅紀はアスラの裸を見たので、一気に顔を真っ赤にする。

アスラ「ねえ？ちゃんと、ありのままのあたしを見てえ・・・。あたしも・・・ありのままのアンタを見て・・・感じるから・・・/ / /」

そう言い、アスラは雅紀の服の上から鼓動と体温と感じ取るうと触れている・・・。すると・・・

?「もう、いい加減やめてくれない？アスラちゃん・・・」

アスラ「っ!」

突如、声が聞こえ振りかえると・・・そこにいたのは・・・

アリス「朝食だから呼びに行こうと来てみれば・・・アスラちゃん、もうやめようね?」

アスラ「いやよっ!アンタは毎度毎度、雅紀と一つになって気持ちいい思いしてんじゃない!あたしとアスナはいつでもどんな思いをしたか・・・」

アリス「もう・・・やめようね・・・」

アリスはディグドライバーを持って、黒いオーラを放出させながら言う。

アスナ「だ・か・ら・嫌よ・・・！」

同じくアスラも黒いオーラを放出して睨みあう。

雅紀「あ・・・あのさあ・・・もうやめてくれない？俺の目の前ださあ・・・」

雅紀は二人に恐怖しながら言う。

アリス「それもそうだね。アスラちゃん、雅紀から離れてね。それと服を着てね。」

アスラ「・・・わかったわよ。雅紀は嫌いだしね。あたし達が争う所・・・」

二人は納得して黒いオーラを放つのをやめる。アスラは雅紀から離れて、服を着直す。

アリス「じゃ、御飯食べよう。冷めちゃうから。」

アスラ「そうね。流石いお腹が空いたわ。」

雅紀「はあ・・・」

三人は朝食を済ませようと、部屋を後にした。

数十分後

雅紀「さてと・・・御飯も食べたし・・・この世界の事、調べてみようかな。」

アリス「そうだね。」

アスラ「じゃ、早速行きましょう。」

と三人はそとへ出た時だった。

フワアア・・・

という音とともに、雅紀の服が変わる。

雅紀「うお！？久々に服が変わったなあ・・・」

雅紀は自身の服装を見る。ほとんど普段着と変わらないが、バッグにカメラを首にかけている。

アリス「まるでカメラマンだね。」

アスラ「どこからどうみてもそうでしょう。」

雅紀「ま、いいや。ともかく行くこうか。」

三人はその場を後にした。

十分後

雅紀「全然、怪人がいないなあ。」

あれから歩き続けているが・・・怪人がいなかった。

アリス「きっと平和な世界なんだよ、この世界は。」

アスラ「そうよねえ。怪人がいなかったら・・・こんな平和な世界なんだろうね・・・。」

雅紀「それは・・・たぶん、違うと思う。」

アスラ「え？どこが違うのよ？」

雅紀の言葉に疑問を浮かべるアスラ……。

雅紀「怪人がいない代わりに……殺人や……内戦がある……。
日本は殺人や盗み……そういう犯罪が起きて……外国じゃあ、重
火器を使って人々を恐怖させている連中もいるんだ……俺の世界が
そうだったように……。」

と雅紀は自分の世界の事を思い返す。

雅紀「俺が自分の世界にいた時は……殺人や内戦なんて……いつも
ある事だろうつてさ、他人事のように思っていた。だけど……今じ
ゃ……それはどうもな……。」

アリス「雅紀……。」

雅紀「……変な話をしたな。気を取り直して行こう。」

雅紀はそう言っで先行する。アリスとアスラはそんな雅紀の後をつ
いて行った。すると……

男性「おい、あっちだぜ。」

男性「ホントだよ。可愛いそうになあ。」

女性「あそこのお家の人、良い人だったのにねえ。」

女性「そうねえ。」

と何やら何処かへ行く人達がいた。

雅紀「後をつけてみよう。」

雅紀達はその人たちに着いて行くと・・・一軒の家の前に来た。

女性「えー・・・こちらが殺人があった場所です。被害者は・・・」

家の前には先ほどとは別の人たちとニュースの人たちがいた。

雅紀「殺人かよ・・・。どの世界も、殺人があるか・・・。」

雅紀がそう呟いていると・・・

男性「ちよっと、ごめん！通して・・・ってうわあああつ！」

集団の中から一人の男性が来て、雅紀達の前に倒れる。

雅紀「あの・・・大丈夫ですか？」

男性「あー、大丈夫！俺はこう見えて頑丈・・・かな？」

男性は苦笑いをしながら立ち上がる。

男性「見た所・・・君はカメラマン？なわけないよなあ・・・まだ学生みたいだし・・・。」

雅紀「まあまあ、そこは気にせず。」

男性「ま、それもそうだなあ……。あ、自己紹介がまだだったな。俺の名前は「城戸 真司」。よろしく。」

雅紀「はい。俺の名前は木利野 雅紀です。ところで、これって殺人ですか？」

真司「あゝ……。そうなんだけど……。何か妙なんだよなあ。どこから侵入してきたのかわからないし……。しかも、何だか、救急車に運ばれた被害者の腕や足には噛傷や、鋭利なもので切られた跡があったし……。それに、その人の奥さんはどこかへと姿を消しているよ。うだし。」

雅紀「なるほどなあ……。」

真司「ん？なにがなるほど何だよ？」

雅紀「いえ、こっちの話です。さてと、俺達はこの辺で、それじゃあ。」

と雅紀は真司に言ってその場を後にした。

アリス「ねえ、雅紀。何がなるほどなの？」

アスラ「あたしたちだけでも教えなさいよ。まあ、たぶん怪人関係かもしれないけど……。」

雅紀「アスラの言う通りだ。これは怪人が起こした事だ。相手は……。」

雅紀は一度のその場で止まり……。近くの店の鏡を指差す。

雅紀「鏡の世界・・・ミラーワールドのモンスター・・・」

アリス「なるほどね。じゃ、此処は・・・」

雅紀「そう、「龍騎の世界」だ。しかも、さっきの真司って人は仮面ライダー龍騎に変身する人。」

アスラ「わかってんなら何で教え合わないの？あたしらもライダーなのに。」

雅紀「いや、それは無理だと思う。」

アスラ「何ですよ？」

雅紀「俺達が行ってきたライダーの世界は・・・どれも俺の世界でテレビでやっていたライダーの最終回が終わって・・・その後の世界。てゆうことはだ。龍騎の場合だと、最終回では、龍騎に出てきたライダー達全員はライダーバトルやミラーワールドの事は全部忘れ去られている。」

アリス「とゆうことは、今の真司さんにライダーの事を話しても無駄・・・ってことになると。」

雅紀「そう言う事。ま、実際にミラーモンスターが現れたら・・・まだライダーバトルは終わってないってことだろう。」

雅紀は鏡を見ながら言った。

雅紀「さてと、それじゃ、俺は適当にその辺をうろついている。二

人はどうする？」

アリス「私は一度家に戻っているよ。相手がミラーモンスターなら、家の中に侵入されて何か盗まれたりしたら嫌だし。」

アスラ「あたしもアリスと家に戻ってるよ。雅紀、気をつけてね？」

雅紀「ああ。ありがとう。じゃ、行ってきます。」

と雅紀は二人と別れて行った。

公園

雅紀「折角、カメラがあるんだから、試しに撮ってみようかな。」

雅紀は首にぶら下げてあったカメラを持って、公園のに生えてある樹や鳥や、遊具で遊んでいる子供たちを撮った。

雅紀「門矢 士さんも、こうやって写真を撮っていたんだなあ・・・」

雅紀はそう呟きながら写真を撮り続けていると・・・

？「良い場所ですね。此处は・・・」

雅紀「え？」

隣から声が聞こえ振り向いてみると・・・そこにいたのは、雅紀と同じ年ぐらいの金髪の少女であった。

少女「樹が生えていて・・・鳥が大空を羽ばたき・・・そして何よりも、空気が澄んでいる。」

雅紀「ああ、確かにそうだなあ。空気が澄んでいる。」

少女「自己紹介が遅れましたね。私の名は「エレイナ」。「エレイナ・G・エイシェン」です。」

雅紀「エレイナか・・・良い名前だな。あ、俺は木利野 雅紀。よろしく。」

エレイナ「ええ。よろしく。」

雅紀「それにしても・・・Gとか・・・神様だな、まるで・・・」

エレイナ「よく言われるんですよ。」

雅紀「外人だよな？何で日本に？」

エレイナ「貴方から見れば・・・外人に見えるでしょうけども、違いますよ。」

雅紀「違う？違うって・・・」

エレイナ「それは、貴方が知る事ではないでしょう。」

雅紀「あ、そうでした。ごめんね。」

雅紀は謝った。

エレイナ「良いですよ。別に・・・気にしてませんから。」

エレイナはそう言った。

エレイナ「もう戻らないといけませんね。」

エレイナは雅紀の横を通り過ぎろつとした時だった。

エレイナ「また、会いましょう・・・ディカオス。」

雅紀「っ！！」

デイカオスと聞き、振り返るが・・そこにはエレイナの姿がいなかった。

雅紀「・・・一体、何者なんだ・・・？」

雅紀は少し、背筋がゾクツとしたのであった。

第101話（後書き）

・・・

雅紀「あれ？いつもなら」さてと、いかがでしたでしょうか？」「つて言うのに？どうしたよ・・・？」

・・・なあ、雅紀よ・・・。

雅紀「なんだ？」

俺はこれからどうすればいいんだ？

雅紀「何がよ？」

俺の書いているFateの小説「やってきた場所はFateの世界！？」でさあ・・・

雅紀「ふむふむ。」

ほとんど、悪い点しか帰ってこないんだよ・・・感想が・・・

雅紀「ソレは仕方ない。お前、ダメだもん。」

一言みたいに言うなよ。俺も一生懸命に構想を練って書いているんだけどよ、酷い書かれようなんだぜ？俺がそう思っているかもしれないが・・・

雅紀「なら言うなや。まあいいけど、何て書かれていたんだ？」

二話で読む気なくすとか、士郎が二人いるようだとか、最低系の作品だなとか・・・。

雅紀「そうかい・・・。」

最低系の作品だなんて書かれた時はキレて活動報告に書いたが、ほとんど逆切れだとか、なんとかって書かれていて・・・。それと、話が進んでいくうちにだんだんと酷くなる一方だしさ、感想。今じゃ、他の読者に喧嘩売っているような感想がくるし・・・。

雅紀「へえ。」

俺が一生懸命に書いている事を分かっていたただける読者がいて、感想を見て中傷的で酷いと書いてくれたわけよ。だけどソレを見た読者はこの読者の事を、「マンセー」だけしか許さないってなんてお子ちゃまな考えしかできないのやら」とか・・・。「嫌なら感想見るな」とか・・・その読者の事を駄作信者とか書いてたし・・・何これ、挑発？って思った。

雅紀「ありゃまあ・・・。」

しかも・・・えと・・・俺の勝手な解釈かもしれないけど、駄作信者の駄作ってさ・・・俺の Fate の作品を駄作呼ばわりしてんのと同じ事じゃねコレって思ってたさあ。

見てるだけでちよつとイライラしてくるよコレって思って・・・。

雅紀「そんな事を書いているとその人にまた感想で「また逆切れですか」とか書かれたりあるいはブロックかけられるか、印象下げられるかだぞ？」

だつてさあ……。もういいや。話変えてさ、エロイ・・ノクターン的な感じを入れるってキーワードにセックス書いたわけよ。そうしたら、ノクターンに移せと書かれてきたわけだ。まあ、ノクターンに移そうかなって考えていたらだ。今度はエロシオンはまだかと書かれていたよ。正直どうすればいいのさ、俺って読者の気持ちに答えようとしたいが、ここはどっちを選べばいいんだと考えてしまう。

雅紀「ほうほう。」

それに、感想は悪く書かれているのに、総合PTはデйкаオスよりもけつこう高いんだぞ？何それ。悪く書かれているのに、何でこんなにPT高いの？

雅紀「もういいわ。これじゃ愚痴だ。はよ、続きい。」

はあ……。次回は新ライダー登場……。ぼいです。お楽しみに。

雅紀「はあ……。お楽しみに。」

第102話（前書き）

今回はグダグダで短めです。それではスタート。

第102話

住宅街

雅紀「……」

雅紀は無言で道を歩いていた。

雅紀「（エレイナ・一体、何者なんだ？俺の事を……ディカオス
つて……もしかしたら……あの子は……）」

雅紀は考えていると……

男性「うわあああつ！！！！」

突如、男性の悲鳴が聞こえた。雅紀は急いで向かうと……

男性「た……助けてくれー！！！」

男性がクモのようなモンスターに捕まれ、鏡の中へと引きずり込ま
れそうになっていた。

雅紀「くっ！」

雅紀は急いでその男性の方へ向かい、助けてようと手を掴もうとす

るが・

男性「うあああああ!!!」

あと一歩のところまで男性が鏡の中へと引きずり込まれてしまった。

雅紀「くそっ!こうなったら・・・」

雅紀はディカオスドライバーを腰に装着し、カードを掲げる。そんな時だった。

真司「今日はこれで仕事は終わりかなあ・・・って、あの子は、さっきの・・・」

その場に真司が現れ、雅紀を見つけた。雅紀は真司の存在に気付かず・・・

雅紀「変身!」

『カメンライド・ディカオスッ!』

仮面ライダーディカオスに変身した。ソレを見た真司は驚愕の表情を浮かべる。

真司「な・・・何だよ・・・アレ!?ともかく、カメラ、カメラ!」

真司は急いでカメラを持ち、ディカオスを撮る。

雅紀『よし・・・いくぜっ!』

デйкаオスは鏡に向かって突っ込んだ・・・すると・・・

ガシャ・・・

鏡にぶつかる・・・。

雅紀『あれ・・・？何で入れないんだよ！？おい！』

デйкаオスは疑問に思いながらペタペタと鏡を触る。

真司「アレは・・・何やってんだ？」

真司はそう呟きながらシャッターを押すのをやめない。

雅紀『デイクイドならすんなりと入れたのに・・・何で！？・・・もう、こうなったら・・・！』

デйкаオスは鏡から離れると、カードを取り出す。

雅紀『変身！』

『カメンライド・リユウキッツ！』

カードをデйкаオスドライバーに入れると、幾つもの鏡がデйкаオスに集まり、それがはじけ飛ぶと、デйкаオスはD龍騎にへとKRした。

雅紀『ミラーワールドに行けるライダーに変身して入るまでだ！それっ！...！』

D龍騎は鏡に突っ込むと・・・鏡に吸い込まれるようにその場から消えた。ソレを見た真司はまたしても驚愕の表情を浮かべる。

真司「今・・・鏡の中に入って行つたよな・・・!?しかも・・・」

真司は先ほどのD龍騎の事を思い浮かべる。

真司「俺は・・・前にもどこかで・・・ああいうのを見た気がする・・・それに・・・したこともある・・・!」

真司は一人、その場に佇んでいた。

ミラーワールド

雅紀『よっとうっ！』

D龍騎はミラーワールドに到着し、辺りを見回る。

雅紀『うわぁ・・・本当に文字が逆に書かれているよ・・・ま、いいか。早くあの人を助けなきゃ・・・！ミラーワールドに入ったら、普通の人間では帰る事は出来ないし、何分も此処にいたら、消滅してしまうっ！』

D龍騎は走り、男性を探す。と、その時・・・

男性「助けてエエエツ！！！！」

近くで男性の声が聞こえ、D龍騎は急いで向かうと・・・

男性「やだ！来ないでくれええええっ！」

巨大なクモの巣に張り付けられて今にもクモのモンスターに食われそうになっている男性を見つけた。

雅紀『見つけた！あのクモを先に倒さなきゃ・・・！』

『アタックライド・ストライクベントツ！』

D龍騎はカードをディカオスドライバーに入れると、上空からドラグレッダーの頭が炎を纏って落ちてきて、D龍騎の右腕に装着され

る。

雅紀『はあああああ……ラアアアアアアツ!!』

D龍騎は構え、クモのモンスターめがけて火炎弾を発射する。

モンスター『ギシツ!?!』

クモのモンスターはそれに気付き、避けようとするが、時すでに遅し、火炎弾がクモのモンスターに直撃し、クモの巣が炎上し、崩壊する。

男性「うあああっ!!」

男性は落ちて、D龍騎はそれを受け止める。

雅紀『さてと、助けたし、このまま早く戻りますか……。』

D龍騎はその場をツ去ろうとしたその時だった。

『ソードベント』

?『オラアアアアツ!』

雅紀『なっ!?!?うああああっ!!!!』

突如、何者かに攻撃を受け、D龍騎は吹っ飛ばされる。同時に男性を離してしまった。

雅紀『な……何なんだ……。!?!』

D龍騎は何者かを見る……。ドリルのような剣を持ち、紫色のボディを持っていた。

王蛇『此処かぁ……。？祭りの場所は……。？』

それは仮面ライダー「王蛇」であった。

雅紀『仮面ライダー……。王蛇！』

王蛇『お前はこの祭りの参加者のようだなぁ……。消える……。』

王蛇は首を回しながら言うと、D龍騎に切りかかってきた。

雅紀『アタックライド・ソードベントツ！』

D龍騎はソードを出して攻撃を防ぐ。

雅紀『悪いけど……。アンタと闘っている暇がない！そこをどいてもらおうか！』

王蛇『素直に通すと思っているのか？馬鹿が……。！死ね……。！』

雅紀『あっちに人がいるんだよ！戦いたいのなら、少し待てっ！』

王蛇『俺は気が短いんだよ……。人がどうなったって知った事か・。！』

王蛇は乱暴に武器を振るってD龍騎に攻撃する。

雅紀『くっ！めっちゃ荒々しい攻撃だなあ！だが！』

D 龍騎は大振りに振る王蛇の腹めがけてパンチを放つ。

王蛇『うおっ！？』

王蛇はそのまま少し後ずさる。

王蛇『中々だなあ・・・これぐらいしてもらわないと・・・楽しまないぜ・・・！』

雅紀『流石は王蛇って事はあるか・・・。』

D 龍騎は構えていると・・・

男性『うあっ！？助けてっ！！』

雅紀『っ！？』

男性の悲鳴が聞こえ、振り向くと・・・男性の体が消滅してきていた。

雅紀『時間がないっ！』

王蛇『逃がすかよあ・・・！』

『アドベンチャー』

王蛇は蛇に似た杖のようなバイザーにカードを挿入すると・・・

ベノスネーカー『キシヤアアアッ！！！！』

巨大な紫色の蛇モンスター「ベノスネーカー」が現れ、D龍騎を捕まえる。

雅紀『うあっ！？くそ！離せっ！！コラっ！！！』

D龍騎はもがくが振りほどけない。すると・・・

男性「あ・・・うあああああっ！！！」

王蛇が男性の前に来ていた。

王蛇『どうせ消えちまうんだから・・・俺が逝かせてやるよ・・・！』

王蛇はそう言いながら剣で男性の胸深くまで刺した。男性の胸から噴水のように大量の血が飛ぶ。

男性「あ・・・ごほ・・・が・・・」

男性は力なく倒れ・・・そして消滅した。残ったのは・・・男性から出た血のみ・・・。

雅紀『そ・・・そんなあっ！！』

D龍騎は悲痛の声を上げる。

王蛇『どうせ、怪物どもから救ったとしても、ただの人間がミラーワールドから出られるはずがねえだろうよ・・・消滅して死ぬんだからな。なら、最後は苦しまずに殺ればいい。』

雅紀『また・・・また・・・俺は・・・人を・・・』

D龍騎は思い出す。ライダーの力を持つてなかった時・・・自分の世界が滅ぶ時・・・少女を助けられなかった事を・・・。

王蛇『ハア？泣いてんのかよ。甘ちゃんな奴だ。まあいい。お前もすぐに、あの中年の元に逝かせてやる。そこで詫びをいれにいくんだな・・・おい、そいつを締め殺せ。』

ベノスネーカー『キシヤアッ！』

王蛇に言われ、ベノスネーカーはD龍騎を締め付ける。

雅紀『・・・』

『アタックライド・アドベントツ！』

だが、D龍騎は隙間から手が空いていたので、ディカオスドライブにカードを挿入。

ドラグレッダー『ゴオオオオンッ！！！！』

何処からともなく赤い竜「ドラグレッダー」が姿を現し、ベノスネーカーに攻撃する。

ベノスネーカー『キシヤッ！？』

ベノスネーカーは思わぬ攻撃に避けきれず、吹っ飛ぶ。その時、D龍騎は解放される。

王蛇『チツ！使えねえな。』

雅紀『…………おい。』

王蛇『あん？』

『カメンライド……』

雅紀『俺……今……物凄く、アンタが憎く感じる。俺の力不足でもあるけど……この怒り……収まりきれない……』

『リュウガアツ！』

D龍騎はカードを挿入すると、先ほどとは違い、黒い鏡が集まりはじけると……D龍騎は黒い龍騎……DリュウガへとKRした。同時に召喚したドラグレッダーが消える。

雅紀『今からタコ殴りにしてやる……』

王蛇『姿を変えただと……ハンツ！尚更面白くなってきた……』

Dリュウガと王蛇は互いに構え……そして……

雅紀『ハアアアツ！！』

王蛇『ハアツ！』

地面を蹴り、拳と蹴りをぶつけ合う。だが、パワーではDリュウガが勝っているため、徐々に王蛇の体力を削らしていく。

雅紀『フンッ!』

王蛇『ガハッ!』

王蛇の腹にパンチを食らわし、王蛇は吹っ飛び、地面を転がる。

王蛇『チッ!』

『ファイナルベント』

ベノスネーカー『キシヤアアッ!』

王蛇はカードを挿入し、ベノスネーカーを再び呼び出し、構える。

王蛇『ハッ!』

王蛇はジャンプし、空中で回転し・・・蹴りの態勢に入る・・・。

雅紀『させるかよ・・・!』

『アタックライド・ストライクベントッ!』

Dリュウガはカードを挿入すると、ドラグレッダーに似たモンスター「ドラグブラッカー」の顔が黒い炎を纏って右腕に装着され、Dリュウガは構え・・・。

雅紀『ハアッ!』

ベノスネーカーに向かって黒い炎の弾丸を発射した。

ベノスネーカー『ギシャアアアッ!!』

それはみごと、ベノスネーカーの腹に直撃し、ベノスネーカーは倒れる。

王蛇『何!?!』

王蛇は必殺技を放つ事が出来ず、地面に着地する。

『ファイナルアタックライド・リュ・リュ・リュ・リュウガアッ!』

ドラグブラッカー『ゴオオオンッ!』

そんな中、DリュウガはFARを発動。ドラグブラッカーを呼び寄せ、蹴りの態勢に入る。

雅紀『ハアアアアアッ!!』

Dリュウガはドラグブラッカーから放たれた黒い炎に包まれ、王蛇めがけて一直線に飛ぶ。

王蛇『チイツ!・・・っ!!』

そんな時、王蛇は近くの鏡を見つけた途端、そこに向かって走り、鏡に吸い込まれて行った。

雅紀『っ!』

Dリュウガの必殺技は地面にクレーターを残すだけで終わった。

雅紀『逃がしたか……。それに、どうやらライダー同士の戦いが、再び起ころうとしているな。』

そう呟いていると、Dリュウガの体が劣化し始めてきた。

雅紀『タイムリミットか……。戻ろう。』

Dリュウガは鏡に向かい、現実空間に戻って行った。

現実空間

雅紀『……。』

Dリュウガは鏡から出てきてディカオスに戻る。

雅紀『また……。俺は人を救えなかった……。目の前にいるってのに……。救えなかった……。』

ディカオスは拳を強く握る。すると……

？「ディカオスが悲しむ姿は初めて見ましたね。」

雅紀『っ！』

声が聞こえ、振り返ると・・・そこにいたのは・・・

エレイナ「・・・」

エレイナであった。

雅紀『エレイナ・・・。何で、お前が俺の・・・ライダーの時の名を・・・？この世界の人・・・なのに？』

エレイナ「この世界の人・・・？勘違いしないでください。私も、貴方と同じ、世界を移動できるのです。」

雅紀『何！？』

エレイナ「ディカオス・・・貴方の存在は、私の世界では有名です・・・。「世界を滅ぼす魔王」・・・「世界に災いをもたらすライダー」と・・・。」

雅紀『お前の世界？お前の世界って何だ？ライダーが存在する世界なのか？』

エレイナ「いちいち、教えられると思っっているのですか？馬鹿ですか？まあいいです。明度の土産に教えてあげます。私は・・・神も、天使も存在する世界から来た・・・「天使」です。」

雅紀「天使！？マジで！？』

エレイナ「ホントです。それに・・・私は・・・」

エレイナはそう言いながら、何処からか、白い銃を取り出し、カードを取り出す。

エレイナ「貴方の存在を滅ぼしに来た・・・「仮面ライダー」でもあります。」

そう言うと、エレイナはカードを銃に挿入する。

『カメンライド』

エレイナ「変身・・・」

『ディエンジェルッ!』

銃のトリガーを引いた瞬間、幾つもの白いカードが飛び出してきて、それと同時にエレイナの周りに、四つの影が現れ、ソレがエレイナを包む。そして先ほどの白いカードが彼女の顔に挿入されていき、黒かったボデイが白く変化する。

雅紀『ディエンジェル・・・だと・・・!?!?』

エレイナ『貴方の命・・・もらい受けます。』

ディカオスが驚いている中、ディエンジェルは銃口をディカオスに向け・・・

バンッ!!

撃ったのであった。

第102話（後書き）

さてと、いかがでしたでしょうか？

雅紀「まさかのエレイナがライダー・・・か。」

今までのブレイドの世界において、雅紀を監視していたのも彼女のようです！

雅紀「ようってなんだよ。ようって・・・」

まあ、ええやん。細かい事は。

雅紀「おい。」

それはさておき・・・どうしよう~~~~!!（涙）

雅紀「お！？いきなりどうしたあッ!？」

このディカオスの小説だけだよぉ・・・この調子だと・・・

雅紀「この調子だと・・・？」

2〜300話ぐらいいく可能性が・・・

雅紀「何!？」

前にネタばれしたりリリなのストライカーズの世界に行くって話もだが、それも前のように4〜50話はいく可能性が・・・

雅紀「ハア!!?」

Wの世界じゃ、2〜3話ぐらいで終わらせたが、最近では4〜5話ぐらいいくから・・残りの世界ではソレを超えちゃうかも（涙）

雅紀「いちいち泣くな！別にいいだろう。長くても。」

そうだけど・・リリカルなのはストライカーズの世界をお楽しみにしている読者に何てお詫びしたらいいか・・結構、長いぞ？その世界に到着するの。

雅紀「そうかい。・・まあこの事はコレを読んでいる読者から感想をもらって感じにして・・次回予告！」

はいっ！え〜・・今回は、天使、エレイナが変身したライダー・・
ダイエンジェルとの戦いです！終了!!

雅紀「はやっ!!」

第103話（前書き）

今回もグダグダです。ご承知ください。
ではスタート。

第103話

バンツ！！

デイエンジェルから放たれた光弾は真っ直ぐ、デйкаオスに向かって行く。

雅紀『っ！』

デйкаオスはそれをアドベントドライバーで撃ち落とす。

雅紀『何すんだ！？』

エレイナ『言いませんでしたか？私は貴方の存在を滅ぼすと……。』

デイエンジェルはそう言いながら、専用武器「デイエンジエドライバー」のトリガーを引く。

バンツバンツバンツ！！

雅紀『くっ！』

デйкаオスはそれを撃ち落とす。

エレイナ『やはり普通の弾丸ではダメですか……。なら、コレを喰らいなさい。』

『アタックライド・ブラストッ！』

デイエンジェルはカードを挿入し、トリガーを引くと、先ほどのよりも威力があり速度もありそんな光弾が幾つも発射される。

雅紀『コイツで全部撃ち落とす!』

『アタックライド・ブラストツ!』

デイカオスもまたブラストを発射し、全弾撃ち落とそうとする・・・だが・・・

エレイナ『甘いです。』

数発は撃ち落としたが・・・残りの光弾は不規則に軌道を変えてデイカオスに向かっていった。

雅紀『何・・・うわああああつ!!!?!?』

驚いていると、光弾はデイカオスに直撃。

雅紀『く・・・今は・・・まさか・・・』

エレイナ『そう・・・。仮面ライダー「デイエンド」と同じくホーミング機能を持っているのですよ。私の弾丸には・・・。』

雅紀『驚いたぜ・・・。だけど・・・俺達が闘う理由なんてあるのか・・・?』

エレイナ『貴方はないかもしれませんが・・・私にはあります。ですが・・・』

そう言いながら、デイエンジェルは二枚のカードを取り出す。

エレイナ「貴方が知る必要はありません。なぜなら……ここで死ぬのだから……！」

『カイジンライド』

二枚のカードを挿入した時……デイエンジェドライバーが音声を発する。

雅紀「カイジンライド!?まさか……おまえ……!!」

エレイナ「お行きなさい。」

『トリガードーパントツ!』

『ルナドーパントツ!』

デイエンジェドライバーのトリガーを引くと、銃口から二つの丸い球体が現れ、それが消えると、そこにいたのは……二体の怪人……。

トリガードーパント「ゲームスタート……」

右腕と銃が一体になっている青いドーパント「トリガードーパント」と……

ルナドーパント「私が愛してあ・げ・る」

地面に着くほど伸びている両腕を持ったオカマのような喋り方をす

る黄色いドーパント「ルナドーパント」であった。

雅紀『コイツらは・・・ドーパントのようだが・・・初めて見る奴らだ・・・！』

どうやら、ディカオスはこのドーパント達を知らない様子。

雅紀『それよりも・・・あの時、俺を襲ったドラゴンオルフェノクは・・・おまえが・・・！』

エレイナ『その通りです・・・。どれくらい力なのか、拝見したかったのですが・・・この子達はドラゴンオルフェノクよりも強いですよ？さあ・・・行きなさい。』

ルナドーパント『分かったわ』

トリガードーパント『・・・』

ディエンジェルは二体のドーパントにそう言い、ルナドーパントはディエンジェルに返事をし、トリガードーパントは何も言わずにそのままディカオスに蹴りとパンチを食らわす。

雅紀『うおっとっ！うわっ！』

トリガードーパント『フンッ！ハッ！』

ディカオスはトリガードーパントの攻撃を避けるが、トリガードーパントは右手の銃でディカオスの腹めがけて撃った。

ズドンッ！

雅紀『ガハアアッ!!』

零距离で撃たれたデイカオスは吹っ飛ばされ、地面を転がる。

雅紀『ゲホッ!ゲホッ!凄い一撃・・・!吐きそうになった・・・!』

トリガードーパント『フンッ!』

立ち上がるうとするデイカオスにトリガードーパントは容赦なく銃を連射する。

ズドンッ!ズドンッ!

雅紀『くっ!』

デイカオスは地面を転がりながらなんとか避けるが・・・銃弾が当たったところには、10〜20cmくらいあるだろう丸い穴があった。

雅紀『もはや、銃じゃなくて大砲じゃん・・・!』

デイカオスはトリガードーパントの弾丸の威力に驚愕。

ルナドーパント『ウッフ 驚いているようね ならもっと驚かせてあ・げ・る・わ え〜いつ!』

ルナドーパントは両腕を振り上げた途端、両腕から黄色い光が幾つも放たれ、それが形を変えていく。

マスカレイドドーパント達『オオオオッ!』

それはミュージアムの下っ端が変身する黒い服を着た「マスカレイドドーパント」達であった。

雅紀『ウソツ!? マスカレイドドーパントをあんなにを出してきやがった!?!』

エレイナ『それが、ルナドーパントの能力です。私がカードを使わなくても出せるので・・・少しはお気に入りの怪人です。』

ルナドーパント『もうっ! 「少し」はよけいよ〜! こうなったら、この子を倒して、もっと気に入ってもらうんだから』

エレイナ『なら、そのオカマ口調をやめてもらえませんか?』

エレイナの呟きに耳を傾けず、ルナドーパントはディカオスに突っ込んで行く。

ルナドーパント『え〜いつ!?!』

雅紀『うおっ!?! キモいわっ!?! このオカマ!?!』

ルナドーパント『ひっど〜い! 許してあげないんだから!?!』

雅紀『うううっ! 寒気がする〜!?!』

ディカオスは寒気を感じながら、ルナドーパントと対決。

マスカレイドドーパント『ハアアッ!?!』

そこへマスカレイドドーパント達がディカオスに襲い掛かる。

雅紀『この、邪魔だ!!!』

『アタックライド・スラッシュッ!』

ディカオスはスラッシュを発動して、マスカレイドドーパント達を切り裂いていく。

マスカレイドドーパント達『ぐあああつ!!!』

ルナドーパント『隙ありよ』

ディカオスがマスカレイドドーパント達を倒している時、ルナドーパントは両腕を伸ばしてディカオスを捕まえる。

雅紀『うあつ!?! 離せ、コラアツ!!!』

ルナドーパント『ウフフ いっぱい、愛してあげる』

そう言いながらルナドーパントはディカオスを自分の所に連れて行くこととする。

雅紀『ぐっ! このやるオツ!!!』

『アタックライド・ブラストッ!』

雅紀『これでも食らいやがれっ!!!』

ディカオスはルナドーパントの顔めがけて光弾を発射した。

バンツバンツバンツ!

ルナドーパント『痛〜〜〜!!!?!?』

光弾は見事、ルナドーパントの顔に命中。ルナドーパントはディカオスを離す。

雅紀『うう……このドーパント……気持ち悪い……!!』

トリガードーパント『……』

ズドンッ!

雅紀『がああっ!?!?』

トリガードーパントの存在を忘れてしまい、ディカオスはトリガードーパントの弾丸を食らってしまう。

雅紀『ぐう……!!こうなったら、WにKRして……!!!』

そう言いながら、ディカオスはWのKRカードを取り出したその時……!

エレイナ『させません。』

ディエンジェルがディカオスの手めがけて光弾を発射した。

ディカオス『がっ!!』

光弾を食らい、ディカオスはWのKRカードを落としてしまう。

エレイナ『KRなどさせません。それに・・・私もいると言っ事を忘れないでください。』

雅紀『そうだった・・・!』

ディカオスは手を触りながらディエンジェルを見る。

エレイナ『さて・・・同時攻撃です。』

トリガードーパント『・・・』

ディエンジェルはトリガードーパントにそう言い、ディカオスに銃口を向ける。トリガードーパントも同じくディカオスに銃口を向ける。

ルナドーパント『ちよつと!私は~~~~!?!?』

エレイナ『ひっこんでいなさい。』

ルナドーパント『ひっどいわ~~~~~!?!』

ルナドーパントが叫んでいるも、ディエンジェルは気にせず、そのままトリガードーパントと共にディカオスを撃つ。

バンッバンッバンッバンッ!!

ズドンッ!ズドンッ!ズドンッ!ズドンッ!

雅紀『ガアアアアアッ！！！！』

ドゴオオオオンッ！！

逃げる暇もなく、ディカオスはそれを全弾、受けてしまう……。そして……。ディカオスを中心に爆発が起きた。

エレイナ『……………』

トリガードーパント『ゲームオーバー……。』

ルナドーパント『あっら〜、あっさり〜！もう終わったし、私、休んでるわね〜』

とルナドーパントは消えようとした時だった。

ズバアアッ！！

エレイナ『っ！』

ルナドーパント『あ……。アアアアアッ！！！！』

ディエンジェルとトリガードーパントは振り向くと……。ルナドーパントが真つ二つにされ、消滅した。

雅紀『ハア……。ハア……。やっと一体……。』

見ると、ルナドーパントがいた所には、ディカオスが立っていた。

エレイナ『・・・貴方、どうやって・・・。』

雅紀『神速・・・って言えばわかるだろう・・・。さて、後はお前らだけだぞ・・・?』

トリガードーパント『・・・ゲームスタート・・・!』

ディカオスがそう言っていると、トリガードーパントがディカオスに接近する。

雅紀『お前は遠距離攻撃が得意だから、パンチや蹴りは大したことない!』

トリガードーパント『くっ!』

トリガードーパントは一旦、距離をとって、銃を連射する。

雅紀『させるかっ!』

『アタックライド・ソニックッ!』

ディカオスはソニックを発動して、一気にトリガードーパントの前に接近する。

トリガードーパント『っ!!!』

雅紀『ゲームオーバーだ・・・!!!』

ズバツズバツズバツ!!

ディカオスはトリガード・パントに連続切りを食らわす。

トリガード・パント「ガ・・ガアアッ!!」

トリガード・パントはディカオスの攻撃を食らい、消滅した。

雅紀「さてと・・・残るはお前だけだ・・・!」

ディカオスはそう言いながら、アドベントドライバーをディエンジェルに向ける。

エレイナ「そのようですね・・・。ですが・・・ボロボロの状態の貴方が、私を倒せるのですか?」

雅紀「分からない・・・。だけど・・・追い払うつもりだから・・・!」

ディカオスとディエンジェルは互いに睨みあう。

エレイナ「ハア・・・いいでしょう。貴方を消すのは・・・また今度にします。」

雅紀「今、殺らなくて良いのか?ボロボロだぜ・・・?」

エレイナ「ホントはそうしたいところですが・・・貴方のお仲間さんが来たようですし・・・やめておきます。」

雅紀「え・・・?」

ディエンジェルが顔を横にしながら呟き、ディカオスはディエンジェルが向いている方に顔を向けると・・・

アリス「雅紀っ！！」

アスラ「アンタ・・・なにやってんだいっ！」

デステンダーに乗ったアリスとアスラだった。

雅紀「アリス、アスラ！」

エレイナ「では、また・・・」

「アタックライド・インビジブルツ！」

雅紀「あっ！」

デイエンジェルはカードを挿入すると・・・消えてしまった。

雅紀「・・・」

デイカオスは変身を解き、雅紀に戻る。

アリス「雅紀！大丈夫だった!？」

雅紀「アリス・・・何で俺が此処にいるって知ってるんだ?」

アリス「嫌な胸騒ぎがしたから・・・」

アスラ「ていうか、さっきのライダーは?この世界のライダーなの?」

雅紀「違う……。俺達と同じように、世界を移動できるライダー……」

アリス「えっ!? ……たしかに、あのライダー……龍騎の世界に存在しない……」

アスラ「じゃあ……何でアンタはあのライダーと?」

雅紀「アイツ……エレイナが俺……ディカオスの存在を滅ぼすために……戦いを仕掛けてきたんだ。俺は、追い払うために戦ったけど……」

アスラ「そう。」

アリス「雅紀。WのKRカードを落としているよ。」

雅紀「あ、そういえば……」

アリスに渡され、雅紀は受け取る。

アリス「詳しい話は家でしよう。今は雅紀の治療が先。」

とアリスは雅紀の傷を治そうと爪で腕を切ろうとした……だが、

アスラ「それはあたしがするわ。あたしの方が回復が早いだろうしね。」

アスラが雅紀に近づいて唇を合わせようとしていた。

アリス「アスラちゃん! 雅紀の傷を治すのは私の役目だよっ!」

アスラ「あたしの役目でもあるわ。邪魔しないでほしいわねえ。」

と二人は睨みあい、喧嘩が起ころうとしていた。

雅紀「二人とも．．やめてくれよ。」

アリス「．．．仕方がない．．．こうなったら．．．」

アスラ「二人で一気に．．！」

そう頷き合うと．．．二人は雅紀を見つめる。

アリス「私の血．．」

アスラ「私の力．．」

アリス・アスラ「受け取ってっ！！」

と二人は同時に雅紀の唇を奪う。

雅紀「むっ！むむむっ！？／／／」

アリスの血とアスラの唾液が混ざりあい．．口内を満たす。

雅紀「むきゅ！むきゅきゅ〜！！！！／／／」

アリス「んん．．／／／」

アスラ「んんん．．／／／」

何分間・・・二人は雅紀の唇の感触を堪能し・・・

雅紀「きゅ〜〜〜」・・・////

雅紀は気絶したとな・・・。

第103話（後書き）

さてと、いかがでしたでしょうか？

雅紀「最後が変わったぞ？」

いいじゃん。あとですが、ディエンジェルについてですが、このままディエンジェルという名前で行きます。申し訳ございません。

雅紀「ほう。てか、何で俺はトリガードーパントとルナドーパントの事を知らないんだ？」

お前の世界が滅んだのは、WのA t o zが始まる前・・・だから知らないのだ！！」

雅紀「えええっ！！？」

さて、これはもう良いとして、次回予告。王蛇のあの力が発動する！！

雅紀「お楽しみに！！」

第104話(前書き)

今回も・・・グダグダで長め？
スタート。

第104話

OREジャーナル

真司「ホントなんですって!」

真司は写真を手にしながら椅子に座っている男性「大久保 大介」
に言う。

大久保「そう言ってもよお・・・おまえのソレ・・・ただの特撮ものじゃないか。」

真司「確かに特撮のようですけど、ホントなんです!変身っ!って
言っていましたっ!」

大久保「話が矛盾すぎるぞ?そんな特撮のネタばれのようなのをニ
ユースになるはずがないだろう。出直してこい!」

大久保がそう言うと、真司は無言でその場を後にした。

大久保「全く・・・何かスクープを手に入れて戻って来たのかと思え
ば・・・特撮のか。呆れちまうよお。なあ、桃井。」

大久保は言いながらパソコンを打っている女性「桃井 令子」に声をかける。

桃井「確かにそうですね。けど編集長。」

大久保「ん？」

桃井「私は・・・何処かでコレを見たことがあるんです。」

桃子は真司が持ってきた写真を見ている。

大久保「あれ？おまえって特撮アニメ見るっけ？」

桃井「見ません。けど・・・何処かで・・・。」

一方、真司は・・・

真司「はぁ・・・やっぱりアレは幻だったのかなぁ・・・。」

真司は缶コーヒーを飲みながらため息をする。

真司「いや・・・さっきのは確かにホントにあった事だった・・・よし、悩んでても仕方ないっ！とにかくあの子を探してみよう。」

真司は缶コーヒーを飲み終わると、その場を去った。

一方、雅紀は・・・

雅紀「きゆう・・・／＼／」

ベッドで寝ている・・・というより気絶していた。

アリス「やっぱり二人で同時にやるのはまずかったかなぁ・・・。」

アスラ「大丈夫じゃない？まあ・・・雅紀はキスにはまだ慣れてないようだし・・・仕方ないか。」

雅紀を見ながらアリスとアスラは話していると・・・

雅紀「ん・・・んん・・・」

雅紀が目を覚ました。

アリス「あ、雅紀。」

アスラ「おはようだねえ。」

雅紀「アリス・・・アスラ・・／／／」

雅紀は二人を見ると頬を染める。

アリス「あれ？どうしたの？顔赤いよ？」

アスラ「もしかして・・さっきの事、思い出していた？」

雅紀「っ！！／／／」

アスラに言われ、雅紀はドキッ！とする。

アスラ「やっぱり〜。可愛いんだから〜」

アスラは雅紀の反応を見て嬉しがる。

アリス「それよりも・・雅紀、さっきのライダーは・・一体、何者？」

雅紀「・・あのライダーはディエンジェル。俺を・・ディカオスを滅ぼすために来たらしい。」

アリス「雅紀を・・？何で？」

雅紀「アイツ・・・エレイナが言うには・・世界に災いをもたらす・・とかなんとか。それでだ。」

アリス「そう・・。（雅紀がディカオスになる前に・・誰かが暴走して・・）」

アリスはそう思っていると・・

アスラ「ねえ、雅紀。」

雅紀「ん？なに？」

アスラ「そのディエンジェルって・・女だよね・・。」

雅紀「え・・？どうして・・。」

アスラ「知ってるのかって？ディエンジェルの声が女の声だったし・・なにより・・アンタはディエンジェルに変身してる女の名前・・知ってるようだしねえ・・エレイナって言ってたし・・。」

雅紀「あ・・・！」

アスラにそう言われ・・・雅紀は気づく。

アリス「・・・雅紀・・・また、フラグを立てたの・・・？」

アスラ「アリス・・・雅紀の事だ・・・勝手にフラグを立ててるに違いないよ・・・」

二人の声が低くなっていく。

雅紀「あ・・・あの・・・二人とも・・・？」

アリス「・・・雅紀・・・なのはちゃん達にフラグを立てたのは許すよ？けどね・・・他の女の子とフラグを立てちゃダメだよ・・・」

アスラ「雅紀の全部はあたしたちの物・・・他の女が見てはならない物なんだよ・・・」

雅紀「え・・・ええ・・・！？」

雅紀は二人の目を見て後ずさる。二人の目は光を失っていた。

アリス「だから・・・雅紀がフラグを作らないように・・・今から私達が・・・」

アスラ「調教してあげる・・・あ、大丈夫よ？楽しかないから・・・」

二人はゆっくりと・・・雅紀に近づく。

雅紀「ふ・・・二人とも、何か誤解してる！俺はフラグを立てた覚え

はない！そもそもそんな事できるわけないし！！」

雅紀はそう言いながら後ずさる。

アリス「雅紀はね・・・無意識にフラグを立てているんだよ？どんな行動でも・・・言動でもね。」

アスラ「そういうのさあ・・・天然フラグメイカーっていうんだよ・・・。雅紀はソレをしてるのさ・・・。」

二人はそう言いながらガシッ！と雅紀の肩を掴む。

雅紀「ヒッ！」

雅紀は恐怖した・・・。それとは逆に二人は爽やかで綺麗な笑顔を作っていた・・・。

アリス「さあ・・・雅紀イ・・・」

アスラ「アンタの罪を・・・」

アリス・アスラ「数えろッ！！」

そう言い、二人は雅紀に襲い掛かった。

雅紀「何でこうなるの！？ってゆうかアスラは何でWの決め台詞を知って・・・アアアアアアアッ！！！！！！／／／」

この日も雅紀は二人に調教される羽目になった。

クチャクチャ・・・

とある河川・・・そこに一人の男性が何か食べていた・・・。

男性「フン・・・ミミズも中々・・・か・・・。」

男性が食べていたソレはミミズであった。他にも彼の周りには焼けたトカゲやバッタ・・・。コップの中には生卵が入っていた・・・。

男性「チッ！イライラするぜ・・・。あの野郎のおかげで・・・。まあ・・・。今度は倍にして返してやるまでだあ・・・。」

彼の名は「浅倉 威」。彼はコップに入っている生卵を飲む。

浅倉「クハア・・・フンツ。」

浅倉は生卵を飲み干すと焼いたトカゲとバッタを口にす。すると・

キイン・・・キイン・・・

という音が聞こえた。

浅倉「あん・・・？」

浅倉は近くに落ちてあるガラスの破片を見ると・・・

モンスター「キシヤアアアッ！」

巨大なサメ型のモンスターがミラーワールドの河川を泳いでいた。

浅倉「丁度いい・・・イライラしてたところだあ・・・お前で晴らす・・・。」

浅倉はポケットから紫色のカードケースをガラスの破片の前にかざす。

シューウウン・・・

すると・・・浅倉の腰にベルトが装着される。そして浅倉は構えをとる。

浅倉「変身ッ！」

変身ポーズをとった後にカードケースをベルトに挿入した。すると辺りに鏡のようなものがいくつか現れ、ソレが浅倉を包み・・・その瞬間、はじけ飛ぶ。

そして姿を現したのは・・・先ほど、ディカオスと闘った仮面ライダー王蛇であった。

浅倉『フウウ・・・フンツッ！』

王蛇は一度首の骨を鳴らし、ガラスの破片の中に吸い込まれるようにミラーワールドへと向かった。

戻って真司は・・・

真司「やっぱ無謀だった……。あの子の家とか知らないし・・行く所分かんないし・・。」

一人ブツブツと言いながら歩いていた。すると・・

キイイン・・キイイン・・

という音が聞こえた。

真司「え・・？なんだ、今の音？」

真司はあたりを見て回るが・・音の発生源は見当たらない。

真司「気のせいかな？」

真司は特に気にせず、歩いて行った・・。

モンスター『・・・』

そんな真司を・・赤い龍のモンスターが見ていた。

戻って雅紀はとうとうと・・・

雅紀「ゼエ・・・ゼエ・・・」

息を乱しながら物置部屋に隠れていた。どうやら二人から逃げてきたようだ。

雅紀「ふ・・・二人の顔・・・綺麗だけども怖かった・・・何で？とゆうか・・・俺はフラグを作った覚えもないって言うてるのに・・・」

そうブツブツ呟いていると・・・

アスラ「雅紀、どこへ行ったのかなあ？」

アスラの声が聞こえた。雅紀は息をひそめる。

アスラ「雅紀、隠れても無駄だよ？出てきなさいよ。」

そう言っていると・・・アスラは物置部屋の前で止まる。

アスラ「もしかして、この中にいるのかなあ？」

雅紀「っ！」

アスラ「開けちゃおうっ」と

アスラは物置部屋の扉を開けた。

雅紀「（大丈夫だ！この部屋の中は何気に広いし、家具やいろんなものがいっぱいあるから見つかる心配はない！）」

雅紀はそう思い・・・息をひそめる。

アスラ「うーん・・・見つからないなあ。此処じゃないのかなあ。別のところ行こうか。」

そう言いアスラはどこかへ行ったようだ。

雅紀「はあ・・・。」

雅紀はため息をついたその時・・・

アスラ「安心できると思ったら、大間違いだよあ？雅紀？」

雅紀「っ！！！！！」

後ろを振り返ると・・・そこにいたのはとても綺麗な笑顔で雅紀を見つめているアスラだった。

アスラ「ククク・・・えい」

雅紀「うあっ！」

雅紀はその場でアスラに押し倒される。そして唇を重ねてきた。

アスラ「んん・・・はあ・・・。あたしから逃げられると思ってる？」

雅紀「何で！？さつき、部屋を出たはずなのに・・・」

アスラ「部屋を出たフリをしたのよ。だいたい・・・あたしはこの部屋に入る前からアンタが此処にいるってのは分かってたのよ。」

雅紀「ええっ！？ウソだろっ！？」

アスラ「ホントよ。ウソじゃないわ。あたしはね・・・生体反応を感じ取る力も持つてるの。それでアンタの生体反応を感じ取って此処へ来た・・・。つまり、アンタは既に袋の中の鼠ってわけよ。」

雅紀「そ・・・そんなあ・・・。」

雅紀はハア・・・とため息を吐いた。ソレをみたアスラは笑う。

アスラ「ククク・・・さあ・・・覚悟はできているんでしょうね・・・？」

だが、今度は声のトーンを低くして言ってきた。同時に雅紀を捕まえている腕に力を入れる。

アスラ「あたしたちの他に女を作った雅紀には・・・どんな調教をしてあげようかなあ・・・なくなるまで精液を中に出してもらうか・・・それとも、一日中一つにして雅紀のを刺激させていくか・・・うん、悩むねえ。」

雅紀「いや、マジでやめて。ホントお願いしますから。」

アスラ「アンタの意見なんか聞いてない・・・決めた！両方やろう
そうしたら雅紀はもっとあたしにメロメロになるだろうしね」

雅紀「マジでやめてください！！ってゆうかホントに誤解だから！！」

アスラ「ふん・・・ま、誤解だろうがあたしはやるね。あたしは今、欲求不満。雅紀と一つになりたいのにアリスに邪魔されてばかり。でも今はアリスはいないからできる！一日中此处で欲求を解消。さらには雅紀をたっぷりと犯してやる。時間をかけてね・・・ああ・・・想像しただけで涎が出そうだよ・・・」

アスラはそう言いながら雅紀の上着のボタンをはずしていく。

雅紀「やめてっ！ホント、お願いだから！！」

アスラ「嫌よ。さあ、諦めてあたしに食べられなさ・・・っ！」

雅紀の上着を取り上げようとした時・・・アスラの動きが止まる。

アスナ『アゝスゝラゝゝゝゝ・・・！！！！！！』

アスラ「なっ！アンタ、起きたの!?!」

アスナの目覚めに驚くアスラ。

アスナ『いい加減に……しろオオオオオオオオオオツ!!!』

アスラ「わっ！きゃああっ！！」

アスナがアスラを引っ張り出し、表に出てきた。

アスナ「ハア……ハア……」

雅紀「あ……アスナなのか……？」

アスナ「ええ……。全く、何でアスラはあんなにエッチな事が好きなのよ！／＼／＼」

雅紀「わかりません……。それよりも……。どいてくれない？」

アスナ「え？ああ、うん。」

アスナはようやく自分が雅紀の上に乗ってる事に気付き、どいた。

雅紀「はあ、ホント、助かったよアスナ。」

アスナ「そう。」

雅紀「ふう……。一時はどうなるかと思ったあ……。一先ず、この部屋を出ようか。」

と雅紀が体を動かそうとした時……

モンスター『ギシャアアアッ!!』

突如、サメ型のモンスターが鏡から出てきて雅紀を捕まえた。

雅紀「な・・・うああああっ!!?」

雅紀は抵抗しようとしたが、鏡の中へと引きずり込まれてしまった。

アスナ「雅紀!? そんな・・・雅紀イイ!!!!」

アスナの悲鳴がその場で響いた・・・。

ミラーワールド

雅紀「うああっ！」

雅紀は鏡から出てきて家具などにぶつかる。

雅紀「痛てて……。あのモンスター……。何しやがるんだ……！」

雅紀は頭を触っていると……

？『てめえを食らうためだよ……。』

と言う声が聞こえた。雅紀は振り返るとそこにいたのは……

雅紀「仮面ライダー……。王蛇！」

仮面ライダー王蛇がそこにいた。

浅倉『丁度、この家でひと暴れして、俺のモンスターが腹をすかしていたところだ……。てめえを食わす。』

雅紀「冗談！そういうのはやめてもらいたいぜ！」

雅紀はディカオスドライバーを腰に巻きつけ、カードを挿入する。

『カメンライド』

雅紀「変身！」

『ディカオスッ！』

雅紀は仮面ライダーディカオスに変身した。

浅倉『ほう……てめえもライダーか……。』

雅紀『此処から出て行ってもらうぞ……！つか、追い払う！』

ディカオスはアドベントドライバーを持って構えていると……

浅倉『丁度いい……。このカードの力を試してみるとするか……。』

王蛇はカードケースから一枚のカードを取り出し、杖型のバイザーに挿入した。

『ユナイトベント』

雅紀『何！？』

ディカオスは驚いていると……

ベノスネーカー『キシヤアアッ！』

王蛇のモンスター、ベノスネーカーと……

メタルガラス『ゴオオオオツ！！』

白いサイ型のモンスター「メタルガラス」と……

エビルダイバー『プシュウウツ！！』

赤いエイ型のモンスター「エビルダイバー」・

アビソドン『ギシャアアアッ!!』

そして、二体のサメ型モンスターが合体した青いホオジロザメ型のモンスター、「アビソドン」が出現した。

雅紀『アレは・・・アビスの!?!?何でアビスのモンスターが・・・!?!?』

デイカオスが驚いている中・・・四体のモンスターが集結し、一つのモンスターになっていく。

ジエノサイダー『ギシャアアアアアアアッ!!!!!!』

姿を現したのは・・・三体のモンスターが合体することで誕生するモンスター・・・「ジエノサイダー」であった。

しかし・・・違っている所があった。本来、融合に必要なモンスター、アビソドンがジエノサイダーの両手に剣と盾のようにして融合されていたのだ。

雅紀『ジエノサイダーの強化形態・・・なのか・・・!?!?!?』

浅倉『フン・・・さあ・・・殺れ・・・』

ジエノサイダー『ギシャアアアアアアアアアアアッ!!!!!!』

王蛇に命じられ、ジエノサイダーは手に装着されている剣を驚愕しているデイカオスに向かって振り落としたのであった・・・。

第104話（後書き）

さてと・・・いかがでしたでしょうか？

雅紀「あまりにも無理やり過ぎです。少しは考えなさい。はい、これを読んだ読者の感想です。」

勝手に言うなよ。まあ、確かに無理やりすぎたかなあ・・・。

雅紀「当り前だ。なに、ジェノサイダーにアビソドンを合体させちやってんの？アビソドンはこの世界には存在しないんだぞ？合体する前のアビスハンマーとアビスラッシャーは存在するけど。」

いいじゃんかつ！アビソドン、カッコ良かったから出したんだよ！
文句あるかコンチクショー！！

雅紀「作者が壊れた！？・・・ま、まあ数分ぐらいしたら戻るだろうし、いいか。次回は俺が王蛇と対決する話です。お楽しみに！」

第105話(前書き)

お久しぶりの投稿です。
それではスタート。

第105話

ジエノサイダー『ギシャアアアアアアッ!!!』

ジエノサイダーの腕に装備されている剣がディカオスめがけて振り落とされた。

雅紀『ぐっ!』

それを間一髪で避けるディカオスであったが、体が劣化し始めた。

雅紀『くっ、早いところ変身しなきゃ。』

そう言っていると・・・

浅倉『オラアッ!』

ベノサーベルを振り回す王蛇が攻撃を仕掛けてきた。ディカオスはそれを避け、カードをディカオスドライバーに挿入する。

雅紀『変身ッ!』

『カメンライド・リュウガアッ!』

ディカオスはDリュウガへと姿を変え、王蛇に打撃を与える。その時に体の劣化が止まった。

浅倉『チツ・・・!てめえはあの時の変な野郎だったか・・・!』

雅紀『そういつことだ。』

浅倉『ハッ！丁度良い、あの時の借りを返させてもらうぞっ！！』

王者はベノサーベル強く握り、Dリュウガに斬りかかる。

『アタックライド・ソードベントッ！』

雅紀『ハアアッ！！』

Dリュウガも召喚したドラグセイバーを手に持ち、迎え撃つ。

ガギンッ！ガギンッ！

互いに剣をぶつけ合い、火花を散らせると・

ジエノサイダー『ギャアアアアアアアアッ！！！！』

ジエノサイダーがDリュウガに向けて波動を放ち、Dリュウガはそれに直撃してしまい吹っ飛ばされる。

雅紀『ゲホオ・・・！まずはジエノサイダーを止めなきゃな！』

『アタックライド・アドベントオッ！』

ドラグブラッカー『ゴオオオオオッ！！』

Dリュウガはドラグブラッカーを召喚し、ジエノサイダーを攻撃させる。

雅紀『やられたくない!!(・・・といつても、一体どうする?いくら別のモンスターを召喚しても、相手がジェノサイダー。やられる可能性が非常に高い・・・。どうすれば・・・!)(』

そう考え込んでいると・・・ジェノサイダーが攻撃を仕掛けてきた。

雅紀『くっ!!』

『ストライクベント』

浅倉『フンッ!!』

ドンッ!

雅紀『がっ!!』

ジェノサイダーの攻撃を避けるも、右手にメタルホーンを装備した王蛇の攻撃が命中してしまう。

?「そうだ・・・殺れ!デイカオスを滅ぼすのだっ!!!」

そんな光景を鏡から見ている人物がいた。他でもない鳴滝であった。

鳴滝「フッフッフ・・・わざわざ、ミラーワールドにアビソドンを放って置いて正解だった・・・。王蛇はアビソドンと契約し、さらにはエビルダイバー・・・メタルグラスも契約した。そのせいで、ライアとガイが使役するモンスターがいなくなってしまったが、まあ良い。デイカオスよ・・・この世界で、貴様は朽ち果てるのだ!!!」

そう叫び、オーロラの中へと消えて行った。

一方、アスナは・・・

アスナ「雅紀！雅紀！！一体どうしたらいいのよ！！！」

アスナは雅紀がミラーワールドへ連れて行かれた・・・その際に使われた鏡に向かって怒鳴っていた。

アリス「雅紀、どこかなあ？いっぱい、いっぱい気持ちよくしてあげるのに・・・ってアスナちゃん、そこで何しているの？」

と、そこへ雅紀を探しに来たアリスが現れた。

アスナ「アリス、雅紀が・・・雅紀が！」

アリス「え？雅紀がどうしたの？そこにいるの？」

アスナ「な・・・なんか、怪人・・・ってかモンスターに！鏡の中へ連れて行かれたッ！！！」

アリス「っ！！！」

アスナの様子を見て、アリスは目を大きく開けて鏡を見た。

アリス「ミラーワールドに・・・！すぐに助けに行こう！」

アリスはデイダークドライバーにカードをセットした時だった。

？「無駄ですよ。変身したって・・・。」

見知らぬ声が聞こえ、二人はその場で警戒する。

アスナ「誰なの？姿を現しなさい！」

アスナがそう叫ぶと・・・

コッコッコッ

と足音を立てて誰かが入ってきた。エレイナであった。

アスナ「アンタ・・・誰よ！？」

エレイナ「さあ、誰でしょうね。」

アスナの質問に答えないエレイナだが・・・アリスはエレイナを見つめて・・・

アリス「この感じ・・・貴女は・・・あの時の、仮面ライダー・・・。」
と呟いたのであった。

エレイナ「流石は私達の敵である悪魔というだけではありませんか。」

アリス「っ！何で私の事を悪魔だと!?!」

エレイナ「知っていますとも。別の世界ではありますが、貴女から悪魔である独特の感覚を感じますから。貴方も、私のこの感じに、見覚えはありませんか？」

アリス「・・・まさか、貴女は・・・天使・・・!?!」

エレイナの発する感じで正体を知り、驚愕する。

エレイナ「そう。貴女の天敵でもある天使です。」

アスナ「そんなことより、アンタ、何で無駄だっかわかるのよ!?!」

アスナの声に反応し、エレイナはアスナに顔を向ける。

エレイナ「この世界のミラーワールドは、他の世界のミラーワールドと違い、龍騎の世界のライダーでしか入れないようにされています。ディケイドやディエンドと同型でもある私達でさえも、侵入は不可能となっています。」

アリス「そんなの・・・やってみなきゃ・・・！」

エレイナ「現に私がやってみました。ディカオスも。侵入を試みようとしたものの、ただの鏡でしたから。」

アリス「・・・龍騎の世界のライダーだけ入れる。なら！」

『カメンライド・ディダークッ』

アリスはディダークに変身し、カードを三枚、手に持つ。

アリス『私が召喚して、雅紀を助けに行かせる！』

そう言い、ディダークドライバーに挿入しようとした、その時・

エレイナ「させません。」

バンツ！

アリス『キャッ！』

エレイナがディエンジエドライバーの銃弾をディダークの手に向け、ディダークはそれに直撃し、カードを落としてしまう。

アリス『貴女・・・！』

エレイナ「ディカオスが滅びるのですから・・・助けには行かせませんよ?」

『カメンライド』

エレイナ「変身。」

『デイエンジェルッ!』

アスナ「くっ!変身っ!!!」

エレイナが変身したのを見て、アスナも変身する。

エレイナ『丁度いいです。此処で悪魔の一人を滅ぼし、貴女は、元の世界に戻っていただきます。』

アスナ『やってみるもんならやってみなさいよ!!!』

アリス『雅紀を、助けに行くんだ!』

デイダーク・デステイニーVSデイエンジェルの戦いが始まった。

戻ってDリュウガは・・・

ジエノサイダー『ギシャアアアッ!!!』

浅倉『ハッ！フンッ！！』

ジエノサイダーと王蛇に悪戦苦闘していた。

雅紀『くっ！変身できるタイミングが掴めない！』

ジエノサイダーの攻撃を避けようとも、王蛇の攻撃が次に来る。王蛇の攻撃を避けようとも、ジエノサイダーの攻撃が次に来る。これの繰り返しであった。

雅紀『（ジエノサイダーを止める方法は見つかった。後は変身すれば・・・！）』

Dリユウガは避け続けながらそう思っている・・・

浅倉『ハッ！』

王蛇がジャンプし、パンチを食らわせようとした。

雅紀『今だ!!!』

Dリユウガは王蛇の攻撃を避け、がら空きとなった腹にパンチを食らわした。

浅倉『ガッ！ゲホッ！！』

まともに食らい、王蛇はふらついている。その隙にDリュウガはカードをディカオスドライバーに挿入。

雅紀『変身っ！』

『カメンライド・タイガアッ！』

DリュウガはDタイガへとKRした。直後にまたカードを挿入。

『アタックライド・フリーズベントッ！』

すると、辺りの温度が低下し、ジェノサイダーは固まった。

雅紀『フリーズベントはライダーには効果がないけど、モンスターには絶大だ。後は・・・』

Dタイガは王蛇のほうへ顔を向け、またカードを挿入。

『アタックライド・ストライクベントッ！』

雅紀『王蛇を倒すだけだ！！！！』

Dタイガは両手にデストクロウを装備し、王蛇に突っ込む。相手の王蛇は身動き一つもしない・・・その時・・・。

浅倉『倒されんのはてめえだ。』

雅紀『何・・・？』

王蛇の呟きに疑問を思っている．．

アビソドン『ギシヤアアッ！！！』

アビソドンがDタイガに噛みついた。

雅紀『なっ！？そんな．．フリーズベントで動けないはず．．！？』

浅倉『てめえは、あの三体合体のモンスターだけしか見てなかったのさ。凍る直前にそのサメだけ合体を解除させていたのさ．．。』

雅紀『何！？つてがああああっ！！』

驚愕の声を上げるも、アビソドンの歯がDタイガの体に突き刺さる。

浅倉『さあ．．喰らえ。』

アビソドン『ギシヤアアアアッ！！』

王蛇の命令にアビソドンは顎に力を入れる。そのせいでアビソドンの歯がDタイガの体にさらに食い込む。

雅紀『うああああああああああっ！！！！！！！！』

ディカオス、絶体絶命。

第105話（後書き）

.....

雅紀「おゝい、作者。どうしたんだ？無口で・・・。」

・・・雅紀・・・。

雅紀「ん？」

・・・自然の脅威は恐ろしいなあ・・・。

雅紀「自然の・・・ああそういえば、お前んとこでM9・0の地震があつたんだっけ。」

ああ・・・。ディカオスを書こうと思った直後にこの地震だよ。しかもそのせいで避難所生活しなきゃならなかったし。幸いに、家は倒壊、浸水はしないで済んだんだがな。

雅紀「けど、その前にも全然書いてなかったじゃん。どういうこと？」

・・・まあ、あれだ・・・放っておいた。

雅紀「・・・ディメンションブレイカ・・・。」

ぐはあああああつー！！！！

雅紀「あ、作者が気絶した。数分ぐらいで復活すると思うから、大

丈夫だと思いが……。あゝ、オホン。次回は……。俺、死ぬかも……。
って死ぬの！！！！？」

お楽しみに~~~~~！！！！

雅紀「一分もたたないで復活しやがった！！！！？っていつか、どうい
うことだ作者~~~~~！！！！！」

第106話(前書き)

今回もグダグダかも・
それではスタート。

第106話

アスナ『テエエエエエイツー!!』

DESTINYの攻撃がディエンジェルに向かって放たれる。

エレイナ『そう簡単には当たりませんよ』

『アタックライド・インビジブルウツ!』

だが攻撃が当たる瞬間、ディエンジェルはカードを挿入し、姿を消した。

アスナ『っ!どこ!?!』

DESTINYが辺りを見渡すと・

エレイナ『こっちですよ。』

『アタックライド・ブラストツ!』

アスナ『っ!』

声が聞こえ振り向くと、そこにはディエンジェドライバーの銃口をDESTINYに向けたディエンジェルの姿があった。

ドドドッ!

アスナ『ウアッ!』

デステイニーはディエンジェルの攻撃を受け、壁に衝突。

アリス『アスナちゃんっ！このっ！！』

ソレを見たデイダークがディエンジェルに攻撃を放つ。

エレイナ『ハッ！』

ディエンジェルはディエンジェドライバーのトリガーを引き、迎え撃ち、デイダークはそれを弾く。

『アタックライド・スラッシュ！』

アリス『ハアアアアアッ！！』

デイダークはカードを挿入し、鎌を鋭く、威力を上げて切り裂く……のだが……

エレイナ『フッ！ハッ！』

ディエンジェルはそれを避け、同時に弾丸を放った。

アリス『くっ！』

デイダークは直撃し、後ろに下がる。

エレイナ『悪魔である貴女は、この場で排除します。』

アスナ『ぶざけてんじやないわよオオオオオオッ！！』

そこへJFとなつたデステイニーがジャステイスフォームディエンジェルを斬る。だが、ディエンジェルはそれに気付き、瞬時に避ける。

エレイナ「二体一では不利ですね。増援を出します。」

「カイジンライド・ライオンファンガイアアツ！」

カードを挿入しトリガーを引くと、目の前にライオンをモチーフにした「ライオンファンガイア」が出現した。

エレイナ「そこにいる剣を持ったライダーの相手をしてください。」

ライオンファンガイア「グルル・新しいタイムゲームの始まりだアアアツ！」

そうライオンファンガイアに命ずると、ライオンファンガイアは咆哮を上げてデステイニーJFに襲い掛かる。

アスナ「わっ！このっ！」

ライオンファンガイアの攻撃を受けながら、デステイニーJFも切り返していく。

アリス「アスナちゃんっ！」

エレイナ「貴女の相手は私です。」

デステイニーJFの助けに行こうとするが、ディエンジェルがソレを許さない。

アリス「まず先に、貴女を倒さないと……！」

デイダークはそう判断し、デイエンジェルを攻撃する。だが、デイエンジェルはそれを華麗に避け続ける。

「アタックライド・スマッシュッ！」

デイダークはカードを挿入し、エネルギーの刃を放った。

「アタックライド・ブラストッ！」

デイエンジェルはソレを撃ち落とそうと、威力と連射力を上げて迎え撃つも……威力が上なのか、撃ち落とせず、腹部に直撃した。

エレイナ「あっ！」

アリス「どう?」

エレイナ「撃ち落とせなかった……ですが、余裕でいて大丈夫ですか?」

アリス「え?」

デイエンジェルの言葉にデイダークはハッと上を見ると、白いエネルギーの弾丸が幾つも飛んできた。

アリス「キャアッ！」

避けようとしても時すでに遅し……デイダークはそれを全弾直撃し

てしまった。

エレイナ『言い忘れていましたが、私の弾丸はホーミングも可能でしてね。貴女が放ったエネルギーの刃を撃ち落とす時に貴女に向けて放っておいたものです。』

アリス『油断しちゃった……。でも、負けない!!』

ディダークは立ち上がり、ディダークドライバーを振るい、ディエソルジェルに向かって行った。

一方、デステイニーは

ライオンファンガイア『ゲルアアアッ！！！！』

ライオンファンガイアの猛攻を食らっていた。

アスナ『くっ！このオッ！！』

猛攻を食らいながらも、手に持っているジャスティスカリバーで迎え撃つ。

ライオンファンガイア『なかなかだっ！！そうではなくてはおもしろくない！！！！』

アスナ『こっちはアンタのゲームに付き合っている時間ないわよ！！早く、雅紀を助けに行かなくちゃ！！』

デステイニージフはライオンファンガイアの攻撃を避け、脇腹に一撃を叩いた。

ライオンファンガイア『グフッ！コイツめ・・・！！』

アスナ『ハッ！！』

ライオンファンガイアが指先から棘を発射しようとする、デステイニージフは今度はその腕に一撃をくわえる。

アスナ『ハアアアッ！！』

そして上段から一気に振り落とし、ライオンファンガイアを斬った。

ライオンファンガイア『ガハア・・・！！く・・・ククク・・・！そう

だ。もつと、もつと楽しませろオツ!!』

だが、コレを食らってもライオンファンガイアはやられず、デステイニーJFに蹴りとパンチを食らわしていく。

アスナ『コイツ、ダメージを与えても立ちあがってくる。なんてしぶとさよ!!』

ライオンファンガイア『ガアアアアアッ!!!!』

デステイニーJFがいくらダメージを与えても、ライオンファンガイアは怯まずデステイニーJFに攻撃を与えてくる。

アスナ『（こうなったら、カリバースマツシュで一気に・・・）』

そう考え、デステイニーJFは後方へと飛び、構えをとる。

ライオンファンガイア『ガアアアアアアッ!!!!』

ライオンファンガイアはデステイニーJFに向かって来る。そして・

アスナ『カリバー・・・スマツシュ!!!!』

デステイニーJFがエネルギーを込めジャステイスカリバーを振り落とした。

ズバアアアッ!!

ライオンファンガイア『グガアアアッ!!!!』

それは見事に命中し、ライオンファンガイアは倒れた。

アスナ『……よし！後はあのライダーを倒して……』

そう言いながらその場から離れようとした時だった。

ライオンファンガイア『ガアアアアッ！！！！』

ライオンファンガイアが体を起こしてパンチを放ってきた。

アスナ『なっ！？うあああっ！！！！』

不意を突かれ、デステイニージフは避けようとしたが遅く、ライオンファンガイアのパンチは腹部に直撃してしまった。

ライオンファンガイア『今のは効いた……。だが！そんなんでは死なんぞおオオオオオッ！！！！』

ライオンファンガイアは咆哮しながら怯んでいるデステイニージフに蹴りを食らわした。

アスナ『ガッ！ゲホオオ……！！』

デステイニージフは腹部を抑え、倒れてしまった。

ライオンファンガイア『もう終わりか？もつと楽しませろっ！！！！』

そう言っても、デステイニージフは起き上がる事が出来なかった。

アスナ『（どうすればいいの？カリバースマツシユでさえ奴を倒せないんじゃない、他のフォームになったってダメ・・・もう・・・ダメなの・・・？）』

デステイニーJFは心の中でそう呟いていると・・・

アスラ『負けんじゃないわよ！！』

アスラが叫んできた。

アスナ『（アスラ・・・？）』

アスラ『馬鹿っ！アンタが弱音を吐いてどうすんのよ！そんなアスナを雅紀が見たら、悲しく思われるわよ！！』

アスナ『！！！！』

アスラ『雅紀を助けに行きたいんですよ！？だったら倒れている場合じゃないでしょ！！立ちなさい！白鳥 アスナ！！』

アスラはそうデステイニーJFに叫んだ。

アスナ『・・・そうだったわね・・・！！』

ソレを聞いたデステイニーJFは立ち上がる。

アスナ『そうよ・・・！弱音を吐くなんて、あたしらしくない！！雅紀を助けに行くためにも、あたしは倒れていらない！！！！』

デステイニーJFはそう叫んだ。

ライオンファンガイア『ほう……。楽しみがある……。!!』

アスナ『負けてらんない……。あたしは……。勝つ!!』

デステイニーJFは構えた。ソレを見たライオンファンガイアは咆哮を上げながら向かってきた。

アスナ『（ようは……。カリバースマッシュより威力のある技をたたきこめばいいだけ……。確実に……。一撃で相手を倒す技を……。!!）』

デステイニーJFは瞳を閉じてその場から動こうとしない。

ライオンファンガイア『くらえええええええっ!!!!』

ライオンファンガイアはデステイニーJFに向かって拳を突き出した……。その時

アスナ『（今だっ!!!!）』

閉じた瞳をあげ、ジャステイスカリバーに力を込める。そして・

アスナ『カリバー……。ストライクーーーーッ!!!!』

赤く輝いたジャステイスカリバーをライオンファンガイアの胸深くまで突き刺した。

ライオンファンガイア『ガ……。ガアアアアアッ!!!!!!!!』

突き刺された胸は焼け焦げ、後ろに大きな穴をあけた。

ライオンファンガイア『ぐ・グウウウ・タイムゲームは・・これで終わり・・か・・!』

ライオンファンガイアはそう呟くと、消滅した。

アスナ『これで・・終わった。次はアイツね。』

デステイニーJFがそう呟いた瞬間

アリス『キャアアアアアアッ!!!』

ディダークがこちらに向かって吹っ飛んできた。

アスナ『アリス!?!』

アリス『く・・・!』

二人は前を見るとそこには・・

エレイナ『ライオンファンガイアは・・やられましたか。』

ディエンジェルの姿があった。

エレイナ『まあいいです。それではトドメといきましょう。』

ディエンジェルは金色のカードを挿入する。

『ファイナルアタックライド・デイ・デイ・デイ・ディエンジェル

ッ！！』

デイエンジェドライバーを二人に向けると、目の前に巨大なカードが浮かんできた。

アリス『アスナちゃん！』

アスナ『ええっ！』

『ファイナルアタックライド・デイ・デイ・デイ・デイ・デイダークッ！』

デイダークとデステイナーJFは構える。

エレイナ『デイメンションキャノン。』

アリス『デイメンションデスサイズツ！！！！』

アスナ『カリバー・・・スマッシュッ！！！！』

三人の技がぶつかり合い、衝撃波が辺りを襲った。

エレイナ『っ！』

アリス『きゃっ！！！！』

アスナ『あああっ！！！！』

辺りは光に包まれた。

アスナ『・・・ケホケホ・・・！い・・・一体どうなって・・・！？』

デステイニーJFは体を起こすと、そこはどうかやら外であった。すると・・・

？『あん？また変なのが出てきたぜ。』

アスナ『っ！』

振り返るとそこにいたのは・・・仮面ライダー王蛇であった。

浅倉『丁度、戦い終わって相手を探してたんだ・・・付き合ってもらうぜ・・・！』

アスナ『アンタなんかと付き合ってられるわけないでしょ！こつちは雅紀をさがして・・・っ！』

デステイニーJFは王蛇の後ろを見て驚愕した。

アスナ『そんな……ウソ……ウソよ……』

ソレを見て、デステイナーJFに絶望の色が染まる。

アスナ『ま……雅紀iiiiiiiiッ!!!!!!』

ソレは……体に？み傷があり、全身が血だらけとなって倒れてい
る……

雅紀だった。

第106話（後書き）

さてと、いかがでしたでしょうか？

・・・おや？雅紀が出てこない・・・。あ、そか。死んでしま・・・
ゲホンツゲホンツ！重傷を負ったんだった。
早めに次回予告です。重傷を負った雅紀・・・。ソレを見たデステ
イニーは・・・

アスナ「殺す・・・殺す・・・アンタを・・・殺してやるうウウウウウ
ウツ！！！！！！！！」

続きは次回、お楽しみに・・・。てか、アスナ怖っ！！？

第107話(前書き)

来週のオーズはプロティラコンボの登場ですね 待ちどろしい!!
それではスタート!

第107話

デイエンジェルと戦っていたデステイニーJFは必殺技のぶつかり
でできた衝撃でミラーワールドに来てしまった。
そして見たものは・・・

アスナ『イヤ・・・イヤあ・・・雅紀・・・』

デステイニーJFは全身に血濡れで倒れている雅紀を見て、首を振
った。

アスラ『アスナっ！気をしっかり持ちなさい！』

アスラが言っても、デステイニーJFは首を振ってばかりいた。そん
な時・・・

浅倉『お前はコイツの知り合いか・・・？』

目の前にいた王蛇が聞いてきた・・・。

アスナ『・・・アンタが・・・雅紀を・・・やったのか・・・？』

浅倉『あん？』

アスナ『アンタが雅紀をやったのかと・・・聞いている・・・！』

浅倉『ああ、そうだ。コイツは結構、楽しませてくれたぜ。だが、もう終わりだ・・・もうじき死ぬだろうよ。お前がもう少し早くこのミラーワールドに来ればア・・・悲鳴が聞けたかもしれないなあ。』

アスナ『！！！！！！』

ブチィッ！！！！

デステイニージフの中で何かが切れた。

浅倉『そこで見ておけ、アイツが食われる所をよ・・・食べ。』

アビソドン『ギシャアアッ！！！！』

王蛇の命令でアビソドンは雅紀を食らおうと近づいた・・・その時・・・

ズシャアアアッ！

アビソドンの腹部に無数の傷ができていた。

アビソドン『ギシヤアアッ!!!』

浅倉『何……?』

アビソドンは倒れ、王蛇はふとアビソドンの後ろを見た。そこには・

アスナ『……………』

体中から異様なオーラを発しているデステイニーJFの姿があった。

アスナ『…殺す…。』

デステイニーJFはそう呟くと同時に体から発しているオーラが赤黒く輝く。

アスナ『…殺す…!』

またも呟くと、どンドン、オーラが輝きを強める。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ!!!!!

同時に辺りは地面が揺れる。

アスナ『雅紀を…傷つけたアンタを…殺してやるウウウウウウウウウウッ!!!!!!!!!』

そう叫ぶと同時に赤黒いオーラがさらに光輝き、デステイニーJFの体を包む。

アスラ『ちよっ！？アスナ！どうしたの！？アス・・・アアアアアアアッ！！』

デステイニーJFの中にいるアスラもデステイニーJFの異変と同時に意識が消えた。

アスナ『ウウウアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！』

そして、辺りは光に包まれた・・・。

浅倉『ぐ・・・ぐうっ！何が起きたあ・・・！！？』

そして光が消え、王蛇は眼を開ける・・・。そして目の前にいる存在に驚いた・・・。

目の前にいるのはデステイニーのようだ。しかし、体が変化していた。

それは、全身が赤黒く・・・手足が荒々しい獣のように鋭くなっており、背中には悪魔に似た翼が何本も生えており、右手に黒く光る剣が・・・左手には黒く、白いラインが入っている銃が握られていて腰に巻きついてあるベルトの中心にある水晶は赤黒く輝いており、

幾つもの鋭い爪がその水晶を中心に生えていた。

そして顔の角はより鋭くなっていて瞳は体と同じく赤黒く、口には黒いラインが入っていた。

デステイニーの新たな形態……その名も……「ブラッディフォーム」だ……。

浅倉「お前……何者だ……?」

アスナ「……殺す……。」

王蛇の問いに答えず、デステイニーBFはそう呟く。
ブラッディフォーム

浅倉「ハンツ! まあいい。おもしろくなりそうだ……。付き合ってもらおう……。やれエエエツ!」

アビソドン「ギシヤアアアッ!」

王蛇の命令を聞き、アビソドンは体を起こしてデステイニーBFに迫った。

アスナ「殺す……。。」

デステイニーBFは避けようとせず、右手の剣「ブラッディカリ

バー」を強く握る。

ガブウツ!!

そして、アビソドンはデステイニーBFを食い、そのまま飲み込んだ。

浅倉『ハンツ・・・あつけねえなあ・・・。』

王蛇はつまらなそうに呟いた・・・だが、次の瞬間っ!

ズバアアアッ!!!!!!

浅倉『っ!!!!』

アビソドンの体が真っ二つとなった。アビソドンは悲鳴を上げられず、そのまま爆死した。そしてアビソドンがいた場所には、デステイニーBFがいた。

アスナ『・・・・・・』

浅倉『チィッ!おい、お前ら、いつまでそうしている!さっさとやれっ!!!!』

王蛇は後ろで固まっていたジェノサイダーにそう怒鳴った。

ジェノサイダー『ギシャアアアアッ!!!!』

フリーズベントの効果が既に切れており、ジェノサイダーは咆哮しながらデステイニーBFに突っ込んだ。

アスナ『殺す・・・』

と、今度は左手で持っている銃「ブラッディバスター」の銃口をジェノサイダーに向け、そして・

ダンッ！！

ブラッディバスターから高速の弾丸が発射され、ジェノサイダーの右足を貫いた。

ジェノサイダー『ギシャアアッ！！！！』

右足を貫かれたジェノサイダーはよろけてデステイニーBFの眼前で倒れてしまう。

アスナ『殺す・・・！！』

ダンッ！！ダンッダンッ！！

デステイニーBFは容赦なくジェノサイダーの体を打ち抜いていく。

ジェノサイダー『ぎぎぎぎシャアアアッ！！！！！！』

アスナ『殺す……！！！！』

そしてトドメと言わんばかりにブラッディカリバーを振り、ジェノサイダーの胴体を真っ二つに切った。

ジェノサイダー『ギャアアアアアアアッ！！！！！！！！！！』

そしてジェノサイダーは爆発した。すると……ジェノサイダーの体の一部だったベノスネーカーが王蛇の隣に倒れるようになってきた。

浅倉『コイツ……！！！！』

『ソードベント』

王蛇はベノサーベルを召喚し、デステイニーBFに突っ込んで行く。

王蛇『オラアアアアアッ！！！！！！！！！！』

王蛇は力任せにベノサーベルを振り、デステイニーBFに攻撃するも……

ガキーンッ！

ブラッディカリバーで受け止められ・

ダンッ！！

至近距離でブラッディバスターの弾丸を食らい、吹っ飛ばされる。

浅倉『ガハッ！ゲホオッ！』

王蛇はフラフラと立ち上がり・デステイニーBFを睨みつける。

浅倉『くそお・・・！くそがアアアアアアアア！！！！』

『ファイナルベント』

王蛇はベノサーベルを地面に叩きつけ、ベノバイザーにカードを挿入した。

浅倉『ウオオオラアアアアアアアッ！！！！！！』

王蛇はベノクラッシュを放ち、デステイニーBFに食らわせようとした・・・だが・・・

アスナ『殺す・・・！！！！』

デステイニーBFはブラッディカリバーを赤く光らせ、王蛇に向かって振った。

ズバアアアアツ!!!

ブラッディカリバーから放たれた赤い斬撃に王蛇は驚き、体をくねらせて避けるが・・

ベノスネーカー『シャアアアアツ!!!』

王蛇の後ろにいたベノスネーカーは避けきれず、頭部を真っ二つにされ、爆発した。

浅倉『があっ!!!』

爆風で王蛇の体は吹っ飛び、デステイニーBFの前に倒れた。

浅倉『ぐう・・・てめえ・・っ!!!?』

王蛇はデステイニーBFに殴りかかろうとすると、自分の右手を見て驚愕した。王蛇の体が先ほどまでは紫色だったが、今は茶色へと変わっていた。自分が契約しているモンスターが全てやられてしまい・・「ブランク体」となってしまったのだ。

浅倉『一体何が起きてる・・!?!?体に、力が入らねえ・・!』

王蛇ブランク体が驚愕していると・・

アスナ『殺す・・!』

き、そして・・

バキイインツ！！

王蛇ブランク体のベルトに装着されているカードデッキを破壊した。カードデッキを破壊され、王蛇ブランク体の体はガラスが割れるように消え、浅倉へと戻った。浅倉の体には無数の切り傷ができていて服も切れていた。

アスナ『殺すウウウツ！！！！』

ズグシユウウウツ！！！！

そしてデステイニーBFはブラッディカリバーを浅倉の腹部に深々と刺した。

浅倉「ガッ！！ゲホッ！ゴボオオっ！！！！」

深く刺されたせいで、腹部から大量の血が噴き出し、口からも血が溢れ出た。腹部から出る血はデステイニーBFの体を真っ赤に染め上げる。

浅倉「が・・ご・・く・・」

そして、浅倉は息耐えた。

アスナ「……………」

浅倉が死んだことを確認すると……デステイニーBFは立ち上がり、消滅しかけている雅紀を見つめた……。

真司「ハアア……結局見つからずかあ……。」

此処は真司の家。真司は靴を脱ぎ、自分の部屋に向かい、扉を開けた。

真司「え……ええええええええっ!!!?!」

扉を開け、目に見えたのは……床を血で染め上げている雅紀と、雅紀を抱きしめるように一緒に倒れているアスナの姿だった。

第107話（後書き）

さてと、いかがでしたでしょうか？

アリス「どうも、アリスです！」

お〜アリス！いらっしやい！今日はどうしたんだ？

アリス「雅紀をまた酷い目にあわせている作者さんにちょっとO

H A N A S I Iを・・・！」

ちよつと待てつ〜！「お話」が「O H A N A S I I」になって
いるんだけど！？何！！？なのは流のO H A N A S I Iか！！
！？やめて！まじでやめてえええっつ〜！！！！

アリス「フッフ

やめてくれるか！？

アリス「い・や・だ　ディメンションデスサイズ！！！！」

あつぎゃああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！
！！！！！！

アリス「もう今度からは雅紀を酷い目に合わせないでね？心配にな
っちゃうんだから。」

ぐ・・・ぐふ・・・善処しますう・・・。

アリス「それと・・・何か、アスナちゃんのキャラが・・・しかも新しい形態が出てきたね。」

ブラッディフォーム！名前考えるの苦労したよ。

アリス「ねえ？デステイニーはもともとガ○ダムSE○Dシリーズをモチーフにしているんでしょ？何でガ○ダムの名前にしないの？」

それはなあ・・・あの姿に合う名前がなくて・・・。

アリス「そうなんだ・・・。それと・・・浅倉さんをあんな扱いにして大丈夫なの？」

大丈夫じゃない・・・。全国の浅倉ファンがコレを見たら怒られそう・・・。

アリス「謝った方がいいよ？」

全国の浅倉ファンのみなさん、大変、申し訳ございませんでした！
！（土下座）

アリス「と、作者さんも謝っているので許してあげてくださいーい。」

さてと、もう一つだが、アスナはあの時、もう、何ていうかブチ切れてて怒り爆発してんのよ。だからあんな風になったんだ。

アリス「そうなんだ。」

さてと、次回は、真司にライダーについて教える雅紀達・・・そんな

な時、黄金の羽根がミラーワールドに降り注ぐとともに新たなライ
ダーが・・・！！

？『優衣・・・優衣イイイ・・・！！！！』

続きはじか・・・

アリス「次回！お楽しみに」

うわああああんっ！台詞がああああ！！！！！！

第108話

王蛇との戦いを終えた雅紀達は・

アスナ「ん・んん・んん・んん・此処は・・・？」

アスナが目を覚ますと、そこは見知らぬ部屋だった。

アスナ「あれ？あたしは・・・確か・・・」

アスラ『やっと目が覚めたのね、アスナ』

何か思い出していると、アスラが話しかけてきた。

アスナ「（アスラ？此処は何処よ？）」

アスラ『あたしもわかんないわよ。目が覚めたのはついさっきだし。』

アスナ「（あ、そう……。そうだ！雅紀は！？雅紀はどうなっちゃったの！！？）」

アスラ『慌てないの！てか、雅紀はアンタの隣にいますよ。』

アスナ「へ？」

アスラに言われ、隣を見ると、体に包帯が巻かれて眠っている雅紀の姿があった。

アスナ「雅紀！！よかった……。死んでない……。』

雅紀が息をしているの知り、ホツとしていると……

アスナ「（……。ねえ、アスラ。あの時……。あたし達、ミラーワールドって所にいたよね？なんでミラーワールドに入れたの？）」

アスラ『うん……。もしかしたら、あの時、アンタとアリス、そしてエレイナとかいう女と技をぶつけ合った時にできた衝撃で時空が歪んで……。それでミラーワールドに入る事が出来たのかも。』

アスナ「（なにその展開……。てゆうか、あの後、一体どうなったんだろ……。アスラは覚えてない？）」

アスラ『覚えているわけじゃないでしょう。アンタが雅紀を傷つけられて腹立った時になんかやばそうだから止めようと思った瞬間に意識

を失っちゃったんだから。』

アスナ「（そう・・・）」

そう心中で話し込んでいると・・・

？「あ、やっと起きたんだ。良かったよ目が覚めて。」

部屋に男性が入ってきたのだ。

アスナ「あ・・・貴方はあの時の・・・確か、真司さん。」

真司「お、覚えてくれてたんだ。」

その男性は城戸 真司だった。

アスナ「あの、もしかして此処は・・・」

真司「ああ。俺の家。しっかし、驚いたよ。ドアや窓に鍵をかけているのに部屋の中で倒れてたんだから。」

アスナ「え？じゃ、じゃあ、雅紀の怪我を治療してくれたのは・・・

」

真司「俺。まあ治療っていうか、応急処置みたいなもんかな。一度病院に運ぼうと思ったんだけど・・・君がその子にガツシリと抱きついてたから運べなくて・・・。」

アスナ「ふえっ！？あ、あたしが雅紀に抱きついてっ！！？／／／」

真司に言われ、アスナは赤面してしまう。

真司「しかし・・・その子の傷跡、あの事件のに似ている部分があるんだ。教えてくれないか？誰に、何に襲われたんだ？」

真司はアスナにそう言った。

アスナ「・・・その前に、雅紀の治療をさせてください。」

真司「え？君が？できるわけないだろう。医者でも、看護師でもないのに。」

アスナ「できます。アスラ！」

アスラ『はいよ！』

すると、アスナが精神が引つ張られ、アスラが表に現れた。

アスラ「さーと。」

アスラは隣で眠っている雅紀を抱き起こして顔を近づける。

アスラ「雅紀、ごめんね。あたしとアスナ、アリスが早く助けに行けたらこんな傷つくことなかったのに。でも心配しないで。あたしが今、傷を治してあげるから。」

そう呟きながらアスラは雅紀にキスをし、同時に唾液とともに自身のエネルギーを与えた。

その光景を真司は顔を真っ赤にして驚いていた。

アスラ「ん・んん・んん・んん（雅紀・・起きて・・。）」「

いつもなら瞬時に回復するが、今回は傷が深いのか治るのに時間がかかっている。アスラは何度もエネルギーを与えて傷の治りを早めさせた。そして・・・

雅紀「ん・んん・んん・んんんっ！？」

傷が治ったのか、雅紀は目を開けて、自分にキスをしているアスラに驚いていた。

アスラ「雅紀・・。」

雅紀「なっ！？どうしてアスラが・んんんっ！！？／／／」

雅紀を見たアスラが笑顔で雅紀に唇を重ね、舌を絡ませていく。

アスラ「んん・レロ・んん・んん・んん・ハア・ハア・雅紀、やっと起きたあ・良かつたあ／／／」

雅紀「ハア・ハア・ハア・俺は・確か、王蛇にやられて・。」

アスラ「もういいんだよ、そんな事は考えなくて・・。今は、ゆっくりと愛し合おう／／／」

雅紀「むうっ！？／／／」

アスラは雅紀が目覚めたのが相当、嬉しいのか、雅紀の顔を抱きしめ、胸の谷間に沈ませてゆく。

真司「あゝゝ！ゴホンツゴホンツ！！そ、それはあ……俺の目の前でやらないでほしい／＼／」

そこへ顔を真っ赤にしている真司が止めに入った。

アスラ「うるさい。身を一つにしようとしているのに……。愛し合おうとしているのに……！」

アスナ『ふざけないで！！今はそんなこと言ってる場合じゃないでしょー！さっさと代わりなさい！！！！！！』

アスラ「そんな怒鳴らないでよあ……。全く……。いつもいつも邪魔されるあたしの身にもなってよねえ。」

そうぶつぶつ文句を言いながら、アスラはアスナと代わった。

雅紀「ブハア……。死ぬかと思ったあ……。」

アスナ「悪かったわね。」

真司「……。あのさ、君、もう傷は平気なのか？」

雅紀「え？ああ、はい。あの、もしかしたら包帯巻いてくれたのって真司さん？」

アスナ「そうよ。そしてアスラがアンタの傷を直したの。」

雅紀「そうか。ありがとうございませす。」

真司「いいって、いいって。それよりもだ。いい加減、教えてくれ

ないか？さっきの傷の治し方や傷の治りといい、不思議でなら
ないんだけど。」

雅紀「・・・わかりました。話します。」

雅紀は話した。自分達は別の世界から来た人間の事、自分達は仮面ライダーという者、この世界の敵の事を。

真司「・・・信じられない話だけど、さっきを見せられて、ウソだろつとは言えないな。」

雅紀「まあ、信じられないでしょうが、ホントの事です。」

真司「ミラーワールド・・・仮面ライダー・・・うん・・・どこかで聞いたような。」

真司は頭を抱え込み始めた。

アスナ「ねえ、あの人も以前は仮面ライダーなんでしょう？その時の事を教えなくてもいいの？」

雅紀「そうしてあげたいが、自分で思い出してもらいたい。俺が教えても、記憶が曖昧のままになりそうだから。」

真司には聞こえないくらいの音量で雅紀とアスナは話していると・

真司「じゃあさ、あの時の被害者の傷も、そのミラーワールドにいる奴らが？」

雅紀「そうです。手口も似ています。ですが、ミラーワールドは一度、なくなつたはずなんです。」

真司「なくなつた？」

雅紀「なくなつたというか、閉じられたというか、封印されたというか・一度はなくなり、モンスターも消滅したはずなんです。」

真司「じゃあ、そのモンスターが出てきたという事は・・・」

雅紀「誰かが封印を解いたか、蘇らせたのか。」

ソレを聞いた真司は顔を険しそうにした。

真司「結構、ヤバい事に首突っ込んでいるような気がするなあ、俺。」

雅紀「まあ・・・。ミラーワールドがなくなる限り、モンスターは生まれてきます。なんとかしないと・・・。」

雅紀は腕を組んで考えていると、服の裾を引っ張られた。

アスナ「雅紀、また無茶をするんじゃないよね？あたしは偶然ミラーワールドに入れたけど・・・あの時のライダーみたいなのがあるんでしょ？力を合わせらんないの？」

雅紀「合わせる事が出来るかもしれないが、ライダーが今、何人いるかわからない。13人なのは確かだが、ほとんどが不死になりたいたか、金持ちになりたいとか、強靱な体を手に入れたいたか望みがある人間ばかりだし・・・。」

アスナ「アリスなら、ライダーを召喚してアンタの援護ができるからいいけど、あたしは援護すらできない。アンタの役に立てないよ。」

アスナは潤んだ目を見せながらそう言う。

雅紀「アスナは十分、役立っている。現に、俺の傷を治してくれたし。」

アスナ「それはあたしじゃなくて、アスラよ！あたしは・・・あたしは・・・。」

雅紀「アスナ・・・。ちょっと、ごめん。」

アスナ「え・・・っ!？」

涙を流しそうになるアスナを、雅紀は抱きしめた。

アスナ「・・・。//」

雅紀「アスナは十分に、俺やアリスの事、守ってくれてる。だから、心配すんなよ。」

アスナ「・・・うん//」

アスナの返事を聞き、雅紀はアスナから離れた。

アスナ「アンタって、意外と大胆なのね・・・!//」

雅紀「あ、いや、その・・・こうでもしないと、アスナ、泣きそうだし・・・結構、恥ずかしかった／＼」

アスナ「ふんっ！恥ずかしかったんなら最初からやらなきゃよかったじゃない！（・・・まあ、おかげで泣かなかったから良いけど／＼）」

アスナ「雅紀ってばあ・・・そういう事するの、あたしが表に出てきたときにやってもらいたいわ！！」

真司「えくと・・・もう良いか？」

甘い空気を作っていると、真司が苦笑いしながら言う。

雅紀「あっ／＼／」

アスナ「・・・／＼／」

真司「結構やばいってことは分かった。だけど、それは警察に任せたら良いんじゃないか？」

雅紀「真司さん、きついこと言いますが、さっきの話ちゃんと聞きました？普通の人間では、ミラーワールドに入れないし、モンスターは何時、どの鏡からくるのか、わからないんですよ？」

真司「うう・・・。」

そうしていると・・・

キイイイイン・・・キイイイイイン・・・

という音が響いてきた。

真司「この音・・・どこかで・・・！」

雅紀「ミラーモンスターか！」

雅紀は立ち上がって、音が聞こえる方へ行き、近くの鏡を見ると・・・

雅紀「・・・羽根？」

ミラーワールドの上空に黄金の羽根が舞っていた。

雅紀「黄金の羽根・・・まさか・・・！」

雅紀は何か勘づいた様子。その時・・・

？『オオオオオオオ・・・！』

上空から何かが舞い降りた。それは、

雅紀「仮面ライダー・・・」「オーデイン」ッ！」

黄金の鎧を身に纏う仮面ライダーオーデインだった。

オーディン『優衣……優衣iiiiiiiiits!!!』

第108話（後書き）

プットティラ〜ノザウル〜〜〜スッ!!!

雅紀「いきなりどうしたっ?!?!?」

いやあ、昨日の仮面ライダーオーズでさあ、ついにプットティラコンボが登場したんだよ〜!

雅紀「プットティラ?何ソレ?」

聞かなくて良い!!ああ〜、あの強さは尋常ではないよ〜

雅紀「あ、そうかい。」

それよりもだ……。前回の話でデステイニーの新フォーム「ブラッディフォーム」を出させたじゃん?それで批判来た!

雅紀「いや、原因はお前だろ。」

まあ、たぶん。けどさ、突然過ぎるって感想が来たんだ。登場するのが。それに、人殺しはダメだと。

雅紀「それをやらしたのはお前でしょ。俺も、それに賛成だ。」

そんで、アスナを笑ってハッピーエンドは認められないって感想も来たのよ!

雅紀「俺の言っている事は無視かい。」

今回の感想ではほとんどユーザー名が黒字で書かれていた。まあ、真一さんやアクセルさんはわかるけど、他の人が初めて見るユーザーの人が来たよ。

というか、悪い点上げて改善案を出さない人もいたし。

それに、あえて名前出すけど、北崎さんの感想、結構バカにしているみたいな感想だよ。「あつれえ？」とか、「ブラッディフォームう？」とか、「くさあ。」とか、ほとんど敬語書いていないよ。なに？555の北崎をまねてんのかと思っただよ。

しかも、ほとんどが別のユーザー名を使っている人だし。

ほとんど内容同じだし、同一犯？かと一瞬思うよ。

雅紀「それはお前の文才力でしょ？そう書く人がいるくらい文才力ないってことだと思っよ？それに、返事も書かないからだと思っよ？」

うう……。まあ、ブラッディフォームについてだけど、あれはほとんど自我がない暴走フォーム。アスナが怒りを爆発させたり、相手を呪い殺すといった負の感情が爆発したりすると発動するようになってる。自分の意志ではコントロールは難しく、制限されません。前回、このフォームの説明を書いてなかったのは、すいませんでした。

雅紀「コレを見て、また批判とか、別作品の「やってきた場所はFateの世界!？」みたいに挑発の感想も出てくるぞ？」

うっ……。まあ……。な。だけどさ、俺はアスナをハッピーエンドにしたいんだ。

それなのに、俺のせいでアスナにとばっちりが……。

雅紀「うん、この後書きは作者の愚痴をこぼす場所へと変貌して
いつているよ。作者！気を取り直して次回予告！」

そうだな。今回は・・・オーディンVSディカオス・・・！そして・
・

雅紀「その先は言わない方がいいよ？楽しみが減るって感想来るし。」

はいはい。では、

雅紀・作者「お楽しみに~~~~~!!」

第109話（前書き）

今回は結構グダグダになります。しかも長い。
ではスタート。

第109話

雅紀「オーデインか・・・！」

雅紀達の前に立ちふさがる敵、仮面ライダーオーデインが現れた。

真司「コイツ・・・どこかで・・・」

アスナ「体が金色だし、羽根なんかとばして派手な登場の仕方ね・・・！」

ミラーワールドにいるオーデインを見ていたその時・・・

？「ハアアアッ！！！」

何者かがオーデインに向かって攻撃してきた。

オーデイン「グウウッ！」

それに気づいたオーデインはその場から消えた。

？「何！？」

何者かは驚き、その場で立ち止まると・・・

オーデイン「オオオオオオッ！！！」

？「なっ！？ぐあああっ！！！」

上空からオーデインが蹴りを食らわしてきて吹っ飛ばされてしまう。

アスナ「ちょっ！何！？あの黄金ライダーと戦っているのは！？」

その光景を見たアスナは声を上げて雅紀に聞いた。

雅紀「・・・いつか出るかと思っていたが・・・」

アスナ「雅紀、誰よ、アイツ！？」

雅紀「あのライダーは・・・仮面ライダー「ナイト」だ。」

そう、今オーデインと闘っているのは漆黒の鎧を身に纏ったライダー「ナイト」であった。

真司「ナイト・・・なんだ・・・俺は・・・あの黒いライダーを知っている気がする・・・！」

真司はナイトを見ながら、そう思った。

アスナ「ナイトって・・・まるで騎士ね」

雅紀「ああ、騎士だよ。だけど・・・」

ミラーワールド

ナイト『ウオオオオオオオオツ!!!』

『ソードベント』

かわって、ミラーワールドでは、ナイトはウイングランサーを召喚し、手にとってオーデインに突っ込んで行く。

オーデイン『ガアアッ!』

対するオーデインもナイトに向かって突っ込んで行く。

ナイト『ハアアッ!』

ウイングランサーを振り、オーデインを切り裂くが・

ガキンッ!

鳳凰召錫ゴルドバイザーで受け止められ、逆に押し返されてゆく。

ナイト『何！？』

オーデイン『優衣イイツ！！』

ナイトが驚愕している隙に、オーデインはゴールドバイザーでナイトを攻撃していく。

現実世界

雅紀「いや、使い方間違ってないか！？ゴールドバイザーは武器として使えないぞ！？」

真司「そんなことよりも・・・あのライダー、やられてんぞ！？」

状況を見ていた雅紀達は険しい表情を浮かべる。

雅紀「こうなったら・・・」

雅紀は何か決意した様子でディカオスドライバーを手にした。ソレ

を見たアスナは驚いて止める。

アスナ「雅紀！アンタは怪我治ったばかりでも体力消耗してんだよ！？そんな状態で戦う気！？」

雅紀「この場でミラーワールドに行けるの、俺しかいないでしょ？」

アスナ「だけど！何で雅紀が行く必要があるの！？あいつ等、ライダー同士で戦い合ってたんだよ？アンタが行く必要が何処に……」

雅紀「あのナイトは……もしかしたらだけど、話し合えるかもしれない。だから行く。」

アスナ「雅紀！」

雅紀「ごめんな。変身！」

『カメンライド・ディカオスッ！』

『カメンライド・リュウキッツ！』

雅紀はディカオスに変身した直後にD龍騎にKRした。そしてミラーワールドへと向かった。

アスナ「雅紀……」

真司「……」

ミラーワールド

ナイト『ぐ．．．!』

一方、ミラーワールドではオーデインの攻撃でナイトは胸を抑えていた。

オーデイン『オオオオッ!』

ナイト『くっ!』

オーデインがナイトに攻撃しようとしたその時．．．

雅紀『ハアッ!』

オーデイン『グオッ!?!』

D龍騎がオーデインに蹴りを食らわしたのだ。

雅紀『ふう．．．』

ナイト『城戸かつ！？』

D龍騎を見ていたナイトはD龍騎に向かってそう言った。

雅紀『……残念だけど、違うね。だが、その様子じゃ記憶が戻っているみたいですね。「秋山 蓮」さん』

D龍騎の言葉にナイトは驚いた。

蓮『城戸ではない……！それに、なぜ俺の名を！』

そう聞こうとしたその時……

オーデイン『オオオオオオオオツ！！！！』

オーデインが攻撃を仕掛けてきた。

雅紀『うおつとつ！くそつ！』

『アタックライド・ストライクベントツ！』

雅紀『これでも喰らえっ！！』

D龍騎はオーデインの攻撃を避けて、カウンターでドラグファンクで攻撃し、吹っ飛ばした。

オーデイン『グオオ！！』

吹っ飛ばされたオーデインはそのまま壁に衝突した。

雅紀『さてと・・・貴方に聞きたい事がある。以前のライダーバトルの記憶が消えているはずなのに、なぜ記憶が戻っている？』

D龍騎はオーデインがいた方に警戒しながら、ナイトに聞いた。

蓮『なぜ、教える必要がある？』

雅紀『いや、なぜミラーワールドが出現したのか・・・知りたくてな。』

蓮『・・・一週間くらい前だ。』

しばらく睨みあっていると、ナイトが言い始めた。

蓮『俺の部屋でカードデッキを見つけ・・・そして手に持った時に、以前のライダーバトルの時の記憶が蘇ったんだ。そして、その場にいたダークウイングと再び契約したんだ。』

雅紀『カードデッキを持って記憶が蘇るか・・・なんか、ご都合主義な展開だなあ。』

蓮『話したぞ・・・次はお前だ・・・』

そう言っているその時・・・

オーデイン『オオオオッ！！優衣イイイッ！！！！』

オーデインが叫びながらD龍騎に突っ込んできた。

雅紀『ぐっ！優衣って・・・まさか、「神崎 優衣」のことか！？』

オーデインの攻撃を避け、D龍騎はオーデインが言う優衣と名に反応する。

オーデイン『オオオオオツ！！優衣！優衣！優衣イイイッ！！！！』

雅紀『チッ！』

蓮『ハアアツ！！』

D龍騎に突っ込むオーデインにナイトが横からオーデインに攻撃をし、オーデインはナイトに攻撃された所を抑える。

雅紀『蓮さん。』

蓮『お前が誰かは知らんが・・・今は共闘するぞ。』

雅紀『・・・はい！』

お互い頷き、オーデインに顔を向ける。

オーデイン『オオオオオオツ！！！！』

『ソードベント』

オーデインはゴールドバイザーにカードを挿入し、ゴールドセイバーを召喚し、手に持つ。

雅紀『オオオツ！！！！』

蓮『ハアアッ！！』

二人はオーディンに向かって行くと同時に、オーディンも二人に向かって突っ込んで行く。

現実世界

アスナ「良かったあ。あのライダーは味方みたい。」

真司「……………」

鏡でD龍騎の状況を見ていたアスナがホッとため息を吐いているのと別に、真司はジッと戦いを見ている。

真司「（なんだ？何か、もやもやする。何か……忘れてるような……………」

ミラーワールド

雅紀『ウオオオオオッ!!』

一方、ミラーワールドでは、D龍騎とナイトがオーディンに攻撃を与えていつている。

オーディン『ガアアアッ!!』

それに負けじとオーディンはゴールドセイバーを乱暴に振り回していき攻撃を加えようとし、二人は距離をとった。

蓮『おかしい……。以前の戦いでは、奴はこんな戦い方をしなかったはず!』

雅紀『(さっきから、優衣、優衣と叫んでやがる……。それにオーディンの声……。もしかして……。蓮さん、奴の正体……。わかりましたよ!』

蓮『何? 正体だと?』

D龍騎の言葉にナイトは首を傾げた。

雅紀『さつきから優衣、優衣って言っていますよね？もしかしたらなんです、あのオーデインに変身している人は・・・神崎 士郎』
だと思えます。』

蓮『何！？』

D龍騎の言葉にナイトは驚いた。

雅紀『神崎 士郎は以前のライダーバトル終了と同時に完全にこの世から去ったはず。だとすれば・・・アレは神崎 士郎が優衣さんの事を思い過ぎるあまり生まれた、残留思念みたいなものと。』

蓮『そんな馬鹿な・・・』

雅紀『現に優衣って言い続けてますよ、アレ？』

信じられないとと思っているナイトにD龍騎はオーデインを指差しながらそう言った。

雅紀『それに、あのオーデイン・・・単調攻撃しかしてこないかも。瞬間移動みたいな事をさつきから全然してこない。』

オーデイン『グウウツ！！』

オーデインは荒い息を吐きながら二人を睨みつけるように見ている。

雅紀『今度こそ、完全に成仏してやる。』

D龍騎はオーディンに向かって突っ込んで行った。

現実世界

アスナ「結構、優勢ね。安心した。」

真司「いや・・・ダメだ・・・！」

アスナ「え？」

真司の言葉にアスナは首を傾げる。

真司「何か・・・仕掛けてるかも・・・！」

アスナ「仕掛けているって・・・」

真司の言葉に疑問を持っていると・・・

雅紀『ぐああああっ！！！！』

アスナ「っ!?!」

悲鳴が聞こえ、振り返ると……D龍騎がオーディンに切り裂かれていた。

アスナ「雅紀イイツ!」

ミラーワールド

オーディン「オオオオオツ!?!」

自分に向かってきたD龍騎に、オーディンは瞬間移動を繰り返して何度も切り裂いていく。

雅紀「ガハッ!ぐ・・単調攻撃しかしてこなかったのは・・できないふりをしていたからか!」

オーディン「ウウウウツ!」

蓮「コイツめっ!?!」

ナイトはオーディンの胸めがけて、ウイングランサーで突いたが・
オーディン『オオッ!』

蓮『なっ!?!ガハッ!!!』

逆に切り返されてしまい、D龍騎の隣に倒れた。

現実世界

アスナ「あぁっ!雅紀!!くうっ!このまま黙って見ているしかで
きないの!?!」

アスナは拳を強く握り締めながらそう叫んでいた。その間に、真司
は黙って目をつむっていた。

真司「(俺は・・・そうだ・・・俺は・・・!)」

そして、カッと目を開けた。

真司「思い出した・・・！」

アスナ「真司さん？」

真司「・・・近くにいらっしゃる？」「ドラグレッダー」。俺にもう一度、力を貸してくれ！」

そう叫ぶと・・・

？『ゴオオオオオオンッ！！！！』

鏡から赤い龍のモンスターが現れ、真司の体を包み込んでいき、辺りは赤く輝いた。

ミラーワールド

雅紀『ぐ・・・！』

蓮『くう・・・！』

一方のミラーワールドでは、D龍騎とナイトが倒れてしまっていた。

オーディン『オオオオオオツ！優衣イイイツ！！！！』

そして、二人に向かってゴールドセイバーを振りぬいた。その時……

『ソードベント』

？『ハアアツ！！』

横からオーディンに向かって何者かが攻撃してきた。

オーディン『グ……グググッ！！！！』

雅紀『まさか……』

蓮『お前は……！！』

その場にいる二人は目の前の者を見て驚いた。それは……

真司『俺も戦う！！！！』

ドラグレッダー『ゴオオオオオオツ！！！！』

赤き龍「ドラグレッダー」と、赤き仮面ライダー「龍騎」だった。

第109話（後書き）

雅紀「さてと、結構長いな今回。」

うん。

雅紀「それに前回のので、結構嫌われたな。お前。」

うん。

雅紀「ところでだ。なんでナイトを出した？」

いや、感想で、ナイトと龍騎のタッグを見たい人がいたから。

雅紀「そうかい。」

あとですが、今後のセックス描写は書かない事にしました。

雅紀「お〜！これであんな恥ずかしい思いをしないで済む！」

セックス描写は近いうちにノクターンノベルズで書きたいと思いま
すんで。

雅紀「はいいつ!？」

今回は、オーディンVS龍騎&ナイト!ついに・・・サバ

雅紀「それ以上は言うなあッ!！」

ではお楽しみに！

第110話(前書き)

今回もグダグダですが、よろしくお願ひします。
それではスタート。

第110話

真司『久しぶりだな、蓮』

蓮『ああ。』

雅紀『城戸さん、貴方、記憶が・・・』

真司『ああ。戻った。』

そう話していると・・・

オーデイン『オオオオオオオツ！』

『アドベント』

オーデインがカードを挿入すると、空から黄金の鳥「ゴルトフェニックス」が現れ、三人に光線を発射し、爆発が発生する。

真司『うおあつ！！？』

蓮『くっ！』

雅紀『うああつ！！！』

現実世界

アスナ「ちょっ！どうなったの!？」

現実世界では、アスナが一人混乱していると・・

雅紀「うああっ!！」

D 龍騎が鏡から飛び出してきて、倒れ、変身が解ける。

アスナ「雅紀!大丈夫!？」

雅紀「なんとか・・。」

アスナ「真司さんと、あの黒いライダーは！？どうなったの！？」
雅紀「俺だけ飛ばされたと思う。それに、切り札を二人にやったか
ら・・・。」

ミラーワールドではオーデインは三人がいた場所を擬視していると、猛烈な風が発生し、爆発で生じた炎を消した。そして、そこには龍騎とナイトがいた。だが、姿が変わっていた。二人はサバイブへと強化変身をしていたのだ。

現実世界

アスナ「あ！二人の姿が変わっている・・・雅紀、アレが・・・」

雅紀「ああ。切り札。爆発の直前、アドベントドライバーに龍騎とナイトのFKRのカードを入れたんだ。そしたら見ての通り。」

ミラーワールド

真司「蓮！あの子が与えてくれた力、無駄にするなよ！」

蓮「わかっている。やるぞー！」

二人は頷き合い、オーデインを見る。

オーデイン『オオオオオオオッ！』

対するオーデインはゴルトセイバーを持って二人に突っ込んで行く。二人はそれぞれの武器で防ぎ、逆に斬って、オーデインから距離をとった。

『シユートベント』

『ブラストベント』

二人はカードを挿入すると、ドラグレッダーとダークウイングが現れた。そして二体のモンスター体に変化していき、ドラグレッダーは「ドラグランザー」に、ダークウイングは「ダーククレイダー」になった。

ドラグランザー『ゴオオオオオッ！』

ダーククレイダー『キイイイッ！！』

真司『ハアア・・・ダアアッ！』

龍騎サバイブとドラグランザーでメテオバレットを、ダーククレイダーはダークトルネードをオーデインに向かって放つ。

『ガードベント』

一方、オーディンはゴルトシールドで防ぎ、ゴルトフェニックスはドラグランザーから放たれた炎の弾丸を撃ち落とすとしていく。すると・

『シユートベント』

蓮『弾はまだ残っているぞ!』

ナイトサバイブがダークバイザーツバイをダークアローへと変形し、オーディンに放った。

オーディン『ガッ!』

見事、オーディンの手に当たりゴルトシールドを落とした。

オーディン『グ・・・ガアアアッ!』

オーディンは咆哮すると、ゴルトフェニックスがオーディンの背中に合体し、大空を舞い上がった。

蓮『城戸、俺達も行くぞ!』

真司『しゃあっ!』

二人もそれぞれのモンスターに跨り、オーディンを追った。

オーディン『オオオオオオオッ!』

二人に気付いたオーディンは背中の羽根を弾丸のようにして放った。

真司『うおっ!?!』

蓮『驚いている場合か! 撃ち落として防ぐんだ!』

二人は撃ちおとしたり、斬り落としたりして防いだ。

オーデイン『オオオオオオオツ! 優衣イイイイイツ!』

『ファイナルベント』

オーデインはファイナルベントのカードを挿入し、黄金の光に包まれる。そして、光は巨大なゴルトフェニックスに形を変えていった。

真司『蓮! 俺達もいくぞ!』

蓮『ああ! 今の俺たちなら、負けない!』

『『ファイナルベント』』

ドラグランザー『ゴオオオオオツ!』

ダークレイダー『キイイイツ!』

二人もファイナルベントを挿入すると、二体のモンスターがバイクへと変形していく。

オーデイン『オオオオオオオツ!』

そうしている内に、オーデインは「エターナルカオス」を発動し突っ込んで行く。

真司『ダアアッ！！』

蓮『ハアアッ！』

龍騎サイバブは「ドラゴンファイヤーストーム」を、ナイトサイバブは「疾風斬」を発動し、突っ込んで行く。すると、炎と風が一つに融合し、光線となって突っ込んで行く。そして・

ドッゴオオオオツ！！

上空で大爆発が起きた。

真司『うおつとっ！』

蓮『ハッ！』

爆発の衝撃で二人は吹っ飛ばされるが、なんとか地面に着地。その時には二人は通常形態に戻っていた。

オーデイン『ウアアアアアアアアアアアッ！！！！！！』

すると、上空から炎を纏って地上に落下してくるオーデインが現れ、衝突した。その時クレーターを作り爆発を起こし、煙が舞う。煙が晴れると、そこにオーデインはおらず、代わりにオーデインの

鎧の一部があつたが、それは塵となって消えた。

真司『・・・終わったな。』

蓮『ああ。そのようだ。』

二人がホツとしていると・・・

真司『なっ!?!?』

蓮『うあっ!?!?』

突如、鏡の中へと吸いこまれていってしまった。

現実世界

真司「うああっ!?!」

雅紀「うおっ!?!」

鏡から変身が解けた真司が飛び出してきて雅紀にぶつかる。

真司「あゝ・・・痛てえ・・・。一体どうなって・・・」

雅紀「うゝ・・・あ、真司さん、あれ・・・」

雅紀が指差した方へ顔を向けると、ミラーワールドを映していた鏡は一瞬歪むと、もとの鏡に戻った。
ふと真司はカードデッキを見ると、カードデッキは最初からなかったかのように、消えてなくなった。

真司「何で?」

雅紀「もう、必要なくなっただんじやないんですか?」

真司「だけど、他のライダーは・・・」

雅紀「たぶん、真司さんみたいに強制的に戻されたんじゃないんですか?」

アスナ「そういえば、あの黒いライダーは?どこにもいない・・・」

真司「もしかしたら別の所にとばされたんだと思う。心配ないと思う。」

雅紀「そうですか・・・。そういえば、アリスが心配になっているはずだから、そろそろ戻らないと。真司さん、ありがとございまして。」

真司「あ、いや良いよ。君の力がなかったら勝てなかったし。こちらこそお礼言わないと。」

雅紀「いえいえ、それでは。」

アスナ「お世話になりました。」

二人はそう言っただけで真司の家を出て、何十分かかってアリス宅に帰ってきた。ドアを開けたその先には・

アリス「おかえり・・・」

背後に黒いオーラを漂わせているアリスの姿があった。

アリス「あの後、ディエンジェルはいなくなっちゃったし、アスナちゃんもいなくなっちゃったし、部屋は滅茶苦茶になるし、遅いから心配するし・・・こんな遅く帰ってくるって・・・。何？ラブホテルにでも行ってたの？」

ブツブツとつぶやいているが、とても怖い。

雅紀「あ、アリス・・・？その、怖いんだけど？」

アスナ「あ、あ、アンタ、怖すぎよ!？」

アリス「二人とも・・・気持ちいい思いしていたんだよね？私も気持ちよくなきゃ、不公平だよ。」

二人の言葉を見殺し、ユラユラと近づいてくる。

アリス「二人とも・・逝こうか？」

その時、触れてもいないのにドアが勝手に動き、閉めた。そして・

雅紀・アスナ「い・・いや~~~~~!!!!!!」

中から二人の悲鳴が聞こえたとな。

第110話（後書き）

さて・・・今回は遅いんで、寝ます。

雅紀「作者、次回予告！」

ただいま考え中・・・それでは・・・

雅紀「おい！」

第111話（前書き）

更新遅れて申し訳ございません。それではスタート。

第111話

アリス宅

雅紀「次はどんな世界だろうなあ。」

アスナ「ホント、あんたって毎回毎回ワクワクしてるわねえ。」

アリス「もうそろそろ次の世界に到着だよ。」

そう言っていると、次の世界に到着した様子。三人は家を出て辺りを見た。

アスナ「うーん、龍騎の世界とあんまり変わらないわね。いたって平和だ。」

アリス「だね。」

アスナとアリスがそう言ってる時、雅紀はボクッとしながら立っていた。

アスナ「雅紀？アンタ、どこ見てんのよ？」

雅紀「アレ」

アスナ「アレ？」

雅紀が指差した方を見ると、そこにあるのは東京タワーだった。

アスナ「東京タワーがどうかしたのよ？」

雅紀「いやさあ、俺、東京タワー見るの初めてなのよ。」

アスナ「始めてねえ……って！初めてなの！？」

雅紀「ああ。俺は東京出身じゃないんだ。修学旅行で此処に来るつもりだったんだけどね……」

アスナ「あ……」

アスナはしまったと口を閉ざした。

雅紀「まあ、気にするなよ。このあたりを見てみようぜ。」

アスナ「ええ。そういえば、あたしが行ってきた世界にも東京タワーがあった気がするわよねえ。もしかして、見てなかったとか？」

雅紀「……すみません。」

雅紀はそう言いながら歩きはじめ、二人も雅紀に着いて行った。

数十分後

アスナ「ホント、平和だわ。」

雅紀「そうだなあ。あ、もう東京タワーが近くに・・・」

そう話していると・・・

ぐぎゅづるるる・・・

という音が聞こえた。アリスとアスナは音がした方を向くと、顔を赤くしている雅紀がいた。

アスナ「もしかしてアンタ、お腹すいたの？」

雅紀「あうう・・・／＼／」

アリス「じゃあ、近くのお店で食事しよう。えーと、お店、お店は・・・」

アリスはお店がないか探すと、左に料理店があった。

アリス「あそこにしよう。」

アスナ「そうね。」

雅紀「うん。」

三人はそう言いながらその店に入って行った。その店の看板には「Bistro la Salle」と書かれていた。

？「いらっしやいませー」

店に入ると、一人の女性従業員が三人に近づいてきた。

？「何名様ですか？」

アリス「三名です。」

？「わかりました。それではこの席でお待ちくださいーい」

女性従業員に連れられ、席に座った。すると、雅紀は一人女性従業員の方に顔を向けていた。

アリス「雅紀？どうしたの？」

雅紀「え？何が？」

アスナ「さつきからあの従業員ばかり見てたからよ。まさかアンタ、あたし達という者がいながら・・・」

アスナはそう言いながら雅紀を睨み、同じくアリスも、アスナの一言により雅紀を睨んだ。ソレを見た雅紀は慌てながら、言った。

雅紀「違う違う！そんなんじゃない！」

アスナ「だったら何なのよ!?!」

雅紀「いやさ、俺はあの人の事知っているんだ。」

アスナ「は？どういう事よ？教えなさい！」

雅紀「まあ待ってよ。あの人の名前は「高鳥 蓮華」。元「ZEC T」の隊員だ。」

アリス「ZECTって事は、この世界は・・・」

雅紀「そう。「カブトの世界」。この店と蓮華さんを見てわかった。」

アスナ「出たよ、オタク知識。後、この店って事は物語に出てたの？」

雅紀「うん。」

そうしていると・・・

蓮華「あのく、もうご注文は決まりました？」

先ほどの従業員、蓮華が三人に話しかけてきた。

アリス「あ、私達まだ何にするか決めてない！」

雅紀「俺はもう決めた。」

アスナ「早っ！？話している最中に!？」

雅紀「うん。すみません、この「HIYORIMIランチ」ひよりみをください。」

アリス「あ、私もそれにする！」

アスナ「あたしもそれにするわ。」

蓮華「はい、かしこまりました。ひよりさん、HIYORIMIランチ三つ、オーダー入りました。」

ひより「うん、わかった。」

三人の注文を聞いた蓮華はキッチンにいる女性「日下部 ひより」に声をかけ、ソレを聞いたひよりは料理を作り始める。

蓮華「少々、お待ちください。」

蓮華はそう言いながら他の客の所へ行った。

アスナ「ってことは、アンタはあのキッチンにいる人も知ってるの？」

雅紀「ああ。日下部 ひより。この世界の主人公、また、仮面ライダーカブトに変身する人「天道 総司」の妹さん。」

ソレを聞いたアスナは疑問に思った。

アスナ「ちよつと待ってよ。あの人の苗字は日下部なのに、総司って人の苗字は天道よ。どうということ？」

雅紀「ああ、天道さんは子供の時、この世界の敵「ワーム」より前にいた「ネイティブ」に家族を殺されたんだ。その後、おばあちゃんに所に住んだんだ。その天道の苗字がおばあちゃんの苗字。本当の名前は日下部 総司。」

アスナ「じゃあ、家族を殺されたっていうけど、現に妹さんは生きてるわよ？」

雅紀「ネイティブは擬態能力があるんだ。その人の姿、記憶までも・・つまり、その人自身になるんだ。天道さんの両親も殺されて、擬態された。その時にお腹の中に赤ちゃんがいたんだ。その子が・・」

アリス「あそこにいるひよりさんってわけだね。」

雅紀「そういうこと。」

アスナ「じゃ、じゃあ、そのネイティブってのから生まれたんでしょ？てことはあの人も・・。」

雅紀「ネイティブ・っていうよりもワームだな。名前は「シシーラワーム」。だけど、大丈夫だよ。あの人は人間として18年・いや19年間生きてきたんだ。悪意や破壊本能はない。」

アスナ「その事、本人は知ってたの？」

雅紀「ああ。知っている。戦いの中でな。自分は生きてはいけない

と思つて、一度は時空間の狭間で生きていこうと思つたんだが、天道さんに言われて現在、こういう風になっているわけ。」

アスナ「ふん。」

雅紀「アスナ、怪人は全部が悪じゃないんだ。訳ありで怪人になつてしまった人もいるんだ。」

アスナ「わかつてるわよ。」

そう言っていると・・・

蓮華「お待たせしました。HIYORIMIランチです。」

蓮華がHIYORIMIランチを持ってきた。三人はそれを受け取る。

アリス「これがHIYORIMIランチだね。おいしそう。」

アスナ「うん、まるで高級料理店に出てきそうな形ね。」

雅紀「確かに。ま、此処は洋食店だし。」

HIYORIMIランチを見て三人はそれぞれ呟きながらそれを入れた。

アスナ「おいしい！」

アリス「そうだねえ。おいしいよ。」

雅紀「うまつ！」

三人は絶賛なようで、次々に口に入れて、あっという間に完食した。

雅紀・アリス・アスナ「「ごちそうさまでしたっ！」」

最後は手を合わせてそう言った。

雅紀「いやあ、HIYORIMIランチ、うまかったあ。」

アリス「だね」

アスナ「コレ作ったの、あの人よね？一流・・・いや、超一流な気がするんだけど・・・」

そう言っていると・・・

バーンッ！

？「ひよりお姉ちゃんっ！手伝いに来たよ！！」

勢いよく扉が開き、一人の女の子が入ってきた。

ひより「あ、樹花ちゃん、おかえり・・・」

樹花「ちゃんはいらないよ。ひよりお姉ちゃん。」

ひより「・・・そうだね。もう学校終わったの？それに部活は・・・」

樹花「今日は職員会議だからないんだよ。」

と二人は仲良く話していた。ソレを見た三人は・・・

アスナ「あの子も？」

雅紀「あ、あの子は普通。義理の妹さん。名前は「天道 樹花」。
確か、渋谷隕石の時に天道さんに助けってもらっておばあちゃんに引き取ってもらったんだ。」

アスナ「なんだか、その総司さんって人凄いわね。」

雅紀「そりゃそうさ。なんてったってあの人は「天道を往き、総てを司る男」だもん。」

そう言いながら、雅紀は右手の人差し指を上へ向けた。

アスナ「何？その天道を往きって・・・」

雅紀「天道さんが自分でそう言っているんだ。因みに樹花ちゃんの方は・・・」

そういつていると・・・

ひより「じゃあこれ、頼むね、樹花。」

樹花「分かったよ この「天の道を往き、樹と花を慈しむ少女」天道 樹花にお任せ」

人差し指を上になさしながら、樹花はエプロン姿でお客様にHIYOR IMIランチを持って行った。

雅紀「ってこと。」

アスナ「あ、そう。後、何であたしらの時だけ呼び捨てであの樹花って子はちゃん付け？」

雅紀「だってあの子は俺らより年下で13歳だし……ってそうだった。この世界はカプトの物語の一年後の世界だから、あの子は俺等と同じ年じゃん。」

アスナ「そうなのねえ……」

雅紀がそう言うと、アスナはつまらなそうに呟いた。というかため息を吐いた。

雅紀「さてと、会計を済ませるか。アリス……ってあれ？アリスは？」

アスナ「もう会計済ませに行ってるわよ？」

アスナが親指で後ろをさしながら言い、後ろを見ると、ひよりにお金を渡しているアリスの姿があった。

雅紀「早いなあ。」

アスナ「早いよねえ。」

そう言っていると、アリスが戻ってきた。

アリス「会計済ませてきたよ。じゃあ、東京タワーに行こうか。」

雅紀「え？」

アリス「雅紀は東京タワーをちゃんと見てないんだものは平和だから、怪人が出てくる事はないし、行こう。」

雅紀「・・・だな。行こうか。」

蓮華「ありがとうございます。また来てくださいね。」

雅紀「あ、はい。ごちそうさまでした。」

三人は扉を開けて、店から出て行った。

第111話（後書き）

雅紀「さてと、何でこんなに時間がたったんだ？」

いやあ、実はカブトと響鬼の物語をユーチューブで見てたんだあ。それとWikiで調べたりとかして。

雅紀「で、こんなに時間がたったと。」

そのとおりいつー！

雅紀「なにその台詞だけ伸ばしと声色が変になるわけ？」

鴻上会長のマネだよ。ハッピーバースディイッ！！！！！

雅紀「うるさい。んでもってハッピーバースデーでもないだろう。」

てへッ

雅紀「てへッ じゃないよ。お前は前回ののでかなり嫌われてんだから真面目にやれよ。」

わかってるよ。今度はパワーバランス問題をなくすように、なおかつ物語の展開をやめないようにするよ！

雅紀「・・・おい、パワーバランス問題はわかるとして、何で物語の展開が早いのか？」

まあなあ・・・。なんだか急ぎ過ぎたのかなあ。読者も不審に思われ

ていたようだ。

雅紀「はぁ・・・」

ため息吐くなよ。こっちまで吐きたくなるよ・・・はぁ・・・。

雅紀「まあいいや。。。じゃ、次回予告。」

うくん・・・たぐだぐま考え中。。。かな？

雅紀「クインテットかつ！ホント、まじめにやれよ！！！」

すみません、てへッ

雅紀「だ・か・ら、いちいちてへッ　はいらねーんだよ！！バカ野郎！！！！！！！！！」

ドシゴオオオオオンッ！！！！

あっぎゃああああああああああっ！！！！？

第112話

B i s t r o l a S a i l e e から出た雅紀はというと・・・

雅紀「お~~~~！あとちょっとで東京タワーに着く！！」

現在、東京タワーから少し離れたの道路にいた。ちょっと遠くにある東京タワーを見つめながら、雅紀はそう叫んだ。

アスナ「アンタねえ、道のど真ん中で叫ぶんじゃないのー！」

雅紀「あうっ！」

興奮している雅紀の頭にアスナの拳が飛んできて、避けらる間もなく、当たってしまふ。

アリス「まあまあ、アスナちゃん、雅紀の気持ちわかるでしょ？」

アスナ「まあ・・・そうだけどさあ、あたしらが恥ずかしいよ・・・。」

アスナが周りを見ながらそう言う。周りの人達が温かい目で三人を見ていたからだ。

アリス「うん・・・まあ、そこは仕方ないよ！」

アスナ「はあ・・・。」

明るく元気に言うアリスとは別に、アスナはため息を吐いていた。

雅紀「東京タワーよ、待ってる・・・今見に行つてやるからなあっ！」

復活した雅紀は、東京タワーを指差しながらそう言った。

アスナ「・・・アンタってそんな性格してた？」

アスナの問いに誰も答える者はいなかった。

雅紀「おおっ！おおっ！！もう、そこに東京タワーが！」

アスナ「だからさあ、アンタ、テンション高すぎ・・・」

もう目の前に東京タワーが見え、雅紀は目を輝かせながらそう言った。

アリス「フフ　雅紀、東京タワーは逃げないよ？」

アスナ「もしかして、あの人も？」

雅紀「ああ。この世界でもう一人の主人公・・・そして仮面ライダー「ガタツク」に変身する人「加賀美 新」だ。」

アスナ「どう見ても、普通のお巡りさんにしか見えないわよ？」

雅紀「まあ・・・否定できないが・・・因みに、あの人のお父さん「加賀美 陸」は警視總監なんだよ。」

アスナ「じゃあ、お偉いさんの息子ってわけ？」

雅紀「そう。後、ZECTを創設した人も陸さん。」

アスナ「どんだけ凄いのよ・・・」

アスナはこの世界に来て驚きの連続であった。

アリス「じゃあ、あの人も元ZECTの？」

雅紀「ああ、隊員。結構な熱血漢の持ち主なんだよ。」

そう言っていると、加賀美が戻ってきた。

加賀美「はぁ・・・、天道も今頃何してんのかなぁ。」

一度背伸びをして、交番の中へと消えて行った。

アスナ「天道さんとは会ってないのね。同じライダーなのに・・・」

雅紀「天道さんはZECTに所属していないからな。何か特殊な事がない限り。ついでに単独行動が好きらしいし。しかも、日本にいないんだよなあ。」

アリス「日本にいないって？」

雅紀「ネイティブとの戦いの後、外国へ行ったんだ。たしか・・・エッフェル塔がある国。名前、忘れたけど・・・」

アスナ「フランスじゃん。」

雅紀「あ、そっか。ってか、よく知ってたなあ。」

アスナ「地理の教科書に載ってたわよ？」

雅紀「・・・すみませんでした。」

アスナの言葉で若干、へこむ雅紀。

アスナ「謝る事ないでしょ？」

雅紀「うう・・・」

アスナ「ハア・・・で、何で天道さん、フランスに？」

雅紀「・・・世界を守る・・・というか、見てみたい・・・からかな？」

アスナ「世界？」

雅紀「ああ。世界・・・ま、俺の予想だけど。」

アリス「家族はどうするんだろ？」

雅紀「大丈夫だと思ってるからじゃないかな？まあ・・・あれだ！」
傍にいない時は、もっと傍にいる」ってこと。」

アスナ「何そのセリフ？」

雅紀「気にしないでくれ。さあ、目指せ、東京タワーだっ！」

そう言って、雅紀は東京タワーへと走って行った。

アリス「あ、雅紀、待ってよ〜〜！」

アスナ「置いていくなー！ー！！！」

二人も東京タワーへと走って行った。

東京タワー

雅紀「とうとう、俺は！東京タワーに来たんだー！ー！ー！ー！ー！
！！！！！」

アスナ「だから！アンタでかい声出すんじゃないわよっ！！！」

ゴンツ！

雅紀「はうっ！！」

興奮しながら大声で言う雅紀をアスナは拳骨して黙らせる。近くにいた人たちはソレを見て温かい目で見ていた。

アリス「まあまあ、アスナちゃん、その辺で。」

アスナ「ハア・・・ハア・・・ってか、アンタは息上がらないのね・・・」

此処まで全速力で来た三人で、アリスは息を上げずに平然としていたのだ。

アリス「だって私、悪魔だし。人間よりも身体能力が上なんだよ？」

アスナ「アンタの体力が羨ましいわね。」

アリス「アスナちゃん、そんなに疲れるのならアスラちゃんと交代すればよかつたんじゃないかな？アスラちゃんの方はサキユバスの力を解放できるし。身体能力も・・・」

アスナ「・・・その手もあったわね。今になって思いついたわ・・・」

」

ソレを聞いて、アスナは脱力してしまった。

雅紀「ああ、東京タワー……！この目に焼きつけてやるうっつ！」

一方の雅紀は既に復活し、東京タワーを見つめていた。

アリス「そんなに嬉しかったんだね。カメラとか持ってくれば良かったかも。」

アスナ「今、思い出しても仕方ないでしょ。」

二人も雅紀の隣に来て東京タワーを見つめた。

雅紀「（龍斗……おまえとも見たかったな……）」

雅紀は先ほどの興奮を消し、少し寂しそうな瞳を見せていた。それを見たアリスは雅紀に声をかけた。

アリス「雅紀？どうしたの？」

雅紀「……いや、何でもない。気にしないでくれ。」

アリス「うん……。」

雅紀はそう答えるが、寂しい表情を見せているため、アリスは心配でならなかった。

アスナ「ねえ、何時まで東京タワーを見る気？というか、この後どうするのよ？」

雅紀「うん．．どうしよう?」

アスナ「いや、あたしに聞かれても．．。」

アリス「このまま東京タワーを見るだけっていうのも飽きちゃうよね? だったら、いろいろと有名な場所とか見てみようよ。」

雅紀「そうだなあ。うん．．じゃあ、雷門に行こうかな。」

アスナ「賛成。行きましょう。」

アリス「だね」

三人はその場を後にして行った。

第112話（後書き）

「またも！プットツ！テイラ〜ノザウル〜スッ！！」

雅紀「いきなりどうしたよ？」

「いや、言ってみたかっただけ。」

雅紀「あ、そう。」

「そう言えば、6月の中旬に食玩コンボチェンジオーズの第3段が売られるんだとさ。」

雅紀「ほえ〜。」

「しかも、その第3段はシャウタ、プトテイラ、そして・・・タマシィだあつ！！」

雅紀「タマシィ？何ソレ？タマシィって「魂」のこと？」

「そのとおりイイイツ！今年の映画で出てきた新コンボだつ！！」

雅紀「どんなの？」

「むふふ〜 聞いて驚くなよ！コンボに使うメダルはっ！なんと！タカ、イマジン、シヨツカーなのだあつ！！」

雅紀「タカ、イマジン、シヨツカーって・・・タカは普通に鳥だよね？なんでイマジンができて最後、シヨツカーなのさ？」

・・さあなっ！

雅紀「おいっ！」

だって仕方ないだろう！3・11の東日本大震災で映画館ほとんど、油混じった津波でやられたんだからっ！見れなかったんだからなっ！！

雅紀「まあその・・どんまい。」

ああっ！で、話は戻すが、そのタマシーコンボはレアなのだよ！レアっ！

雅紀「はあ・・。ま、フアングジョーカーみたいになつかテレビで出るだろう。」

いや、たぶんはそれはないぞ？だって、イメージは電王だし、ショットカーは一号・二号の敵なんだぞ？

雅紀「そうなのか？」

そうなのよ。でだ、そのタマシーと最強で暴走コンボプトティラをつかった亜種形態にできる！例えば、タカ、イメージン、ティラノとか。

雅紀「そうなのか！凄いねえ！」

だが・・プトティラはメダガブリューがついてくるのかなあ。あとシャウタにも。ウナギウィップ。

雅紀「ついてこないのかよ?」

以前のタジャドルではタジャスピナーについてこなかったからなあ。今回も出ないかも。ああっ! サゴーズの腕にメダガブリューを握らせて遊ばせようとしたのにイイッ!

雅紀「そ・・そうなのか。」

あ、そう言えば、他にも! 新しい映画で新しいコンボが出るんだよねえ。たしか、「ブラカワニ」ってやつ。

雅紀「ブラカワニ?」

ああ。コブラ、カメ、ワニのメダルを使った爬虫類系のコンボだっ!

雅紀「コブラとワニはわかるけど・・何で亀?」

そこは、防御力アップのためだっ! 防御しつつ攻撃って戦法だろうよ! しかもだ! その映画には! なんと! 暴れん坊将軍が出るのさっ!

雅紀「暴れん坊将軍って・・あれだろ? 確かマツケンさん主演の。」

そうっ! マツケンサンバツ のマツケンさん。舞台が江戸だからねっ!

雅紀「江戸ねえ。タイプスリップ?」

そこはわからん。だが、楽しみだあッ!

雅紀「・・・あのさあ、こんなこと書いて大丈夫なのか？これを楽しみにしている人にネタばれ言ってる？」

・・・ごめんなさいっ！でもっ！たぶん知っている人もいるかも・・・。

雅紀「そうかい。でだ、はやく次回予告。」

・・・たぐだいま・・・

雅紀「考え中・・・じゃあねえだろうな？」

あうあうあう・・・

雅紀「クインテットネタはもうやめなさい！前の後書きで十分だ！」

ごめんなさいイイツ！！

雅紀「まったく・・・まあ、次回も楽しみに。」

待っていてください！

第113話

前回、東京タワーを後にした雅紀達は・・・

雷門

雅紀「来ましたっ！雷門！！」

現在、雷門前にいた。

雅紀「写真とかで見たけど、やっぱりでかいなあ。コレ。」

雅紀は見上げながらそう言った。

アスナ「アンタ、はしゃぎ過ぎなんだけど・・・」

アリス「あはは。」

二人は雅紀を見つめながら、そう言うが、雅紀は聞く耳持たずであった。

雅紀「はあ、良かった。良かった。」

そして、雅紀は見終えたのか、戻ってきた。

アリス「どうだった、雅紀？」

雅紀「ああ。良い思いでができたよ。ゆっくりできたし。」

アスナ「で、どうするの？まだ他にあるの？」

雅紀「うん・・・せっかくだし、なにかお土産でも買っていいから。」

アリス「そうだね。．．あっ、アレなんかどうかな？」

アリスが指差した方には、雷門の形をしたストラップだ。

雅紀「じゃあ、アレにしよう。すみませーん、この雷門のストラップを三つください。」

男性「まいど！はいよ。」

雅紀「ありがとうございます。」

会計を済ませて、雅紀は二人の元へ戻った。

雅紀「買ってきた。はい、二人とも。」

アリス「あ、これ．．」

アスナ「あたしたちの分も買ってきてくれたの？」

雅紀「ああ。」

アリス「ありがとうね、雅紀／／／」

アスナ「まあ．．大事にするわ／／／」

二人は頬を染めながら雅紀に礼を言った。

アリス「で、この後はどうする？」

雅紀「いや、もう流石にないかもな。家に戻ろう。二人とも、振り回しちゃったし。ごめんよ?」

アリス「ううん。私は平気だよ。良い思い出できてよかったね」

アスナ「まあ、振り回されたはされたけど・・・別に、アンタになら・・・振り回されても・・・／＼（ボソツ）」

申し訳なさそうに言う雅紀にアリスとアスナはそう言った。

雅紀「じゃ、行くうか。」

アリス「うん」

アスナ「ええ。」

三人はその場を後にした。

「「「・・・・・・・・「「「

その時、三つの人影が雅紀達を見つめていた。

住宅街

雅紀「ん？」

雅紀達は家に戻っていると、何かが近付いてきた。

アリス「えっ!？」

アスナ「ウソでしょっ!？」

二人はをソレを見て驚いた。それは・・・

雅紀「……」

アリス「……」

アスナ「……」

目の前に自分達がいたのだから。

アスナ「なっ、なっ、何がどうなってんのよ！？ドツペルゲンガーか何かっ！！？」

アリス「いや、違うよ……！」

雅紀「アリスの言う通り……コイツらは……！」

パニックになっているアスナとは別に、アリスと雅紀は身構える。すると……

雅紀「俺達は……」

アリス「貴方達になる……。」

アスナ「だから……アンタ達は……」

雅紀・アリス・アスナ「「消えるッ！！！」」

不気味な声でそう言った途端、三人の体が緑色の光に包まれ、次の瞬間、三人は緑色の異形へと姿を変えた。

アリス「やっぱり・・・」

雅紀「『ワーム』か・・・しかも『サナギ体』っ！」

ソレを見て、雅樹とアリスは武器を持った。その時、ワームが一斉に攻撃仕掛けてきた。

雅紀「よっ！はっ！」

アリス「はっ！ハアアッ！！」

アスナ「うわっ！くっ！」

雅紀とアリスは武器を使ってワームと闘い、アスナは拳を蹴りでワームと闘う。

ワーム『ゲギユウウツツ！』

雅紀「はい、おしまいっ！」

雅紀はアドベントドライバーガンモードをワームに向けて発射し、怯んだすきにソードモードにして一刀両断した。

アリス「ハアッ！！」

アリスはダイダークドライバーで一気にワームの体をバラバラに切り裂いた。

アスナ「このっ！ハアアッ！」

アスナは思いっきり拳を振り、ワームを吹っ飛ばした。

アリス「うわあ、アスナちゃん、変身しなくても強いね。」

アスナ「剣道で鍛えてるからね！これぐらい・・・！」

雅紀「だが、まだ生きている。」

雅紀の言う通り、ワームはまだ生きていた。ワームは立ち上がり・

ワーム『覚えているッ！』

一瞬、アスナの幻影が映ったかと思えば、フラフラしながらワームはその場から逃げて行った。

アリス「逃げちゃったね。」

アスナ「一瞬、あたしが映ってなかった!？」

雅紀「ワームの能力さ。店で言っただろう？擬態するって。」

アスナ「ああ。そうね。ごめん、さっき混乱してたから、思い出せなかった。」

アリス「まあ、いいよ。自分と同じ姿をした人がいきなり目の前にいるのは誰でも驚くよ?。」

雅紀「・・・。」

二人が話している間、雅紀は険しい表情していた。ソレを見たアリスは声をかける。

アリス「雅紀？どうしたの？」

雅紀「・・・ワーム・・・」

アスナ「ワームがってさっきの怪人よね？それがどうしたのよ？」

雅紀「この世界にはもう、ワームはいないはずだ・・・！なのに、何でこの世界にいる？生き残りでもいたのか？いや、あの時、ボスのカッシスが全てのワームを呼び出したはずだ！なのに、なぜ・・・！？」

雅紀は頭を抱えながら考え込んでいると・・・

「キヤアアアアッ！！」

「助けてええエエエッ！！」

近くから悲鳴が聞こえてきた。

アリス「悲鳴が！」

アスナ「さっきの奴ね！今度こそっ！」

雅紀「くっ！」

雅紀達は急いで向かった。

ワーム1「グギユウウウツ！！！」

ワーム2「ギユルルウウウ！」

現場では、ワームが何体も出現し、人間を虐殺していった。

加賀美「逃げてくださいっ！早くっ！！！」

そんな中、加賀美が逃げている人たちを避難させていた。

加賀美「何であいつ等が生きているんだっ！あの時、剣がっ！」

ワーム3『グルルルウツ！！』

加賀美が考えている中、一体のワームが加賀美に向かってきた。

加賀美「くっ！」

加賀美は拳銃を手にとって発砲。ワームはそれに当たるも、怯まず加賀美に向かってきた。

加賀美「くっ！！オリアアッ！！」

加賀美も突っ込んで行き、ワームに蹴りを食らわした。

ワーム4『ギユギユウウツ！！』

すると、また加賀美に向かって突っ込んで来た。それも加賀美は銃で迎え撃つ。

加賀美「くっ！ベルトがないんじゃ、ガタックに変身できない！だがっ！」

加賀美はそう言いながら、近づいてくるワームを殴り倒した。

加賀美「俺は、何が何でも！人の命を守るっ！守ってみせるっ！！」

そう叫びながら銃を連射。だが、弾量がゼロになってしまった。

加賀美「くっ！」

ワームに突っ込もうとしたその時・

？「やめろっ！！」

という声が聞こえた途端、ワームの胸に弾丸が当たり、ワームは立ち止まる。

雅紀「ここからは俺達が相手してやるよ！」

そこへ、雅紀たちが来た。

加賀美「君たちは！？つてか、危ないから逃げろっ！！」

雅紀「いや、大丈夫ですよ。サナギ体なら、変身せずとも戦えます！」

そう言っている中、一体のワームがとんでもない熱量を発した。

加賀美「脱皮だっ！」

雅紀「させるかっ！！」

雅紀はアドベントドライバーを連射させ、そのワームに当てた。

ワーム「グギウウッ！」

そのワームは茶色い煙を上げて爆発した。

雅紀「脱皮前に瞬殺だ。」

そう言いながら、アドベントドライバーで次々とワームに当てていく。

アリス「ハアアアッ！」

ワーム達が怯んでいる隙に、アリスはディダークドライバーで瞬時に切り裂いていった。

加賀美「ウソだろ・・・！？あんだけいたのに・・・二人で・・・！？」

加賀美はそれに驚くしかなかった。

雅紀「立てますか？」

そう言っていると、雅紀が手を差し出してきた。加賀美はそれを無言で取り、立ち上がる。

加賀美「助かった。だけど・・・お前ら、何で？ってか、その武器は？」

加賀美はアドベントドライバーを指差しながら聞いてきた。

雅紀「いやぁ・・・それは・・・」

そう話していると・・・

アリス「雅紀！アレ！」

雅紀「っ！」

アリスが声を上げて前を指差し、雅紀は指差した方へ顔を向けると、そこにあつたのは……

雅紀「オーロラ……？」

オーロラであつた。そうしていると……

ワーム『ギュギュウウツ！』

オーロラからワームが現れたのだ。

加賀美「なっ！？」

雅紀「……これで納得したぜ……。」

加賀美が驚いている中、雅紀はオーロラを睨みつけながら呟く。

雅紀「あのオーロラから、この世界に来ていたのか！」

アリス「どうする？結構いるよ？」

ワームの数は約10体。ソレを見た雅紀は……

雅紀「一気に叩く。変身だ！」

アリス「うん！」

アスナ「わかったっ！」

頷くと、雅紀とアリスはカードを出し、アスナは腰からベルトを出す。

雅紀・アリス・アスナ「っっ変身っ！」

『カメンライド・デイカオスッ！』

『カメンライド・デイダークツ！』

三人は仮面ライダーへと変身した。

雅紀『行くぜっ！』

三人は、ワーム達に突っ込んで行った。

第113話（後書き）

雅紀「さと、いきなりの急展開だぞ、作者。」

・・・

雅紀「以前は展開を早めないようにするんじゃないの？」

「すみません。そろそろバトルも出した方が良くないかと思いまして・・・」

雅紀「あのねえ・・・。」

「本当に申し訳ございません！」

雅紀「まあ、いいや。次回予告したら？」

「ああ。今回は・・・その・・・まだ、構成中！それではっ！！」

雅紀「おいつ！！連続じゃないかっ！待て、作者アアツ！！！！」

第114話

加賀美「何者なんだよ・・・あいつ等。ゼクターを装着せずに・・・」

加賀美は目の前で起きている戦闘を見ていた。

雅紀「ハアッ！」

アリス「ハッ！」

アスナ「タアッ！」

その間にも、ディカオス、ディダーク、デステイニーとワームの戦いは続いていた。次々とワーム達を倒していくディカオス達。だが・

ワーム「ゲギユウウウツッ！！！」

オーロラからワームが出現してくる。さらには・・・

ファンガイア「ウウウウツッ！」

アンノウン「ハアアアア・・・！！！」

ファンガイアとアンノウンまで出現してきた。

加賀美「アレは・・・今まで見たことないタイプだ・・・！」

アリス「ファンガイアにアンノウンまで・・・！きりがなし！」

雅紀『一気に倒すぞ!』

デйкаオスとディダークは頷き、カードを取り出す。

『『アタックライド』』

『ブラストツ!』

『スラッシュュツ!』

雅紀『オオオオツ!!』

アリス『ハアアアツ!!』

デйкаオスがワームとファンガイアを連射で倒していき、ディダークはアンノウンを切り裂いて行った。その時・・

ワーム1『グギユウウウツ!』

ワーム2『ガアアツ!』

ワーム3『オオオオオツ!!』

3体のワームから異常な熱が放出し、そして体が剥がれていった。ワームはアラクネアワーム・ルボア、フラバス、ニグリティアへとなったのだ。

加賀美「脱皮した!クロックアップしてくるぞ!気をつける!!」

アラクネアワーム達を見た加賀美はディカオス達に叫ぶが、次の瞬間・・

雅紀『がつー！』

アスナ『うあつー！』

ディカオスとデステイニーが上空に吹っ飛ばされた。アラクネアワーム達がクロックアップで攻撃してきたのだ。

雅紀『くっー！そんなの、こっちにも似たようなのがあるぜ・・！』

『アタックライド・ソニックッー！』

ディカオスはクロックアップと同等の高速移動、ソニックを使い、アラクネアワーム達に対抗。一斉に攻撃を仕掛けてくるアラクネアワーム達をディカオスはカウンターを使って逆に攻撃を与える。

雅紀『トドメだ！』

『ファイナルアタックライド・デイ・デイ・デイ・デイ・ディカオスッー！』

雅紀『タアアアアアッー！！』

ディカオスは必殺技ディメンションブレイカーで一気にアラクネアワーム達を粉碎した。

アスナ『デステイニーブレイクッー！』

アリス『行って！』

『カメンライド・ライオトルーパーズッ!』

一方、デステイニーは必殺キックを浴びせ、ディダークはライオトルーパーを召喚して攻撃させ、全滅させた。すると、オーロラは消えていった。

三人は変身を解除する。

アリス「ファンガイアとアンノウンが現れたっていう事は・・・」

雅紀「また鳴滝だな・・・」

アスナ「あの眼鏡ね・・・!」

そうしていると・・・

加賀美「お前ら・・・一体、何者だよ!それにあいつ等は!」

加賀美が三人に向かって叫んだ。

雅紀「まあ、話は長くなりますよ?此処ではなんですし・・・どこかへ行きませんか?」

加賀美「あ、ああ。」

加賀美は三人を連れてその場から去った。

B i s t r o l a S a l l e

蓮華「いらっしゃ・・・あ、加賀美先輩。」

加賀美「よう、蓮華。」

店に来た加賀美達を見た蓮華は雅紀達と目があった。

蓮華「あ、さっきの・・・。」

雅紀「どうも。」

加賀美「蓮華、知ってるのか？」

蓮華「はい、さっきここでHIYORIMIランチを食べに来たん

ですよ」

加賀美「そうだったのか。」

樹花「あ、加賀美さんだ。」

加賀美「樹花ちゃん、久しぶり。学校もう終わったんだ。」

蓮華「で、先輩は御飯食べに来たんですか？」

加賀美「いや、違うんだ。あ、ひより！今日はもう閉店できないか？」

蓮華と樹花と話している途中、加賀美はひよりを呼んだ。それを聞いたひよりはキッチンから出てきた。

ひより「何でだ？」

加賀美「いや、ちょっと大事な話が・・・」

ひより「周りを見る。まだ食べている人たちがいるんだぞ。」

ひよりに言われて周りを見ると、まだ食事の客が何人かいたのだ。

加賀美「あゝ・・・じゃあ、この人たちが食べ終えた後でいいから！」

ひより「ハア、わかった。こっちも料理を早く作らなきゃ・・・」

ため息を吐いたひよりはブツブツ呟きながらキッチンへと戻って行った。

加賀美「樹花ちゃんは、もう帰りな？」

樹花「え、何で樹花だけなんですか？」

加賀美「ごめん、大事な大人の話だから・・・ね？」

樹花「え・・・」

ひより「なら僕が樹花を家まで送って行って、一緒にいる。これでいいかな？」

樹花「うん・・・わかったよ、お姉ちゃん」

こうして、時間は過ぎていった。

数十分後

蓮華「えっ、ワームが・・・!?」

加賀美「ああ。なんか・・・変なオーロラから出てきてな・・・。」

蓮華「オーロラですか・・・。今までとは違う出現ですね・・・って、ワームは全滅したはずじゃ!??」

加賀美「そこなんだよ!あの時、剣が・・・」

加賀美の脳裏に、一人の青年の顔が浮かび上がった。

加賀美「・・・そうだ、お前らは何者だ?ゼクターを使わずに変身
つて・・・」

雅紀「なんと言いましょうか。ま、ソレは後にして・・・」

加賀美「するなよ!」

雅紀「確かに、ワームは滅びましたよ。剣さんのおかげだね。」

加賀美「っ!おまえ・・・剣の事を!」

加賀美は驚愕の表情を浮かべながら雅紀を見つめる。雅紀は続けて言う。

雅紀「アレは、別の世界のワーム。」

加賀美「別の・・・?」

雅紀「並行世界・・パラレルワールド。そう言えばわかるでしょう。」

加賀美「そんなの・・本当にあんのかよ。」

雅紀「現に俺達と、さっきのワーム、そしてファンガイアとアンノウンが証拠です。」

加賀美「ファンガイア？アンノウン？あゝ、わけわかんね〜！」

説明を聞いていた加賀美は頭を抱えた。逆に蓮華は興味心身に聞いていた。

加賀美「まあ、簡単に言うと、あのワームは別世界から来た奴で、そのファンガイアとかアンノウンって奴らも別世界の怪人ってことだな！」

雅紀「その通りです。あ、俺達の力は同じくライダーですが、この世界で作られたわけではありませんので。」

加賀美「それは、あの時見てわかったよ。だが・・あいつ等がこの世界を壊そうっていうのなら・・俺は・・。」

雅紀「人の命を守ってみせる・・でしょ？ですが、何である時、ガタックに変身しなかったんですか？」

加賀美「あ、それはだなあ・・。」

加賀美が説明しようとしたその時・・。

「回収したからだよ。私がね。」

という声が聞こえた。全員は声がした方へ向けると、そこには・

加賀美「親父!?!」

加賀美の父親「加賀美 陸」がいたのだ。

陸「正確に言えば・ガタツク、ザビー、サソードの三つだけだ。

カブトとドレイクは無理だったがね。あと、ホッパーシリーズもだ。
」

加賀美「っていつか何時の間に行ったんだよ!親父!!!」

加賀美が驚きながら聞いてくるのに対し、陸は落ち着いてお茶を飲んでいた。

陸「扉からだ。」

加賀美「閉店してんのに何、気軽に入ってんだよ!」

陸「まあ、それよりもだ。話は聞かせてもらったよ。その少年。」

雅紀「どうも。」

陸「ふむ、随分と落ち着いている。息子にも見習ってほしいな。」

加賀美「親父イ・・・！」

雅紀「で、加賀美警視總監が、一体何をしに？ま、大方予想できそうだけど。」

陸「先ほどのワームと、ファンガイア、アンノウンと呼ばれる怪人が現れ、警視庁は大騒ぎだ。コレに対処するために・・・ZECTを再建する。」

加賀美「はっ!?!？」

陸の言葉に、加賀美と蓮華は驚いた表情を浮かべる。

陸「バラバラになった元ZECTのメンバーも動き始めている頃だ。」

加賀美「じゃあ、田所さんも、岬さんも。」

陸「ふむ。後はだ・・・。実は先ほど、マスクドライダーシステムが保管されている「エリアZ」が襲撃されたのだ。」

加賀美「何だつて!?!？」

エリアZと呼ばれるのはマスクドライダーシステムの中核とも呼ばれる地帯だ。

陸「恐らく、君たちの前に現れた連中は囷だったのだろう。」

加賀美「それで、どうしたんだよ！」

加賀美が聞くと、陸は険しい表情を浮かべながら重々しく話した。

陸「ザビーのブレスが奪われてしまった・・・。」

加賀美「っ!!！」

ソレを聞き、その場にいる全員が驚愕した。

陸「幸い、ガタツクとサソードは無事だったよ。」

加賀美「・・・何で奴らはザビーだけを・・・!?!？」

雅紀「恐らく、奴らはザビーの力を利用するんでしょう。誰かが変身してね。(恐らく、鳴滝だろう。だが、他のゼクターよりも社交性が高いザビーゼクターを手懐けられるのか?)」

雅紀は今回の原因を鳴滝だと考えていた。

陸「兎に角だ。君たちにも協力を願いたい。頼む・・・。」

そう言うと、陸は雅紀達に深々と頭を下げた。それをアリスとアスナが止める。

アリス「そんな、頭を下げなくても!」

アスナ「やりますよ!」

陸「すまないね。それと新、コレを。」

陸は頭を上げると加賀美にある物を渡した。それは・

加賀美「ガタツクのベルト・・・！」

ガタツク専用のライダーベルトであった。

陸「必要だろ？使っんだ。」

加賀美「親父・・・ありがとな。」

陸「なに・・・ちよつとした親心だ。」

互いに見合っていると・・・陸は天井へ顔と両手を上げる。

陸「ZECT・・・復活の時だ・・・！」

とある場所

「……………」

建物の屋上に一つの影があった。そして・

ブーン……！

一匹の機械の蜂がその周りをまわっていた。ソレを掴み取り・

「変身……」

辺りは金色に包まれ……次の瞬間、一人の仮面ライダーがいた……。

第114話（後書き）

うわあああああつ！！

雅紀「どうした、いきなり！」

伊達さんが！伊達さんが！！

雅紀「落ち着け！深呼吸だ！」

スーハースーハー。ハ、落ち着いた。

雅紀「で、どうしたの？」

あ、そうだ！今日のオーズなんだが！伊達さんが敵になっちゃった
~~~~！！

雅紀「へえ・・・」

しかも、次回予告で口から血を出してた・・・あ~~~~！！死んで  
しまっんだ~~~~！！

雅紀「落ち着け！」

はうう・・・しかも、次回は後藤さん、バースに！バース！！伊達さん  
というのが定着してあったのに・・・。

雅紀「そうですかい。」

あ、それと映画では全コンボ集結だよ！凄いや~~~~！！

雅紀「全コンボって・・・アレか？ブラックRXみたいにブラック、バイオリイダー、ロボライダー、RXって感じに勢ぞろい？」

いや、あるいはブラカワニの固有能力かも！伝説のメダルらしいし！！

雅紀「凄いなあ。」

後は・・・

雅紀「後は・・・？」

実はな、この仮面ライダーディカオス・・・もう一周年だよ！

雅紀「へえ、よく続いたもんだ。」

ひどい。ああ、こうして思うといろいろと大変だったよ。

雅紀「だよなあ、全読者から嫌われた事もあるもんな。現在も。」

だからひどい・・・うん。

雅紀「どうしたよ。」

いや、こつも中傷と批判を区別できない理由を考えていたんだ。

雅紀「で？」

別作品の感想で荒らしがあったらどう？たぶん、そのトラウマかも。批判を見ると、中傷に思っしまいがちで・・・。

雅紀「だからか。ま、言い訳にしかないけど。」

うっ！

雅紀「またコレを見た読者が「また始まったんですか、貴方は・・・」とか「いちいち理由、言わなくてもいいでしょ。」とか、その他もろもろ言われるのが落ちなのに。」

はう~~~~！

雅紀「もうこれでおしまいにして！はやく次回予告。」

はい。え〜・・・実は・・・まだ決めてません、以上！撤収！！

雅紀「あ、待てこらッ！逃げんな~~~~！！！！！！」



## キャラクターの素顔

はいはい、どうも！作者です！

雅紀「木利野 雅紀です。……って、一体どういこと？」

何が？

雅紀「本編は！？これはどうなってんの！？」

まあまあ、きにせんといて〜

雅紀「気にするわっ！！」

あ〜ゴホンッ！実は私、挿絵に挑戦してみたのです！

雅紀「挿絵？何で？」

なんでも、本文のなかに自分が描いた絵を載せることができるという噂を聞いてな！描いてみようかなあってね！

雅紀「ほうほう。で、やり方はわかるのか？」

……それが、実は分からずじまいです。

雅紀「おい！」

だから！活動報告で頼んだっけ、松上さんと紅夜さんからメッセージを受け取ったのです！！

雅紀「そうか。」

それと、ある人気小説家にも頼んでみました・・・!

雅紀「誰?」

その名前は・・・あの「魔法少女リリカルなのは」神様の力を得た少年」を書いて、「秋風」さんです!!!

雅紀「そんなに有名?」

ああ!私のお気に入りのお作家「ナンバーズ」魔法が使えない男」や、「アヤカシ」など、数々の大作を書いている「赤夜叉」さんと並ぶくらいの有名人なのだああアツ!!!

雅紀「そうかい。」

そして、この三様から情報を得た結果・・・!

雅紀「結果・・・?」

みてみんなに投稿した後本文にURLというリンクを使って、本文に載せることが分かりました!!!

雅紀「ほうほう。」

ですが!

雅紀「ですが?」

・・・ペンタブレットという機器を使うとか・

雅紀「ペンタブレット？」

結構高い機器らしい。家には買える余裕もってないので、なんとか、書ける方法を探しました結果！パソコン内のお絵かき機能を使えば良いという事を見つけました！！

雅紀「あ、そうかい。で、どうなったの？」

最初は結構苦労したよ、なにせ鉛筆とかで書くものではないから、顔だけ書くのに2〜3時間かそれ以上を費やしました。

雅紀「だからこんなに遅く？」

ああ。で、今日やっとの事で三つだけだが完成した！！

雅紀「御苦労さんだ。」

後で肩揉んでくれよ？

雅紀「ああ。で、早く見せてくれよ、その絵。」

良いだろう！・・・だが、あんまり期待しないでね？

雅紀「何ですか？」

・・・では、まずは！

雅紀「おい！無視ですか！？」

最初の絵は・・・この物語の主人公、木利野 雅紀くんの絵です！！

雅紀「俺からか！どんなのだ？」

では・・・これだ！

> i 2 5 3 6 7 — 3 3 0 6 <

雅紀「・・・誰？」

お前だ！

雅紀「いや、俺こういう髪型だっけ？てか、体のバランスが・・・」

仕方ないだろうが！

雅紀「あと、何で制服なんだよ？」

このイラストの服はな．．おまえの世界が滅ぶ前の学校の制服にしたのだ！喜べ！

雅紀「そうか．．。ありがとさん。」

うむ！では、次はこの子！この物語のヒロインともいえる少女アリスだ！！

> i 2 5 4 4 8 | 3 3 0 6 <

雅紀「．．．これが、アリス？」

ああ。どうだ？

雅紀「．．．．」

ん？おーい。

雅紀「……………プシユウウ……………」

あ、頭から煙出してるよ。

雅紀「……………ハッ！俺は何を？」

気絶してた。

雅紀「そうか……。あれ？良く見てみると、アリスの髪型……どこかで……」

フフフ。それはなあ……。アリスの髪型はフェイトに似せたんだよ！

雅紀「あー！そくだ！確かにフェイトに似てる！ってか、何で？」

似せたのかって？アリスはリリカルなのは好きなのはわかるだろ？それでだ。

雅紀「なるほど……」

改めてアリスを見てさらに見惚れた？

雅紀「……………」

あらら。さてと、次はもう一人のヒロイン白鳥 アスナだ！

雅紀「アスナか。」

そくだ、ではどうぞ……！

雅紀「……アスナって、目つき悪かったっけ？」

すまん、真面目そうな瞳にしたつもりがこうなった。

雅紀「身長俺よりもあるんじゃないか！？キャラクター紹介で俺より身長低いつて書いてただろう！」

すまん。

雅紀「まったく……。それにしても……。あれだ」

あれって？

雅紀「……アスナは、可愛いというか、カッコイイ感じが……」

そうかいそうかい。で、アリスと比べると？

雅紀「えっ！？え、えと・・・アリスとアスナとでは・・・ハウ  
ウウウウ！！／／／」

ボンッ！！！！

うわっ！さっきよりも煙が！しかも頭が燃えてる！！バケツバケツ  
！！あ、あつた！それええっ！！

バシヤアアアッ！

雅紀「ハウウウウ・・・／／／」

火は消したが煙がまだ出てるよ。しかも行動不能になるとは・・・。  
さてと、以上で三つの作品を紹介しました。どうでしたか？

雅紀「ううう・・・あ、そういえば、お前次回は？」

・・・

雅紀「まさか・・・考えてないとか？」

・・・

雅紀「答えるよ。」

・・・撤収！



『アタックライド・ソニック!』

雅紀「おい！俺のARを勝手に使うな!!・・・て、逃げ足の早い奴だ・・・もう。あ、読者の皆様、申し訳ございません。こんな事に着き合わせてしまい。次回はちゃんとカブトの世界の物語を書くように後できつく言いますので！それでは！」

第115話(前書き)

今回は、バトルメイン？  
ではスタート。

## 第115話

市街地

ワーム1 『グギユウウウツ!!』

ワーム2 『ギイイイイイツ!!』

市街地の真ん中でワーム達が人々を襲っていた。逃げ回る人たちを  
追いかけるワーム達・・・すると・・・

トトトトトトトトトトトトツ!!!!

という銃声が響くと同時に、ワームに無数の銃弾が当たった。そして、何処からともなく黒いヘルメットとユニフォームを纏った集団

が現れた。一斉に右腕に装備しているマシンガンブレードでワーム達を撃った。彼らはZECTに所属する戦闘員「ゼクトルーパー」。

「各隊、ワームの退路を断てッ!!」

ワーム達とゼクトルーパー達の近くに一台の車が止まっていた。その中で、一人の男性が耳元に付けている通信機でゼクトルーパーに指示をしていた。彼の名は「田所 修一」。田所チームのリーダーだ。

田所の指示を聞き、ゼクトルーパー達はワームを囲み、退路を断たせ、銃弾の雨を浴びせる。すると・・・

ファンガイア「ガアアアッ!!」

イメージン「オオオオオオッ!!」

ゼクトルーパー1「何!?!うあああああッ!!」

ゼクトルーパー2「ぎゃああああッ!!」

ゼクトルーパー達の背後からファンガイアとイメージンが現れた。いきなりの奇襲でゼクトルーパー達は次々に倒されていく。ある者はファンガイアにライフエナジーを食われた。

「田所さん!このままじゃ・・・!」

その場でカメラを持っている一人の女性が通信機で田所に言った。彼女の名は「岬 祐月」。

田所「くっ!加賀美はまだ来ないのか・・・!」

田所が険しい表情で映像を見ていると・・・

ブブウウンツ！！

二台のバイクがその場に現れ、ゼクトルーパー達に襲い掛かるファンガイアとイマジンに突撃し、ゼクトルーパー達から離れさせた。

加賀美「お前ら、大丈夫か！」

雅紀「離れてください！」

ヘルメットをはずすと・・・バイクに乗っていたのは、加賀美と雅紀だった。

岬「加賀美君！それと・・・あの子は、確か・・・」

雅紀「ファンガイア、イマジンの方は俺がやります。加賀美さんはフォームを！」

加賀美「おう！」

二人が頷いていると、ファンガイアとイマジンが二人に襲い掛かってきた。

雅紀「変身っ！！！」

『カメンライド・ディカオスッ！』

雅紀は前に出て、ディカオスに変身。ファンガイアとイメージンに向かって行った。一方、ワームは先ほどと、別の方から来たワームとで十体近くいた。ワーム達を睨む加賀美は・・

加賀美「さあ、来い！ガタツクゼクターッ！！」

右手を天に向けると、何処からともなく、青い昆虫型メカ「ガタツクゼクター」が現れ、ワーム達に攻撃しながら加賀美の元へ向かう。加賀美はガタツクゼクターを掴み、構える。

加賀美「変身っ！！」

『ヘンシン』

加賀美はそう言いながらライダーベルトにガタツクゼクターを装着させると、ガタツクゼクターから音声が聞こえた。すると、ベルトから未知なる金属、「ヒビイロノカネ」で製造されたマスクドアーマーが加賀美を包み、青き装甲と両肩に大口径火器「ガタツクバルカン」を装備した「仮面ライダーガタツク・マスクドフォーム」が姿を現す。

加賀美「ッシヤアアッ！！」

加賀美は掛け声を上げながらワーム達に向かって行き、飛び蹴りを食らわしていき、パンチや投げ技を繰り返した。

雅紀『ハッ！ハッ！ハアッ！！』

一方、デیکاオスは優勢のようで、アドベントドライバーを振るい、次々にファンガイアとイマジンを倒していく。

雅紀『久々にコイツに変身しますか・・・！変身っ！！』

『カメンライド・デンオウツ！』

（  
）

カードをデیکاオスドライバーに挿入すると、音楽が流れ、デیکاオスの体は仮面ライダー電王の素体形態「プラットフォーム」に変わり、周りにオーラアーマーが出現し、前と後ろに装着され、顔に桃の形をしたレールが出現し、中央で割れ、一つの仮面となった。デیکاオスはD電王SFへとなった。さらにD電王SFはカードを挿入。

『アタックライド・オレ！サンジヨウツ！』

雅紀『へっへ〜ん 俺！参上ッ！！』

D電王は歌舞伎のようなポーズをとった。それを見たファンガイアとイマジンは固まる。

雅紀『やっぱ、電王になったからにはこの決め台詞は絶対でしょ。さて、いいか！お前ら！俺に前振りはねえッ！最初っから最後まで、徹底的にクライマックスだ！！いくぜ、いくぜ、いくぜええッ！！』

『アタックライド・デンガツシャーッ！』

D電王SFはカードを瞬時に挿入し、ディカオスドライバーから出現したデンガツシャーを素早くソードモードに組み立て、イマジジンとファンガイアを切り裂いていった。

雅紀『オラッ！オラッ！オラアアッ！』

乱暴に近い戦い方でイマジジンとファンガイアを倒していく。イマジジンの攻撃を受け流し、後退する。

『フォームライド・デンオウツ！ガンツ！』

さらにカードを挿入すると、オーラアーマーが弾かれ、宙に浮く。D電王SFに突っ込んできたイマジジンの一体はオーラアーマーにぶつかり吹っ飛ばす。すると、宙に浮いているオーラアーマーの一部がパカッと開き、中から紫のアーマーが露出し、それがD電王に装着される。仮面となっていた桃のレールも消え、代わりに龍をモチーフにしたレールが出現し、変形して仮面になった。デンガツシャーも装甲が変わると同時にソードモードからガンモードへと自動で組み立てられる。D電王はSFからGFへとなったのだ。

雅紀『お前たち、倒すけど良いよね？答えは聞いてない それっ！』

そう言うと、踊るように動き、デンガツシャーガンモードを連射す



る。イメージンとファンガイアに直撃するが、二丁三発近くの流れ弾が建物に当たる。

雅紀『やっぱ踊りながら撃つというのは難しいなあ。』

そう言いながらもD電王GFは撃つのをやめない。先ほどよりも流れ弾は飛んでこないで、確実に当てていく。

イメージン『このオオツ!!』

先ほど吹っ飛ばしたイメージンが襲い掛かってくるも、D電王GFはそれをジャンプして避け、空中で一回転しながらイメージンとファンガイアに射撃する。着地と同時にカードを挿入した。

『ファイナルアタックライド』

雅紀『トドメ・・・いいよね?』

イメージン・ファンガイア『よくないっ!よくないっ!!!』

雅紀『答えは聞いてない。』

『デ・デ・デ・デンオウツ!!』

ファンガイアとイメージンが言った事に首を横に振り、デンガツシャーガンモードにエネルギーを集める。銃口から紫色のエネルギーの塊が生み出される。

雅紀『ワイルドショットッ!』

トリガーを引くと、そのエネルギーの塊は一直線にファンガイアとイマジンに向かっていき・・

ドガアアアアッ！！

断末魔を上げることなく、爆発した。倒したのを確認し、D電王G Fはデйкаオスに戻る。

雅紀『ふう・・・モモタロスやリュウタロスのやり方でやろうと思っても、難しいな・・。』

腰に手を当てるデйкаオス。最後のトドメは、ちょっと危ないぞ？

雅紀『しょうがないでしょ？てか、電王のリュウタロスとGFの登場の次の話を見た？最後はこんな感じでトドメさしていたよ？』

あ、そうかい。

雅紀『さて、加賀美さんはワームを倒したかな。』

デйкаオスはワーム達と闘っているガタツクの方へと向かった。

加賀美 『ムウンツッ！オリヤアアアアアッ！！』

ガタツクMFは両肩のガタツクバルカンを連射してワームを一掃すると・・・

ワーム 『グギユウウウツッ！！』

一体のワームが脱皮し、中から「ベルバーワーム」が姿を現す。それを確認したガタツクMFはガタツクゼクターのゼクターホンを若干、開かせる。すると、黄色い稲妻が走り、マスクドアーマーに隙間が生じる。

加賀美 『キャストオフッ！』

『キャストオフ』

そう言いながらゼクターホンを倒すと、マスクドアーマーが吹っ飛んだ。中からもう一つの青い装甲が姿を現し、左右に倒れていたガタツクホーンが起立し、側頭部に収まる。

『チェンジ・スタツグビートル』

ガタツクゼクターから音声が発生し、赤い瞳が輝いた。クロツクアップを可能とする「ライダーフォーム」へとなったのだ。

ガタツクRFを見たベルバーワームはクロツクアップをしてガタツ

クRFに襲い掛かる。

加賀美『クロツクアップッ！』

『クロツクアップ』

ガタツクRFは瞬時にベルトの端のボタンを押し、クロツクアップを開始した。瞬間、周りは静止する。

クロツクアップをしたガタツクRFとベルバーワームは蹴りパンチを繰り返す。ガタツクRFはカウンター攻撃でベルバーワームを吹っ飛ばすと、ベルバーワームは口から緑色の溶解液をとばした。ガタツクRFはソレを避けて、両肩に装備されているガタツクダブルカリバーを手に持ち、ベルバーワームを切り裂いていった。

切り裂かれたベルバーワームはふらつき、ソレを見たガタツクRFはガタツクゼクターのスイッチ・フルスロットルを三連続で押し、ゼクターホーンを元の状態に戻した。

『1・2・3』

加賀美『ライダーキックッ！』

ガタツクRFはそう叫び、ゼクターホーンを倒した。

『ライダーキック』

ガタツクゼクターがそう発すると、頭に向かって黄色い稲妻が走り、そして右足へと向かった。ガタツクRFはベルバーワームに向かって突っ込み・

加賀美『ハアアアアッ！！』

エネルギーが溜まった右足で飛び蹴りを食らわした。

ベルバーワーム『ギイイイツツ!!』

『クロツクオーバー』

ライダーキックを食らったベルバーワームは吹っ飛び、空中で爆発。同時にクロツクオーバーとなった。死んだ事を確認したガタツクR Fは変身を解くと、ガタツクゼクターはどこかへ飛んで行った。体の力を抜いた加賀美に変身を解いた雅紀が近寄る。

雅紀「お疲れ様です。」

加賀美「ああ。しかし、そっちは結構いたのに倒したのか。凄いなあ。」

雅紀「それほどでも。」

そう言っていると・・・

岬「加賀美君!」

岬が近付いてきた。その後ろに田所もいた。

加賀美「岬さん、田所さん!」

田所「加賀美、よくやった。それと・・・木利野君・・・だったか。」

雅紀「あ、どうも。」

田所「協力を感謝する。」

雅紀「あ、いえいえ。」

そう話していると、田所の携帯が鳴った。田所は携帯を手に取り耳に向けた。

田所「田所です。．．．はい？どういうことですか？．．．はい、わかりました。」

田所は携帯をしまう。それを見た加賀美は声をかけた。

加賀美「誰だったんですか？」

田所「．．．上からだ。至急、本部に來い．．．だそうだ。」

加賀美「本部が？何で．．．」

田所「詳しくは本部に行つてからだ。木利野君、君も一緒にきてくれないか？」

雅紀「俺もですか？まあ、いいですけど。」

田所「よし、じゃあ行こう。」

そう言つて四人はZECT本部へと向かった。

ZECT本部

田所「失礼します。」

とある一室の扉を開け、四人は中へ入った。そこには・

陸「やあ、待ってたよ。」

陸がいた。落ち着いて茶を飲んでいた。

田所「加賀美総監、何か用で？」

陸「いや、実はだ。木利野君はいるかね？」

雅紀「はい、俺に何か？」

陸に言われ、雅紀は前に立つ。

陸「君に、ある隊のリーダーをやってほしい。良いかな？」

雅紀「え？いや、何で俺なんかに？加賀美さんの方が良いのでは？」

陸「新たは田所君のいるチームの一員だ。だから、はずさない。君は田所君達と行動を共にしているが、正式にそのチームには所属していないだろう？だからだ。」

雅紀「はあ……」

加賀美「親父！まだ雅紀は子供だ！そんな……部隊のリーダーが……」

陸「務まらないとでも？彼は事実、お前以上の戦闘力を持っているのだ。それに、仮にお前がリーダーとしてだ……リーダーが務まるか？お前に……」

加賀美「くっ……！」

雅紀「加賀美さん、そう齒ぎしりしない。あ、加賀美総監、わかりました。引き受けます。」

陸「そうか。」

雅紀「で、その部隊は？」



陸「うむ、こつちだ。」

陸は席から立ち、どこかへ足を運んだ。四人は付いていくと、ある一室に入って行った。そこには・

陸「今日から君は、この部隊のリーダーをやってもらうよ。」

ゼクトルーパーが二十人近くいた。だが、他のゼクトルーパーと違って、スーツに金色のラインが入っていた。それを見た雅紀はこう口にした。

雅紀「「シャドウ」・・・ですね？」

シャドウとは本部直属の精鋭部隊。つまり、エリートが集まった部隊だ。

加賀美「おい、親父！雅紀にシャドウのリーダーを・・・！」

陸「そのつもりだ。」

加賀美「シャドウのメンバーは納得するのかよ・・・!?!」

陸「そこは木利野君次第だ。あ、木利野君、挨拶を頼む。」

雅紀「え？まあ、はい。」

雅紀はそう頷き、シャドウゼクトルーパーの前に出た。シャドウゼクトルーパー達は一斉に雅紀の方へ顔を向ける。

雅紀「え・・・今日から、この部隊のリーダーをやらせていただき

ます。木利野 雅紀です。ZECTには最近入ったばかりなので、分からない事もあります。ですから、先輩である皆さんにも迷惑をかけるかもしれません。それを承知ください。それでは、よろしくお願ひします。」

雅紀が深々と頭を下げると、シャドウゼクトルーパー達はざわついた。

雅紀「え、では、ワームが現れるまで、解散。」

そう言い、雅紀は加賀美達の方へと戻って行った。

雅紀「緊張したあ・・・」

陸「ごくろう。あ、ついでに彼女たちにも頼んでおいたよ。」

雅紀「彼女たち？」

雅紀が困惑していると・・・

「雅紀」

聞き覚えのある声が聞こえた。振り向くと、そこにいたのは・・・シヤドウゼクトルーパー達と同じ、戦闘服を纏ったアリスとアスナだ。

雅紀「アリス！？アスナ！？何でここに！？？てか、その格好は！？」

アリス「実はね、加賀美総監から頼まれて来たんだ。雅紀の傍にいろし。ね？アスナちゃん」

アスナ「あたしは別に・・・まあ、雅紀がどうしてもって言うんなら・・・。」

アリスはルンルン としているのに対し、アスナは雅紀の顔をチラチラ見ながら後ろを向いている。

雅紀「助かる。ありがとうな。」

アリス「フッフ とういたしまして」

アスナ「アンタがあたしらを必要してんなら・・・仕方ないわね／＼」

雅紀にそう言われ、嬉しかったのか、アリスは上機嫌になっていた。アスナも頬を染めて口を緩んでいた。そんな時だ。

「おい、あのガキで大丈夫なのかよ？」

という声が聞こえた。三人は振り向くと、シャドウのメンバーがヒソヒソとこちらを見ながら何やら喋っていた。

「あの年でリーダーかよ。どうなるんだよ、俺達？」

「パーフェクトハーモニーが崩れなきやいいんだが・・・」

「つか、崩すんじゃないの？ああいうガキはミスを多発するだろうよ。」

「一体、上の連中は何であんな子供に俺達のリーダーを任せただ

「？」

「おまけに女の子が二人もいるし……。足手まといになりそうだなあ。」

「シャドウも地に落ちたな……」

などなど、盛りだくさんだ。

アスナ「あいつら……！」

ソレを聞いたアスナは怒ってシャドウのメンバー達を怒鳴ろうと動いた。だが……

雅紀「やめな。」

雅紀がソレを制した。

アスナ「雅紀……何でよ？あいつ等、人の事を言いたい放題、言っ  
て……！！！」

雅紀「シャドウの人たちのほとんどがそんな感じだ。ザビーゼクタ  
ーに見放されたリーダーはパーフェクトハーモニーを崩すという事  
で容赦なく切り離す。現に、矢車さんや影山さんがシャドウから見  
放されたしな。」

アリス「パーフェクトハーモニー？」

雅紀「完全調和さ。無駄なく、崩すことなく……って感じだろう。」

「

アリス「じゃあ、元々この部隊のリーダーはザビーに変身する人なんだ。」

雅紀「その通り。ザビーゼクターとプレスが奪われたんじゃ、リーダーがいない部隊になるからな。」

アスナ「雅紀はいいの？あんな事を言われて・・・」

雅紀「正直、嫌だよ。でも、そんなことは言ってもらえない。誰かが指揮をしないと。」

アスナ「・・・そう。」

アスナはどうかやら納得してくれた様子だ。

アリス「まあ、雅紀の悪口を言う奴らは私の手で・・・切り裂いて・・・」

雅紀「アリス、やめて。物騒だから。」

アリス「はい。」



## 第115話（後書き）

さてと、どうでしたか？

雅紀「俺がいきなりシャドウのリーダーって……」

まあ、ええやん。

雅紀「まあなあ。俺、指揮できる自信が……」

頑張っ！それと……やったー！！

雅紀「何が？」

伊達さんが生きてたー！！！！！！

雅紀「そうかい。」

一億稼ぐ理由がわかったよ。頭の弾丸を取り除くための手術代とは……  
・！そして、後藤さんバース、カッコイイイイイイイッ！！！！

雅紀「ああ、うるさい、うるさい。ところで、次回は？」

カッコイイー！！！！って、え？まあ、それは、うん、撤収！

『クロツクアップ』

雅紀「おい！ソニックの次はクロツクアップかい！はあ……まあ、次回をお楽しみに。」

## 第116話

屋台

雅紀「はあ……」

屋台で雅紀、アリス、アスナの三人は昼食を食べていた。

雅紀「うーん…味噌汁、うまつ！だなあ…。」

アリス「雅紀？私の作る味噌汁と、此処の味噌汁…どっちが良いの？」

味噌汁を飲んでいた雅紀に、アリスが聞いてきた。

雅紀「勿論、アリスの作る味噌汁…て、何でそんな事、聞いてくるんだ？」



アリス「雅紀：味噌汁を美味しくそうに飲んでいたら。」

そういう理由らしく、味噌汁をジッと見ていた。

雅紀「あはは…」

アスナ「それよりも、雅紀。」

アリスとそう話していると、アスナが声をかけてきた。

雅紀「ん？」

アスナ「アンタ、これからシャドウってチームのリーダーだけどさあいつら、指揮を無視すると思うよ。」

雅紀「…まあ、そうだろうな。見た目でそう判断しているし。」

アスナ「舐められたものよ！全く！」

雅紀「だが、シャドウの人たちは俺達の事をあまり知らないようだ。エリートチームも内緒にするほど、俺達は何かしら、トップシークレットなのかも。」

アリス「けど、田所さん達には知られてるよ？」

雅紀「そりゃ、俺が初めて田所さん達に会った時に話したもん。だから、知っている人は、田所さん達と加賀美総監だけだと思う。」

アリス「そうなんだ。」

雅紀「ま、俺たちはZECTの社員じゃないし、協力者みたいなものだけ。」

そう話していると…

プルルルルッ！プルルルルッ！

という音が鳴り響いた。雅紀はポケットに手を入れると、黒いケータイを取り出した。これは、陸から渡されたZECTの支給品。雅紀はケータイを耳に近づけた。

雅紀「もしもし。」

田所「田所だ！」

相手は田所のような。

雅紀「田所さん？どうかしましたか？」

田所「ワームが出現した！こっちは別の方に当たっている！出撃で

きるか?』

雅紀「わかりました。すぐ向かいます。」

田所『頼む…。後だ。あまり無理するな。君はまだ…』

雅紀「子供です。あまり無茶はしませんよ。じゃあ、切りますので。」

「  
そう言い、雅紀はケータイをしまう。

雅紀「さて、行くぞ!」

アリス「うんっ!」

アスナ「わかった!」

三人は屋台を後にして行った。



シャドウゼクトルーパー達は言われた通りに動かず、マシンガンブレードを連射し続けていた。

アスナ「ちょっ！アンタ達！何で言われたとおりにしないの！？」

アスナは叫ぶが、シャドウゼクトルーパー達は…

シャドウゼクトルーパー1『あんなガキの指示に従えるか！』

シャドウゼクトルーパー2『このままやれば倒せる！』

シャドウゼクトルーパー3『あのガキの指示に従わずとも…倒せるのさ…！』

シャドウゼクトルーパー4『第一、あんなライダーでもない無力なガキをリーダーにした上の奴らがおかしいんだ…！』

シャドウゼクトルーパー5『俺達はシャドウ！エリートなんだ！』

そう言ってるまるで聞こえなかったのだ。

アスナ「…もう我慢の限界よ！アイツ等、叱ってくる…！」

雅紀「待てっ！」

シャドウゼクトルーパー達の方へ行くアスナを、雅紀は止めた。

アスナ「雅紀！何で止めんのよ！？」

雅紀「言っても逆効果なだけだ！」

アスナ「アンタはそれで良いの！？」

雅紀「良くないが…っ！」

そうしていると、目の前にオーロラが出現し…

ミラーモンスター『ギギギギギキーンッ！！！！』

オルフェノク『グルルルルッ！！』

ミラーモンスターとオルフェノクがオーロラから出現した。

シャドウゼクトルーパー6『なっ！？くっ、奴らも撃てええっ！！』

動揺しながらもシャドウゼクトルーパー達は一斉に射撃した。だが…

ミラーモンスター『ギギギッ！』

シャドウゼクトルーパー7『がっ！？』

ミラーモンスターが鏡を使って別の方向から襲い掛かってきた。不意を突かれ、シャドウゼクトルーパーの一人が襲われる。そのせいでシャドウゼクトルーパー達はパニックに陥った。

雅紀「ヤバい…！いくぞっ！」

雅紀達は急いで行き、アドベントドライバーで射撃し、こちらに注意をそらせる。

雅紀「お前らの相手は俺達だっ！」

『カメンライド』

雅紀・アリス・アスナ「変身っ！！！！」

『デイカオスッ！』

『デイダークッ！』

雅紀達は仮面ライダーへと変身した。それを見たシャドウゼクトルパー達は驚愕する。

シャドウゼクトルパー「あ…あいつ等…ライダーに…！？」

雅紀「アリス、アスナはミラーモンスターとオルフェノク…頼める？」

アリス「勿論！」

アスナ「さっさと片付けるわよ！」

そう頷き合い、行動した。

雅紀「ダアアアアッ！！」

デイカオスはワーム達をアドベントドライバー・ソードモードで斬

り伏せていく。

ワーム『グギユウウウツッ!!』

残った二体のワームが脱皮をし、サナギ体から成虫体へと姿を変えた。姿を現したのは、「ランピリスワーム」と「ベリクリケタスワーム」だ。

雅紀『うわわ、二体まとめてかあ…。』

そう言っていると…

雅紀『うおっ!?!』

デイカオスは宙を舞っていた。ランピリスワームとベリクリケタスワームがクロックアップして、攻撃してきたのだ。

地面に倒れるデイカオスはすぐに立ち上がり、一枚のカードを出す。

雅紀『シャドウといったらコレでしょ!変身っ!!』

『カメンライド・ザビーツ!』

カードをデイカオスドライバーに挿入すると、デイカオスの体がヒビロカネに覆われ、姿を現したのは、スズメバチとモチーフにした金色のライダー「ザビー」であった。

『アタックライド・クロックアップッ!』

雅紀『フッ!』



クロックアップをし、ランピリスワームとベリクリケタスワームと闘いを始める。

雅紀『フツ！フツ！ハッ！！』

Dザビーはフットワークを使い、ボクシングのようにパンチと蹴りを食らわしていく。

ベリクリケタスワーム『ガアアアッ！』

ランピリスワームを攻撃していると、ベリクリケタスワームが襲い掛かる。それをDザビーは瞬時に避け、右ストレートを放つ。

ベリクリケタスワーム『ギッ！？』

雅紀『蝶のように舞い、蜂のように刺す…ってねっ！』

Dザビーはそのままジャブ、フック、アッパー、そしてキックを食らわす。それを受けたベリクリケタスワームはふらついた。すかさずDザビーはカードを挿入する。

『ファイナルアタックライド』

ベリクリケタスワーム『ギギギギッ！！』

ベリクリケタスワームはジャンプして攻撃を放とうとした。だが、Dザビーの方が早かった。

『ザ・ザ・ザ・ザビーッ！』



アリス『ハッ！タアッ！』

アスナ『ハッ！ヤアッ！！』

一方のディダーク、デスティニーはコンビネーションで次々に倒していく。

アリス『力を貸してっ！』

『カメンライド・リュウキッツ！』

ディダークはディダークドライバーにカードを挿入し、振ると、目の前に仮面ライダー龍騎が出現した。

『ストライクベント』

龍騎『ハアアアア・・・ダアアアアアッ！！』

龍騎はドラグクローを装着し、ミラーモンスターに火炎放射を浴びせた。

『ファイナルフォームライド・リュ・リュ・リュ・リュ・リュウキイツ！』

アリス『我慢してね！』

龍騎『うわっ！』

デイダークに斬られた龍騎は姿を変え、ドラグレッダーに似た赤き龍「リュウキドラグレッダー」へと姿を変えた。

リュウキドラグレッダーは尻尾で、ミラーモンスター達を吹っ飛ばした。

『ファイナルアタックライド・リュ・リュ・リュ・リュ・リュウキイツ！』

アリス『ハッ！』

デイダークはジャンプし、空中で回転する。その周りをリュウキドラグレッダーが舞う。そして回転を終えたデイダークはデイダークドライバーを構え、その後ろからリュウキドラグレッダーが火炎を吐き、デイダークに浴びせる。

アリス『デイダークドラグーンツ！！』

火炎を纏ったデイダークは勢いよくミラーモンスター達に突撃し、炎を纏ったデイダークドライバーで一刀両断した。ミラーモンスター達は塵となった。

アスナ『ハアアアッ！ドラグーンフルバーストッ！！』

デステイニーはHFにフォームチェンジし、オルフェノク達に向か

ってビームの雨を浴びせた。

オルフェノク『ゴオオオオオツ!!』

それを食らったオルフェノク達はひとたまりもなく、一斉に灰となった。

雅紀『終わったな。』

ディカオスが二人に近づいてそう言った。

アリス『お疲れ様。戻って休んでて。』

ディダークはリュウキドラグレッダーにそう言うと、リュウキドラグレッダーは消えていった。それを確認し、ディカオスに近づく。

雅紀『二人とも、ご苦労さん。』

アリス『うん!』

アスナ『ふう、疲れたあ…。』

そうしていると…

シャドウゼクトルーパー1『お前ら…あ、いや、貴方達は…ライダーだったのですか…?』

シャドウゼクトルーパーの一人が話しかけてきた。

アリス『そうだよ』

アスナ『今頃、敬語使っても無理だからねっ!』

雅紀『まあまあ。はい、俺達は仮面ライダーです。』

シャドウゼクトルーパー1『さ、先ほどの命令無視、及び失礼な発言、申し訳ございませんでしたアツ!!』

シャドウゼクトルーパー達『申し訳ございませんでしたっ!!』

三人を仮面ライダーだと認識したシャドウゼクトルーパー達は一斉に頭を下げた。

雅紀『あ、いえいえ、そんな頭下げなくても…』

アスナ『何言ってるのよ!アイツ等、散々人の事バカにしてきたでしょ!?!?』

雅紀『それは、仕方ないだろう…。知らなかったんだから。ああ、皆さん、これからは見た目で判断しないでくださいね?』

シャドウゼクトルーパー達『はいっ!!』

デйкаオスの言葉を聞き、一斉に敬礼した。

アリス『これで、今度から皆、ちゃんと雅紀の指示に従ってくれるね』

アスナ『全く、これだから男ってのは…!』

アリス『アスナちゃん、雅紀は別だよね？』

アスナ『当たり前でしょ！雅紀以外の男ですよ！』

雅紀『まあまあ、アスナ、落ち着いて。さて、皆さん、戻りますよ。』

シャドウゼクトルーパー達『はいっ！！』

本部に戻って行くディカオス達とシャドウゼクトルーパー達…。

リーダーとして認めてもらったのだろうか…？

アリス『認めてもらえたんだよ？作者さん』

そうですね！だから、ディグードライバーの刃先をこちらに向けないでください、アリスさん！！





## 第116話（後書き）

雅紀「あれ？作者は何処へ行った？いつもなら此処にいるはずだが…？あれ？何か紙が落ちてある。読んでみよ。」

『雅紀へ、しばらく後書きコーナーを頼む…by作者』

雅紀「どういう事…？いや、いくら何でも俺一人だけってきついよ！？」

アリス「心配は無用だよ」

雅紀「アリス！？」

アリス「作者さんの代わりにこっちに来た」

雅紀「そ、そうか…ありがたい。で、どうして急に作者はいなくなつた？こんな手紙を残して…」

アリス「うん…まあ、それはいろいろと精神的に疲れてるのかも

しれないよ？最近、いろいろと問題起きてるから。」

雅紀「そうかい……。さて、次回予告もしたいが、わからないので、やめときます。それではこの辺で……」

雅紀・アリス「「次回をお楽しみに!!!」」

## 第117話

B i s t r o l l a S a l l e

アリス「最近、ワームやその他の怪人達の動きはないね。」

昼食をとっていた雅紀達。ふと、アリスが話した。

アスナ「そうね。ピタッと止まったみたい……」

アリスの言う通り、ここ最近、ワームやアンデッド、ファンガイアなど、多くの怪人達の動きが止まっているのだ。

アリス「でしょ？ 雅紀はどう思う？」

雅紀「…恐らく、戦力を整えているのかもしれないな。」

アスナ「戦力？」

雅紀「戦力を整えて、一気に襲撃するって手口かもしれない。だが、相手は何処の世界にいるかわからない……。」

アリス「その可能性はあり得るね。でも雅紀の言う通り、どこに  
いるのかわからないんじゃないか、どうしようもないね。」

途端に、その場は沈黙する。

ひより「お前ら、せめてその話は他の客がいない時にしなよ。」

しばらくすると、ひよりが声をかけてきた。周りを見ると、ど  
んよりとした空気が流れている。

雅紀「あ……」

ひより「楽しく御飯が食べれなくなるだろ？そういうのは、別の時  
にでも話しなよ。」

雅紀「すいませんでした。」

こうして、時間が過ぎて行った。

雅紀「……………」

とある場所で雅紀は一人、立っていた。傍にはアリスとアスナはいない。どうやら二人は家に帰っているみたいだ。

そんな雅紀の目の前には立ち入り禁止の張り紙が貼られており、その向こうには、瓦礫となった建物が数多くあった。そこは、渋谷であった。8年前にワームが入った隕石が渋谷に落下。その衝撃で、ほとんどの建物は瓦礫となり、現在でもそのままの状態となっている。

雅紀「（鳴滝は、一体何を企んでいる？この世界が平和になったというのに、その平和を脅かそうとするのか？鳴滝…アンタの方がよっぽど、世界の破壊者だ…！）」

そう思っただけで、雅紀はグッと手を強く握る。

雅紀「（止めなきゃ…。鳴滝、アンタがこの世界を破滅へと導くのなら、俺が、止める…！）」

空を見上げながら、そう思ったのであった。

それから数十分後

「キヤアアアアッ!!」

歩いていると、どこからか悲鳴が聞こえてきた。雅紀は急いで、悲鳴がした方へと走って行く。

「大介！どこ！？」

その場に行くと、少女が怪人に襲われていた。その怪人は、姿はワームだが、体色が緑ではなく白であった。

ワーム『グギユウウツッ！！』

「わっ！！」

少女はワームに襲われながらも、逃げ回り、近くに落ちてある物を投げつける。が、平気な様子で少女に向かってくる。

「大介エエツッ！！」

そう少女が叫んだ時だった。

「待てやコリアアツッ！！」

何者かがワームに向かって突進をかましたのだ。

雅紀「小さい女の子を襲ってんじゃねえよ！！」

その者は雅紀だった。そして後ろにいる少女に話しかける。

雅紀「大丈夫か…って、君は確か…」

雅紀はその少女の事を知っている様子だ。すると…

ワーム『グギユルルルルルルッ！！』

先ほど、雅紀が吹っ飛ばしたワームが立ち上がった。

雅紀「白いワーム。変種か…。確かコイツはクロックアップをしているライダーやワームの姿を確認できるんだっけ。」

雅紀はアドベントドライバーを構え、少女を庇う。

雅紀「おい、お前達の目的は何だよ。一体、鳴滝は何を企んでいる？答える。」

そう聞くも、ワームはただ咆哮するのみ。すると…

ワーム達『グギユウウウツッ！』

何処からともなくワームが数体、現れた。

雅紀「どうやら、言わないみたいだな。いや、当り前か。」

そう呟きながら、ディカオスドライバーを腰に巻きつける。

ワーム『グルルルッ！！』

すると、一体のワームが襲い掛かってきた。雅紀はアドベントドライバーで吹っ飛ばし、カードを挿入。

雅紀「変身っ！」

『カメンライド・ディカオスッ！』



雅紀はディカオスに変身。左手で少女の手を握る。

雅紀『大丈夫だからな。』

「う、うん。」

そうしている時、一斉にワームが襲い掛かる。ディカオスはその場を動かず、アドベントドライバーで狙い撃つ。

ワーム『ゲガアッ!』

弾丸は見事にワーム達に命中していき、倒していく。すると、ディカオスはカードを一枚出す。

雅紀『どうせなら、このライダーに変身だ。』

『カメンライド・ドレイクッ!』

カードを挿入した瞬間、ディカオスの体がヒビロカネに覆われ、姿を現したのは、トンボをモチーフにした。水色のライダー「ドレイク」だった。

「大…介。」

少女はDドレイクの姿を、ある男性と重ねた。そうしている間、Dドレイクはいつの間にか手に持ってあったドレイクゼクターを連射。

雅紀『ハアアアッ!』

それにより、ワームの数は徐々に減っていく。

雅紀『トドメはコイツだ。』

『ファイナルアタックライド・ド・ド・ド・ド・ドレイクッ!』

雅紀『ライダーシューティングッ!』

ドレイクゼクターの羽根を一つにし、銃口にタキオン粒子を倍加、噴出し、光弾に変換させる。そして勢いよくトリガーを引くと、光弾は一直線にワーム達に向かっていく。それに命中していくワームは一斉に爆発を起こした。

ワーム『グ…グギユウウウ…』

だが、白いワームは生き残っていた。手傷を負わせたが、背後にオーロラが現れ、それに入って行った。

雅紀『逃げられたか。』

Dドレイクはディカオスに戻り、少女に顔を向ける。

雅紀『大丈夫か?』

「うん。ありがとう。あ、名前がまだだった。私は「高山 百合子」。

雅紀『そうか。所でだ。何で一人で?』

百合子「ああ、実は、大介とはぐれちゃったみたいで。いつもはそうはならないんだけど。」

雅紀『そうか。なら、一緒に探そ…』

探そう。そう言おうとした時だった。

「ゴンッ！」

遠くの方から声が聞こえる。振り向くとそこにはギターケースを持った男性が立っていた。

百合子「あつ、大介！」

男性を見た瞬間、百合子の表情は明るくなる。だが、大介と呼ばれる男性の方は、百合子ではなく、ディカオスを見ていた。

大介「お前、何者だ？見た所、ライダーに見えるようだが…そんな事はどうでもいい。ゴンに何をしている…！」

雅紀『え、いや、俺は…』

大介「口答えするな…！」

雅紀『ええっ！？』

戸惑っているディカオスに大介は叫びながら青いラインが入ったグリップを取り出した。すると、どこからともなく、青いトンボの形をしたメカ「ドレイクゼクター」が飛来してきた。それが大介の持つグリップに向かい、グリップに収まる。

大介「変身っ！」

『ヘンシン』

グリップに収まったのを確認し、掛け声を言うと、ドレイクゼクターから音声が鳴り、大介の体がヒビロカネに覆われる。そして姿を現したのは、「仮面ライダードレイク・マスクドフォーム」だった。

大介『ハッ！』

ドレイクゼクターの銃口をディカオスに向け、発射する。ディカオスはいきなりの事で驚くも、アドベントドライバーで弾丸を弾く。

雅紀『危ねえ。当たったらどうするんだ！？』

そうしている時、ドレイクMFはディカオスに向かって突っ込み、パンチを食らわす。

雅紀『うおっ！？』

まともに食らったディカオスは吹っ飛び、地面に転がる。ドレイクMFはドレイクゼクターをディカオスに向けながら、百合子を庇う。

大介『ゴン、大丈夫か？アイツに何かされなかったか？』

百合子「なにもされてないよ！大介、あの人は私を助けてくれたんだよ！」

大介『は？』

百合子「私がワームに襲われていた時、あの人が助けてくれたの！」

大介『何！？』

百合子の言葉に驚きを見せるドレイク。少ししてディカオスに顔を向ける。

大介『本当なのか？』

雅紀『マジです。』

しばらく睨みあっていると、二人は変身を解いた。

大介「すまない。俺とした事が、勝手な勘違いをしてしまったようだ。」

雅紀「いや、勘違いする場面かもしれないんですけどもものね。俺が早めに変身を解いていたら…。」

百合子「もう！大介ったらあ！」

大介「すまない、ゴン。」

百合子「もう！」

雅紀「まあまあ、もう終わったんですし。」

大介「そうだな。あ、紹介が遅れた。俺は「風間 大介」メイクアップアーティストだ。」

雅紀「ええ。確か、風間流奥義というのを持っている…」

大介「ほう、光栄だな。まあ良い。じゃ、行くぞゴン。」

百合子「うん　じゃあ、またね。」

二人はそのまま去って行った。

雅紀「俺も帰るか。」

同じく雅紀もその場を去って行った。

とある場所

ズドオオオッ！！

ワーム『グギユウウツ！！？』

暗い場所で、先ほどのワームが爆死した。

「役立たずはいらないわ。足手まといよ。」

ワームがいた場所には、一つの影があつた。

「一人でも、足手まといになったら、勢力は一気に弱まる。散り散りになった同士を集め、集結せねば。」

声からして女性だろう。その後ろには、何体もの怪人が蠢いていた。

「もっと、もっと集結させる！皆の者、私に続け！」

『オオオオオオオオオオオッ！！』

手に握つてあるレイピアを高く上げ、叫ぶと、怪人達も同時に騒ぎ出した。そして、日の光が暗かつた部屋を僅かながら照らし出す。光により、その女性の姿が明らかになる。体にびつたりのボディスーツを身にまとい、蜂に似たマスクを被っていた。彼女の名は…「蜂女」。





## 第117話（後書き）

雅紀「おいおい、どうなってんの？蜂女が何で生きてんの？ネオ生命体に吸収されたんとちゃう？」

リス「別の世界の蜂女って可能性もあるね。兎に角、気になるよ。」

雅紀「さてと、じゃあ最後にあれ、いくぞ。」

リス「うん。」

雅紀・リス「次回をお楽しみに！」

## 第118話（前書き）

一カ月間、更新を遅らせてしまい、申し訳ありませんでした。

現在、リリなのの世界編の途中まで修正中です。

スランプ、まだ脱出できてないので、グダグダですがご承知ください。

## 第118話

アリス宅

「……………」

家に帰った雅紀は、KRカードを見つめている。

「（相手は戦力を整えている。前よりも厳しい戦いになるはずだ…。その時は…力を貸してくれ…。）」

雅紀はそう思いながら、KRカードを一枚ずつ見つめた。

「雅紀…深刻な表情してる…」

「一体、何があっただろう。」

そんな雅紀を、隣部屋から顔を少し出して見ている二人がいた。アリスとアスナだ。

「たぶん、今回の敵の事を考えてるんだよ。」

「イマジンにファンガイア…アンノウンだったっけ？そいつらの他にも、集まってるんだよね？」

「そうかもしれない。相手は今までと違って一つの組織のようになっているもの。」

「雅紀は、不安なのかな…？」

「だと思う。だから、私達が雅紀を支えなくちゃ。」

「…そうね。」

二人は雅紀を見つめながら、そう言った。

「此処がそうか…。」

とある場所に一つの影があった。蜂女だった。

「以前は東京、渋谷と呼ばれた場所…「エリアX」。」

エリアXを見つめる蜂女の後ろには何体もの怪人がいた。

「今から此処にいるZECTの奴らを殺す。良いな、お前達？」

『ガアアアアアアアッ！！』

蜂女の問いに、怪人達は一斉に咆哮する。

「では…かかれっ！！」

『ギャアアアアッ！！』

蜂女が言うと、怪人達は一斉に進み始めた。

アリス宅

プルルルッ！プルルルッ！

雅紀はKRカードをしまい、携帯を取り出し、耳に向ける。

「もしもし！」

『田所だ！エリアXにワームと他の怪人の軍勢が現れ、そこにいるZECTの隊員が襲われてる！今、加賀美も向かっている！君も大至急、向かってくれッ！！』

「わかりました！」

雅紀は携帯をしまい、現場に向かおうと立ち上がる。



一人のゼクトルーパーがそう口にし、周りも諦めの表情を浮かばせる。そんな時だ。

ブウウウンッ！

『オリヤアアアッ！！！！』

怪人に向かって、一台のバイクが突っ込んでいった。次々と怪人達にぶつかっていき、ゼクトルーパー達の前で止まる。

キキイッ！

『大丈夫か！？』

ガタックエクテンダーに乗っているガタックMFだった。ゼクトルーパー達に顔を向けている時、ワーム、アンノウンの数体が襲い掛かってきた。

『っ！オリヤアアアアアッ！！！！』

それに気づいたガタックMFはガタックバルカンを連射させて怪人達を倒していく。

『皆は負傷者を護るんだっ！！！！』

『了解ッ！！』



ガタツクMFの指示を聞き、ゼクトルーパー達は負傷している隊員を護る。

『ハッ！オリアアッ！』

ガタツクMFは怪人達に突っ込んでいき、パンチと蹴りを食らわれ、遠くにいるイマジンにガタツクバルカンで倒していく。そんな時だ。

『うあっ！』

ガタツクMFの体が宙を舞った。脱皮し、成虫となったワームがクロツクアップをして攻撃してきたのだ。

『く…！キャストオフッ！』

『キャストオフ』

ガタツクMFは立ち上がり、ゼクターホーンを倒す。マスクドアーマーが一気に飛散し、近くのファンガイア、アンノウンの衝突する。

『チエンジ・スタツグビートル』

『オラアアッ！』

ガタツクはライダーフォームとなり、両肩のガタツクダブルカリバーを手に取り、先ほどのキャストオフにより、マスクドアーマーに衝突し、怯んだファンガイア、アンノウンの数体を斬り倒していく。

『クロツクアップッ！』

『クロックアップ』

遠くにいる怪人達をクロックアップで一気に接近して切り倒していく。そんな時、エピラクナワームがガタックRFに襲い掛かる。それに気づいたガタックRFはガタックダブルカリバーで攻撃していく。

『ライダーカッティング』

『オリヤアアアッ!!』

そしてガタックダブルカリバーを一つにし、エピラクナワームを挟んだ。そして、上半身と下半身を別れさせる。次の瞬間、エピラクナワームは爆死した。

『クロックオーバー』

同時にクロックアップが解ける。

『ギシャアアアアア...!!』

すると、周りにアントロードが何体も現れ、ガタックRFを囲む。

『次から次に...!!』

ガタックRFはそう呟いている時だった。

ブブウウッ!!

二台のバイクがアントロード達に向かって突進してきた。そしてガタックRFの前で止まる。

「遅くなつてすみません！」

デイクイザーに乗る雅紀とアリス、デステンダーに乗っているアスナであった。

ドドドドドドドドドドッ！

そして雅紀達を通ってきた方から、シャドウゼクトルーパー達がマシンガンを撃ちながら現れ、雅紀達の前で止まり射撃を続ける。

『隊長、指示を！』

そんな中、一人のシャドウゼクトルーパーが雅紀に声をかける。

「A小隊、B小隊は負傷している隊員達の救出を。C小隊は俺達の援護をお願いします。」

『了解！』

シャドウゼクトルーパー達にそう言つと、各班、別れた。残つたのはC小隊だ。

「じゃあ行くか…変身っ！」

「変身っ！」

「カメンライド・ディカオスッ！」

「カメンライド・ディダークッ！」

雅紀達は仮面ライダーへと変身した。

『行くぞ…！』

そしてディカオス、ディダーク、デステイニー、ガタツクの四人は怪人達の群れに突っ込んで行った。

第118話（後書き）

雅紀「ええ、雅紀です。一か月の間、小説を投稿が遅れてしまい、申し訳ありませんでした。」

アリス「すいませんでした。」

雅紀「次回は早めに投稿させます。」

アリス「次回をお楽しみに。」

## 第119話（前書き）

今回もグダグダですが、ご承知ください。

ではスタート。

## 第119話

『ハアアアアアアアッ!!!』

デйкаオス、デイダーク、デステイニー、ガタツクの四人のライダーは、怪人達の群れに飛び込んでいく。

『アタックライド・スラッシュッ!』

『ハアッ!』

『テヤッ!』

デйкаオスとデイダークは一気に怪人達の数を減らしていく。

『ガアアアッ!』

その時、背後からアントロードがデйкаオスとデイダークに襲い掛かってきた。だが…

ドオオッ!!

『ギヤアアッ!?!』

アントロード達の体に幾つもの光線が貫いた。

『あたしを忘れてんじゃないわよ!』

フリーダムフォームになったデステイニーがアントロード達を倒したのだ。背中からドラグーンを発射し、前方の怪人を打ち抜いていく。

『続け！続くんぞだ！！』

シャドウゼクトルーパー達もデステイニーとHFとともにマシンガンを連射する。

『ウラアツ！オリアアアアアツ！！』

ガタツクは力強いパンチと蹴りを浴びせ…

『プットオンッ！』

『プットオン』

マスクドフォームに戻り、ガタツクバルカンを連射させ、怪人達を倒していく。

『よし、だんだん数が減ってきてる…これなら…！』

ガタツクMFがそう言った時だ。目の前にオーロラが出現し、中から再びアントロードとワームサナギ体が現れる。

『なっ！？次から次に…！』

『このままじゃどうしようもないよ！どうするの、雅紀？』



ガタツクMFが驚いている中、ディダークはディカオスに聞く。

『…こうなったら…アスナ!』

ディカオスは何やら思いついたらしく、デステイニーHFに呼びかける。

『何よ?』

『ちょっと痛いけど…我慢してくれよ?』

そう言うと、一枚の金色のカードを取り出して、ディカオスドライブにセットする。

『ちょっと待って!まさか、ソレは…!』

『ファイナルフォームライド・デ・デ・デステイニーツ!』

『やっぱりイイツ!?!?』

デステイニーHFは元のデステイニーフォームに戻ると、「デステイニーミーツィア」へとFFRした。ディカオスはデステイニーミーツィアにドッキングする。

『よつと…!』

『あ、アンタねえ…コレ痛いんだからね!?!』

『ごめん。だけどちょっとの間だ…!』

そう言つてトリガーを引くと、何十発ものミサイルとビームが発射され、次々と怪人達を倒していく。

『ライダーを戦艦に…何て力を持つてるんだよ…!』

『加賀美さん、私もできるんですよ』

そんな中、ガタツクMFとディダークは話し合っていた。

『よし、大半を倒したぞ。』

そう確認したディカオスはデステイニーミーティアのドッキングを解除し、デステイニーの姿に戻した。

『全く…今度やったらただじゃおかないんだから…!』

『だから悪かったって…』

そう言っていると…

「我らの同士をよくもやってくれたな…」

声が聞こえ、振り返ると…そこには蜂女がいた。

『蜂女!?!』

『蜂女? 蜂女つて、あの変なコスプレしてる人が?』

『加賀美さん、確かにコスプレしてるように見えますが、あの人、改造人間です。怪人です』

『マジで!?!』

ディカオスの言葉に疑問を持つガタツクMFにディダークは教えてあげていた。

『MOVE大戦2010の蜂女……でも、その時はネオ生命体に吸収されたはず……なぜだ……?』

「確かに、私はあの時、ネオ生命体に強力な力を求めた。だが、吸収されてしまった」

ディカオスが疑問に思っていると、蜂女が話し始めた。

「私は吸収されたが、意識は残っていた。ただ実態がない……。そしてディケイド、Wに倒された時……あの子は私を生き残らせてくれたのだあッ!」

あの子とはネオ生命体の事であろう。ディカオスはそう確信した。

『だが……どうやってだ?ディケイド、Wのトリプルエクストリームを食らって……』

「木っ端微塵にされたな。だが、その直前に私は解放され、エネルギー体として、さ迷い続けた。そしてやっと……こうして復活できたのだ!」

高らかにそう言い、蜂女は笑った。

「だが、スーパーショッカーは滅びてしまった。そこで私は、数多

の世界から怪人達と、生き残ったスーパーショッカーの怪人達を集め…この世界に来た…」

そう言っていると、何処からか機械の蜂が飛んできて、蜂女の手に収まる。

「そして…私はこの世界で…ライダーの力を手に入れたのだあッ！  
」

『ヘンシン』

そして左手のブレスに装着させると、蜂女の体がヒイロカネに覆われる。そして姿を現したのは、スズメバチをモチーフにしたライダー「仮面ライダーザビー・マスクドフォーム」であった。

『ザビー！？』

『エリアZを襲撃し、ザビーのブレスを奪ったのは…お前だったのか！』

『そうだ。そのエリアZを襲撃した時に、このブレスを取った途端、この子が現れて私に懐いてきたのさ』

ザビーMFはザビーゼクターに触れながらそう言った。

『なぜ…ザビーゼクターがあんな奴を資格者に選んだんだよ…！？』

『同じ蜂だからじゃないんですか？』

ガタックMFの疑問にデステイニーは答えた。

『何か納得いくね。蜂女だと…女王蜂だからだもんね』

『いや、関係は…ないとも言えないがなあ…』

ディダークは納得しているも、ディカオスはどうも納得しきれない様子。

『フッフ…そう仲良く話し合っているのも、今のうちだ!!』

すると、ザビーMFが四人に襲い掛かってきた。

『ハッ！ハアッ！！』

フットワークを使って四人に重い一撃を与える。

『この…！キャストオフッ！！』

『キャストオフ』

ガタツクは体勢を立て直し、キャストオフしてライダーフォームへとなった。

『お前たちの相手は、私一人ではないぞ？』

ザビーMFがそう言うのと、背後からオーロラが出現し、中からミユスカワームとビエラワーム、ゼブラロード、オクトパスロード、さらには…

『ギギギイイッ！！』

シヨッカーライダーが2体現れた。

『ワームと…後は…』

『アンノウン…そして、シヨッカーライダー…ちょっと手こずるかも…』

『アレもライダー！？何であっち側にいるのよ？』

『アスナ、アレは仮面ライダー一号というライダーのデータを元に生み出された悪のライダーだよ。』

『そう言う事…それなら納得いくわね。』

そう言っていると…

『うわあっ！！』

ガタツクRFが吹っ飛ばされた。二体のワームがクロックアップしてガタツクに襲い掛かってきたのだ。

『加賀美さん！』

『ギヤアアアッ！！』

デйкаオスが叫ぶと、ゼブラロードとオクトパスロードがデステイニーに襲い掛かる。

『なっ！この！！』

『アスナっ!!!』

『ギギイイイツ!!!』

二人を助けようと向かうと、シヨッカーライダー達が襲い掛かってきた。

『くっ!!!』

『隊長達を援護するんだ!!!』

そこへ、シャドウゼクトルーパー達がシヨッカーライダー達に向けてマシンガンを連射。

『ギギツ!!?ギイイイツ!!!』

『ギシャアアアッ!!!』

シャドウゼクトルーパー達に気付いたシヨッカーライダー達は両手を前に出した。その途端、指先からミサイルが発射され、ゼクトルーパー達に当たった。

『うわあああああっ!!!!!』

『皆っ!!!』

『ハハハハッ!良い光景ではないか!!!』

そんな中、ザビーMFは楽しげに見ていた。

『蜂女…!!』

『雅紀、蜂女の所へ行つて!』

『アリスは…?』

『私は、シヨツカーライダーを相手にしてる!!』

デイダークはシヨツカーライダー達に眼を向けた。

『一人で大丈夫か? 仮にも、奴らは一号や二号と同等のパワーを持っているぞ?』

『安心して。私は大丈夫。だから、行つて!』

『…わかった。』

デイカオスはそう言うと、ザビーMFに向かって行った。

『ギギイイツ!!』

『させないよ!』

デイカオスを追おうとしたシヨツカーライダー達にデイダークは行く手を阻んだ。

『私が相手をしてあげる…!』

デイダークドライバーを振るい、シヨツカーライダー達に突っ込ん



だ。

『フフフフ…！』

ライダーと怪人達が闘っている中、ザビーMFはその光景を面白そうに見ている。そんな時だ。

『蜂女！…！』

『ん？』

ザビーMFの前にディカオスが現れた。

『どうやら、私の相手はお前のようだな。』

『そつだ…！行くぜ…！』

ディカオスはアドベントドライバーを手に持ってザビーMFに突っ込んだ。



第119話（後書き）

雅紀「さてさて…一体、どうなるんだ？」

アリス「そこは次回のお楽しみという事で。」

雅紀・アリス「それでは！」

第120話(前書き)

遅くなつてすいません。

グダグダになると思います。

## 第120話

「ハアアアッ!!」

アドベントドライバーを振るい、ディカオスはザビーMFと闘い始める。

「フッ!」

ザビーMFはディカオスの攻撃を避け、同時にディカオスの腹部に重いボディストレートを放った。

「がはっ!」

「これがライダーの力…フッフフ!最高だ…!」

ザビーMFは自身の両手を見つめて、笑みをこぼしていた。

「く…!流石は、ザビーだな…!」

「行くぞ、ディカオス…!」

腹部を抑えているディカオスにザビーMFは襲い掛かる。

『オリヤアアアッ!!』

一方では、キャストオフしたガタツクRFがミュスカワーム、ビエラワームと闘っていた。

『クロツクアップッ!!』

『クロツクアップ』

二体のワームがクロツクアップした事を確認し、ガタツクRFもクロツクアップし、戦闘を続けた。

『ハアアアッ!!!!』

ガタツクダブルカリバーを手に持ち、ミュスカワームとビエラワームにダメージを与えた。

『1・2・3』

『ライダーキックッ!!』

『ライダーキック』

そして、ミュスカワームに向かってライダーキックを放った。

『ギガアアアアッ!!』

ミユスカワームは爆発し、残ったのはビエラワームのみであった。

『ギギイイイイツ!!』

ビエラワームがガタツクRFに迫る中、ガタツクRFはガタツクダブルカリバーを一つにする。

『ライダーカッティング』

『オオオオツ!!!!』

ガタツクダブルカリバーにエネルギーを送り込み、ビエラワームを挟んだ。

『ギガツ!?!』

『ハアアア…オリヤアアアアアツ!!!!!!』

そしてビエラワームの体を上半身、下半身に分けて切った。

『ギヤアアアアアアアアツ!!!!』

そして、ビエラワームは爆発した。

『よし!はやく、ザビーゼクターを取り戻さないと…!!』

ガタツクRFがディカオスとザビーの所へ向かおうとした時だった。

『ガアアアアツ!!!!』

フォルミカアルビユスワームオキュルスとマキシラ、そしてセパル  
チュラワームが現れ、ガタツクRFの行く手を阻んだ。

『コイツら…！そこをどけえツツ…！』

ガタツクRFは三体のワームに突っ込んで行った。

『ハアツ…！』

一方、デステイニーはJFにフォームチェンジし、ゼブラロード、  
オクトパスロードと闘っていた。

『ゴハアアアツ…！』

オクトパスロードは口から煙幕を吐いて、デステイニーJFの視界  
を塞いだ。

『ギガアアアツ…！』

『っ…！』



すると、背後からゼブラロードがデステイニーJFに攻撃した。

『くっ！ハアッ！！』

ジャステイスカリバーで攻撃するが、ゼブラロードはそれを避け、黒煙で自身の体を隠した。

『グオオオッ！！』

『っ！きゃああっ！！』

すると、またも背後から攻撃を受けた。今度はオクトパスロードによる攻撃だ。

『くうっ！こつも視界を妨げられてるんじゃ、どうしようも…』

デステイニーJFがそう呟いていると、黒煙の中にいるゼブラロードがデステイニーJFに攻撃しようと飛び出した時だ。

『ハッ！！』

デステイニーJFが黒煙から上半身を出していたゼブラロードに攻撃したのだ。

『ギガアッ！？』

『ギシイイツ！』

そして、今度はオクトパスロードが攻撃を仕掛けようと、動いた時だ。

『ハアアッ!!』

『ガッ!?!』

デステイニーJFが黒煙の中にいるオクトパスロードを斬ったのだ。オクトパスロードは吹っ飛ばされると、黒煙が消える。

『助かったよ、アスラ』

デステイニーJFがゼブラロードとオクトパスロードを発見できた理由は、もう一つの人格のアスラのおかげであった。気配を感じ取った方向を、デステイニーJFに教えていたのだ。

『どういたしまして。さあ、はやく殺っちゃいなさい』

『言われなくてもっ!』

デステイニーJFはオクトパスロードに接近し…

『カリバースマツシュッ!』

一刀両断した。

『ギヤアアアアアッ!!!』

オクトパスロードは爆発する。残ったのはゼブラロードだけだ。

『ゴオオオオッ!』

ゼブラロードはデステイニーJFに接近して蹴りを放ってきた。

『ハッ!』

デステイニーJFはジャスティスカリバーで防ぎ、同時にゼブラロードを飛ばす。

『ギイツ!』

『ハアアアッ!』

そして接近し、一刀両断。ゼブラロードは爆発した。

『もつけないわね…。雅紀の所に行かなきゃ!』

デステイニーJFがその場を離れようとした時だ。

『ギィィイツ!』

目の前にオーロラが発生し、中からジャガーロードとトータスロード、さらにスネークロードが現れた。

『次から次に!』

デステイニーJFは三体のアンノウンと闘い始めた。

『タアアアッ!!!』

別の所では、ディダークがシヨッカーライダー二体と闘っていた。

『ライダーパンチイッ!!!!』

『くっ!』

『ライダーキックウウッ!!!』

『キャアッ!』

シヨッカーライダーの一体の攻撃を防いだ途端、別方向からもう一体のシヨッカーライダーがライダーキックを放ってきた。ディダークはそれを喰らい、壁に衝突。

『くう…シヨッカーライダー…強いな…!』

『ギシイッ!』

立ち上がるうとするディダークにシヨッカーライダー達は襲い掛かる。

『アタックライド・スラッシュッ!』

『だけど、負けられない!』

ディダークはARを使用し、シヨッカーライダー達を攻撃する。

『ギギイイ…!』

シヨッカーライダー達は攻撃を受け、後方へ下がる。

『こうなったら…力を貸してね?』

ディダークはカードを一枚取り出し、ディダークドライバーに挿入する。

『カメンライド・ダークカブトオッ!』

すると、目の前にカブトムシをモチーフにした黒いライダー「ダークカブト」が出現する。

『あっちの紫のマフラーをしたシヨッカーライダーを頼める?』

ディダークの問いにダークカブトは無言で頷き、シヨッカーライダーの一体に突っ込んでいく。

『ギギイイッ!』

シヨッカーライダーもダークカブトに襲い掛かる。

『私も…行こうか!』

ディダークは目の前にいる一体を見てそう言い、突っ込んだ。

『ライダーチョップウウツ!!』

ショッカーライダーはディダークにチョップした…だが…

『ハアツ!!』

ディダークはショッカーライダーの右手首を斬り落とした。内部は機械で出来ており、油のような物が飛び散る。

『ギギイイイツ!!!!』

ショッカーライダーは腕に激痛を覚えながらも、指ミサイルをディダークに放った。

『テヤアアアアツ!!』

ディダークはミサイルを斬り落とし、ショッカーライダーに攻撃を食らわした。

『ギツ!!』

『ファイナルアタックライド・デイ・デイ・デイ・ディダークッ!』

『ディメンションデスサイズツ!!』

そして、エネルギーが注がれたディダークドライバーで真っ二つにした。

『ギギイイイツ!!!!』

そして、シヨツカーライダーは爆発した。

『ギアアアアッ!』

すると、デイダークの目の前にシヨツカーライダーが吹っ飛んできた。そして…

『1・2・3』

『ライダーキック』

『ギガガッ!?!』

ダークカブトがシヨツカーライダーに蹴りを放ち、倒した。

『お疲れ様。戻って良いよ…っ!?!』

ダークカブトにそう言いかけた時だった。目の前にオーロラが発生し…

『『『ギギイイイツ!?!』』』

シヨツカーライダーが計5体も現れたのだ。

『まだこんなに…!?!』

デイダークは驚愕した。

『…驚いている場合じゃない。早く、雅紀の所へ行かないといけな  
い…!?!』

そう言うと、ディダークは3枚のカードを取り出し、ディダークド  
ライバーに挿入する。

『カメンライド・コーカサスッ!』

『カメンライド・ヘラクسسッ!』

『カメンライド・ケタロスッ!』

そして、目の前にはコーカサスオオカブトをモチーフにした金色の  
ライダー「コーカサス」と、ヘラクレスオオカブトをモチーフにし  
銀色のライダー「ヘラクス」。そして、ケンタウルスオオカブトを  
モチーフにした銅色のライダー「ケタロス」が出現する。

『お願い、協力して!』

ディダークがそう言うと、三体のライダーは無言で頷き、それぞれ  
武器を構える。コーカサスは青いバラを手に持っている。

『行くよ!』

ディダークの掛け声で戦闘を開始した。



『ハアアツ!!!』

『ハツ!!!』

戻って、デйкаオスはザビーMFとぶつかり合っていた。両者、パンチと蹴りを食らわせていた。

『ハツ!!!』

デйкаオスはアドベントドライバーを至近距離で放ち、ザビーMFにダメージを与えた。

『くうっ!!!』

ザビーMFはまともに受け、後方へと下がる。デйкаオスは一気に詰め寄り、攻撃しようとした時だった。

「まさか、君が生きていたとはね…蜂女君!」

突如、声が聞こえ、デйкаオス、ザビーMFは動きを止める。すると、二人の背後にオーロラが発生し、その中から鳴滝が現れた。

『ゾル大佐!!!』

「君がスーパーショッカーの残党、そして新たに別の世界から怪人を集めていたとは…!大したものだ!!!」

『ありがたきお言葉!!!』

ザビーMFは鳴滝に頭を下げ、感謝の言葉を言った。そして、鳴滝はデйкаオスに顔を向ける。

「デйкаオス！今日、この日、この場所で！！おまえは滅びるのだあッ！」

そう言うと、自身のコートを脱いだ。すると、先ほどの旅人服を着ておらず、軍服の格好し、片方の目には眼帯をつけていて、手に鞭を持っていた。

「私の名は…ゾル大佐改め…「ハイパーゾル大佐」だあッ！！」

そう言って、鳴滝…否、ハイパーゾル大佐は鞭を振るってそう言い放った。

第120話（後書き）

雅紀「…あのさ、ゾル大佐が、何でハイパーなのさ！？普通はスーパーじゃないの！？」

アリス「そこは次回でわかるんじゃないかな？」

雅紀「そうですかい。…それでは！」

アリス「次回をお楽しみに！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0645/>

---

仮面ライダーディカオス

2011年9月16日09時53分発行